

諸行有常記

sakeu

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

碓氷勇人は高校生としての日々を過ごしていた。だが、ある事を機に幻想入りを果たす。

そこは現代では幻想となったものたちが集まり、現代では非常識となったものが常識となり常識が非常識となる世界であった。

そんな世界で勇人は教師となりぐるぐる回る毎日を過ごす。

職場は常に教師不足、徹夜は当たり前前、そんなもって愉快的幻想人たちによって弄ばれる日々。

現代にいた時よりも苦勞の多い幻想郷だが、そのぶん楽しみだつてある。そんな幻想

郷での青年の奮闘記。

目次

序章 始まり

第1話 ある日の青年

1

第2話 いつもと違う日の青年

5

第3話 過去の日の青年

10

第4話 幻想入りした日の青年

13

第1章 信仰なき青年と現人神と

第5話 逃走した日の青年

20

第6話 救われた日の青年と失つ

た日の少女

第7話 常識を打ち破った日の青年

27

第8話 修行の日の青年

36

53

第9話 決心した日の青年

71

第10話 修行完了の日の青年

86

第11話 お仕事探しの日の青年

97

第12話 初陣の日の青年

113

第2章 ティーチャー青年とロリー

夕吸血鬼

第13話 先生となった日の青年

第14話 図書館に行った日の青年

第15話 勧誘された日の青年

年 151

第16話 お茶会の日の青年

第17話 紅き日の青年

第18話 宴会の日の青年

185 197

217

第19話 続・宴会の日の青年

第20話 平日の青年

第21話 2人の孫と2人の祖父

第22話 課外授業の日の青年

第23話 一騎打ちの日の青年

261 273

第24話 それぞれの話し合いの

第25話 日の青年

第26話 研究日の青年

295 281

第27話 妖夢の特訓(勇人式)の

第28話

第29話

	日の青年	308			
	第26話		妖夢の特訓(妖忌式)の	第32話	414
	日の青年	322			
	第27話		平日(白玉楼編)の青	第33話	425
年		338			
	第28話		再試合の日の青年	第34話	437
356					
	第29話		修羅場?の日の青年	第35話	451
376					
	第30話		未練の日の青年	第36話	472
402					
	第4章		現代入り	少女(前編)	487
	第31話		帰省の日の青年	第37話	509
				少女(後編)《現代》	
				それぞれの日の青年&	

	第38話	それぞれの日の青年 &	第44話	1戦目(妖怪の山チーム)	
	少女(後編《幻想郷》)	—————	の日の青年	—————	634
	第39話	デートの日の青年	第45話	第2戦(紅魔館チーム)の	
	540	—————	日の青年	—————	649
	第40話	狂瀾怒濤の日の青年	第46話	第3戦(守谷神社チーム)の	
	561	—————	日の青年	—————	673
	第41話	別離の日の青年	第47話	第4戦(白玉楼チーム)の	
	588	—————	日の青年	—————	694
	第5章	幻想郷武道大会	第48話	休憩の日の青年	
	第42話	始まりは終わり、終わり	第49話	決勝戦(博麗チーム)の日	
	は始まりの日の青年	—————	の青年(前編)	—————	739
	605	—————	第50話	決勝戦(博麗チーム)の日	
619	第43話	エントリーの日の青年	の青年(中編)	—————	751

第51話 決勝戦(博麗チーム)の日の青年(後編) ————— 768

第6章 マッドな医者と事件と

第52話 生活改善の日の青年

784

第53話 不穏な日の青年 | 803

第54話 前兆の日の青年 | 817

第55話 誤解の日の青年 | 836

第56話 入院の日の青年 | 854

第57話 ゴースルーヘルの日の青年

年 | 870

第58話 発見の日の青年 | 890

第59話 正義の日の青年 | 905

第7章 変わらない者と変わる者(鬼の半妖さんとコラボ企画!!?)

第60話 襲来の日の青年 | 917

第61話 平穩に暮らしたい日の青年

年 | 929

第62話 才悩の日の青年 | 938

第63話 災悩の日の青年 | 946

第64話 前哨の日の青年 | 959

第65話 謎の日の青年 | 965

第66話 2F(不死者の波)の日の青年

青年 | 979

第67話 3F(黒い津波)の日の青年

年 | 988

第68話	4 F (天空城の決戦)の日の青年	1008	第75話	8 F (Ray of ope)の日の青年	1110
第69話	5 F (高貴なる吸血鬼)の日の青年	1020	第76話	夢い蟲達の夢の日の青年	1116
第70話	5 F (高貴なる吸血鬼)の日の青年	1033	第77話	宴楽の日の青年	1128
第71話	6 F (弱肉強食)の日の青年	1049	第78話	勘違いの日の閻魔	1137
第72話	7 F (黒き煙の侵食)の日の青年	1062	第79話	悪戯の日の姫と兎	1151
第73話	8 F (魔王の黎明)の日の青年	1078	第80話	混乱の日の少女	1166
第74話	8 F (陰々滅々な心)の日の青年	1078	第81話	自尊心崩壊の日の少年	1166
第75話	8 F (高貴なる吸血鬼)の日の青年	1033	第77話	宴楽の日の青年	1128
第76話	8 F (高貴なる吸血鬼)の日の青年	1033	第78話	勘違いの日の閻魔	1137
第77話	8 F (高貴なる吸血鬼)の日の青年	1033	第79話	悪戯の日の姫と兎	1151
第78話	8 F (高貴なる吸血鬼)の日の青年	1033	第80話	混乱の日の少女	1166
第79話	8 F (高貴なる吸血鬼)の日の青年	1033	第81話	自尊心崩壊の日の少年	1166

1326	第90話	ファイバーの日の青年							
1312	第89話	策略の日の竜宮の使い							
	第88話	迷惑な日の天人	1296						
	第87話	災害の日の青年	1281						
	第9章	教師、出張也							
	第86話	解決の日の月兎	1266						
	第85話	過労の日の少年	1249						
	第84話	会話の日の人形	1230						
	第83話	戦闘の日の花師	1212						
	第82話	授業の日の教師	1199						
									1181

??	第10章	NEWORDER:NO.							
	第99話	月夜の日の青年	1486						
	第98話	酒宴の日の青年	1466						
	1451								
	第97話	炉辺談話の日の青年	1432						
	第96話	リベンジの日の天人崩れ	1413						
	第95話	復帰の日の青年	1397						
	第94話	予兆の日の青年	1380						
	第93話	萌芽の日の青年	1361						
	第92話	疑問の日の青年	1344						
	第91話	一局の日の青年							

1593	第 1 0 5 話	1573	第 1 0 4 話	1557	第 1 0 3 話	1537	第 1 0 2 話	第 1 0 1 話	1503	第 1 0 0 話
	微 動 の 日 の 青 年		騷 乱 の 日 の 青 年		移 住 の 日 の 青 年		落 日 の 日 の 青 年	邂 逅 の 日 の 青 年 — 1519		前 触 の 日 の 青 年

序章

始り

第1話

ある日の青年

人は様々な欲求を持つ。食欲、睡眠欲などの生きていくうえでは必要な欲求や獲得、保存などの社会的に認められたい欲求がある。無論、俺も持っている。自分は時折、無償に人を「攻撃」したくなる。いつからだろうか。よく覚えてない。でも、今、こうして欲求を「解消」している。

俺の名前は「碓氷 勇人」。高校1年生だ。名前は「勇まし人」なのに実際はそうでもないと思う。まあ、今はそんなことよりも重大であろうことが今、目の前にある。

国語

42点

数学

69点

英語

41点

物理

60点

はつきり言つてこの点数は良くない。うちの学校（進学校なので平均点もかなり高い）は40点未満が赤点なので、かなり危うい。後ろの良く話す方の人も良くなさそう。俺、勉強しなすぎたかなあ。得意なはずの数学もあまりとれてねえ。まあ、いいか。色々考えてたら、後ろから

「お前、点数悪かったのか？」

と言われた。

「なんでそう思う？」

「いや、お前さつきからイライラしているっぽいし。」

「どうだろうか。」

「やっぱ、悪かったのか。大丈夫か？」

「ほっとけ」

「冷たく」とかなんやかんや言っているやつをほつといて、少し考えこむ。テストのことではない。いま、かなり欲求不満つてやつだ。ああ、思春期的なやつではない。少し特殊なものだ。今日解消しよう、と心に決め、部活へ向かう。

今の時刻は夜中の2時ぐらいである。なぜここにいるのかって？欲求を解消するためだ。まあ、俺の「特殊な欲求」は「異常なまでの攻撃欲」だ。2ヶ月に1度位にその欲求は高まる。こうして、夜に出向いて、チンピラにわざと絡まれて、喧嘩（一方的な暴力）をするのだ。お前で勝てるのか？つて？まあ、確かに身長は170弱、体重も55ぐらいで華奢な方だろう。（でも、身長には希望があると思う。だって、牛乳毎日飲んでるんだぞ？）しかし、俺はじいちゃんから喧嘩の極意を教わっている。（じいちゃんは別にヤのつく人ではない）その辺のチンピラ相手に負ける気はしない。（見た目もあって、相手が油断するのもあるが）

この欲求は誰にも伝えてないと思う。

無論、家族にもだ。いや、誰かに言った気がする。いや、言っていないか。まあ、そこは置いといて、このことは絶対にバレないようにしている。親が知ったらどうなることやら。学校に知れ渡って白い目で見られ、肩身の狭い思いをするのはごめんだ。そのため、普段は人積極的に関わらないようにしている。まあ、普通に話す人も数人いるが。

あと、目立ちたくないので成績「国語、英語は本気」をあえて抑えてる。数学は本当に得意だ。数学を面白いと思ったり、思わなかったり。さつき返されたテストも数学は満点余裕だと思う。つと、話がずれてきたな、まあそーゆーことで、「いつも通りやるか」

だが、この日だけは違った。

第2話

いつもと違う日の青年

今日も真つ暗な夜の中、喧嘩の相手となりそうな相手を探しながら歩いた。警察にも見つかったら補導されるだろうが、今通っている道は車も通つてない。この時間は両親も弟や妹も眠つてるだろう（弟1人妹1人の3人兄弟です）。

そんな中、普通は虫の鳴き声しか聞こえないはずなのに人の声が聞こえた気がした。「気のせいかな」

と呟いたら

「ーさーい」

かすかに聞こえた。人の声だった。

「離してください」

確かに聞こえた。声のするところへ行くと、同じ年ぐらいか？暗くてよく見えん。

まあ、そのぐらいの少女がチンピラ2人に絡まれていた。なんでまた、こんな時間に歩いているんだ？（↑お前もな）普通ならば、助けに行くべきだろう、だが助けに行けば、面倒なことになる。もしかしたら、今歩いていることがバレるかもしれない。それはごめん。でも、助けに行かないのも後味わりーな。とか考えてると。

「その貴方助けてください！」

呼ばれちまった。これで助けに行かないのではないだろう。すると、

「兄さん、今回のことは見なかったことにしてや、な？ さもねーと…」

「さもないと？」

ポフツ！

腹に膝蹴りされた。少々痛い。まあ、予期してて腹に力いたので、なんともねーが。

「わかつたろ」

と2人は笑う。

「ツククク… フフツ… クハハハハハ!!」

俺は笑う。いつものことだ。絡まれるとき俺は必ず1発喰らうことにしている。そうすることで、躊躇うことなく殴れるからだ。そのとき、思わず笑ってしまう。自分でも気持ち悪い笑い方だ。まあ、だからといって無我夢中になることはない。

呆気にされてるチンピラの片方に腹に拳を入れる。

「グヘツ」

まさに、カエルの潰れた声を出してその場に崩れ落ちた。それで正気に戻ったもう片方が

「この野郎！」

と殴りかかってきた。とはいっても、ただがむしやらに殴っているので避けるのは簡単だ。ヒョイッと横に避け、

「ほらよつと」

腹に蹴りを入れる。完璧に入ったな。今度は声も出なかったようだ。しばらく、この2人をサンドバッグにさせてもらった。

ある程度殴って、欲求を解消したところで

「フースツとしたぜ」

このセリフ一度言ってみたかったのだ。あのキャラは意外とすきである。と感慨にふけてると

「あの… ありがとうございます？」

そうだった。女の子がいたのだった。

「あー、もう大丈夫だから早く帰れ」

「貴方、確氷？」

「は？なぜ俺の名前を？っておまつ、蓮子？」

宇佐見蓮子、中学校で同級生だった女の子だ。中学生の時はずっと学年1位で、運動もでき、生徒会会長であり、男子から人気もある、才色兼備の少女である。少々、性格が変わってるが。まあ、俺も生徒会役員だったので交流はある。

「相変わらず、その性格治ってないのね」

「なんで知って…… あーこれデジャヴだ」

そう、デジャヴである。実は中3の1学期終わりに同様に蓮子は絡まれていたのである。その時も今回と同じようにチンピラをぼこしたが。

「で、なんでこんな夜中に？」

予想はつくが聞いておく。

「星を見るに」

やっぱり。

「あんまり、夜中に散歩くなよ。」

と言い、踵を返し家に帰ろうとする

「あんたもね」

と言われたが俺は防衛手段があるので大丈夫だ。とは言わない。

この日は少々いつもと違ったが、かまわんだらう。そんな事を思っていたが、少々違っ

たはずなのに大きな問題が生じるのを知る由もなかった。

第3話 過去の日の青年

宇佐見蓮子を助けた後、ベッドに戻ると弟が起きていた。真つ暗中、声をかけられたので柄にも無く

「ヘアッ?!」

と変な声が出てしまった。両親が目覚めなかっただろうか。

「今日も喧嘩しに行っていたのか?」

「ああ、でも、人助けもしたぞ」

「??」

「まあ、いい。はよ寝ろ。」

と言うと弟は寝た。俺も寝るとするか。と思つたが、そういえばこの事知ってる奴であの3人だけな?と考え始めた。

蓮子は前回言った通りだ。弟は小4の時に一緒に帰っている時、たまたま自分は欲求がたまつており、所謂、いじめっ子という奴に絡まれてつい、ぼかしてしまった。弟はしっかりと見ており、当初俺はバレてしまうと思ったが、意外にも弟は両親に言わな

かった。

あの時は本当にビビった。今なら、吉良さんの気持ち分かるかもしれない。あと一人だが、これはじいちゃんだ。いつだっけ？えーつとあー、そうだ、小2の頃だ。ちょうど、攻撃欲が出始めた頃だ。その時、どうしたら良いか分からずじいちゃんに当たってしまった。小2の力ぐらいじゃ痛く無かっただろうが。

その時、じいちゃんの顔は何故だかものすごく申し訳そうな顔をしていたと記憶している。で、小3になると、じいちゃんは

「お前のその性格をどうにかする方法を教えよう」

と喧嘩の仕方を教えてもらった。そして、顔を隠して、相手の顔には攻撃せず、胴体を狙うようにしなさいとも教えられた。まあ、つまり、証拠が極力残さないようにしろってことだな。とんでもねえ、ジジイだと思う人がいるかもしれないが、俺としては唯一俺のこの事を理解してくれた人だと思う。

だけど、そのじいちゃんは俺が小6の時に死んだ。原因は事故で車で川に突っ込んだそう。でも、この事故は所々不可解なところがある。もう、事故で処理されてしまったが。その遺品として、俺はじいちゃんの箱を持っている。なんせ、箱の中の手紙に俺に渡せと書いてあったそう。

まるで、自分が死ぬのがわかってたみたいだ。その箱は、中々大きく、じいちゃんは

釣りが好きだったから、釣り具を入れる箱かと思ったが中には手紙とリストバンドになんか装置みたいなものが引っ付いているものしかなかった。あと蓋の中央に宝石みたいなものがあつた。手紙の内容はというと勇人へとは書いてあるが、それ以外何も書きたいなかつた。じいちゃんも変な事するんだなあと思いつつ、その箱はベッドの下に置いた。

とかなんやかんや考えてたら眠くなつてきた。明日は朝補習あるから早くおきないとなあ。

その明日がいつもどおりにはいかなかつた。

第4話 幻想入りした日の青年

今日の授業はだるかった。数学2時限もあるなんて、最後の古典にいたっては、殺しに来てた。

なんなの、あの先生。もう、寝らせるき満々じゃないか。体育もなかったし、一段とだるかった。

ああ、今から部活かー。あ、ちなみに俺はソフトテニス部だ。まあ、この部活は部活と言えるのかというぐらい自由だ。でも、今日に限って先輩たちやる気があるんだよなー。こっちは寝不足（自業自得）だというのに。きつちり、7時までしやがってあんまりだーと泣きたくなるよ。とか文句を心中で言いながら、帰ろうとした。ふと、胸元に異物がある気がした。あー、そうだったこれはだな今朝のことだが：

朝ふと、じいちゃんの形見である箱が気になつてなんとなく箱はをひっくり返した。すると底が落ちてなんと、ナイフが落ちて来た。なるほど、底が二重になっていたのか、違う違う、そうじゃない、なんだこのナイフは？あまり知識はないが、両刃なので、ダガーナイフだろうか、刃の根元の部分に青い宝石がついてる箱のと同じのようだ。ダ

ガーというのはナイフではなかったか？まあ、どうでもいいや。ともたもたしてると「勇人ー、ごほんよー」

と母から呼ばれた。急いで鞆におさめ、どうしようかと考え、とりあえず学ランの内側のポケットに入れた。

「そうだった」

と思いつながらリュックを背負い、セカンドバックを自転車のカゴに入れ、乗るのだった。帰りは近道をしようとして違う道を通ることにした。それが、大きな違いを生むことになった。

「なんだあの車」

近道をしていると後ろの車がついて来ていた。明らかに怪しい。不審者か？早く大

きな道路に出ようと、自転車をこぐスピードを速くしようとした瞬間、前からも車が現れた。

「おいおい、マジかよこの道狭いだぞ」

と場所を開けるために横にずれて、通り過ぎるまで止まることにした。だが、車は止まった。何してんの？アホなの？早く帰りたいんだよと思うと車から人が降りて来た。もしかして、心読まれた？ふと、後ろからも車の扉が開く音が聞こえた。マジで、不審者か？逃げ場が無く、突っ立っていると、あつという間に囲まれた。6人ぐらいか。

「あの一、何の用ですか？お金は少ししかありませんよ。」

とか言ってみたものの、効果はいまひとつのようだ。6人の顔をよく見ると2人知っている奴がいた。あの時のやつだ、俺がボコボコにしたから、復讐しにきたのか。わざわざ、尾行までして。

「そうだなあ、用ならあるぜ。この前の仕返しをなあ！」

やばい。これはやばい。多勢に無勢、しかも大人だったのか。ヤクザか？とりあえず逃げることに優先だ。だが逃げ道は無い。ならつくるまで。俺は全力で走った。相手が殴り掛かるのを見計らって、急ブレーキをした。予想通り空振って前のめりになった。そして、俺はそいつの上を飛び越え走った。

よし、このまま行けば、大きな道路に着く。

その時、俺は油断した。車の影にもう1人いることに気づかなかった。気づいた時は遅く、その男が何かで殴り掛かってきたのを避けられなかった。

ガツンッ!

頭に衝撃が来て、視界歪んで見えた。平衡感覚を失いたおれてしまう。人が集まってくる、おれを殴った。お腹に1発喰らった瞬間視界が暗転した。

「こいつどうすんだ?」

「ああ、こいつか。川にでも捨てておけてよ。」

つく、頭がまだガンガンする。今どうなってるんだ。

「よしここでいいだろう」

「荷物はどうするんだ?」

「リュック以外自転車と一緒川に落とせ」

「リュックは?」

「こいつに背負わせる」

ああ、そういうことか。事故に偽装てか。わかったところで体が動きそうにも無い。畜生、このタイミングで目覚めるのは最悪だ。リュックを背負わされ持ち上げられる。もうダメなのか。お父さん、お母さん、本当にごめん。

体が宙に浮いた感じがしたのと同時に

バツシャーン！

水の中から見える空は真っ暗でよくわからなかった。

「ーと、ーうと、勇人！」

「なんだ、じいちゃん。……………じいちゃん!? そうか、ここは」

「いや、まだお前さんは生きとるよ。」

「え？どういうこと？」

「起きれば分かるさ、箱の秘密もな…」

「は？急になんだよ？わけがわからないよ」

「…っはー」

なんだあの夢は。

「あれ、ここは？誰かの家か？もしかして誰か助けてくれたのか？」

と家の中を見回す。床が畳だ。てか、つくりが昔の家って感じがする。じいちゃんの

家みたいだ。

「あら、目覚めたのね。」

おそらく助けてくれた人だろうか。お礼を言わないと。声のする方を見るとそこには中国にありそうな、道士服を着た女性がいた。よく見ない格好だ。てか、初めてあんな格好している人を見た。ただ、今まで見てきた女性の中で一番美しい女性だと思う。まさに、大人っぽい魅力というやつか。まあ、そこは置いといてやるべき事がある。

「貴女が、助けてくださったのですか。ありがとうございます。」

もちろん、お礼だ。

「別にいいのよ、私の気まぐれで連れてきたのだから。」

と彼女は微笑んだ。普通の男ならイチコロだろう。だが、俺はそのことより「気まぐれ」という言葉に引っかかった。気まぐれ? どういうことだ?

「別に貴方は知らなくてもいいわ。今から、食べられるのだから」

……………は? 今なんと? 食べる? eat? have? ドユコト? すると彼女は扇子をかざし何か光るものをこっちに放った。何かやばい!

反射で避けると、うしろから轟音が聞こえた。

「どうなつてんだよ! ふざけるんじゃないやーねーぜ!!」

俺は無意識に構えをとった。

第1章

信仰なき青年と現人神と

第5話

逃走した日の青年

お父さん、お母さん、俺は生きているよ。でも、今もうダメかもしれない。とか考えていると、また光る弾が放たれた。今度は数発撃つてきやがった。相手はまるで遊んでいるようだ。

「くそつたれが、近づけねえ!」

徐々に弾を撃つ量も増やしていやがる。じわじわと殺す気か。避けるのが辛くなってきた。すると、左肩に弾が掠ってしまった。

「つつ!」

クソツ、痛い。火傷のような痛みだ。だが、同時に

「ツクク、フフフツツ、フハハハ!」

もう迷いはねえ。女だからって殴るのを躊躇っていたが、そんなことしたこつちやねえな。今、あいつは絶対油断している、だから一撃で仕留める。弾幕が途切れたのを見計らって、俺はその女の元に一直線に向かった。

「!?!」

相手は面食らったようだ。今がチャンスだ！女は弾を撃つてきたが下に避け、そのまま接近し、上がるのと同時に思いっきりアッパーパンチを喰らわせた。
ベキツ！

「ツク、ぐああああー、」

パンチは完全に決まった。角度、力の入り方どれも完璧だった。だが、

「アアアアア！」

俺の右手は折れていた、血も出ている。まるで鉄の壁を殴ったみたいだ。あいつは人間なのか？痛みやなんやで俺の頭はこんがらがっていた。

「中々やるじゃない。面白いわ。でも、次で終わりよ。」

そういうと、彼女は自分下に何か開いた。彼女はそこに入るとそれは閉じた。

「どこに行きやがった。」

見回すがいいない。後ろから何か来た！同じ様に床から何か開いてそこから出て来ていた。

「それでは、ごきげんよう」

俺の視界は光でいっぱいになったのと同時に吹き飛ばされた。

「ぐああ……」

全身が痛い、もうダメか。いや、まだだ、二回も諦めてたまるか、なにか打開策があるはずだ。すると、ポケットにナイフがあることを思い出した。なんとなくだが、これでどうにかなる気がする。俺はダガーナイフを取り出した。血で汚れてしまったが、気にしてる暇はない。迷わず俺はナイフをあの子に投げた。なぜか、ナイフについている宝石が光っている気がした。

「あらあら、無駄なことを」

女はまた空間に何か開いた。ああ、最後の望みもダメか……と思った次の瞬間、ナイフは開かれた空間を突き破ってそのままあの子の腹を貫通した。

「きゃっ！なんて……」

と女は腹から血を出しながら倒れた。

「なんなんだ……そうじゃない早くここから出ないと」

痛む体に鞭打ちながら外に出ようとす。多分あいつは人間じゃねえ。死んでねえだろう。起き上がるまで逃げないと。ナイフは拾っておこう。逃げ道を探していると、リュックを見つけた、一応持って行こう。外にできればなんとご丁寧にも自転車とセカンドバックがあった。怪しいがかまつてる暇はねえ。ありがたく自転車を使わせてもら

おう。俺はがむしやらに自転車をこいだ。

「紫様、紫様、お目覚めなられてるのでしよう」

「バレちゃったー?」

「当たり前です。なぜ、あの程度の人間を逃したのですか?」

「あの程度ねえ。まあ、面白そうだから?」

「ちゃんとした理由を言ってください!」

「分かったから、怒らないでよ、藍。まあ、理由はあの子ちよつといいやかなり特殊な子よ」

「どこがですか? 確かに格闘においては心得があるようですが。」

「あの子の投げたナイフ、私のスキマを破って来たのよ」

「なぜです？」

「さあ、分からないわ、まあ、あの子自分でこの屋敷から抜け出したけど」

「本当ですか？あの子は一体……」

「能力はもっているわね。なんなのかは分からないけど。久々にたのしめそうだわ。」

「はあ、はあ、（こ）はどこだ？」

勢いよく逃げ出したのはいいが、今どこにいるのかさっぱりわからない。無我夢中で
こいでいるうちに森にきたようだ。斜面もあるから山か。

「うわっ!」

ガッシャーン!

「つてて、クソッ」

木の根っこによって転倒してしまった。右手が折れてハンドルを握れないので当然片手運転である。よって、アンバンランスで少しの段差で倒れてしまった。

「おいおい、嘘だろ…」

前を見れば巨大な熊がいた。それにしてもデカすぎるし、なんか思った熊と違う。あれか、熊の妖怪か。ありえねえ。とりあえず、バレないように逃げないと。後ろに一歩下がると、

パキッ

枝を踏んでしまった。ええ、漫画のように。

グオオオー!

やつぱり、こつち来るか…でも、こうして生き延びたんだ。絶対生き延びてみせる。こういう、単純な野郎は、動きを見極めれば避けるのは容易い。

「よっ」と

ズガーン!!

派手に木にぶつかりやがった。だが、ピンピンしていやがる。どうすつかなあ。ふと

後ろを見ると斜面になっていた。そこには、いつしか倒れたらう大きな木があった。「よし。」

俺は意を決して、相手の突進を待った。

「まだまだ……まだまだ……まだ……今だ！」

俺はギリギリのところを避けた。一方、あの巨大熊は止まらずそのまま斜面の方へ突っ込み倒れた木の断面に突き刺さった。

「派手にささったなあ。」

様子を見ると見事に顔面からいった。あれはグロイ。さすがに死んだろ。

「フウ〜」

緊張が解けたせいかわ、喉が渴いた。確かセカンドバックに水筒があったな。バックから水筒を取り出しお茶を飲むと急に眠気が襲ってきた。

「ふあく、少し寝るか」

あつという間に意識は深くへ落ちた。

第6話

救われた日の青年と失った日の少女

兄さんが行方不明だと連絡が入った。家族は大慌てで大混乱だ。僕も混乱している。どっかの川で兄さんのハンカチが見つかった。この事によって、みんなは死んでしまっただろう、と言い始めた。ただ、事故なのか？それとも、殺人なのか？分からない。でも、兄さんは強い。だから、簡単に死ぬはずがない、そんな自信もだんだん無くなってきた。これから、どうしたらいいんだ？

勇人が行方不明だそうさ。だが、ハンカチが川で見つかったそうだった。だから、川を捜索し始めたそうさ。なにそれ、もう勇人が死んだみたいじゃない。嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だイヤだイヤだイヤだ……

中学校に入学した時のあいつの印象はと聞かれると困る。なぜなら、あいつは人と積極的に関わろうとしない。だからといって、話しかけられたら、きちんと返す。成績は確かい方で順位は一桁だったじゃないかな。だから、進学校である〇〇高校を受けてた。それは、置いといて中1と中2のときはあいつとはほとんど関わることがなかった。

中2の3学期ぐらいになると私は、生徒会長になり、あいつも生徒会役員になっていた。そこでの印象は、仕事はそつなくこなす。そんなぐらい。

でも、あの日を境にあいつと深く関わるようになった。

私は、小さい頃から星を見るだけでいまの時刻が分かり、月を見るだけでいまの場所

が分かる。親に言うとは

「変なことは言わないの」

と返され、友達に言うとは気が悪がられた。その時以来、このことは誰にも話したことはない。でも、たまに星を見に、夜、出歩いていた。中3の1学期の終わりだろうか。その日も私は、いつも通り星を見に夜、出歩いた。ただ、帰り道に変な人に絡まれてしまった。

「嬢ちゃん、どこに行くの？」

「家に」

「俺たちが送ってやろうか？」

「大丈夫です。1人でかえれますから。」

「そんな釣れないこと言わないでさく、ちよつと付き合ってもいいじゃんか。」

「やめてください！」

「しようがねえ、こうなりや力づくでも…」

「おい、あそこに誰かいるぞ。」

「え？」

振り返ると、なぜかあいつがいた。

「なんでいるのよ？」

「欲求不満解消しにちよつとな」

「はあ？」

「おいおい、兄さんや、こつちはお取り込み中だから、帰ってくんないかな？」

「ちよつどいいや、あんた俺につきあつてよ。」

「はあ？ 訳わからんこと言うんじゃねえ」

と男はあいつに殴りかかった。

「きやあー！」

思わず目をつむってしまった。

「ぐええ……」

「え？」

「こ、この野郎！」

ベキツ！バタツ

「ふんつ、思ったよりよえーな。つと、お前大丈夫か？ つて宇佐見!？」

「ありがと……つて確氷!？」

「ヤツベ、見られた……お前この事秘密にしてくんねーかな？」

「え、ええ……」

その日からだった。

私はことある事に彼を呼ぶ事にした。夏休みも過ぎると彼は部活を引退した。確かあいつ部長やつてた気が……まあ、いいわ。

私はよくあいつを入試勉強手伝つてあげると言う事で、よく行きつけのカフェに誘つて勉強していた。そのカフェはマスターは無愛想だが、腕は確かでコーヒーがとても美味しい。彼も

「美味しいな……」

と呟いてた。

一緒に勉強しててわかったのだが、彼はわざと手を抜いてテストを解いてた。なぜか、聞いたかかったが、聞かない方がいい気がした。数学にいたっては、もう高校生の内容を解いていて逆に私が教えて貰っていた。

ある日、私は意を決して彼に訊ねた。

「どうしてあの日あなたはそこにいたのか、どうして喧嘩が強いのか？」

彼は少し躊躇ったが教えてくれた。

彼は人を攻撃したくなる欲があること、それを解消するために夜、出歩いて喧嘩する相手を探していること。また、喧嘩の強さは祖父から教えて貰ったこと。そして、最後に

「俺って、ホント変な奴だよな。」

と言った。

「違う!!」

思わず叫んでしまった。そして、そのまま流れで私の能力について話した。変な奴と思われれると思つたが彼は、

「全然いい能力じゃん。ロマンあるじゃねえか。」

彼は私の能力、目をほめてくれた。初めてそんなこと言われた。

「俺なんか、害にしかならないからなあ」

彼は自嘲するように言つた。

「でも、初めてこの本当の姿を見せれたかな。」

と彼は微笑んだ。初めて彼が心から感情をこめた表情を見た。

普段はそんな表情しないのに。でも、私だけその表情が見れたということなんだか嬉しかった。

高校は違うところを受けたので会う機会は減つた。

ある日、私は彼に会えるかもしれないと思い、夜出歩いた。だが、会えず、がつかりして帰つてるとまた人に絡まれた。もう、ヤダと思うと同時に心のどこかで彼が助けてくれるんじゃないかと期待していた。その期待は当たつた。彼は来てくれた。前と同じ様に、

少ししか話せなかったが、とても嬉しくて帰ってから少し舞い上がった。
そんな中だ、勇人が行方不明になった、もう、死んでるかもしれないという連絡が来たのは。

ある日の事でした。私はいつも通り信仰を集めに村に行き、その帰りのことでした。ふと下を見ると人が倒れているではありませんか！助けに行かないと！

倒れていたのは男性でした。格好からして外界の人でしょう。学ランを着てるので私と同じ年ぐらいでしょうか？少し体が小柄ですが。ただ、彼の全身はボロボロで左肩からは出血していて右手はいびつに曲がっています。彼の荷物らしき物が近くにあり、自転車もありました。自転車かあ、懐かしいなあ。って違う違う！急いで手当てしないと！ふと近くを見ると熊の妖怪が死んでました。あれはひどかったです。夢に出そう……

ということは、彼はあの妖怪を倒したのでしょうか？それは後で聞くとして取り敢えず永遠亭に運びましょう。

運ぶ時ですが、彼は意外と軽かったです。むしろ荷物が重かった……これを背負ってる

なんて意外たくましいかもしれません。

永遠亭に着き、永琳さんに診てもらいました。命に別状は無いそうです。よかつた：彼をどうするかといことで守谷神社で引き取ることになりました。博麗神社も出ましたが、あそこは預けたらダメな気がします。あと、永琳さんからもしものために、急速に身体を治す薬を貰いました。最初から使えばいいのにと言ったら、使うと激痛を伴うから使いたくないのと言われました。なるほど。

後は、彼が起きるのを待つだけです。彼には聞きたいことがたくさんあります。どうやってあの妖怪を倒したのか、今の外界はどうなっているのか？ああ、ジヨジヨはどこまでいったのでしょうか！気になって早く聞きたいです！

第7話 常識を打ち破った日の青年

「起きろー、起きろー」

誰だ？俺はまだ眠いからほっといてくれ。

「起きないなー、こごうなったら」

ん？足音が少し遠ざかったぞ？

ドツドツドツ タツ

なんだこの音と思つた瞬間

「起きろー！」

ゴフツ！

「ぐはっ！な、何しやがる！」

「おー、起きたかー」

目の前には奇妙な帽子を被つた女の子がいた。年は妹くらいか？少し下か？どつちにしろ、なぜ腹にダイブした？

「いってて…」

「おい、気をつけろよー、君は大怪我してるからな」

その怪我人にダイブしたのはどこのガキだ！

「やっとお目覚めになられましたか。」

と扉から少女が現れた。髪は緑色で蛇と蛙をもよおした髪飾りをつけてる。格好は巫女服？にしては露出が高い気がする。身長は俺の方が高いか、良かった。ただ、左肩はズキズキするし、右手なんかぐるぐる巻きで使えねえ。

「はあ…どうすつかこれ…」

「あ、安心してください。とりあえず私たちが看護することになっています。」

「それはどうも…ああ、自己紹介がまだだったな、えーつと、俺の名前は碓氷勇人だ。よろしく。」

「これは丁寧な。私は東風谷早苗です。よろしくお願いします。」

と彼女は微笑みながら自己紹介してくれた。かなりの美人でスタイルも良い、さぞかしモテるのだろうなあ。ただ、ここで美人っていうのは危ない気がするので、一応聞いておく

「俺を食べる気はねーよな？」

「え？私は人間ですよ。人は食べませんよ。」

良かった。命は助かりそうだ。それはしてもこの娘は礼儀正しいな。責任感も強そうだし。とりあえず、任せても大丈夫そうだ。

「私名前は洩矢諏訪子だよ。後私は神様だよ」

子供の、戯言か。

「これは本当ですよ。」

へー。エア？どう見ても俺より年下…

「あんたよりはずつと年上だね。」

なんだ、なんか川に落ちてから俺の常識が…

そんなことよりだ、

「ここはどこですか？」

「あーここはですね、守谷神社です。」

守谷神社？聞いたことのない神社だ。

「多分、貴方は聞いたことがないと思います。だって、貴方、外界から来たのでしょうか？」

外界？

「あー！外界と言っても分かりませんね。まずこの世界は幻想郷と言います。貴方はこの世界の外から入って来たのです。」

幻想郷？どういうこっちゃ。

話を聞くとこの世界は忘れ去られた物が来るそうだ。だから、妖怪もいる、神もいる。なんて世界だ。道理で自分の常識が通用しない訳だ。

「俺は所謂外界に帰れるのか？」

「ええ、かえ「無理よ」

「!!」

「お、オメエは」

「こんにちは、幻想入りしたばかりの時以来かしら」

「俺を食いにきたのか？」

「いいえ、教えにきたのよ、貴方が忘れ去られた物だと」

「はあ？」

「もう貴方は、外界では死んだことになっているわ。言いたいのはそれだけ。これから新しい生活でも楽しみなさい。それはそうと、自己紹介がまだだったわね。私の名は八雲紫。以後、よろしくね。」

「……………碓氷勇人だ。」

「それじゃあ、また今度お会いしましょう」

「おい、待て！つてもう行ったか。ツチ」

「碓氷さん、紫さんとは何かあったのですか？」

「あいつに食われかけて、死にかけた」

「え！でもどうして生きていますか？」

「あいつに一泡吹かせたからかな？」

「す、すごいです！あの方は妖怪の中でも最強クラスですよ!!」

そ、そうか。てか、近い近い俺はパーソナルスペースは広くとるタイプなんだ。

「あ、すいません少し興奮してました。ところで外界の世界について聞きたいのですが。」

「全然いいよ。俺が答えれるなら」

そこから、外界の話をした。彼女も少し前まで外界に居たそうだ。

ただ、ジヨジヨ好きなのは驚いたなあ。まあ、俺も弟の影響でジヨジヨを5部まで読んだなあ。あ、好きなキャラはエシデイシと吉良吉影です。東風谷さんは承太郎って言うってたなあ。まあ、カツコいいいな。どこまで進んだのですか？と聞かれ8部まではいったよといった時の彼女反応は面白かった。かなり感情が豊かだなあ。

「ところでここはどんなことがあるんだ？あの、あの八雲っていう奴のあの能力はなんだ？」

「そうですね…紫さんは境界を操る能力を持っています」

「どんな能力なんだ？」

「えーっと、貴方も見たと思います、あれはスキマと言って、遠距離を繋いだり、幻と実体の境界も操れます。」

「そんなに強い奴だったのかよ」

命があつて本当に良かった。

「なら、東風谷さんも能力を持っているのか？」

「ええ、奇跡を起こす能力です！」

「これまた、チートな能力を…奇跡は偶然で起こすはずなのに必然的に起こせるとは…」

「ただいまー」

「あ、神奈子様だ」

と言うと彼女は声のする方へ言った。

「どうすつかな…俺…」

「神奈子様、彼が碓氷さんです」

「そうか、宜しく、碓氷」

「はあ、よろしくお願いします…」

「八坂神奈子だ」

「よろしく願います、八坂様」

「そんなに固くなくていいよ」

「はあ…」

「こちらは、さっきのロリ神とは違い威厳があり、神様っぽい。

「で、俺の顔に何かついてます?」

「ああ、すまない、紫のやつが面白い奴だと言ってたもんでな。案外普通の顔だな。」
「さいですか。」

「ところで確氷」

「はい?」

「ここにすぐに身体が治る薬があるのだが…飲むか?」

「そりゃあ、早く治したいので」

「ええ、飲みます」

「ちよつと、神奈子様…」

ゴクツ

「うへえ、変な味。良薬口に苦しか。」

「……………!?!」

「いてえ!身体中いてえ!特に左肩、右手なんかもげそうだ!

「ぐぐぐぐ…はあーはあー、ツク」

「やばい、脂汗まで出てきた。」

「アハハハ!言い忘れてたが、それ飲むと身体中痛くなるぞ!」

先に言っただけエエ!!

—110分後—

「フウフウ、死ぬかと思ったら」

だが、身体はすっかり治った。前より身体が軽い気がする。まさに最高にハイツて

(ry

「とりあえず今日は泊まっていってください」

なんか悪い気がするが、あても無いので、

「じゃあ、お言葉に甘えて。お世話になります。」

「それでは、夕飯の支度をしてきます」

「俺も手伝おうか？」

「大丈夫です、しっかり身体を休めてください」

「さいますか。」

「俺の荷物はどこかにあるのか？」

「それなら、あそこに」

「どうも」

東風谷さんは夕飯の準備をしにいった。うーむ、暇だなあ。そうだ、荷物の中は…
リュックには筆箱、教科書、ノート、財布など…

セカンドバックには部活用の練習着とジャージとウィンドブレーカー（ズボンのみ、
上は着ない主義だ）

スマホもあるが、充電できる訳なさそうなので使わないようにしておく。くうー、音
楽聴きてえ。まあ、あーだ言つてもしょうがないので、

「勉強すつか」

何が楽しくて勉強かて？楽しくねえよ。でも、習慣てのは怖いもんで、なんかしない
といけない気がする。とりあえず、数学の円の方程式でも…

「確氷さーん、夕飯ができましたよー。」

と呼びましたが返事がありません。どうしたのでしょうか？寝ていらっしやるのでしょうか？客間を見ると、

カリカリカリ……

ものすごい勢いで何か書いています。とても集中しているようです。私には気づいていないようです。何か数字や見たことのない文字がいっぱい並んで……うーん、頭が痛くなりそうです。

「そうか、ここはこうゆうことか。ん？どうかしたか？」

「あ、夕飯ができました、一緒に食べましょう。」

「了解です」

そういえば、神奈子様と諏訪子様以外の人に食べてもらうのは、初めてな気がします。お口に合うでしょうか……

どうも、俺は一旦集中すると周りが見えなくなるらしい。東風谷さんが近くにいらるとに気がつかなかった。後、今更ながらものすごく腹が減った。あの時からどれぐらいたったのやら…

とりあえず、夕飯だそうなので東風谷さんについて行こう。

「おつ、確氷」

「八坂さん、それと洩矢さん？」

なんか、洩矢さんって年上のはずなのに呼び方に違和感が…

「なんで、私だけ疑問形にした？」

「まあまあ、いいじゃないか。それより君は少々他人行儀すぎる。別に呼び捨てでもか

まわんよ」

そうは言っても、神様を呼び捨てだなんて少し抵抗が…

「それでは俺も東風谷さんと同じように神奈子様と諏訪子様で…」

「うーん、まだ、堅苦しいが、まあいいか」

「私も呼び捨てでかまいませんよ」

「じゃあ、東風谷でいいかな？」

「上の名前じゃあ、違和感があるので下の名前でお願ひできますか？」

うーん、参ったなあ。俺は基本、人は苗字で呼んでいる。だから、あまり下の名前で

呼ぶのは慣れてない。

「ach…」

ああ、そんな目で見ないでくれ！しょうがない、意を決して俺は

「改めて、よろしく、早苗」

うん、慣れねえ。なんか、恥ずかしい。

「はい、勇人さん」

うむ、照れ臭い。

そんな事もありながらも俺らは食事を始めた。

ただ、カレーが出できたのは、驚いた。てつきり、和風なものかと。でも、かなり美味しかった。久々、腹一杯食った気がする。

「なあ、あんたは何か能力を持っているのかい？」

と夕飯を食べ終わってゆつくりとしてたら、諏訪子様から聞かれた。

「多分、俺は能力なんて持ってないですよ。」

「ふーん……じゃあ、そんな不思議な力に興味はあるかい？」

「……ないと言えば嘘になりますかね……」

「じゃあ、霊力でも使えるように修行すれば？」

へえー、霊力なんてあるんだ……は？

「俺がそんな力使えるんですか？」

「多分、使えるよ。君には霊力が感じられる。他の人よりは、才能があるかもしれない

よ。」

「マジか……」

てか、どうやってわかるんだ？あれか、気みたいなやつなのか？

「うまく使えば、空も飛べるようになるよ」

え!?マジかよ!ひみつ道具なんか必要無くなるじゃんか。

「まあ、ここの世界において、力ある奴はみんな飛べるけどねえ、早苗だつて飛べるぞ」

「……………」

なんなの?空が飛べるのが自転車に乗れる感覚でできるなんて……科学者が聞いたら

泣くぞ。

「どうだい、修行してみるかい？」

そりゃあ、答えは

「ええ、もちろんです！」

「勇人さん、お風呂いいですよー」

おお、お風呂にも入れさせて貰えるのか。感謝しきれない。

「着替えどうします？」

「うーん、一応着替えはあるから大丈夫」

もちろん、着替えはジャージだ。

「……………ふう、生き返る〜」

それにしても、こここの風呂は広い。家の風呂よりは広い。くつろぎながら、色々あつたおかげで溜まった疲れをとるのだった。

「今何時だろう、……10時か」

俺は腕につけてた時計を見た。ここには、時計が見当たらないのでつけといてよかったですと思う。もう、こんな時間か。

「ふああ、眠い」

俺は早寝遅起き型だ。睡眠は大事。いつも、この時間には寝る。なんか、やっとまとも寝れる気が……いいや、早くねよう。

「これでようやく今夜も熟睡して寝れる……」

そんな、呑気なことを言いながら、早苗たちに寝ることを告げ、準備して貰った布団で眠りにつくのだった。

「ふうー」

やつと片付けが終わりました。今日はいつもと違ったのでつい、料理を作り過ぎたのですが、彼は食べてしまいました。あの体にどこへ入っていったのでしょうか。それで、あの体型とは…羨ましいです。彼もとい勇人さんはお風呂に入るとすぐに寝てしまいました。まあ、色々あったので疲れたのでしよう。それにしても、お風呂の時間は短かったです。早風呂派なのでしようか。

ちよつと、彼のことについて考えてみます。容姿は、いい方だと思います。だからと言って、目を引き付けさせるほどではないかもしれませんが、鼻筋がしっかり通っていますが、目は少し脛が下がっていて視線が悪い感じがします。そのせいでしょうか、目が死んでるように見えます（ちよつと失礼ですね）。髪は黒で、てっぺんが少々元気な感じがします。体格は小柄なほうです。男ですから、私よりは背が高いです。

ただ、何より不思議なのは、特に変わったところはなく、いたって普通の青年のはずですが、あの紫さんに一泡吹かせた人なのです。もしかして、何か能力があるのかも…

気になりますね…

「早苗」

あ、諏訪子様が私を呼んでいます。

「何でしょうか？諏訪子様」

「突然で申し訳ないけど、明日からあの勇人君に霊力の使い方教えあげられないかな？」

「ええ、かまいませんよ。でも、どうして？」

「彼にはちよつと才能がありそうだからねえ…」

やはり、彼には何か力を持っているのでしょうか？

「明日からで良いのですね？」

「ああ、よろしく頼むよ」

「任せてください」

ちよつと明日が楽しみです。

第8話

修行の日の青年

「ーてくださいい！、おきてくださいい！」

うーん、何だ？今日は学校も部活もないからまだ起きなくていいんだぞ？

「……もうちよつと」

ガバツ！

「おきてくださいい！」

「分かったから……」

「そう言いながら寝ないでくださいい！」

まだ眠くボケ気味の俺を引きずりだすように早苗は起こした。

「なんで、早起きなんか……」

まだ7時だぞ？休日は10時まで眠るとゆうのに。

「今日から霊力が使えるように私が鍛えてあげます！」

「……………は？」

ああ、確かに昨日の夜そんな事を言った気が……てか、もう始まるのかよ……

「まず、貴方の霊力がどれだけのものか調べさせてもらいます」

そう言うと、彼女は、変な機械を持ってきた。ちよつとぐらい、待ってくれよ。てか、なんだ、あれ。

「霊力測定器です！にとりさんに作って貰ってよかった」

なんか、胡散臭い機械をもってきたなあ。はい、どう見てもスカウターです。てか、にとりつてだれだ？

「とりあえず、ここに立つてください」

急だなあ…

「はあ」

ピッピッピッ……

「!!すごいですよ！勇人さん！」

そ、そうか。こっちは「ふんつ、霊力はたったの3か、クズめ」と言われそうで少し焦ってた。

「どのくらい俺はあるんだ？」

「100ぐらいです。普通の人とは5ぐらいですので、とてもすごいですよ！」

まじか！53じゃね？と思ったが杞憂だった。てか、俺にそんな隠れた才能が…

「ところで早苗はどのくらいなのか？」

「わたしは、50万ほどです」

「アツ、ハイ……」

やはり、早苗は普通のコジヤナイノカ……

「私よりは上の人はたくさんいますよ」

ああ、俺のプライドが……

「でも、大丈夫ですよ！私が鍛えますから！今は弱いかもしれませんが、勇人さんなら強くなると思いますよ」

この娘は少し天然のようだ。イマハヨワイダナンテ……

傷心の中、俺は修行を始めるのだった。

「とりあえず、瞑想から始めましょう」

とゆうことで、俺は瞑想を始めた。

暇だ…もうかれこれ、3時間はこのままだ。これ、効果あるのか？早苗曰く
「靈力を高めるにはまず五感を鍛えることからです！自然の音や空気の流れを感じて、
五感を鍛えてください」

自然の音ねえ…俺はとりあえず耳を澄ませた。

ザーザー

これは木の揺れる音か？今日は少し風が強いようだ。

「お疲れ様でした、とりあえずお昼にしましょう」

「そうだな、朝ごはんも食ってないし」

はあー…：修行は大変そうだな。朝飯抜きでやるなんて…なかなか、ハードだな。

「あつ！朝ごはん食べてませんでしたね、ごめんなさい。わすれてました」

そこまで、ハードでは無かったようだ。朝ごはんを忘れるのか…やはりこの娘は天然か…

昼飯も食べ、また俺は瞑想に入った。

とりあえず、基本的に瞑想をしておくようだ。

……………

うむ、集中力が切れてきた、もう終わってしまうか。

「あーもう終了してもいいですよー」

早く言ってくれ…

俺が借りてる部屋に戻ると、ど真ん中にダンボールがあった。なんだ？誰か入ってるのか？

「いいえ、違うわよ。貴方の荷物よ」

「おわっふ!？」

変な声が出てしまった。振り返るとスキマから女性が出てきていた。えつと…名前
はたしか…

「紫よ、ゆかりんでもいいわよ♡」

「ああ、八雲さんでしたね、この前は本当にお世話になりましたよ」

皮肉を込めて言っただけだが、相手はどこ吹く風、全く気にしないようだ。てか
なんだよ、ゆかりんって、まるで年増のおばさんが若作りしてみるみたいじ…

「あまり、失礼なことは考えないのよ」

心読まれたのか？ちよつと、殺気を感じた。もしかして、年齢をきにして…

「まあ、そんなことより荷物の中を見なさい」

ふむ、そうしよう。

ダンボールの中は基本的に服だな…よかった、下着もある。さすがに3日連続で同じ
ものを着るのは少し嫌だったからな。あとは…おお！これは！

「抱き枕も持ってきてくれたのか！」

俺は抱き枕がないと少々寝れんのだ。これはありがたい。

「ん？これは…」

じいちゃんから貰った箱だ。中にはもう、何も無いとおもうが…

「それぐらいでいいかしら？」

「ああ」

ただ、少々引つかかることがある。

「俺を食う気は無いのか？」

そう、初めて会った時は殺しにきてたじやあないか。

「無いわよ、貴方、おもしろそうだからね……」

「てか、この前、外界では俺は死んだことになっているとか言ってたな。だとしても、俺が戻っても問題ないんじゃないのか？」

「残念ながらそうはいかないわ」

「何故？」

「いつか、分かるわよ。とりあえず、ここのお世話になりなさいな」

いつまでも、お世話になるのは良く無いと思う。どうにかしないとなあ……

「それじゃあ、また会いましょう」

「ああ」

彼女はスキマの向こうに行って消えた。食べねえやつだ。

とりあえずは欲しかったものが来たので良しとしよう。

そんなこともありながら、瞑想の修行しながら3日経った。

「飽きた」

さすがにずっと同じ修行は飽きる。もうそろそろ、他の修行は無いのかなあ。本当に俺に霊力があるのか不安になってきた。

ああ、暇だ暇だ…

あつ、鳥がああの木から飛んでった。今日も参拝客が来てるのか…

.....

ん？誰か来たな。早苗かな？違うな、これは

「諏訪子様？」

「そうだよ、よく分かったね、もう、修行の成果が出てるじゃないか」

「え？」

「だって、後ろも見ずに誰か当たるなんて普通はできないだろう？」

そう言えばそうだ。いつから、分かるようになったけ？てか、鳥の場所から、参拝客が来てるか分かるのってすごいんじゃないやね？いや、普通かも。とりあえず、諏訪子様に言ってみた。

「ほほう、そこまでいったのか…やっぱり才能あるね…」

やったぜ。

「うむ、明日からさ新しい修行に入るように早苗に言っとくか」

でも、本当に霊力があるのか？俺に。実感が未だに湧かない。

「諏訪子様から聞きました。さすがです！ たったの3日でそこまでいくなんて…少し羨ましいです…」

「そうか、で、次の修行は？」

「とりあえず、弾幕を撃ってみましょう」

「は？ 弾幕って、俺が八雲と戦ったとき、八雲が撃ってたやつか？ 少し早過ぎるんじゃないか？」

「指先にエネルギーを溜める感覚で力を溜めてください」

「こうか？」

「……何も起こらんぞ」

やはり、俺には早過ぎたのだ。

「おかしいですねえ、貴方くらいなら出てもいいはずなのですが…
とりあえず、思いつきり力を込めた

「ふんっ！」

「あー！」

「あ」

何か出できた。すげー！俺も撃てたぞ！でも、なんか体がだるい。

「すごいです！初めてで、これだけの弾幕とは…」

「そうか、ただ疲れたな…」

「初めてですからね。まだ、効率良く出さないと思います。この弾幕は少々荒く出されてます。勇人さんの霊力は少々攻撃的のようです。ほら」

と早苗は俺の出した弾幕に大きめの石を近づけ触れさせた。

バキッ

「!?」

石が粉碎された！

「普通の霊力なら綺麗に割れるのですが、勇人さんのはこのように粉々にしてしまえます。でも、悪い訳ではないですよ、攻撃するにはこっちの方が都合がいいですし」

「そうか、本当に俺に霊力があるとは…」

「霊力を効率良く出せるように特訓しましょう！」

この日から霊力を出す特訓が始まった。

霊力を出す特訓をし始め3日目、だんだん俺は連続して出せるようになった。これ、指先から出したら完全に浦飯○助だよな。まあ、まだ早苗のようにはいかん。この世界には弾幕ごっこという遊びが、あるらしい。なんて、恐ろしい遊びだ。一度早苗にその様子を見せてもらったがあれだけの量を出せる気がしねえ。

「まあ、勇人さんは、数よりも一撃一撃が重いタイプですからね」

あとその時に本当に早苗が飛んでるのを見た。もう、科学なんか知りませんってやつだなあ。

「大丈夫です、明日から教えますよ」

俺もそんな世界に入っていくのか：ヤベエ、少しワクワクしてきた。久々だなあ、この感情は。

その日の夜、俺は珍しく11時になっても眠くならなかった。あー、どうしよう。な

んとなく俺はじいちゃんから貰った箱を取り出した。

やはり箱の中にはあのナイフとは真つ白な紙だけだ。紙に仕掛けがないかじっくり見てみる。やはり、なんの仕掛けもないか。炙り出しか？うーん、少し靈力をその紙に込めてみた。本当になんとなくだ。すると紙から文字が浮かび上がってきた。

「……?!なんだ？これは……」

「選ばれた子なる血をその輝く石に垂らすせば、神によりて作られし神器を手に入れむ」

古文で書かれてるぞ。古文は学校の授業で習った。大丈夫だ、読めるさ。えっと……つて、これそんなに難しくもないじゃないか。俺が選ばれた子なのかは知らんがこの箱の寶石に血を垂らせばいいのか。

俺はナイフを取り出し、指を少し切った。その血を宝石につけると、

「眩っ!!」

箱が光った！玉手箱か？ジジイにはなりたくない！

「うん？」

光がなくなつたかと思えば箱の中が変わってる。なんだ？

恐る恐る手を入れると…

「なんだ？これは？手が入ってくぞー！」

箱の中はまるで四次元ポケットのようになっていた。少し漁ってみると、手に何か当たった。

「これは…また、紙か、いや、何か書いてるぞ」

「勇人へ

この手紙を見つけたということは、わしはすでにこの世にはおらず、お前さんもその世界にはいなくなつたのであろう。本当はこの手紙を読む機会がないことを願うばかりだが、今こうして読んでるのであればしょうがない。

この手紙を読んでいるということは、お前さんは霊力をつけたということであらう。それであれば、

身の危険も回避することができるとだろう。

さて、本題だが、何故この事が分かるのか？と思
っているだろう。そうなってしまったのはわしに
責任がある。わしは元々人間ではない。元々は道具
を司る神だった。道具に神力を宿らせたり、付喪神
を宿らせたりしておった。ただ、わしは人間に憧れ
るようになり、ある時わしは他の神々からの反対を

押し切ってわしたちの世界では禁忌である『天降り』
をしてしまった。多分、他の神々はさぞかし怒ったで
あろう。だが、わしはその決意を捨てず、神の力を
失い、ただの人間になった。そして、人間のように
恋をし、家庭を持ち、子や孫にまで恵まれた。だから、
このことは、全く後悔しておらんかった。お前さんが
まだ小さかった頃、急にわしを殴り始めた時があつた
ろう。その時、わしはお前さんの中に霊力があるのを
感じた。それも、ただならぬ量を。あまりに多すぎて
感情の方に流れ込み攻撃的な気分にしたのだろう。

わしはこの時初めて後悔した。わしは完全に力を消せてなかったのだ！幸いと言うべきだろうか、この力が受け継がれたのはお前さんだけだった。本当にすまない。

そして、運が悪い事にわしの存在がバレたらしい。天からわしを追う者が始まった。このままにすれば、わしは捕らえられるであろう。もし、お前さんが見つかったらどうなるか？確実に消されてしまうだろう。人間が神の力受け継ぐ訳にはいかないのだ。だが、わしの可愛い孫見殺しにするなんてできない！わしは古くからの友人の妖怪に匿って貰うように頼んだ。お前さんの力が一番高くなるだろうという時期に。

ナイフは見つけたか？そのナイフにはわしが神力を宿らせておる。また、箱の中には銃が入っているだろう。1つはわしが神力を宿らせておる。もう二丁はただの銃だ。

わしが神力を宿らせた銃は霊力によって弾をうてる。後のはお前さん自身で改造し霊力の弾を撃てるようにして

くれ。そのための、道具はこの箱の中に入れておる。器用なお前さんのことだ。きつと、できる。

最後だが、お前さんが霊力を持っている。それは分かったであろう。ただ、お前さんには特殊な能力がある。それが何なのかはわしにも分からん。だが、お前さんの中に流れているその血が鍵となるだろう。

わしの娘や孫たちの成長が見れんのは残念だ。だが、わしは妻や娘、孫には幸せになつてほしい。しかし、お前さんはわしのせいで家族といられない。本当にすまない。許してくれとは言わん。だが、わしはお前さんたちを愛しておる。それだけは、忘れないでくれ。

汝に幸あらんことを……

「……」

俺は箱から銃を取り出した。

「安心してくれよ、じいちゃん、俺は大丈夫だ」

恨んだりはないよ、むしろ感謝しきれない。俺のためにこんなことしてくれているのに恨めるわけがないじゃないか。家族と一緒にいられないのは寂しいが、この世界で幸せに生きてみせるよ、じいちゃん…

第9話

決心した日の青年

あの晩が過ぎ、朝を迎えた俺はあの箱の中にあつたものについて整理していた。まずは、最初から入ってたもの。

ダガーナイフ

霊力により文字が出た紙

何か装置がついたリストバンド

次は、昨日の夜に見つけたもの

回転式拳銃（ピースメーカーみたいだが、グリップに何か装飾が施されている）

自動拳銃二丁（ベレッタ92か？よく分からん、2丁拳銃は現実的には実用性が薄くて聞いたことがあるなあ）

工具らしきもの（ただ1つ1つの道具に装飾が施されている。これで改造すんのか？）

「ふう、なかなか物騒な光景だよなあ」

銃やナイフ並べてるなんて、日本なら捕まってしまうだろな。まあ、ここは幻想郷なので問題ない。友達に銃が好きの子がいたから銃の知識は少しある（こうして手に取るとは思わなかったが）。

「勇人さーん、起きてますかー?」

もうこんな時間か、そういえば今日空を飛び方を教えてくれるんだっけ?もう、あの猫型ロボットは必要ないな。早く朝ごはん食ってしまっただけ教えてもらおう。銃はこっそり練習することにした。

よし、始めていこう。

「よろしく頼むよ、早苗」

「ええ、もちろんです！空の飛び方はですね…」

なんか、だんだん声が尻すぼみに…

「うーん…なんて言えばいいんでしょうか？」

なるほど、表現しにくいのか。そりやそうだ、こっちは想像もつかん。

「弾幕は手の方に力を込めましたよね、飛ぶ場合は全身に力をこめるのです！」

「どんな感じに？」

「えっと、こうブワツと」

なるほど、分からん。ブワツとつてどうすんの？自分で考えてみるか。弾幕のときは目標に向かって力を込めてた訳だから、空を飛ぶには…そうか！弾幕を放つ際、少しだけ反動があったから、地面の方向に力を込めれば…

「んぐぐぐ…」

「あ！浮いてますよ！」

「まじか!? っっておっと、」

気を抜いたらダメなようだ。だが、確かに浮いた。ただ、制御が難しい。

「もう一回！」

おお！さつきよりも高く浮いてるぞ！少し前に進んでみよう。

「……おあ!？」

バランスを崩してしまった。やばい、調子乗って少し高く浮いてしまった。

「危ない!!」

ガシッ！

「大丈夫ですか? でも、すごいですよ! たった、数分でこんなにもできるなんて!」

「お、おう」

近い近い! もう大丈夫なので離してほしい。ほら、早苗は女の子だから、こう……

「つて、顔赤いですよ! 熱でもあるんですか!？」

「だ、ダイジョウブタヨ、ゼンゼン、ゲンキダヨ」

「本当に大丈夫ですか?! 言葉がおかしいですよ!？」

顔が近い近い! 俺は女子とふれあう機会なんてほとんどなかった(泣)だから、少々

免疫がねえ、ないんですよ……

「ホントウニダイジヨウブタカラ！」

と俺は後ろに飛んだ。

「あれ？」

後ろにとんだ？

「移動ができたぞー！」

やったぞ、と思つた瞬間

「あ」

「あー！」

バタツ

「大丈夫ですか？ケガは？」

「あー、大丈夫大丈夫、ほら」

俺は元気だと伝えるためもう一回浮く。どうやら、まだ少し浮いて、ちよつと移動するだけしかできないようだ。まあ、練習すれば上達するだろう。

「良かったです。それにしても本当に勇人さんはすごいですね！」

「う、うんまあな」

ちよつと、照れ臭い。

「ふふ、じゃあ少し休憩にしましょう」

「賛成」

ということでした。少しお茶を飲んで落ち着いた。

「ふう、お茶がうまいな」

ちよつと、今回は靈力を全身で使ったせいかな眠いなあ。日の暖かさがより眠気を…

「勇人さん、修行またしますか？つて、寝ちやつてますね…」

やはり、空を飛ぶ練習はきつかったのでしょう。ぐつすり寝てしまつてます。彼は本当にすごいです。才能の塊つて言うのでしょうか。私より呑み込みが早く、実践に移す能力が高いです。まるで、靈夢さんみたいだなあ。少し羨ましいです。

はっ！現人神である私が弱気になつてはいけません。今、私は彼の「師」なのです。

ら。

「……うーん」

起こしてしまっただでしょうか？彼は寝返りをうちました。寝顔を覗くのは良くないと思いますが、ちよつと覗いてみましょう。

普段は、表情の変化があまりないのでこうして、穏やかに眠っている表情はちよつとレアかもしれません。彼はどんな夢を見てるのでしょようか。

最初、彼を見つけた時は驚きました。なんせ、妖怪の山の中で怪我して倒れてたのですから。助けに行ってもつと驚きました。大型の妖怪が近くで死んでいるのです！彼も妖怪なのでは？と疑いましたが、格好や周りの荷物から外来人だとすぐに分かりました。また、学ランを着ていたので年齢もどのくらいかすぐに分かりました。

彼の怪我が治って（永琳さんのお薬を飲んですぐに治りましたが）、彼をどうするか考えてたら紫さんがやってきてすごく驚きました。勇人さんから話を聞いた時はもつと驚きました。

彼が寝てしまった後、紫さんがまた現れました。

「紫さん、どうしましたか？」

「彼をここに住まわせてはあげられないかしら？」

「別に構いませんけど…なぜです？」

大妖怪がお願いするなんて珍しいです。

「昔からの友人の頼みでね…」

そう言う彼女は遠い過去を思い出すような憂いを帯びた顔をしてました。昔、何かあったのでしょうか。

「ということで、よろしくね」

「あ、はい！任せてください！」

「一応、神奈子と諏訪子には許可とってるわ」

「ところで彼は…」

「ただの事故でこっちに来てしまった外来人よ」

どこか、裏がありそうでしたがそれ以上聞くのをやめました。

「ふああ…よく寝たって何時だ？」

外を見れば空が真っ赤だ。どうやら、あのまま寝過ごしたらしい。やつちまった。

「あ、起きた」

「うおい！」

近くに諏訪子様がいた向こうには神奈子様もいる。

「そんなに驚かなくてもいいじゃないか」

死角から出てこないでほしい…心臓が悪い。

「まあ、それはいいとして、修行着々と進んでるそうじゃないか、早苗が褒めてたぞ」

「ああ、私もすごいと思うぞ、短期間でここまで上達するなんてな」

一柱神に褒められ少し恐縮してしまう。それを誤魔化すためにお茶を飲んだ。

「これで、早苗のお婿について悩まなくてもいいね」

「!?ゲホッゲホッゲホッ…ふー、何言ってるんですか!？」

危うく吹き出しかけた。むせたが。

「うむ、そうだな」

神奈子様まで…

「いや、いい人は他にいますって、それより早苗の意見を主張しないと…」

「そうだ、恋愛は個人の主張が尊重されるべきだ。」

「早苗もいいと思ってるよきつと」

「そんなバハマ」

「おーい、早苗ー」

「え？なんで、早苗を呼んで…まさか！」

「何でしょうか？神奈子様？」

「早苗…こつちに来るんじゃない！」

「早苗もいい年な訳だが、勇人を婿にしたらどうだ？」

「!？」

「ああ、言ってしまった…」

「えっ、いや…その…ちよつとすいません！」

「そういうと、彼女は部屋を走って出た。あーあ。」

「脈ありだね」

「どこがですか？はあ」

「少々、ここに居づらくなった。」

「はあ、はあ……」

急に呼ばれたと思つたら、あんな話をされるなんて……思わず逃げてしまいました。神奈子様も、意地の悪いことを……でも、少し考えてしまいます。確かに勇人さんは悪い人ではないと思います。少々、無愛想ですが、料理を手伝つてくれますし、優しさはあるでしょう。好きか嫌いかと聞かれると好きな方に入るのでしよう。……つてなにを考えているのでしよう、私。ちよつと、頬が暑いです……

今日の夕飯はなかなか面白かったな。勇人はどこか魂が抜けた顔をして食べてたし、早苗は顔を赤くして時折、勇人の方を見るし。神奈子も面白がつてるな。こいつが来たら、早苗もよくなつたと思う。やはり、外界から急にここに来たわけだから、少々寂しい思いをしてたのだろう。ここにきて、知人も増えたようだが、やはり同じ世界出身というのは大きかったのか、前よりもっと明るくなつたと思う。早苗には本当に申し訳ないと思つている。急にここなら引越すことになつたからな。

でも、この娘は嫌な顔せず、ここまでついて来てくれた。本当によく出来た娘だ。

彼に婿になつてほしいと本気で思つている。彼の事情は紫から聞いています。彼も急にここに来た。最初の頃は、どこか固い感じがしたが、今は打ち解けてくれていると思う。昨日の夜にきつと事実を知つたのだろう。今日の彼の様子から、幻想郷で生きていく決意をしたようだ。あのような子は絶対強くなる。早苗を守つてやれる存在になれるだろう。早苗だつて、勇人に対して悪い印象は無いはずだ。

「……………」

俺は今外にいる。早苗には散歩しに行くと言った。守谷神社の保護範囲外には出ないでくださいと言われたが出る気は毛頭ない。

目的はこれだ。

「どう、靈力を込めればいいんだ？」

じいちゃんが俺に残してくれた銃である。ただ、使い方は書いていなかったので感覚で使うしかない。

えつと…シリンダーって言うんだっけ？そこに靈力を込める。

「おっ！」

弾倉に靈力による弾が、装填された。スムーズにできたな。じいちゃんのお陰だろうか？

で、次にハンマー？を引き起こして、20メートル先の木に狙いをさだめ、引き金を引く。

パンツ

乾いた音が響く。音は思ったより大きくない。火薬を使ってないからか。反動もそんなにない。片手で撃つても問題なさそうだ。

パンツパンツパンツパンツ

全6弾全て撃った。これは武器として相当使えるぞ。撃った木を確認すると6弾全て貫通していた。威力ヤベエ。弾も残らないしいいな、これ。リロードはシリンドーに靈力込めればいいのでそんなに時間がかからない。強い。他のも確認してみよう。

次は自動拳銃だ。ただ、これは何もされてないらしい。マガジンに靈力を込めても何も起こらなかった。これは自分で改造するしかないか。あと、リストバンドらしきものは全部で4つもあつた何コレエ。試しにつけたが、何も起こらない。うーむ、とりあえず靈力流せばなんとかなるっしょ。

パシユツ！

「うおっ！」

何か飛び出たぞ！これは、針？裁縫道具の針ぐらいだな。あれ？糸がついてる。リストバンドに繋がってるぞ。これで登れるのか？と思つたが地面に刺さつた針は簡単に抜けた。なんだこれ？てか、針戻らんぞ。もう一度靈力を込めると針は戻つた。

「もう一回！」

パシユツ！

今度は針に靈力を伝えるように靈力を込める。

「おっ！」

針が取れなくなった。靈力を込めるのをやめると簡単に抜けた。4つ全て試したが、1個だけ針が無かった。糸だけ出るのだ。とりあえず保留だな。

次はナイフだがこれは靈力を込めようが何も起こらなかった。あの時、寶石が輝いて見えたのは気のせいか？ナイフをよく観察すると持ち手の一番下の部分に穴が開いている。はっ！もしかしてこれは…

「これをこうして…ほいつ、できた」

穴にさつき唯一針の無かったものの糸を通して結んだ。これで投げて…

「そりゃっ」

ドスツ

で回収したい時に

シウルシウル…

おお、これでナイフを投げて失くすことは無さそうだ。

「よしっ、これで一通り確認できたな」

自動拳銃の改造は明日からだな。とりあえず、今日は休もう。明日こそ空を自由に飛んでみせるぜ。

そんなことを考えながら夜の道を歩いた。

第10話

修行完了の日の青年

うーむ…俺は今、猛烈に悩んでる。目の前には二丁の拳銃とよくわからん工具。全く使い方が分からん。これでどうしろと？じいちゃん、教えてくれえ…ああ、もうダメだ、寝よう。明日は空を自由に飛べるようにするために特訓すると決めてるんだ。あまり、体に疲労は残したくない。

次の日、

「よし、はっ……」

今、絶賛特訓中だ。浮くまでならなんとかなるが、そこからがなかなかできない。すぐに、バランスを崩してしまう。

「うわっ」

まただ…

「うーん、どうしたら良いのでしょうか…」

早苗も必死に考えてくれてる。こりゃあ、是が非でも飛べるようにならないと。ちなみに、昨日は諏訪子様が爆弾を投下してくれたわけだがとりあえず、問題は無かった。

はあ、本当に昨日は焦った。そんなことはおいといて、だ。

「全然、うまくならねーな…」

浮いてから、横に移動するのがなかなか難しい。バランスが取れない。

「一旦、助走つけてから飛んだらどうでしょう?」

「なるほど、やってみるか」

この際、どんなアイデアも取り入れるしかないな。

「確氷、いつきまーす」

ダダダダダッ

「ほっ、おお!」

あれ?俺、どうなってる?進んでるぞ!

「うおお!スゲー!」

旋回もしつかりできる、ヤベエ楽しい。風が気持ちいいぞ。

「勇人さん!ついに飛べるように!」

「ああ!スゲー楽しいよ!これ」

「そうでしょう!」

早苗が俺の横に並んだ。

「とりあえず、山の周りを一周しましょう、ついてきてください!」

「おう！」

少女&青年飛行中……

「もう、大丈夫ですね！これで勇人さんもこちらの世界の仲間入りですよ！」

「おうよ！そうだ、最後の直線、競争しようぜ！」

「いいですよ！負けませんから！」

「ヨーイ、ドン！」

俺は足を中心に靈力を込めた。速いぞ。風がかなりすごいことに。

「勇人さん！ちよつと速過ぎますよ！習得したばかりなのに……」

うん？早苗が何か言った気がするが、いいか。そうだ、着地どうしよう、あ、教わってなかった。

「やばい！」

どうする！このままだと、俺は酷いことになってしまう。とりあえず、反対方向に靈力を集中させ、スピードを落とした。が、ちよつと遅かったようだ。減速しきれない。

「つく、こうなったらー！」

俺は高度を下げ落ちてても問題ない高さになったところで、靈力を止めた。あとは、運

動エネルギーしかないので、地面を転がるように着地する。

ゴロゴロ……………

そのまま、立ち上がる。

「ふう……うまくいった」

「勇人さん」

「おう、早苗俺の勝ちだな」

「そうですね悔しいです」

だが、早苗はなんの問題もなく着地した。

「……」

「どうしましたか?」

「いやあ、俺はどうやら飛び始めと着地が下手だからどうしようか、もうこのままでもいいか……」

早苗は飛び方として、ヘリコプターのような感じか? 速くない代わりに繊細な動きができる。あと、助走もいららないし、着地も上からストンとできる。対して俺はジェット機か? 直線においての速さはあるが、小回りが利きにくく、助走も必要で着地も少し距離がある。まあ、いいか。それは個性ということだ。

「もう飛べるようになりましたから、教えることは肉体強化とかくらいですかね…。勇

人さんは向いてそうですし…多分、すぐにできるようになると思います」

「そうだなあ、それまで終わったらどうするか…いつまでもお世話になったらいけないし、もうそろそろ独り立ちしきれないと…迷惑だらう?」

「そんなことありませんよ!」

「!?、お、おう…」

「勇人さんをここに住まわせているのは私たちが好きでやってるので、全然問題無いですよ!」

「そうか…でも何もしないのも悪いからな…仕事でも見つけた方がいいかな」

「うーん、とりあえず明日人里に行ってみます?」

「おつ、それはいいねえ、うん、そうしよう」

「じゃあ、勇人さんの挨拶も兼ねて行きましよう」

「そうか、確かにここに来て早苗たちや八雲以外に人に会ってすらねえからな。うまく話せるかなあ。そう言えば、あまり人と話すのは得意じゃねえなあ。まあ、早苗もいるだろうし、大丈夫だろう。」

「よし、仕事みつけるぞー!」

「あ、ちよつと俺、やりたいことがあるから、部屋に戻っていいか?」

「いいですよ、何するんですか?」

「秘密だ」

「むー、教えてくれてもいいじゃないですか」

頬を膨らませる顔も可愛いな。やっぱり、美人な人は何やっても可愛いのか。だからと言つて、教えない。

「ダメだ、俺にも知られたくないプライベートな事があるんだ」

「…分かりました」

そして、俺は自分の部屋に戻った。

—30分後—

「あー、だめだー、さっぱりだ」

やりたいことはこれ、銃の改造だ。1つもできていないが。道具の使い方が全く分んねえ。説明書はないのか？俺は箱の中を漁った。

「うん？これは…」

説明書じゃねえか！道具の使い方書いてんじゃん！あー、無駄だったのか、畜生。まあいい、これで改造できるぞ。

「ふむふむ、これで霊力を込められるようになるのか」

「ん？あーもう！これ違うじゃん！」

「これで霊力が撃てるようになるのか」

「リロードはどんな風にするか…マガジンを一々だして霊力を込めるのか、グリップから直接、霊力を込めるか…」

「実用性なら後者だろう。だが！マガジンの出し入れはロマンがある！それを求めるには前者だ！まあ、そんなロマン求めてないので、後者にしよう。」

「お昼も挟んで、取り組んだこれは、完成した時には、もう外は日が暮れ始めてた。試し撃ちしてくるか。」

「早苗ー、ちよつと散歩してくるー」

「こんな時間にですか？昨日もしましたよね？」

「ちよつと、気分転換に」

「……分かりました、気をつけてください」

「了解、じゃあ」

今、私は勇人さんを尾行しています。こんな時間に散歩なんておかしいです。どこへ行くのてしようか？実は妖怪？まさか、あり得ません。とりあえず、ついていきます。

あ、立ち止まりました。何か箱をとりだしました。箱の中から何かを取り出しました。何でしょうか？少し周りが暗くなってきたのでよく見えません。黒い物ですね… 2つあるようです。あ、構えました。

パンツ！パンツ！

何の音でしょうか？あの黒い物から弾幕が出たように見えます。ただ、ものすごいスピードで飛んでいきました。木々も貫通しているようです。いつの間に、あんな技を… やはり、勇人さんは只者じゃないです。

「あれ？早苗？」

あ、バレてしまいました。

「ごめんなさい、つい気になって」

「あー、別にかまわないよ、いつか見せる予定だったし」

そう言い、彼は手に持つてるものを見せられました。驚きました！なんと、あれは銃です！しかも、靈力を弾にしますので！さらには、普通の拳銃から靈力が撃てるよにするなんて…器用すぎます！やはり、才能でしょうか…少し自信が無くなります…

「これで俺も戦えるかな？」

「ええ、十分戦えますよ」

「そういえば、この世界では弾幕ごっことかいう遊びがあるんだっけ？」

「ええ、基本的にこの世界での戦いは全てスペルカードルールに基づいた弾幕ごっこによっておこなわれていますよ？ 勇人さんも興味ありますか？」

「うーん、どうだろう、俺は基本的ルール無しの野戦が得意だからなあ。でも、一応教えてくれ」

「ええ、いいですよ」

少女説明中……

「ほう、それなら妖怪とも対等に戦えるな」

「折角ですし、勇人さんも何か考えてみては？」

「そうだね、必殺技があるのはカッコいいからなあ」

必殺技は男のロマンである。

「よし、いくつか考えてみよう」

青年思考中……

「よし、いくつかリストアップしたぞ」

- ・銃火「ギブアガンファイヤ」
- ・早撃「クイツクドロウ」
- ・弾痕「バレットホウル」
- ・薙払「オールアットワンススウィープ」
- ・欺刃「カッティングズレッド」

スペルカードの説明としては名前のまんまだ。早苗に練習相手になって貰って実践までした。銃火「ギブアガンファイヤ」は自動拳銃によりただ撃ちまくるのみ。早撃「ク

「イックドロウ」は回転式拳銃によるただの早撃ちだ。フアニングってゆう、西部劇でよく見るような早撃ちを練習した。やっぱり、難しかった。弾痕「バレットホウル」は回転式拳銃により追尾弾を撃つ。雑払「オールアットワンズスウィープ」は自動拳銃により弾を撃ちまくるまでは最初のと変わらないが止まることなくグリップに靈力を込めて続けて最初のもの以上に撃ちまくる。ただ、これは靈力の消耗が半端じゃない。欺刃「カッティングブレード」はナイフを投げるが糸をつけておき、躲されても靈力を流した糸によりダメージを与える技だ。

「まだ5つしかないな」

「いいんじゃないですか、これで勇人さんも戦いに参加できますよ」

「そうならない方がいいな、野戦なら歓迎だが」

「妖怪相手なら死んでしまう可能性もありますよ?」

「なんとかなるさ、とりあえずは明日だ、よろしく頼むぜ、早苗」

「ええ、案内はどんと任せてください」

と彼女は胸を張る。今、思った。早苗ってかなりスタイルがいいんだな。

それはいいとして、明日仕事をみつけるぞー、これで俺は脱ニートだあああああ!

第11話 お仕事探しの日の青年

ーチュンチュン

「うーん…今何時だ？まだ7時か…」

スヤー

「勇人さん！朝ですよ！」

「今日、部活無いから早起しなくていいの…」

「何言ってるんですか？今日、人里に行くんですよ」

ああ、そうか…だが今の優先順位は睡眠だ…もう少し夢の世界へ…

ガバツ

「うおっ！寒っ！」

「はいはい、起きてください」

「んー、分かったよ…」

もう少し寝てもいいじゃあ無いか。

文句言っても仕方ないので、井戸に行つて水を汲む。そして、顔を洗つてやっと、目が覚める。

「ふああ…うん…ん…」

少し伸びをする。俺もここに慣れてきたな…最初の頃は驚いたもんだった。電気もねえ、水道もねえと今まで当たり前だったものが、ここではほとんど無かったからだ。井戸で水を汲むなんて初めてだったな…

「朝ご飯、できましたよー」

「ああ、今行く」

モグモグ…

「やっぱり、早苗は料理が上手いな」

本当にそう思う。俺と年は変わらなさそうなのに…俺のいた学校には頭でっかちの

女ばっかりだったからなあ…勉強はできるのだが…家庭の調理実習の時とか、こつちがヒヤヒヤする様だったからな。俺は、たまに自炊はするのでできなくは無。てか、母さんが一人暮らしになった時にできないといけなからって、無理矢理教えられたのが。まあ、無駄では無いだろう。

「だろう？うちの早苗は家事はどれもしつかりこなすからね」

貴女も手伝いなさいよ…俺は手伝ってるぞ。

「まあ、勇人もここにすつかり馴染んできたからね…」

「もう、勇人をおむ」そうでした！今日は勇人さんと人里にいつてきます！」

お、おう。珍しく早苗が声を張った。てか、諏訪子様はまた、爆弾を投下しようと…

「うむ、なんで行こうと？」

「それはですね、神奈子様。さすがにお世話になってるだけじゃいけないので、仕事を探して働こうかと」

ニートはダメだよ、ニートは。

「はあ、お前も意外としつかりしたんだな」

意外って…どういうことですか…俺、そんなにちゃらんぽらんに見えるんですか？

「これで、あんたたちもふう」「この卵焼き貰いますよ」あ！それは私のだ！」

ふう…油断も隙もない。

格好はどうするか…普段はカッターシャツと制服のズボンで過ごしているのだが…面接に行く訳だし、学ランも着て、正装で行くべきか。

「そういえば、あんた、格好はどうするんだい？」

考えている時にその話をするとは…さすが神奈子様。分かってらっしゃる。

「うちは女物の服しかないからねえ」

え？なんで、服借りる前提なの？ありますよ！

「いや、だいじよ」確かに…でも、こいつは体はそんなに大きくないからなあ、女物でも入るだろう」

体が大きくない…俺にはまだ希望があるはずだ170は越して欲しい(切実)って、そうじゃない。

「いや、ですから俺服もって」でも、案外似合うと思いますよ、勇人さん」

グホツ、やめてくれ…それって、俺が女っぽいつてことじゃあないか。悪意が無いから余計に…

「なら、ちよつと試着させてみるか…」

「大丈夫ですから！俺、服持ってますから！」

「そうか…残念だ…」

どうしてです、神奈子様…

「ちえっ、面白そうだったのになあ」

何してくれようてしてんですか…諏訪子様

「似合うと思うのですが…」

なんで、早苗までがっかりしてんの？そんなに俺の女装が見たいか？男が女装しても気持ち悪いだけだ。中学校の頃、文化祭で生徒会の出し物から男女格好を入れ替えるということになった。女性陣は問題ない（蓮子に至っては女子からきやつきやつ言われてたなあ）、問題は男性陣だ。あれはひどい。むさ苦しいったらありやしない。そして、ノリノリだった。うう…思い出しただけでもキモい。ん？俺ってか？ふふ、俺はオープニングの映像とエンディングのスライド作りに専念して、舞台すら立ってないぜ。あの時は危なかった…男性陣より女性陣の目が怖かった。

つと回想はここまでにして、

「服は準備してくれなくても大丈夫です…」

学ランで大丈夫だろう。

今、俺は空を飛んでる。横には早苗がいる。もう、空飛ぶのには慣れたなあ。自転車の様だ。乗れるまでは大変だが、慣れるともう当たり前の様に乗れる。まあ、着地は下手だし、未だに助走はいるが。

「あ、見えました、あそこです」

「ああ、あれか」

確かに人里だ。そう、時代劇で見る様な感じだ。やはり、外界とは全然違うのか……タイムスリップした気分だ……

「あそこら辺に降りましょう」

「了解」

「で、とりあえず、どこに行くんだ？」

「それはですね、人里の守護者でもある慧音さんと、里の長に会いに行きましょう。多分、この時間は一緒にいらっしやると思っています」

「慧音?どんな人なんだ?」

「ああ、そうでした。名前は上白沢慧音と言って、この村の守護者であり、ここで寺子屋を開いている先生でもあります」

「守護者って、その人強いのか?」

「ええ、その人は半妖ですから。確か、ワーハクタクの半妖と聞いてます」

「そんな妖怪初めて聞いたな」

「中国の方に伝わる妖怪だそうです、って話してたら着きましたね」

確かにみんなが集まりそうな建物に着いた。

「すいませーん、ちょっと用事があるのですが」

「はい、って早苗じゃないかどうしたんだ?」

「あ!慧音さん、里長もいらつしやいますか?」

「ああ、いるよ、用事とは何なのかな?」

「はい、慧音さんと里長さんに紹介したい人が」

「ふむ、まあとりあえず奥に上がってくれ」

「勇人さん、いいですって」

「おう」

「お前さんが早苗の紹介したい人か」

「あ、はい、名前は碓氷勇人と言います」

えっと、話しかけてきたのが多分、この里の長だろう。随分と年をとってる様だが長らしい思慮深さを感じる。

「ふむ、しつかりしている人の様だ」

「あ、ありがとうございます」

「私は上白沢慧音だ。ここで寺子屋を開いて、一応教師をしている」

不思議な帽子を被っていて、服は青を基調に…髪は白と青が、混ざっている…この世界の人は服装や髪の色が不思議な感じだなあ。

あ、とりあえず、挨拶しないと。

「よろしく願います、上白沢さん」

「おいおい、そんなに固くなくていい、別に下の名前で呼んでもかまわないから」

「はあ、では改めてよろしく願います、慧音さん」

「うん、よろしく頼むぞ、で、用事とは紹介だけでは無いのだろう」

「あ、はい。実は…」

青年&少女説明中……

「ふむ、仕事を探しておると…じゃがのう、今はどの仕事も人手は足りておるからもう」
「そうですか…」

「お前さんは外の世界のお方じやろう」

「ええ、そうですが」

「生活はどうしておるのかね」

「あー、今は守谷神社に居候させて貰ってます、ですが、お世話になりっぱなしも悪いのでこうして、仕事を探してるのですが…」

「ふむ、どうかしてやりたいがのう」

「なら、私の寺子屋で働くか？」

「え！いいんですか？」

「うん、今は1人でやっていて、大変だからな、人手が増えるのは嬉しい。ところで君はどの様な勉強が得意かな」

「えっと…数学ですかね」

「数学？和算のことか？」

「まあ、そういったところですよ」

「そうか！なら、丁度いい。是非、うちで働いてくれつとその前に一回、試験をさせてくれ」

「いいですよ」

「大丈夫ですか？勇人さん」

「安心しろ、多分解けないことは無い」

「少し問題を作るから待っていてくれ」

「分かりました」

「どんな問題を作るのでしょうか」

「そんなに難しいのは出ないだろ、それより、やつと仕事だ！これで迷惑が少し減らせるぞ」

「だから、迷惑じゃありませんよ」

「はい、お茶ですよ」

「ありがとうございます」

里長の奥さんだろうか、お茶を出してくれた、ありがたく飲む。

「礼儀正しいねえ、この子がここに来てても問題なさそうじゃが」

「いえ、大丈夫ですよ、私たち守谷神社がお世話しているので」

「情けない話である。女の子に養われてる男なんてヒモ男じゃねえか。やはり、仕事が見つかって良かった。」

「おやおや、この子は早苗ちゃんの彼氏かね」

「!?」

「ゴホッ、ゲホッゲホッ…」

「なんだ、このデジャヴ。何を聞いてくれるんですか、この奥様は。」

「おう、そうじゃったな、お主らの関係を聞いておらんかったわい、で、お主らは付き合っているのか?」

「い、い、いやややや、まだそんな関係じゃじゃ、無いですよー!」

「おい!その言い方は!」

「まだですって、じいさんや」

「ホッホッホ、若いのう」

しばらく、2人は顔真っ赤にして互いを見れなかった。

「よし、待たせたな、問題ができたぞ。つて、どうしたんだ、2人とも顔が赤いぞ」

「あ、あ、だ、大丈夫です。早く問題を解きましょう！」

「…？ そうだな、はい、解けたら持ってきてくれ」

「はい」

青年回答中……

「うん、できた」

「…！ 早いな、どれどれ…」

問題はそこまで難しくなく、すぐ解けたし、見直しもしてどこも問題無いはずだ。しかし、こう丸つけされるのは、なかなか緊張するんだよなあ。もしかして、間違ってるのかも。

「素晴らしい、全問正解だ！」

「よしっ！」

「さすがです！ 勇人さん！」

「だが、この文字がよくわからんのだが…数字が合ってるからいいのだが、これは何だ？」

ああ、XとYか。この世界では使われてないのか。

「えっと、それはですねえ…」

青年説明中……

「なるほど、これは解きやすくなるな！ 是非、これも子供達に教えてやってくれ！」

「ということとは……」

「ああ、君を採用させてもらうよ、時間は追い追い伝える」

「やったー！これで仕事ができる！」

「良かったですね、勇人さん！」

「ああ、早苗のお陰だよ！」

つい、興奮してしまい、早苗の手を握った。

「……！あ、ありがとうございます／＼」

「あらあら……」

「ほほう……」

「そういうことか……」

「……!? あ! ご、ごめん、つ、つい……」

「だ、大丈夫です、それより本当に良かったですね」

「ああ」

「とりあえず、三日後からたのめるか？」

「もちろんです」

「じゃあ、用事も済んだのでこれで……」

「ああ、これから頼むぞ、勇人君」

「よろしく願います、里長さん、慧音さん」

「ああ、よろしく」

こうして、人里を後にした。

「それでは帰りましょうか」

「ああ、そうだな」

そういえば、この辺の地理をよく知って無いな。

「やっぱ、先に帰ってくれ、ちよつとやりたいことがある」

「一緒に帰った方がいいとおもいますが…」

「ごめん、どうしてもやりたいんだ」

「そうですか、遅くならないようにしてくださいね」

「安心しろ、一応銃は持ってきてる」

俺はできたばかりの自動拳銃をみせた。

「だとしても、です」

「分かった、分かった。じゃあ、後でな」

「はい、気をつけてくださいいね…」

青年探索中……

「はあー…」

意外と守谷神社のある山は広い。空を飛び続けると、すぐに霊力が空になるので、なるべく歩いてる。一応、銃もリロード済みだ。

「それにしても、静か過ぎるな…ま、いいか。探索はこのぐらいにして、帰るか」

と、帰ろうとしたら、

「待ちなさい」

と後ろから呼ばれた。

第12話

初陣の日の青年

「待ちなさい」

後ろから声をかけられた。

何だ何だ、ここに人がいるのか？ 恐る恐る振り返ると…

「は？」

何の冗談だ？ 格好は上半身が白を基調とし、下は黒と赤を基調としたスカートを着ている。頭には頭襟と言うんだっけ？ とりあえず、山伏が被つていそうなものを身につけている。ここまですら何とか理解できる。俺が理解できないのは、頭にある耳だ。犬耳だろうか？ あ、尻尾もある。酔狂なコスプレか？ 俺はあまりそういう人と関わりたく無い。というわけで、俺は

スタスタスタ……

「ま、待ちなさい！」

「何だ？ コスプレの勧誘ならお断りだ」

「……？ 何を言ってるのですか？ ……そんなことよりここは、妖怪の山、人間は立ち入り禁止です！」

「と言われても今から帰るだけだし…」

「なら、さっさと立ち去りなさい！」

「へいへい…」

「つて、どこへ行ってるんですか!？」

「だーかーら、帰ってるの!」

「だから、立ち入り禁止といっているでしょう!」

埒があかない。

「あ!あそこにも侵入者が!」

「え?!本当に?」

振り返った、チャーンズ!

「よし、ここに隠れれば…」

「どこにいくんですか?」

「ウェイツ!」

なんで?

「私は千里先まで見通せます。あなたがどこに行こうが丸見えです」

「これまた、厄介な能力を…でも、こいつ自体は馬鹿真面目な性格のようだ。

「そうか…なら、自力で通らせてもらおうぜ!」

俺は自動拳銃を片方のみ取り出し、撃った。

「きゃっ!？」

さすがに不意打ちだったろう、怯んだな、

「いくぜ!」

「…っく!」

必殺!

「逃げるんだよ」

「え?」

今は戦いたいという気分じゃ無い。てか、さつさと帰りたい。ので、逃げさせてもらいます。ビビりだつて? 戦略的撤退というやつだよ。あの星の痣をもつ血筋の人達だつてそうしてただろう?

「もう、怒りました!」

後ろから気配が…振り返ると

「うわっ!」

まじか! 剣を取り出したぞ! 危なかった…

「もう、貴方を排除させてもらいます!」

殺る気まんまんじゃないですかーやだー。

「そうか…あまり戦いたくないが、目的の為なら戦わざるおえないな…」
俺はもう一つ銃を取り出して構えた。

「覚悟！」

「うっしやー！バチこーい！」

「おかえり、つて勇人は？」

「勇人さんは用事があるそうです」

「一緒に帰らなかったのかい？」

「はい……」

あら？早苗がご機嫌斜めだ。勇人と何かあったのだろうか？

「あいつ、仕事見つかったのか？」

「ええ、無事見つかりましたよ」

「へえ、どんな仕事かい？」

「寺子屋の先生をやるそうです」

「あいつが先生ねえ……」

ちよつと、思いつかないな。あいつが仕事始めたらからかってみるか。

「勇人は何の用事があるんだい？」

「知りません」

「そ、そうかい……」

本当、どうしたんだ？

「諏訪子、早苗機嫌悪くないか？」

小声で神奈子が聞いてきた。

「さあ、私にも分からない。勇人が原因かもしれないが」

あいつは何をしたんだ？

「のわっ！うわっ！」

現在、回避中である。何なの、この娘？人間ではないことは分かった。前に、早苗から妖怪の山を管理しているのは天狗っていう話を聞いた。多分、この娘は監視役かなんかだろう。妖怪の下っ端だとしても、人間の俺には十分脅威で、

「危なっ！」

防戦一方である。

「すばしっこいやつですね！これで終わりです！」

「!？」

弾幕撃ってきやがった！

「くそっ！」

もう、いい！相手が飽きるまでと思ったが、こっちの方が面倒だ。こっちからも行かせてもらおう！

「ほらよー！」

パンツ、パンツ、パンツ、パンツ、パンツ、パンツ

牽制がてらに6発。

「!?!」

ふんっ、怯んだな、隙ができた。普通の弾幕よりはるかに速く撃てるからな。

「おらあー！」

急接近して、脇腹へ蹴りを1発。霊力も込めてある。これで脚が折れることはない。
が、

ガシッ！

「なめないでください！」

掴まれた！やばい！

「グググ…」

人間と妖怪じゃあ、力勝負では妖怪の方が圧倒的に有利だ。

パンツ！パンツ！

「もうそれは読み切ってます！」

カンッ！カンッ！

盾でガードされた！貫通力はあるが破壊力は無いのか。

「こくなつたら！」

俺は上に飛んだ。

「え!？」

空を飛べるとは思わなかっただろう。あいつの拘束から逃れた。こっからどうするか…あの盾が邪魔だ…

「人間ごときが妖怪に勝てません！力でも知能でも！今、貴方はこの盾を外す方法でも考えているのでしょうか！」

「!？」

「動揺しましたね！つまり、その通りなのでしょう」

「だ、だから何だ！」

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ

「無駄です！」

カンッ、カンッ、カンッ、カンッ

盾でガードしたところを狙って俺は盾を蹴り飛ばそうとした。

「オラア！」

「やはり、そうきましたか！」

スツ

「避けられた！」

「隙あり！」

ガンツ！

「うぐつ！」

盾で殴られた、かろうじて腕でガードできたが、相当痛い。靈力込めてなきや、折れてたな。

「…チィ！」

一旦、距離を置こう。

「戦いというのは、将棋です！一手二手読んだくらいじゃあ勝てません！相手の数手先まで読まなくては勝てません！」

「そうかい！なら、これはどうだ！」

「…っ、接近しても無駄です！近距離なら銃より剣が強いです！」

「それはどうか？」

俺は銃のグリップに靈力を大きく込めた、そして、

ダアンツッ！ダアンツッ！

「きゃっ！」

装填された弾を全て一発にしてまとめて撃った。至近距離だ盾だけでは衝撃を防ぎきれまい。

「ソラアッ！」

盾を蹴り上げ、

グリップに靈力を込めリロード、スライドを引いて、
パンツ、パンツ、パンツ、パンツ、パンツ、パンツ、
盾に向け発砲し、盾は空方へ飛んだ。

「ほらほら、どうした？」

「つく、はあああああ！」

突っ込んできた！

「ヤケクソか？これでもくらえ！」

パッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッ！

「ふん！」

カキンツッ！カキンツッ！カキンツッ！カキンツッ！

剣で弾いた!?やばい、接近された。

「ウオオオオオ！」

「つく！」

ガキンツ！

「…っ、クウ…！」

腕にすごい衝撃が！

「せいっ！」

カキンツ、カキンツ

「しまった！」

銃を手から離された！

「これで終わりです」

「……フフ」

「何笑ってるのです！」

「あんたは、戦いは数手先読んだ方が勝ちと言ったな」

「ええ、そうです、今こうして私が貴方が撃つことを予期し、剣でさばき、それに驚く貴方に剣で斬りつけ、銃を離させた。私が完全に読み切った上での勝ちです」

「どうやら、読み切れてないことがあるようだが？」

「無駄な、悪あがきをやめなさい。貴方の負けです」

「7、6、「聞いているのです!? 貴方の負けです!」3、2、1…」
「…0」

ヒュー…

「ん? 上から…」

ガンツ!

「きゃっ!」

バタツ

「上から盾が落ちてくるのは読めなかったようだなつと、言っても気絶してるから聞こえないか」

あの妖怪は完全に気絶したようだ。まあ、あれだけの高さから、落ちてきた盾を頭に受けて気絶で済むのは、さすが妖怪といったところか。

「どうするかなあ…この娘」

守谷神社に、連れて行くか。ここに置いておくのも悪い。

「よいつしよと、あんまり、重くないのな」

どつから、力湧いてんだ?

俺は妖怪を背負って守谷神社に戻った。

青年&少女（気絶中） 移動中……

「ただいまー」

「おう、おかえり、勇人つてその娘は？まさか…」

「何を考えてるかは知りませんが、違います」

「つて、椛じゃないか」

「知り合いですか？」

「まあね、どうして、椛が気絶してるのかい？」

「えっと…実は…」

青年説明中……

「ふむ、そういうことか。そうだった、天狗の方にこいつのこと伝え忘れてた」

「頼みますよ、諏訪子様」

「まあ、いいじゃないか、それにしても、やはり勇人はすごいな。下っ端とはいえ、妖怪にスペルカードルールなしで勝つなんて」

「まあ、頭で負ける気はしませんからねえ」

「結局のところ、あんたは早苗と一緒に帰るべきだったね」

「うっ、つい山の中を探索したくて…」

「勇人さん、帰ってきたんですか…は！何で女の子を背負って…まさか、勇人さん…」
「違います」

「実はね、早苗、かくかくしかじか…」

「…：…やつぱり、一緒に帰った方が良かったじゃないですか！」

「悪かったって…」

助けを求め、諏訪子様を見る。

「私はちよつと天狗たちに連絡してくる」

ああ、待つてくれえ…

「せつかく、2人きりになったというのに…って聞いてますか!？」

「んあ？あ、ああ、聞いているよ。でも、まずこの権つていう娘を降ろさせてくれ」

「…分かりました」

「ん……うん………はっ！」

「おっ、目覚めたか」

「…！貴方は！ってここは」

「大丈夫ですか？ 椀さん？」

「貴女は…早苗さん!? ということはここは守谷神社!? ということですか！」

「ああ、そうだな。だけど、手を離してくれないかな？ 降ろせん」

「……！は、はい！」

「どこか痛むところはありますか？」

「いえ、大丈夫です。それよりもなぜ、ここに彼が？」

「それはだな……」

青年説明中……

「それでしたら、早く言って下さいよ……」

「すまない、だが、攻撃してくるのもどうかと…」

「しようがないです！仕事ですから！」

「分かった、分かったから。次からはかまわんだろう？」

「いいですけど、あまり天狗の領域に入らないで下さいよ…」

「善処する、それよりも自己紹介させてくれ。俺の名前は碓氷勇人だ」

「私は犬走権です」

「そういえばあんたの『戦いは将棋です』というセリフかつこよかったぜ」

「……／＼、忘れてください！」

権は俺の胸を、ポカポカ叩いてきた。本気ではないようだから、痛くない。出されたら困るけど。

「いや、別にその通りだと思うぜ」

「え？」

俺は、脳筋プレイより、頭脳プレイが好みだ。

「まあ、俺の方が数手先読めてたけどな」

「うっ…次は負けません！」

「はいはい」

ふと、早苗を見ると、なんか機嫌が悪そうだ。どうしたんだ？

「早苗？体調でも悪いのか？」

「全然大丈夫です」

「本当に？」

「本当です」

「そうか、なら良かった」

「お茶持つてきます」

スタスタスタ…

本当にどうしたのだろうか？

「そこは読めないんですね…」

「……？」

「勇人く、椀く、ちょっと来てくれ」

「何でしょう？」

「とりあえず、行くか」

「あやややや、このお方が例の彼ですか」

「そうだよー」

外に出ると、諏訪子様と知らない少女がいた。セミロングの髪型に椀と同じ頭襟を身に付け、白い半袖シャツに、黒いフリルがついたスカートを着ている。ただ、背中に黒い翼らしきものが……こつちの方が天狗っぽいと言われれば天狗っぽいかもしれない。

「初めまして、射命丸文と言います」

「どうも、碓氷勇人です」

なぜだろうか……椀の顔が若干凍りついてる。

「椀じゃないですか、聞きましたよく、彼に負けたんでしよう?」

「う、うるさい! あんたには関係無いだろう!」

「はいはい、ところで勇人さんに取材をさせていただきたいのですが……」

「取材?」

「はい、私、記者をやってまして、是非勇人さんのことについて記事を!」

「俺でいいのなら、構いませんよ」

「なら、早速ですがインタビューを!」

「お、おう……」

ものすごい、スピードだ…

こうして、俺は彼女のインタビュに答えた。

「はあ…」

何でしょうか、今日の私は…

椀さんと話してる姿を見て、何故か苛立ちを覚えました…はあ…何でしょうかねえ…

「早苗」

ビクッ！

「か、神奈子様？」

「そこまで、驚かなくてもいいじゃ無いか」

「すいません…」

「どうしたのかい？」

神奈子様にて言ってみましようか。

「実は…」

少女説明中……

「はっはっはー！そんなことか！」

「そんなことじゃないです！」

「簡単な答えだろ？好きなんだよ」

「す、好き!?!」

「違うのかい？」

どう何でしょうか…嫌いではないです。ただ、じっくり考えたことも無いので…

「分かりません」

「まだ、分からんでいいさ、いつか分かるさ」

「はあ……」

いつか、分かるのでしょうか？

「はあ……疲れた」

あの射命丸っていう天狗は遠慮が無いな。プライベートなことまで聞こうとするなんて、悪い奴じやなさそうだが。明日の新聞の記事にするって言ってたな。仕事が早いこと。てか、あの天狗飛ぶスピードも半端じゃなかったなあ。ああ、今日はいろいろあり過ぎた、寝よう。

その新聞がまた、彼の生活を大きく変える。

第2章

ティーチャー青年とロリータ吸血鬼

第13話

先生となった日の青年

「これにX||7を代入することで……」

今、俺は授業をしている。受けているのではない、しているのだ。つい、この前まで授業を受ける側のはずだったが、今は教える側だ。人生どうなるか分かんないな。

俺の授業は基本、数学すなわちここで言う和算をやっている。ただ、ここに来るのは、慧音さんの和算の授業では物足りない人が来るのだが、外界の数学が不思議なのか、来る人が多い。たまに、慧音さんも受けるってから驚きもんだ。

今日の授業を終え、明日の授業の内容を考えてたら、

「勇人、少し頼みたいことがあるのだが……」

「はい、何でしょうか？」

「お前に担任してもらいたい組があるのだが……」

「全然いいですよ」

「そうか！なら、今から挨拶しに行ってくれないか」

「了解です」

「担任か…ますます先生っぽくなってるぞ」

人里に行くのと知っている子供達から

「碓氷先生〜！」

と呼ばれる。だから、周りの大人の人も

「こんにちは、碓氷先生」

と声をかけてくれる。なかなか、むず痒い。

さて、どんなクラスかな？と思いつつながら扉を開けると…

「あ！慧音先生じゃあ無いのか…」

悪かったな！慧音さんじゃなくて。

「えつと、今日からここを担当する碓氷だ。よろしく」

これ、先生っぽくね!?

「「「よろしくお願ひします」」」

「よろしくなのだ〜」

「よろしくしてあげるよ」

問題発生。生徒が人間ではありません。

「ちよつと、待つててください」

タツタツタツ…

「慧音さん！どう言うことですか！」

「ん？何か問題あつたか？」

「問題しかありません！どう見ても人間じゃないでしょ！」

「ああ、そのことか」

「そ、そのことかつて…」

「実はな…」

けーね説明中……

「はあ…」

溜息つきながら、あの部屋へ戻る。

慧音さん曰く、この里自体、妖怪がよく来るらしい。何かの約束事で妖怪は襲えないから問題ないらしい。その中で、寺子屋に興味を持つ者が出たようだ。それで、慧音さ

んは人外のクラスを作ってたのだが、人間のクラスで大変な上にそれよりもタチが悪い人外も持つのは大変だったらしい。それでは、断れない。

「遅くなりました。すいません。それでは自分の名前と種族を言ってください。じゃあ、君から順に」

「あ、はい。私は…大妖精と呼んでください。えと…種族は名前の通り妖精です…」

うむ、個人的な名前を持たないようだ。髪は緑色、青い服を着ている。まあ、背中にある羽が人間ではないことを示している。だが、しっかりしている娘のようだ。良かった、人と変わらんかもな…

「あたいはチルノ！サイキョーだからよく覚えてなさい！」

前言撤回、大変そうだ。種族も言えと言ったのに言わないあたり、大物(⑨)的な意味で)だ。全身青色という印象を受けるな。まあ、背中には当たり前のように…あれは羽か？氷の結晶みたいだ。まあ、大妖精と同じ妖精だろう。あの娘は絶対問題の種になるな…

「私はルーミアなのだー、妖怪なのだー」

この娘もチルノと同じ匂いがある。種族を言うあたりまともだと言えるか。

「お前、食べれるのかー？」

「食べれません、ハイ次」

物騒なこと言うなよ……

「私はリグル・ナイトバグです。種族は妖蟲です」

あ、女の子でしたか。まあ、触覚が生えてるあたり、人間じゃない。一瞬Gか？と思っ
てしまったが違うようだ。すまん。

「ミステイア・ローレライです。種族は夜雀です。あと、屋台もやつてますので、良かつ
た来てください」

この娘もまともそうだ。羽があるあたりにんげ（ry

「私の名前はフランドール・スカーレットだよ。種族は吸血鬼」

「……………」

はあ!? フランドールってあのフランドールか? 早苗から聞いたのだが、かなり危険な
奴と聞いているが、ここにいて大丈夫か?

銃を持っていて正解だった…自動拳銃は棍との戦いの時におかしくなったので、修理
中だ。

「そういえば、碓氷先生の種族はなんですか?」

と大妖精が

「そうだ、私も気になった」

とリグルが

「ん？俺か、人間だが？」

「「え？」」

「じゃあ、食べていいの？」

「ダメだ」

「じゃあ、あんたは弱いのか！ありがたく思いなさい！このサイキョーな私がついてるわ！」

「いえ、結構」

「えー、強い人が来るって聞いたのに…壊していいかな？」

「もちろん、ダメだ、あれか、人間で残念か？」

「うん」

おい。

「私は大丈夫ですよ…」

さすが、この中の良心である、大妖精。あれ？目から汗が…

リグルとミステイアもいいうようだ。

ただ、問題は…

この⑨とこの両手広げてる娘とサイコパス少女だ。

てか、慧音さんはなんと紹介をしとるのだ。強い人って、俺が戦つてるところな

んか知らないはずだが？

「とりあえず、今日は自由にしてくれと、慧音先生から言われています。何かしたいことは？」

「弾幕ごっこ！」

⑨とサイコパ（ry）が言った。

「ダメです、寺子屋に被害が出る」

「いや、構わんよ」

「あ、いいそうです…って、慧音さん!？」

「安心しろ、ここはなフランドールを参加させる代わりに結界を張ってもらってる。い

くら、暴れても傷はつかんぞ」

「やったー！」

「Oh, shit！」

ダメだ、つい汚ない言葉を。

「碓氷先生勝負しよう！」

「いや、チルノとしたらどうだ？」

「チルノは弱いもん」

ひどい言い草だ。

「むー、誰が弱いつて！あたいはサイキョーだぞ！」

「ふんっ、なら私に勝ってみなさいよ！」

「よし、勝負だ！」

よし、対象がそれだな。

「すまない、勇人、私では少々荷が重いのだ」

俺もですよ。

「ほら、お前、妖怪を軽くひねったのだろうか？」

「……は？」

「ほら、この新聞に」

文々。新聞？ああ、この前のインタビューか、ん？これ、膨張や虚偽のことまで書かれてあるぞ！

「お前なら大丈夫だと思うが、もしかして、スペルカードもってないのか？」

「もってます……」

もう、どうにでもなれ……

ピチューン

「ん？」

「あーあ、つまんないの」

もう終わったのか!?あの⑨も力あったと思うが…

「ねえ、碓氷先生しようよ」

こうなったら、腹をくくるしかないか…

「……一回だけだ」

銃一つだけで吸血鬼相手にすんのか…

「頑張ってくれ」

その哀れみを含んだ目で見ないでください…

諏訪子様、神奈子様…この碓氷死地に参ります…

「先生、人間だから、ハンデあげる、1発でも当てたら勝ちでいいよ」

ぐー!どうする?ここにきてプライドが!

「……そ、それでや、や、や、ろう」

くそつ、俺のプライドが…こんなロリ容姿にハンデだなんて…だが、命には変えられない。1発当てればいいんだ。

「それじゃあ、いくよー」

俺の場合、逝くですが。

先手必勝！

「早撃 『クイックドロウ』！」

ダッダッダッダッダッダン！

「きゃっ！」

当たるか？残念当たらなかったようだ…精密をあげないと…バックの中からナイフと例のリストバンドがあつたのでそれも装備している。が、残りスペルカードは2つだ。はははははははは…はあ…

「すごい！楽しめそうだね！」

無邪気な笑顔は素晴らしいだろうが、今はただ、狂気しか感じない」

「こつちもいくよー、それ！」

「ぬあっ！」

なんという量！一つ一つ荒く出してるが量が多すぎる。仕方ねえ、飛ぶか。

ダッダッダッダッダッ

「ほらー!」

本当にホラーだよ!

くそつ、リロードする暇がねえ、このままじゃあ体力的にこっちが分が悪い。

――10分後――

「はあー、はあー…」

こっちはもう息が上がってなのに、あつちは全然余裕そうだ。残りスペルカード2つでどうするか…

「もう、飽きてきた…これで終わらせる…禁忌『フォーオブアカインド』」
「!?!」

分身しやがった! とりあえず、スペルカード宣言で弾幕が薄くなったのでリロードする。しょうがねえ、一気にカタをつける!

「欺刃『カッティングズレッド』」

「…? そんな遅いナイフ当たらないわ」

まあ、当たる気0だし。ナイフは簡単に避けられて後ろの壁に刺さる。

「そこからだぜ!」

俺はフランドールの周りを飛ぶ。

「!?!」

分身の1つが真つ二つになった。

種明かしをするとナイフには糸がついていて霊力を流すことによって、切断できるよ
うになる。これで、一気に!

「何かあるのね!」

本体は避けられたか、だが!

「弾痕『バレットホウル』!」

バンツバンツ!

「ふんつ、もうそんなのには引つかかるもんですか!」

2つの弾が避けられるが、俺は反転して歩く。

「!?!終わってないわよ!禁忌!きやつ!」

2つとも命中か…前回、説明した通り、弾痕「バレットホウル」は自動追跡をする。こ
れで俺のプライドも少しは救われたかな。

「……………」

「どうした？ フランドール」

「…………勝手にこととして怒ってる？」

ああ、そういうことか。うむ、彼女は寂しかったのか。それを紛らわすために弾幕ごっこをしてたのか。彼女は姉から監禁されてたと聞いている。こうして、負けた今また友人を無くすと思ってるのか。

「俺は別にそのことに怒ってはない、ただ1つやるべきことはあるだろうか？」
と俺はチルノの方を見た。

「おい、チルノ！」

「ん？ なんだー？」

「フランドールが話があるようだが」

「……………」

「どうした？ フラン？」

「…………あ、あなたのこと……………ば、馬鹿にしてごめん…………許してくれる…………？」

「なーに、言ってるの、あたいとあんたは友達だから許すに決まってんじゃん！」
「本当？」

「もちのろんよ！ねえ、みんな！」

「そうですよ！フランちゃんは友達です！」

「よろしくなのだー！」

「これからもよろしく、フランちゃん」

「よろしく、フランちゃん」

「みんな……」

うむ、友情というのは美しいもんだ……

「というわけで、今から授業だ！」

「えー!？」

「遊ぼうよ」

「もうさつき遊んだろ！今から楽しい和算教室だ！」

「楽しくないのだー」

「ほら、部屋に戻った、戻った」

なんやかんや言いながら楽しそうだ。

まあ、授業ではチルノは惜しみなく才能（⑨的な意味で）を發揮してくれ、ルーミア

は寝てしまう（靈力を込めたチョークを額に投げたが）。

他のみんな真面目に受けてくれる、いたって問題なく授業できてる。休み時間もみんな仲良しで微笑ましい。

「勇人」

「はい？」

「ありがとう、お前のおかげでフランは馴染めたようだ。私ではできなかったよ」

「いや、褒めるべきなのはまわりの娘達でしょう。あの娘達のおかげです、つてこらあ！

俺のカバンを凍らせるな！」

「やばっ、バレたぞ！逃げろー」

「はあ…まあ、いいか」

あとであいつらはチョークの刑だ。その前に、

「おらあー！」

「コンッ！」

「きやつー！」

「ガサガサ…ドサッ！」

「イテテ…何をするんですか！」

「ああ、あんたに用があつたんだ、あの新聞よく書かれてるよ…」

「そうでしょう、うまく脚色できたと思います…あ」

「そうかそうか、死ねい！」

スカアーン！

「痛い！チヨークなのにこの威力！でも、私のジャーナリスト魂は止まりません！早速、さっきのことを記事に！」

「待て！ゴラア！」

「幻想郷最速には勝てませんよ！」

「くそっ」

本当、速いな。あとでしばらくとして、今は授業をしますか。

こうして、俺の先生としての生活も始まった。

次の日の新聞には

「外来から来た男、碓氷今度は吸血鬼も倒す！幻想郷最強候補か!?!」
と書かれてた。

第14話 図書館に行った日の青年

「ふーん…面白い人間もいるものね…」

そう言う、彼女は見た目は非常に幼く見えるが、背中にある翼が人間ではないこと示している。

「そうでしょうか、ただの人間だと思えますが…」

最初、いなかったはずなのにいつの間にか、メイドの格好した女性が立っていた。そのことに、少女は驚かず、

「いいえ、この人間は霊夢以来の面白い人間だと思うわ…」

彼女の目線の先にはデカデカと書かれた、「幻想郷最強候補の碓氷勇人」と書かれた新聞があった。

「ふあ…」

俺は今寝起きだ。自分で早起きしている。昔の俺なら到底不可能なことだったろうが、今は違う。やはり、仕事を持つと変わるのか。

「あ、おはようございます」

「おう、おはよう」

早苗が朝食を準備していた。

「お！おはよう、勇人。あんた、最近自分で起きれるようになったんだねえ」

と諏訪子様が

「そりゃあ、仕事を持ってば変わるさ」

と神奈子様が

「おはようございます、諏訪子様、神奈子様」

いつもと変わらない朝だ。俺も守谷神社にすっかり慣れたな。独り暮らしをした方がいいんじゃないかと相談したが、早苗からものすごい剣幕で反対された。やはり、俺

はまだ弱い分類だろうか。でも、人里なら問題無いと思うが…

朝食を済ませ、学ランを着、道具を準備する。そして、両腕にはリストバンド、学ランの下には回転式拳銃とナイフ、ズボンには自動拳銃をつけて行く。あの新聞以降、襲ってくる妖怪が増えたからだ。迷惑この上ない、本当にあいつをはっ倒してやろうかと思うが、あいつ、逃げ足が速い。空を飛ぶスピードじゃあ、全然勝てない。

そんなこと考えてたら、準備が終わった。よし、行くか。

「いつてきます」

「あ！勇人さん！弁当忘れてます！」

「お！ごめん、ごめん」

「気をつけてくださいね」

「了解」

「朝っぱらか、夫婦みたいだねえ」

「なっ！」

「照れなくてもいいじゃないか」

「……いつてきます」

俺は恥ずかしさのあまり、逃げ出すように出発した。

「勇人さーん、もしもーし、聞こえてますかー？」

今、俺はこのパラッチに話しかけられている。

「……………」

「無視しないでくださいよう」

「……………」

こいつに下手に物事を言わない方がいい。

「そつちがそうくるのでしたら、捏造させていただきますよ」

俺は黙って拳銃を額に突きつけた。

「わ、わかりましたからあ、そんな物騒なものは下ろしてください、ね？」
だが、俺はおろさない。

「…今日のところは諦めます…」

うむ、それで良い。そして、永遠にくるな。

「おはようございます、慧音さん」

「おお、おはよう、勇人。今日もよろしく頼むぞ」

「もちろんです」

「あ、そうだ、今日はもう1人参加するかもしれん」

「へえ、どんな人ですか？」

「フランドールの友人らしい」

あ、あの娘にもすっかり友人がいたのか良かった、良かった…

「まあ、大丈夫ですよ」

「おはようございます」

「あー先生だ！おはよう！」

「おはようなのだ〜」

「「「おはようございます」」」

ん？見慣れない人が、つて慧音さんがいつてた人か。

外人さんながら長い金髪に、大きな黒い三角帽子、黒いドレスに白いエプロンと魔法使いのような格好している。基本的に幻想郷の格好は不思議だ。あ、でも俺の格好も少数派だから変か。

「ふーん…お前が例の…」

品定めをするように見ないでください。

「どうも、俺の名前は碓氷勇人、貴女は？」

「ん？私か？私の名前は霧雨魔理沙だけ。職業は魔法使いだ」

見たまんまだな。もう、こういうことに驚かなくなってきた。少々男っぽい口調だな。

「で、ここに何しに？」

「フランがここに面白い奴がいるって言ってたから見に来たんだぜ」

「さいですか…まあ、今から授業するからお前も受けたらいい」

「そうするぜ」

「長方形の面積の求め方を…チルノ」

「えーっと…そうだ！タテカケルヨコだ！」

「よし！正解だ」

うむ、チルノも分かってきたようだ…言い方が怪しいのは置いといて。

「じゃあ、この縦6センチ、横3センチの長方形の面積が分かる人…フランドール」

「18平方センチメートルです！」

「正解！」

フランドールは、吸収がとても速いな…大妖精も中々理解が速い。チルノとルーミア

は…まあ、全然ってわけではない。ミステイアとリグルもよく理解している。ミステイアは屋台経営しているせいか、少々数字に強いようだ。

「マジか!? フラン、そんなの分かるのか!」

「魔理沙さん、静かに、授業中だ」

「わ、わるい」

「よし、授業終了、休み時間だ」

「やったぞー!」

「おい、勇人」

「なんだ? 何か用でも?」

「さっきの授業なんだが…」

ははーん

「ほら、こつち来い、教えてやる」

「おお! ありがたいぜ!」

青年説明中……

「なるほど！」

「こんぐらい、余裕だ」

だって、小4の内容だ。

「むむ、少し悔しいな、でも、お前ただの人間だろう？」

「そりゃあ、そうだ。種族は人間、職業は先生だ」

「ふーん、じゃあ、弾幕ごっこはできないだろう？」

「違うよ、先生は私に勝ったよ」

「!? フランに勝ったのか!？」

「一応」

ハンデがあつたて言うのはプライドが……

「じゃあ、私と「ダメだ」ええー、いいじゃんか」

「今はそんな気分じゃない」

「ちえつ、じゃあどんな弾幕を撃つのかだけ見せてよ」

「嫌だ」

「もしかして、弱いから見せれないのじゃあ…」

…!!

「撃つただけぞ」

「そこなくっちゃ」

俺は回転式拳銃を取り出す。そして、

パン！

「これで満足か？」

「マジかよ…ものすごい速さだな…それはなんだ？」

「これは拳銃だ、改造されてるがな」

「少し見せてくれ！」

「ちやんと、返せよ」

「分かった、分かった。どれどれ…んー、私のミニ八卦炉とは仕組みが違うな…」

あー、こりゃ自分の世界に入ったな。しょうがない、持ってきた本でも読むか…

「よし、どうも、つてお前本が好きなのか？」

「まあ、好きだが」

「そうなの!?うちに本がたくさんある場所があるよ！」

「そうだけ、大きな図書館があるぜ」

お？それは興味あるな…

「うむ、今日の授業が終わったら連れて行ってくれないか？」

「いいよ！」

少し楽しみができたな。

「よし、今日の授業はこれで終わりだ」

「やっと終わったー」

「よし、みんなで遊ぼうー！」

「ごめん、チルノちゃん、今から私屋台の準備が」

「全然大丈夫だよー」

こうして見ると、人間と変わらなところもあるな。昔を思い出す…あ、昔から、俺人付き合手下手だった、グスツ。

「碓氷先生ー、うちに来るんでしょう？」

「おお、そうだった」

「お前、飛べるのか？」

「ああ」

「どうやって、飛べる様になっただぜ？」

「どうやってて…早苗に教えてもらった」

「ああ！お前が噂の守谷神社に最近住み始めた人間か！」

「そんなに噂なのか？」

「妖怪の中では少し有名だぞ」

「嬉しくないな」

「てか、お前外人だろ？ここに来てどんくらいだ？」

「うーん、1ヶ月過ぎたくらいか…な？」

「そんな短期間で、そこまで習得してんのかよ…」

「なんか言ったか？」

「いいや、よし早く図書館へ行こうぜ」

「行こう、行こう！」

「よし行きますか」

青年&少女移動中

「はあ…」

なんだここは、デカすぎだろ。

「ここが紅魔館だぜ」

「私の家だよー」

お嬢様でしたか、はい…

紅魔館と呼ばれているこの館は名前の通り真つ赤だ。ただ、窓が一つもない。ああ、吸血鬼は日の光に弱いからか…あれ？

「ブランドール、お前、日に当たって大丈夫なのか？」

「うん、パチュリーが魔法かけてくれたから！」

なんだろう、妙に説得力がある。

「あ！おかえりなさいませ、妹様」

「美鈴！ただいまー！」

誰だろうか、門番か？

「！…魔理沙さん、何の用ですか！」

「あー、今日は違うんだぜ」

と言うと俺の方を指した。

「えーつと、俺は碓氷勇人、一応教師をやっている」

「ああ！貴女が、いつも妹様から話を聞いています、今日は一体どのような用件で？」

「先生はねー、本を読みに来たんだよ！」

「図書館ですね、多分、パチユリー様ならお許しをくださると思いますけど…」

ん？なんだ、魔理沙の方を見て、

「貴女はダメです」

「は？いいだろ、今日は借りる気ないんだぜ」

彼女は前科もちのようだ。

「本当ですね？」

「安心しろ、今日は本当だ」

「…：分かりました、では、どうぞ…」

「先生、魔理沙！早く行こう！」

「分かった、分かったから落ち着こう」

俺はフランドールに案内されながら行くのだった。

青年&少女移動中……

「ここだよー」

「おお！」

広い！その辺の図書館よりはかなり大きい。本はいたるところにある。

「あら、フランじやないの」

「あ、パチュリー！」

あの娘がパチュリーと言う娘なのか。紫を基調としたパジャマみたいな服装をして

いる。ただ、病弱そうな面持ちだ。

「で、魔理沙と貴方は？」

「碓氷勇人だ。ここにある本を読ませて欲しいのだが」

「そう、貴方があの……汚したり、傷つけたりしなければ読んでもいいわ、魔理沙、貴女はダメよ」

「私は今日は借りに来たんじゃないぜ」

「返しにも来てないのでしよう」

「いつか、返すさ」

うーん、そのセリフを言う奴ほど返さないんだよな。俺の銃も危なかったのか。

まあ、そこは置いといて、

「少し本を探してくるよ」

「うん！」

「フラン、彼つてどんな人？」

ん？パチュリーが本以外に興味を持つとは。

「んー…強くて優しい人！かな？」

優しい？あいつはどちらかというと冷たい奴だと思うが。強さもよく分からないしな。フランの方がつよいだろう。

「そう…魔理沙、貴女はどう思う？」

「私か？無愛想で冷たい奴だな。だが、話を聞くとたった数日で飛べるようになったりとどこか、天才気質な感じがするぜ。頭でっかちな。まあ、霊夢に似ているかもな」

「数日で飛べる様に…」

「あと、自分で魔法道具みたいなのを作ってたぜ」

そう、あの銃は霊力を撃ち出せる様になっていた。他にも様々工夫が施されてた。あいつは本当に普通の人間か？

「……面白そうな人間ね」

ほう、珍しいこともあるんだな。本しか興味ないはずのパチュリーが人を面白そうなのと言うなんて。で、その『面白そうな人間』は何をしているのかな？

早速、本を読んでやがる。ちよつと近づいてみるか。

「おーい、勇人」

なんだ、こいつ返事しねえ。集中し過ぎだろ。何を読んでんだ？少し覗くか。

ペラッ、ペラッ、ペラッ、ペラッ

早っ！こいつ本当に読んでるのか？こっちは全く読む暇もない。

「ふうー、なかなか興味深かった、で、魔理沙は何の用だ？」

気づいてたのか。

「何読んでんのかなーって思っただけだぜ」

「ああ、これか」

えつと、これは靈力に関する本か。主に肉体強化のことが書かれてるな。

「もう、読んだのか？」

「ああ、多分そこに書いてあることはできるだろう」

「そうか、じゃあいくぞー！」

ちよつと、イタズラだ。後ろから本を頭に振り下ろす。

ゴンツッ！

「よし、上手く強化できてるようだ」

マジか…本当に習得してやがる…全然平気そうだ。

「魔理沙！本を傷つけないでちょうだい！」

「あ、ああ、すまない」

「ところで貴方」

「ん？」

「貴方、いつでもこここの図書館使ったもいいわよ」

「お！それはありがたい」

「何故なんだぜ！私は!？」

「別に彼は盗むわけでもないなら、構わないわ。本を大切に扱ってくれるだろうし。別

に借りてもいいわよ」

「いや、大丈夫だ、すぐに読めるから」

「そう、…やっぱり、おもしろいわね…」

「ん？なんか言ったか？」

「いいえ」

「美鈴に伝えておくから次回から来ても問題ないわ」

「本当にありがとう、じゃあ、今日のところはこれで」

私と勇人は図書館を後にした。

「さよなら！先生！」

「ああ、また明日、魔理沙もさよならだ」

「お、おう…」

彼は飛んで行った。あいつは謎が多いな。

「じゃあね！魔理沙」

「ああ、じゃあな、フラン」

私はそのまま博麗神社に向かうことにした。

少女移動中…

「霊夢ー」

「ん？何よこんな時間に」

「相変わらずだなー、お客だぞ？」

「お賽銭もくれないのにお客な訳ないじゃないの」

相変わらず、つれないんだぜ。

「で、何の用よ？」

「ああ、そうだな…」

私は碓氷勇人のことを話した。

「そう、で？」

「いや、聞いたことあるかなって」

「別がないわ。でも、彼は守谷神社に住んでるのでしょうか？多分いつか会うんじゃない？」

「そうか、神社ぐるみで会うかもな。」

「大丈夫よ、すぐに会うから」

急にスキマが現れた。

「何よ、紫」

「ちよつと、お知らせ、ここで彼の歓迎会でも開こうと思うわ」

「なんでよ、私と碓氷って人は関係ないじゃないの」

「そうだ、なぜわざわざ歓迎会なんてするんだぜ。」

「貴女は知らないでしょうけど、彼、妖怪の間では随分と有名人よ?」

あの新聞のせいだろ。確か天狗に勝ったとか、吸血鬼に勝ったとか。

「でね、歓迎会を機に紹介してあげようかと」

「なら、守谷神社でいいじゃないの」

「でも、食べ物とかお酒とか持つてくると思うけど…」

「いや、是非博麗神社でやらせてもらおうわ!」

すごい手のひら返しである。

「魔理沙も参加するでしょう」

「まあな、あいつと知り合いになったわけだし」

「ねえ、紫、そのこと守谷神社に伝えてるの?」

「この後、伝えるわ」

「碓氷勇人ねえ…」

こうして、本人が知らぬ間に歓迎会の話が進んでいくのだった……

第15話

勧誘された日の青年

「俺の歓迎会？」

「ええ、そうよ」

「ただいま、勧誘されてます。なんでも、俺の歓迎会をやりたいそうぞ。

「いやいや、わざわざ俺の歓迎会なんてしなくてもいいですよ」

「大丈夫よ、貴方、結構有名だから」

「くそっ！あの鴉のせいだな！」

「あら、何処へ行くの？」

「鴉退治に」

「少し落ち着きなさい」

「でも、どうして勇人さんの歓迎会を？」

「そっだよ、さすが早苗俺の聞きたいことをよく聞いてくれた。

「彼は幻想郷に受け入れられているわ。でもね…」

「何か問題が？」

「妖怪たちに受け入れられたわけじゃないわ。普通なら別に問題ないのだけれど、この前、

貴方が天狗や吸血鬼を倒したということが広まってね、妖怪と人間のパワーバランスが崩れるかもしれないと言われてるのよ」

「ああ、それで、俺がただの人間であることを示すんですね」

「違うわ、貴方はただの人間じゃないでしょう」

そうでした。じいちゃんは神様だったけ？力を受け継いでると言われた。確かに霊力はあるがそれだけだ、人間やめている感はない。

あれ…なんで紫さんはこれを…

「ええ、そうよ”神のお孫さん”」

「へアツ!? 貴女が…」

「貴方の祖父の友達よ、まあ、本当にあの人そっくりだわ」

確かにじいちゃんと同じくと言われたことはある。

「それはいいとして、歓迎会で貴方のことを妖怪たちに認めてもらわないといけないわ、そうしないと潰そうとする者が現れるわ。あの人との約束だからね貴方を見殺しにはできないわ」

「はあ…」

「というところで、貴方は主役なのだから強制参加で、貴女達はどうするのかしら?」

「私も行かせてもらいます!」

「そういえば、久々の宴会だねえ」

「久々に博麗神社に行くのもいいか」

「全員参加でいいかしら？」

「ああ、かまわないよ」

「それじゃあ、他のところも誘ってくるわ、じゃあね〜」

そう言うときスキマに消えてった。

「歓迎会って何するのでしょうか？」

「うーん、酒飲んだり、酒飲んだり…」

へいへい、酒しか飲んでないぞ。俺は未成年だから飲まんぞ。

「まあ、行ってみたら分かるさ」

まあ、二週間後にと言われたから大丈夫か。

「ねえ、パチユリー」

「何かしら、レミイ」

「最近、図書館に魔理沙以外の人間が来てるそうね」

「ああ、彼のことかしら、ええ、来てるわよ」

「珍しいわね、魔理沙以外の人間を、入れるなんて」

「別にいいじゃない、本を読むだけならかまわないのよ。まあ、ここにくる人間なんです
うそうにいないけど」

「それもそうね、そいつの名前は？」

「あら、貴女も珍しいじゃない、人間に興味持つなんて」

「そんな時もあるわよ。で、名前は？」

「確か、碓氷勇人と言ってたわ」

「碓氷…勇人…！」

「あら、知つてたのかしら」

「まあね、ますます面白そうな人間」

「貴女がその人間をどうしようかは知らないけど図書館で大騒ぎはしないでね」

「あら、別にその人間をどうしようかなんて言つてないわ」

「その顔をする時は決まつて何かするのよ貴女は」

「そう…あながち間違つてはいないわね…ところでその人間はいつ来てるのかしら」

「確か寺子屋で教師をしているから、その仕事が終わつてからね」

「ふーん、そういうえば最近フランが楽しそうなのをよく見かけるけど関係あるのかしら？」

「そうね、貴女がフランに外出を許可して最初はあんまり楽しそうじゃなかったけど、最近はやけに楽しそうね…早く寺子屋に行きたいからつて、私に日光対策の魔法を掛けるよう催促されるようになったわ。この前は彼と来たわね」

「ふーん…あのフランがねえ…その仕事が終わるのはどのぐらいかしら？」

「そうねえ、もう来てる時間だと思つて」

「あら、来てるのね…咲夜」

「はい、お嬢様」

「図書館に今、人間がいるだろうから紅茶を出してあげて。そして、3日後の私とのお茶

会に招待すると言っておいて」

「承知しました」

「何を企んでいるのかしら？」

「ちよつと、お茶会に誘うだけよ……」

「ふうー……ここは落ち着くなあ」

誰もいないから集中して、本を読めるし、次の授業も考えれる。もつとも、集中し過ぎて、あつという間に終わってしまったが。

「うむ、何か飲み物が欲しいな」

本を汚すなど言われているので飲み物を持ってくるのは気が引けて持って来ていない。

「はい、紅茶をどうぞ…」

「!?!」

い、いつの間に！ 気配を感じなかつたぞ！ 紅茶をくれた人を見ると、メイドのようだ。やはり、ここはそれなりに力を持っているのだろうか…それにしても、幻想郷は美人揃いだな。メイドさんもかなりの美人だ。ただ、機械のような無表情な顔をしており、無駄が全くない。まさに完璧と言うのだろうか。

「あ、ありがとうございます…」

そういえば、紅茶は飲んだことがない。親が生粋のコーヒー派なので俺もコーヒーしか飲まない。ああ、砂糖とミルクは入れない主義だ。

えっと、確か紅茶はまず匂いを楽しんでから飲むべきなんだっけ？

……柑橘の香りがするな、飲んでみるか

「…!」

「美味しい…」

意外と渋みが少ない、淹れ方が良いのだろうか。

「アールグレイと言う紅茶です」

へー、分からん。でも、美味しい。

「それと、お嬢様からの伝言です」

お嬢様？ ああ、フランドールの姉か。俺に用があるのか？ まさか、紫の言う通り、俺を潰そうと……！

「いつも妹様がお世話になっていきますので、そのお礼をしたくてお茶会に招待したい、と」

杞憂だったか。俺がお茶会ねえ、すごく滑稽だな。だが、断るのも悪いしなあ……

「いつあるのですか？」

「3日後にと」

ふむ、その日は寺子屋も休みだし、いいか。

「なら、大丈夫です、是非参加させてください」

「承知しました、それでは」

と彼女は消えた……消えた!? いつの間にかコップも無くなっている! 幽霊か?

「お嬢様、是非参加させてくださいとのことですよ」
「分かったわ、3日後が楽しみね…」

「ただいまー」

「あ、お帰りなさい」

「おー、おかえりー」

「今日はどうでしたか?」

「ああ、チルノがイタズラしたりと大変だったよ、でも、別にいつも通りかな」

「そうですか」

「あ」

「なんだい?」

「そういえば、紅魔館のお嬢さんからお茶会のお誘いを受けた」

「!?!」

「どうしてです!?!」

「いやあ、生徒にその妹さんがいてだな、そのついで今まで図書館を使わせて貰って「紅魔館に行つてたのですか!?!」アツハイ!?!」

「よく、食われてないね」

「姉の方は知らんが、少なくともフランドールはそんなに悪い娘でも無さそうだよ。少々気がふれるが。それでいつもお世話になってるからと言うわけでお誘いされた」

「で、そのお誘いは…」

「受けたが?」

「ダメですよ!?!どうして受けたんですか!?!」

「いやあ、断るのも悪いかなって」

「はあ…いつあるのですか？」

「3日後だが」

「3日後ですね。私も一緒に行きます！」

「え、でも…」

「でもじゃありません！」

「早苗は心配してんだよ」

「……！ 諏訪子様!？」

「はあ…問題あるのかなあ」

「本当に大丈夫なのかね…」

「私も行きますから」

「分かったよ…」

こうして、この日の夜は一悶着ありながらも過ぎるのであった…

第16話 お茶会の日の青年

「はい、それでは和算のテストを返すぞー、順番に來い」

「ふふ…あたいはきつとサイキョーだから大丈夫よ！」

そうであつてほしいものだ…

「まずは、大妖精…よく頑張つたな！」

「ああ…よかつた…」

94点

大妖精は安定の点数だ。授業もよく分かっている。他の教科も高得点だ。さすが、このクラスの良心だ…

「ミステイアも…よく頑張つたな！」

「やつたー！最高得点だ！」

89点

やはり、数字に強いなだけある。少しケアレミスが目立つが、しっかり理解している。

「リグルは…もう少し頑張ろうな」

「あ…はい…」

48点

リグルはさっぱりつて訳ではないのだろうが…勉強不足か？まあ、俺も数学以外はさっぱりだったので、人の事言えないな。

「フランドールは…素晴らしい！満点だ！」

「イエーイ！」

100点

うむ、彼女は算数に関して言えばとても理解できている。個人的にもっと先のところを教えるほどだ。他の教科もこんぐらい頑張つてほしいものだが…ん？俺か？人の事言えませんね…

「ルーミアは…分かっているのか？分かってないなら聞けよ？」

「そうなのかー」

18点

うむ、赤点だな。課題を出さなくては…どこが分かっているのだろうか？教えるのは難しいな…

「チルノは…お前も分からないのなら聞きなさい…」

「ん？あたいはサイキョーだから分かってるよ！」

9点

あはは……これで分かってるってか？9点で……どう教えたら良いのだろうか……
「とりあえず、2人には課題を出しておく」

「ええー」

「ええーじゃない、期限内に出さなかったらデコにチョークを投げるからな」
「……！分かった」

「よろしい、大妖精とかにも教えて貰いなさい……」

「大ちゃん、教えてー」

「大妖精、答えは教えるなよ？解き方を教えてやってくれ」

「分かりました」

んー、どうしたら分かってくれるだろうか……ここが分かりにくいのか？

「先生ー、確氷先生ー！」

「は！ど、どうした、フランドール？」

少し考え過ぎてたようだ。

「今日はお姉様からお茶会に誘われてるのでしょ？早くいこう！」

「そうだったな……悪いが先に行っててくれないか？少し用事があるのでな……」

「分かった、でも早く来てね！」

「了解、遅刻はしない主義だ」

まあ、用事つてのは早苗を待つ事なのだがな…2人で行って迷惑でわないだろうか…でも、早苗にしては珍しくものすごい剣幕で言われたからな…

「勇人さーん？あ、いました！」

「お、来たか、それじゃあ行くとするか」

「……」

「勇人さん？」

明日の授業は三角形の面積なのだが…このままで進めてもいいのだろうか。

「勇人さーん」

チルノとルーミアのためにも一回、四角形の面積の復習しとくべきか？

「ゆ・う・とさーん！」

「うおっ！ど、どうした？」

「どうした？じゃありませんよ…」

「すまん…」

「最近の勇人さんは授業のことを考え過ぎです。他の事にも目を向けましょう」

「そうだな、考え過ぎるのもよくないな。そういえば授業の事以外何もしてないな…運動不足になるのはよくないな」

「それでは今度少し幻想郷を見て回りましょう！」

「そういえば、俺、幻想郷に来てからと言うものの全然地理のこと理解してないからな。見て回るのもありかな」

「私が案内してあげますね！」

「ああ、頼むよ」

「お？話してたら着いたな。あそこに門番の美鈴さんが…寝てる…大丈夫かなあ…この門番は…勝手に入るのも悪いので起こすか。」

「美鈴さん、起きてくださいーい」

「だめだ、こりゃ。そういえば、フランドールから起こす方法教えて貰ったな。試してみるか。」

「すうー…さく「起きてますよー！」」

「効果は抜群だ！これはヒドイ…」

「つて、勇人さんじゃないですか！今日も図書館に用が？」

「いや、今日は違う。少しそっちのお嬢さんにお茶会のお誘いを受けてだな」

「お嬢様が人間をお誘いなさるなんて…そっちの早苗さんですか？」

「ああ」

「そうですか、では中に入ってください。多分、咲夜さんが案内すると思います」

「どうも、それじゃあサボらないように門番の仕事、頑張ってください」

「……!は、はい」

「本当にここに来てたんですね…」

「信じてなかったのか?」

「だって、吸血鬼を恐れない人間なんてそうそうにいませんよ…」

「そうか?」

「そうですよ」

「お待ちしておりました、勇人様」

「へアツ!あ、さ、咲夜さんでしたか…」

未だにこの人が急に現れることに慣れない。フランドールからはただの人間だっ
て聞いているが…:時間を止めれる時点でただの人間じゃないだろ…

「あら?早苗も来てるのね…」

「え、ええ。私も一緒にいいですか?」

「少し待ってなさい」

あ、また消えた。つて

「知ってんのか?」

「ええ、ここの人達とは顔を何回か合わせてますので」

「そうか、なら、ここの家主の事も知ってるのか？」

「レミリアさんのことですね」

少女説明中……

「中々やばい奴なのか……」

総じて我儘な奴と言ったところか。日光遮るために異変起こすのか……確かに吸血鬼は日光が弱点なんだろうけど……その霊夢って奴も中々やばそうだがな。魔理沙も関係したのか……

知らんことが多過ぎて今までしてきたことの恐ろしさがようやく分かったぜ。でも、図書館を使うのはやめる気全然無い。

「貴女もいとお嬢様がお許しをくださったわ」

「ありがとうございます」

はあ……。まただ。声には出さなかったがまた、びっくりした。いい加減慣れるよ、俺。

「では、こちらへ」

そういうえば、このメイドさんは空間もいじれるのだけ？ 確か、この紅魔館も広くしてあると。はは、チートだわ。

ただなあ、吸血鬼に時止めにと…なんだろうな、どうしてもあいつを連想してしまう
…wryyyyyyyyyy!

「では、ごゆっくり…」

は！いかんいかん。変な事考えてた。

「こんにちは、私の名はレミリア・スカーレットよ」

「ご丁寧に、俺の名は碓氷勇人だ。一応、教師をしている」

「知ってるわ、フランからいつも話を聞いているわ」

「それはどうも」

「噂通り、面白そうな人間ね…」

「?なんか言ったか？」

「いいえ、貴方のお陰でフランは楽しそうだわ、姉として感謝するわ」

「まあ、教師だからな、当たり前のことだ。何より楽しんでもらえてこちらがありがた

い」

「面白い人間ね」

「そうか?つまらない方だと思うが」

「そういえば、貴方、妖怪を倒したと…さらにはフランに弾幕ごっこで勝ったそうじゃない

い」

「……」

これは…殺気か？あの小さな体からとてつもない威圧感が。だが、俺も負けじと返す。

「レミリアさん！」

「あら、早苗もいたのね、ごめんなさい。少し噂が本当か調べたくてね」

「勇人さんに手は出させませんよ！」

早苗がここまで敵意を出すのは初めて見た。力強いな。さっきの言葉は。ただ、俺のプライドがあ…女性に守ってもらうような発言されるなんて、情けない。

「大丈夫よ、今回はお茶会のお誘いなのだから」

そう言う彼女の笑みはどこか不敵なものがあつた。

やはり、面白い。この確氷と言う人間は。私が普通の人間なら恐怖に陥るほどの妖気を出したのにもかかわらず、怯むどころか返してきた。いくら、威圧しても彼には効かないだろう。ますます気に入った。ただ、早苗だつかしら？守谷神社とか言うところの巫女だったからしらね。その娘まで来るのは計算外だったわ。でも、問題無いわ、霊夢なら話は別だけど、この娘ならどうにかできるわ。

ふふ…彼を配下にしたいわね…血も吸ってみたいわ…ふふ…

「紅茶でございます」

「あ、ありがとう」

うーん、お茶会とか初めてだからどうしたらいいのか分からん。早苗は普通に飲んでるが、飲んでいいのかわかるか？

「別に固くならないでいいわよ」

「いやあ、こういうのには慣れてないので…」

「すぐに慣れるわよ…」

なんだろう、嫌な感じがする。とりあえず、このクツキーでもたべるか。……美味しい、今までその辺で売ってたやつとは大違いだ。紅茶ともすごく合う。

「貴方はどうして幻想郷に？その格好じゃあ外界のひとでしょうか？」

「あー、分かります？まあ、実は色々あります…」

青年説明中…

「あら、大変だったのね」

「確かに寂しいこともあります、ここでの暮らしも悪く無いと思います」

「やはり、寂しかったのですね…」

「あ、大丈夫だぜ？早苗」

「ふふ……ところでお茶の味はいかがかしら？」

「美味しいですよ」

俺もそう思う。紅茶をよく飲まない俺ですらこれは美味しいと分かる。

「そうでしょう、うちの咲夜は完璧だから」

「ありがとうございます、お嬢様」

いたのか……急に出でこないで欲しい。

ん？腕に、違和感と思ったら、リストバンドつけてたな。あ、銃も学ランの内側に入ればなしだ……ありや、ナイフまで。これは失礼だろう。外すか。

「うーん……」

「早苗？どうした、ここで寝るのは行儀が悪いぞ……」

あれ？なんで、視界がボヤけてるんだ？疲れ溜まつてのんかなあ。だんだん、眠く……
バタツ

「寝たわね、咲夜」

「何でしょうか、早苗を客室の部屋に」

「承知しました、この青年はお嬢様が？」

「ええ、今夜は面白くなりそうだわ」

そう言う彼女は見た目に似合わぬ不敵なえみを見せるのだった。

第17話 紅き日の青年

「ん……ふああ……あれ？俺寝てしまったか？」

お茶会で寝てしまうとは……

相当、失礼なことだよな……どうしようか、謝った方が良いよな。

あれ？でも、早苗も寝てたよな。少々天然とはいえ、基本的にはしっかりしているから、寝るなんてしないはずだが……

そもそも、同時に寝てしまうなんてあるか？じゃあ、なぜそんなことに……

考えてもしょうがねえ、今の状況を整理しよう。ん？腕が自由に……

「!?」

どういうことだ？なんで、鎖で俺の腕は繋がれている？よく見たら、牢獄のような部屋じゃないか。

「は？は？」

なぜだ？意味が分からん。

そうだ、武器は？

「よかった……ある」

だが、余計に謎が深まるだけだ。

とりあえず、俺は監禁されている。しかし、武器は取られていない。

急に眠くなつて、寝たらここにいた。急に眠くなるには、薬を用いるか、なんかの術のどちらかだろう。疲労では、あり得ないな。毎日たつぷり7時間以上は寝ているからな。

術を使うといつても、そんなのがかけられた感覚はないし、第一にそんな怪しいことしている奴がいればすぐに気がつく。

ということなら、薬かな。でも、この場合は使われている可能性は1つだけだ。弁当は早苗が作ってくれたものだからあり得ない。となると、それ以外で口にしたのは…

「あのお菓子とお茶だけだよなあ」

これだと、犯人はレミリア確定ではないか。じゃあ、なぜだ？ワケワカメ。

「…とりあえず脱出するか…」

武器は取り上げられてないわけだから、どうにかなるでしょ。

「ん、はあ………は！」

私、何をしてたのでしょうか？ そういえば、急に眠たくなって…

「あれ!? 勇人さんは？」

どこにいったのでしょうか!?

とりあえず、ここは客室のようですが…部屋から出ましょう。

ガチャ

「あら早苗」

「あ! 咲夜さん」

「貴女、大丈夫かしら? 急に眠るもんですから、体調悪いんじゃない?」

「いいえ、私はいたって元気です。それより、勇人さんは?」

「ああ、彼ならまだお嬢様というわ、それより、貴女もう少し休みなさいな」

「大丈夫です、それより勇人さんの元へ…」

「今は2人で話したいそうよ」

「おかしいです。なんででしょうか…嫌でも私を勇人とレミリアさんの元へ行かせたくないようです。」

「咲夜さん、少しおかしいですよ。まるで、勇人さん達に会わせたくないじゃないですか」

「おかしくなんかないわ。私はいたって正常よ？貴女は少し寝てなさい」

「!!」

「気づくと彼女もう前に…」

「もう少し寝てなさい」

「これをここに通して……よし！」

今、脱出のために鎖を取ろうとしています。え？方法？ナイフだと切れ味が落ちてしまうので使いません。銃だと音がどうしても……だから、糸で切ろうとしています。

糸では切れないだろうって？大丈夫、霊力で強化してある。余裕よ、こんなの。

「せーの、ふんっ！」

よし、切れたな。あとはこの部屋をだが……扉は1つだけ、窓は無しと……

扉から出るしかないな。鍵は開いてないに……

ガチャ

開いてんのかよ。ホントに意味わからん。何がしたいんだね。あーもう、メンドくさい。

牢獄みたいな部屋から出ると廊下に出た。俺は銃を取り出しリロードしておく。

ああ、自動拳銃も持ってくるんだった。

廊下をしばらく歩くと他の扉とは明らかに違う少し大きめの扉があった。

「(トク)これは誰も……」

いるな。扉を開けた先には玉座に座った吸血鬼の姿が。目が紅く光っている。

「なあ、少し聞きたいのだが」

「ええ、かまわないわよ」

「なんだ、あの目は獲物を見つけたような目をしてやがる。」

「なんで、俺はあの部屋にいた？早苗はどこだ？」

「安心なさい、あの巫女にはあつちから攻撃してこない限り、危害は加えないわ」

と言うと、彼女は笑みを浮かべながら

「だって…目的は貴方ですもの」

「はあ、俺も人気者になったものだねえ」

俺は銃を構え

「早く出してくれよ、面倒ごことは嫌いなんだ」

「もう少し寝てなさい」

ガッ！

「!!」

「時間止めて、後ろから奇襲と言うのは定番ですよね」

「あら、防がれたわ…」

「さあ、答えてください！勇人さんはどこです！」

「お嬢様の命令で言わないように言われているの。あと、何もしてこなかったら、危害は与えないわ。でも、攻撃してくるのなら、迎撃してもかまわないと言われているわ」

「そうですか」

「そうよ、分ったなら帰りなさい」

「レミアアさんは勇人さんをどうするつもりなのですか」

「さあ、食料にするのじゃないかしら。彼は外界の人間だし、襲ってもなんの問題ないわ」

「大アリです！こうなれば力づくでも」

「あら、私と戦うのかしら？」

「そうです！」

確かに咲夜さんは強いですが、逃げ出すにはいけません！絶対に勇人さんを連れ戻します！

「いいわ、すぐに終わらせるわ」

「!!」

消えたと思ったら四方八方からナイフが！でも、慌てません！風によってナイフを吹き飛ばします。

「あら、これも防がれるとは」

「その技もう、知っていますので」

時を止めるキャラの攻撃と言ったらこれでしょう！

「ならこれはどうかしら？」

格闘戦ですか、得意では無いですが応戦するしかありません！

「はっ、はっ」

「くっ…くっ」

やはり、得意では無いせいか、少しずつ押されて…

「隙だらけよ」

「うぐっ!？」

「まだまだね」

「けほっ、けほっ、でも!」

私は負けれないのです!

パン!パン!パン!

「その位のスピードだと、避けるのは簡単よ?」

くそっ、吸血鬼は身体能力が高いと聞いてたが、ここまでとは…俺の撃つ弾が簡単に

避けられてしまう。

「こつちからもいくわよ」

「!?!」

な、なんだ?! あれは、槍のようだが、俺の思う槍より大きいぞ!

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

「しまっ」

速い! 避けられ…

ドゴーン!

「あら、もう終わり? 大したことなかったのね…」

「へえ、そうかい」

「! ！ ！ の間に後ろに…」

「射程距離内だ! 早撃『クイックドロウ』!」

バツバツバツバツバツバン!

「きやつ!」

「全弾命中!」

ふう、助かった…このリストバンドはフックとしても使えるのな…とつきに上に逃げ
て正解だった。

銃弾は弾幕ごっこ用ではなく、一応、殺傷能力が高くなるように、本来の銃弾同様高速回転させてある。さすがに吸血鬼の嬢ちゃんもキツイだろう。

さて、早苗を探しに…

「あら、どこに行くのかしら？」

「!?チィ！」

リロードしないと！

「そんなことさせないわ」

「残念だな！既にリロード済みだ！」

バツバツバツバツバン！

「同じ手は喰らわれないわよ」

「!？」

姿が蝙蝠となり、散り散りに…って、ぼーっとしてる場合じゃねえ！

「後ろよ」

「なっ！」

しまった、もう一回…

「ふんっ！」

ザシュッ！

「グワツ！」

左肩が挟られた！なんとか避けて、致命傷では無いが…血が止まらない！

「フフツ…やつぱりなかなか面白いわ！ますます貴方を気に入ったわ」

「そ、そうかい。でも、こっちは全然面白く無いのですがね！」

と強がってみるはものの、左肩から下にかけて感覚が無い。これでは戦いにくい…どうすつかない…

「はあ、はあ、はあ」

少々身体がきついです。でも、相手も同じなのでしょう。肩で息をしています。

「はあ、はあ、やるじゃない…はあ、でも次で最後よ！」

「ええ！次で最後です！」

とっておきの技を喰らわせてやりますよ！

「幻世『ザ・ワールド』！」

「奇跡『ミラクルフルーツ』！」

「やっぱり、どう考えてもそれ、D I Oのパクリじゃないですか！」

「知らないわよ！それよりも貴女のネーミングセンスの方がぶっ飛んでるわ！」

ドゴーン！

ドガン！

「うわっ！」

「どうしたかしら？もう終わりかしら？」

はあ、はあ、畜生…さつきから逃げることしかできねえ。牽制にと撃つものの、全く無意味だ。血が出すぎている…少々頭がふらつく、貧血か？どうすつか…打開策は…

「隠れても無駄よ」

ドガン！

「ガハッ」

吹き飛ばされた、意識が…

はっ！いかんいかん。あれ？銃は…

あ…もう！よりによって、あいつの近くに！この状態じゃあ近づけねえ…ナイフで頑張るしかないのか…

「もう、満身創痍ね…この際だから教えてあげる。私の能力は運命を操る程度の能力よ」
「へえ、そうかい。それで？」

「貴方は私の配下になるのだから知ってもらっただけよ…貴方は何か能力を持っているの

かしら？」

「生憎、持つてるか、どうかすら分かってないんだ」

そういえば、俺の能力はなんだろうか…じいちゃんはあると、言ってたが…ん？あの時の手紙に俺の血が鍵になるって言ってたな…

紫さんと戦った時、スキマを無視してナイフが紫さんを貫いたな…その時、確か…確かめる価値はあるな。

「今から宣言してやる！俺はこのナイフでお前を倒す！」

「そのナイフで？アツハツハ！頭でもトチ狂ったからしら？」

「残念だが、いたって正常。俺は本気だぜ！」

「面白いわ、やってみなさいよ…これを避けたらね」

また、あの槍か…だが、俺はこれに賭ける。ナイフには血が滴っている。

「おらあ！いつけー！」

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

サイズも威力もあの槍が上だろう。だが、俺の考えが正しければ勝算はある！

「もう、終わりね…」

ナイフと槍が衝突する…

ドガン！

「!?」

「よしー!」

やはり、間違つてはなかった! ナイフは宝石から光を放ちながら槍を貫いた。そして、そのまま彼女を貫いた。

「グフツ!」

「そのまましばらく再起不能になつてもらおう!」

貫通しただけではすぐに治つてしまふだろう。だから、

「ふんっ!」

「人間に負けるとでも!」

「ああ!これで終わりだ」

ナイフには糸がついている、そこにありつただけの霊力を流す。

「きやああ!」

「しばらく、寝てな」

体内に直接、霊力を流せばひとたまりもないだろう。それと、俺の霊力の性質が合わさるからな。

「ガハッ…」

「俺も能力を教えとくぜ、俺の能力は…」

彼女は目を見開いて倒れた。

「はあ、はあ、キツかった…ま、俺の能力が分かったしいいか。もう少し研究する必要があるが、これであながち間違つては無いだろう」

「それはいいとして…早苗を…」

ドゴーン！

「!？」

爆発音が…向こうからか…もしかして早苗が…急ごう！

「イタタタ…」

肩が痛い但我慢するしか無い。

ドゴーン…

「はあ、はあ…やつとこれでね、お嬢様のところへ…」

「まだです…」

「はあ、立つので精一杯じゃない。なぜそこまでするのかしら？別に死んだからって、貴女には問題無いじゃない」

「問題大アリです。だって…」

あれ？身体に力が…

「やつぱり、限界じゃない」

こんな時に、限界だなんて…

嫌です！勇人さんを助けないと…

ガバッ

誰でしょうか？倒れそうな私を抱えてくれます…

「お疲れ、早苗。後は俺に任せろ」

「勇……人さん！」

「!? お、お嬢様は？」

「向こうでぐっすり眠ってるさ、それより、もう帰っていいかな？」

「ゆ、許しません！」

「はあ……俺も疲れてんだ」

お嬢様が負けたとでもいうのかしらこの人間は。たかが、人間にお嬢様が負けるわけがないじゃない！

銃を構えたところで無駄よ。私は時を止めれる。こいつを仕留めて、お嬢様の仇をうたないと……

「お前もしばらく寝とけ」

「パアン！」

「無駄よ」

周りの時間が止まる。これで……

「ビシッ！」

「え!?!」

なんで……他は止まっているのに……弾だけ動くの……

「バタッ」

「フウ……」

急に咲夜が倒れたようにみえたが、時でも止めたのだろう。だが、俺も能力には目覚めてんだ。残念だが意味がないのだよ。

「帰るか……」

早苗は寝てしまったようだ。本当に申し訳ない。忠告をきちんと聞くべきだったな。

帰ったらしっかり謝ろう……

そう言いながら、胸の中で眠る早苗を抱えながら、守谷神社にむかうのだった。

第18話

宴会の日の青年

「はあ、はあ、はあ……」

あれ？こんなに守谷神社で遠かったつけ？霊力は空を飛んでる途中で尽きてしまった。だから、歩いているのだが……

「はあ、はあ、人里によればよかったかな……でも、もうここからなら、守谷神社の方が近いよな……」

遠ーい、遠すぎる。くそ、早苗は思ったよりも軽いが、さすがに背負って山を登るのはきつい。左肩にいたってはもう動かないし、感覚もない。

「ふう、ふう……」

「ん？誰でしょう？」

また侵入者でしょうか……よく見てみましょう。

「……あ、あれは勇人さんと早苗さん！」

何があつたのでしょうか？早苗さんは気を失っているようです。勇人さんが背負っています、その彼は左肩に大きな傷が、足もおぼついています。

「助けに行かないと！」

「はあ、はあ…遠い！遠すぎるぞ！」

文句を言っても距離は縮まらない。だが、身体ははつきり言つて限界だ。

「勇人さん！」

「あ？ああ、椀か…丁度いいところに…早苗を神社まで運んでやってくれ…」

「勇人さんも怪我してるじゃないですか!?!」

「いいから…早く…」

バタッ

「勇人さん！勇人さん！」

「ん…はっ！ゆ、勇人さんは！」

「あ！早苗！目覚めたのかい！」

「諏訪子様！ゆ、勇人さんは？」

「ああ、彼なら安心しな、神奈子が永遠亭に連れてつてたから。それより何があったんだ？」

「よかった…無事なのです…えっと…この事です…」

少女説明中……

「そうか…あのロリ吸血鬼め…これは戦争だね…」

「ちよつと、落ち着いてください！」

「落ち着けるものか！こうなったら、紅魔館と守谷神社との戦争だよ！全力で潰してやる！」

「そ、それはダメですよ！」

「それより、どうやってここまで？」

「ああ、それは権が運んできたんだよ。山の中で見つけたらしい」

「あれ？確か…私はあの時、気絶して…」

「どうやら、山までは勇人が背負って来たらしい」

「勇人さんは大丈夫なのですか？」

「左肩を大きく損傷、いたるところにも怪我をしている。霊力もほとんど使い果たしていたが、命には問題無いようだよ」

「そうですか…大怪我だったのに…私をここまで運んで…」

「権にも感謝するべきだろうが、とりあえず勇人に感謝しに行きな」

「は、はい！」

急いで、永遠亭に行きましよう！

「あ！権さん！」

「早苗さん！身体は大丈夫ですか？」

「おかげさまで、大丈夫です。権さんが連れて来てくれたのでしょう？ありがとうございます」

「いいよ、いいよ。それより、勇人さんに言うべきでしょ？」

「椛さんに助けてもらったのも事実です。本当にありがとうございます」

「今はお礼はできませんがいつか必ず、お礼、させていただきますね」

「別に、いいのに：ほら、勇人さんに会いに行くのでしょうか？早く行ってあげなさいよ」
「そうさせてもらいます」

少女移動中……

「あ！永琳さん！」

「あら、早苗じゃない、彼に会いに来たのかしら？」

「はい、今、会えますか？」

「今、彼は寝ているから静かにね」

「はい！」

「スー…スー」

「勇人さん…」

肩に包帯が巻かれています…私より酷い怪我だったのに…

「…ヒグツ、ごめんなさい…」

涙が止まりません。彼が汚れてしまいます。

…ん、頭に何か

「勇人さん？」

「ああ、無事なようだ。どうした？泣いたりなんかして」

「うっ…ウワアアアーン！」

「お、おい…大丈夫か？」

何故でしょうか、涙が止まりません。

「すまなかつたな…」

彼は私を優しく抱きしめてくれました。

「…もう大丈夫か？」

「は、はい。大丈夫です…」

あれから、しばらく泣いていました。ちよつと、恥ずかしいです。でも、言わないといけないことが、

「ありがとう」

「ん？それは、こっちのセリフだ。忠告も聞かずに行った結果だ。お前は俺を守ろうとしてくれたんだろう？本当にありがとう」

「……／＼、そ、そんなことよりも、怪我は大丈夫なのですか？」

「うーん、分かんないな……」

「安心なさい、3日もすれば、退院していいわよ。別にすぐに直す方法もあるけど」

「い、いや、結構です。3日間安静にしておきます……」

「そう、ならしつかり療養しなさい」

「ありがとうございます」

「ふう、3日間か……寺子屋、どうすつかな……」

「それなら、私が伝えておきます」

「ありがとう」

「いえ、大丈夫です」

入院生活か……3日間だけだが、暇だなあ……

と思つてた時期も私にはありました。

慧音さんがわざわざ見舞いに来てくれた。本当にありがたい。寺子屋のクラスたちも見舞いに来てくれた。相変わらずのようで良かった。

ただ、フランドールに本当のことを言うのはやめておいた。いざこざが起こるのは良くない。

まあ、チルノ達が賑やかにしてくれたし、暇じゃなくて良かった、良かった。

つと、3日間はあるという間に過ぎて、普通の生活に戻れた。完治というわけではないが生活するには問題無い。

授業も平常通り行え、守谷神社でもいつもの生活に戻った。

「平常って、いいなあ」

「あら、良かったじゃないの」

「ああ、紫さんですか」

「もう、驚かないのね」

「ええ、慣れてしまいました」

「そう、で明日のことなんだけど…」

「ああ、歓迎会でしたっけ？別に問題無く参加できますよ」

「そのことじゃないわ、招待しているメンバーに紅魔館の人達もいるのだけど…」

「別に問題無いんじゃないんですか？」

「あら、てつきり、拒否するものかと」

「これを機にしつかりお話できますし、相手も下手に出れないでしょう」

「それもそうね」

「それと…」

「何でしょうか」

「貴方…自分の能力分かったみたいじゃないの」

「ええ、分かりましたよ」

「どんな能力かしら？」

「それは歓迎会にて言いますのでそれまでは内緒です」

「あら、残念ね」

「で、用事はそれだけですか？」

「ええ、そうよ、それじゃあ」

スキマに消えてってしまった。

「つかめない人だなあ、あつ、人じゃないか。H A H A H A H A …」

「どうかしたのかね、あの子は…」

「少し頭打ったんじゃないのか？」

「はー…ようやく終わった…」

今日は久々に授業やったが…まあ、変わらずと言ったところか。

そうだ、今日は俺の歓迎会があるんだった。さっさと帰って準備するか…

「勇人」

「はい、どうしましたか？」

「今日、お前の歓迎会があるのだろう？」

「ええ、慧音さんも参加するんですか？」

「ああ、参加させてもらおうよ」

「そういえば、結構な頻度で宴会があっていると聞いたんですが…」

何でも、どんちゃん騒ぎでとても大変だそうだ。まあ、歓迎会でそんなことになる

は思わないが、

「ああ、あつてたな。ただ、最近はまだやめてないな」

「そうですか」

「ところで、お前はお酒飲めるのか？」

「え？ 飲んだことすら無いですよ。そもそも、未成年なので飲んではいけません」

「飲んだことがないのか!? そうか… 今回を機に飲めるようになった方がいいぞ」

「はあ」

慧音さんも変なこと言うんだなあ。未成年はお酒はダメなはずなのに…

「もう帰るのだろうか？ また今夜会おう」

「はい」

そう言い、寺子屋を後にした。

「博麗神社であるんだよな」

「ええ、そうですが、緊張しているのですか？」

「え、い、いや、き、緊張なんかしてないさ」

「すいません、緊張しています。元々人の前に立つのは苦手だ。ましてや、話すなんてああ、心臓が飛び出そうだ……」

「大丈夫ですよ、きつとみんな歓迎してくれますよ」

「ああ、そうだな」

「酒だー！酒をよこせー！」

「あ！この料理食べたの誰よ！」

「ワ、キヤー、ギヤー、ガチャン／＼」

「何じゃ、こりゃ」

宴会じゃあねえか。外界の宴会より酷いんじゃないのか？人と妖怪が入り混じって、

大騒ぎだ。

あ、魔理沙だ。てか、酒飲んでるぞ！あいつも未成年だろう？早苗は……うわつ、絡まれてる。ああ、無理矢理飲まされて……潰れてしまったようだ。

「逃げよう」

「どこに行くのかしら？」

「あ、いや……その……ちよつと……」

「主役がないといけないでしょ？」

「いや、俺の存在無視されてるから、別にいいかと……」

「ダメよ、私に任せなさい」

や、やめてくれえ、死地に向かいたくない……

「みなさーん、こちらに集中して」

と紫さんが言うが、

?ガヤ、ガヤ……／

聞く気、ナツシングですか、そうですか。

「あら、ダメね。勇人、貴方がどうにかしなさい」

「えええー……」

しょうがない、腹を括るしかない。

銃を取り出してつと…音を鳴らすように靈力を込めて…空に向けて…

バアン！ バアン！ バアン！

3発鳴らすと、ああ、うるせー。ただ、効果はあつた様だ。みんな静かになつて、こつちを見ている…や、やばい、き、緊張してきた…

「はーい、みなさーん、こちらが例の外来人の」

「う、確氷、ゆ、勇人です！ よろしくお願ひします！」

?よろしくー!／

よ、良かった、どうにかなつたぞ。と言うことでおさらばさせ…

「へー、君がああ噂の…」

あ、絡まれた…何だ?見た目は完全に小さな女の子だが、頭に生えている2つの角が人間ではないことを教えている。

う、酒臭え、相当飲んでるな。

「君も酒を飲みなよ」

「え、いや、結構です」

「んあー?私の酒が飲めねえのか?」

典型的な酔っ払いのセリフですね。

「一杯だけですよ…ん、ゴクツ、ゴクツ、ふ…」

「おお！いい飲みっぷりだねえ」

味はよく分からん。これでいいだろう。

「ほら、もう一杯」

「いや、いいです！」

「ああ!?!飲みなさいよ！」

むむ、どうするか…

「なら、賭けでもしましょう！」

「賭けだあー？」

「ええ、では、このナイフをあの木に刺しますので抜けた方が勝ちとしましょう」

「ああ、いいだろう！もし私が勝ったらどうするんだい？」

「貴女が飽きるまでお酒につきあいます、俺が勝ったら貴女のお酒は飲まない。どうでしょう？」

「ああ！鬼の力、舐めんなよ！」

あ、鬼でしたか。そりゃ、力に自慢があると…ま、負ける気しないが。

「刺しましたよー」

「よし、こんなのに終わるな…勇人とか言う奴、飲む準備でもしとけよ！」

周りもこちらに注目し始めたな…

「こんなの片手で…ふんっ…つて、あれ？」

ふふ…抜けるわけがない。ちよいと、ナイフに小細工をした。いくら、力があっても抜けない。

「ぐぬぬ…」

「おい、鬼の力でも抜けないぞ」

「ギブですか？」

「まだだ…ぐぬぬ…何だ？これ、ビクともしないじゃないか」

「変わってくれますか？」

「ああ、お前で抜けんのか？」

「ほい」

スッ

「!!」

「私の勝ちですね」

「は、ど、どうして…」

「ちよつと、このナイフに細工を…」

「小細工で取れるわけがない！」

「まあ、細工というよりか、能力を使わせてもらいました、ちようどいいです。俺の能力

を教えましょう。俺の能力は…」

「物事を不変にする程度の能力です！」

ふふ…決まった。

「な、何だ？その能力？」

「ありや、分かりやすいと思うのだが、まあいい、これまで調べてきたことを教えてやる。」

「まあ、詳しく言うと、物体に俺の血をつけることで、物体を不変化させます。具体的に不変化された物は絶対に壊れませんし、傷がついたり、変形したりすることもありません。また、その物が何かの動きも不変化できます。さつき、ナイフが動かなかったのは、俺がこっそり血をつけて、ナイフがあつた木に留まることを不変化したからです。この不変化の効果は、次元や時間からも干渉されることは無いです！つまり！不変化した物に対し前に飛んでいくことを不変化させれば、次元を変えようが、時間を止めようが、衝撃を与えようが、この次元において、物が前に進む事を止めることはできません！あ、生物に対しては能力は発動しません」

ふうー、長い。これで、理解してくれたかな？

「なるほど、それで…」

紫さんは納得してくれたようです。

「んー、まあ……とりあえず、この会を楽しみましょう！」

「？ワー！、キヤー！／＼」

「ふうー、これでも俺は帰っても「ダメよ」ア、ハイ……」

「とりあえず貴方、お酒を貰って回りなさい」

「はい……」

「どこから、まわろう……」

「先生……」

「え？フランドールじゃないか？」

「先生、こつち来てー！」

「お？レミリアに咲夜さんにパチユリーさんにと……紅魔組ですか……」

「ああ、この前はどうも」

「え、ええ」

「ふふ……この前のことで随分と焦ってるな。」

「ほい、これ」

「え？あ、ありがとう」

と俺は赤い液体の入った試験管を渡した。

「それで、これからは、俺を襲うなんてことはもうしないでくれ。フランドールのこともあるからな。その量でじゅうぶんだろう。」

「あの事はいいの？」

「許した訳ではないが、いつまでも引きずるのは良くないからな、チャラにしよう。これからも、お茶会に誘ってくれ、襲うのは無しだ。いいな？」

「え、ええ、いいでしょう」

「フ、フフフ…」

「な、パチエ！何が面白いのよ！」

「べ、別に…フフフ…」

「先生も飲もうよ！」

「あ、ああ」

そうか、俺よりもずっと年上だった。そりゃ、お酒も飲めるよな。ただ、犯罪の匂いしかしねえ。

「咲夜、彼にもワインを」

「承知しました、勇人さんどうぞ」

「あ、どうも…」

は、初めてだな、ワインって美味しいのか？

「…ん、ゴクツ」

わ、分からん…

「ありがとう、次に行ってくる、それでは」

「あ！永琳さん！」

「勇人じゃない」

「へえ、彼がねえ、どうも私の名前は蓬莱山輝夜よ」

「姫、彼に興味でも？」

「ええ、だって不変をあやつるのでしょう？私達みたいじゃない」

「まあ、そうですねえ」

「へ？」

「言ったことが無かったかしら？私たちは蓬莱人といって、不老不死なのよ」

「は、初耳です…」

「いつか、永遠亭に来なさいよ」

「いや、既に何回か…」

「患者としてではなく、客としてよ」

「あ、ハイ…」

「とりあえず、飲みなさい、紫から飲んで回ってこいとか言われているのでしょー?」
本日、三杯目のお酒を飲むのだった…

第19話

続・宴会の日の青年

さて、未成年飲酒禁止法を存分に破ったところ（良い子のみんなは真似するなよ！）で「おい、勇人！」

声をかけられた、次は誰かね…

「慧音さん!？」

「こつちに来い、一緒に飲もう」

酔ってるのかな？意外だなあ。普段はしっかり者なのだが、今は頬を赤く染めすつかり出来上がっている模様。

あと、一緒にいる娘は誰だろう？とても長い白髪に、モンペのようなズボンを履いている。

「それじゃあ、失礼します」

「ほら、どんどん飲め」

「あ、ありがとうございます…」

本日、四杯目。まだ、大丈夫の様だ。自分が酒に強いかどうかは分かってないので慎

重に飲みたいのだが…

「はい」

「あ、ありがとうございます…」

少し勧め過ぎやせんかね…

「慧音、こいつが例のか？」

「んあ？そうだよ。いつも世話になっている。本当にありがたいよ」

「へえ、私は学問に関してはどうさっぱりだから…あ、自己紹介もせず、喋ってし

まった様だ。私は藤原妹紅。よろしく」

「碓氷勇人です…よろしくお願ひします」

サバサバした人だ。そういえば、輝夜という名前に藤原…そして、不死身…まるで、竹

取物語みたいだな…ああ、国語の授業で冒頭部分を覚えさせられてたつけ…

「君は、物事を不変にする程度の能力」なんだろう？少し私の能力と似てるな」

「妹紅さんは？」

「私は、”老いる事も死ぬ事も無い程度の能力”だ。要するに不老不死つといったところだ」

ろだ」

「妹紅さんですか」

「私もって、ああ、あいつに会ったのか…」

「?」

「いや、何でもない。それよりもさん付けで呼ばないでくれ、呼び捨てでいい、あと敬語もなしだ」

「はあ、了解」

「妹紅、勇人だはな…すぐく頭がいいんだぞ！私の知らない数式をたくさん知っている。そして、強い。中々いい男だろ?」

「はいはい、確かに頭は良さそうだが、強いのか?」

「下級妖怪よりは強いと思うぞ」

自信持って言えるな。あ?情けないだと?ここの世界が少々おかし過ぎるのだよ。

「それでは、他のところも回って来ます」

「おう、いつかまた会おう」

「また、明日ー」

珍しい物が見れたな。慧音さんはかなり酔っ払うタイプだとは…ギャップがすごい。
「まだ、酔いはきてないなああああ!」

足元が!?

ドスンッ!

「いって…急に」

「あら、お取り込み中だったかしら？」

「紫さんと誰です？」

何人いる？1……2……3……な、なんだ？あのふわふわしたものは？

「ふむ、これが例の……」

「本当にそっくりね……」

「……」

そんな、ジロジロ見ないでください。恥ずかしいです。

「私の名前は八雲藍だ。紫様の式だ」

うわあ……すごい尻尾だあ。モフモフしてみたい……じゃないじゃない

「私は西行寺幽々子よ。よろしくね」

フワフワした人だなあ。おっとりという言葉が似合う。

「魂魄妖夢です。幽々子様に使っています」

俺的には彼女よりも、その近くにある魂みたいなのがすっごい気になる。

「ど、どうも……みなさんはもう知ってらっしゃると思いますが、もう一度自己紹介させてもらいます。名前は碓氷勇人、一応、教師をしています」

「ほう、何を教えているんだ？」

「和算を」

「和算か、私も得意だ。そうか、いくつか問題を出そう」
「え？あ、いいですけど…」

少女出題中・青年回答中……

「全部正解とは…やるな」

「ま、まあ、教師やってるので…」

あの問題はメネラウスの定理とかチェバの定理ですぐだったからなあ。

「ねえ、紫」

「何かしら？幽々子？」

「本当にあの人の孫なのよね…」

「ええ、そうよ」

「あの人が若返ったのかと思ったわ…」

「確かに瓜二つだからねえ…」

そこまで似てんすか…

「で、何の用で？」

「あら、お酒を一緒に飲もうと思っただけよ」

「あ、はい」

「はい、どうぞ」

「ど、どうも」

本日、六杯目。まだ、セーフの様だ。

「ところで幽々子さんの種族は？」

「私はね、亡霊なのよ」

へへ、亡霊かあ。あれ？あんまり驚いてない!?慣れてしまったのかなあ。

「妖夢と白玉楼に住んでいるのだけど、今度来てみない？」

「幽々子？」

「大丈夫よ、死に誘うわけじゃないわ、純粹に誘ってるだけよ」

ワッツ!?死に誘うって…やっぱ、やばいぜ…

「なんなら、妖夢に修行させてもらったら？」

「いや…霊力の修行ならしっかりしましたので、大丈夫です」

「なら、剣術なんてどう？妖夢は私の剣術の指南役もしているのよ」

「へえ、剣術ですか…でも、俺には銃がありますし」

「…!」

な、なんだろう…あの妖夢って娘からすごい睨まれてる…

「あら、そう…剣と銃ならどちらが強いと思う？」

「そりゃあ…銃でしょう。剣より遠くから攻撃できますし」

「剣に決まっています！銃なんかでは人間ならともかく妖怪相手じゃ通じません！」
「お、おう、そ、そうだな…」

「あ、すいません…」

驚いたなあ、急に出て来たな、あの妖夢って娘は…

「でも、白玉楼に行ってみるのも悪くはないですね」

「そうでしよう、いつか来なさいな」

「はい」

「それじゃあ、他のところも回って来なさい」

「ふえ？」

ウアアアアアアア！

「イタタ…急にスキマに落とすのはやめて欲しいな…」

「お？ 勇人じゃん！」

「あ、諏訪子様に神奈子様、それと…」

「いやー、久し振りですね！ 勇人さん！ 今、この御二方に紅魔館での貴方の話を聞いていたのですが、本人からは非聞かせてください！」

「断る」

「そういわずに…」

カチャ

「わ、分かりましたよ、だ、だから、その物騒な物仕舞いましょう、ね？」

「分かればよろしい」

「そんなことより、勇人も飲め飲め」

「あ、どうも…」

本日、七杯目。未だに酒の良さが分かっていない。

「ところで、勇人」

「何でしょうか？」

「早苗とはどうだい？」

「…!？」

「そんな驚かなくていいじゃないか、で、どうなんだい？」

「い、いつも通り、仲良くさせてもらってます！」

「ありや、まだ付き合っていないのかい、あんたも案外ヘタレだねえ」

「何を言っているんですか!？」

「ほら、向こうで早苗達がいるから、行きなさい」

「はい、行って来ますよ…」

「あ！勇人さんじゃないれすか？」

「うお!! 早苗飲み過ぎじゃないか！」

少々、呂律が回ってないぞ！

「お！勇人か！お前も一緒に飲もうぜ！」

「魔理沙！お前も中々飲んでるな…」

「あら、貴方が噂の」

「ん？ああ、初めてだな。俺の名前は碓氷勇人、教師をやってる」

「どうも、博麗霊夢よ。見ての通り巫女よ」

ふと思ったのだが、ここら辺の巫女は脇を出すような服なのか？

「あ、咲夜さんもいるんですね」

「ええ、この前は悪かったわね…」

「もう、チャラと言ったので気にしなくても構いません」

「むく、勇人さん、他の人と話ひ過ぎです！」

「ぬおっ！抱き着くな！」

「いいじゃないれすか！」

「お!!こりゃあ、熱いねえ」

そんなこと言わないで助けてください。ほら、こう、あ、当たってるのですよ！俺も

男ですよ！確かに、これまで女の子と積極的に関わらなかつたけど……って違う違う！

「早苗！一回落ち着こうな！な？」

「勇人さんも飲みますか？」

「の、飲むから、ほら、どいてくれないと飲めないだろう？」

「む、霊夢さん！お酒ください！」

「はいよ、早苗」

「グビツ、グビツ……」

「ええ……」

結局、貴女が飲むのね……

ガツ！

「な!?!」

なんで顔を掴んで……

「……!?!」

なんで、早苗の顔が近くに!?!

唇に柔らかい感触が……ん？口の中に酒が流れ込んでくる……

あれえ、俺、もしかして、口移しでお酒飲まされて……あれ？これってキスじゃないデ

スカネ……アラ、アタマガボーツトシテ……

ボフツ!

「あれえ、勇人さん、寝ちやったのですかー?」

「アハハ! 勇人、気絶してやんの! アハハ!」

「本当にこいつ、強いのかしら?」

「意外にウブなのね…」

こうして、宴会は終わりを告げた。

第20話 平日の青年

「…ん…ふあ…あ、頭が…飲み過ぎましたね…」

頭がガンガンします。どうにも、私はお酒に弱く、すぐに酔っ払ってしまうようです。それにしても、この抱き枕、暖かいですね…また、眠く…

「え？…」

博麗神社に抱き枕？そんなのあるわけ無いじゃないですか。ただでさえ、金欠だと聞いているのに…

「…スー…スー…」

「ゆ、勇人さん!？」

ど、どうして、ゆ、勇人さん?!?も、もしかして…

「あら、早苗、起きたのね」

「れ、霊夢さん!き、昨日は何が…」

「…覚えてないのね、まあ、昨日はあんたいつもより、酔っ払ってたからね…」

「そうだけ、なかなかお熱かつたぜ、な?」

「魔理沙…まだ、帰ってないの…確かに熱かつたわ。ホント、他所でやって貰いたいわ」

「え、ええ？ 一体、私は何を…」

「ハハ！ 昨日お前ら、堂々とキスしてたぞ！」

「き、キス!?!」

「ああ、そうさ。お前の方からな。まさか、お酒を口移しで飲ませるとは…」

ど、どうしましょう！ は、初めてのキスがゆ、勇人さんなんて…

い、いや、別に嫌ではなく、寧ろ… で、でも、勇人さんも多分、ふあ、ファーストキスですよね！ こ、これは…

「ん…ふああ…体が痛い…」

「あら、起きたのね」

「あれ？ なんでここで寝て…」

「あら、あの時のことを覚えてないの？」

「…？ なんの話だ？」

「え、昨日…「なな、ナンデモナイデスヨー！」

「そ、そうか」

「貴方は二日酔いしてないの？」

「ん？ 全然大丈夫だが？」

そういえば、七杯飲んだはずだが、全くそういうのは無いな。寧ろ、布団もひかずに

寝たせいで体が痛い…でも、寒くは無かった気が…まあ、いいか…

「そういえば、今何時だ？」

「んー、お昼前ぐらいかしら？」

「何!?! 授業始まってしまつてんじやんか! ちょっと、片付けは手伝えない、すまん！」

「あら、行つちやつたわね」

「あいつ、飛ぶの速いなー」

「お、覚えてないようですね…」

良かったのですが、なんだか、残念な気がします。

「あら、そういえば、慧音から明日は休みだと伝えてくれと言われたわね…」

「え?！」

「ウオオオオオオ！完全に遅刻じゃあねえかああ！」

只今、人生で一番早く飛んでいます。もう、霊力使い果たしそうな勢いで。

「みんな！遅れすまない！って、アルエ？」

「だーれもない。どういふこと？理解不能、理解不能……」

「も、もしかして……もう、終わったのか？」

「や、やってしまった……ああ、俺も慧音さんの頭突きを喰らってしまうのか……」

「おや？勇人じゃないか」

「あ……け、慧音さん……」

「終わった……」

「す、すいませんでしたあああああ！」

「な、何だね、急に！」

「え？だって、授業に遅れるどころか……終わったって……」

「何を言ってるんだ？今日は休みだぞ？霊夢から聞いてないのか？」

「いや……」

「まったく……あの巫女は……すまない、直接伝えるべきだったな、さすがに宴会の次の日に

授業はキツイだろうから、今日は休みだ、ゆつくりしなさい」

「は、はい……」

もう、ゆつくりできてない……

「そうだ、これを機にこの里を見て回るがいい」

「そうさせて貰います」

たまには、ゆつくり出掛けるのも悪くない。

只今、片付けをしております。宴会がある度にここは散らかるので、いつも、私と霊夢さんと魔理沙さんで片付けをしています。今回は咲夜さんも手伝ってくれます。

この前の事は、もう和解しました。勇人さんが許したのなら、私がグダグダ言っても仕方ないです。

「今回も結局大騒ぎでしたね」

「そうね、久々にやったせいかしら、まあ、お酒と食料を持ってきてくれるからいいけど」
「相変わらず、貧乏なのな」

「うるさいわね、あんたが来る度にお賽銭くれれば、苦勞せずに済むの」

「へいへい」

「ところで早苗」

「何でしょうか？」

「勇人とはどんな関係なの？」

「あー、それ私も思っただぜ」

「ええ！」

「もしかして、付き合ってるとか？」

「い、いや…あの…何というか…同居人というか…」

「それだけ？」

「えつと…確かに頼もしくて…でも、どこか抜けてて…顔は無愛想ですけど…実際はとて、優しくして…」

「こりやあ、ダメだな」

「結局、あいつのことは悪い方には捉えてないわね…」

「ふーん…」

「結論から、言うといい人です！」

「ん！この団子うめえな！」

今、ゆつくりとしています。団子屋にて団子を食べております。こういうのも、いいなあ。お茶も美味しい。こんな、何ともない感じがいいねえ。

「だけど、ここは本当に妖怪がよく来るのね…あの人なんか…うさ耳が、生えとる。どう見ても、おかしいはずなのだが…」

「あれは、藍さんだ、尻尾の存在感が…モフツてみたいな…ん？油揚げばかり買っていないか？ま、いいか。団子うめえ。」

「お隣いいですか？」

「あ、どうぞ、どうぞ」

「つて、貴方は！」

「へ？あ！貴女は…」

「アルエ？名前が出てこん。確か幽々子さんと一緒にいた娘で…」

「魂魄妖夢です。覚えてくださってないのですね…」

「え？いや、そ、そんな事はないですよ？それより、団子食べましょう？ほら、どうぞ」

「あ、ありがとうございます。それでは、言葉に甘えて」

「モグモグ…ああ、うめえ。こういうのが、幸せと言うのだろうか…」

「あの、昨日の事なのですが…」

「ん？ああ、白玉楼へのお誘いか？いつか、行かせてもらおうよ」

「それもそうなのですが…剣か銃のどちらが強いかという話なのですが…」

「え？あ、ああ。剣もいいと思うぞ」

「そうですか！なら、是非、剣術を学びに！」

「お、おう。でも、刃物ならこのナイフが……」

と俺はナイフを取りだす。なぜ持つてんのかて？入れっぱだっただけ。

「拝見させて貰います……ふむ、悪くないですね……」

「だろ？だから、じゆう「ですが！」ア、ハイ」

「やはり、剣を学ぶのは心も鍛える事です！教師なら心も強くあるべきです！やつぱり、剣術を学びにしましょう！」

「あ、じゃあ、い、いつか……ね」

「それでは、明日にしましょう！」

「でも、授業が……」

「安心してください！慧音さんに頼んで生徒さんも連れて行ってもらおうようにします
！」

「なるほど、課外授業か……いいかもな……」

「なら、決まりです！それでは、早速！」

「え？ちよつと……ああ、行つてしまった」

剣の事になるとやや暴走してしまうようだ。それにしても、あの団子の量は……まあ、課外授業も悪くない。だからと言っても、俺は銃は剣より強し派だが。

「あ！勇人さんじゃないですか！」

「げっ、文だと!？」

「げっとは何ですか！失礼ですね！」

「で、なんだ？」

「それはですね、是非、取材を！」

「ああ、構わんよ」

「そうですね…つて、えええ！」

「今は機嫌がいいんだ、気が変わらんうちに取材するんだな」

「ええ、是非是非！」

「それでは、紅魔館での事件を詳しく！」

「どこで知ったんだ？」

「企業秘密です、さあ！」

「そうだな…」

青年説明中……

「な、なるほど！その時に能力が、分かったのですね！これはいい記事が書けそうですね」

…

「脚色した場合、お前を潰しにいくからな」

「しませんよ…では、次に貴方のプロフィールを！」

「まだ、すんのかよ…」

「では、いきますよ！まず、趣味は？」

「読書」

「好きな食べ物は？」

「うーん…蜜柑？」

「…こんなんでもいいのか？」

「では、嫌いな食べ物は？」

「キノコ」

「身長は？」

「…172…」

「本当は？」

「くっ…168……」

「まだ、希望はあるのだ！」

「年齢は？」

「16」

「誕生日は？」

「5月5日だ」

ふっ…俺の誕生日は絶対休みなんだよ。あと、工藤監督と同じ誕生日だぜ…今年も優勝してくれっかなー？

「早苗さんとの関係は？」

「…!?ま、まあ、住む場所を貸してくれる人？」

「えー、なんか無いんですか？」

「無い！やましい事なんか何一つ無い！」

「そうですか」

とんやかんやで取材は終了つと。

「ありがとうございます」

「脚色したら、容赦無く倒すからなー」

そういうえば、身長伸びたんじゃね？いつか、測ろう。

もう、日が落ちてきたな、帰るか。

そうして、今日も終わりを迎えるのだった…

第3章

2人の孫と2人の祖父

第21話

課外授業の日の青年

「みんな、準備はできたか？」

「もちろんよ！」

「はい！」

「早く、行こう！」

今、俺は課外授業だという事で白玉楼に向かおうとしている。結局、妖夢は慧音さんから許可を貰ったらしい。

「これで、剣の良さを伝えることができます！」

とかなり意気込んでた。だが、俺は白玉楼なんて場所は知らない。てか、話によると、幽霊や亡霊しか行かないとか聞いたが…まあ、気にしてもしょうがないな。

「白玉楼に行つて何をするんですか？」

「それはですね！剣術を教えるのですよ！」

「ウエー！いつの間に来たんだよ…！」

「剣術？それって強いのか？」

「ええ、もちろん！使えるようになれば最強になれますよ」

「サイキョーになれるのか!？」

チルノ…お前、そこにしか反応せんのか…

「確かに興味はありますね…」

「剣術か…かつこいいなあ」

「でしょ！でしょ！早速行きましょう！」

「そうだな、道案内、頼む」

「さあ！こつちです！」

「少しは落ち着いてくれよ…」

「先生も剣術習うの？」

「ん？俺か…別に俺にはじゅ「もちろん、受けるに決まっています！」ア、ハイ…」

「へえー、十分強いのにね」

いやいや、フランドールも十分過ぎるほど強いだろ…

剣術か…面白そうではあるが…でもなあ、やっぱ、剣より銃だよなあ。ちよつとした、

反抗精神で銃を持って来ている。昨日、調整し終えたばかりの自動拳銃2丁だ。早く試し撃ちしたいな……

「今日は俺じゃなくて、妖夢先生の言うことを聞くんぞぞ」

「「「「はぁーい！」「」」」」

「妖夢先生ですか……いい響きです……」

この娘も重症のようだ。

青年&少女達移動中……

「さあ！着きましたよー！」

「……はあ、はあ、なんで、わざわざ階段を？飛べただろう？」

「これも鍛錬のうちの1つです！」

よくよく考えたらこんなかで人間なのは俺だけだ。他のみんなはピンピンしていやがる。俺、運動すべきかなあ。

「お、おお……」

ものすごい、屋敷だなあ。その辺の知識は無いが、すごいということとはわかる。ここでやるのか？

「では、こちらに」

生徒達も見とれてたのだろう、反応が少し遅かった。

「どこでするんだ？」

「庭がありますのでそこで」

「じゃあ、あの人は？」

「え？誰もいないはず…つて、エエ！」

その教える場所である庭に一人老人と思われしき人がいた。少々、妖夢に格好が似ている。あと、白髪に白髭か…元気にも剣を振るっている。

「おじいちゃん！」

「え？」

「こちら！師匠と呼ばんかい！」

「あ！すいません、お師匠様」

おじいちゃん？お師匠様？

「あらあら、久々の再会なのにな…」

「少々、孫に厳しくないか？」

幽々子さんに、誰だ？この声、聞いたことある気が…

「じ、じいちゃん！」

「え？」

「おお、勇人！見ない間に大きくなりおつて」

な、なんだ、このデジャヴ。

そ、それよりも

「なんで、いるんだ!?!」

「せ、先生？」

生徒達も動揺しているようだが、俺もそれ以上に動揺している。

「まあまあ、落ち着きなさい。少しお話をしましょう、ね？そこの子達も来ていいわよ」

「それにしても、久々じゃの」

「あ、ああ、そ、そうだな…」

「妖夢、鍛錬は怠つてないだろうな？」

「はい！もちろんです！」

な、なんだ。これは…

「ふむ…お主が…そっくりじゃのう…」

「ど、どうも…と、ところで、なんで、じいちゃんか？」

「それはだな…わしが死んだ後、天界の者達はわしの魂を取り逃がしおつてな、しばらく、外界の方をふらついとつたら、こっちの世界に来てしまったわい。こっちでも、ふらついとつたら、紫にあつてだな、とりあえずここにいることにしたのだが、霊体だったから、白玉楼に居させてもらうことにしたわい。まあ、久々に紫や幽々子、妖忌にも会えたわい。お前さんにも会えたからのう。紫は約束を守ってくれたようだ」

「は、はあ…」

「では、お師匠様は？」

「ワシはしばらく、修行に行つておつた。妖夢に任せてよい時期だと思つたからじゃ。ただ、しばらく修行してたらだな、こいつが死んだと聞いてだな…もしかして、魂が白玉楼に行くじゃないかと思つてだな、からかいに行つてやろうと思つて来ただけじゃ」「ガハハ…素直にわしと妖夢が心配だったといえよかろうに」

「お主も死んでからも変わらんようじゃな」

生徒達には、悪いがしばらく思ひ出話をしていた。妖忌さんは中々、厳格な人のようだ。やはり、剣術の腕も相当な者なのだろう。じいちゃんは、変わつてないようだ。ただ、俺が成長したせいとか、食えない感じがする。

「ところで、お前さんはここで何をしておる？」

「ああ、教師をしている」

「そうか、お前さんはわしに似て、賢いからのう。やはり、似るもんじゃな」

「ふん、ところでなぜここに来たのだ？何か訳があるのだろうか？」

あ、そうだった、課外授業だったの忘れてた。

「えつと、授業の一環として、この子達と剣術を学びに来たのです」

「ほほう…なぜ故？」

「妖夢から提案されたのと、剣術は心も鍛えられるということで、生徒達にもいい機会だと…」

「そうなのか？ 妖夢」

「はい！ 今回を機に剣術の良さを知ってもらえるかと」

「お前の孫もそつくりじやのう」

「ふんつ、そうか、なら、ワシが教えてやろう」

「え？ あ…よろしくお願ひします…」

だ、大丈夫かな…

「剣術はまず心からだ、心を鍛えることで剣術を鍛えることができる」

「「「「はいー」」」」」

うん、問題無さそうだ。これは本当にいい機会なんじゃないのかなあ。

「勇人さんは、受けないのですか？」

「そうじゃ、お前も受けないか」

「え、今回は引率として、来たので、ちよつと…」

「遠慮することは無い、来ないか」

「ア、ハイ、よろしくお願ひします…」

「先生も頑張りましょう」

「そ、そうだな…」

青年&少女達鍛錬中…

「これで、剣術の鍛錬は終了だ」

「」「」「ありがとうございました」「」「」

「はい、みなさん！お疲れでしょうから、おにぎりを持って来ました！」

「うおー！」

「腹ペコなのだー」

「順番に行けよ」

ふう、中々大変だったな、でも得るものはあったな。

「お主、中々才能があるようじゃが…どうだ？ワシの弟子にらんか？」

「ありがたい話ですが結構です。俺には教師の仕事がありますし」

「あら、残念ねえ、こっちに住めたのに」

「うわっ！て幽々子さん、だ、大丈夫ですよ、今は守谷神社にお世話になっておきます」

「でも、珍しいわね、妖忌が気に入るなんて」

「はは、わしの孫だ。そんなことする訳なからう」

「そうかね、ワシから見ると、孫の方がしつかりしておるわい。無論、ワシの妖夢には敵わんだらうが」

「何を行つとるんじや、お主の孫は少々抜けとるではないか、わしの孫の方は頭も切れるからのう」

ああ、ちよつと雰囲気が険悪に

「妖夢く、勇人く」

「何でしょうか？ 幽々子様？」

「何ですか？ 幽々子さん」

「2人ちよつと手合わせしたら？」

「いえ、理由も無く戦いはしたくないので」

「ええ、そうですよ、幽々子様」

「あら、そう…じゃあ4人に聞くわ」

何だろうか？

「剣と銃どちらが強いと思うかしら？」

「剣です！」

「剣に決まっております」

「銃じゃな」

「銃です」

「…「あ？」」

「銃なんぞは臆病者の使う者じゃ」

「お主は知らぬのか？ 銃は剣よりも強しと言うじやろうが」

「この前も剣が強いといいましたよね？」

「ああ、そうだが。でも、銃の方が強いと思うぞ」

「こうなつたら、妖夢！ 勇人と手合わせして剣が強いことを証明したまえ！」

「もちろんです！」

「ガハハハ！ 銃が強いことはこいつが証明してくれるわい！」

「まあ、この銃の試し撃ちもしたかつたし、丁度いいか」

「先生、戦うの？」

「ま、そうだな」

「ええ？ 妖夢さんですか？」

「そうだが」

「私は応援してるよ！」

「ありがとう、フランドール」

「私もです！」

「こりゃ、下手な試合はできないな……」

「ところで、お前さんは銃持つとるのか？」

「ああ、ここに」

「おお！自分で改造したのだな！」

「まあ、そうだが」

「さすが、わしの孫じゃ」

ふむ、それじゃあ行きますか。

第2話 一騎打ちの日の青年

ただいま、妖夢と向き合って立って入る。両手には自動拳銃、もちろん、リロード済み。それ以外は一切持ってない。

「勝利条件は胸にあるお皿を割った方が勝ちよ〜」

始まりは幽々子さんが行ってくれようだ。

「先生ー！がんばれー！」

「妖夢さんもがんばってください！」

うむ、生徒達の前で恥ずかしい試合はできない。小細工無しで全力で勝負だ！

「準備はいいかしら？」

「大丈夫です」

そう言い、俺は銃を構える。

「いつでもかまいません」

妖夢も剣をかまえる。あれ？2つあるのに片方しか使わないのか？もしかして、なめられてる？

「それじゃあ、始め！」

「ふっ！」

パンツ！パンツ！パンツ！パンツ！

開始とともに4発ぶち込む。遠距離ならではだな。明らかにこっちが有利だ。

「はーはー！」

避けてに剣でさばいたな…近づいてくるか…

パンツ！パンツ！パンツ！パンツ！パンツ！パンツ！

「くっ！」

さすがに厳しいだろう、この銃は装填数15発ずつ計30発だ。リロードもグリッパに靈力込めて、スライドを引くだけ。あまり隙はない。

距離を取るようだ、意味無いが。

パンツ！パンツ！パンツ！パンツ！

むむ…中々近づけません…何発まで撃てるのでしょうか…必ず装填するはずなのでそこを狙うのみです！今はこの銃弾をさばきましょう。

パンツ！パンツ！パンツ！パンツ！パンツ！パンツ！

「ほらほら、妖夢どうした？」

「くっ…今は我慢です…」

あー、これはリロード待ちだな。うむ…早くリロードして返り討ちにするか…皿は左胸にあるな…この銃はまだ調整すべきだな、ちと精度な悪い。まあ、近ければ問題ない。残りは10発と…

パンツ！パンツ！パンツ！パンツ！パンツ！パンツ！パンツ！パンツ！パンツ！パンツ！

ほら、お望みのリロードだ…来い…

…！装填するようです！今がチャンスです！

「はあああああ！」

よし、来た！ふふ…驚くなよ！スライドをひいて…はい！完了つと。

パンツ！パンツ！

「……!?」

は、早い！予想より早い！

あ、危なかった…

さばきやがったか…ただ、隙だらけだ。

パンツ！パンツ！パンツ！パンツ！

「きゃっー！」

「よっー！」

終わりだな。よし、風呂入ってくる。

「まだ、ですよ！」

「あ…外してる…」

あちゃー、どうやら弾は皿には当たってないようだ。弾も皿を割ることのみを目的としているので威力も高くない。

「どうやら、30発撃てるようですね…」

「で？リロードには時間がかからんから問題ないんだぜ」

いえ…それだけでも十分です…

ギリ貧になるだけだな…少し弾を変えるか…その前に少し牽制だ。

パンツッ！パンツッ！パンツッ！パンツッ！

さすがに見切ってくるなあ…よし、弾を変えるか…

「……………」

装填に入るようです！一瞬をつくにはあの技です！

ん？来るようだな…だが、その距離だと…リロードが早いな…

「妄執剣『修羅の血』！」

「は……………」

どこいった？消え…

「隙あり！」

「な！」

ヤバっ！

「ぐ……」

なんとか……避けれた……

「終わりではないですよ！」

「しまっ……」

決まりました！

「ゴフツ……」

「安心してください……峰打ちですから」

「さすがじゃな、やはり、銃よりも剣、お主の孫よりもワシの妖夢の方が強かったのう」

「やっぱり、お主の孫じゃな、あれで終わりと？」

「完全に決まったろう、勝負ありじゃ」

「な、なーんちやって……」

「……！」

「さ、皿は割れてないぞ、イタタ……峰打ちでも痛い」

「ですが、私が有利です！」

パンツ！パンツ！

「もう、見切つてます！」

「さあねえ、それはどうかな！」

「これぐらい、剣で！」

「斬らない方がいいと思うけどねえ…」

「ふん！」

ピカツ！

「きやつ！」

「ぬう！な、何があつた！」

パンツ！ パリンツ

「あ！」

「俺の勝ちだな」

「ま、負けた…」

「いやあ、危なかつた、危なかつた」

「さすがわしの孫よ！」

「なん…じやと…」

「やつぱり、ここよ、ここよ」

と俺は頭を指す、

「うう、ぐやじいです…」

「おい、泣かなくてもいいだろう…」

「むう…敵ながら天晴れじゃ…そもそも、皿を割らなければならぬというルールを逆手にとつて、体にわざと当たるとは…普通ならもう斬られてるが…」

「峰打ちすると読んど…やはり、わしに似て頭が切れる」

「頭が切れるだけでは無いな。あの閃光の間はあいつも見えないはずじゃが…」

「あ、それなら、気配を、探っただけです」

「何!? 気配のみで皿に当てるとは…」

「先生すごい!」

「さすがあたいの先生だ!」

「なんで、チルノが偉そうなのだー?」

「はは! そうだろう?」

「すいません…お師匠様…」

「何を謝っておる? お前も随分と成長したじゃないか…」

「おじいちゃん…」

「じゃが、油断はいかんぞ！それと、少々お前は真つ直ぐ過ぎる、勇人に読まれていた。じゃが、『修羅の血』はとても良かったぞ。これからも精進せい！」

「は、はい！」

「おい、勇人！」

「んあ？どうした、じいちゃん」

「さすがじゃ！」

「あつたりまえよ！頭の切れなら妖夢に負ける気がしねーぜ！」

「それもじゃが、その銃、随分とうまくできておるではないか」

「ああ、まだ調整が必要だが、いい感じに仕上がってきている」

「もう一つも、もっておるか？」

「あ、それは置いてきた。やっぱり、じいちゃんのは使いやすい」

「そうじゃろ！わしが教えてやってもいいぞ！」

「マジか!?是非おしえてくれ！」

こうして、課外授業は終わりとなった…

第23話

それぞれの話し合いの日の青年

「そう言えば、お前さんの能力は何じゃ?」

妖夢との一騎打ちの後、雑談していたらじいちゃんから聞かれた。

「ああ、俺の能力はだな……」

青年説明中……

「ほう、これまたものすごい孫を持つてしまったのう……」

「そうかな?」

「そうじゃ、今はまだ生物にはできないが……十分恐ろしい能力よ……なんせ、諸行無常の理に反するものじゃからな……この世に存在する物は

一瞬たりとも同じではなく、変化し続ける……じゃが、お前さんの能力はそれに対して、変わる事が無くなる、常にその状態になるということじゃ……」

「はあ」

やはり、中々恐ろしい能力だな、理から外れているなんて……

「そうじゃ、お前さんの能力をうまく使うように自分で研究してみい、わしも手伝うぞ」

「うん、それもそうだな、イマイチ分かってないところがある」

「それなら、お前さんが仕事終わったらここに来い」

「え？白玉楼に？」

「わしはこつから出られんぞ、なんせ霊体じゃから」

「あ、そうか…」

でも、幽々子さんは出てますのよねえ…とツツコムのは野暮だろうか？

「それなら、ちようどいい、勇人、妖夢の相手も時折してやってくれ」

「お師匠様!」

「この娘はちと頭が硬過ぎる、真面目であるのがこの娘のいいところなんじゃが、それが仇になっていいる時もあるからのう…」

「恥ずかしい限りです…」

「なあに、恥ずかしがることはない、だが、頭の使い方を勇人から盗め」

「はい！勇人さん、その頭、盗ましてもらいます！」

「お、おう…」

頭を盗むつて…首でも刎ねるのかねえ…

「あ、もう帰らないと…」

「おお、そうか、また明日来い」

「ああ、そうする、それじゃあな、妖夢。あと、幽々子さん、妖忌さん今日はありがとう

「ございました」

「おーい！帰るぞー！みんな、礼を言いなさい」

「」「」「ありがとうございました!!」「」「」

「うむ…」

「どうした？お主にしては珍しく考え込んでるではないか」

「ああ、勇人のことじゃ…」

「あいつか？まあ、あいつは中々やりよるからのう、ワシもあいつと手合わせしてみるか…」

「あいつの能力なのじゃが…」

「ふむ…こりやあ、危ないな…」

「そうじゃろ、あの子の能力が天界どもにでもバレたりでもしたら、速攻で消しにかかるだろう」

「そうじゃな…『蓬莱の薬』と似ているようだが、違う…あつちには不老不死、少なくとも周りからの影響は受ける。ただ、それは月での産物であつて、ここの世界の物ではない」
「あの子は変わることがない、周りからの影響は一切受けなくなることを他の物に付与する。あの子の血だけで。しかも、この世界で生まれた…能力は才能と近いものがあるが…いくら、元神であるわしの孫とはいえ…」

「まあ、安心せい、ここは幻想郷、天界から干渉することはできぬ」

「そうじゃな」

「もう少し彼の能力を聞かせてくれないかしら？」

「おお、紫か、久しぶりじゃな」

「そうね、すっかり爺さんになってしまつて」

「ハハ…もう死んだがな、あんたは昔と変わらんようじゃな」

「ふふ…妖怪ですもの、ところで聞かせてくれませんか？」

「そうね、私も聞きたいわ」

「そうじゃな、今はただの憶測だが、話そう」

「今はまだ、生物を不変にすることはできないようじゃ」

「それは言ってたわ」

「だが、まだというわけであって今後できないというわけじゃない、むしろ、できるようになる可能性の方が高いじやろう」

「できるようなになったら、相当なものになるわね。蓬莱人とは違って、傷一つもつかない体になるでしょうからね…」

「なんじやい、聞いとったんか」

「まあ、ね」

「それはいいとして、生物も不変化できるようになったら、守ることに使えるから悪いとは限らん、ただ…厄介なのは…」

「厄介なのは…?」

「完全に意のまま行動を不変化できるようになってしまった場合じゃな」

「…!?!」

「そ、そんなことができてしまうの…?」

「まだ、可能性の段階だ、わしの孫は簡単に道を外したりはせん」

「でも、そうなったら大変ね……」

「ええ……滅ぶということを変化でもしたら、どうしようもないわね……」

「安心せい、わしの孫はそんなことはせん」

「それもそうね」

「ところで、彼は人間なのかしら？」

「厳密にいえば神なのかもしれないが、わしが人間になった後じゃから、人間だろう、ただ、彼の寿命は分からん。人並みか、あるいは妖怪ほどか、もしかしたら神のように不老不死の可能性もある」

「今のところは分からない、と言ったところかしら」

「そうじゃな、まあ、わしは勇人の幸せを願うのみじゃ」

「ハクシユツ！ん：風邪かな？」

「大丈夫ですか？健康には気をつけてくださいいね」

「いや、誰かが噂話してるかもよ：」

「まさか、そんなわけないですよ」

「そうかな？お前はもう有名人だぞ？あの宴会で存分に名を轟かせたんじゃないか」

「早苗、これじゃあ、ライバル増えちまうぞ」

「!! 諏訪子様！な、何を言ってる：」

「もうバレバレだよ、宴会ではあんなに熱いキスしてたくせに：」

「諏訪子様も見てたのですか!？」

「あそこにいた人はほとんど見たと思うよ」

「ああ／＼どうでしょう：」

「そんなことはいいながら、まんざらでもないくせに：」

「ああ、そういえば、今日は帰りが遅かったじゃないか。何かあったか？」

「今日は課外授業で白玉楼に行ってみました」

「白玉楼に!? それまたなぜ?」

「宴会の次の日に妖夢に会いまして、話をしてたら、授業で剣術を学ぶことになって」

「そうか…妖夢も必死だな」

「白玉楼に行ったら、行つたで、すごいことになりましたよ」

「ほほう、どんなことだ?」

「えつとですね、まず俺のじいちゃんがいました」

「は? お前のじいさんがか? ん…そういえば、紫から聞いたな…お前のじいさん相当有名な神様だったな…」

「それと、妖夢のじいさんの妖忌さんもいましたね」

「確か…相当な剣術の腕を持っていると聞いている」

「まあ、妖忌さんに稽古してもらうことになりましたが、いい経験になったと思います」
「そうか、それはいいことだ」

「あと、話してたら、剣と銃どつちが強いかな話になって、それぞれの強さを証明するために妖夢と試合になりましたね」

「どつちが勝つたんだ?」

「ああ、一応俺が」

「やつぱり、お前はすごいな…」

「いやいや、お二人には負けますって」

「分かんぞ？まあ、でもこれで守谷神社は安泰だな」

「はあ…あ！それと、明日からもじいちゃんに会いに白玉楼に寄りますので遅くなるかもしれない」

「そうか、これまた何故？」

「銃の改造と能力の研究のために」

「分かった…だが、なるべく早く帰ってくるようにしろよ？」

「了解です」

「で、早苗と諏訪子はいつまでヒソヒソ話してんだ？」

「ん？なんでもないよ、な？」

「え？あ、ええそうですよね、諏訪子様」

「じゃあ、勇人が明日から帰りが遅くなるのも聞いたのだな？」

「ええ、もちろん…ええ！?本当ですか？勇人さん？」

「ああ、白玉楼に寄るようになるから、なるべく早く帰るようになるよ」

「白玉楼には勇人のじいさんがいるそうだ」

「早苗、本当にいいのかい？ライバル出現かもよ？相手は妖夢かね…」

「……」

「ところで、お前のじいさんと紫の関係は？」

「古くからの友人だと聞いてますね、あと幽々子さんとも。あ、妖忌さんですね」
「早苗、こりやあ大変だぞ！相手は親類ぐるみで関係があるぞ」

「は、はい…」

「何をはなしているのでしょうか？」

「はあ…さあ、どうだろうか。諏訪子は結構変なことを考えることがあるからな…」
「変とはなんだ！変とは！」

「それよりも、勇人、先に風呂に入っていていいぞ」

「あ、そうさせてもらいます」

「行ったな…で、諏訪子、さっきの会話聞いてたか？」

「ああ」

「早苗もか？」

「は、はい」

「白玉楼か…これは予想外だったねえ」

「そうだな、まさか、勇人のじいさんがいるとは…」

「それに、白玉楼のメンバーと友人ね……」

「早苗、取られないようにしろよ？」

「え？な、な、何を？」

「もう、いいから、そんなことしてると取られちゃうぞ？」

「そ、それもそうですね……」

「そうだ、ちょうどいい、この機会だ。勇人の昔話をしよう」

「え？勇人さんの昔話ですか？」

「ああ」

少女昔話中……

「そ、そうだったんですか……全然知りませんでした……」

「私達も最近、紫から教えられたからな……あいつが神の孫なんてな……」

「はは！よかったね、早苗！」

「え？」

「現人神と神の孫、ぴったりじゃないか！」

「ああ、そうだな」

「わ、わ、わ、私とゆ、ゆ、ゆ、ゆ、勇者さんが…はわわわわ…」

「やっぱり好きじゃないか…」

「だが、油断していると妖夢に取られるかもね」

「はー……………／＼」

「ダメだこりゃ、完全に自分の世界に入っちゃってる」

「そういえばだが、神奈子」

「ん？なんだ？」

「勇者のじいさんのこと聞いたことあるか？」

「あるに決まってるだろ、神様の中でも有名過ぎる話だ」

「そうだな」

力は最上位クラスでかつ慈悲深き神様

紫や幽々子などの数々の力のある妖怪との知り合いも多く

人からも妖怪からも親しまれてた

紫が幻想郷を作る時も助力し、誰からも信頼されてた神様

だが、ある日禁忌である天降りをし、追われる身となった元神様

「数少ない天降りの中でも、最も有名な話だな」

「ああ、その神様の孫とはな…」

「でも、彼は人間であることを誇りに思ってるからいいんじゃない？」

「そうだな、これで早苗と結ばれてくれれば、こちらとしてもありがたいな……」

「ゆ、勇人さん……」

「ほら、自分の世界から戻ってこい」

「ふあい！あ、す、すいません」

「お風呂上がりましたー！」

「お、上がったようだ」

「早いな」

「勇人さんは早風呂ですから」

「お風呂、次入ってもいいですよ」

「分かった」

「それじゃあ、俺はもう眠いんで」

「ああ、おやすみ」

「おやすみ」

「おやすみなさい」

「ああ、おやすみなさい」

こんな平凡な日が続けばいいな…

第24話

研究日の青年

「それじゃあ、いってきます」

「いってらっしゃい」

いつも通りだな、さて、今日はどこを教えるんだっけ…面積が終わったから…次は立方体と直方体の体積か…うまく、教えられるだろうか…

「慧音さん、おはようございます」

「ああ、おはよう、今日も頼むぞ」

「本当に教師をしてんだな…」

「あ、妹紅もいたのか」

「ちよつとな、お前の授業も見たいな」

「いいですけど…」

「おお、そうか。なら遠慮なく」

「よし、それじゃあ、今日は新しいことを教えるぞ」

「さあ、どーんときなさい！」

威勢がいいのはいいが、しっかりと理解してほしいもんだ…面積ですら、少々怪しいのに。だが、いつまでも復習している訳にはいかないので先に進めます。

「今日はこの箱の大きさを数字で調べられるようになってもらう。そこで、前に習った面積を使うからしっかりと思い出しとけよ」

ふふ…頑張つて、大きな箱とこの1?の箱を使って教える方法を考えたんだ。きつと、分かりやすいに違いない…

教師授業中……

「……ということだ、分かったか？」

「はい！とても分かりやすいです！」

「へー、そうやって求めるのか……」

うんうん、分かってくれてるようだ。

「……？」

……そのポカンとした顔をやめてくれ。うむ、これで分からんとはな……

「勇人……」

「どうした？妹紅？」

「どういふことなんだ？」

あ、貴女もそっち側ですか……

「後でしっかり教えましょうか？」

「んー……いや、いい。私はあんまり賢く無いからな」

自分で言っちゃうのね……

「まあ、とりあえず問題でも解こうか」

「…と、こんな時間か、今日はこれで終わりだ」

「「「「ありがとうございました」」」」」

「ねえ、大ちゃん、これドユコト？」

「それはね、チルノちゃん…」

「分かんないのだー」

と、とりあえず、じいちゃんに会いに行くか…

青年移動中…

「おーつす、じいちゃんいるか？」

「ああ、いるぞ」

「よし、じゃあ、銃の改造の仕方教えてくれ」

「まあ、慌てるな。まず、お前さんの銃を見せてくれ」

「分かった………はい」

「どれ………ふむ、なるほど……グリップに靈力を込めてスライドを引けば、撃てるのか……スライドを引く動作は省略できるじやろう?」

「できるけど、したくないね、ロマンを感じない」

「わ、分かった……グリップに対して靈力の伝わり方にばらつきがあるな、だから、弾はアンバランスに形成されて、撃った時にズレが生じる」

「なるほど……じゃあ、グリップの靈力の伝わり方を均等にすればいいんだな?」

「そうじゃ」

「よし、ならば……」

青年改造中……

「よし!こんなもんだらう」

「実際に撃ってみい」

「ああ」

パンツ!パンツ!

「おお！これはいいぞ！すっかり狙ったところに！それに威力も増したな」

「さすがじゃ、たった数十分で改造してしまおうとは…やはり、わしに似たんじやのう」
「おうよ！じゃあ、次は能力についてだな」

「そうじゃな」

「まず、お前さんはどのくらいの範囲で能力が使えるんじや？」

「まあ、今は無生物であることと、俺の血がつけば不変化できる」

「そうか…やはり、鍵はお前さんの血じゃな」

「そうだな」

「よし、血を出せ」

「ええ!?少しストレート過ぎるよ」

「そうしないと分からんじやろうが」

「わ、分かったよ…：…なかなか血を出すとか怖いんだぜ？」

「ふ、ふう、…ん、くっ…」

指を軽く切つて、数滴血を垂らす。

「よし、それじゃあ、このボールにつけい」

「ん？ただの野球ボールじゃんか」

「いいから、はよ」

「ほい」

「よし、このボールはもう、お前さんによって、運動や存在を不変化できるようになったわけじゃな」

「そうだが？」

「今まではどのように考えて、動きを不変にしおった？」

「あー、どうだったけ？」

えーつと、これを実際に使ったのはレミリアの時と、伊吹さんの時か…あ、そういえば、紫さんにも使ったような…まだ、分かってなかったな、あの時は。

うーん、確か…

「レミリアの時は真っ直ぐ飛んでけ！つと、伊吹さんの時はそこにあれ！つと」

「うむ、随分と単純じゃな」

「む、悪かったな」

「なら、あれに当ててみい」

あ、あんなところに的が。なんて、準備のいい。

「よし」

真っ直ぐに飛んでけよ…

「ふん！」

「あ……」

あれ、外れた。確かに真っ直ぐには飛んでいったが、離れた時のボールの角度が的の方に向いてなかったのか……じゃあ、次は……って、これじゃあ、逆に当てにくいな……

「どこにいくかを意識してみい」

「どこにいくか……」

あの的に……

「はー！」

パコーン

「あ、当たった……」

「ははー！分かったろ？至極簡単なことじゃ」

ほほう、つまり、目標地点を立てて投げれば必ずそこにいくと……

多分見える範囲でだろうが。

それじゃあ、軌道は？

「……………」

「おい、勇人？ありや、完全に自分の世界に入ってしまうとる」

1時間後……

「……!!びりつとキタアああああ!!」

「うわ!なんじやい!急に!」

「ふふふ…ははは…アハハハハ!!」

「!!頭が狂ってしまったか」

「いや、違う、これはすごいぞ!」

「何のことじゃ?」

「ふふ、今から教えるよ…」

「とりあえず、見てくれ」

まず1球目、

ビシュツ!

「ん、真っ直ぐいつとらんぞ」

パコーン

「おお!曲げて当てることか!?!」

ヒュー

「んあ!?!急にこつちにボールが向かってきおったぞ!」

「ふふ…次」

ビシュツッ!

「ぬあ? なんじゃ? ボールが円を描いて回っておるぞ!」

「どうだ? すごいだろ?」

「そうじゃな」

「後は、実践で使えるように…」

これで、ある程度、物の行動を不変化できた。まあ、目標物に当たったら戻る、円を描いて回る事ぐらいだけだが。

「…これ、銃でも応用出来るのかね?」

「んー…やった事ないからわっかんない」

「どうにかして、銃に應用してみたら、どうじゃ?」

うーん、確かに野球ボールじゃあ大したダメージにはならないかな…行動を不変化させたら、存在を不変化にすることが出来ない。逆も然り。

靈力にも応用か…? 霊力にどうやって血をつけんだ?

しつかりと形になるのは撃ち出されるときだから…

そうだ! 銃口の中に血を垂らしたら…これでどうにかなるか?

「どうした？何か思いついたか？」

「ああ、見といてくれよ！」

パンッ！

「おお！弾が弧を描いたぞ！」

パンッ！

「次は円を描いて回つとるぞ！」

「よっしゃ、大成功！」

「どうやったんじゃ！」

「ふふ、簡単なことだよ、銃口に血を垂らした、それだけだ」

「ほおー、よく思いついたな」

「ついでに、スペルカードも考えたぞ」

「なんじゃ？」

不変「イミューテール・バレット」

直線にしか進まないが、存在を不変化にしているので絶対に破壊されない弾。

絶対「アブソルト・パズー」

標的を追い続ける、いわゆる追跡弾。これは時間を止めても、空間が変わろうとも追

跡は続く。

不変「イリユージュオン・オブ・フィクシイテイ」
いくつもの弾を撃ち、円状に回る弾幕。

「どうだ？ かつこいいだろう？」

「そ、そうじゃな…（カタカナばかりで分からん）」

よし、これでまともに弾幕ごっこできるな…

「勇人さん！」

「ふふ…これで…ふふ…」

「うわ…じゃないじゃない！ 勇人さん！」

「んあ？ あ、はいはい。なんでしょうか」

「もう、今日は研究し終えたのですよね？」

「ああ、妖夢も見たいのか？」

「確かに、見たいですが…それよりも、私と稽古してください！」

「あ、ああ、いいけど…明日からにしてください？」

「え？ 私は今でも構いませんよ？」

「妖夢はいいかもしれないが…俺は今日、頭の使い過ぎで疲れた」

「そうだ、今すぐにも糖分補給したい。もう、頭がイマイチ回らん。

「そ、そうですね…、それでは明日よろしくお願いします！」

「了解…」

明日からも大変かな…

第25話

妖夢の特訓（勇人式）の日の青年

「うーん……」

パチツ

ただいま、俺は将棋をしております。誰とかって？

「ふふ……じゃあ……」

この、白狼天狗と。つか、仕事は？

ん？なんでかって？そうだな……あれは今から36万……いや1万4000年前だったか。いや、1時間前の出来事だ。

「ふあ……あー、眠い……」

「眠いつて、もう9時ですよ。少し起きるのが遅過ぎませんか？」

「まだ、9時か……することねえー」

「今日ぐらいゆつくりしたらいいと思いますよ」

「そうだな、なら、もう一度寝るか……」

「ダメです」

「えー、ゆつくりしていいと言ったじゃんかー」

「だからといって、怠惰に過ごすのはいけません」

「はあ…分かったよ、なら、少し散歩してくる…」

「いいですが…くれぐれも気をつけてくださいね」

「了解」

そうだったな、仕事が休みだからダラダラ過ごそうと思ったのに…

「あややや、こんなところに勇人さんがいるとは珍しい」

「今日は機嫌悪いから、取材はNGだ」

「えー…せっかく、白玉楼に通っている理由を聞こうと思ったのに…」

「あ？なんで知ったんだ？」

「ふふ…でも、今回の記事は…中々、脚色しやすいですね…」

「……」

「す、すいませんでしたから、そ、その銃を黙ってこつちな向けないでください！」

「あー、暇だ…」

「暇なら、しゅぎ スチャ すいません、なら、椀でもからかいにいきましょう」

「あんた、やっぱり性格悪いな…」

「あれ？ここにもいない…なら、あそこですね…」

「あんた、権の生活を把握してんのかね…」

「ふふ…これで、王手です！」

「なに！……ああ…参ったよ…権、最近強くなつてないか？」

「いやー、それほどでも…」

「随分と楽しそうですね、権」

「!?な、なんで、ここに文さんが？」

「俺もいるぞ」

「え、ええ？」

「また、将棋をしてるのね…」

「わ、悪いですか!？」

「いやあ、別に将棋することは悪くないけどねえ、今は仕事でしよう?」

「え?い、いや、別に…」

うむ、結局、文がただ、権をいじってるだけだな…暇だ…

「へー…君が…」

「な、なんですかい？」

「いや、別に。そうだ、自己紹介をしよう。私は河城にとり」

「俺の名前は碓氷勇人だ」

「ああ、噂は椀から聞いてるよ、なんせ、すごく頭が切れるそうで」

「あはは…なんとことやら…ところで俺の聞いた話によると…君は河童だね？」

「そうだよ、エンジニアとして、外の世界の物には興味があるのだが、君は外の世界の人間かな？」

「ああ」

「そうか、なら君を盟友と呼ばせてもらおうよ！」

「め、盟友？」

「ところで、盟友。君は何か、外の世界の機械を持つてるかい？」

「今は持つてない、次持つてくるよ」

スマホでいいかな…ここにきてもう、バッテリーはお亡くなりになっている。

「で、あの2人はまだやってんのかね…」

「いつも通りさ」

それにしても、将棋か…よく中学校の頃やったなあ。校内大会で優勝したしなあ…あのおかげで、知名度が少し上がった。それまで、「えっ、君、生徒会だったの？」とか言われたし。

「お、盟友。将棋、したいのか？」

「まあ、そうだな。暇だし一局」

「!!なら、私と！」

「え？」

「あの日から負けっぱなしでは悔しいので勝負です！」

「あ、ああ」

「楯は結構強いぞ？」

「とりあえず、指してみるか……」

というわけだ。

「む……これでどうだ？」

パチッ

それにしても、楯は本当に強いようだ。多分、相当先の手まで考えてる……俺の布陣がボロボロに……っていうのは計画通りで、俺の布陣は着々と完成しているのだ。

「それじゃあ……ここで」

パチッ

うむ、勝利を確信してきた顔だな……クク……だが、もうすでに君は俺の策略にはまって

いる。

「ほい、王手」

「ぬあ!？」

まあ、この王手は全然防げるけどな。ただ、問題は…

「ああ…飛車が…」

飛車の犠牲が必須というところかな。角行はやはりバレにくい。いつの間にか、いたということはよくある。

「んでほい」

「むむ…」

楯の左側の陣が壊滅した。いつの間にか、成金が大量にある。

これで、楯は防御に出始めて、攻めるどころではない。

徐々に右に逃れるが…残念、そこは香車と飛車で抑えてる。

「はい、王手」

「!?!…ま、参りました…」

「はー…楯が負けるとは…」

「ま、楯も強いけど、少々セオリー過ぎて分かりやすい。戦略は読むことも大事だが、バシれないようにもしないとな」

「本当に頭が切れるのですね…」

「なんだ？俺がアホだと思ってたのか？」

「悔しいです」

「まあ、頑張れよ、俺は少し用事があることを思い出したから行かせてもらおうよ」

「次もお手合わせお願いします！」

「それじゃあなー、盟友！」

「ああ、じゃあ」

「私には!？」

「んー、次、捏造記事書いたらクロス」

「ええ!？」

んで、その用事は妖夢との稽古だ。

「おーっす」

「あ！勇人さん！」

「ああ、勇人かどうした？」

「えっと、妖夢から一緒に稽古して欲しいと…」

「そうなのか？妖夢」

「そうです！勇人さんの頭の使い方を学ぶためです」

「そうか…ふむ、面白い！それなら、目標があつた方がいいな…よし、1週間後にもう一度、勇人と妖夢で一騎打ちをせい！」

「！それはいいですね！」

「フアツ！な、なんでまた…」

「それじゃあ、早速始めましょう！」

「戦う相手に教えを乞うのか…」

「それじゃあ、妖夢の問題点を言うぞ」

「はい、容赦無くどうぞ」

「まず、攻撃が基本的な動き過ぎる、実力はあるのだが、応用されずありがちな攻撃ばつ

かりで読みやすい。確かに基本は大事だが、応用されなきや意味がないんだぜ？」

「た、確かに……」

「あと、大きな技を出したあと、隙が大き過ぎるし、油断もしてるだろう？」

「う……」

「総じて言うると、実力はあるが、一皮剥けず半人前みたいだ」

「まさにその通りじゃな」

「お、お師匠様まで……」

「あと、考えは柔らかくくだな」

「問題点がしっかり分かりました！」

「ああ、応用は自分で考えるように、後、戦略もしっかりと練ることも大事だぜ？ 臨機応変もいいが、しっかり見通しも立てとけば、騙し打ちもできるし、色々幅が増えるぞ」

「なるほど……それじゃあ、早速！」

「よし、相手はワシが練習相手になるぞ」

「そうだな、剣なら妖忌さんの方がいいだろう」

「あら、勇人今日も、来たのね」

「あ、お邪魔します」

「いいわよく、妖夢も楽しそうだし、ところで、妖夢にあんなに教えていいの？」

「大丈夫です。頭で負ける気はやはりしませんので」

「随分と自信あるのね」

「まあ、それぐらいしか実力では匹敵しませんからねえ」

「そんなことはないと思うけど……」

「まあ、こうやって暮らしていければそれでいいです」

「それじゃあ、もう外の世界に未練は無いのね」

「……それは……」

「あるようね」

「……」

「まあ、そんなことは置いといて、今日はここに泊まりなさいな」

「はい……つて、え？」

「はいつて言ったね」

「いや、ちよつとさすがにそれは……」

「あら？問題は無いわよく、ちゃーんと守谷神社の方にも連絡は入れたわ」

「え？もう、入れたんですか？」

「ええ、渋々だったけどいいつてよ」

「でも、やっぱり…」

「あら、人の好意を無下にするのかしら？」

「いや、そんなことは…」

人じゃないでしょとはつつこまない。

「それじゃあ、決まりね〜」

「ア、ハイ…」

連絡入れているそうだから大丈夫でしょう。

「それじゃあ、1週間よろしくね〜」

「よろしく…ええ？1週間!?!」

「そう伝えているから大丈夫よ」

「マジかよ…」

その頃、守谷神社では…

「うーん…」

「どうした、諏訪子？」

「いや…ちよつとした問題が…」

「なんだ？信仰か？」

「いや、勇人のことなんだが…」

「まさか、勇人が！」

「無事だよ…ただ」

「なんだ？歯切れの悪い」

「勇人が白玉楼に1週間泊まることになった」

「は、はあああああ!!？」

「いや、最初は断ろうとしたんだよ？」

「な、なんで、承諾したんだ!？」

「ほら、じいさんとの再会があつたわけでしょ…ね？やっぱり久々に会つたから、少しくらい一緒に居させても…」

「本当は？」

「あーうー…このお酒を…」

「はあ？お酒でつられたのか？」

「だって、これなかなか珍しい物だよ？」

「だからって…お前…早苗にどう言うんだよ…」

「う…で、でも、妖夢とすぐに仲良くなるわけじゃあないんだし…」

「もし、妖夢も惹かれたら？」

「だ、大丈夫だよ、早苗の方が魅力的でしょ？妖夢はね？少し貧相だろ？」

「お前もな…だが、勇人がそっち派ならどうする」

「きつと、勇人はそっち派じゃないよ、ハハハハハ…」

「は…ま…まったく…」

「ただいま、戻りましたー！」

「!?!」

「か、神奈子、お前が言ってくれないか？」

「はあ!?!原因はお前だろ！お前が自分で言え！」

「だ、だって、しようがないじゃないか！あんなお酒を見せられたら…」

「神奈子様、諏訪子様…ど、どうなさったのですか？」

「ん？諏訪子がない、勇人を1週間白玉楼に泊まることを許可したんだよ！」

「え？」

「あ」

「う、さ、寒気が…」

「風邪か？」

「い、いや、何か恐ろしいものを…」

第26話

妖夢の特訓（妖忌式）の日の青年

「なあー、早苗、私が悪かったて…」

「……」

「お願いだから、無視をしないで…」

「……」

「神奈子ー、どうしたらいいんだ？」

「お前が悪いんだ、私は知らん」

「そんな、冷たいことを…」

「はあ…早苗、とりあえず話を聞いてくれ」

「……」

「たった1週間だぞ？お前とはもう2ヶ月以上一緒に居るじゃないか、そう簡単にくつつかないって」

「……そうでしょうか…」

「うんうん！そうだよ！それにあんな半人前よりも、早苗の方が魅力的だって！」

「そ、そうでしょうか？」

「ああ、だから、大丈夫だよ、勇人もじいさんと一緒に過ごしたいだけだつて」

「そうですよね！簡単に妖夢の方に転がるわけがありませんよね！」

「お、おう…（だ、大丈夫かなあ）」

「……!?ま、また寒気が…」

「風邪じゃないの？」

「そうでしょうか…別にどこも悪い所は無いんですが…」

「妖夢、ワシはここを出てから様々ことを学んで来た。今日はその一つを教えよう」

「はい、お願いします！」

「勇人！お主も参加せい」

「え？俺も？」

「お主が教えただけじゃ、不平等じゃろ」

「じゃあ、お願いします…」

「普段、お主らは必ず視覚を用いて、物事を見ているじゃろう」

「そうだな」

「じゃが、視覚は後ろなど、死角や錯覚を生み出してしまふ……だから、その視覚を閉ざすのじゃー！」

ま、まさか、ワムウが如く目を潰せと？

「視覚を閉ざして、聴覚や触覚を鍛えるのじゃ」

「ん？それって瞑想か？」

「それもいい方法じゃが、別の方法がある」

「まず、これで目隠しをせい」

な……こ、これは布か……

「これでいいですか？」

「な!？」

な、何だこれ……はたから見れば……少し、いかがわしい感じに……

は！ダメだ、そんな邪なことを考えるな……

「俺もつけましたよ」

「そうか……じゃあ、それ！」

「ぬお！」

「きやつ！」

「うむ、勇人は避けたか……」

な、何を投げやがった！隣でこんって音が……

「ぐう……」

「勇人はそれなりに鋭い感覚を持っているようじやな」

「で、また投げるのか？」

「いや、今度はその状態で庭を一周してみろ、2人で回るんじやぞ」

「は、はい……」

「あ、色々な仕掛けがあるから気をつけるんじやぞ」

「え？」

「妖夢、行くぞ」

「は、はい」

えーつと…前方には何も無しと…

「妖夢」

「何でしょうか」

「裾を握らないでくれるかな」

「え!? それでは進めません…」

「それじゃあ、特訓にならないだろう、とにかく集中するんだ、そしたら、空気の流れとか、いろんな音が聞こえてくるようになる」

「わ、分かりました…でも、置いていかないでくださいね?」

「了解、つてぬお！」

「どうしましたか?」

な、何だ。ただの段差か…少し集中を切らしてしまつたらしい。

「大丈夫、つまづいただけだ…とりあえず、進むぞ」

「は、はい…」

「何をしとるんだ、あの子たちは…」

「特訓じゃよ」

「あれでか？はたから見れば阿保にしか見えんぞ」

「ふん、あれをやるとな、感覚が研ぎ澄まされるのよ」

「そうかい…」

どのくらい進んだか？今の所仕掛けらしい仕掛けも無いが…

「ゆ、勇人さん！先に行かないでください！」

「ん、俺の場所が分かるのか」

「あ、本当です！勇人さんが今どこにいるか、分かります！」

「よし、それなら、もう大丈夫だな…」

「それはどうかね？」

ヒュー…

ビシッ！

「いでっ！」

「きやつ！」

な、何だ！高速で何か飛んできてる。

「ほらほら、もつといくぞ！」

ヒュー、ヒュー、ヒュー、ヒュー

バシッ！ビシッ！ビシッ！バシッ！

「いたい、いたい！」

な、何だよ！

「お、おい、少々やりすぎじゃ無いか？」

「なあに、これぐらいがちょうど良いわ」

（いくら何でも、弓矢で射るかね…まあ、先端は柔らかい布にしるとはいえ…）

「こんのお！」

パシッ

「お、掴みよったか」

「わっ、ほわっ」

「妖夢は避けるで精一杯か…」

「ほらほらほらほら！」

パシッ、パシッ、パシッ

「はっ！」

パシッ

「お？妖夢も掴んだか」

「よおし！次は近くにある台に登れ！」

え?! 近くに台…あ、あれか？平均台みたいだが、うむ、平均台じゃね？

「先に行きますよ！」

「それを渡りきつたら修行完了じゃ！落ちたら、やり直しぞ！」

「や、やばっ」

これは、きつい。集中力が必要だな…「ほれ」

ビシッ

「ぬおおお！」

バタツ

ビシッ

「きやつ！」

バタツ

く、クソツ。あの状態でもかよ…

「お主、鬼畜じゃぞ…」

「強くなるためにはこんくらいせんとな！」

「やはり、昔とあまり変わつとらんのか…」

—15分後—

「はあ…はあ…」

ダメだ集中力が…もう、台の場所も探れねえ…妖夢も同じのようだ…

「何じゃ？もう、お終いか？」

「まだまだだ！いくぞ、妖夢！」

「はい！」

「…そこだ！」

パシッ

「はっ！」

パシッ

「お？行くか？」

「ほっほっほっほ………終わったあああああ！」

「やりました！」

「ほお！本当にやりおったわい！」

「さすがじゃ！」

「やったな！妖夢！」

「やりましたね！って、きやつ！」

「おわっ！」

バタッ

「イタタ…大丈夫か？」

「は…い!？」

「な！何をしとる!？」

「あらあら…若いわね〜」

「はわわわわ…」

「なんだ？」

ひとまず落ち着いて考えよう。今、妖夢が倒れたんだな…うん、で、俺も倒れたと…で、今、体の上に何か乗ってると…

「ホワツツ!？」と、とりあえず、妖夢、どころか、ね?」

シュー…

「え?」

ちよつと、メルトダウンしないぞ！俺も少々メルトダウン寸前だから！てか、周りの人たちもどうにかしてくれよ！

「なんじやい、お前の孫はウブかい」

「お主のそこだつて、男のくせにあんだけで赤面しよつて」

と、とりあえず目隠しをとろう…あ、妖夢だ…

「お、おーい」

「はははははい?」

と、とりあえず妖夢の目隠しを取るか…こ、これはな、なんだか、あ、あれだな…

「ほら、とりあえず、どうこうぜ？」

「こ、こ、この…」

「ん？聞こえないよ？」

「も、も、もう少し、こ、このまま…で……………も」

プシューつとでもいいそうなんです。てか、さっきなんて？もう少しこのまま？

「ふえ？」

「あら、意外と妖夢も積極的に…」

「な！こら！勇者！今すぐ、妖夢と離れい！」

「あ！は、はい！妖夢！ちよつと、俺立つぞ！」

「あ…」

「これでよしと…」

「妖夢もしつかりせい！」

「あ、ふあい！」

「はあ…」

「妖忌、妖夢もいい年よ？」

「それもそうですが…」

「いつまでも、貴方の元には居られないわよ？」

「うっ」

「ね？ 貴方もそう思うでしょ？」

「わ、わしか？ まあ、妖夢も子供じゃあ無いしな…」

「あら、勇人ももういい年なんじゃない？」

「ま、まだ16ぞ！」

「もう、その年齢なら色沙汰もねえ…」

「なんじゃと…」

「ほら、妖夢、しっかりしろよ」

「あ、す、すいません…」

「ま、まあ、いいじゃないか、これで特訓終了だし、な？」

「そ、そうですね！」

「ね？」

「じゃが…」

「なら、どんな男ならいいのかしら？」

「それは…妖夢をしっかりと支えてくれるような…」

「なら、勇人でいいじゃない、実力もあるし、頭も良く、仕事もちゃんとしてるしね」

「じゃがのう、こいつの孫だと思うと…」

「なんじやい、わしが悪いつてか？」

「あら、貴方はどうかしら？」

「わしはだな、そういうことに首を突つ込む気は無い。勇人が決めることじゃからのう
…」

「なら、妖夢だとしたら？」

「勇人が決めたなら何もいうまい」

「だ、そうよ？」

「うっ、た、確かに勇人なら任せられるが…」

「勇人は1週間泊まるからそれでじっくり勇人のことを見ればいいじゃない」

「え？いつの間に…じゃが、それもそうじゃな…」

「いつからこんな話になつたんじゃ…」

「妖夢く、こつちいらつしやーい」

「はい」

「ん？俺は？」

「貴方は来ないでいいわー」

「了解です」

「なんでしようか、幽々子様」

「今日から1週間彼、泊まるから」

「え？何故？」

「ほら、勇人とあの人、久々の再会でしょ？だから、一緒にいる時間が必要なのよ」

「そうですね」

「まあ、それは、守谷神社への建前だけだね」

「え？それは良く無いですよ！ほら、早苗さんが……」

「早苗と彼は別にくっついて無いでしょ」

「それも、そうですか……」

「つ、ま、り、貴女もチャンスあるわよ」

「な、な、な、な、な、な、何を!？」

「あら、嫌なの？」

「そ、そんなことは……」

「もう、妖夢ったら、分かり易いわよ」

「え？ど、どこがですか!？」

「まあ、それはいいとして、頑張つてね」

「あ……ちや、チャンスですか……そ、そうですよね……まだ、早苗さんと付き合つてるとは聞

いたことが無いですしね……」

「あ、授業、どうしよう」

第27話

平日（白玉楼編）の青年

「ふあ……ん……そうだ……寺子屋に行かないと……今日の授業は……」

「おはようございます、勇人さん」

「ん……おはよう……妖夢……」

「朝ごはんはできてますので」

「ん……ありがとうございます……」

んー……ん？あ、そうか、白玉楼にいるんだった……どおりで服装が違うのか……いつもは学校のジャージで寝てるもんだから……あ、じゃあ、今日は何を着たら……荷物、全然持つてきてない……

「おはよう、勇人」

「おはよう」

「おはようございます、じいちゃん、妖忌さん」

「あら、おはよう」

「おはようございます、幽々子さん」

「みなさん、お揃いでしようか…幽々子様!? 起きてらっしやるのですか!? いつもはまだ寝てるはずなのに…」

「今日は少し早く目覚めたのよ」

「そ、そうですか、それじゃあ、みなさんで朝食を食べましょう」

「…「いただきます」」

カチャカチャ……

「…ふああ」

「あら、貴方、眠そうね」

「朝には弱いんです…頭もイマイチ回りません…あ、そういえば、寺子屋に行かないと

…」

「行かなくてもいいわよ、1週間、休むって伝えたから」

「え? それじゃあ、慧音さんに悪いですよ…」

「大丈夫よ、理由を言ったら納得してくれたわ」

「はあ…」

「慧音先生ー、勇人先生はー？」

「ああ、今日からー週間、勇人先生は休むそうだ」

「えー、なんで？」

「それはだな…修行だそうだ」

「え？でも、勇人先生、十分強いじゃない？」

「私も思ったが、まだまだ足りないらしい、向上心があるのはいいことだ。お前達も先生のこと見習えよ！」

「「「「はーい」」」」」

「うーん…それじゃあ、何をしようか…暇だよな…」

「なら、妖夢の手伝いをしてあげたら？あの娘、1人で家事とかしてるのよ」

「た、大変ですね…」

「凄いな…てか、3人は何してんだ？」

「そうですね、妖夢の手伝いでもしますか」

「妖夢ー」

「なんででしょうか？」

「俺に何か手伝えることないか？」

「いや、大丈夫ですよ」

「何もしないのは悪いし、暇だからな、なんでも言ってくれ！」

「そうですね…とりあえず洗濯物を手伝ってください」

「おう！任せとけ！」

「えつと、俺がじいちゃん達のをするか」

「そうですね」

さすがに女性のはね…俺は真つ当な青年を目指してるので。

え？真つ当な青年こそ変態だ？知らんな。

「それにしても、多いな…あ、学ランはまだ、洗わないでと」

「え？洗わなくていいんですか？」

「いや、一昨日洗ったばっかだからな」

そういえば、これ、何回も穴が空いたりしてるよな…早苗が、縫ってくれてるんだっ

け？お礼言わないとな。

「勇人さんは外の世界では何をしてたんですか？」

「学生だったよ」

「え？まだ、学問を学んでたのですか？」

「うん？俺ぐらいの歳なら普通だぞ」

「どおりで、頭がいいのですね…」

「そ、そうかな……」

成績優秀ではなかったよな……てか、目立たないようにしてたせいか、あんまり思い出が無い。中学校の時はそれなりにあったが。

「もう、外の世界には未練は無いのですか？」

「……………」

無いわけがない。両親には何も言えず、弟にも、蓮子にも……何も言えず、ここに来たからな、せめて、別れの言葉を言いたかった……

「あ……すいません、聞かない方が良かったですね……」

「いや、大丈夫だよ、未練が無いと言ったら嘘になるけど……まあ、ここも悪いところじゃ無いしね」

「そうですか……」

「終わったー!!」

「ありがとうございます」

「で、次は？」

「昼食を作りましょう」

「え？早くないか？」

「幽々子様が相当食べるので」

そんなにかか？まあ、この世には2種類の女性がいるって聞いたことがある。食べる女と食べない女。前者だろうか。

「え？こゝ、こんなにか？」

ちよ、これは…大食い選手権でもするのか…俺も食べる方かなと思うけどこれは…

「さて、作りましょう」

「おう…」

よ、妖夢、スゲーな…これを毎日だと…

トントントントントントントン…

「勇人さん、手慣れてますね」

「まあ、家ではやらされてたし、早苗のを手伝ったりしてたからな」

俺の母は一人暮らしになったら、自炊ぐらいできないと、ということでも料理の仕方は少し教えられてる。

両親が家に居ない時は自分で、作ってたしな。まあ、メニューがほぼ炒飯なんですけど…だって、簡単だもん！

「妖夢も、相当上手いな…」

「従者ですから」

「はは、家事のスキルはバツチリだな」

「ええ、あとは剣術も鍛えないと…」

さすが、向上心の塊だな…まっすぐ過ぎるが、そうやって突き進めるところ、羨ましいな…

「ふう…出来た…本当にお昼になっちゃったよ」

「みなさん！お昼ですよ！」

「待ってたわ〜」

「少しまっすぐくれ」

「今、いいところなんじゃ」

お二人は囲碁ですか…幽々子さんは既にスタンバツてると…

「はい、終わりです！お昼にしますよ！」

「ぬおお…」

「むうう…」

さすがに、この時は妖夢が強いか。

「あら、勇人も作ったのかしら？」

「ええ、妖夢には劣りますが」

「いえ、なかなか上手でしたよ」

「どうも」

「あら、2人で共同作業ね…」

「な…幽々子様?!」

「そうですね」

「勇人さん!」

ん?別に一緒に作ったから、共同作業だろ?違うのか?

「まあ、とりあえず食べましょう」

「は、はい…」

さつき、女は2種類あると言ったが、あれは嘘だ。幽々子様は食べる方というレベルじゃない。平気な顔をして、どんどん食べてく…ど、どこに入ってた?足りなくなつて追加で作るはめに…こんだけ食べられると、こつちが満腹に…

栄養は何処へ?確かに…スタイルは抜群だが…太っているわけではない。

「幽々子さんはどんだけ食べるんだ？」

「まあ、初めて見ると驚きますよね…」

「だからかな…」

「何がですか？」

「ほら、なんとというか…育ちがいいとか…俺も背ぐらい欲しいな…」

きつと、伸びて170は越すよな！え？もう、諦めろ？いやいや、伸びるに決まってる！そうだろ!？」

「ゆ、勇人さんは幽々子様みたいなスタイルがいい人が好みなんでしょうか？」

「んー、俺は…」

んー、女性とはあんまり縁がなかったからなあ。でも、さすがにこの歳になると、思春期な話題は出たよな。巨乳派とか貧乳派とか…俺はなんだろう…巨乳派から良さをめっさ伝えられたが…とりま、

「スレンダーな人が良かったりするかな…まあ、女性を触れ合う機会が外の世界では少

なかったからな。よく分かんない」

「そ、そうですか…（わ、私にもチャンスが！）」

んで、午後は妖忌による修行が、みっちり。あの人もなかなか、鬼畜だよな…

それと、新しいスペカの練習つと。最近、霊力が上がった気がする。

そのあとは、夕飯作り。やはり、あの量を…妖夢はよくやれるよな…聞いたが、
「従者ですから」

と言われた。従者つてスゲー。そしたら、幽々子さんが

「貴方がいれば妖夢も楽なのにね」

でも、俺の分も増えるわけで、その分返せてるかと言われると、イエスとは言えない。
それに寺子屋もあるしね。でも、どうして妖夢は顔を赤くしてるんだらうか？

「はあ…幽々子さんはよく食べますね…」

「だって、妖夢の料理は美味しいんだもの、ね？」

「まあ、確かに美味しいですが…」

「貴方が作ったものもなかなか美味しいわよ？」

「ありがとうございます…やっぱり妖夢には負けます、本当に美味しいですね」

「なら、妖夢と結婚すれば毎日食べれるわよ？」

「ははは……冗談を、妖夢にはきつと別の素敵な人がいますって。何より、妖夢の意思を尊重しないと」

「あら、そう……」

「そうだ、意思は大事だ。あ、これ、テスト出るからね？」

「そんな日が6日間続いた……」

「勇人さんはすごいです。料理もできますし、洗濯もやってきたというのがよく分かります。そして、修行では私よりも飲み込みが早くて羨ましいです。スペカの練習なんか」

は日に日に上達したいって、文句なしの出来上がりです。

ただ、朝には本当に弱いらしく、幽々子様と同じくらい寝坊助です。でも、いつも私が起こしに行くときに寝顔を見れるのでいいですが…いつもは少し何を考えているか掴めないポーカーフエイスですが、寝顔は幸せそうな顔をしています。

後は、毎日牛乳を飲んでます。なんでも背を伸ばすためとか…確かにおじいちゃんよりも低いですし、男性としては大きくない方なんでしょうが…わ、私も牛乳を飲むようにしようかな…

ある日、幽々様

「あら、まだ何もしてないの？チャンスは何回も無いわよ〜」

「え?!いや、何もって何をしたら…」

何回かアピールはしたんです!でも、効果が…彼は基本的に人との間をしつかり取るタイプのようにして…

「このまま終わっちゃうわよ?また、守谷神社に戻っちゃうわよ〜」

「な、な、何をすれば!?!」

「一緒に寝るとか?」

「え、ええええええ!」

「まあ、頑張つてね〜」

―6日目の夜―

「勇人、明日は妖夢との一騎打ちじゃぞ」

「あ、そうだった」

「明日の試合はいろんな人たちを呼んでるからね」

「え？な、なぜ!？」

「明日はね、元々ここで宴会をする予定なのよ、それでついでに試合観戦も兼ねようかとね？」

「そ、それでどなたをお呼びで…」

「まずは、紫でしょ、紅魔館の方でしょ、永遠亭は無理と言われたわね…あ、守谷神社もね、後はまあ、色々」

「は、はい」

人前でか…緊張するな…早苗達も来るのか…こりやあ、下手な試合は…でも、妖夢は相当強くなってそうだしな…

「あ、ルールはね、特に無し、気絶させるか、参ったというまでよ?」

「や、野戦スタイルですか…」

なんでもありということは、俺も戦いやすいが…あれ”も使えるんだな…

「まあ、とりあえず今日はしっかり休みなさい」

「そうですね…確かにもう眠い…」

今日は修行がキツかったからな…早く寝てしまおう…

「妖夢」

「は、はい」

「今日が最後のチャンスよ」

「……」

スーッ

もう寝てしまってますね、幽々子様曰く、彼は一旦寝たら中々目覚めないと…こ、これはチャンスです!明日で勇人さんはもどってしまいますから…

そろり、そろり…

「ん？誰だ…」

「!?」

ど、どうしました!?

「わ、私です、妖夢です」

「…どうした…」

「す、少し、こ、怖い夢を」

あー！もつとマシな言い訳ができないのでしょうか!?

「…そうか…」

「い、一緒に寝ても?」

な、何を!? わ、私は…

「……………いいんじゃない? ……」

え? も、もしかして寝ぼけてる? で、でも、チャンスです!

「そ、それではし、失礼します…」

あ、暖かいです。勇人さんは小柄だと言ってますが、やはり男性です。大きく感じま

す。

「…スウー…スウー…」

ま、また、夢の中へ戻ったようです…勇人さんはあっちの方に向いてますが、で、でも、う、嬉しいです…

そ、そういうえば、彼はいつももう一つ枕を抱くようにして寝てるのですが…今日は無いようです。

「…ん…」

ガサッ

こ、こ、こ、こ、こつちをむ、向いて…

「!?」

な、な、な、な、な！わ、わ、私は今!?

こ、これは抱きしめられてます!?

よ、より勇人さんの体温が…心臓の鼓動まで…普通です…

こ、これは良かったのでしよう!?!このまま…寝ても…

「あらあら……若いわね」

第28話

再試合の日の青年

「ふあ……あ……朝ごはん作らないと……」

それにしても、この暖かさはなんでしょう。まだ、眠っていたいです……

「スー……スー……」

「はっ！」

そ、そうでした！あ、あの晩………

ま、まだ、起きる気配は無いようです。

この暖かさの名残を惜しみつつ、私は起きて朝食作りにかかります。

今日は、勇人さんとの再試合です。今度こそ勝って……

と、とりあえず、成長したことをみんなに見せつけるのです！もう半人前とは呼ばせ

ません！

「昨晚はお楽しみだったわね〜」

「!?ゆ、幽々子様!？」

「妖夢と積極的ねえ、まさか、布団に入り込むとはねえ……」

「い、言わないでください!？」

「あら、でも、嬉しかったでしょう？」

「そ、それは…そうですが…」

「それは置いといて、今日は試合ね、頑張つてちようだい」

「もちろんです！」

絶対に負けませんからね！

―妖夢が闘志に火がついた頃、勇人は…―

「スー…スー…スー…はっ！な、なんだ夢か…今何時だ…まだ寝よう…」

二度寝に入った。

「さて、今日じやの」

「ああ、そうじやな」

「次こそは妖夢が勝つだろう」

「何を言つとんじや、勇人に決まっておる」

「妖夢はたった6日間で見違えるほどに強くなっておる」

「それは勇人にも言えるじやろ」

「じやがな、人間と半霊とでは純粹な力では半霊が強いに決まつとるからの…」

「人間か…勇人が人間であればいいのじやが…」

「何？勇人は人間だと言つたのはお主であらう」

「そうじやな」

「ところで妖夢は？」

「妖夢なら、朝食作り終えたら修行始めたわい、さすが我が孫よ、じやが、勇人は見当た
らぬが？」

「あ、あいつなら…寝とる…」

「ハハハハ！試合の日にまだ寝とるとは！流石のよう！」

「きゅ、休息も大事じゃぞ！」

「そうか、そうか」

―寺子屋―

「今日は勇人先生が試合をするそうだから、みんなで応援にいくぞ！」

「またですか？」

「なんでも、修行の成果を確認するためとか」

「ふふ…あたいの先生だから勝つに決まってるわ！」

「そーなのかー！」

「そうだよね！先生が負けるわけないもん！」

「やつと、先生に会えるんだね！」

「そうだね！もう1週間も会ってないだもの！」

（ここまで、生徒達に懐かれてるとは…さすがだな、勇人）

―守谷神社―

「諏訪子様！神奈子様！今日ですよ！」

「そうだね、一体どのくらい強くなったのかねえ」

「私達を超えたかもよ」

「やっつと、勇人さんに……」

「早苗……」

「これはお前の責任だからな？」

「すいません……」

―場所は戻って白玉楼―

「ほら、起きなさい、勇人」

「ん？幽々子様が起こしに来てる…まだ、夢か…」
「起きなさい」

ベシッ！

「痛っ！ほ、本当に起こしに来てるだと…！」

「あら、失礼ね、ところで貴方今日試合よ？」

「分かってますよ」

「緊張してないのね」

「いえ、してますよ。もう心臓がバクバクしてもうはち切れそうです」

「そうには見えないけど…」

「いや、自分あがり症なんですよ」

「そう、とりあえず、朝食食べたら？」

「そうですね…」

「おはようございます」

「うむ、おはよう」

「あれ？妖夢は？」

「妖夢なら、もう食べてしまつて今、修行しとるわい。お主も調整しなくていいのか？」

「ふん、随分と余裕そうだな」

「まあ、調整はある程度…試合の前に疲れてもね…」

「とりあえず、飯を食わんか」

「そうします」

「ごちそうさまでした」

よし、後は武器の確認つと…

まずは自動拳銃二丁と…うん、しつかり調整できてる。

予備に回転式銃と…これは使う機会あるかな？

ナイフもとりあえず、それと多分今回のキーとなる、このリストバンドみたいな、フックもどきだな、片方は針、もう片方はナイフだ。さらに…少しいじらせてもらって、靴にも仕込んだ。後は、「これ」だな。それにしても、銃の呼び名あったほうがいいかな…

「ふう…はっ！」

今日はかなり調子がいいです！目を瞑ってもどこに何があるかしつかり分かります。お師匠様の特訓のお陰で剣術にも磨きがかかっていると幸いです！

ーそして時間は試合の時間へ…ー

「あ！勇人先生だ！先生ー！」

「お？みんな来てくれたのか？」

「もちろんだ、頑張れよ」

「頑張ってね」

「ああ、しつかり見とけよ！」

「勇人さん！」

「ん？早苗、1週間振りだな」

「どうでしたか？何もされてませんよね？」

「だ、大丈夫だぜ？むしろ、しつかり鍛えられて…」

「よかった…とにかく、今日は頑張ってくださいね！」

「そうだよ、早苗の為にも勝てよー」

「諏訪子は…まあ、とりあえず精一杯頑張ってくれ」

「ありがとうございます」

「あれ？紅魔館の方々まで」

「少し気になつのでね…」

「まあ、ありがとうございます」

「あれから、また強くなつたのかしら？」

「なつていればイイですがね…」

「これまた、たくさんの人（ほとんど人じゃない件について）が来てるな…魔理沙もいたし、あまり接点のない、霊夢さんまで…」

「あ、紫さん達だ…」

うーん…緊張してきた…足が震えてきた…
「準備はいいかしら？」

もう、開始か…久々にここまで緊張した…

「大丈夫です！」

うわあ、やる気満々だよ…

「だ、大丈夫だよ？」

なぜ、疑問形にした？だよ？じゃねえよ！

「それじゃあ、始め！」

「有無を言わず、先手必勝！」

「ハッ！」

ピカッ！

「!？」

「くらえ！」

パンツパンツパンツ！

「よし…つて!？」

あら!?!いつの間に接近しやがった!?!

「同じ手は喰らいません！」

「ワフツ！」

ヒュッ

あ、危ない…初っ端、閃光弾でいけると思ったが…見切られてたようだ…

「近距離ならこちらが有利です！」

シユッ

「オワツ！ウエイ！」

避けるので精一杯だ…

「はああ！」

「やべっ！」

ガチッ！

な、なんとか銃で受け止めれた…

「ぐぐぐ…」

「む…」

てか？妖夢力強くなえ!?押されてるだど？

「オラァ！」

このままでは押し切られるので蹴りを

「……………!?!」

な!?!後ろ!?!

「人符『現世斬』」

ズサツ!

「ガフツ……ぐ……絶対『アブソルト・パズー』」

「ハッ」

手応えは十分です! 苦し紛れに何発か撃ってきましたが、弾速が他のより遅いので避けるに容易いです。

「はっ!?!」

後ろから、弾幕が!?!追っかけてきます!

「つく……」

距離を取らざるえませんね…

ですが

「はっ、はっ」

カンツ、キンツ

「さあ、もう終わりですか?」

「これならどうだ?」

「な!？」

あれは勇人さんの大技! 弾が勇人さんを囲うように回っていつてます、徐々に広がって…こ、これでは、避けられません。

「かくなる上は! 四生剣『衆生無情の響き』!」

こちらもただでは済みませんが…

バシッバシッバシッ…

「くう…は、はあああああああ!」

い、いました! 弾幕を制御しているので隙だらけです!

「な、な!」

ズサッ!

「ガハッ…んにやろう…」

「これで終わりじゃ無いですよ」

「!？」

同時に弾幕を展開してあります。剣術だけでは無いのです。

「しまっ…」

ドォーン…

「ふう…」

終わったのでしょうか？

「……！」

「はあ……はあ……」

「もう、ボロボロじゃないですか！これで勝負あります！」

立つのが精一杯のようです。目の焦点もあってません。

「ツククク……フフ……」

「!?」

わ、笑ってます!?頭がおかしくなってしまったのでしょうか？

「別に……頭は正常だよ」

「え!?」

「顔見たらわかるよ、何を考えてるか」

「でも、もう、貴方は立つだけで……」

「だが、男として『参った』は言えんだろ？」

「なら、気絶させるまで！」

「ふ……さあ……真正銘の必殺技！」

何を!?何か液体らしきものが入ったものをいくつか宙に投げて……

バンツ！バンツ！バンツ！パリンツ！パリンツ！パリンツ！

「血!？」

な、何故？

「は!？」

血が霧状に拡散して…これは!?

「永華 『百世不易の血華』!」

糸が血に濡れてはつきりと…

バリバリッ!

「!？」

な、何が…

「ん…わ、私は!」

「おう、目覚めたか」

「勇人さん、それにお師匠様と幽々子様…」

「妖夢」

「お師匠様…すいません…」

「何を言つとる、素晴らしかったぞ、お主の剣技見事じやった」

「お師匠様…」

「そうよ、前よりとっても強くなつたわよ」

「幽々子様…」

「本当だよ、マジで負けるかと思つた…あの技が、決まらなかつたら負けたな」

「その技なのですが、あれはどういつた原理で？」

「永華『百世不易の血華』か？あれはだな、前々から考えてた技だ。もつとも、使つたのはあれが初めてだが。」

「まあ、原理は俺の血にある。と言つても永琳さんから聞いたただけだな。あの人いつの間にか採血して調べてんだもん」

「血と何の関係が？」

「俺の能力は血によつて作動するのは知つてるよな？」

「はい」

「それと、もう一つ性質があつて、靈力を流しやすいらしい。そんでもつて、お前と戦つ

てら間に糸を張り巡らせといて、俺の血を巻いて…糸に靈力を流す。そうすつと、血を被ったお前は糸から流された靈力を浴びて気絶つというわけ」

は、はあ…

「でも、糸はいつ？」

「まず、足から撃つたやつが1つ」

「それは見ました」

「で、それは、ぐるつと回っていて、適当なところに刺さつて、もう1つは初めに閃光弾撃つた時にもう1つの足から自分のいる場所に、両手のは弾幕を張った時に」

全て、私が見えてない時に…

「で、血を被ったことで糸は空中にあることを不変化して靈力を流すつと」

「それで、急に糸が出現したように…」

「それにしても、あの弾幕は美しかったわ」

「そうですか？」

「だって、貴方の靈力目に見えるくらいに流れて、赤い霧の中を青い稲妻が走っているように見えたわ、あと、レミリアとフランがすごく興奮してたわね」

「カオスだと思わんですが…」

でも、勝てなかったのですね…

「何を落ち込んだる？落ち込んだる暇があったらもつと強くなろうと思え！」

「そ、そうですよね！もつともつと修行しないと！」

「そう言えば、貴方はいつの間にあの血を？」

「寝る前に少しずつ、まあ、多用は出来ませんね」

「ずつと準備をしてたわけですか……」

結局、彼の考えには迫いついていなかったのですね……

「でも、今度こそ！勝ってみせます！」

「そうね、これからも頑張りなさい、ま、そんなことは置いといて、これから、白玉楼主催の宴会よ！」

そっちの方が楽しみですか……

「そうだな、俺も白玉楼での生活終了ってわけだ」

「そ、そうですね……」

もう、帰るのでしたね……

「さあ、みんな待つてるわよ」

「よし、行くか！」

「は、はい！」

精一杯楽しんでまいりましょう！

第29話

修羅場？の日の青年

今、思うんですが、ここの人は宴会ばかりしてませんか？

俺的には宴会よりも休みたい…と思っても、参加しないなんてのは野暮なんで参加しますが。ただ、お酒の良さがまだ分かってない、今日この頃。

「とりあえず、貴方たち着替えなさい」

それもそうだな、俺の服は所々破れてしまってる。妖夢に至っては、俺の血のせいで、殺人鬼みたいになってる。やり過ぎたかな？

「妖夢、すまない、血で汚しちまって」

「あ、大丈夫です……」

「妖夢はお風呂に入らないとね…」

「ええ、そうします」

「で、宴会はいつからですか？」

「2時間後によ」

まあまあ、時間があるな。仮眠ぐらいしてもいいだろう。

「お? 勇人」

「ああ、じいちゃん、どうした?」

「いや、お前さんを労いにな、良かったぞー、さすがじゃ!」

「どーも、しつつかし、今更なんだが、教師の俺が強くなる意味はあるのかね?」

「幻想郷に生きてる限り強くないと食われちまうぞ」

「へいへい…」

そうだった…ここでは常識なんて通用しないのだった…

「ふあ…寝みい、少し仮眠取ってくる」

「そうか、宴会には遅れるなよ」

「了解」

早く寝てしまおう…

「それにしても…しつかり汚れちゃって…」

「そうですね…髪も血で…」

でも…勇人さんのだと思うと…

「あら、顔赤いわよ〜」

「ふあっ!?そ、そんなことは…」

いけません、少し不純なことを…でも、吸血鬼でも無いのに血で少し気分が高揚してしまうとは…

「早く洗ってしまいなさい」

「そうですね」

「勇人さんはどこでしょう?」

「休憩してるじゃないのか?」

「そうだな、どうせ、宴会で会うだろう」

「いえ!今、会いに行くです!」

「と言つてもね、早苗、どこかさっぱりじゃないか」

「おや?あそこに人が…」

「すいませーん!」

「い、いつの間に…」

「なんじゃ?」

「すいません、勇人さんをご存知ですか?」

「ああ、わしの孫じゃが?」

「何!?!」

「そ、そうですか!わ、私は東風谷早苗と言います」

「あー！あの守谷神社の！いつもわしの孫が世話になつとる」

「いえいえ、そんなことは……」

「で、お主たちは？」

「私は洩矢諏訪子さ」

「八坂神奈子だ」

「あー、どこかで聞いたことがあるのう」

「それは光栄なことで、貴方の話はよく聞いてます」

「ありや、わしのこと知つとるのか」

「ええ、有名なので」

「そうか……まさか、わしを連れ出す気は無いじやろ？」

「……!?だ、大丈夫ですよ、別にそんな気は無い」

「そうか、なら良かった、ところで勇人のことじやったな。あいつは疲れて向こうで寝とる。あまり起こさんでくれ」

「ありがとうございます！」

「これからも、勇人と仲良くしてくれ」

「はい！」

「それじゃあの」

「神奈子…」

「ああ、分かっている」

「どうしましたか」

「勇人のじいさんだが、やはり本物のようだ」

「何がです？」

「あいつは天降りをした神様で有名なんだよーそれも、相当な実力者なのに。少し私がかマをかけたが、威圧されてしまったよ。久々にビビってしまったよ」

「神奈子様が…」

「まあ、手を出してくることは無いだろう、ほら、勇人のところへ向かわなくていいのかわかっている？」

「そうでした！早く生きましょう！」

「ふうー…さっぱりしました…」

血はすぐにとれました。少し勇人さんに会いに行きますか…

多分、寝室で寝てるでしょう。眠そうでしたし。

「妖夢」

「あ、お師匠様。何かご用で？」

「そうじゃ、お主ももういい歳だからの…その…身を固める気はあるか？」

「え？それは…その…えっと…」

「あるようじゃな、相手じゃが…」

え？もしかして、縁談の話が…わ、私は…

「幽々子様と話し合ってたな…勇人にしたらと」

「!？」

「べ、別に強制はせん。ただ、候補としてどうかと、あいつも勇人が決めたら構わないと言っておったからのう…」

「わ、私は…べ、別に、構いません…むしろ…」

「そ、そうか、なら良かった（く…もう妖夢も子供じゃないのか…）」

「と、とりあえず、勇人さんと会って来ます…」

「スー…スー…」

「勇人さん……って、やはり寝てますか…」

「ここに居るのかな?…って、妖夢?」

「早苗さんじゃありませんか。何かご用で?」

「いえ、少し勇人さんに会いに」

「そうですか、ですが、今はお休みなので後で…」

「なら、妖夢さんも後にした方が…」

「むむ……」

「うん……」

(とりあえず、今はお引き取りください！)

(そう言う貴方こそ！)

(私は勇人さんを見守る役割が！)

(それなら、私がやりますから、大丈夫です！)

(それに私は勇人さんと大切な話があります！)

(私にもあります！)

(わ、私は祖父との話し合いで、え、えん……)

(何です!?)

(と、とりあえず、大切な話があります！)

(むむ……)

(むむ……)

「ふあ……よく寝た……もう時間かな？」

「!?!」

「あ、妖夢に早苗じゃん。どうした？」

「わ、私は勇人さんと大切な話が……」

「みんな、宴会始めるわよ」

「お? ジャストだな。とりあえず、宴会に行こうぜ?」

「はい…」

「とりあえず、久々に会いますので、一緒に飲みましょう!」

「い、いいぜ(な、なんだ、なんか恐怖が…)」

「今回は人数減ったから、そこまでおおさわぐ「先生ー!」ゴフツ!」

グオオオ…は、腹に…

「ど、どうした…フランドール…」

「先生、みんなで食べよう!」

「そ、そうだな…」

「むむ…」

「ちよつとすまない、生徒達の所に行ってくる」

「は、はい…(今は我慢です!)」

「あー、先生だー!」

「先生、お疲れ様です」

「でも、なんか顔色悪くないですか？」

「とりあえず、飯なのだー」

「だ、大丈夫だ…それよりも、今日はわざわざ来てくれありがとな」

「なあに、それよりもお前の戦い素晴らしかったぞ！」

「やっぱり、先生はサイキョーね！」

「どうも」

「そうだね、とてもカッコ良かったですよ！」

「ははは、そう言ってもらえると嬉しいぜ」

「お？ 勇人じゃん」

「あ、魔理沙と…霊夢さんですね？」

「別に呼び捨てでいいわ」

「そうか」

「それにしても、お前すごかったな、妖夢も強くなってたしな」

「そうね、前よりは強くなったわね」

「でも、霊夢よりは弱いかな」

はは…：霊夢ってそこまで強いのか…男としては負けられないが…

「分からないわ、だって、貴方、手加減してたでしょ？」

「まさか、本気だ」

「ふーん…」

「で、あんたの弾幕には足りないものがあるぜ」

「なんだ？」

速さか？

「パワーが足りてないぜ！」

「いや、パワーあつて当たらなかつたら意味がない。しっかりと当たる方が确实だと思うが？」

「何言ってるんだ！パワーが最強にきまつてんだろ！」

「こいつ、酔ってます？」

「ええ」

「誰か、サイキョーって言ったか？」

「そうさ、チルノ！パワーは最強だぞ！」

「いや、違うね、頭使った方が強いね」

「どっちなのか？」

「チルノに頭使うは無理なのだー」

「そんなこと言うなよ……」

「ま、とりあえず、今日はお疲れさん」

「ありがとうございます、慧音さん、みんな。明日からちゃんと授業くるからな！」
「やったー！」

「ふー……このジュース久々だな……」

「少し一人でジュースを飲んで。なんでも、紫さんが輸入したそうだ。スキマってスゲー。」

「あら、一人かしら？」

「どうも、レミリアさん」

「貴方、なかなかやるじゃない」

「褒め言葉、光栄です」

「私の従者になってみる気はない？」

「残念ですが、教師という職務があるので」

「あら、そう」

「まあ、また、紅魔館に行かせてもらいますのでその時はよろしく」

「いつでも、構わないわ」

「っと、紅魔館からの勧誘もあつたところで、そろそろじいちゃん達のところに行きま
すか。」

「おー! 勇人ー!」

「お? じいちゃん、酔ってる?」

「何言つたんじや、まだまだじや、な?」

「そうじや、お主には話さないといけないことがあるからう」

「そ、そうですよ!」

「妖夢も酔ってる?」

「そうよ」

犯人は貴女ですか…

「私達も話があるんだが…勇人とじいさんと」

「そうです!」

「?わしにか?」

「とりあえず、勇人に聞く!」

「はい?」

「お前は早苗のことはどう思っている!」

「ん?」

なんだ?みんな静かになって…うわっ、早苗めっちゃ見てる…

「んー、命の恩人として、居候させてもらってさらにお世話もしてもらって、感謝しきれない人ですかね」

「それだけか?」

「え?」

なんで、みんな残念そうな顔を…早苗…そんな顔で見ないで…

「そうじゃ、勇人」

「なんだ、じいちゃん」

「お主もいい歳じやろ?身を固めたらどうじや?」

「まだ16ですが…」

「そこでじやな…」

話聞け。

「妖忌と話してだな…」

「うん、ごくつ」

「妖夢とどうじや?」

「!?ゲホツガハツゲホツゲホツ…オエツ」

「ワシの妖夢じやダメか?」

「私は…構いませんよ?」

「……………!?」

「な!」

「ちよつと待った!」

「なんじや?」

「その相手に早苗じやあダメか?」

「しかし……」

「わ、私なら勇人さんと長く一緒に暮らしてますし、それに勇人さんのことが好きです
から!!」

「!?」

この娘とんでもないこと言わなかったか?

「しかし…勇人は普通の人間であるとは言い切れん。おそらく、寿命は妖怪並みじゃ
ろ」

え? マジで? だからか! 身長があまり伸びないのは!

「わ、私だって、ゆ、勇人さんのこと…好きですよ!」

な、なんだってー!!

「じゃあ、聞こう。どうして、わしの孫を好きになった?」

おい、やめてくれ…頭がショート寸前だ。何がなんだか……

「わ、私は最初、助けてあげてから、一緒に暮らしていると…勇人さんはいつも手伝い
をしてくれたり、私のために何かできないかと言ってくれたりと心遣いができる人でそ
の優しさに惹かれたのと、私自身、ここに来て日が浅い方なので、外から来た勇人さん
のおかげで精神的にも助けられました!」

お、おお…

「そうさ! 同じ外の世界出身者同士結ばれるのがいいさ!」

「それはどうじゃか」

「わ、私は…当初は剣と銃ということ、剣の素晴らしさを教えるつもりが、勇人さんの強さに見惚れました！それでもって、はたから見れば何も考えてないようですが、誰よりも負けず嫌いで、自分の信条を貫く勇人さんの姿にいつの間にか、惚れていました！」

「そうじゃ、武器は違えども向上心の高さは同じ、2人して互いに高められる関係なんて素晴らしいじゃろう」

あ、ああ。

(じいちゃん、これどうすれば…)

(これはお前さんの問題だ、自分でしっかり考えなさい)

(そ、そうだよな…)

「お、俺は！……………」

頼む、2人ともそんな目で見ないでくれ…

「少し時間をくれ」

ど、どうすれば？こ、これは、世に言う告白ってやつですよ？しかも、2人も!?!やばい、全然意識してなかった…冗談ってことは…

「……………」

無いようです。

ガシッ!

「わ、私じゃダメでしょうか?」

「ヘアッ!」

さ、早苗何を!? あ、あ、あ

ぎゆ

「あ、あた、あた…」

「私の方が妖夢さんよりスタイルがいいと思います!」

ガシッ

「アヒャ!」

「ゆ、勇人さんはスレンダーな女性が好きなんですよね?」

ああ…お、俺の許容量を超してる!

「わ、私は勇人さんとキスしましたよ!」

シュー… 「は!」

「私だって、お、同じ布団で寝ました!」

「は!?!は?」

は? は? 何? 理解不能、理解不能。そんなことは記憶に……無い! 探したけど無い!

「そ、そんなことはして」「したんです!」「ア、ハイ……」

「む……かくなる上は、勇人さん!」

「はい!」

チュウ

「!?!」

え?え?あら?今……

「よ、妖夢さん!」

「な!よ、妖夢、お主……」

「……ん……ん」

ふえ?く、口の中に舌入れてんのか!?

「プハツ……ここ、これで、私の方が……」

シュー……ボフツ

「ゆ、勇人さん?」

「は、はは……」

バタッ

「ゆ、勇人さんとキスしてしまった……」

プシュー……

「妖夢!？」

「わ、私もって勇人さんは!？」

「あれ?どこ、行った!？」

「よ、妖夢しつかりせい!」

「はうあ…」

ヒュー…ボスッ

「うーん…」

シュー…シュー…

「ほら、勇人、いい加減にしつかりしなさい」

「グフウ…」

「ダメね、藍、水を」

「はい」

バシヤツ

「は!?!わ、私は!?!」

「あら、まだ治ってないわ」

バシヤツ

「ふー…俺は…」

「妖夢とキスして失神寸前。見た目によらず初心ね」

「ぬあ!?!き、き」

「はいはい、落ち着いて」

「はー…スー…はー…よし…で、なんで紫さんが?」

「本当はあのままほっといて良かったのだけれど、どうしても、貴女に聞かなければならないことがあってね…」

「結婚はまだ考えてませんよ!?!」

「違うわ、外の世界のこと」

「え!?!」

「貴方、まだ外の世界に未練があるのでしょう?」

「そ、それは……」

「幻想郷は貴方を既に受け入れてるわ、でも、貴方は心のどこかでまだ外の世界に未練を残してるせいで、幻想郷を受け入れてない」

「うつ……」

「それに、今はあの2人のどちらかと結ばれるのだから、外の世界の女の子に未練残したままじゃね？」

「ホワツツ!? そ、そんなことはないっすよ……」

「と言うわけで、貴方に1週間外の世界に、里帰りしてもらおうわ」

「へ?」

「だから、里帰り」

里帰りね…帰省ね…

「へ?」

「スキマ送りにするわよ」

「は、はい、里帰りですね!？」

「詳しくは後日連絡するわ、それじゃあ、また、楽しんでくださいね」

「ぬおおおお!」

ボスッ

「……ツテテ……」

「あ、勇人ひゃん！」

「よ、妖夢!」

ギユッ……

前から抱きつかないでくれ……

「勇人!どこに行っておったのじゃ!」

「妖忌さん!」

「全く……これからワシの義理の息子になるというのに……」

「ちよ、まだ答えは……」

「私ではダメですか?」

「うっ……」

「あ!勇人さん!そこにいたのですね!」

う、後ろからだ!だ、だから……あ、あた、あたた……

「ほら、勇人も男だろ?」

「そうだ、守谷神社の婿としてしっかりしてくれ」

「だ、だから、答えは！」

「は！周りの視線が！」

「ヒュー、よ！色男！」

おい、魔理沙。

「先生モテモテだなー」

「え！先生は私のだよ！」

「そうだー、そうだー！」

何を言ってるんだ？

「はは、さすがだな勇人」

言ってる場合ですか。 どうしよう…これでは、俺の容量だとすぐにいっぱい…

「もう一度キスをしましょう！」

「pardon？」

「いえ、今度は私と！」

「勢いするのは後悔するぞむぐつ!？」

「プハツ…二回もしてしまいました」

「あ、あ…」

「私だって!」

チュウ

シュー…ドフンツ!

「あはは! また、気絶してんよ!」

「なんで、慧音隠したんだー」

「お前達には早い!」

「勇者…強くなれよ…」

第30話

未練の日の青年

「ぐおお……頭が……」

ち、畜生……キスで気絶してしまうとは……はああ……勢いでしたら後悔すると思うのに……

「よっころしよ……おろ？」

あるえ？立てない。

「……ほら、早苗に妖夢、起きろ」

すごいパワーだ……男の俺が全く動かせん。でも、これでは両手が……ん？両手に花だなって？あんたはだーつとれい！

「起きてくれ……ほら」

どうするか……

「そうだなー、今日は授業も無いって慧音さんが言ってたな……一人で人里に行こうかなー……」

かばっ！「私と一緒にいきましよう！」

しめた！

「ほっ」

「あ」

「冗談だ、今日は授業あるから」

「だ、騙しましたね！」

「狸寝入りしてた奴らには言われたくない」

「うっ……、で、でも、昨日の答えはまだ聞いてません！私と妖夢どちらがいいのですか
!？」

「そ、そうです！」

「だ、だから……」

「今の彼じや決められないわよ」

「ゆ、紫さん！」

いつもは場をかき乱すが今回は助け舟を……

「彼には外の世界に好きな娘がいるからね」

「残念だったな……助け舟じゃなくタイタニック号だった……」

「え!？」

「だからね……」

「ほ、本当なのですか!？」

「あ、いや、その、えーつと……」

「本当なんですわ……」

「それじゃあ、外の世界に帰る気が……」

「安心なさい、それは無いわ」

「え？」

「もう、彼は立派なここの住人よ？ただ、未練タラタラでここにいられてもね……」

「うっ……」

「というわけで彼、一旦里帰りするから」

「「ふあ!」」

「あ、それで思ってたんですがいつですか？」

「明日よ」

「え？いや、明日は早すぎますって、また、授業に参加できない……」

「慧音には言ってるわ」

「いや、でも……」

「あら、貴方にしては珍しく怖気付いてるのね」

「くっ……勇人さんには思いの人がいるとは……」

「これで、分かったかしらね？彼は外の世界に行つて未練断ち切つてくるから、帰つてきたら十分にアピールしなさい」

「はい！」

「そ、外の世界に……つて」

いつからだ？自分がいた世界がまるで異世界みたいな感覚になっている……

そのこと、どこかで嫌がつている……自分がそこにいたことがもう無かつたことになつて、なぜか不安に……

ここで生きてくと決めたはずなんだが……

「勇人？」

「あ、す、すいません……」

「いえ、大丈夫よ……」

「それじゃあ、授業が終わつた後詳しく話すから」

「分かりました」

考えても仕方がない。とりあえず、寺子屋に行くか。

「それじゃあ、寺子屋に」

「は」

「行ったわね……」

「負けませんからね！」

「わ、私も負けませんからね！」

「ちよつと、お二人さん」

「な、なんでしようか？」

「勇人のことについてなのだけど……」

「?」

「今から話す事は真面目な事だから聞きなさい」

「は、はい」

「彼は外の世界に行つて、様々な事に区切りをつけてくるでしょう。それは外の世界で完全に忘れ去られる事。彼がいたこと、した事、全てが無かつたことになるわ」

「ここは幻想郷——つまり、忘れ去られたものが集まるところ、彼がここに馴染む事は、外の世界で忘れ去られる事と同じ」

「外の世界で区切りをつける事は外の世界でのことを全て捨てることになる。それが簡単に済まされることでは無いわ。多分、相当傷つくことになる」

「でも、彼のことだから、きっと表には出さないでしょう。なんだって、あの人の孫だもの……彼もそうなることをどこかで分かつてたのよ」

「それで、貴女たちはそんなことになるだろう彼を支えられる自信があるかしら?彼をこの幻想郷で再び生きていこうと立ち直らせることができるかしら?その自信があつて

こそ、彼の隣にふさわしいんじゃない？」
「……………」

「勇人」

「なんででしょうか？ 慧音さん」

「お前は明日、一旦里帰りをするのだろうか？」

「そうです」

「そうか……………けじめをつけるんだな？」

「……………はい」

「なら、しっかりつけてこい！そして、ここに戻ってこい！安心しろ、みんないるからな
！」

「あ、ありがとうございます！」

け、慧音さんは全てお見通しだった様だ：

「はあ…」

「どうした？早苗？」

「諏訪子様…」

「わ、私は本当に勇人さんと一緒にいる人にふさわしいんでしょうか？」

「ど、どうしたんだい？急に…」

「実は……」

少女説明中……

「そういうことか…勇人も苦労してたのか…」

「私は勇人さんを支えられるでしょうか？私は勇人さんほど心も強くありません…」

「何言ってるんだい！」

「す、諏訪子様!？」

「支えられるか、だって？支えるんだよ！勇人のこと思ってるのなら、どんなに下手でも精一杯支えるのが大事じゃないのか？」

「………そうですよね！やってみせます！」

「……………」

「妖夢」

「なんででしょうか？」

「お主、何か悩みがあるだろうか？」

「いえ…ありませんが…」

「誤魔化さんでいい、バレバレじゃ、そんなにため息つかれると」

「す、すいません……実は……」

少女説明中…

「そうか、勇人が傷ついてしまつて帰つてきたら、それを癒してあげれる自信が無いと」
「面目ないです…」

「いや、これは難しいことじゃ、ワシは少なくともできておらん？」

「勇人の祖父である、あいつとは昔からの付き合いであり、いがみ合ってはいるが、大切な友として師としてあいつを尊敬している」

「師としてですか？」

「ああ、あいつはワシよりも随分年上だからのう……幼き頃はあいつからしばかれたわい」

「師匠が……」

「まあ、そんなあいつだが、天降りをしたということを聞いた時は驚きはしなかった。前々から聞いてたからな。で、天界の者たちにより死んでここに来たという知らせを聞いてここに戻って来た……」

「あいつは飄々としてるようだが、自分の死よりも、勇人がここに来たことにショックを受けておる」

「え？」

「勇人がここに来たことは多分、天界にバレてしまったことと同じ。そして、まだ若い彼に今までのことを捨てさせることは相当心にきたようでの……友であるワシは何もできとらん……」

「師匠……」

「じゃが、お主は違う、まだ若い故にどうにかすることができ、ワシからもあいつの友として頼む、勇人を支えつてやってくれんか？」

「もちろんです」

「明日か……」

第4章 現代入り

第31話 帰省の日の青年

「……寝れん……」

もう、12時過ぎただろうか？ 普段なら夢の中にいるはずなんだが……今日はまったく眠くならない。にしても、久々に守谷神社に戻って来たな……

明日、持っていく荷物はもう必要最低限準備している。どこで寝泊まりするのかとか色々聞きたかったが、明日で全て説明すると言われた。流石に銃やナイフは持ってかない。

それにしても、一旦とはいえ戻るのが……もう、ここに来てから半年は経つたのではないのだろうか。光陰矢の如し、まさにその通りにあつという間だったな……みんなは俺のこと覚えてんのかな……もう、忘れてしまった人の方が多いかもしれないな。

「ふあ……眠い……」

やっと、睡魔が来たようだ。とりあえず、今は寝てしまおう……

「……ん〜……」

もう、朝か……自分で早起きするとは、もう末期だな。

「おはよう」

「あ、おはようございます、勇人さん。自分で早起きするとは珍しいですね」

「まあ、今日は久々の里帰りだからな」

「そうですね……」

「とりあえず、1週間またいなくなるがよろしくな」

「はい！」

本当に早苗たちにはお世話になっているな。ここに来た時からずっと。いつかは、恩返しをしないとな。

「それじゃあ、朝ごはん食べましょう」

「あれ？ 神奈子様と諏訪子様は？」

「昨日からお出掛けです」

「そうか……」

「……………」

な、なんだろう……この空気。すごく気まずい……いつもは、うるさい諏訪様がない
せいか……

「ゆ、勇人さんは向こうで何をやる気なんですか？」

「あ、ああ……そういえば、何も考えてなかったな……とりあえず、みんなの顔が見ればい
いかな」

「そうですね」

「そうだな」

もう少しましな返答はできないのか……俺……

そんな空気のまま、朝ごはんは食べ終え、約束の時間になった。

集合場所は博麗神社と聞いている。

「勇人く？」

「は、はい、ここにいますよ、紫さん」

「あら、準備完了ね」

「もちろんです」

「それじゃあ、外の世界に行く前にいくつか説明をしておくわ」

「はい」

「まず、こちらの世界と向こうの世界では時間軸がずれてるわ」

「と言うと？」

「まあ、簡単にいえば軽く浦島太郎状態ね」

「ど、どのくらい……」

「もう、向こうじゃ、3, 4年は経ってるんじゃない？それに応じて貴方も3, 4年すぎた体になるわ」

は、はあ……よかった……100年単位だったら泣くところだった。

「それと、向こうの世界での貴方は本来もう”存在しない”人なの。つまり、それを無理矢理捻じ曲げて向こうに行くことになるわ」

「何か、問題か？」

「あまり、言いたくないけど……向こうに行ったら、貴方は認識されないわ」

「?」

「うーん…なんて言えばいいかしらね…人としてそこにいるにはいるのだけど…貴方と認識されないわ」

「つまり、石ころみたいなの？」

「んー、そんな感じかしら? だから、家族も例外じゃないから、別れの言葉を直接、伝えられないわ…」

「そ、そうですか…でも、手紙とかで間接的にはできるのですよね?」

「ええ、あと、期間は1週間、宿は私がつてあるわ」

「そうですか、何から何までありがとうございます」

「いいの、それよりもしつかりとけじめをつけるのよ」

「はい」

「それじゃあ、開くわよ」

空間からスキマができる。ついに行くのか…

「あ、そうそう、これを渡しておくわ」

「これは?」

お札が何か?

「それは、連絡用のお札よ。もしものことがあったら、それで伝えれるわ。使い方は靈力

を込めるだけ、いい?」

「了解です」

「それじゃあ、いつてきます」

「ええ、いつてらっしゃい……」

「これでいいのかしら?」

「ああ、これでいい……あいつには本当に悪いが……だが、このままでいるのが、一番あいつに悪いことじゃろう……」

「すっかり、おじいちゃんね」

「そうじゃな……」

「ついに来たか……」

周りには幻想郷とは程遠い、自然控えめの景色だ。だが、俺にはひどく懐かしく感じ
てしまう。あまり、かわってないようだが……自分の家も変わってないだろう。鍵は一応
持っている。

「あつた、かわってねーな……」

懐かしき我が家である。車も変わってない。この時間的に登校時間と出勤時間じゃ
ないか？両親は共働きでみんな一斉に外に出る。

「あ……」

弟か……3, 4年過ぎてるだろうと言ってたから、もう高2ぐらいか……身長も大き
くなって、俺よりも大きいな……は？俺も3, 4年すぎた体になるはずじゃなかつたけ？
ま、まさか……俺は成長しないのか……？

「いってきます」

「いってらっしゃい」

あんまり、変わってないや……

「あ、おはようございます」

「お、おはようございます……」

紫さんが言っていたのは本当か……他人のように挨拶をされた。そうだよな……

「私も仕事に行くか……」

お母さんも出るようだ。ということとはもう家には誰もいなくなる。

お母さんが家を出たのを見計らって、あれは家の中に入った。

「本当に変わらないな……」

物の配置が全く変わってない。あ、でも……

「やっぱり、死んだことになってるよな……」

仏壇に遺影が……もちろん、俺だ……それにしても、ヘツタクソな笑顔だな。目が笑って

ない。

そうだ、自分の部屋は？

「おう……」

半ば弟の物置と化してる。クローゼットの中は……

「……」

俺の物ばかりだ……律儀に整頓されてる……これは……写真か……

確か…みんなで旅行に行った時のだな、たのしかったな…

あれ？なんでかな…雨が…ダメだ…大切な写真が濡れてしまう…

「……………なんでだ？……………」

そうか……………泣いてるのか…俺は泣いてるのか…

ひとしきり泣いた後、俺は写真をそつと置いて、家を出た。

もう、大丈夫だ。元気に暮らしてる。それだけで大満足だ。寂しいけど、みんなが不幸になっていないなら、それでいい…

「時間、すごく余ったな…」

目的もほとんど終わってしまったな…この様子じゃ、俺が分かる人は1人もいないだろう。蓮子も、友達もみんなダメだろう。

少しぶらぶらするか…

俺くらいならもう大学生か…ただ、俺の体は一向に成長しないのか？いや、まだ希望は…あるはず…170越さないのはやめてほしい。

「んっ(ハハ)お…」

ああ、蓮子に連れて行ってもらったカフェか。こここのコーヒーは美味しかったな…お金もある程度貰ったしここでゆっくりするか…

「いらつしやいませ……」

相変わらず、無愛想だな。別にひどいものを出すわけではないが。

えーつと……いつもの席は……あった。

蓮子に教えて貰ってから、ここに結構行つてたりする。で、お気に入りの席もしつかりとある。隅つこの席だ。

「コーヒーをひとつ」

「分かりました」

ふー、やつぱり落ち着く……と、俺は懐からキーホルダーを出す。これは、誕生日に弟から貰ったやつだ。けっちいなどか言つたが、少し嬉しかったりして……

「あ、そこ私のお気に入りの席……」

おや？……ここをお気に入りとか言う人が……随分と物好きな……

「!?!」

れ、蓮子？ま、まあ、俺のこと分からないだろうが。

「すみません……席、変わりますか？」

「あ、どうも……すみません……!?!」

ど、どうした？顔をじーつと見て……やめてください。人に見られて興奮しませんから、むしろ、やめろ。

「……勇者……？」

「……へ？」

第32話

再会の日の青年

今日は、サークルの活動を話し合うためにカフェに集合することになった。まあ、2人しかないけれど。

「……いらつしやいませ」

相変わらず、無愛想だわ……このコーヒー好きだからいいけど。

とりあえず、いつもの席と……

「あ、そこ私のお気に入りの席……」

いつもはあそこに座る人なんて見たことが無い。1人を除いて。まあ、もうその人はいないから、かなり物好きいな人なのかしら。

「すいません、席変わりますか?」

気を遣わせてしまったようだ。申し訳ない……

「あ、どうも……すいません……!?!」

え!?!その顔……その声……

「勇人……?」

「……へ?」

「貴方、勇人よね? 碓氷勇人?」

間違いないわ、この人絶対勇人だ。勇人は死んだとか言ってるけど、あの事故は不可解過ぎる。

「い、いや、人違いですよ」

「でも、そっくりじゃない、むしろ瓜二つ」

「そ、そうなんですか、ほ、ほら、言うじゃないですか。世界には似ている人が3人はいると」

「ふーん……」

確かにそうかも……

「そ、それじゃあ、これで……」

「ちよ、ちよつと待ちなさい!」

「い、いや、なんで?」

「絶対、勇人だわ。その振る舞い、顔、声、勇人じゃない」

いや、こんなにそっくりな訳が無い。

「似てるだけですって、それじゃあ……」

こうなったら……

「待ちなさい！チビ！」

「……………あ？」

確信したわ。この反応は……

「やっぱり、勇人じゃない」

「……………!?な、何を？」

やっと、動揺を見せたわ。

「はい」

「あ、どうも……」

このタイミングでコーヒーを出さないでよ……

ん？一緒にクロワッサンも……クロワッサンはメニューには書いてないし、その頼み方を知ってるのわ私と……

「ねえ、なんで、クロワッサンが裏メニューにあること、知ってるのかしら？」

「!?いい、いや……それは……」

「そのこと知ってるのは私と勇人のだけなんだけど……」

「ご馳走様でした!」

「もう、行かせないわ!」

「くっ……」

さあ、観念なさい……

「はあ……そうだ……俺は碓氷勇人だ……これで満足か?それじゃあ、帰るぜ」

「待ちなさい!」

「なんだ?」

「なんだ?じゃないでしょ!何よ!3年間も行方不明になって!もう、みんなは死んだっていうじゃない!」

「……」

「なんで……勝手に……消えるのよ……」

涙が止まらない。だって、本当に死んじやったかと思っただもん……

「すまん……」

勇人が抱き締めてくれる……確かな暖かき、存在している証拠……

「馬鹿、この大馬鹿」

「わ、悪かったって、それに理由は山よりも高く谷よりも深いわけが……」
「そう……なら、そこで話してよ……」

久々にそこで話してよ……

「了解」

「で、泣くのは済んだか？」

「ええ、それじゃあ理由は？」

「……」

「言うのじゃないの？」

「今から言うことは信じれるか？」

「え？」

「今から話すこと全てお前は信じれるか？つて聞いてる」

「……ええ、信じるわ」

「分かった、それじゃあ……」

―青年説明中……―

なんてことなの？異世界に行ったの？今はそこで暮らしてる？もう、勇人がここで認識されることは無い？それなのに私は認識できる？

「どうだ？つて、信じれるかと聞いたが、信じるわけ無いよな…」

「いいえ……信じるわ」

「そうだよな……こんな阿呆なことつて、信じるのか？」

「ええ」

そんな不思議なこと、すでに体験済みよ！何より、ちようどいいわ……

「信じるに決まってるわ、なんせ、私は秘封倶楽部なのよ！」

「はあ？秘封倶楽部だあ？なんだ、オカルトサークルか？」

さすがね、名前だけでそこまで察するとは……

「ただのオカルトサークルじゃないわ。結界を暴こうとしているの」

「これまた、大層な……メンバーは？」

「そうね……一応2人だけだわ」

「ふーん……まあ、頑張ってくれ」

「貴方も手伝うのよ？」

「はあ？勘弁してくれ」

「蓮子はいるかしら？」

「ん？誰だ？」

「あ、メリーね、こっちよ！」

「あら、そこにいたのね……って、その彼は……」

「ああ、それはね、少しこっちで話すわ」

「ふう……相変わらず、美味しいな……」

――少女説明中……――

「へー……彼が貴方の話す人ね……」

「ええ、そうよ。多分、勇人は私達が探してる結界について何か役立つかも」

「でも、何の能力もないんでしょ？」

「うっ、そうだけど……頭はすごく切れるわよ？」

「貴方が人を褒めるとはね……よっほど、お気に入りなのね？」

「え？ちよ……それは」

「もう、バレバレだから」

「うっ……でも、手がかりにはなるでしょ？」

「それもそうね」

「ん？ 終わったか？」

「ええ」

「こんにちわ、勇人さん。私はマエリベリー・ハーンよ。メリーでいいわ」

「そうか、まあ、一応自己紹介を。ご存知、碓氷勇人だ、よろしく」

「何か、分かった？」

「そうね、確かに微かな結界のようなものが見えるわーまるで、無理矢理こつちに来たみたい、」

「何を話してるんだ？」

「いいえ、何も」

「そうか、あんたもなんか特殊な能力を？」

「あら、よく分かったわね」

「そりゃあ、蓮子と一緒にいるなんて、普通のやつじゃないよ」
「なによ、失礼ね」

「ええ、そうよ。私は結界の境目が見えるの。貴方にも見えるわ」
「そりゃあな、もうここの住民じゃない」

「そう……それじゃあ、向こうでの話聞かせて頂戴？」

「ああ、構わんよーそうだな、向こうでは……」

―青年&少女達会話中……―

「どうだ？面白かったか？」

「ええ、妖怪や神様が普通にいるのね……」

「つて、あんたも普通じゃないの!？」

「ああ、俺も少々変のようだ」

「あら、なら、ちようどいいわ、秘封倶楽部にでも入らない？」

「ああ……それなんだが、ここには1週間までしかいられない」

「え？……あ、ああ、そう」

「ま、協力できるなら、させて貰うよ」

「ええ、よろしく」

「ああ」

「もう、勉強とかしてないの？」

「ああ、それか、あつちで教師をしてる」

「あんたが？アハハハハハ！あんたが教師って！」

「悪かったな！俺が教師でそんなに意外か！」

「だって、人付き合いの苦手な、コミユ障君が教師だなんて……」

「はあ……もう、今日はこれまでだ、それじゃあ、宿探すからこれで」

「あら、もう？」

「だから、宿が無いから……」

「なら、私の家に来たらいいじゃない」

「「え？」」

「蓮子つたら……」

「冗談はよしてくれ、親がいるだろ？」

「今は両親ともに海外に出張よ？」

「大学の勉強だってあるだろう？」

「私は頭いいから大丈夫よ」

「そもそも、年頃の男女が、1つ屋根の下に一緒にいるなんて良く無いだろ？」

「あなた、襲うとかできないでしょ？変なところでビビリだし」

「はー……、メリーさんも何か言ってください」

「いいんじゃないかしら？」

「ほら、メリーさんも……って、はあ？」

「いいじゃない、久々の再会でしょ？しっかり語ればいいじゃない」

「だってよ？」

「む……分かった、言葉に甘えさせてもらうよ」

「それじゃあ決まりね！」

「本当に変わらないな……」

「あなたも変わってないわよ」

「そうかい……」

「そうよ」

本当に変わってないわ、あの頃と全く同じよ……相変わらず、変なところで鋭くって、

肝心な時に鈍いのだから……

第33話 飲み会の日の青年

「はあ……」

「何よ、溜息ついて」

「さあ、なんでだろうな？」

「本当に何なんだ？俺はもう認識されないとか言ってたのになんで認識しちやっつてんの？」

「あ、ちよつと、トイレ……」

「早くしなさいよ」

とりあえず、紫さんに連絡だ。えつと……荷物の中にお札が……あつた。確か、このお札に霊力を込めて……

「はい、ゆかりんよ」

「あ、紫さんですね、お話したいことが」

「何かしら？」

「俺を認識できる人がいるのですが……」

「え？本当かしら？」

「ええ」

「おかしいわね……その人って人間？」

「もちろんですが？」

「うーん……まあ、大丈夫なんじゃない？」

「さいですか……」

まあ、確かに蓮子なら問題無いか……

「すまん」

「早く行くわよ」

「あれ？メリーさんも？」

「ええ、今夜は飲み会よ？」

「あ……はい……」

飲み会……お酒……うっ、頭が……

「久し振りに勇人がいるんだし、飲むわよ！」

「お願いだから、お酒には飲まれるなよ……」

「とか、言ったら着いたわね」

「変わって無いな」

「当たり前よ」

「あら？前に来たことあるのかしら？」

「ああ、一度だけな」

「ほら、入りなさい」

「お邪魔しまーす」

さすが、女子大生と言ったところか……両親がいないのに綺麗に整頓されてるな……

「まだ、飲むには時間が早すぎるな」

「そうね、何をしましょうか？」

「私のもつと貴方の話を聞きたいのだけど？」

「いや、遠ry「そうね！いいわね！」ア、ハイ……」

あんまり、面白い話なんて無いからな？

「貴方は元々○○高校よね？あそこは一応、進学校だからそれなりに頭はいいんでしょ？」

「いや、勇人はそんなにいいほうじゃ無いでしょ、学年順位は」

「まあ、ギリ半分より下だな」

「あら？でも、蓮子は彼が頭いいって」

「学力で言ったら、そんなにいいってわけじゃ無いわ、数学は別だけど」

「お前が何で言うんだよ……」

「いいじゃない、まあ、賢いと言う方がいいのかしらね。時折、想像つかないこと考えてる」

「そりゃあ、どうも」

「本当に仲良いわね」

「せいぜい、中学校で同じだったただけだろ」

「そうよ」

「ふーん……そうね」

「まあ、彼の中学校での姿は面白いわよ」

「へー、どんな感じかしら?」

「休み時間は読書か机に突っ伏しているのどちらか。人と一緒にいる確率がかなり低いー所謂、コミュ障ってやつね。勇人、目つき悪いから、怖いつて評判だったよ」

「そりゃあ、ありがたいな。おかげで余計な神経使わずにすんだよ」

「向こうでもコミュ障なのかしら?」

「いや、そういうわけでもない。むしろ、話す人はかなり多いかも?」

「え、マジ?どんな人?」

「うーん……露出多めの巫女さんに白髪の少女剣士とか」

「普通の人じゃないの?」

人じゃないのもいるが。

「てか、女の子なの? 勇人が女の子と話す? ……アハハハハ!!」

「はあ? 何で笑うんだ?」

「ハハ…:…だつてよ、あの勇人がだよ? 中学校では女嫌いとまでの評判だった勇人がだよ。」

「悪かったな! だがな、向こうじゃ、しつかり話せてんだぜ!」

「あれ? ほとんど女の子じゃね?」

「あれ? もうこんな時間に…:…」

「あ? もう、7時じゃん」

「そうね、じゃあ始めましょう」

「勇人はお酒飲めるの？」

「まあ……人並みには」

そういえば、お酒を飲む機会がある度に気絶してる気が……まあ、お酒でぶっ倒れたわけじゃないが……蓮子達は節度のある飲み方をしてくれるだろう。一気飲みはいかんですよ、一気飲みは。

「はい、ビール」

「あ、どうも」

なんか、久々だな。缶だなんて。ビールは初めて飲むかな？まあ、いいか。

ゴクツ

「うん……」

何だろうか……あんまり、美味しく感じないな。

「あれ？勇人はお酒ダメなのかな？」

「何を、少しずつ呑むのが俺のスタイルだ」

「こー飲まないとー！」

ゴクツ、ゴクツ、ゴクツ……

「プハツ、ほら、あんたも」

「い、いや、いいよ……」

「私も」

メリーさんは節度のある飲み方をしてくれるだろう。

ゴクツ、ゴクツ、ゴクツ……

「……ふうー、勇人さん、貴方は？」

俺が一口飲んだら、2人は1缶開けたと……

「だから、少しずつ飲むのが俺の正義なので……」

「なによ？男らしくないわよ！それともくお子ちやまなのかな？」

「な!?!そう言うなら！」

ゴクツ、ゴクツ、ゴクツ……

「プハ、ほら？飲んでやったぞ！」

「よし！ようやく興に乗ってきたわね！じゃんじゃん飲むわよ！」

「あのく、メリーさん、蓮子ってお酒に……」

「弱いし、飲んだら面倒になるタイプね」

「ですよー」

もう、真つ赤だぜ？あ、また、飲んだ。

「あなたはまだ余裕そうじゃない？」

「まだ、1缶だけですし」

「何よー、2人して私を省るつもり？」

「わ、悪かった、ほら、飲むぞ？」

「あんたも飲みなさいよ」

「だから、少しずつ飲むのが俺のジャスティスなんだよ！」

「なら、口移しで飲ましてあげるわ！」

「!？」

それはダメだ！

「ちよ、超遠慮します！」

「ぶー、つれないわよ」

「まあ、いいじゃない。ほら、飲むわよ？」

「でも、勇人と飲みたい！」

「分かった、分かった。飲むから、な？」

「ようやく潰れたか……」

「まあ、蓮子はすぐに酔うけどそっからがね……」

スウー……スウー……

「でも、貴方は顔色ひとつも変わってないわよ」

「そうか？」

結構飲んだと思うが……後ろには大量の空き缶が……俺も5缶ぐらいは飲んだかな？

「久々、こんなに飲んだわ」

まあ、ほんのり頬が赤いな。

「しっかし、蓮子は黙っていれば可愛いのに……」

「ふふ……これでも、貴方がいない間は寂しがつてたわよ？そもそも、このサークルを開いたのは貴方にも一因があるのだから」

「え？そんなのか？てつきり、能力を活用しようとしてるのかと」

「それもあるわね……でも、蓮子は貴方がいなくなった時、ずっと神隠しだって思ってたのよっ」

「まあ、実際、それに近いですけどね」

「そうよね、だって、遺体も無ければ、残ったのはハンカチぐらい、神隠しと思って当然ね」

「ははは……」

「それでも、彼女は明るく振る舞っている。私も親友として、彼女はとても強い子だと思うわ」

「そうだな……」

「あら？ そうなのは貴方のお陰よ？」

「いやいや、俺があつた時から元氣だつたと思うが」

「それは、外面的にでしょ？ 知らないわけじゃないでしょ？ 彼女の目には不思議な能力があること、無論、私にもね」

「そうだが……」

「あの目を、最初に肯定してくれたのは貴方だつて聞いたわよ？」

「まあ、褒めたことはあるが」

「そうそうにいないわよ、貴方みたいな人。普通は不気味がるもんでしょう？」

「そうかな？ だと言つても、俺の方が異常だつたと言えるし」

「そうね、少し変な人だと思つてたわ」

「ははは……まあ、確かに俺もこいつに救われた感じもありますし」

「でも、貴方だと言つても、蓮子を傷つけるのは許さないわよ」

「……分かつてる」

「もう、お開きにしましょう」

「そうですね、後片付けもしないと」

「空き缶だけだからすぐに終わったな」

「そうね、後は蓮子かしらね？」

あー、確かに……ここで寝かせるのは良くないな……

「貴方が寝室まで運びなさい」

「了解」

どう、運べばいいんだ？

「何してるのよ……」

「どう持とうかと」

「お姫様抱っこでいいじゃない」

「ああ、そうだな」

「よいしょっと」

「やっぱり、女って軽いもんなのかな？」

「えっと、寝室は……」

「2階よ」

「どうも」

「それじゃあ、私は帰るわ」

「ああ、さようなら」

「さようなら」

「よし、運ぶか」

「……ん」

「首に掛かる力が強くなったな……」

「ほら、ベッドに着いたぞ、腕離してくれ」

「……いや」

「は？ 離してくれないと俺、寝れない」

「一緒に寝ればいいじゃない」

「それはだな……」

「今まで、いなかった罰」

「わ、分かったよ……」

んー……これは緊張してしまう……妖夢曰く一緒に寝たとか言ってるが、こうやって意識してる状態は、初めてだ。

「こつち、向いてよ」

「それは遠慮しておく」

「なによ、男らしくないわよ」

「……それでも、遠慮する」

「なら」

「!？」

「これで、妥協してあげる」

「な、何を」

抱きつかないで……くっ、女性ってこんなに柔らかいのか？む、蓮子の匂いが……

いかんいかん！ここは無だ、無だ、無だ、無だ、無だ、無だ、無駄、無駄、無駄無駄無駄無駄……

「スウー……」

「意気地なし……」

ギ
ユ
ツ
⋮
⋮
⋮

第34話 サークル活動の日の青年

「ふあ……結局何もしなかったわね……」

「やっぱり、普通じゃないわ。男女同じベッドの中にいるのに何もしてこないだなんて、本当に男かしら？あ、そうだ、いつか女装させようかな……文化祭でしてくれなかつたし。」

「それにしても、よく寝るわね」

「まだ、身長気にしてるのかしら？確かに伸びてないけど……寝る子は育つからって……」

「熟睡だわ……少しいたずらしてしまおう。」

「スウー……スウー……」

「勇人の寝顔もなかなかレアね……」

「あの、無愛想な顔と違って、いかにも幸せそうな顔してる。」

「えいつ」

ムニ、ムニ

ちよっと、頬をつねる。

「……スウー……スウー……」

今、こうして見ると、勇人は顔は悪くない方かな。やっぱり、鼻筋が通ってるのが大きいのかな？まあ、体は大きくないが。

「今、何してもバレないよね……」

勇人は無防備だ。こ、これなら、き、キスも可能かしら？

や、やってしまおう。

か、顔が……息がかかる。

「ん…… ガサツ スウー……スウー……」

「あ……」

もう、何よ！なんでそこで寝返りうつかなあ。

「はあ……朝ごはん作ろう……」

勇人は起こさない限り寝てるだろう。

「ほら！起きなさい！」

うーん……まだ、眠い……

「もう少し……」

「何言ってるの！今日から早速活動に参加してもらうんだから！」

「今、何時？」

「7時よ」

「まだ、寝る……」

「起きな……さい！」

「ぐへっ！」

グオオオ……腹にダイブすな！

「お目覚めかしら？」

「お陰様でな……」

もう少し寝かせてくれたっていいだろう？

「ところで、活動って何すんだ？」

「そうね、今日は気になる神社があるからそこに行くわ」

「そうか。ところで、お前料理できたのな」

意外と美味い。いや、蓮子ってなんとなく不器用そうなイメージがある。

「失礼ね、私だって女よ？」

「そうだな」

「そうだ、服どうする？女物着て行く？」

「ノーセンキューだ、ちゃんと持って来てる」

「あら、似合うと思ったのに」

「嫌だね、プライドが許さない」

「相変わらず、変なプライドだけは高いわね、背は高くないくせに」

「な、なんだと！」

「はいはい、食べてしまったなら、早く行くわよ」

口ではもう、蓮子に勝てない気がする。

それにしても、神社か……まあ、有りがちな感じだな。

「ほら、準備できたなら早く来なさい！」

「へいへい……」

ピンポン

「あ、ちようどね」

「ん？誰だ？」

「ちよつと、待ってねー」

ガチャ…

「おはよう、蓮子」

「おはよう、メリー」

「勇人さんも、おはよう」

「ああ、おはよう、メリーさん」

わざわざ来たのか……時間もピッタリだな……

「よし、行くとしますか！」

「ええ」

―青年&少女達移動中―

「着いたわ」

「うわ……」

ボロツボロの神社じゃねえか。本当になんかあんのかね……

「メリー、何か見える？」

「んー……もう少し見ないと分かんないわ」

俺ができることってあるか？はつきり言つてここでの俺は完全に役立たずな気がする。

「結局、何もないな」

「そうね、ハズレね」

「残念、時間余ったけど、どうする?」

「そうね……そうだ! 勇人、あんた向こうの世界で不思議な力手に入れたんでしよう? ちよつと見せてよ!」

ん? どつちだ? 霊力か? それとも不変にする方か?

霊力でいいか。どう見せるか……スーパーサイヤ人風にすればいいかな?

「分かった、少し離れてくれ」

「はあー……」

全身に霊力を流すのはなかなか苦勞するが、見た目も派手になるし、使うことも無いだろうしいいだろう。

ツツツ……バチツ!

「ん!? あれが?」

「まるで、電気みたいだわ……」

バチバチバチバチバチバチバチバチ!

「ふうー…これでいいか？」

「すごいじゃない! なんなのあれ?」

「霊力って言うやつだ、こんな使い方はしないがな」

はつきり言つて、霊力の無駄使いだ。ただ、また霊力が上昇している気がする。

「それって普通の人には見えるのかしら?」

「わっかんない」

「そう」

「本来はどう使うの?」

「まあ、弾として撃つたり、はたまたは相手に流して気絶させたり、飛んだり、肉体強化したりと」

「へー…は? 飛べんの!？」

「ああ、ここでは飛ばないが」

「えー、なんでよ」

「どう考えても目立つちまうだろ? それだけは避けないといかんだ!」

「ぶー……」

「それって、結界にも使えるのかしら?」

「使えるのだろうけど、俺が使えるかは分かんないな」

「まあ、勇人も普通じゃないことが証明されたところで、お昼近いしどつかでご飯食べに行こう?」

「なら、私たちの通ってる大学の学食でどうかしら?」

「お、いいねえ、そういえば、どこにいつてるか知らないな」

「それなら、早くいきましょ!」

―青年&少女達移動中…―

「()」

「はー、ここってなかなか頭いいとこだよな?」

「そうよ、もし、貴方が神隠しに会わなければ無理やりここに受けさせただろうけど」

「何それ、怖い」

「冗談よ?」

「へいへい、とりあえず、学食に行こうぜ」

「そうね、少しお腹空いたわ」

「あんたお金は持つてるの？」

「もちろんだ、ほら」

「そこんところはしつかりしてるわね」

「女に奢ってもらうのはなんか、嫌だからな」

「あつそう」

俺は無難にうどんを蓮子はカレーをメリーさんは普通に定食を頼んだ。

「あんたって、うどん好きだっけ？」

「麺類では一番だな」

「ふーん、一口頂戴」

「ほら」

ズルズル……

「私のも上げるわ」

「ん、サンキュー」

パクッ

「ふふ……」

「ん？どうしたの？メリー」

「1人で笑うなんて少々不気味だぞ？」

「って、周りの人の視線を感じる。ていうか、めっちゃ見てる。なんだ？女性はきやつきや言ってるし、男性陣はすごい形相で睨んでる。」

「いやだって、ねえ？2人とも仲がよろしいことで」

「？」

「本当に面白いわね。だって、貴女達、あーんし合っちゃって、熱いわね」

「ぬあ!？」

「シユワットー……、これって間接キスになるんじゃない……」

「べ、別にいいじゃない！」

「ええ、いいわよ」

「はあ」

「あ、蓮子じゃん」

「あ……須藤……」

「ん？知り合いか？」

ん？メリーさんどうした？裾引っ張って。

(なんですか？)

(あいつのことなんだけど)

んー、あれだな。世間一般で言うイケメンってやつか？茶髪の頭に人気俳優が如くのルックス、背も高い……ぐっ、背が高いだなんて。

それに、周りの女性もきゃーきゃー言ってる。

(あのイケメン君ですか？)

(まあ、そうだけど、注意しなさいよ？)

(?)

どういうことかな？

「一緒に食べてもいいかな？」

「い、いや、今はサークルでの集まりで……」

「そうよ、ちよつと話し合いしてるの、後にしてくれるかしら？」

な、なんだ？メリーさんがすごく冷たい態度を……

「へー……でも、彼はいいんだ？」

「彼はサークルのメンバーだから」

「ここでは見たこと無いけど」

「そりゃあ、別の大学の子だし」

「じゃあなんでここに？」

「サークルのメンバーだからよ」

「別の大学なの？」

「蓮子の中学校からの知り合いだからよ」

さ、さすが、メリーさん。質問をどんどん返してく。

「ふーん……そうだ自己紹介するよ、僕の名前は須藤光二郎。よろしく」

「どうも、俺の名前はう……」

は！本名は言っちゃダメだな、下の名前は他の人に聞かれてる可能性があるので苗字だけでも偽装しないと……何かないか？

「……吉良勇人です……よろしく……」

これはひどい。でも、しょうがないよね!?!とつきになぜか吉良さんが浮いたんだもん。カッコいいじゃん！

「そう、勇人君だね。それじゃあ、また、後で」

「あ、どうも……」

「ふー……人と触れ合うのは苦手だ」

変な気を使つてしまう。

「で、どうしたんだ？ 2人とも顔が怖いのだが」

「ちよつと、ね」

「はあ……私が話すわ。名前は聞いての通り、須藤光二郎。頭も良く、運動も格闘術に秀でて、かつあのルックス、物腰も柔らかいそして、お金持ち。と絵に描いたような人気者ね」

「ふーん……で、蓮子に関係あんのか？」

「そうね、蓮子はいいつから告白されたのよ」

「!？」

「もちろん、蓮子は振つたけど、相手もなかなかしつこくてね、あんな感じに何回もアプローチしてんのよ」

「そうよ！ 私には……とがいるし……」

「それが問題か？」

「そうね、そのアプローチがだんだんエスカレートしてるのよね、集団の力も使い始めたわ、お似合いのカップルだと周りに言わせたりとかね」

「……。ま、とりあえず、トイレ行ってくる」

「はあ……早く行つて来なさい」

「ねえ、蓮子！今の勇人君って子知り合いなんだよね？」

「付き合ったりしてんの？」

「まさか、蓮子は光二郎君とお似合いだって」

「……」

「なんなのよ、もう。面倒臭いっただらありやしない。」

「そうよね、確かにあの子、地味だし」

「む……何も知らないくせに。」

「でも、私は意外とタイプかも」

「え？まじで？」

「だって、どことなくミステリアスな感じがするじゃん？」

「あー、分かる」

分かってねーよ。

「紹介とかしてくれない？」

「いや、無理ね。彼、ここには帰省として来てるからその間だけ」

「あー、残念」

「ただいまつと、お取り込み中か？」

「いいえ、とりあえず、戻りましょう？」

「そうだな」

「あ、私買ったのがあったわ、少しコンビニに行ってくるわ」

「俺もあるわ、蓮子、先に帰っててくれるかな？」

「ええ、分かったわ」

「はあ…」

なんなのよ、本当に。あの時、思い切って私の彼氏ですとか言ってしまったら良かったかしら？須藤のアプローチもひどくなってる。はあ、本当に面倒臭いったらありやしないわ。

「おい、蓮子！」

噂をすればなんとやら。

「何かしら？須藤君」

「今一人で帰ってる？」

「いや、少し待ち人が」

「あの勇人って子かい？」

「そうだけど何か？」

「別に。そんなことより、この前のことだが、考え直してくれるか？」

「いいえ、変わらないわ」

「でも、僕らはお似合いだと思っただろ？」

「全然」

「もしかして、あの勇人って言う地味な奴がいいのか？」

「あんたには関係ないでしょ？」

「僕の方があいつよりも幸せにできるぞ」

「そんなの分らないわ」

「何を言ってるんだ！俺の方がいいに決まってる！」

な！口調が変わった！？も、もしかして。

「俺とお前は結ばれる運命だ！」

「きゃっ！」

腕を掴んできた？本性が現れたわね……でも、どうしよう……

「……ん！」

「どうしたの？蓮子に身の危険が！」

「え？」

「いや、不安だったから、蓮子に霊力を纏わせてセンサーみたいになっている」

「そう、なら早く行ってちょうだい！」

「ああ！」

「は、離してよ！」

「嫌だね！君がOKしてくれるまで離さない！」

「私には別の人が！」

「どうせ、勇人ってやつなんだろ！」

「だったら、悪い？」

「ああ、運命に逆らうべきじゃない！」

「知らないわよ！そんな運命！」

「こくなったら……体に教えてやる！」

「!?は、話して！」

い、嫌だ、こんな男とだなんて！わ、私は勇人が！た、助けて！勇人！

「助けて！勇人！ふぐっ！」

「静かにしろ！」

助けて……勇人。

「自分の思い通りにならないからって襲うのは良くないな」

「ああ!？」

「勇人！」

「やっぱり、来てくれた!で、でも、勇人の様子がいつもと違う。」

「そういうの犯罪って言うんだよ?」

第35話

「怒」の日の青年

「て、テメエは！」

「どうも、さつきぶりだね？」

「勇人！」

ほ、本当に来てくれた…

「何の用だ!？」

「用って、蓮子にあるけど？」

「ああ？今はお取り込み中だ！どっかに消え失せる！」

「確かに面倒な事は嫌いだが、そういうわけにもいかんのだよ」

「どういうわけだ？」

「いや、だって、蓮子は俺の”彼女”だから」

「!？」

うえ？か、彼女!？」

「はあ？何言ってるんだ？お前みたいな冴えない奴が蓮子と付き合ってるわけがないだろ！」

「あんたがなんて言おうが、この事實は変わらん」

「な、近づくんじゃねえ！」

「近づかないと蓮子と帰れないんでね」

「野郎！舐めんじゃねえぞ！」

ぶんっ！

「ほっ」

「ぬあ!？」

ズシヤア…

「盛大にこけたねえ…ま、いいか。ほら、蓮子帰るぞ？」

「あ、うん……」

し、芝居なのよね？

「や、野郎！」

「あーだこーだ言われてもね？付き合ってるもんはしょうがないでしょ、な？」

「う、うん……」

か、肩を抱き寄せて……これじゃあ、本当にカップルみたいじゃない！芝居が上手い

せいか、勇人の言ってる事も本当のようだ。

「み、認めねーぞ！」

「別にあんたの承認なんていらんでしょ？」

「ふ、ふざけるな！お前みたいなひよろつちい奴が蓮子と似合うわけがない」

「だから、あんたが何言ったて関係ないだろ？アホの妄言はやめて、さっさと帰れば？」

「な!?も、妄言だと？それはお前の方だろ!？」

「あー、ダメだな、無視して帰ろう、な？」

「う、うん」

わ、私まで動揺しちやってる……何でこいつは飄々としてんのよ？恥ずかしくもないの？ま、まさか、逆にそういう対象で見られてない？

(蓮子)

(な、何?)

(もう少し芝居続けるぞ)

(わ、分かったわ、じゃあ、手を繋ぎましょう)

(ヘア!?)

(こ、恋人なら当たり前よ?)

(そ、そうか)

(もちろん、恋人繋ぎよ?)

(りよ、了解)

うん? ちよつと、恥ずかしくがってる? なーんだ、ウブじゃない。

「な!」

「それじゃあな」

「それじゃあね」

「ま、待て! 俺と勝負しろ!」

「無視よ」

「分かってる」

「ビビってんのか?」

「……」

「それでも男か!」

「……」

う、少し勇人が反応した。

「調子に乗ってんじゃあねよ! このクソチビ!」

「……!」

「勇人!」

もう！まだ、そのワードに反応すんの！本当、変わってないわね！

「ああ！今、なんて言った！」

「へへ……聞こえなかったか？チビ！それに顔もよく見たら女つぽいんじゃないのか！？全然、男らしくないぜ！」

「勇人、落ち着いて！」

あ、ダメだ、この顔は……目にハイライトが消えてる……こいつ、怒ると顔の表情筋が固まるのよ……ああ、中学校の頃一度だけあのワード言われて、ブチ切れたとき、無表情で相手を殴り続けてたわ……

で、でも、相手は素人じゃないのよね……格闘技はかなり秀でてるって聞いたけど。

「はは！ほら、来いよ？男だろ？男らしく拳で証明してみせろよ！」

「……」

何も言わなくなったわね……本格的にキレたわね。

「来ないのなら、こつちから行くぞ！」

ベキッ

「ゆ、勇人！」

え？何で交わさないのよ！

「……」

「ほら、もう一発!」

ゴスツ!

「……っ!」

「ふん、トドメだ!」

バゴツ!

バサツ……

「勇人!」

「ほら!こいつ、ダメダメじゃん!」

「おかしい、普通ならかわすのに、何で受けてるの?かわす気が全くないみたい……」

「分かっただろ?」

「い、いえ、全然!」

「チツ!強い者が上なんだよ!」

「知らないわ!」

「はあ……」

「な、なんだ、まだ気絶してねえのかよ」

「俺はだな、面倒な事は嫌いだ。昔は喧嘩をしたいという欲求があったが、今はもう無い。だから、喧嘩も面倒な事では無い」

「ああ!?何を言ってるんだ?」

「でも、面倒だからやらなくていいってわけにもいかないよな?」

「はあ?まだやるのか?」

「まあ、優越感に浸ってる奴に急に敗北させる事で絶望させるのも嫌いじゃないしな」

「ふんつ、そんな事自分の状態を見てから言えよ。フラフラじゃないか?」

「だから?早く来いよ、強い奴が上なんだから?」

「言われなくてもやるさ!」

「……」

「勇者!」

また、動かない気!?

「遅い」

ヒュッ

「な!?!」

「オラア!」

ボゴツ!

「グヘッ!」

は、速い!前よりも早い!あんなギリギリまで待つて腹に1発とは……

「終わりじゃないだよな」

バチバチバチバチバチ!

え? 腕に靈力が……

「オラア!」

バンツ!

「ゴフツ……」

バタツ……

「うー……ゲホツゲホツ……オエツ」

「ふうー、この新技いいかもな。手加減してやったから安心しろ」

な、なんなの? 殴った拳から衝撃波みたいなものが……

「ついで、カツとしちまったな」

「だ、大丈夫?」

「あの程度でくたばったら、向こうの世界では生きていけないぜ」

「そ、そう」

随分たくましくなったのね……

「ゴホツ……まだ、終わってないぞ……」

「はあ……確かにあんたは強いっちゃあ強いが……相手が悪かったな」

「待ちやがれ、この野郎！」

「……………」

ヒュツ！

「きやつ！」

ゴスツ！

い、痛い！な、何よ！レンガ!?腕が……

「しまった……………こ、これもお前が悪いんだ！全部お前が悪い……………だ？」

「……………」

ベキツ！

「グゲツ！」

「え？」

ゆ、勇人？

「痛い！は、歯が……………え？」

「……………」

「ゆ、許してくれ！少し血迷ったんだ！」

ベキツ、バキツ！

「は、はっは……………や、やめてくれ……………」

バキッ！バキッ！

「う……もう、やめてくれ……もう、ボロボロだ……な？ 追い討ちは男らしくないぜ？ な？」

ベキッ！バキッ！

「お、お願いだから……許してくれ……」

「勇人！」

「……！」

「はっはっ……」

あのままでと死ぬまで殴り続けてしまう。

「次は無いと思え」

「ヒ、ヒイイ！ すいませんでしたー！」

「す、すまん……腕は大丈夫か？」

「え？ ええ……」

「少し見せろ」

「うん……っ！」

「骨は折れてないようだ……打撲か……」

「大丈夫よ、このくらい……」

「いや、このくらいなら俺でも治せる」

バチバチバチバチ……

「少しビリつてくるが我慢しろよ？」

「……ん……」

「大丈夫か？」

「う、うん……」

全く痛みが無い……不思議ね……

「俺の事怖いか？」

「え？」

「いや、あんな風になっちゃったから……」

確かにあの顔は見たことが無い。でも、

「大丈夫よ！別にあんたのことが嫌いになつたわけじゃないわ！」

「そうか……」

まだ、引きずつてんのかしら？こうなったら

「それにしても”彼女”ねえ……」

「あ……それはだな……あの場をしのぐにはそれしかないかなって……嫌だったか？」
「別に！このまま芝居続けちゃおう！」

「え!？」

「あら、あいつがいなくても限らないのよ？ほら、手を出しなさいよ」

「ふっ……了解」

少しはあいつに感謝しないとね？

「……!？」

「どうした？早苗？」

「いや、なんか、勇人さんが別の女の子といる気が……」
「考え過ぎだつて」

「……む！」

「どうした、妖夢？」

「勇人さんが他の女の子と仲良くしている気が……」

「雑念はいかんど、今は勇人のことは忘れておけ」

「すいません」

「……!!」

「どうした？」

「い、いや、寒気が……」

「風邪じゃないわよね？」

「あら？ 勇人と蓮子じゃない」

「め、メリー！」

「あらあら、お熱いことで……」

「こ、これはあれよ？ あいつに対する芝居よ？」

「そ、そうだけ？」

「そうゆうことにしておくわ」

「……ん？」

「どうした、霊夢？」

「いや、なぜかここに霊力を感じる……」

「はあ……で？」

「それだよ」

「くそっ！あいつのせいで！いつか復讐しないとな……」

第36話

それぞれの日の青年&少女（前編）

結局、昨日は軽くしばいた後、何もなかった。
いや、何も無いってわけでもなかったかな？
確か、あの後……

「もう、いいんじゃないか？」

「ま、まだよ」

「そうかい……」

ずっと、腕を組んでる状態なのだが……ま、いいか。

「あなたは本当によく分からないわね……」

「俺もよく分かりません」

「はあ……」

「？」

なぜため息つかれんだ？

「ねえ」

「なんだ？」

「さ、さつきは、ありがと……」

「なあに、あんぐらいどーってこと無いって」

「そう……」

「なんだ？らしくないぜ？」

「べ、別に！」

「はいはい……」

「それじゃあ、私はここで」

「うん、じゃあね、メリー」

「さようなら、メリーさん」

「それじゃあ、勇人、蓮子を襲っちゃダメよ？」

「何言ってるんだ？」

「ふふ……じゃあ、バイバイ」

「なんだよ……」

うーん……分かん人だなあ。

「さあ、私達も帰るわよ！」

「了解」

「あー、疲れた」

「明日も手伝ってもらうからくたばらないでよ」

「へいへい……」

「勇人って、ご飯が先？それともお風呂？」

「飯が先だ」

「そう、なら夕飯作るの手伝って」

「了解」

「あんた、了解ばかり言ってるわね……」

「そうか？」

「まあ、いいわ。ところで料理はできるのよね？」

「人並みには」

「器用だもんね」

「それ、理由になるか？」

「いいから、手伝いなさい」

「了解、何を作るんだ？」

「肉じゃがで」

「そう、ならじゃがいもと人参の皮剥きを……って、ピーラーは？」

「はい」

「どうも」

「あと、切つといてね」

「了解」

「ふう、あとはしばらく煮るだけね…」

「結構、早く終わったな」

「そりゃあ、2人でやったもの」

「それもそうか」

「もう、良さそうね。勇人、準備して」
「はいはい……」

「それじゃあ、いただきます」

「いただきます」

「うん、しっかりできてるわ」

「悪くは無いな」

「何よ、その微妙なコメントは」

「いいじゃないか」

「あっそう」

モグモグ……

「ねえ」

「なんだ？」

「向こうの世界でさ」

「うん」

「か、彼女とか作ってないよね？」

「!?ゴホッ!にやにを!」

「ぷっ……にやにを……」

「ぬあ! 嘸んだ!」

「で、どうなの？」

「うーん……いる」

「はあ!?!」

「ハハ! 冗談だぜ」

「…! そ、そうよね! コミュ障のあんたができるわけないわね」

「失礼だな!」

「だって、中学生の頃は私以外でまともに目を合わせて話す女子なんていなかったじゃない」

「い、いや、それはだな……」

「男子とすら、まともに話すやつ少なかったんじゃないの？」

「お、俺は1人が好きなのだよ！」

「のくせ、生徒会に入り、部長をやると……」

「しようがないだろ？ やれって言われたから」

「そういうことにしておくわ」

「そういうことなんだよ」

「あんたはもしここにずっといたなら、どうなつてたと思う？」

「さあ、未来の事は預言者でも無いから分かんないな」

「まあ、でも、ずっと変わらないと思うぞ、俺は」

「そうね、あんたが人懐こい人にはならなさそうね」

「逆になつたら、なつたで気持ち悪いがな」

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさん」

「風呂に入る？」

「先に入らないのか？」

「先に入っつていいわよ」

「どうも」

「そうだ、寝巻きはこれを着る？」

「はあ!? なんて、女物を着らなきゃいけないんだよ! ちゃんとあるわ!」

「ええー、絶対、似合うって」

「嫌だね」

「似合うから!」

「そ、そうなのか？」

「ええ! もちろん! さ、着ましょう!」

「だが、断る」

「ええ……」

「そんなもん着るのはプライドが、許さん」

「つれないわよ」

「そんなこと言っても着らんぞ」

「はいはい……」

「はあ…、ああー……」

「やっぱ、風呂は気持ちいいな……眠くなってきた……まあ、俺、早風呂派なんです」

……

「ふう、さっぱりした……」

「お？上がったわね」

「ああ、って何してんだ？」

「ゲーム」

「もう寝ろよ」

「まだ、11時じゃない」

「もう、11時だろ」

「でも、これパワ●ロよ？」

「な、なに!？」

「やりたくないの？」

う、や、やりたいな……久々に文明的な娯楽だもんな……だが、寝る子は育つのだ……寝るべきだ、寝るべきなんだ……

「でも、やりてえー！」

「はい、やってなさいな」

「ううー……」

くそ、欲望には勝てなかった……

?カキーン! 入った! ホームラン! /

「よっしや! 流石だぜ！」

「あら、そのチーム」

「おお、上がってたか？やっぱり、ソフトバンクは最強だぜ！俺がいない間もきつと……」

「残念、去年は2位よ」

「ガツデム！はあ？まさか？」

「はいはい、いいから、もう時間よ？」

「そうだな、寝るか」

「ベッドは1つしか無いわ」

「だろうな、リビングで寝る」

「でも、あんた、結構寝るときこだわりあるじゃない」

「背に腹はかれられぬ、しょうがないからここで寝る、何か抱くものがあればいいんだが

……」

そうすれば、熟睡できるのだが……

「別に昨日のようにすればいいじゃない」

「what!？」

「えらく流暢に言ったわね……」

「年頃の男女が同じベッドは良くないぞ！健全では無い！」

「むしろ、あんたが健全な男子じゃないでしょ」

「は、はあ？どこがだよ」

「逆に男の子が、そんなことに興味ない方がおかしいわよ」

「な！……そ、それは置いといてだな、一緒に寝るのは良くないから遠慮する」

「別にあんたが襲わらなければいいじゃない」

「うっ……」

「ね？今日も少し冷えるしね？」

「むう……」

「決まりね」

「あ、ちよつと……」

「はあ…どうしてこうなった…」

「勇人、抱き枕はいらなの？」

「欲しいが、お前持ってないだろ？」

「持ってないけど、代わりになる物はあるわ」

「おお！そうか、どこだ？」

「ん」

「は？」

「だから、ん」

「お前……？」

「そうよ」

「頭打ったか？」

「あなたこそ打ったんじゃないの？」

「いや、俺は正常だ」

「私もよ」

「そうか、正常な君は君を抱き枕にしろと？」

「そ、そうよ」

「じゃあ、い、いくぞ?」

「どうぞ」

ギユ……

「ん……」

「……」

「や、柔らかい……やつぱり、女なんだな。そして、暖かい……意外と寝れるかも……
「スウー……」

「なんでこの状態で寝ちやうのよ……」

「はあ……」

「最近、ため息多いぞ、早苗」

「そうだよ、幸せが逃げちゃうよ？」

「だって……最近はあまり勇人さんと一緒に居れてないですし……」

「そうだな……1週間は白玉楼にいて、1日ここに居たと思ったら、1週間外の世界に里帰りだもんな」

「ば、バカ！神奈子！」

「ん？」

「うっ……そうですよね……私は一緒に居れない運命ですかね……」

「い、いや、大丈夫だぞ？きつと帰ってきたらここに戻って来るからな？」

「そうだよ」

「そういうわけにもいかないわ」

「おいおい……急に出てこないでくれよ……縁起悪いよ」

「何よ、私が不吉の象徴みたいな言い方は……」

「実際、あんたろくでもないことをするだろ？」

「そうかしら？まあ、そこは置いといて、彼、帰ってきたら一人暮らしさせる予定だから」
「え!？」

「な、なんでです!？」

「もう彼も独り立ちしたいお年頃でしょ？」

「そ、そうですけど……」

「それに彼を襲う妖怪がいても簡単に倒されるようなやわな人間じゃないわよね？」

「そうですけど……」

「あと、これから妖夢と競うわけでしょ？対等にならないとね？」

「む、絶対に負けませんよ!」

「どの辺に住むのだ？」

「安心なさい、妖怪の山の麓よ」

「そうかい……」

「負けられませんよ……」

「そうだよ！早苗、あのまな板半人前には負けられないからね!」

「ええ!」

「あとは……特に無いかしら」

「なら早くどっかに行ってくれと嬉しいがな」

「あら、冷たいわく、そんなんだから、男運が無いのよ」

「はあ!？」

「じゃあね」

「ま、待ちやがれ！」

「行っちゃった」

「チツ、なんなんだ」

ブンツ、ブンツ、ブンツ……

「ふう、もう少し続けますか……」

「その辺にしておけ」

「ですが、師匠……」

「やりすぎも良く無い、ちょうどよくやるのが肝心じゃ」

「分かりました……」

「しようがないわ、素振りでもしないと勇人のこと考えちゃうんですって」

「な!?何を!?幽々子様!」

「確かにあいつが婿として来るのは嬉しいが……雑念の元になってしまふのはな……」

「何行つてんのよ、妖夢も年頃の女の子よ?恋だつてするわ」

「そ、そうじゃな……もう、あの小さい時の妖夢じゃないんじやな……」

「お主は少々孫を可愛がり過ぎじやないか?」

「な、何を!」

「まあ、その気持ちはわからんでもないが……」

「そうじゃろ?」

「2人揃って親バカ、もといじじバカね」

「幽々子様、その言い方は……」

「そうそう、紫がね、勇人が帰ってきた時、一人暮らしさせるんですって」

「!?!」

「理由は勇人もこの幻想郷のパワーバランスの一角となってもらうため、やっぱり、年頃だからとかの理由なんだけど……まあ、これで妖夢も早苗と対等に勇人に会えるんじゃない?」

「そ、そうですね!」

「そうか……勇人も大きくなっただんじやな……もう、一人暮らしできる歳なのか」

「それとて、妖夢、日々の鍛錬に支障をきたすようなことは許さんぞ?」

「分かっています!でも、絶対に早苗さんには負けませんよ!」

「頑張つてね」

「霊夢はいるかしら？」

「いるわよ」

「いるぜ」

「相変わらずね、勇人を見習って仕事ぐらいしなさいよ」

「してるわよ」

「その結果がね……」

「まあ、貧乏巫女だからな」

「それより、紫は何の用かしら？」

「勇人のことなのだけど、彼もこの幻想郷のパワーバランスの一角を背負ってもらわ」

「まじか!? 流石だな！ 勇人は」

「それだけ？」

「いいえ、ちよつとこのお札を見て欲しかったのよ」

「それ、勇人との連絡用のお札じゃない」

「そうよ」

「何か、問題あるのかぜ？」

「ええ、今日ね急に大きな霊力が流れたのよ」

「へー、どのくらい？」

「そうね、少し私の肌が焼けちやつたわ」

「それは相当な霊力ね、見せてちょうだい」

「何か分かったかしら？」

「んー……この霊力……どつがで感じたことあるわ……」

「それって、午前中に無かったか？」

「そうだったわね、それと同じだわ」

「さすが霊夢、すぐに忘れる」

「そう……どの辺かしら？」

「あそこかしら？」

「あそこじゃあ分からないわよ」

「メンドくさいわ……」

「いいから教えなさい」

「はいはい……ちよつと来なさい」

「ここよ」

「そう、確かに同じ霊力を感じるわね……何故かしら？」

「分からないわよ」

「そう……後で調べますか」

「用が済んだら戻りなさいよ」

「そうね」

「うーん……あの場所は外の世界と何か関係ありそうなね……」

第37話

それぞれの日の青年&少女（後編《現代》）

「……ん、ふあ……」

うーん……今何時だろう……そうだ、今日は休日だから早起しなくてよかつたわけ？サークルの活動もそんなに早くないから、うん、まだ寝よう……それにしても、朝なのにすっごい暖かい……

「スウー……」

「……」

そうだったわ……それにしても、すっかり熟睡ね。本当に男かしら？まあ、でもこうしていられるならいいか……

「二度寝しちやおう……」

「んあ……朝か……」

もう少し寝たいな……あー……なんだろう、暖かいな……余計に眠気を……

「……!?」

うわっ！そうだった……はあ、蓮子は俺のこと女と認識してんじゃないのか？流石にそれはダメージが……

「あー……」

目が覚めちまった。二度寝する気がおきん。そうだ、俺が朝飯作ろうつと。

「つと、その前に」

着替えよう。もう、向こうから女装の勧めをされるのは勘弁だ。何が楽しくて女装なんか……ぜーったい、しないからな！

「流石に学ランは無いよな……」

昨日と同じく、ジーパンとパーカーでいいか……上は灰色、下は黒だ。目立たないの
がいいのだ。え？オシヤレ？知らない子ですね。

「おう……」

寝癖が……直そう……

「む……」

こやつ、中々曲者だ。元気にはねよって……

「はっ……」

ピンツ

「……」

ピンツ

「ぬあー！」

元気過ぎるぜ！あーもう、いいや。さ、朝飯作ろうつと。

「冷蔵庫の中は……これでいいか」

目玉焼きとウインナーでいいや。え？簡単だろって？朝飯はそんなに凝らなくてもいいんだよ。

「……」

ジュー……

「ふあ……勇人、おはよう……」

「おはよう、朝飯作ってるぞ」

「え？あんたが自発的に行動するなんて……」

「たまたま、早起しただけだ」

「熱あんじやない？」

「健康そのものだ、ほら、顔洗ってこい」

「分かった……」

あいつは俺をなんだと思ってる？ そんなに自発的に行動するのがおかしいか？ 確かに積極的なタイプでは無いが……

「ほら、食べるぞ」

「はいはい、いただきます」

「いただきます」

モグモグ……

「今日は何するんだ？」

「そうね……あんたはあと何日ここに居られるの」

「そうだな……今日も含めたら……4日後には帰るからな……」

「そう……なら、3日はサークルに協力してもらえるわね」

「別にフルでも構わないが？」

「少し別のことしてもらおうわ」

「そうか」

「で、他にどんな活動すんだ？」

「うーん……まあ、流れでね？」

「計画性無しか……」

「サークル活動1日目」

「で、今日は？」

「見ての通りよ」

「廃ビルね」

「そりゃあ、見れば分かるよ……」

「これまた、オンボロな……」

「ここでは、幽霊が多発してるとかしないとか」

「信憑性薄すぎだな」

「でも、他にあては無いしね」

「面倒臭いな……」

「もしかして、幽霊が怖いとか？」

「なんで、今更幽霊に驚かならんのだ？」

もう、そんなもん経験済みだっつの。

「それじゃあ……レッツッゴー！」

「はあ……よく慣れてますね」

「そりゃあ、あなたが居ない間のパートナーですもの」

「はあ……」

「うわあ……」

ひでえな……本当にボロボロじゃねえか、どこも今にも崩れそうだけ。

「てか、ここに入っつていいのか？」

「勇人、こんな言葉があるのよ」

「なんだ、急に」

「バレなきや犯罪じゃないのよ？」

反射的に手が額に行く。無許可ならそう言え。

「ということ、メリー何か見える？」

「特に……」

「なーんにも無いな、霊力も感じない……」

ガッツ！

「ブベラ!!」

なんでここは少し低いんだ？デコぶつけたじやねえか……

「どうした？」

「いやベト カツ…… ぬあ！」

バタツ！

「プ……アハハハハ!!こけた！アハハハハ……」

「ぐつ、こ、こんな屈辱……」

ち、畜生、なんでつまづいたんだよ!?

「はあー、帰ろうぜ？」

「もう少し探検しましょう」

「分かった……」

「あ、メリーさん、そこで何を？」

「これ見てよ」

「うわあ……」

見事に天井に穴が……これまた大きいな……

「ちよつと、登ってみますね」

「気をつけなさいよ」

「心配なk……ん？」

ゴンツ！

「ゲブ!?!」

なんで、石が……

「あつ……」

ズドーン！

「トト!?!」

「だ、大丈夫かしら？」

「大丈夫ですよ……そんなにやわじや無いです……」

いたく、なんでピンポイントでくるかなー。

「はあ……なんかおかしいな……」

チュー……

「ネズミか……それ以外に生物はいなさそうだな」

「不潔ね」

「まあ、これだけ荒廃していればね……」

「チューー！」

すっ

「クヌム!?せ、背中に!？」

な、なんで？

「うわ、ちよ……くすぐってー！メリーさん取って！」

「ちよつと動かないで！」

「そう言われても、くすぐったくて！」

カッ

「あ」

「え？ちよつと、つて、キヤツ！」

バタンツ！

とりま、メリーさんを下敷きにするのは防げた……

「すんません……」

「大丈夫よ……それより、どいっ「あー！」あー」

「な、何してるのよ！」

「これはだな……」

「バカ！」

「アヌビス!？」

「ちよつと、落ち着きなさいな、ただの事故よ」

「そ、そうなの? ごめん」

「俺には?」

「次行くわよ」

「もう勘弁してくれ……」

以下ダイジエスト

「床に穴があるわね、ちよつと見てきて」

「了解」

暗くて見えんな……

バサッ!

「ぬお!?! コウモリ……か……?」

あ……

バタッ!

「バステト!?!」

「ふう……くそっ」

あそこにドアが。

「はあ」

バンツ！

「セト!？」

「勇人、大丈夫!?! って、何してんのよ」

「もう帰ろうぜ……」

「今日はこれで終了よ」

「ああ……」

「なんであんただけボロボロなのよ……」

「もう嫌だ、お家帰る……」

「なんか呪われてるようだったわね、別に変わったのは無かったけど……」

「単にこいつの運が無いだけよ」

「サークル活動2日目」

「今日は大学でか？」

「特にすることが無いからね」

「まあ、勇人君も少しこのことが知りたいでしょ？」

「そうですね」

「それにしても、昨日からよく立て直したわね」

「はは……」

「ふふ……」

「ふーん……」

色々な部活があるのな。

「勇人、こつち来てみて！」

「ん？なんだ？」

「こんにちは、ファッション部です！」

はー……珍しい部活だな。

「へー……でも、なんでここに？」

「部長と知り合いなのよ」

「で？」

「でね、ちよつと、モデル頼まれたのよ」

「ほほう、蓮子とメリーさんか、確かにスタイルはいいよな」

「私たちはしないわよ」

「あ！あなたが蓮子とお知り合いで今回モデルをやってくれる……」

「ん？ちよつと、蓮子、どういうことだ？俺がモデルだなんて」

「そうだ！俺じゃあ身長が足りない……シクシク……くそつたれ！

「お、俺じゃあ向いてないんじゃないじゃあ、他に適任がいるだろ？俺よりも背が高いやつとか

……」

「そういうわけにもいかないんですよ」

「なぜに？」

「そうね、”女装”だからね」

「……!?!」

「ダッ！」

「おっと行かせないわよ？」

「ググ……男の女装なんか見たく無いだろ、ね？メリーさん？」

「あなたの女装は興味あるわ」

「うえ？」

「大丈夫ですよ、サイズは大丈夫です！」

グハッ！俺が小さいと言うのか……

「ね？モデル、やってちょうだい？」

「ことw「それじゃあ、こちらに」やめろ！」

ー青年着替え中ー

「さ、出てきてください！」

「い、嫌だ！」

「ほらー！」

「ぐう」

屈辱だ……スカートを履かせられるなんて……カツラにパッドつて……

「……………」

「うう……」

「やっぱりね……」

「そうね」

ぶわっ

シクシクシクシク……

「本当に似合うわね」

「そうでしょ？」

「多分、女の子といってもバレないんじゃないかしら？」

「そうね」

「俺は男、俺は男、俺は男、俺は男……」

「勇人」

「何？」

「今日はずっとその格好ね」

「はあ？やめてくれ……」

散々な日だ……

「サークル活動3日目」

「あー……」

心身共に疲労困憊だ……なんなのだろうか、サークルって……もう、わけが分からん。

「んー、その様子だと今日はダメそうね」

「誰のせいだよ」

「今日は休みなさい、その代わりに明日してもらいたいことがあるの」

「何だ？」

「それは……後で……」

「はあ……もうプライドは傷つけないでくれよ」

「大丈夫よ」

「安心できねえ」

初めてだよ、こんなに屈辱的な気分になされたのは、敗北感（？）まで感じるよ……

「とりあえず、今日は休んでてね？」

「そうする……」

「それじゃあ」

「いつてらっしゃい」

「いつてきます」

がちゃん

「はあ……寝るか……」

もう身も心もボロボロだ……全く厄いな……

第38話

それぞれの日の青年&少女（後編）《幻想

郷》

「みなさん、集まりましたね？それでは、勇人さんが帰ってきた時に何をするかの話し合
いを……」

「ちよつと待て」

「何ですか？」

「何ですか？じゃねえよ！何で私達もなんだよ！？守谷神社か白玉楼でやればいいだろう
？」

「なぜなんだぜ？早苗と妖夢とでやればいいのぜ。なんで、私と霊夢と咲夜まで呼んで
んだ……よりによつて博麗神社でとか……」

「そうよ、面倒臭いわ」

「私、そんなに暇じゃないんだけど……」

「なら、この菓子はいらないですね？」

「さー！早速話しましょう！」

「霊夢……」

「これはひどい……」

「咲夜さんも大丈夫です！ちゃんとレミリアさんにはいつてますから！」

「あら、ならいいわ」

「なんで、今回の早苗は手際がいいんだ？妖夢はずっと黙ったままだな……」

「それでは改めまして……勇人さんが帰ってきた時に何をしましょうか？」

「宴会でいいんじゃない？」

「それではいつもと変わらない気が……」

「やっと、妖夢が喋った。もう、何も言わないかと思つたぜ。」

「勇人さんとはとても大きなけじめをつけるのですよ？生半可なものでは余計に傷つけるだけです」

「そんなに勇人はやわじやないでしょ？」

「咲夜の言う通りだな、あいつはなんやかんやでどうにかなる気がするぜ。」

「いや、今回は家族や友人などの大切な人との完全なお別れでもありますから」

「あと、勇人の好きな人であろう人もね」

「うわっ!?!なんで、紫がいる!?!」

「ちよつと、勇人のことを少し監視したらね、面白いのが見れちゃったのよ」

「え!?!」

「な、なんですか!?ま、まさか、例の女性と……」

早苗と妖夢の食いつき方が半端じゃねえぜ……

「まあ、いい感じではあるわね」

「そうですか……」

興奮したり、落ち込んだりと忙しいやつらだぜ。

「とりあえず、この写真見てよ」

ん? 何だ、ただの女の子じゃねえか。なんか、顔真つ赤にしていかに不機嫌な顔してるな……まあ、可愛い方かな?

「ふーん、それにしても、勇人に似てるわね、妹とか姉とか?」

「確かに似てるような……」

「誰なんです?」

「ふふ……」

「これ、勇人本人よ?」

「「え、ええー!?!」」

「ふーん」

「あら、今度メイド服でも着てもらおうかしら」

な、あいつか? まあ、確かに中性的な感じではあったが……はあ……似合うもんだな

……

てか、咲夜地味に問題発言。

「やはり、勇人さんは女物が似合う……やっぱり、巫女服着てもらおう……」

「わ、私はいつものかつこいい勇人さんの方がいいです！」

「はいはい……分かったから……」

「で、紫はそれだけ？」

「そうよ、これのコピー欲しいなら今のうちにね？」

「私います！」

「私も」

「うっ……私も……」

早苗は迷わず……妖夢、お前さつきかつこいい方がいいとか言っただけか？つて

「咲夜!？」

「お嬢様に見せるだけよ、面白いじゃない」

「お前、なかなかひどいな……」

まあ、勇人、頑張ってくれ……

「それじゃあね〜」

「本当にあれだけなのか……」

「いつも何考えてんのやら……」

「で、結局勇人のことはどうするのかしら？」

さすがだ、咲夜。話を元に戻すとは……

「てか、私、そんなに勇人のこと知らないけど……」

「そうだよな、全部宴会でしかあってないんじゃないか？」

「そうよね」

「なら、みなさんと勇人さんのことを話しましょう！」

また、突拍子なことを……やはり、早苗は天然だぜ……てか、なんかガールズトーク

みたいなノリだな……

「順番はどうしますか？」

「適当で」

―東風谷早苗の場合―

「やはり、勇人さんといえばあのクールさでしょう！」

「確かに騒がしいタイプでは無さそうね」

「何事にも冷静沈着でどんなことにも動じないところはかっこいいですね！」

何事にも冷静沈着？……宴会のあの時は思いつきし焦ってたぜ？

「あと、勉強においても寺子屋で教師をしていて、博学ですし」

「まあ、時々うちの図書館にも来るわね」

「ああ、結構いるよな、あいつ」

あいつの本を読むスピードは異常だぜ。本当に読んでんのか？と思うが、全てしつかり頭に入っているという……

「でも、頭良くてもここではあんまり意味がない気がするけどね……」

「うっ……」

まあ、弱い奴は死あるのみだからな。

「でも、勇人さんの霊力の量はご存知でしょう？」

「まあ、人よりはかなりあるわね」

「さらに、使い方もあつという間に慣れてしまってますし」

「まあ、私はほぼ勘でやってるけどね」

「まあ、霊夢さんはセンスと勘でどうにかしてるからな」

「勇人さんもセンスはありますが、勘では無く、計算づくめで戦っている感じですね」

「その辺は真逆だな」

「総括して言うと、勇人さんはかつこいいです！」

それが言いたいだけなんだな？

――十六夜咲夜の場合――

「私が言うの？」

「ええ」

「確かに接点が無いわけじゃ無いけど……」

「え？」

「いや、言ったでしょう？彼、よく図書館に来るって」

「ああ」

そりゃあ、いくらかはあるだろうな

「私から見た感じは特に無いかしら？なんて言うのかしらね、普通の人間に見えるわ。なんの能力も持たない。実際はかなり恐ろしい能力を持っているんだけど」

「そうだよな、いつもはぼーっとしてるか、考え込んでるのかのどちらかだぜ」

「だから、最初、お嬢様が興味を持ったとか言い始めた時は驚いたわね」

「あのことですか……」

ん？なんだ？

「少しね、お嬢様が勇人にちよっかいを出したのよ」

「ふーん……」

「まあ、最初はただの気まぐれだと思ってたわ。すぐに殺されると思ってたわね」

「む……」

「ま、物の見事にお嬢様は勇人にやられちゃったけど」

「そうですね……肩から血を流しながら戻ってきた時の勇人さんを見た時驚きましたよ……」

「私が敵討ちと思つたら、時を止めても銃弾は動いたし、何よりあいつの目が恐ろしかったわね」

「物凄い威圧感なのかしら？」

「違うわね、無ね。何も無い、どんな意思を持つてるのかも分からない、ただ霊力がバカみたいに高くなつてたけど」

「まあ、あの後、お嬢様に血を渡してきた時はこれまた驚かされたわね」

「よく分からない子なのね」

「そうね、まあ、彼の女装にはかなり興味があるわ」

「それはやめとけ……」

―魂魄妖夢の場合―

「わ、私から見た勇者さんですね……やはり、何を考えているのかは分かりませんが、でもしつかりとした信念をお持ちの方ですね」

「そうか？ 無さそうだが」

「いや、ありますよ。勇者さんは男としての誇りを持ってますし、意外と負けず嫌いですよ。」

「へえ……あいつが負けず嫌いねえ」

「まあ、基本的には平和主義と言ってますが……」

「弾幕ごっこもしたがないのか？」

「面倒臭いと言ってますね」

「どっちなんだぜ」

「あと、身長を気にしてますね」

「大きくないが小さくも無いんじゃないか？」

「里の人の男性は外の世界より全体的に大きいようですからより一層気にしてるのでは？」

「本当に良くわかんないやつだな」

「あ、でも、一番強い武器での話は合いませんね」

「まあ、銃と剣だからな」

「それでも、勇人さんの確かな信念と時折見せる優しさは素晴らしいところだと思います！」

―霧雨魔理沙の場合―

「私か？」

「そうです」

「んー……」

なんだろう……何かあるか？

「あ、あいつとは弾幕談議で合わないことが分かったな。弾幕はパワーってのに、確実

性だとか言いやがって……男ならパワーだぜー」

「勇人さんはそういうタイプではないと思うんですが……」

「でも、パワーが一番だろ？ま、そこは置いてだな……」

んー……他にねえ……

「あ、これ疑問になるんだけど、勇人って結局人間なのか？」

神の孫とか言われてるけど……

「一応、人間ですけど……寿命は人よりは長くなる可能性はあるそうです」

「ふーん……そういえばあの短期間であんなだけ霊力が上がったのも疑問だな」

人間ではありえない早さで上がってるよな……

「なんか、人間じゃなくなつて暴走しそうだよな！」

「[[「……」]]」

あれ？冗談のつもりなのだが……

「確かに可能性はあるわね」

「今度、おじいさんに聞きましょう」

「な、無いですって！」

「そうなたら、私が討伐するだけよ」

「だから、なりませんって！」

ありや、爆弾投下しちまったか。

「ま、大丈夫だろ、起こったら起こってたでどうにかなるぜ」
「変わらないわね」

「それで、最終的には勇人はよく分からない子ということね」
「適当だぜ……」

「まあ、霊夢と共通点は多いけど真逆なところも多い感じね」
「確かに、能力もどちらも理から外れるものですし、どんなものからも影響を受けなくなりますしね」

あ、確かに似てるな……

「まあ、霊夢はただ本体が干渉されなくなるけど、勇人は物や行動が干渉されなくなると
いう具合に違うけどね」

似てるようで似てないか……

「戦闘スタイルは勘と計算……でも、どちらにも有り余るセンスの持ち主」

「まあ、私にお賽銭くれるならいいけど」

「あいつはしっかり働いてんのかな……」

「私も働いてるわよ」

「あっそう」

よく言うぜ、常にゴロゴロしてるくせに。

「で、勇人が帰ってきた時はどうするのかしら？」

「「「あ」」」

第39話

デートの日の青年

「ただいまーっと」

スヤー……

「あら、寝てるのね」

まあ、色々させてもらつたしね、さすがに疲れたかしら？

「スー……スー……スー……」

寝る時は本当に幸せそうな顔するわね……明日の事はまた、後で話すことにしよう。

「んー……女装は勘弁してくれ……」

「プツ……夢でも女装させられてるのね」

本当に似合つてたわ、写真もちやつかり撮つてある。

今日も含め5日間はとても楽しい時間だった……やつぱり、勇人と出会えて良かったと本当に思う。メリーとも会えて良かったわ。でも、今の自分は勇人の存在がとても大きかったわ。初めて、この目を褒めてくれた、知ってからも接し方は変わらなかった。それが本当に嬉しかった。

でも、明後日には勇人はいなくなる。死ぬわけでは無いけどもう会えなくなる……だから、明日は絶対に忘れない思い出を作るのよ！そして、想いを伝える。叶わないけど、言わないよりマシよ。

「覚悟しなさいよ、勇人。明日は絶対忘れない思い出、作ってもらうからね！」
とりあえず、明日に備えて風呂に入ろう。

「ん、んー……よく寝た……」

疲れが吹っ飛んだぜ。身体が最近丈夫になってきた気がするぜ。今ならどんな怪我也寝れば治りそうだ！

「とりあえず、顔を洗おう……」

どうも、寝起きは頭が回らない。それにコンタクト外してるからよく見えない……ん？お前、目が悪かったのか？って？そうだよ、ずっとコンタクトつけてましたよ？幻想郷では紫さんから持ってきて貰っていた。寝る時は外さないとな？

「ふあ……」

とりあえず、洗面所に……

ガラツ

「ん？」

「え？」

……は？なんで、蓮子が……

「な、何してんのよー！」

お、おい！何を投げた？

スコーン！

「ぬおお！イッタイメガー！」

なんと言うコントロール……

「この馬鹿！変態！」

「こ、これは事故だ！」

そ、そうか……洗面所と脱衣所は同じところにあつたか……

「……」

「まだこうしないといけないのか？」

「ずーっと正座させられてるのだが……痺れてきた……」

「黙りなさい、変態」

「あい……」

「だから、事故だと……」

「ゆ、勇人は私の身体を見たわよね？」

「それは事故なら「黙りなさい」アツハイ……」

「言い訳ぐらい聞いてくれよ……」

「そ、それでどうだった？」

「はっ？」

「この御仁は何を？」

「だから！私の身体を見てどうだったと聞いているのよ！」

「それは……コンタクトつけてなかったから見えてない……」

「はあ!？」

「ほら、良かっただろ？これでお前は何も失ってない、これで解決だよな？」

「そ、そんなわけないでしょ？罰として、あ、明日……」

「こればかりは俺に非があるので拒否できない……」

「で、明日が？」

「あ、明日、私とデートしなさい！」

「はあ……」

「なによ、反応薄いわね」

「構わないが、俺、デートしたことないぞ？」

「私もそうよ」

「別に楽しくないかもしれないぞ？」

「わ、私は勇人と一緒にいれればそれでいい……」

「ん？」

「な、なんでもない！兎に角、明日は絶対にデートに連れて行くこと！分かった？」

「了解」

「あ、あと、ちゃんとオシヤレしてよね」

「オシヤレって言われても……」

「そうね……あんたってそのとこ全然だったわね、デートの時に私がコーディネートしてあげるわ」

「女装は勘弁な？」

「しないわよ」

「ならばよし」

明日か………そういえば、明後日には幻想郷に帰るんだよな………未練残さないようにしないとな………明日、しっかり言うべきかな？

ー次の日までキングダムゾーンー

「で、何処に行くんだ？」

今日は珍しく早起きした。いやー、行事があると早起きしちゃうタイプなもんで……

「そうね、とりあえず、あんたの服を選びに行きましょう」

「了解」

「シヨツピングモールの場所は変わってないな」

「中は結構変わってると思うわよ？」

「数年もすれば変わるだろうな」

「とりあえず、メンズの服を売ってる店に……」

「こんな店前は無かったよな？」

「前からあったわよ」

「ありや？」

うーん……こんな店とか行かないからな……

「勇人は派手な色は似合わないわね……好きな色は？」

「青もしくは黒」

「そうよね……部活の格好なんか青一色だったしね……」

青色好きなんだもん。

「んー、地味に手脚長いわね……うわっ、身体細っ」

「む……」

そんなに痩せてないだろ？

「この黒のジャケット似合いそうね……ズボンはデニムで……下にはこのカッターシャツを活用しますかね……」

「え？なんで俺のシャツ持ってきてんだよ？」

「いいの、とりあえずこれ着てきて」

「了解……」

「どジャアア〜〜ン」

「なんなのよ、その決め台詞」

「似合うか？」

「いいわね、買いましょう！」

「そうだな、金は俺が出す」

「別に私が出してもいいけど」

「自分の物になるのだから、自分で買うさ」

「そう」

「ありがとうございます」

「よし、次は何するか？」

「お昼には早過ぎるわね、そうだプリクラでも撮りましょう！」

「それって、ゲームセンターに行くのか？」

「そうよって、あんた騒がしいのが嫌いだったわね」

「いや、今日はお前の言うこと聞くよ、さっ、行こうぜ？」

「えええ！」

「大丈夫？」

「あ？ああ……大丈夫だ、問題無い」

「そう、さつさとプリクラ撮っちゃいましょうよ！」

「これか？」

「そうよ？もしかして、初めてとか？」

「そうだ」

「操作は私が知ってるから任せなさい！」

「おおぅ……こんな感じか……」

「よし！撮るわよ！笑顔よ？」

「了解」

「？ハイ、チーズ！カシャッ！／

「ハハハハ！顔引きつってるわよ！」

「写真撮られるの苦手なんだよ……」

「ほら、もう一回！」

「え？」

顔が近い……

？ハイ、チーズ！カシヤツ！／

「さ、これに色々描けるわよ？」

「はあー……すげえな……」

「あとは待つのみ！」

「お？出たぞ」

「よし……はい」

「おう……なんだこれ……目でつか！」

な、なんじゃこりゃあ！

「プツ……ハハハ！」

「わ、笑うな！」

「ヒヒヒ……次……行きましょう？」

「息絶え絶じゃねえか……」

「こんにゃろう……」

「勇人は何処行きたい？」

「んー……本屋かな？」

「そうね、そういえば、あんたの好きな作家の本いくつか出てるわよ？」

「マジか!? なら、早く行こうぜ！」

ガシッ

「……!? え、ええ」

「おお……もうこのシリーズ完結したのか……新しいシリーズも！」

「相変わらずね」

「いや、だってこの人の本好きだもん……」

周りの人はラノベばっかだもんなあ……ラノベも嫌いじゃ無いけど……

「全部推理小説ね……」

「面白いからいいんだ！」

「今日一番楽しそうね」

「いい買い物だった……」

「時間もちょうどいいわね、お昼はカフェがあるからそこでとりましょ？」

「了解」

「ご注文は？」

「私はサンドイッチにしようかしら？」

「俺はナポリタンで……」

「かしこまりました」

「あんた、麺類好きね……」

「いいだろ？別に」

「まあ、いいけど」

「ここのコーヒーってあのカフェより美味しいかな？」

「さあ……てか、今日はサークル休みなのか？」

「ええ」

「まさか、無理矢理休みにしたとか？」

「ちゃんとした休みよ」

「そうか、ならいいよ」

「……勇人はサークルの活動楽しかったかしら？」

「もちろん、楽しかったさ。まあ、色々大変だったし、関係ないこともやらされたがな」

「そう……楽しかったのなら良かったわ……」

「お待たせしました」

「おお……美味しそうだな」

「ええ」

「一口頂戴？」

「ああ、ほら」

「ん、美味しいわね。ほら、私のも」

「ふむ……悪くないな」

「あんたは気にしないの？」

「ん？」

「間接キス……」

「少しは気にするが……べ、別に嫌ってわけじゃないし……」

「そう……」

「はあー、美味しかったな、コーヒーはやっぱりあっちの方が美味しいが」

「そうね」

「次は何処に行く？」

「ん？あのアンティークショップはどうだ？」

「いいわね」

「お客さん少ないね」

「いや、少ない方が良いものがある気がする」

「おお、いらつしやい」

あ、店の人かな？おじさんだな。

「とりあえず、見て回ろうぜ」

「そうね」

「本当に色々あるわね……」

「そりゃあ、アンティークって、古くて価値があるものを指すわけだからジャンルは問わない」

「この置物可愛い」

「……………、これってナイフ……………」

「ありや!? 仕舞い忘れていた!」

「おお……………このナイフ……………いいな……………」

持つてもしつくりくるな。あれ? でも、銃刀法で……………」

「青年よ、それをあげるから黙ってもらえるかな?」

「もとから言う気はありませんよ、それにしてもいいナイフですね」

「そうじやろう! お主は見る目があるのよう」

「いやいや……………ん?」

なんだ? このネックレス……………つい目がこっちに……………」

「これなんだ?」

「それか? それはだな……………ああ、デユランダルという剣を模したネックレスだな」

ああ、確か『ローランの詩』に出た剣だっけな? 確か『不滅の刃』という意味だっけ

? 『不滅』か……………」

「これ、いくらだ?」

「それは3万と言いたいところだが、お主はまけて1万円にしておくよ」
「おお！ありがとうございます！」

「なあに、お主は見る目があるからいいんだ」

「おじさん、ちよつと来てくれないかしら？」

「私か？」

「俺は？」

「勇人は来ないで」

「分かった……」

2人でコソコソと何してんだ？

「おじさん、これっていくらかしら？」

「これは……エメラルドのネックレスじゃな。なかなか高いぞ？」

「いいから、いくら？」

「5万くらいかな……」

「うっ……でも……」

「ん？ ははーん……いくらもってるんだ？」

「えっと……2万円……」

「5000、5000円でいい、彼に送るんじやろ？」

「え？ いいの？」

「恋する乙女に支援するのは当然のことだ、彼にバレないようにだろ？」

「さ、さすが……」

「一万円ね、まいどあり」

「ありがとう、おじさん」

「いいってことよ」

「何を買ったの？」

「これか？お前のプレゼントにと……」

「え！本当!？」

「あ、ああ、ほら」

「これは？」

「デュランダルという剣だな」

「女の子に剣って……」

「いいだろ？それにそれは『不滅の刃』って意味で、まあ、俺はいなくなるけどお前との
思い出は不滅と言うことで……」

「そう……嬉しいわ」

「なら、良かった。俺が付けてやるよ」

「え？」

顔が近い……

「これでいいな」

「う、うん……」

「帰るか」

「そうね……」

「今日は楽しかったわ」

「なら良かったぜ、俺もだよ」

「そう……明日には帰っちゃうのよね？」

「……そうだな、ずっとはいられない」

もう居なくなってしまうのよね……言ってしまうおう！

「勇者！」

「ん？」

「わ、私……」

ブーン！

「な!? 車！」

「え？」

「危ない！」

「キャツ！」

ガツシャーン！

「ゆ、勇人!？」

え？なんで？は？

「ほら、こつちに来い！」

「お、お前は!？」

須藤!？なんで？それよりも勇人は!？」

「どいて！勇人が！」

「黙って車に乗れ！」

「離して！」

「この！」

「んん！」

口を塞がれた!？腕も拘束された!？人は複数いたの？

「よし……乗ったな……行け！」

「んん!んん!！」

勇人……

「ハハハハ……あの野郎が無事だとしてもついて来れないな、安心しろよ、蓮子」

第40話 狂瀾怒濤の日の青年

「んん！んん！！」

「ヒヒヒ……足掻いても無駄だ、あいつ、まともにも車に当たったからタダじやすまないだろう、それに俺らがどこに行つてるのかも分からまい」

くっ、こいつ……でも、本当にそうだから、余計に腹が立つ。勇人は携帯を持たない、連絡手段が無い。それに大怪我してるに決まつてる……

本当にこの男、最低！

「そんな目で見ると、安心しろ、俺が養つてあげるからよ」

それなら、死んだ方がマシよ！でも、何もできない。

どうしたらいいの？

「蓮子は上手くやってるかしら?」

今日は、勇人とデートに行くんだとか張り切っちゃって……まあ、たのしんでるでしょうね。

やっと、蓮子は積極的なタイプだけど、変なところで引つ込まんだから……

最初は、死んだ人を生きてると言ってた時は変な人と思ってたけど、今までの不思議な体験によって本当にそうなんじゃないのか?とおもいはじめたわ。実際、生きてたけど。

蓮子の好きな人にしては随分と地味でそういうことには無縁な人に見えたけど、違う世界にいるとか霊力を扱えるとか、普通な人から見たら、頭がぶつ飛んでる人に見えるだろうけど、不思議と本当の事だと思えた。いや、本当なのよ。ますます、面白いわよね。なんとなく、蓮子が惹かれてる理由もわかる気がするわ。

「あら?何かしら?」

少し考え過ぎてたかしら？目の前に人が大勢集まってるわ。事故かしら？

「すいません、何があつたのですか？」

「ん？事故みたいだ、どうやらひき逃げらしい」

「ここでね……確かに人通りは少ないからね……今は別だけど。あ、見えるわ、誰か……し……ら？」

「え!？」

「どうした？お嬢さん？」

「勇人!？」

「お知り合いか!?おい！知り合いがいるぞ！」

「何！そうか、君こっちに来てくれ！」

「ちよつと！勇人!？大丈夫なの？」

頭から血が出てる……

「ん……は！」

「目が覚めたぞー！」

「れ、蓮子は？あいつは!？」

「とにかく、落ち着いて！」

「とりあえず、病院に行くぞ！」

「そんな場合じゃない！」

「ちよつと、勇人！どこに行くの？」

「蓮子を探しにだ！」

「兄さん！怪我してるから安静にしなきゃ！」

「こんぐらい、何でもない！」

「わ、私が連れて行きますから！もう大丈夫です！」

「そ、そうか、頼むよ嬢ちゃん……」

「ほら！こつちに来なさい！」

「病院には行かんぞ！早く蓮子を……」

「蓮子がどうしたの？」

「あいつだよ……あの大学生のやつ」

「須藤ね……そいつが？」

「車で俺らに突っ込んで来て……俺が轢かれて、その後……蓮子の叫び声が」

「あの野郎ね……」

バチッ！バチバチバチバチバチバチバチバチ！

「はあ……はあ……あのカソツタレが……」

キレてるわね……霊力が漏れてるわよ……

「少し待ってくれ……蓮子の居場所を特定する……」

「例の結界？」

「いや、結界だと限界がある……蓮子にネックレスを渡したんだが、その時にそいつを媒介に霊力による守護霊を宿らせた……あの本読んでて良かったぜ……」

「で、どうやって？」

「そいつが発する霊力を、探知する」

「できるの？」

「この範囲は初めてだが、できるかじやない、するだよー」

「……分かったわ」

「……は、ここは勇人を、信じるしかないわ。こんな時、私は無力だ……」

「ほら、降りろ」

「……」

「ヒヒヒ……あいつはこの場所は知らない、もうゲームオーバーだ」

「……」

「だが、念のためというものがある。ゴロツキをたくさん雇ってある、警備させるか

「……」

「俺らは奥の部屋に行くぞ、ほら」

「……」

「そんな目で見るんじゃないよ、あんな男より俺の方がいいことを教えてやるからよ

「……」

「……は……？移動時間的にそんなに遠くないはず。」

「ここはだな、俺の家だよ、知らなかっただろう？いつも、人を呼んでる家は別の家だ」

「そして、ここはセーフティルームだ、この頑丈なドアの向こう側に行くんだ」

くっ……計画してたわね……準備が良すぎるわ……

「あいつには借りがあるからな、この顔だつてあいつのせいだ、だから、お前をもって返してもらうぜ、さあ、行くぞ」

「はあ……、はあ……、どこだ？」

「冷静になって、焦りは禁物よ？」

本当に大丈夫なのかしら？汗がすごいわ……血と汗が混じってポタポタ落ちていく

……

「クソ！」

「落ち着きなさい！蓮子を助けたいなら、冷静にならなきゃ！」

「……！そ、そうだな」

「深呼吸して、もう一度」

「スー……ハー……スー……ハー……」

再び勇人は目を閉じる……霊力も漏れてない。

「……！いた！」

「本当!？」

「ああ……そこまで遠くに行っていない……ただ、守護霊と言ってもしつかりとできなかったから一回限りしか守れねえ……」

「どうやって行くのかしら？」

「ん？そうだな……」飛ぶか

「え？飛ぶ？」

「そっちの方が速い」

「わ、私も行くわよ！」

「え？危ないぞ？」

「私は蓮子の親友よ？黙って見てろと言うの？」

「……分かった、なら背中に乗ってくれ」

「分かったわ」

「酔うなよ？」

「乗り物酔いには強い方よ？」

「よし、待ってるよ、蓮子……」

そう言うのと、走り出して、

「ほらー！」

タンツ……

「よし……飛ばすぞ！」

「え、ええ」

本当に飛んだ……

ピツピツ……

「扉のロック完了……扉の内側にもゴロッキを配置してと……さらに奥の部屋に行くぞ」

「ほら」

ボスツ

「口のテープ剥がしてやるよ」

ベリツ……

「……」

「そう不貞腐れるなよ」

「お前なんか勇人にまた、吹っ飛ばされるわ」

「はいはい、それより、あいつとキスしたのか？」

「……」

「してないんだな？ファーストキスは俺がもらってやるよ」

「いやよ！あんたみたいなのやつとしたくないわ！」

ガシッ！

「……！このネックレスはあいつからもらったやつだな？趣味悪いやつだな。俺が新し

いのをやろう」

「触らないで！」

「こんなボロボロなネットワークレス、外した方がいいぜ、ほら？外してやるよ」
「触るなって言ってるんじゃない！」

ドンッ！

「ガハッ！」

「え？」

「ボウギョカンリョウ」

喋った？何が起こったの？

「レイリヨクブソクニヨリ、ツギノボウギョハデキマセン」

「な、なんなの？」

「クソが……」

「あ、あれ？」

ま、また、普通に戻った……そうだ！今の内に！

ダツダツ……

「な!?!待ちやがれ！」

「……！ 靈力の反応が消えた？ 一回防御したのか！」

「え？ 場所は大丈夫なの？」

「それは大丈夫だが、今の蓮子には防御する手立てが無い！ 急がないと！」

「はあ……、はあ……」

「くそっ！どこ行きやがった！」

行つたわね……

それにしても、どんだけ広いのよ！入り口が全く見つからないわ！腕を縛られてるせいで走りにくいし。とりあえず、隠れてるしか無いわ……大丈夫よ！勇人が来てくれる……

ガチャツ……

「……！」

「どこだ？蓮子、出てこいよ」

ど、どうしよう？そ、そうだ、小銭が……あつた。

タイミングを見計らつて……あつちを向いたわね！

ドアの向こうに小銭を投げた。

チャリーン……

「な！向こうに行つたのか！あの女！」

ダダダダダ……

「はぁー……危なかった」
早く来てよ……

「あそこだ！」

「あの家？」

「ああ……ご丁寧に警備を配置してやがる、バカなのか？俺らに場所を教えてるようなもんだろう」

スタツ……

「で、どう行くのかしら？」

「正面突破だ」

「それは……ちよつと……」

「4、5人ぐらいしかいないから、余裕だ」

「あ！まちなさいよ！……もう……」

「これだけで金がもらえるとかラツキーだよな！」

「本当だぜ」

「見張るだけでな」

「何も起こらなさそうだしな」

「へー、そうなんだ」

「そうだ」

「「「は？」」」」

「寝とけ」

バキッ！

「アガッ……」

「て、テメエ！」

ベキッ！

バキッ！

ゴスッ！

バタッ、バタッ、バタッ……

「もういいぞ」

「本当にあつという間ね……」

「この先だな……」

「えらく頑丈そうな扉ね……パスワード制のロック……どうしますかね？」

「はあ……オラア！」

ドゴーン！

「ふう……」

バチバチバチ……

「あ……何なのよ……」

ドゴーン！

「ん？」

なんの音？何が破壊された音よね？

「まさか？勇者？」

なら、急いで行かなくちゃ！音のした方は……あつちね！

「はっはっはっ……」

居た！メリーもいる！

「勇者ー！メリーー！」

「!?れ、蓮子！」

「……!?蓮子、後ろ！」

「え？」

ガシッ

「キヤツ！」

「ほーら、捕まえた、ここまで、ご苦労さんだな」

「須藤！」

「このクソカスが！」

「ハハ！言つとけ！だが、勝者は俺だ！野郎ども！こいつを始末せよ！倒したやつは金をもつとやるぞ！」

「テメエーだけは許さねえぜ……」

「ふんつ、ここまでこれたらいいがな？ほら、蓮子！ついて来い！」

「いやよ！離しなさいよ！」

「蓮子！」

「おっと、先には行かせないぜ？」

「ヒヒヒ……」

「ククク……」

「メリー」

「何？」

「とりあえず、下がっててくれ」

「分かったわ」

バチバチバチ……

また、キレたわね……今度こそ本気でプツンしたつてところかしら？

「金をもらうのは俺だぜー！」

ベキッ！

「グハッ……」

「1発でノックアウトね……ただ、少し多くないかしら？」

「全員でいけえー！」

「ヒヤッハー！」

「グハハ！」

「スー……はっ！」

ドンッ！

「!?」

「グギャー！」

「ガハッ！」

え？ 勇人を中心に衝撃波みたいなのが……

「な!? 怯むな! いけえー!」

「オラア!」

バキッ!

「ゴフツ……」

「ドラアア!」

「勇人! 後ろ!」

「な!?!」

ガコーン!

「仕留めたぜ!」

金属バット!? あれではひとたまりも……

「俺が…… バキッイ! ウギイ!?!」

「はあ…… クツソが…… 頭殴りやがって……」

「大丈夫なの!?!」

「大丈夫だ……」

血だらけでよく言うわよ……

「さあ、もつと来やがれ!」

ボスッ

「くっ！」

「そう、怖い顔すんなって、可愛い顔が台無しだぜ？」

「あんたに言われても嬉しくないわよ」

「ありや、厳しいねえ、関係ないが」

「!? 触らないで！」

「あ? どうせ、俺のもんになるのだからいいだろう? 意外と胸あんじゃん」

「だから、触らないで!!」

ドスッ!

「痛っ! 何すんだ! これはお仕置きが必要だな」

ガシッ

「安心しろ、俺が居ないといけないようにしてやるから……」

「やめて……」

「ヒヒヒ……」

スッ……

「触るんじゃあねえぜ、その汚ねえ手で」

「!!」

ガシッ!

「なにいろ!?!」

「蓮子……少し遅れたな……だが……間に合ったようだな……」

「勇者!」

ダラダラ……ズルッ……

「たまげたな……その傷でこつちまで来るとはな……でも、別の見方をすればそのままやられてしまった方が幸福だったのにな……」

チラッ

「いい時計だな、さすが金持ちか……だが　もう時間が見れないようにぶつ壊してやるぜ……」

「……」

「きさまのその自慢の顔の方をな……」

「……ハハ、なかなか面白いやつだな……お前の名前は確か勇者だったか？お前のこと色々知りたいところだが蓮子とやるべきことがあるのだよ」

「ムダ話をしている暇はもう ないんだ」

「うぐつ……」

ガクツ

「……今のお前のパンチだが……すごく『パワー』が弱かったぞ……ピッチャーフライ取るみたいにかんたんに受け止められたぜ」

「さっさとくたばれ！」

ゴツ！

「オラアー！」

バコオツ！

「!?えっ!!え!!なん……ツ?はぐつ!?:は……速い……なんだ?全然弱ってねえじゃねえか……」

「よく見たら別に趣味の悪い時計だったな……だが そんなことは もう気にする必要はないか……」

「ヒイ!？」

「もつと 趣味が悪くなるんだからな……顔の形の方が……」

「オラア！」

ドゴー!

「オグあああああ！」

「オラア！」

グシヤツ!

「ぶげあああつ！」

「オラアツ！」

ボゴオーン!

「グバツ！」

ガツシヤアアアン!

「待たせたな……蓮子……」

「もう……遅すぎよ……」

ギユツ……

「ハハ……少し痛い……」

「我慢しなさいよ」

「いたいた……もう、あの人数相手にしてよく立ってられるわね……」

「これぐらい頑丈じゃないとな……」

「キャツ!？」

「ぐははははははーっ バカめエエ〜っ」

「め、メリー!」

「……」

「今 この女は人質だ!このナイフを見ろ!動くんじやねーっ 勇人!」

「今から このナイフでめーの背中をブスリと突き刺してやる!下手な動きをしてみろ!メリーにナイフが刺さることになるぜーっ!そんなわけにはいかねーよなあ〜」

「はあー……いいぜ、突いてみる」

くるっ

「あっ!？」

「おい!わからねーのか?動くなと言ったは……はず はず……」

「……え、え!？」

「どうした…ブスリと刺すんじやあねーのか?」

「か…体が動かない…なっなぜ〜?」

「ふ、服か?服が一ミリも動かねえー!?空中に引っ付かられたかのように動かねえー!」

「知らないよな……俺は『不変にする』と言う能力があつて、物の存在や行動を固定でき
るんだぜ……もつとも、血をつけなきやいけないが、今はダラダラ流れてるからな……
勝手に着いたぜ……」

「わっ……許してくれーっ!」

「はあ……前にもそのセリフ聞いたぜ……だが、今回ははじめっからお前を許す気は無
いんだよ」

「か、金だ!金ならたくさんある……それをやるよ」

「はあ……あんた正真正銘の史上最低な男ね……」

「本当だな……この”つけ”は……」

「ヒィ!」

「金では払えねーんだよ!」

バチバチバチ……

「オラアツ!」

ドコーンツ!

「うげっグアツー!!」

「戻るか……蓮子」

「そうね、行きましよう、メリー」
「はあ……やれやれね」

第41話

別離の日の青年

「イデッ……」

「大丈夫なの？」

「ハハ……大丈夫に決まってるだろう……」

ふらっ……ガシッ

「全然、大丈夫じゃないじゃん……」

「寝れば治るさ……」

「何言ってるのよ……しこたま攻撃喰らっというてよく言うわよ。ほら、肩を貸すから、ね？蓮子も手伝って」

「分かったわ」

「それにしても、よく場所が分かったわね」

「ああ……それはだな……俺のあげたネットワークスにちと細工させてもらったただけだ」

「そう……ありがとう」

「いいってことよ」

「でも、本当に大丈夫なの？」

「さすがに金属バットは効いたかなあ……あの時は星がみえた……」

「あんた……人間なのかしら？」

「さあ……俺も分からなくなってきた……でも、俺っていうことには変わらねーだろ？」

「そうね」

「そういえば思ったのだけど」

「何？メリー」

「貴方が使ってる靈力っていうのは私達も使えるのかしら？」

「使えないことは無いだろうけど……それが？」

「いいえ……少し興味を持っただけよ」

「……と話してたら着いたわね」

「ほら、あと少しよ」

「ん？ああ……」

「段差に気を付けなさいよ」

「了解」

「とりあえず、血をどうにかね……」

「風呂入ってくる」

「お湯で洗っちゃダメだからね！」

「分かつてる」

「ふうー……今日は色々あったわね……」

「デートのつもりがこんなことになるなんて……でも、勇人が助けに来てくれたからいいか。」

「で、蓮子 今日はどうだった？」

「え？な、何が？」

「その調子だと言っていないわね……彼、明日には居なくなるのでしよう？しつかり伝えなきゃ、絶対 後悔するわよ」

「わ、分かつてる……色々あったもんだから……」

「そうね……でも、さすがにこれであいつは懲りたでしょ」

「完膚なきまでに叩きのめされたからね」

「本当に彼つて面白いわよね……空も飛んだし……」

「え？本当に空飛んだの？」

「ええ、すごかったわね」

「本当にあいつは人間なのかしら？」

「でも、彼ということには変わりないでしょう？」

「そうね……あいつだから、いいのよね」

「よし、私はお邪魔になるだろうし帰らせてもらうわ ……あ、貴女に伝えることが

……」

「え？」

「く、く……し、しみる……冷たいし……」

頭の傷どうなるかな……ハゲにはなりたく無いな……それにしても……俺の体、頑丈過ぎないか？俺もこっちの世界の人間じゃ無いのか……

「うわ…… ひつでー顔だな」

唇の端は青くなってるし、額にまで傷がついてる。口ん中も切れてるようだ……口内炎になりそうだな……痛いんだよな……口内炎……

「もう、流したー？」

「おお、もう上がるよ」

「うわー……ひどい顔してるわよ」

「ひどいのは顔じゃ無い、疲れだ」

「それはいいとして、私が処置してあげるから、こっち来なさい」

「了解」

「イデッ、もう少し優しく……」

「男ならそれくらい我慢しなさい」

「そう イデッ 言われても イデッ 痛いもんは イデッ 痛いんだよ」

「はい、完了つと」

「ありがとな」

「どういたしまして、あ、そうだ、これ」

「ん？俺にか？」

「そうよ、あんたって誕生日は5月でしょ？だから、エメラルドのネックレス」

「え!? エメラルド? 高くなかったか?」

「大丈夫、大丈夫! ほら、つけてよ」

「おう、に、似合うか……?」

「いいじゃない、さすが私が選んだだけはあるわね」

「自画自賛ですか……」

「もう時間ね、ご飯作らないと……」

「俺も手伝おうか?」

「あんたはけが人だから大人しくしてなさい」

「あい……」

ピッピッ……

「ん? なんの音だ? 俺からか?」

ガサゴソ……

「あ、これか」

紫さんから渡されたお札か……確か連絡用だっけか。

「はい、どうしましたか?」

「は、はい、勇人? お久しぶりね、元気してる?」

「お陰様で」

「なら、いいわ。分かってるかもしれないけど明日、幻想郷に戻って来てもらおうわよ」

「……はい、分かってます」

「それなら、いいわ。……しっかりと自分の想いのけじめつけたかしら？」

「あ、当たり前です！そのためにもここに帰って来たんですから」

「そう……明日の場所だけど、近くに古い神社があるでしょ？」

ああ……前に行ったところか

「そこに来てちょうだい」

「分かりました……今回はありがとうございます」

「あら、感謝されるとわね」

「まあ、一応」

「みんな、貴方のこと待ってるわよ」

「ありがたい限りです」

「それじゃあ、また明日」

「ええ」

もう、今日で最後か……あつという間だったな。本当に時が流れるのは早い。蓮子に

は感謝しないとな。

「ほら、できたよ！」

「ん？分かった」

「これが勇人と一緒に食べる最後のご飯ね……いつもと変わらない料理だけど、何か違う気がする……」

「いただきます」

「やっぱり、蓮子の料理は美味しいな」

「そうでしょ？私だってしっかりしてんだから！」

「そうだな、もう心配することもねえーな」

「……」

「言わないと……」

「「ごちそうさまでした」」

言えなかった……はぁ……でも、チャンスはまだある！

「ふわぁ……眠いな……」

「寝ましようか」

「そうする、じゃあ、リビングで……」

「今日も一緒に寝てよ」

「……だいじ「絶対よ？」アツハイ……」

「お前も物好きだな……」

「いいじゃない」

「こっち向いてよ」

「今日はさすがに……な？」

「むう……」

ギユ……

「!? ちよ、ちよつと……」

「私にあんたのことが好き……ずっと前から……好きよ」

「……そ、そうか」

「あんたは……私のこと、どう思ってる？」

スッ……

暗くてよく見えないけど、勇人が、こっちを向いた。

「……俺も……その……好きだ」

「なんで？」

「分からない、ずっと一緒に過ごしてたらいつの間にか……」

「私と一緒にね」

「でも、俺は蓮子の想いに応えられない」

「分かってるわよ」

「……すまない」

「なんで謝るのよ？ 私が勝手に好きになっただけよ」

「……」

「でも、今……今だけは私のものになって？」

「………了解」

「目を瞑って……」

そう言つて、私は彼に唇を重ねる。

「んっ……」

は、初めてだから、よく分からない……で、でも、もう一度……

「はあ……私を抱き締めて」

「りや、了解」

囁んじやつて、勇人もウブね。私も言えたことじゃないけど。

ギユ……

暖かい、彼の鼓動がよく分かる。でも、この温もりも明日には無くなってしまふ。彼の声、鼓動、手……今、感じ取つてるもの全部が無くなる。明日には全て無くなってし

まうんだ……

「!?……………ん!?」

ゆ、勇人からき、キスしてくるなんて……でも、やっぱりウブなせいとか、どこか遠慮がちだ。ちよつと、イタズラを……

「!!」

舌を入れると、勇人は少しビクツとしたが、彼も舌を絡めてきた……は、恥ずかしいわね……

こんな時間が長いように感じられた……

「はあ、はあ、えらく積極的じゃねえか……」

「そう?好きな人にこれぐらいは当たり前でしょ?」

「そ、そうか」

また、照れた。わ、私もきつと照れてんだと思う。暗いので分からないだろうが、多分両方、顔真っ赤だ。

「ねえ、もう一回……」

「わ、分かった……」

好きな人のさとの深いキスは甘酸っぱいとか聞いたけど、そんなこと考える余裕はなかったわ。せめて、言うなら、血の味?でも、それが幸せでまた寂しく感じた……

「もう、行くのね……」

「ああ……今までありがとな」

「当たり前でしょ？　これが惚れた弱みというのかしら？」

「そうかもな」

「もう、行くよ」

「そう……じゃあね」

「ああ、幸せにな」

「貴方もね」

じゃあな、蓮子、そして、俺のいた世界。

「お待たせしました、お久しぶりです 紫さん」

「お久しぶり、随分と精悍な顔つきになったわね」

「そうですか？ひどい顔してると思いますが」

「あら？けじめはつけたんじゃないか」

「そうですよ、でも、後ろ髪引つ張られそうなんですよ」

「なら、早くしないとね」

「ええ」

スキマが開く。ここに入ればこの世界での自分とは完全にお別れだ。自然とネットワークに手がいく……

グダグダするんじゃない！俺！決めたのだから、しっかり貫き通さないと！

「勇人！」

蓮子の呼ぶ声がする。ダメだ、決めたんだから！きつと幻聴だ！

「勇人！」

「え？」

蓮子？なんで？

「あらあら……」

「勇人！私はゼツ―タイ、あんたのこと諦めないから！あんたのいる世界への行き方見つけて絶対あんたのところにいくから！だから……だから……絶対に私のこと忘れな
いでよ！待ってなさいよ！」

「……ああ、待ってるぜ！」

「じゃあ、行くわよ」

「………はい」

彼は不思議な女性と一緒に謎の空間に消えてった……

「これでいいのよね？メリー？」

「私たち秘封倶楽部でしょ？絶対に彼の元に行くんでしょ？」

「そうよね……」

「ええ」

「でも、今は泣いていいのよね？」

「いいわよ、思いつきり泣きなさい」

「う、ウアアアアアア！」

「私も手伝うから」

「うう……」

「あれで良かったの？」

「大丈夫です、はじめはつけました」

「でも、彼女はああ言ったわよ？」

「そうですね……嬉しい限りです　でも、無理でしょう？」

「そうね……彼女たちが幻想郷を見つけるのはほぼ不可能ね」

「そうですね、ハハハ……でも、忘れないのはありですよね？」

「ええ……もちろん」

「それじゃあ、行きましょう」

「なら、涙を拭いてからにして頂戴」

「泣くわけじゃないじゃないですか……男なら泣いちゃダメなんですよ……」

「そう、そうなら　それでいいわ」

ポタツ、ポタツ

「あれ、なんでかな……泣かないと決めたのに……」

いや、これは雨だ……雨なんだよきつと。決めたじゃないか……そういうことならそういうことでいいんだよ……

こうして、俺は完全に幻想郷に、受け入れられた。

第5章 幻想郷武道大会

第4 2話 始まりは終わり、終わりは始まりの日の青年

「はあ……戻ってきたと言うのかな？」

戻ってきたでいいか。……ここに骨を埋めるんだからな。寂しくないと言えば嘘になる。友達は少ない方だが、家族や蓮子のような人たちのおかげで、あそこで生きていくたくないとは一度も思ったことはない。

でも、運命には逆らえないか……

ヘコタレてる場合じゃないよな！もう、ここで生きて行くことにしたんだから！

「「勇人さん！」」

「ん？おお、早苗と妖夢じゃないか、わざわざ迎えにとは」

「当たり前じゃないですか！」

「1週間、勇人さんに会えないのを我慢してたんですよ!」

「ハハハ……」

戻ってきたのだから言うべきセリフがあるな。

「ただいま、そして これからよろしくな」

一瞬、不思議そうな顔をしたがすぐに満面の笑みで

「おかえりなさい、勇人さん」

「ここにも俺の居場所はあるんだよな……なんやかんやで、俺は幸せ者だな。

「感動の再会は終わったかしら〜?」

「紫さん!」

「驚かないでよく、慣れたもんでしょ?」

「いや、久々なもんで……」

「ふふ……それより、貴方の住む場所だけ……」

「ああ……また、早苗たちにお世話になるんですね?迷惑かな……」

「違うわ、一人暮らしをしてもらうわよ?」

「一人暮らしねえ……は? 一人暮らし?」

「そうよ、萃香に頼んで家を作ってもらったわ」

「萃香って、あの飲兵衛の？」

「その通り あとでお礼言いなさい」

「は、はあ……」

「1週間で建てたのか？うーん……酷くござっぱりしてなきやいいんだが。柱とかが結構ゆるゆるなんてシャレになんねえからな……」

「場所はどこですか？」

「妖怪の山の麓よ」

「へえ……よく、天狗たちが許可しましたね」

「まあ、貴方なら襲うこともないだろうし、襲われても問題ないでしょうからね」

「素直に喜んでいいのか……？」

「荷物は既に運んであるからあとは貴方だけよ」

「そこまで……重ね重ねありがとうございます……」

「お世話になりっぱなしだなあ……あ、萃香さんにお礼をしないと……お礼の品は酒かな？」

「もう、話はいいですよね？」

「ええ、いいわよ」

うーん……酒つても何がいいのか、さっぱりだ……

「なら、これまで溜めてきた分をここで……」

「そうですね……」

ああ、寺子屋のこともあつたな……慧音さんに任せっぱなしだからなあ……何かするべきかな……

「勇人さん？」

授業はどのようにするかな？ああ……チルノの対策も講じないとな……
「完全に自分の世界に入っちゃってますね……」

一人暮らしを、するんだっけ？うーん……家事はある程度できるが、めんどくさがって掃除とかあんまりしないからなあ……

「久々の再会なのに……」

「こうなったら……勇人さん！」

ガバツ！

「ぬあ!? どうした妖夢？」

「久しぶりに帰ってきたのですから、こつちのことも見てくださいよ！」

「ああ……そうだな」

急に抱きつくもんだから驚いたなあ。まあ、確かに今考えてもしょうがないな。それ

にしても、妖夢の頭ってこんな低いところにあっただけ？撫でるにはちょうどいい高さだな。

「あ……ん……」

あ、無意識に撫でてしまった。まあ、妖夢も気持ちよさそうだしいいかな？

「むう……妖夢さんだけずるいです……こうなったら私も……」

ギユ……

「へヤア!?ど、どうした?早苗?」

「妖夢さんだけずるいです、わ、私も頭撫でてくださいよ!」

「分かったから」

これじゃあ、サンドイッチじゃないか……

「あらあら、モテモテね」

「わしの孫じゃからのう、そりゃあモテるわい」

「貴方ってモテるタイプだっけ?」

「そ、そ、そうじゃだぞ!昔なんて人気すぎて大変じゃったわい!」

「そう……貴方はこれでよかったと思うかしら?」

「さあ……これが良いつとはつきり分かるなら苦労せん。じゃが、これしか方法はないのじゃろ？よかったとか悪いとか言ってもしょうがない。とにかくその道を進むだけじゃ」

「そうね」

早苗と妖夢との再会のあと、とりあえず、守谷神社と白玉楼に行つて、挨拶した。ただ、その度に

「お？少し男らしい顔になったんじゃない？」

「そうだな、少し成長したみたいだな」

「あら、すっかりイケメンになつちやつて」

「ふむ……一皮向けたようじゃな」

そんなに変わりましたかねえ……3年分成長したとはいえ、急激に変わるもんじゃな

いでしょように

そうそう、家のことだが不安でたまらなかつたが杞憂だつたようだ。ていうか、よくあの短期間でできたなあと思う。平屋の家だが、一人暮らしには十分すぎる大きさだ。風呂や台所はしっかり完備されている。てか、かなり現代的じゃね？電球があり、古いけど洗濯機がある。電気通つてんの？と思つたが紫さんいわく、

「全部靈力で動くわよ、お礼は河童にね」

河童の科学つてスゲー。こりゃあ、きゆうり一箱ぐらい送らないとな。とりあえず、その日は新しい家で過ごした。

翌日の朝は驚くほど普通だつた。自分で起き、飯作つて、着替えて寺子屋へ。あら？まるでずっと一人暮らしをしてたみたいだな。

そもそも、自分で起きたのが驚きだ。

「お久しぶりです、慧音さん」

「おお！ 勇人か！ 久しぶりにだな！」

「はい、みんなは元気ですか？」

「ああ、元氣過ぎて大変だったよ」

「俺のいない間は本当にありがとうございます」

「なあに、これぐらい大丈夫さ。ということは、今日からもだな？」

「ええ、頑張りますよ！」

久々にみんなに会うか……

「そうだ、2人新しく、学びに来た子がいるからな」

「2人ですか」

どんな子だろうか？はつきり分かるのは人外ということだけだな。

「おーっす、みんな久しぶりだな　君たちは初めましてかな？」

「あ！勇人先生だ！」

「お久しぶりです！」

「久しぶりなのかー」

「へー、この人がフランちゃんたちが言う先生なの？」

「は、初めましてです！」

「自己紹介は出欠を取った後にな」

えつと……チルノ、大妖精、ルーミア、リグル、ミステイア、フランドールでここからが新入生だな、えとえと、古明地こいし、八雲橙、この子は……藍さんの子供？違う

か……狐と猫だもんな……なんか、関係はあるだろうな。

「……!?!」

「一人余分にいるぞ!?!誰だ?あの子は?つて

「萃香さん!?!」

「おー、勇人だな。あの時以来か?」

「全然気づかなかった……違和感が……ねえ?

「今失礼なこと考えてたでしょ?」

「いや、まさか……あ、家の件ありがとうございます」

「そう、そのことでここにいるんだ」

「あー、お酒でいいですか?」

「それも悪くないが、これに参加してもらおうとな!」

「なんだ?幻想郷武道大会?」

「どうだ、勇人?つてなんでお前が……」

「おお、慧音、ちようどいいところに!」

「子供達がいるのだから酒はやめてくれ」

「悪い悪い、それよりもこれ参加してくれるか?」

「なんだ?幻想郷武道大会?私はそう言うタイプじゃないから遠慮するよ」

「俺も遠慮しときます……」

「んー？まさか、家の恩を忘れたと言うのかい？」

な！ここでそれを出すとは……

ふむふむ……チーム制か……4人出場？

「いや、俺、出れないじゃないですか？」

「ん？だから、ここに来てんじやないか」

「だからって、生徒たちを巻き込まないでくださいよ……」

「えー……お前だって暴れたいだろ？」

「うん！最近弾幕ごっこもしてないし！」

「こ、こら！何言ってる！」

「慧音も勇人が1人で参加する羽目になるよ」

「な……それじゃあ流石にボロボロに……」

こ、こいつ、脅すとは……

「わ、分かった……メンバーはあとで言う」

「そここなくっちゃ！勇人、楽しみにしてるよ！」

消えた！はあ……ここはなんでもありだったな。

「慧音さん、本当、すいません……」

「しようがないさ、流石に1人じゃきついだろ？体育の一環ということにしておこう」
「本当すいません……」

「そんなことより、新しい子の紹介だ」

「そうですね……」

「私は古明地こいしだよー、よろしくねー」

「ああ、えつと……地霊殿？に住んでるのか？」

「うん、そうだよ！お姉ちゃんと可愛いペットと住んでるんだよ！」

「そうか、よろしくな」

「わ、私はや、八雲橙です！」

「えつと……紫さんとか藍さんとかに、関係あるのかな？」

「はい！私は藍しやまの式です！」

「そういうことな……よろしくな！」

「えー、俺は碓氷勇人だ。これからよろしく頼む」

「勇人先生って強い人間なんですよ？」

「えつ、それは分からないな……」

「フランちゃんたちが強いって言ってたよ！」

「そうだよ、あたいの先生はサイキョーね！」

「確かに強いですよ！」

お、おお……

「それに頭もいいって藍しやまが言っていました！」

「あ、ありがたい話だな」

か、過大評価じゃないすかねー……

「そういえば、萃香さんと何を話してたんですか？」

「あ、ああ……」

「私が話すよ、今度だな、萃香が、主催で武道大会を開くらしい。それで寺子屋チームとして参加して欲しいそうだ」

そういうえばルールは……なし!? ありとあらゆる手段でこい!?

「4人必要なのだが……2人は我々教師が、そこであと2人なのだが……」

「はい! 私が出る!」

「フランか、他には?」

「あたいが……」

「だ、だめだよ! 強すぎる人がわんさかいるんだよ?」

「あたいはサイキョーだから問題ない!」

「流石に危ないって……」

「なら、私がー」

「こいしか、この2人なら申し分ないな」

「あ！もう、大ちゃんのせいで参加できなかったじゃない！」

（だって、紅魔館の人や霊夢さんたちまで出るって聞いたんだもん……）

「決まったな、よしこの話は終了だ、あとは授業だ 久々の勇人の授業だからしつかり聞けよー」

武道大会ねえ……はあ……ゆっくりはできなさそうだな……身体鍛えとくか……

ま、今は授業だな！

「よし、今から授業始まるぞ！」

「「「「「はい！」」」」」」

「勇人の参加も決まったな……面白くなりそうだ……な？ 霊夢？」

「勝手に私も参加させないでよ……」

「でも、あいつとは戦ってみたいんだろ？」

「さあ……」

「私は戦ってみたいね、あ、勇儀んところも、誘うかな」
「やめなさいよ……」

いいねえ、こりやあ本当に、楽しみだ！

第43話 エントリーの日の青年

シャー……

はい、今、通勤中です。ん？なんで、今更自転車かって？運動の一環だよ。一環。いやー、自転車と一緒に幻想入りしてたのすっかり忘れてた。早苗が回収してみたのだが、なんせ、半年ぐらい放置してたせいか、音がひどかった。今は油さしてスムーズだ。

んー……意外と遠いな……チャリ通勤長続きするかなあ……

キーッ！

「やつと着いた……もうやめようかな……」

空を飛べるって便利だからな……自転車はどうしてもめんどくさく感じる。

まあ、今日も授業始めますか。

「……と、…うと！、 勇人!!」

「ふあい! どうしましたか? 慧音さん?」

「どうしたも、最近ぼーつとすること多くないか?」

「そうでしようか?」

「そうだ、この前なんて、授業中にぼーつとしてたつて大妖精が言つてたぞ。何か悩みあるのか?」

「い、いいえ、最近身体鍛え始めたので疲れてるだけです」

「そうか……ほどほどにしておけよ?」

「はい」

「うーん……」

勇人の様子が少しおかしいな……復帰して数日経ったが、やけにぼーつとしている。前も考え事をするとうりの声が聞こえなくなることがよくあつたが、今回は違う。どう違うのかと聞かれるとよくわからないのだが……早苗にでも聞いてもらうか……

「……い、…せい！、先生！」

「はっ……あ、すまない、授業進めようか」

「先生、変だぞー」

「どうしたのさー？」

「疲れただけだ、問題ない、続けるぞ」

「ねえ、大ちゃん最近先生の様子がおかしくない？」

「そうだね、ぼーっとしてることがたまにあるよね……」

「その時の顔ってどっか遠くを眺めてるよね」

「どうしたんだろ？」

スタスタスタ……

「あ、勇者さんだ」

「……」

「勇者さん？」

「なんでしょう？ 反応がないです。考え事でしょうか？」

「……」

「勇者さん！」

「おっ！ おお……妖夢か、どうした？」

「やっぱり、少し変です。」

「いえ、少し勇者さんの様子が変わったので」

「あー……またぼーっとしてた？」

「はい」

「少し疲れてるのかな？まあ、寝れば治るさ」

「そうですね……体は大事にしてください」

「ああ」

うーん……勇人さんらしくないですね……負のオーラが出てる気が。

「はあ……俺も案外、ヘタレかなあ」

うーん……未だに引きずってんのかなあ……割り切ったはずなんだが、どうも無意識に外の世界のことを考えてしまう……そのせいでいまいち集中できないし、周りに迷惑がかかっている。どうにかしないといけないと分かっているのだが……

「おかえりなさい」

「ああ、ただいま……」

はあ……忘れてしまった方が早いのかな……そういうわけにもいかない。約束したからな……

「つて、なんで早苗がいるんだ!?!」

あまりにも自然だったからすぐ気づかなかった。

「慧音さんから最近勇人さんの様子がおかしいって聞いたので」

「疲れてるだけだ、問題ない」

「いいえ、勇人さんはしっかり睡眠を取るタイプなのでそこまで疲労は溜まらないと思います」

「うっ……いや、ほら！近々幻想郷武道大会があるだろ？俺も出るからな、身体を鍛えてるんだよ」

「本当のことを言うてくださいい！」

「いや……これが本……」

うっ……そんな目で見ないでくれ。

はあ……バレバレかな？言った方がいいのか？でも、これは自分の問題だから自分で解決しないと……

「私ってそんなに信用がありませんか？」

「そ、そんなことはない」

「なら、私に言ってください！」

「そこまで大きい問題じゃないから大丈夫」

「いいえ、勇人さんがここまで悩むのですから勇人さんに、とっては大きなことでしょうか？」

「早苗はなんでもお見通しか……流石だな」

「いえ、誰でも分かりますよ、遠くをぼんやりと眺めていたら」

「ハハ……でも、これは自分でどうにかしたいんだ。だから、もう少し待ってくれるか？
自分でじゃどうにもできないと分かった時に頼ってもいいかな？」

「ええ、その時は任せてください！」

「ありがとう……」

本当に早苗にはお世話になりっぱなしだ……少しずつでも返さないとな。

「それはそうと……勇人さん、幻想郷武道大会に出るのですよね？」

「ん？ああ、寺子屋チームとして出るよ……早苗もでるのかって、人数的に……」

「いいえ、出ますよ、なんでも妖怪の山で2チーム出すそうです」

「お、お……」

はやあ……妖怪の山からねえ……無理ゲーじゃね？

「確か今日でエントリー終了だそうですね、明日、発表されるそうです」

「そうか……そういえば景品とかあるのか？」

何か目標がないとなあ、やる気が出ないよ。

「えつと、確か……お金やお酒とかももらえるそうです」

「ハハ……どちらもあるんじゃないな……」

お酒は飲まないしお金もあつたところでねえ……

「確か男性の参加者って勇人さんだけでしたよ」

「えっ……」

なんじゃそりや……男はどうした？最近だらしねーな？

「あ、妖忌さんもでるとか言っていましたね」

「勝てんのかね……」

「とりあえず、お互い頑張りましょう！」

「ああ」

「しっかりしないとな！」

「分数というのはだな、割り切れない数字が出るだろ？その時に使うのがこのぶん「おーいー・出場するチームが決まったよ！」……今は授業中だ！」

「いいじゃないか」

「お引き取りください」

「そうだよ！どんな人たちが出るの？」

「そうだな」

「……」

「チヨークぶつけたるか！はあ……」

「……分かった、発表してくれ……」
「もちのろんだよ！ほれ！これを見よ！」

く幻想郷武道大会出場チーム一覧く

寺子屋チーム

碓氷勇人

上白沢 慧音

古明地こいし

フランドール・スカーレット

白玉楼チーム

碓氷勇人の祖父

魂魄妖忌

魂魄妖夢

西行寺幽々子

妖怪の山チーム

犬走椀

鍵山雛

河城にとり

姫海棠はたて

守谷神社チーム

東風谷早苗

射命丸文

洩矢諏訪子

八坂神奈子

博麗神社チーム

アリス・マーガトロイド

伊吹萃香

霧雨魔理沙

博麗霊夢

紅魔館チーム

十六夜咲夜

パチュリー・ノーレッジ

紅美鈴

レミリア・スカーレット

救護 安心安全の永遠亭一同

※6チーム総当たり戦です。

「はあ……知らない人も多いな……てか、俺のじいちゃんの名前知らないのか？」

「ああ、教えてくれなかったんだよ、教えてくれるかい？」

「ああ、じいちゃんの名前は確氷「おー！ここにいたか！」誰だ……」

「お？勇儀じゃないか！もう、エントリーは終了しちゃったよ」

「それはいいんだ、ほら、お前なオススメの男が気になつてだな」

「こいつのことかい？」

……俺よりも背が高い……そうじゃない、この人は？まあ、額に立派な角があるあたり鬼かな？

「ほー……こいつが……自己紹介するよ。星熊勇儀だ、あんたのことは萃香から聞いてるよ」

「よろしくお願いします」

「にしても、萃香が言うからどんなやつかと思つたが……ヒョロツちいな、本当に強いのかい？」

「紫曰く幻想郷のパワーバランスを担えるレベルだつてよ」

「ふーん……このチビがねえ」

「ああ!? 誰がチビだつて？」

「お? いい目するじゃない、てつきり死んだ目かと」

「とりあえず! 早く授業進まなくてはいけなのできつさと出てください!」

「あら、機嫌損ねたかな? そんなに身長気にしてんのかい？」

「いいえ! 別に!」

「わかりやすいね、男らしくないぞ」

「最後の警告です、さっさと出て行ってください！」

「ところで萃香いい酒が手に入ったんだが……」

「そうか！」

「がっ……っ、っいっつら……」

「俺は警告したよな？」

「あ！先生が、チョコクを……」

「ん？霊力を感じるね……あんたか？」

「さっさと出てけー！」

「バチバチバチ……」

「あ、前よりもパワーアップしてる」

「ヒュンツ！ヒュンツ！」

「!?!」

「スパアーン！」

「あいでっ！」

「ほう……」

「いつてー！なんだ！これチョコクか？」

「噂通りみたいだな、よしお邪魔虫は出て行くよ、ほら行くぞ？」

「綺麗に額に当たるとは……」

「やっと思つたか……にしても、鬼はやっぱり強いな……」

気絶させるつもりで投げたのに、勇儀さんには取られたし、当たった萃香さんも痛がるだけ……

「さ、授業始まるぞ」

「は、はい（チョーク投げが進化してる……）」

「いてて……で、あいつの感想は？」

「ふふ……あいつなら久々に思いつきり戦える気がするよ」

「そうだろう？とりあえず今度の大会で戦いつぶりを見たらいい」

「ああ、そうする」

本当に待ちきれないな！

第44話 1戦目（妖怪の山チーム）の日の青年

「始まりました！第1回幻想郷武道大会！実況は私射命丸文が、解説は幻想郷の創始者八雲紫さんです！よろしくお願いします、紫さん！」

「よろしくね、ところで文も出るんじゃないの？」

「ええ、私が試合の時ははたてにでもやってもらいますよ」

「そう、それじゃあ私がルールを説明しちゃうわよ。まず、試合方式は6チームの総当たりね、もちろん1番勝ったチームが優勝よ。試合は1チームにつき3試合ずつ、1対1、2対2、1対1という具合に試合が進むわ。試合中のルールだけど、特に無し武器オツケー、弹幕可とりあえずなんでもありよ、え？死んでしまいます？安心なさい私がお都合の結界を張ったから死なないわよ」

「流石便利能力！」

「いやーん、照れちゃうわ〜」

「その歳でその反応は……」

「ナニカイツタカシラ？」

「イイエトクニ……」

「それでは最初の当たりを発表しましょう！最初は白玉楼チーム対紅魔館チーム！」

「これは楽しみね、まずあの人の戦鬪なんて久しぶりね」

「その次が、寺子屋チーム対妖怪の山チーム！」

「これも見所ね」

「んで、最後が守谷神社チーム対博麗神社チーム！」

「あら、いきなり神社ぐるみの戦争ね」

「それでは白玉楼チームと紅魔館チームは準備してください！」

「はあ……始まってしまった……」

「気を落とすな、とりあえずは頑張ろう、な？」

「そうですね……やるからには勝つつもりでいきますよ」

「そうだよ！絶対勝つからね、ね？こいしちゃん！」

「そうだよー！先生のかっこいいところ見てみたい！」

「ハハ……善処するよ」

「最初の試合の順番だが、先鋒は私が務めさせてもらう、その次にフランとこいしでいい

かな？」

「うん！」

「じゃあ、俺が最後だな？」

「そうなる、いいかな？」

「大丈夫です」

「お？最初の試合が始まりそうだな、見なくていいのか？」

「そうですね……見ておきますか……」

「それでは白玉楼チーム対紅魔館チーム 第1戦 魂魄妖忌対十六夜咲夜！いぎ、尋常に……始め！」

いきなり妖忌さんかよ……相手は咲夜さん……どうなるんだ？

「いきなりですが……」

周りの時間が止まる……

「貴方との長期戦は嫌なのでこれで終わらせます」

妖忌の周りにナイフを投げる、だが、妖忌は気づかない、いや、気づけない。

「終わりです」

「ほう……じゃが！」

カキンッ、カキンッ、カキンッ！

「むう……全部さばくとは……」

「時間止めるとはな……こりゃあ、手強い」

（おかしい……剣なら近づかないと攻撃できないのに一向に間を詰めようとしな

……近づかない方がいいわね）

「近づかない……何か感じたようじゃな……」

「しかし、射程範囲ね、こちらから一方的にやらせてもらおうわ！」

シユッ！

「!?は、速い……」

カキンッ、カキンッ……

「きつそうね……もう終わりにしてあげるわ……」

「お主、ワシが攻撃できんと思っておろう？じゃがな……」

（くる!?来てみなさい……時を止めてジ・エンドよ）」

「……」

「固まった？（今のうちに……）はっ！」

大量のナイフを妖忌に向ける……

「かあ！」

「え？」

音は無い……だが、妖忌は既に咲夜の後ろに、投げたナイフは全て払い落されている。

ガクッ……

「勝負あり！勝者魂魄妖忌！」

「紫さん、今何があったのでしょうか？」

「そうね……妖忌が斬ったとしか分からないわ、速すぎて私も見えなかったわ……」

「さて、次の試合は 西行寺幽々子&碓氷勇人の祖父対レミア・スカーレット&パチュリー・ノーレッジ！」

「おお……妖忌さんすげえ……瞬間移動したみたいだ……やっぱり、妖夢の師匠なだけあるな」

俺、この中に入って大丈夫か？なんか、フルボッコにされそう……てか、じいちゃん

の名前言いそびれてたな、ま、いいや。

「勇人先生、準備しておこう?」

「ああ……そうだな、準備体操しておくか……」

妖夢の試合も見たいが……自分も試合、あるしな……すまん、妖夢。

「先生、今日は銃持って来てないの?」

「ん? あるぞ、この服の中にな、ほら」

「おぉー」

「だが、今日は格闘メインで行こうかな……糸はあるし、どうにかなるか」

「無茶はするなよ?」

「大丈夫だよ、ね? こいしちゃん!」

「そうだよ、フランちゃん強いもんね!」

「こいしちゃんだつて強いじゃん」

そうだった、この娘たち人間じゃないんだつた……

「お？ 勇人、準備はいいか？」

「はい、もう試合終わったのか？ じいちゃん？」

「ハハ！ もちろん！ わしたちの大勝利よ！」

「妖夢も頑張ったわよ、後で褒めてあげてね」

「は、はい……」

今は……妖忌さんから何か話されてるな……

「な、なんなのよ……強過ぎじゃない？」

「年寄りかと思つたら……最高クラスの強さじゃない……」

「妖夢さん……確実に強くなってますね……剣の動きが鋭くなっている……」

「時を止める間もなかったわ……」

「ぐぐ……紅魔館の主でたる私でさえ手足も出なかったわ……」

「幽々子が手強いってことはわかってたけど……あのじいさんも恐ろしいわね」

「寺子屋チーム対妖怪の山チーム 第1戦 上白沢慧音対河城にとり いぎ尋常に……始め!」

ああ……始まってしまった……緊張してきた……とりあえず、慧音さんを応援しないと……

「ふふ……この日のためにこれを開発したのさ!」

「!？」

な、なんだ？ 胴体に機関銃のようなものを引っ付けてる……

「河童の科学は世界一イイイ！我が河童の最高知能の結晶であり誇りであるウウウ!!つまり すべての妖怪を越えたのだアアアアアアアアアアアア!!」

バアアアア

「はあ……」

妙にテンション高いなあ、あれか好きなものになると性格が変わるタイプか。

「くらえ！慧音 1分間に600発の妖力弾を発射可能！1発1発の弾幕がお前の体力をけずりとるのだ!!」

600発!? それじゃあ、慧音さんもひとたまりもない……

ドドドドドドババババ……

「ぐっ!」

「先生!」

やばいな……砂煙でよく見えんが流石にきびいかな。

「ははは! どうだ! 河童はすごいんだぞ!」

「ああ、すごいな、だが、そのようなものは子供達に見せるのは良くないな」

「ぬあ!?!」

がしっ!

「あ、あの体勢は!」

あ、にとり終わつたな。

「よつて、頭突きの刑だ!」

ガコンツ!

「アヒヤ、星が見える……」

バタツ

「勝負あり! 勝者上白沢慧音!」

「流石、先生の頭突き!」

「ああ、流石に最初は驚いたが、直線にか撃たなかったからな、隙だらけだったよ」

「ほら、次はお前たちだ、頑張れよ！」

「うん！」

「お疲れ様です、慧音さん」

「ああ、久々に動いたが、定期的に運動はするべきだな」

「そうですね」

ドガンー！バゴーン！

「ちよ！」

「きやあ！」

「勝者 フランドール・スカーレット&古明地こいし！」

「は？」

は、早っ……え？ちよ、強過ぎじゃないか……

「来るんじゃないわ……」

「イタタ、攻撃する間もないなんて……」

「はたて、手も足も出さず！」

「あのマスゴミ……そそのかさされて参加するんじゃないわ……」

「お疲れ……」

「うーん……つまんなかった」

「そうだね……」

「次もあるからな、な？」

「そうだね！次は先生だよ、頑張つて！」

「ああ」

「第3戦 碓氷勇人对犬走椛！」

「注目はやはり勇人さんでしょうか？」

「そうね、人間だともう最高レベルの強さだと思うわ、妖怪だとしても最高クラスになる有望株ね」

「そうですね！相手の椛は1度勇人さんに敗北しており、リベンジでもあります！」

「よろしくお願いします、勇人さん」

「ああ、よろしく」

「今回は負けませんから」

「そうか、俺もだが」

「それでは尋常に……始め！」

「はっ！」

いきなりくるか……

ヒヨイ

「予想通りです」

ドツ

「!？」

盾で突進してきやがった！避けれん！

ゴスツ

「グウ……」

「終わりじゃないです！」

ベキツ！

「がっ！」

また、盾で……やばいな、ガードが崩れた……

「はあ！」

「しょうがねえ！ふんっ！」

バンツ！

「!？」

何が起こったか分かってないな……この霊力の衝撃波いいな、使い勝手がいい。動揺

したな、もうここからは俺のターンだな。

「はっ！はっ！」

「……」

ヒヨイ、ヒヨイ

むう……なんでしようか……全部お見通しのような動きです。斬撃が当たる気がしない。でも、負けっぱなしはいやです！

間をとりましたね……弾幕を展開です！

「!？」

予想してなかったようです！動けてない！いける！

ドーン！

弾幕の集中砲火を、くらったのでひとたまりもないでしょう。

「よしー！」

砂煙が引いて……勇人さんが……倒れて……いない？あ、あれは勇人さんがきている服？なんで宙に浮いてるんですか!？

「あぶねー……学ランで良かった、こつちの方が防御の範囲が広い」

「なら、もう一度！」

「させねーよ?」

クイッ

「きやつ!」

「次にお前は『い、いつの間に!?』と言う」

「い、いつの間に!?はっ!」

「種明かしは後でだ、とういうことで」

バチバチバチバチバチ!

「きゃあ!」

「勝負あり! 勝者確氷勇人!」

「大丈夫か? って、気絶してるか」

「何があつたのでしょうか? 紫さん」

「そうね、多分、きている服にあらかじめ血を付けたのね。それで存在を不変化した。不変化したものはいかなるものでも変えることはできない、すなわち絶対的な盾になるわね」

「はあ、それに糸はどうしたんでしょうか?」

「足にも確か糸のついた針を発射する装置を、付けてるから避けている時に地面に発射しといて絡めたんでしよう」

「なるほど、つまり権は全て勇人の作戦の中で踊らされたと」

「そうね、そういうことかしら？」

「流石だな、勇人」

「まあ、先生らしく頭で勝てたので良かったですよ」

「先生アツタマいい！」

「すごいね！」

「ハハ、ありがとう」

いやー、必要最低限の霊力消費で良かった、良かった。

はつきり言つて、この後のために温存はしておきたいからな。

「この後も頑張つていこー！」

「おー！」

あの娘たちも楽しそうだからいいか。

第45話 第2戦（紅魔館チーム）の日の青年

「ぐぐ……紅魔の主人たるもの、このまま負ける訳にはいかないわね……」

「しかしながら、流石に先ほどの白玉楼の人たちは皆、強者ばかりです。相手が悪過ぎます……」

「でも！悔しいのよ！次は寺子屋チームだったよね？」

「そうですね、勇人さんの格闘術は少し興味がありません。是非闘つたみたいです」

「そう、なら美「いいえ、私が」……咲夜？」

「も、申し訳ありません……しかし、私は1度彼に敗北しています……相手が万全な状態での敗北なら少しは納得できますが、手負いの状態なのに敗北してしまいました。このままでは私の面目が立ちません」

「……そう、私も彼に負けたけど今回は貴方にリベンジのチャンスをおあげるわ……分かっているわよね？」

「ええ、必ず勝利してみせます」

ふふ……咲夜がこれほどやる気を出すとは……楽しみね。なら、私が先鋒でいこうかしら。相手はフランでくるでしょう。確かにあの娘は恐ろしい戦闘能力を持っているけ

ど頭が追いついてない。勝機は十分にあるわ。その次はあの半妖とさとり妖怪。パチュリーと美鈴なら勝てる相手ね。最後は咲夜と勇人……これは見ものね。

「お疲れ様です、勇人さん」

「ん？ああ、妖夢もお疲れ。美鈴との試合良かったぞ？ますます腕を上げたな」

「いえ……／＼ゆ、勇人も流石の策略でした！」

「ああ、椀は少し頭が固いからな、あんな単純なものでも案外引つかかるものだ」

「そうですね、私もまだ柔軟に思考はできてません……」

「なあに、戦っていくうちに分かるようになるさ」

「そうですね」

でも、勇人さんにはどう頑張っても敵わない気がします。勇人さんは何を考えてるか全く分かりません。それどころか、考えてるかどうかも分かりません。分かった時には既に勇人さんの術中の中です。

「ああ……ここにいた！」

「本当だ！」

「おお、どうした？ フランドール、こいし？」

「慧音先生が次の試合も最後を頼むって！」

「おう！任せとけ！」

「それでね！私が最初なの！」

「そうか！期待して観てるぞ！」

「うん！頑張る！」

「こいしも頑張れよ！」

「うん！」

ジューツ……

「ど、どうしたんだ？こいし。そんなに見て……」

「ん？先生はこの人とどんな関係なの？」

「!？」

「そうだね、勇人先生って妖夢と一緒にいる時多いよね」

「え！あ……いや……その……」

「あ！もしかして彼女さん？」

「え？ そうなの？ 先生？」

「そ、そうでは……」

「……」

黙つてこつちを見ないで！ 付き合つた記憶はないだろう？

「わ、私たちはそんな関係に見えますか？」

「うん、だつて仲よさそうだもん」

「た、確かによくさせてもらつてますが……」

「そうだね、いつも堅苦しい顔をしているのに先生と話すときは楽しそうだもんね」

な、なんという観察力……子供はあなどれないな……あ、俺よりも年上か……そ、そ

こが問題じゃない！

「で、どうなんですか？」

「そ、そうですね、わ、私たちはつ、つ、つき a 「おーい！ 次試合だぞ！」

「ほら！ 慧音さんが呼んでるぞ！ 行くぞ！」

「え、でも答え聞いてない……」

「後で聞けるだろ？ とりあえず、試合だ！」

ダッ！

「あ……もう……」

「はあ……はあ……ただいま到着しました……」

「そんなに急がなくてもよかったのだが……」

「それより、次の試合の相手の確認をしましょう」

「そうだな。相手は紅魔館チーム、全員手強いな」

「レミアアも出てるんだろ？」

「そうだよ！でも、絶対負けないから！目指すは優勝！」

「おー！」

「ハハ、そうだな、優勝目指して頑張ろう！」

「お？前の試合が終わったようだ」

「あうー……霊夢、張り切り過ぎじゃない？」

「ああ、日頃の怠惰な様子と大違いだ」

「むう……アリスさんに勝てませんでした……」

「流石、鬼だな、魔理沙はほぼ飾りに等しかったな」

「鬼とは戦いたく無かったのですが……」

「ああ、すまないな、烏天狗」

「いえ、これも勇人さんの裏情報ゲツトのためです！」

「お疲れ様です、神奈子様、諏訪子様」

「あ！勇人じゃないか、いやー、負けてしまったよ」

「ドンマイです、次頑張りましょう！」

「ああ、お前も頑張れよ？」

「……」

「どうしたんだ？早苗？」

「……妖夢さんは勝つたのに私は負けてしまいました……」

「ハハ！そんなことか！」

「そんなことかじゃないです」

「負けたからって早苗のことが嫌いにはならないぞ？勝敗だけで物事を決めつけるのは

アホのすることだ」

「そ、そうですか……」

「ああ、そうさ。ま、とりあえずお疲れ様」

「はい！ 勇人さんも頑張ってください」

「おうよ！」

「ねえ、フランちゃん。先生ってモテるの？」

「うーん……分かんない。でも、私は好きだよ？」

「ふーん……面白い人だなー」

「続いての試合は、紅魔館チーム対寺子屋チーム！」

「ふふ……次こそ勝利して見せるわ」

「まず、第1戦目 フランドール・スカーレット対レミア・スカーレット！」

「お嬢様！ 頑張ってください！」

「ご武運を……」

「ええ、必ず勝利して見せるわ。姉より優れた妹など存在しないのだから……」

「フランちゃん！ 頑張ちゃー！」

「フラン、怪我には気をつけろよ？」

「思いつきり戦ってこい！」

「うん！」

うーん……姉妹勝負か……フランドールは力はあるがうまく使いこなせていない感じがするからなあ……ま、どうにかなるか。

「それでは、尋常に……始め！」

「いくよー！」

そういうと、いきなり弾幕を展開した。吸血鬼ただけあつてとんでもねえ量だな。俺と戦った時よりも増えてないか？

「我武者羅に撃つても当たらないわよ？」

流石紅魔館の主人なだけあるな、冷静に弾幕をかわしていく。ただ、フランドールもどんどん弾幕を撃ちまくる。もう、景色が弾幕一色に。

「こつちもいくわよ！」

あ、あれは……俺と戦った時にも出した、槍だ。グングニルとか言うらしい。あれつて投げたら自動的に相手に向かって飛んでいくんだっけ？あの小さな体とは不釣り合いの大きさの槍を投げる。

「ん!？」

弾幕に関係なく一直線にフランドールに飛んでく……おい!弾幕に集中し過ぎだ!

ドガン!

「きゃー!」

弾幕に集中していたフランドールを避けれず当たる……ん……もうちよつと周りが見えるようにならないとな……

「ふふ……こんなものかしら?」

「まだだよ」

「!?な、なんで?」

「先生が言ってたんだ、戦いは油断したら負け。つまり、相手を油断させればいいって」
「おお!後ろに回り込んでみたいだ。どうやったのだろうか?もしかして、弾幕を展開してたのは分身か?なかなかやるな、フランドール。」

「だから……今がチャンスだよね!」

一本の真紅のレーザーを放つ。後ろにはもう一人の分身が。なるほど、逃げ場が無いな。よく考えてる。

レーザーと弾幕によって一面が真っ赤に染まる……

ドガーン!

「やったか……な?」

煙でよく見えないな……ただ、あれじゃあひとたまりも無いか。

「流石ね、我が妹。でも、まだ私に勝つのは早いわ」

な……、蝙蝠?

「少しダメージを喰らってしまつたわ」

たくさんさんの蝙蝠が集まり段々とレミリアになっていく。

「でも、……までよ?」

手にグングルを持ちそのまま薙ぎ払う。

「うぐっ!」

辛うじてガードしたようだが、厳しいな……

「まだよ!」

ここにきて、4人に分身か、数で押そうとするのは焦つてる証拠だな……

「無駄よ」

弾幕によつてあつという間に分身が消される。

「うおおお!」

肉弾戦に持ち込むようだ。我武者羅に腕を振る。だが、それでは単調な動きのため簡

単に避けられる。

空振りした隙に腹に蹴りがはいる。

「グフッ！」

それでも、立ち上がるが……

「もう貴女の負けよ？」

「ぐっ……」

グングニルをつけたからてなす術なし……か。

「……参ったよ、お姉様」

「勝者、レミリア・スカーレット！」

「うう……負けちゃった……」

「いい試合だったぞ？」

「そうだよ！ナイスファイト！」

「でも、悔しい〜！」

「次は私たちだな」

「うん！フランちゃんのためにも勝つからね！」

「頑張つてね！」

「続いての試合は上白沢慧音&古明地こいし対紅美鈴&パチュリー・ノーレッジ!」
相手は結構チグハグな組み合わせだな。魔法使いと格闘家。どんな戦いをするの
だろうか?

「尋常に……始め!」

「それじゃあいきますよ!パチュリーさん!」

「さっさと終わらせるわよ」

美鈴が前にパチュリーが後ろでサポートするような形か。なかなか嫌らしい戦い方
だな。

「うっ!」

美鈴が慧音さんに攻撃をする。やはり、格闘なら慧音さんだと分が悪いな。

「先生、今いくよ!」

「そうはさせないわよ」

こいしが慧音さんに加勢しようとするがパチュリーさんが弾幕で牽制を入れるせいで
できないようだ。

「ぐ……」

慧音さんも限界が近いようだ。あの距離だと弾幕も撃てないか……

「むー……攻めれないよ……」

こいしもかなり苦戦してるようだな……パチュリーさんはどうも体の調子がいいみたいだ。弾幕の張り方に隙がない。

「……とりあえず、あのハクタクから仕留めようかしら」

む、弾幕が慧音さんにも放たれる。同時に2人を狙うとかなり器用だな。

「!?」

弾幕が慧音さんに当たる。同時に美鈴の蹴りもはいる。

「ふう……あとはあの娘だけですな」

「先生!」

「人の心配をしてる場合じゃないわよ?」

「あちゃー……これは……こいしー人じゃあ厳しいぞ?」

「それじゃあ、いきますよ!」

「あ!」

美鈴の後ろから弾幕が放たれる。

「な!まだ立てるんですか?」

「ハハ……流石に生徒たちの前で恥ずかしい姿はみせられんだろう?」

「なかなかやるわね……てつきり平和ボケしてるかと……」

「確かに運動不足は実感してるさ……」

ボロボロでも立ち上がるとは……流石です！慧音さん！

「でも、寝てもらいますよー！」

「早く終わらせたいしね」

2人が慧音さんにめがけて攻撃をする。だが、その2人に弾幕が放たれる。

「え？」

「きゃー！」

ど、どこから放たれたんだ？あ、あれ？

「やつほく、ここだよ」

「い、いつの間に、気配を感じませんでした」

「ゴホツゴホツ……や、やるわね」

ガシッ

「へ？」

慧音さんが美鈴の肩を掴む。そして、頭を大きく仰け反らせ……

ゴンッ！

お、おう……1発KOだと……？

「美鈴!？」

「こつちだよ〜」

「はっ！しm」

後ろからこいしが弾幕を撃つ。避けられなかったようだ。

「む、むきゅー……」

なにやら、奇妙な声を出したようだ……でも

「勝者 上白沢慧音&古明地こいし！」

「やった〜！」

「久々にここまでダメージを喰らったな……」

「すごかったよー！流石だね！こいしちゃん！」

「そうでしょう？」

「慧音さん大丈夫ですか？とりあえず救護班のところへ」

「ああ……そうさせてもらうよ。次はお前だろ？頑張ってくれ」

「ええ！任せてください」

慧音さんは救護班のところに向かう。あ、あの娘は……確か……藤原妹紅だっけ？少し怒ってるようだ。それに慧音さんは笑って返す。

「先生！次だよ！」

「絶対勝つてね！」

「おう！ま、任せとけ！」

次は咲夜さんだろ？うーん……

「次は碓氷勇人对十六夜咲夜！この試合の勝敗でチームの勝敗が決まります！」

「頑張つて来なさい、咲夜」

「必ず勝利してみせます」

「頑張つて〜！」

「あ、ああ！」

はく、ヤベエ！勝てるか？

「それでは尋常に……始め！」

「始まったね」

「ああ、なんやかんやで私たちは勇人の戦つてるところを見たことが無いからな。今回はじっくり観戦させてもらうさ。ま、早苗が観戦しようと言わなかったからな」

「その早苗は……食いつくように見てるね……」

「彼、相当パワーアップしてるからね〜」

「だそうです。彼の悩みも気になりますがこちらもとても気になります！」

「とりま、先手必勝！」

「!!」

「勇人さんはいきなり銃を撃ちます。服から銃を取り出して撃つまでが早いです！」

「スッ」

「流石だな、少し動いただけでかわすなんて」

「なら、これではどうだッ！」

「ドンドンドンドン！」

「このくらい……」

「集中して撃つてもかわされてます……あの弾幕は相当速いのですが……流石咲夜さんです。冷静にかわしています。」

「チッ！」

「こつちからいくわよッ！」

咲夜さんは瞬間移動したかのようにいつの間にか勇人さんの目の前に！

「う!? 時か!」

咲夜さんの蹴りが勇人さんの腹に入ります……

「ぐっ!」

そこまでダメージが無かったのか勇人さんは上に飛んで距離をとります。

「逃がさないわ!」

ナイフを投げて追撃しようとしませんが難なくかわしていきます。ただ、勇人さんから攻撃を仕掛けようとしません。どうしたのでしょうか?

「逃げ回ってばかりね!」

「そろそろかな?」

勇人さんが止まりました。なにをやる気なのでしょう?

「ほら! 来やがれ!」

「そう言うセリフを言うことは大体貴方の近くに何か仕掛けてるのかしら?」
「流石がメイドさん勘がいいな。しょうがねえ、これでも喰らえ!」

ドンドンドンドン!

「フン、無駄なことよ」

スツ……スタツ

バチバチ！

「ぐっ!?これは……?」

な、なんでしょう? 咲夜さんが避けたらバチバチと音が……どうやら、咲夜さんに靈力を流し込んだのでしょうか? 咲夜さんが動くたびに流れていきます。

「もしかして、勇人の『糸』!」

バチバチ!

「ぐっ!糸の結界!」

「チツ!いたるところに!」

「どうだ? 触れれば靈力が電気のように流される糸の結界は? まあ、結界が張られてるのをバレないように靈力は抑えめだから、気絶させるほどないが、お前の体力を削るには十分!」

「すでにお前の周り半径20メートル! お前の動きも手に取るように探知できる! そして、くらいやがれ!」

勇人さんの体から膨大な靈力が、あれを流し込まれたらタダじゃすみませんね……

「知るがいいわ……私の能力を!」

「『私の世界』!!」

「これが…私の能力よ。もつとも『時間の止まっている』貴方には見えもせず感じもしないでしょうけど……」

プツンツプツンツ……

「これで終わりよ！ 勇人！」

ザクツザクツザクツザクツ

「貴方は自分が負けたことにさえ気づかないわ」

「何が起こったのかもわかるはずがないわ」

「安心なさい、ここでは死ぬことはないわ。永琳にでも、治療受けなさい」

「!？」

ブシュツ！

「ここ、これはっ！」

ゆ、勇人さんがナイフでメッタ刺しにされています！と、時を止めたのでしょうか？

「と、時を止めたんだな？」

で、でも、勇人さんはまだ立っています！じ、自分でナイフを抜くとは……

「でも、貴方はほぼ満身創痍よ？」

咲夜さんが勇人さんの近くに！蹴りを入れる気です！

ピタッ

「ど……どうした？蹴りを入れないのか……咲夜……」

「連続して自分の体に靈力を流し……ガードしているわね」

「靈力入り『糸』を高圧電線のように体に巻きつけているのでしょ……？」

「流石、策士ね」

「それはお互いのようだな……まさか見破ってうっかり触らなかつたとは用心深いやつ……」

「勇人さんの襟から靈力が流れてる糸が見えます。まさか、咲夜さんはあれを見破って蹴らなかつたのでしょ……？」

「まあ、お前は『時を止める』といつてもほんの短い時間しか止めていられないようだな」
「だからどうだというのかしら？」

「そんなこと知ったところで無駄よ」

ビシュッ

「これで貴方は負けよ！」

ドスッ

「!!うぐっグアア！」

ドバアッ！

「ふふ……リベンジ成功かしら？」

「ぐっ……ハハ、そう言うのは……周りをよく見てから言うんだぜ？」

ゆ、勇者さんにナイフが！ち、血が……

「!?糸?!切ったはずよ？」

「お前、少し俺の能力、忘れてないか？血さえあれば『不変』化できるんだぜ？」

あ！咲夜さんの周りに糸が！血によつてはつきりと見えます！咲夜さんを囲うように糸がはられてます！

「時よ、止まれ！」

「糸を切るしか……」

ガチンッ！

「!?糸が切れない!?それにビクともしない!？」

「時を止めたようだが今は無いぜ」

「喰らえ！最大火力の霊力を！」

バチバチバチバチ！

「きやあ！」

「あ……が……っ」

「グフウ……俺も少し限界だな……」

「勝負あり！勝者 碓氷勇人！」

「いてて……ナイフ刺さりすぎ……」

「先生、お疲れ！」

ガバツ！

「!!あ、ああ（死ぬほど痛い!）」

「凄いよ！」

ガバツ！

「……ぐ、そ、そうだろ？」

「ここら、勇人は怪我してるだろ？ほら、永琳のところに行かせてやれ！」

「そうだね」

「なら、フランが連れてく！」

「ああ、頼むよ」

「すみません……」

「いや、貴女はよく頑張ったわ。あいつが上手すぎたわね」

「能力のことは分かっていたはずなのですが……」

「そう悲観にならなくてもいいわ」

「はい……」

「咲夜でも敵わないとわね……」

「いでっ！」

「動かないで、治らないわよ？」

「いや、傷口に直で薬塗るのですか？」

「そっちの方がすぐに効果が出るもの。刺し傷はあと6箇所ね」

「痛い！」

第46話 第3戦（守谷神社チーム）の日の青年

「よし、治療完了！」

バシイ！

「痛い！叩かないでください！」

「大丈夫よ、もう刺し傷は治るわ」

「はい……」

この人はよく分からない……まあ、腕は確かなんだろうが。実際に傷はすっかり治ってる。ただ、どうしても強烈な苦痛が伴うんだよな……すつごく痛い……なるべく怪我しないようにしないと……

「治療費は貴方の血液でいいわ」

「いや、治療費いるんですか!？」

「タダで済むと思ってたの？」

「他の人は何も請求してないようですが？」

「いいから、ほら、採血するわよ」

「ええ……」

「貴方の血液は面白いからね」

「普通の人の血液でしょう？」

「いいえ、かなり特殊よ？」

「はあ……」

「とうわけで」

「ヒイツ！」

注射器持つて笑顔で近づかないで！

「ご協力よろしくね」

アッ……！！

「はあ……ひどい目にあつた……」

試験管2本分て……取りすぎや……貧血用の薬貰つたが、そういう問題じゃないんだよ……てか、俺にだけ治療費請求したろ、絶対。

「お？先生発見！直ちに突撃せよ〜！」

「おおー！」

ガバツ！

「ぬお!? ふ、フランドール!? どうした？」

「皆が応援しに来てくれたよ！」

「お疲れ様です」

「先生はサイキョーだからもちろん全勝でしょ？」

「そうなのだー！」

「あ、ああ……（こりやあ期待が重いな……）」

「先生、治療は済んだの？」

「ああ、ほらこの通りきれいに治ったさ」

「すごいね！ あんなにナイフが刺さっても立ってたなんて！」

「ま、まあ、一応急所は外れてたからな」

だが、もう刺さるのはゴメンだ。

「だ、大丈夫ですか？」

「戦うときは紫さんの都合のいい結果があるから大丈夫だ」

本当に便利能力だな。当の本人はつかめないような人だからな。

ボ……

ん？ フランドールの様子が少しおかしいな。頬も赤くなってる。熱でもあるのか？ 妖怪は人より頑丈だとは言うが病気をしないわけじゃやいだらう。

「フランドール？ どうした？ 熱でもあるのか？」

「はっ！ い、いや、な、なんでもないよ！」

「ここまで分かりやすく反応されてしまうとは……」

「うーん……とりあえず永琳さんのところに行くか」

「だ、大丈夫だよ！」

「そうには見えないが？」

「大丈夫だって！」

「そうだよ」

「ん？ こいしまでそんなことを……」

「多分ね、先生から血の匂いがプンプンしてるからだと思うよ？」

「え？」

「そういえば、服は血だらけだな。ああ……フランドールは吸血鬼だったな。」

「うむ、なら服を変えないといけないのだが……」

「試合まで時間はあるから取ってきたら？」

「そうだな、そうする」

「……ありがとう、こいしちゃん」

「しようがないよ、先生、かなり血の匂いがしてたからね」

「我慢できないどころだったよ」

「ハハ……（先生、本当に危なかったよ……）」

「あ！慧音だ！」

「慧音先生！」

「おお！皆来てくれたのか？」

「うん！フランちゃんたちから聞いたよ！得意の頭突きが決まったて」

「あ、ああ。ところで勇人は？次の試合は先鋒をお願いしたいのだが」

「勇人先生なら着替えに行ったよ」

「そうか、まあ、時間はあるから大丈夫か」

く試合ダイジェストく

「守谷神社チーム対妖怪の山チーム」

第1戦 射命丸文対犬走権

勝者 射命丸文

「あややや、椛さんその程度ですか？ そんなんじやあ勇人さんにも勝てませんよ？」
 「ぐぐ……なんでこの人は強いんですか……」

第2戦 洩矢諏訪子&東風谷早苗対鍵山雛&河城にとり

「ちよいとばかりギクシヤクするがアア、この妖力式機関銃は修理完了オオオ！」
 「ちよつと、にとり落ち着いてよ……」

「そして くらえッ！」

トドトドトドー

「前回負けたのに……うぬぼれが強すぎるよ……」

「がっ……妖力を使い果たした……」

「え!?! な、何してるの!?!」

「もう終わったかい？」

「全然当たってない！」

「うろたえるんじやあないッ！ 河童はうろたえないッ！」

「はいはい、分かったから……」

「げ、元気でいいですね……」

チュドーン！

勝者 洩矢諏訪子&東風谷早苗

よって、守谷神社チームの勝利

「博麗神社チーム対白玉楼チーム」

第1戦 博麗霊夢対魂魄妖夢

ブッ

「くっ……全部避けられてしまいます」

「こっちからいくわよ！」

「あっ！しm」

ドゴーン！

「貴女には勝利への執着が足りなかったようね」

「ぐぐ……」

「いや、霊夢の場合は金への執着だろ」

勝者 博麗霊夢

第2戦 伊吹萃香&霧雨魔理沙対魂魄妖忌&西行寺幽々子

「妖夢う……お腹空いたわ〜」

「い、今は試合が優先ですよ!？」

「力が出ないわ〜」

「幽々子様、ワシ一人では厳しいですぞ！」

「あのジジイすげえな」

「流石だね、妖忌は。だけど、1対1が得意な君は少々厳しいかな？」

「何を、このくらい……」

「後ろだよ？」

「な!?!しまった！」

ドゴオツ！

「グフツ！」

「あの状態で受け身を取るなんて流石だね、まあ、あとは魔理沙に」

「マスタースパーク！」

「幽々子様！後ろ！」

「え？」

勝者 伊吹萃香&霧雨魔理沙

「やつと戻ってこれた……」

何を着てこようか考えたら意外に時間がかかった。流石にジャージはないと思つて服を探したが……蓮子の考えてくれたものが一番しっくりくるようだ。

「おーい！ 勇人、次試合だぞー！」

「はい！ 今行きます！」

「お？ そういえばお前の私服は初めてかな？ しつかりと決まつてるじゃないか」

「あ、ありがとうございます」

「先生、かつこいいい！」

「そ、そうか？」

「戻って来て早々で悪いが先鋒、頼めるか？」

「あ、いいですよ」

もうそろそろ、疲労が来そうだがそうも言つてられない。チルノたちも来てるのだから、頑張らないとな。

「寺子屋チームと守谷神社チームは準備をしてください」

よし、次も頑張りますか！

「第1戦目は碓氷勇人对八坂神奈子！」

Oh……神奈子様ですか……俺的には文が良かったのだが……遠慮なく戦えるし

……

「お前か……別に手加減はいらないからな？」

「はい……精一杯戦いますよ」

「それでだが……この戦いで1つ賭けをしてくれないか？」

「はあ……入信ですか？構いませんが」

「そうじゃない、この戦いで私が勝ったら……」

「勝ったら？」

「早苗と結婚してくれ」

「……………」

え、今なんと？

「は、はああああ!!？」

「いいな？ 私が勝ったら、早苗と結婚だからな？」

「諏訪子様、神奈子様と勇人さんは何を話してるんでしょうか？」

「さ、さあ……」

「？」

「そ、それは……少し……「始め！」オイツ！」

「いくぞ！」

「なっ！くそっ！とりあえずは戦いに集中だ！」

ドッゴーン！

「うわっ！」

そ、そういえば、神奈子様は御柱を使うんだっ！くそっ、当たったらひとたまりもないぞ！

「くそっちもいくぜ！」

銃を……

ドッゴーン！

「うっ！」

やべっ！銃を離してしまった！

「ああっ　しまっ……」

ガシッ！

「あつあぶねーっ　トリガーガードにひっかかってくれた！ツキもあるっ！」

「その銃はなかなか厄介なものだったな……まあ、最初からそうくると分かっていた」

ニヤリ

「ふふ……神奈子、笑ってる。何かあるようだね」

「よしっ！運もある！いけるぞ！」

この距離なら弾速的にもこちらが有利！狙いを定めて……

「あの距離だと勇人さんが有利ですね……神奈子様も用心してるのか御柱をガードに使うおうとしてますね」

「まあ、どちらも飛び道具だからな、いかに距離などによって自分の武器を活かすか……そのかけひきがあるね……」

「フルバーストで撃つ！」

「撃つか……なら、こっちはあえて『近づく』！」

「これで仕留め……る？」

ダッ！

「は、速い!? あ、あんな重装備で!？」

「距離があると思つて完全に油断したな」

「や、やべっ! 撃たないと!」

「遅いつ!」

ドゴーン!

「うっ!」

ズザザザッ

た、態勢が……! !

「次にどうする?」

すかさず御柱かよ!

「このまま御柱の餌食になるか、左右どちらかに避けるか」

「さあ! どう動くか! どちらにせよ私の策中の中!」

「左右どちらかに身をかわしても弾幕で追い討ちをかけるだろうね」

「ゆ、勇人さんはどうするのでしょうか？」

「はあ…はあ…」

なら、あそこだけだな！よく見て…：…チャンスは一度だけだ…：

「!？」

「まっすぐ走った!？」

「ああっ！」

ダダダッ！

「お、御柱の上を走ったー!？」

「そして このまま撃つ！」

「!？」

「い、いない!？」

「フフ…やっぱり神奈子の方が発想が一枚上手のようね」

「なっ!？上？」

そ、そうだった…：…神奈子様は神様だ。空だつて飛べるんだった！

くっ！弾幕か！

「ふ、服のガードを！」

「遅い」

ぐらっ

「ぬお!？」

ドガン！

「あ、あぶねー!」

「あいつ、御柱から滑り落ちやがった!」

「ここにきて強運ですね」

「この勝負…『運』がある! 運も『実力』のうち!」

「そして! 今は無防備! これでも喰らえ!」

ガラッ

「御柱は勇人の後ろにある、すなわち挟み撃ちにできるわけだな」

ゴオッ!

がっ……! 三方向から!

「終わりだ」

グッシャアッ!

「グアッ……」

ガシヤッ……

「流石、勇人だったね。二転三転とする面白い戦いだつたよ。まあ、流石に神奈子には敵わないか」

「次は早苗たちだろ？準備をしたらどうだい？」

「す、諏訪子様、み、見てください！」

「か、神奈子様の腕に！御柱に！」

『糸』が絡められています！れ、霊力のせいか腕にダメージが！」

「それに、か、神奈子様の様子も変です！」

ブツブツ……

「な、何が!？」

「は、ハハハ……また、やらせてもらったぜ……」

「お、御柱をまともにくらつたはずなのに！いい、いつの間に糸を！」

「ゆ、勇人さんが立つてた場所に針が……」

「も、もしかして……御柱を避けるたびに絡ませていたのか！それで、衝撃を減らしたのか！だが、腕はなぜ？」

ハハ……腕にも糸を発射する装置はついてんだぜ？針に血さえつけといて発射した後能力を発動して、こつちに戻るようにすれば……勝手に絡まる！」

「神奈子様は御柱を中心に戦う。そりゃあ、撃ったまま放置っていうのは……後ろから攻撃するために決まってる！俺としてはその上をいかないとな！」

「ま、まさか……こ、こんなこと……」

「うーん……神奈子、相当シヨックを受けてるな……何千何万と生きてきた神奈子にとって、たった十何歳の人間に知略で上をいかされたからな……」

「だ、大丈夫なのでしょうか？」

「問題ないさ、それだけでメンタルが粉砕するようじゃ神様なんて務まらないさ」

「……フフ、人間に虚をつかれるとは……」

「だが、神様としてまた、早苗との婚約の約束としてはお前に負けれない！」

「こつちだつて、生徒を前に負けられねーよ！」

糸はまだ絡まったままだ！このまま霊力で！

「私からも神力を送ってやろう！」

バリバリ！

「!？」

俺の糸を使ってこつちに流してきやがった！切るしかない！

プツンッ

「ようやく糸が外れたな」

また、御柱か！

「そんなの遅くて当たらねーぞ！」

「フフ……わかってるさ」

ドゴーン！

ふん、こんなの……ドゴオツ！

「横か……ら？」

糸で封じてあるはず……

「御柱に気が回ってなかったようだな、能力が解除されてたよ」

「戦いながら、能力が解除されるのを待っていた。もっとも、お前は避けるのでいっぱい
いっばいだったようだな」

ぐっ……意識してないと発動しないのか……ここ、呼吸が……銃は……くそつ、さつき
の反動で飛んで行きやがった。レボルバーを取り出すしか……

「お前はここから逆転を狙ってくるからな気絶してもらおう」

ば、バレないように……ち、血は……口から出てるか……

近づいてきた！

「今だ！」

「な!? まだ銃を！」

「グフツッ！」

ぐらっ

バーン！

「とんでもない方向に飛んでいったね。最後まで諦めないのは流石だけど、やっぱり厳しかったかな？」

「いくぞ！ 勇人！」

「ハハハ……行動は不変……俺の思い描いた動きをする……」

「？」

バシッ！

「う、後ろから？」

「明後日の方向から来るとは考えてなかったろ？」

「ゼエーハアーこれで最後だッ！」

「全てを利用して勝利を掴む！」

ありったけの弾を撃ち込む。

「なっ……！」

周りには御柱と弾幕、それも相当な数の。

ビシイビシイビシイ

「ぐっ……ヤケクソに撃ったな、いくぞ！『ライジングオンバシラ』」

ドゴーン！

「ハア ハア、これで終わりか……」

「や、やっと終わったね」

「いえ！あれを！」

「ハア ハア うぐっ……全部は防げないか……」

「!?」

「またまたやらせてもらったぜ……服の『ガード』だ」

「そして！これで終わりだ！」

「懐に飛び込んだ!？」

右手に靈力を込めて！

「オラアアッ！」

ドグウウツ！

「ぐっ……ハ……」

「これで……俺の……勝ちだな……」

ガクッ

「勝者
碓氷
勇人！」

第47話 第4戦（白玉楼チーム）の日の青年

「勝者！ 碓氷勇人！」

「ハア、ハア……やったぜ」

バタツ

「先生ー！」

「勇人！」

「だ、大丈夫です。疲れただけですから……」

「だが、とりあえず、永琳のところに行け」

「ハハ……そうします……」

「あーあ……神奈子が負けるとはね、流石勇人だ」

「前よりも霊力が強くなってる気がします」

「やっぱり？まだ成長してるようだね」

もうかなりの実力者なのではないのでしょうか？神様である神奈子様まで倒してしまつたのですから。確かに純粹なパワーでは神奈子様の方が圧倒的に高いと思います……それを覆すだけの知略を勇人さんは兼ね備えてるようです。神奈子様も裏をかくような戦い方をしましたが、さらにその上をいってましたね。

「ハア……負けてしまつたか……」

「お、神奈子 お疲れ」

「お疲れ様です」

「ああ……不甲斐ない試合で申し訳ない」

「そんなことないさ、あれは勇人が相当成長していたから、しょうがないさ」

「成長はしているな、霊力なんか相手を感じさせるかのようなダメージを与えるし、肉体

強化にも使つてるようだ」

「ほえ……器用な奴だな」

肉体強化は最後のパンチでしょうか？普通のパンチで神奈子様がKOされることは無いでしょうか。どこでそんなことを覚えたのでしょうか？

「ただ、早苗との婚約を賭けたのにな……まあ、ますます早苗のお婿に来て欲しいもんだ」

「そうだねえ」

「え!?何、勝手に賭けをしているのですか!」

「別に勇人婚約しても構わんだろう？むしろ、大歓迎だろ？」

「そ、それは……そうですけど……」

た、確かに戦っている時の勇人さんはカッコよかったですよ？普段無表情が多い分、戦っている時の必死な顔はいいものです……

「ま、あの半霊には負けないようにね」

「え、あ、そ、そうですね」

「あー……体がいてー……」

神奈子様はやはり強かった。弾幕の量に至っては真つ向策で避けれる気がしない。服でガードしても少々被弾してしまった。それに、知略も長けていて、終始考えていなければならず、とても疲れた。あー……

「あら？また来たの？」

「ええ……少し寝させて貰えますか？」

「構わないわよ、寝てる間に治療代は貰うから」

「取りすぎないでくださいよ……まだ試合はあるんですから」

「安心なさい」

安心できないから言ったんだよ……でも、やはり睡魔には勝てない……横になるとす

ぐに眠気が……糖分も取っておきたいが、起きてからにしよう。今は寝よう……

「先生いるー?」

「あら、吸血鬼の娘にさとり妖怪の娘じゃない」

「先生は?」

「今は寝てるわよ、静かにね?」

「えー……せつかく試合に勝って褒めてもらおうと思つたのに……」

「彼は度重なる試合で疲れてるのよ、それは後にしなさい」

「じゃあ、先生の所に行つていい?」

「うるさくしないならね」

「スー……スー……」

「あ、いたいた」

「静かにね、フランちゃん」

「分かってるって」

「スー……ん……スー……」

「先生もこんな顔するんだ」

「そうだね、いつもは眠そうな顔してるのにな」

「……ふああ」

「フランちゃんも眠いの？」

「うん……眠いかも……私も寝よう」

ガサガサ……

「え？ちよ、ちよつと、どこで寝ようとしてるの？」

「……？ベッドだよ？」

「そうじゃなくて、先生いるよ？」

「先生、あつたかいんだもん、それに落ち着くのよ……」

「でも、先生の、胸の上には……」

「いいの……おやすみ……」

「あー……どうしよう……」

「……ふああ、私も眠いや……寝よう……」

ガサガサ……

「スー……スー……」

「ん……うっ……スー……」

「静かにしてるかしら？つて、寝ちやつてるわね……あらあら……仲良く添い寝だなんて、モテモテね」

まるで、兄妹ね。これを早苗とかが見たらどうなるのかしら？んー……お疲れだから、バレないようにしてあげないといけないかしら？

「すいません、勇人さんはいますか？」

とか言つてたら、例の娘が来ちゃったわね……噂をすればなんとやら……ここはご退場願おうかしらね。

「いないわよ、他を当たったらどうかしら？」

「そうですか？」

「そうよ」

「いえ、ここに勇人さんがいる気がします」

な、何なのよ。どうしてこんなに勘がいいのかしら？

「さつきまではいたわよ、でももう出てしまったわ」

「本当ですか？」

「本当よ」

「……」

「失礼します、ここに勇人さんはいるでしょうか？」

「……」

半霊の剣士まで……何で、この娘達は勇人に関しての事に鋭いのよ？ここで暴れられ
ても困るわ。

「いないわよ、他を当たってちようだい」

「いえ、います」

この娘、断言しちやったわよ。

「どうして、そう言えるのかしら？」

「勇人さんの気配がします、向こうですね」

「……あそこで寝てる人がいるのよ、だから入れられないわ」
「その寝てる人は勇人さんですね！」

何でそうなるのよ？ 剣士といい、この巫女といい……

「それでは」

「わ、私もっ」

「待ちなさい」

「何か問題が？」

「お疲れなのよ？ 少しは休ませてあげなさい」

「それなら、私が癒してあげます！」

「いいえ、私が！」

「ちよ、ちよつと、待ちなさい！」

入ったらダメ……

「……………」

「「スー……スー……スー……」」

「ああ………」

「……………ふっ」

少し昔なら、取り乱してしまつてたでしょう。しかし、この早苗、慌てません。何故なら、相手は勇人さんよりも年上ではありますが、見た目は完全に幼女。勇人さんに特殊な嗜好は無いはずですから、問題無いです。それにこの娘達の勇人さんに対する感情はきつと異性と言うより、兄や親のような感情でしょう。よつて、添い寝も問題ありません。それに、勇人さんの左側は空いています！今がチャンスです！

「……何をやる気ですか？妖夢さん」

「そのポジションは譲れません」

む……妖夢さんも冷静なようです。勇人さんの左側を狙っているとは……

「……」

睨み合いが続きます……少しでも集中を切らしたら私のポジションはありません。

「……先生、大好き」

「……」

ん？この娘、さつきなんて？大好き？き、きつと、loveじゃなくてlikeですよね。ま、まさか……ねえ？

「は、ハハ……」

「、子供の戯言ですよ」

「そ、そうですね」

「でも、左側は渡しませんよ」

くっ、この隙にと思つたのに……流石は妖夢さんです。

「ぐぐ……」

「むうー……」

「ふあ……、胸の辺りが重い……つて、フランドール？」

な、何で？俺が寝てる間に何が？こいしまで……

「スヤア……」

気持ち良さそうに寝て……

「あれ？早苗に妖夢じゃないか？」

「何をしてるんですか？」

「え？何を言ってるんだ？」

ふ、2人とも物凄い黒いオーラを出して……こ、こんなオーラ出せたっけ？

「手元を見てくださいよ」

「ん？……フランドールの頭を撫でてるだけだな」

いつも被っている帽子は今回は被ってない。綺麗な金髪は指通りもよく、何と言うか

……すごく撫でやすい。つい、無意識に……気のせいかもしれないが、フランドールも気持ち良さそうだ。

「それが問題なんです！」

「……は？」

「わ、私だつてしてもらいたいのに……」

「なんて言った？」

「何でも無いです！」

急に怒られたんだけど……妖夢、機嫌が悪いのか？

「それよりも、何でフランやこいしと寝てるんですか!？」

「俺も知らない、寝てる時は1人のはずだったが……目覚めたらこうなつてた」

「他意は無いんですか？」

「ねーよ」

「……これでロリコンの可能性は無いと……」

早苗も早苗でおかしいな……ブツブツと何言つてんだらうか？

「もう戻らないとな、ほら起きろ、フランドール、こいし」

「んん……まだ寝てる……」

「私も……」

「いつまで頭を撫でてるつもりなんですか？」

「お、そうだな」

「あ……」

「ほら、戻るぞ？」

「むー、なら抱っこして運んで！」

「!?!」

「私はおんぶ！」

「!?!」

「はあー……分かった、なら起きるよな？」

「うん、抱っこしたらー！」

そう言うと、首元に抱き付いてくる。子供って可愛いな。あ、性的な意味は無いからその辺はよろしく。

幼稚園訪問とかあったが、全く懐いてくれなかったり、しまいには泣かれたりしてしまったからな。こう慕ってくれると素直に嬉しい。ん？もつと人と触れ合う努力をしろって？ハハ、そんなことで解決できるなら苦労しなかつたよ。

「おんぶー！」

「はいはい……」

そうやって立ち上がる。2人とも重くは無いから問題ない。むしろ、

「勇人さんが抱っこ、勇人さんが抱っこ、勇人さんが抱っこ……」

「パルパルパルパルパルパルパルパル……」

この2人だ。黒いオーラがより一層、黒く……このまま呪われそうだ……あと何？パルパルって？

「そ、それじゃあ……次は妖夢のチームとの試合だよな？よろしく」

「そうですね」

何だろうか、対応が冷たい。何かしたか？後ろに不穏な空気を感じながら慧音さんの元へ。

「慧音さん！」

「ん？勇人か、休憩は済んだか？」

「ええ、お陰で体が軽いですよ！」

「そうか、次の試合結果次第で決勝戦にいけるかどうかが決まるからな」
今のところは全勝か……せっかくだし、決勝戦までいきたいな。

「で、次はどの順番で出る？」

「フランは先生と出る！」

「だそうだが？」

「構いませんよ」

「なら、それでお願ひするよ」

「私は1番に出る！」

「分かった、なら、こいし↓勇者&フラン↓私の順番でいいか？」

「はい」

「よし、頑張っていこう！」

「「おー！」」

「……」

「あら、妖夢ちゃん機嫌悪いの？」

「……いいえ、機嫌は悪く無いです」

「もしかして、ちっちゃい娘に嫉妬しちやつたの？」

「そ、そんな訳無いですよ！も、問題無いです！あの娘達は恋愛なんて知りませんから！」

「そうかしら？貴女だって最近まで知らなかった訳でしょ？それに、あの娘達はあんな姿してもう数百年は生きてるわよ？興味無いとは言いきれないわよ？」

「……と、ともかく！次の試合で勝ちましょう！」

「ふふ、そうね」

「さて！次の試合は寺子屋チーム対白玉楼チーム！この試合の見所はどこでしょうか？
紫さん！」

「そうね、あの人と勇人の祖父対孫の試合が見所ね、それに妖忌と組むからどんな感じでくるか楽しみね」

「そうですね！それではまず第1戦目 古明地こいし対魂魄妖夢の試合です！」

「よろしくね〜」

「よろしくお願いします」

この娘は古明地こいしさんと言いましたね。戦鬪を拝見したのですが、弾幕は結構強力そうです。ただ、いつの間にか後ろにいるということがあつてより一層油断できない相手です。ただ、どうやって気付かれずに後ろにいるのでしょうか？とにかく、彼女の存在を見失わないようにしないといけません。

「それでは、いざ尋常に……はじめ！」

「いっくよー！」

やはり、弾幕からきますか。でも、当てるよりは牽制目的のようです。ここは最低限の防御で一気に攻めます！

弾幕が途切れたのを見計らって……！

「はっ！」

「このまま……斬る！」

「うわっ！」

避けられましたか……流石妖怪。運動能力は半端では無いですね。でも……ここから！体勢が崩れた今は畳み掛けるチャンスです！

「はあああ！勇人さんにおんぶしてもらうなんて、羨ましいです！」

「え、え!？」

私だつて！してもらいたいのに！

ブンッ

「……っ、あれ？いない？」

どこへ？少しも彼女を見失ってないはずですよ！なのに、どこに？

「ヤッホー」

「え？後ろ!？」

ブンッ

い、いない？どこにも気配を感じない？

「もしもーし」

「また?」

あれ？また、いない……？

「ほら、いっくよー」

「わっ!」

弾幕!? 一体どこから？さつきからこいしさんを認識できない!

「ここだよ?」

「え……?」

ま、真正面……? 気付いた時には遅く、目の前に光る弾幕が一面に……

ピチューン!

「慧音さん、毎度思うんですが急に消えては出てきてとする彼女ですが何の能力なんです?」

「ああ、確か『無意識を操る程度の能力』でな、なんでも自分のことを認識させなくて

るらしい」

お、おう……ここの生徒はえらく恐ろしい能力をお持ちで……

「勝者！古明地こいし！」

「イエーイ！」

「流石！こいしちゃん！」

うむ……認識できないということは気配を探るのも無理か……強すぎね？

「く……っ、全くこいしさんを認識できなかった……」

「流石にしようがないな……」

「師匠……」

「次はワシに任せろ」

「孫と戦うとはのう……まだ若いもんに負けられんな！戦いの年季の違いをおしえてやるわ！」

「『あれ』を頼むぞ」

「ああ、任せとけ」

「続いての試合は今回の大目玉、勇人さん対その祖父の対決です！」

「なあ、勇人」

「なんででしょうか？」

「お前の祖父なんだが、どんな能力なんだ？」

「あー……『神力を宿らせる程度の能力』って聞いてます」

「どんな能力なんだ？」

「うーん……なんでも、神力、まあ、『神の力』を授けることができます。されるのはなんでもいらいしくて武器にすればあつという間に神の武器となり、道具にすれば神器となり、人や妖怪にすれば神に匹敵する力を得られるそうです。具体的にどのぐらいまで上がるかは分かりませんが、相当強くなるって聞いてます」

ただ、自分1人の場合は恐ろしく弱いらしい。複数の人がいて実力を発揮するそう。宿らせる時は意識が少し宿らされる側に集中するらしい。1人だけなので影響は少なさそう。まあ、よく口癖で「わしは1番じゃなくて2番が丁度いいんじゃない」とか

言ってたし。

「それでは第2戦目 碓氷勇人&フランドール・スカーレット対魂魄妖忌&碓氷勇人の祖父の試合をいざ尋常に……」

「おい！俺のじいちゃんの名前は「始め！」おい！」

「いくぞ！妖忌！」

「おう！」

じいちゃんの手に光が……そのまま妖忌さんに触れる。その瞬間一帯が光で埋め尽くされる。

「まぶっ！」

「きやつ！」

「準備完了じゃ」

「ああ」

んー？何も変わってないようだが……強いて言うならじいちゃんの手によく分からん文字で埋め尽くされてるぐらい。妖忌さんはあの構えは……居合かな？刀を抜かず、柄に手をかけたままジツとしてる。目は閉じてる。

「勇人」

「何ですか、妖忌さん」

戦闘態勢は崩さず、返事をする。

「ワシはな、今まで修行をしてきた、今回それをお主に見せてやろう。あやつのを借りて数倍増しでな」

「そうですか、いくら妖忌さん達でも負けませんから!」

「あと1つ教えてやろう、今あやつは久々に能力を使うせいで、能力の使用でいっぱいはいじや、まともに攻撃できんだらう」

「そんなこと言っちゃっていいんですか?」

「言ったところでお主らは勝てんからな」

「言ってくれるねえ」

「ところでこの試合、ワシが勝ったら、ワシの弟子になれ。そして妖夢と婚約せよ」

「は、はあ?」

「わしも許可しとるからな?」

「おい、ちよつと待てよ!」

「こつちから行ってあげる!」

フランドールが勢いよく妖忌さんへ弾幕を撃つ。

「……」

動かない？当たっちゃまうぞ？

その時、弾幕が急に爆ぜた。何かにぶつかった訳でも無い。空中で爆ぜたのだ。
「え？」

う、動いてないのに、弾幕が勝手に？

「むー……ならもつと！」

さつきよりも多い量を浴びせるが、さつきと同じく全て途中で爆ぜる。

「うー……」

「な、なんだ？あまり安易に近づかない方がいいな……」

「なら、突撃だー！」

「おいー！」

ニヤ

妖忌さんが笑った!?何かある！近づくのはマズイ！

「フランドール戻れ！」

チイツ！遅いか！なら！少し悪いが糸で！

パシユツ！パシユツ！

糸がフランドールの両腕に絡まる、そして

「ふん……っ！」

「きゃっ!」

思いつき引つ張る。結果、フランドールは後ろに尻餅をついた。

「イテテ……何するの? 先生!」

「不用意に近づくな、胸元見てみる」

「あ……リボンが切れてる?」

ようやく分かった。あれは全部『居合斬り』だ。速すぎて見えるどころか、斬ったかすら分からない。さらにさつき、フランドールがギリギリ斬られなかったところから見て射程は4〜5メートルはある。多分、神力の影響だろうか? 普通の居合斬りより射程が長いし、速い。

「ふっ、その顔は勘付いたな?」

「ああ」

勘付かれても、動じない辺り相当な自信があるようだ。確かにあの速さなら絶対的な防御力を誇るかもしれない。いわゆる『絶対領域』か。下手に突っ込むと斬られるし、何もしないという訳にもいかない。遠距離から撃つても意味が無さそうだ。

「フランドール、下がってろ」

「え? あ、うん……」

「こっちに来るか……」

だが、この居合の餌食になるだけじゃ。これまで伊達に修行してきた訳じゃ無い。この居合は射程距離と範囲がネットクだったが、あやつのお陰で神力を刀に纏わせることで解消させた。元々は狭いところ限定だったがここでも使えるものとなった。よって死角なし！今はまだ目に頼らず、気配を感じていこう。

さあ、こい。

ダツダツ……

残り5歩……4歩……3歩……2歩……1歩！

「今じゃ！」

……斬った感触が無い？いや、残りの1歩足りていない！

「オラア！」

な!?接近を許した!?

ドゴオ!

「ぐっ……」

一見、勇人が妖忌に1発喰らわせたようにみえる。が、勇人は必ず殴る時は靈力を纏わせ、急所に入れることで1発で仕留める。しかし、さつきは仕留め切れていない。それどころか、急所に入っては無く、靈力もうまく流せていない。よって、少ししかダメージを喰らわせていない。普段はしつかり決まるはずなのに今回は外した、力がうまく入

らなかつたつまり、

「ヤベツ、ビビったな……」

とりあえず、距離を取る。全然ダメだったな。まあ、妖忌さんの射程距離が俺の予想してた通りで良かった。実は最初のたち位置に足から糸を出しておいて、最後の1歩を踏む前に糸を戻して、体を後ろに少し戻す。よって、1歩踏んだけど進んではいけない。それにより居合を外し動揺してる間に一撃とのはずだが、不発だったな。

「大丈夫か？妖忌」

「問題ない、むしろ気が引き締まったわい」

「そうか、なら引き続き宿らせるぞ」

「ああ」

「フランドールっ！こっちに来てくれ！」

「分かった！」

「頼みたいことがある」

「何？」

「ゴニョゴニョ……」

「呑気に話しおって……」

「安心せい、ワシの居合は領域に入った者は必ず仕留める」

「分かっておる」

わしだってこやつの居合を見た時はたまげたわい。さらに神力を宿らせておる。さて、どんな奇策で来るか？

「さあ！フランドールやってしまえ！」

「いくよー！」

ドガーン！

目の前の床に弾幕を撃ち砂煙が舞う。

バン！バン！バン！バン！バン！バン！

「ふんっ！見えなくなつて弾幕は捌けるわい！」

「そんなの計算済みだ！」

何かがおかしいのう……砂煙なんて無意味、ただ乱射してくるのみ。やけくそになるタイプではないから、何があるのじやろうか？

待て！あの小娘は!?

「きゅっとして……」

「なっ！『上』じゃと!？」

「な、カバーできん！」

「あなたの居合の弱点は『真上』だな、まあ、じいちゃんが弾幕でカバーする予定だっただろうが……気付かなかったようだな」

「ドカーン！」

ドカーン！

「ぬぐう！」

「ぐぬぬ……弾幕を展開じゃ！」

「あはは！」

「ここにもいるよ？」

「な!? 分身じゃと!？」

「3対1だね、もう無理だね？」

「ゴホッ、ゴホッ……まだじゃ」

スチャッ

「流石に詰みだな」

妖忌さんに銃をゼロ距離で向ける。じいちゃんはフランドールの分身に囲まれている。

「……はあ、参った……ここまでやるとは……流石策士のよう」

「妖忌の居合を看破するとは……」

「勝者！ 勇人&フランドール！」

第48話 休憩の日の青年

様々な難敵達を倒して、我ら寺子屋チームは全勝でこれた。ホント、大変だった……永琳さんがいなくなったら確実に死んでる。治療を受けるたびに採血するのはやめてほしいが。

ま、無事決勝進出というわけだから、良かった良かった。決勝戦の前にはしばらく休憩時間を取ってくれるそうさ。この間にそれぞれの行動をとるみたいだ。

例えば紫さんや幽々子さん、じいちゃんなどのねんげファン……まあ、お姉様方はお話をしてるようだ。また、こいしはチルノと達と遊んでいるようだ。爆発や弾幕が見えるのは気のせい気のせい。キットワタシツカレテンダヨ。後は……萃香さんが酒を飲んでまだ暴れるとかなかな？

まあ、とにかく賑やかだ。疲れないのか？ま、それが幻想郷のいいところなのかなと思いつつある。

……だが、これは少々問題があると思う。

「……な、なあ、妖夢……？」

「何でしょうか？」

別に俺が問題を起こしたわけでもない。また、レミリアが俺の血を求めようとしてるわけでもない。そう、何の問題も無いはずなのだ。

なのに、俺には緊張が走る。周りからの視線が妙に熱っぽい。

冷や汗をかきながら、俺の左腕に右腕を絡ませて引っ付く妖夢に言う。

「は、離れてくれないか？」

「嫌です」

休憩時間なのにちつともゆつくりできない、それどころか常に緊張していて逆に疲れる。休憩なのに疲れるとはこれいかに。

ドウシテコウナッタ……

原因は妖忌さんとじいちゃんの試合が終わった後にある。俺とフランドールが勝利をおさめた直後である。

「勝った！勝ったよ！先生！」

「ああ！よく頑張ったな！すごかったぞ？」

本当によく頑張ってくれた。弾幕によつて砂煙をあげた後に俺が注意を惹きつけている間に上空から奇襲すると言う作戦をしっかりと理解して実行できた。本当に素晴らしいと思う。

「うーむ……負けてしまうとは……」

「ハハ……流石我が孫じゃ！」

「やはりこれは限定的すぎるのがいかんのう……まだまだ鍛錬せんとな」

「いえ……見えないほど速い斬撃だけでも十分恐ろしいと思えますが……」

「私もまだ鍛錬が足りないようです……」

「なーに、2人揃つて鍛錬ができるとはいいいことじゃないか」

「ふっ、そうじゃな」

「まあ、頑張れよ、妖夢」

「もちろんです！そこに勇人さんが加わってくれれば嬉しいのですが……」

「ん？なんて？」

「い、いいえ……」

「まどろっこしいのう……」

「むうー……先生！フラン頑張ったんだよ？もつと褒めて！」

「うん？あ、ああ、本当に良かったぞ？」

「言葉じゃなくて、行動で褒めて！」

「!？」

「そうか……分かった」

俺はフランドールの頭を撫でる。

「よく頑張った」

「えへへ……」

本当に可愛いな……娘とはこんな感じなのだろうか？従姉妹の娘も小さく人懐こくて可愛かった記憶がある。それと近い感じだな。

「ーっ……！ー！」

ただ、なぜか物凄く寒いオーラが……あれ？今はほのぼのとしているはずなのに……「次は休憩だったな、チルノ達に会いに行ったらどうだ？」

「うん」

その時、フランドールの体が傾く。咄嗟に俺が支えるがフランドールの、顔色が良くない。

「おい大丈夫か？」

「ちよつと疲れただけだよ……」

「うーむ……流石に戦い続けて疲れたかな？永琳さんのところに行くか」

「うん、行つてくる……」

「おいおい、無茶するな俺が連れて行くさ」

と言ひ、フランドールを抱き上げる。

「あつ？」

「……っ！」

急に抱き上げたせいか少し驚いたようだが、すぐに安心したようだ。俺自体そんなに柔じやないと思うが、フランドールは物凄く軽い。あんな戦いをするとは思えない重さだ。

「それじゃあ、フランドールを永琳さんのところまで運んできます。じゃあーどうした？妖夢？」

「私もまだそんなことしてもらつたことが無いのに……そもそも勇人さんから触れられたことなんてほとんど無いのに……しかも、フランさんのような若い姿の吸血鬼に……やはり、勇人さんはロリコン……いえ、そんなはずは……でも、スレンダーな方が好みだと……」

妖夢の方を見ると、妖夢が俯いて何やらブツブツとつぶやいていた。前髪で表情は見えんが刀を持つ手には何故か力が相当入っていた。

一方、妖忌さん達は何か感じ取ったのか、

「よ、妖夢？」

「ゆ、勇人、早く運んであげなさい」

物凄く動揺していた。

「……ギロツ」

「ぬう……」

珍しく妖忌さんが怯んだ気がした。

フランドールを永琳さんの下まで運んだ後、特にすることが無く、ブラブラとしていた。途中で宿題の丸つけをしまおうと思いついて移動していた途中で、

「勇人さんフランドールさんはもう大丈夫なのですか？」

「ん？妖夢か、特に何の問題も無い」

「今から何をするんですか？」

「宿題の丸つけをしまおうとな」

「それなら私も手伝います！」

「おお！それは助かる！」

「それでは行きましょう」

さっきの不穏な空気は無い模様。いつも通りの真面目な顔で俺の隣に並ぶ。

どういうわけか、俺の横にピツタリとくつついて。

「……………んー？」

いつも通りなのは顔だけか？行動が明らかにおかしい。妖夢の方をみると、何か問題が？とでも言っているような瞳があつた。むしろ問題しかない。

「早く行かないと休憩時間終わってしまいますよ？」

「あ、ああ」

あれ？俺がおかしいのか？妖夢がおかしいのか？でも、妖夢に限ってそんな…………あれ？気のせいかな？

混乱しながら移動をした。道中誰にも会わなかったのが幸이었다。

1人1人の宿題を見ながらつけ間違いが無いように丸つけをする。少しサボってしまつていたため、溜まつている。最近、チルノのに丸がつく回数が増えたのが少し嬉しい。1人1人の成長を喜びながら丸つけをする俺の左腕に妖夢の右腕が絡まる…………

「おかしくないか!？」

「勇人さん、急に立つと腕組みにくいですよ」

「それがおかしいんだよ！離れてくれ！丸つけがし辛い！」

「嫌です」

即答で拒否された。試合の後にあった不穏な空気がまた出てきた気がした。そして、そのまま今に至るのだが……。

「全くもって何があつたんだよ……」

丸つけが終わってしまつたのだが、未だに妖夢は左腕に絡めている。反対の手で額に手をやる。事態がまだ呑み込めていない。

妖夢の顔を伺うが何も変わっていない。ただ、不満そうな雰囲気醸し出している。

「なあ……何か気に入らないことでもしたか？」

「……そこだけは分かるんですね」

「流石にそんなオーラを、出しているなら気づくさ」

「なら、自分で考えてください」

分からないから聞いたのだが……どうしたらいいのやら。ふと、後ろから声をかけられる。

「勇人に妖夢じゃないか！何をしているんだ……ぜ？」

「魔理沙、これは違うんだ。これはだな……あ、あれなんだ！」

「ほほう……ここまでの仲になってるとは……ま、頑張ってくれだぜ」

「だから、違うと！」

「安心しなつて、お祝いの品はちゃんとやるからさ」

「一体何を勘違いしとるのだ！」

「じゃあな」

「ま、待て！行くな！」

「……ぐいつ」

「お、おい！引つ張るな妖夢！」

弁明も許されず、魔理沙はどこかへ行つてしまった……。

「これはマズイ……」

魔理沙ですら完全に勘違いをした。数少ない常識人であろう人がだ。他の奴らは絶対勘違いをする。それはどうにか避けなくては……妖夢の奇行ばかり考えていると。

「あややや、こんなところに勇人さんと妖夢さんが」

「!？」

ここ、ここに来て一番会いたくない人に会うなんて……！会いたくない妖怪、射命丸文

は俺らの姿を見ると最初は驚いたが、すぐにいいネタを見つけたと言わんばかりに近寄って来た。

「あの……だな？……これはだな？」

「ほほう……ついに勇人さんにも進展が……相手は妖夢さんですか……」

「何を言ってるんだ？」

「今はお取り込み中ですね、お邪魔虫は退散させてもらいます」

そう言い、どこかへ行くこうとする時、振り返って

「あ、このこと早苗さんに伝えて来ますね。いや、皆さんに伝えておきますか？」

「おい！それはダメだ！」

それではと言いどこかへ飛び立った。ああ……なんということだ……

「このままでと皆さんが来てしまいますね」

「の割にはえらく冷静だな」

「まあ、自分が招いたことなので」

「そのせいで俺がピンチなのだが」

「……勇人さん、来ましたよ」

「へえー……早苗を差し置いてねえ」

「妖夢さん、何をしてるのでしようか？」

戦う時よりも死を間近に感じるとは……泣きたくなってきた。

早苗は明らかに怒っている。諏訪子様も不気味な笑みを浮かべてこっちに向かってくる。

「何って、見ての通りですよ」

「それがどういふことかと聞いてるのです!」

「妖夢は奥手だから行動を起こさないと思ってたのにね」

「……何もしいではダメなんです」

そう呟くと妖夢はより強く俺の腕を引き寄せる。体は早苗とかに比べると貧相かもしれないがそれでも女性である。女性特有の柔らかさが腕に伝わり、俺の理性をギリギリ削る。

「あ……ちよ……あかんて!」

「それはずるいです!」

「勇人が変な声出してるじゃない」

「むしろ、そちらの方が好都合です!」

「へ、平然と言うー」

「それに早苗さんは勇人さんと家が近いからいつでもできるじゃないですか!」

「だ、だからって!」

「おーい！諏訪子、早苗、こっちに来てくれ！」

遠くから神奈子様の声がした。ここに来て救世主が……

「こ、今回は譲りますが次からは譲りませんからね！」

そう言い、早苗と諏訪子様は神奈子様の元へ行つた。

ようやく、静かになつたのだが、妖夢は力を緩める気はゼロのようだ。俺だつて男である。その悲しいサガかな。いやでも、左腕に神経が集中してしまう。ああ……柔らかないし、温かいな……それにいい匂いもする……はっ！いかんいかん！限界が近いのだからか？だが、我慢しなければならぬのだ！

「妖夢、もういいんじゃないかな？俺だつて男だぜ？それ以上はあかー」

「おかしくなりそうですか？それでも構いませんよ」

トングデモ発言をする妖夢。だが、それは甘い物と言うよりはどこか諦めのあるような感じだった。

「何かあつたのか？少しぐらい話してくれてもいいだろ？」

「……勇人さんは私と腕を組むのは嫌ですか？」

「??」

「フランさんはいいのに私はダメなんですか？やつぱりロリコンなんですか？」

何、訳の分からんことをと言いかけて呑み込んだ。妖夢の目は本気だった。それをテ

キトーに返すのは良くないだろう。

「フランって、試合終わった後のことか？」

「……はい」

「あれはしようがないだろ？流石に倒れかけているのにほつとくのは教師として許さない」

「分かっています、分かっているんです……」

今の妖夢は妖夢らしくない。彼女は真面目でとても真つ直ぐだ。何事にもスパッと迷わず決めれる人だ。真面目過ぎるのがたまにキズだが、それを含めていいことだと思ふ。でも、今の妖夢は齒切れが悪い。何がそうさせるのだろうか？

「ごめんなさい、ワガママをして……」

……何がそうさせるのだろうか……明々白々じゃないか。『俺』じゃないか。彼女は俺にはつきりと好意を伝えた。早苗も然り。しかし、俺はなんやかんやではつきりと答えていない。だが、俺にもはつきりと答えられない訳がある。

だが、妖夢をここまでさせたのは紛れも無い自分だ。

「ずっと勇人さんのことを想っています。それは今でも変わりません。それは早苗さんもだと思えます。でも、勇人さんはまだ心が向こうに残ったままです。全然こちらには向きません。それがずっと続いてしまう気がするんです」

「妖夢……」

「だから、我慢の限界が来たんです……ですが、いつまでもワガママを言っている場合ではありません。誤解も解いてきます」

「そう言い、彼女は絡めた腕を解く。だが、俺はその解かれた左腕で妖夢の頭を抱き寄せる。」

「……え？」

「すまない……ワガママを言っているのは俺の方だ。未だに向こうに未練を残したまま、グダグダしている。多分、これからも俺のワガママは続くかもしれない。だから、このくらいのワガママは許されるさ」

「……誤解されますよ？」

「そうだな」

「ただいま戻りましたよって、あああああ！」

「どうした、早苗って……おいっ！」

「あややや！これはスクープですっ！」

「妖夢く、勇人と進展したって聞いたわよって、アツアツじゃない」

「うむ、妖夢の未来は明るいようじゃ」

「慧音先生！見えないよ！」

「お前達にはまだ早い！」

いつの間にかほとんどの人が集合してしまっていたが、その声は様々。少々恥ずかしくなってきた。

「勇人さん、顔赤いですよ？」

と言う妖夢も赤かったが、その笑顔は優しかった。

第49話 決勝戦（博麗チーム）の日の青年（前編）

休憩の時間の一件後、早苗に同じことを要求され、右腕に抱きつかれて妖夢も対抗してより一層抱きつく力を強くさせられたりと大変だった。俺試合があるのに……休みたかった……

ろくに休憩できないまま、決勝戦つてなわけですが、お相手は全勝の博麗チーム。どの試合も圧倒的だったという。なんでも、霊夢さんがやる気MAXでほぼオーバークイル気味に倒してたらしい。萃香さんは鬼な上にその中でも力を持つらしい。魔理沙は実際に見たことが無いので分からん。アリスさんだっけ？そもそも知らないです。

……無理じゃね？いや……戦いますよ？勝つ気で行きますけど……無理じゃね？

「先生！絶対優勝するよね!？」

や、やめてくれ、その期待の目を、向けないで……

「お、おう！あつたりまえだ!」

「無理、しなくても良いからな?」

「してませんよ！H A H A H A H A……!」

「……頑張ってくれ」

「それでは決勝戦の人達は準備をしてください！」

「逝くか……」

「うん！行こう！」

「ゆ、勇人さん！頑張ってください！」

「応援してますよ！」

「あ、ありがとう……」

プレッシャー……撥ね退けてこそ、漢よ！じいちゃん、見ていてください！漢・勇人、いきます！

「決勝戦の試合方式ですが勝ち抜き戦です！全滅させた方が勝利です！」

「……は？」

勝ち抜き戦……だと……？い、いや……どうにかなるよな……まさかね、1人目で俺の番が回ってくる訳がねえ！

とか言ってた俺をぶん殴りたい……わっかかりやすいフラグじゃないか！露骨に”ま

さか」とか言いおって……

魔理沙、強すぎだろ……魔法使いとか言ってたけどよ……それでも人間なんだろ？何か補正でもかかってんですかね……

まず、慧音さんが行ったのだが……魔理沙は相当弾幕ごっこをやってるようだ。慣れの差で負けた感じがする。ただ、善戦はしてくれたと思う。……ここからが問題だ。2連戦のはずなのに疲れを見せずこいしを倒してしまった。さらにフランにさえもだ。あいつ、本当に人間か？動きは単調なはずなのだが……最後の”マスタースパーク”と叫んで撃つ極太のレーザーの様な物によって負けている。ありゃあ、物凄い火力だな。脳筋なのか？

「よしっ！このまま私1人で倒すぜ！」

「流石にやられる訳にはいかんな……」

着実に戦うとするか。魔理沙の技はどれもタメが大きいものばかりだからな。

「始めっ！」

「さあ、いくぜ！」

そう言うなり、弾幕を放ってくる。星を基調としていて輝かしいが当たったらひとたまりもない。てか、キラキラしすぎや、目が痛いっす。

その後も何発も撃ったが当たる気配無し。うーん……どうしたらいいのやら……

とか考えてると目の前にレーザーが迫っていた。間一髪で避けたと思ったが、考え過ぎて少し反応が遅れたらしい。軽く肩に当たった。あのマススタースパークでは無い様でそれに比べたら威力は低い様だがかなり痛い。

「……チツ！」

少しずつ俺を狙う精度が高くなってんのか？幾度も紙一重で避けることが増えてきた。まずいな……

「……ああ！すばしっこい奴だぜ！」

一体どんな反射神経してんだ？さつきから全力で弾幕を放ってるのに当たる気がしない。何発か掠ってる様だが決定打に欠ける。少し疲れが来始めたぜ……早く決着をつけないとな！

「……っ！」

銃弾が頬すぐ近くを通った!? あんなどころからか!? 少しずつ狙いが定まってきた。よく撃てるな、あの体勢で。私だってその場に留まっているわけでは無いのだが……

あれからどのぐらい経った? 未だに勇人は避け続けている。時折、撃ってるから注意しなければならぬ。と、考えてたら、勇人の前に弾幕が着弾して砂煙が舞う。動きが止まった! 逃すか! 一気に集中砲火をする。凄まじい轟音が鳴り、爆風によつて勇人が吹き飛ばされた。これで最後だな。

「喰らえー! マスタースパークー!」

今、あいつは態勢を立て直すので精一杯だ、避けられないに決まっている!

避けられないはずだった、だが、あいつは避けた。あの体勢で。無理なはずなのにと思っていたが、腕に糸が見えた。ああ、糸で引つ張られて避けたのか……それに気づいた時には既に勇人が銃口をこちらに向けていた。避けないと……!

左に避けようとする。が、まるでそうなると思つてたかの様に銃弾は私が避けようとした方向に飛んできた。何発撃った? だが、全て当たつ……た。

「勝者! 勇人!」

「よしっ! とりまー勝!」

「大丈夫？ 魔理沙？」

「んあ？ 大丈夫だぜ……アリス」

「そう……あの勇人って人、やっぱり強いわね」

「ああ……」

「しようがないわよ、流石に4連戦はきついわ」

「ハハ……そうだな」

「負けた……のか？ はあ……よく見たらまだ勇人はピンピンしてやがる。次の試合の温存していた様だ……手加減されてたのかな……？ まだ、勇人ってこういう経験って少ないはずだよな……紫があいつは才能あるって言ってたが本当だな。その辺霊夢にそっくりだな……あー、悔しい！」

「よーし！ 次もかかってきなさい！」

「次は私よ」

「……えつと？」

「アリス。アリス・マーガトロイドよ。噂は聞いてるわ、碓氷勇人よね？」

「え？ まあ……そうです。よろしく、アリスさん」

「ええ」

……どうしようか。相手は知らない人か。どんな感じなのだろうか。今の所は名前しか分からないからなあ……

「始め！」

最初は様子見で！

「……………!?!」

に、人形？それもまあまあな数。可愛らしい人形であるが、それぞれにスピアや剣をもたせてるあたり物騒だ。もしかして、全部操作するわけじゃ無いよな？

全部操作する様だ。あつという間に囲まれてしまった……

「これで終わりじゃ無いわよね？先生？」

「先生って……生徒じゃないでしょうに」

「いいじゃない、ほらここからどうする？」

彼の名前は結構知れ渡っている。私も魔理沙や里の人達を通して既に知っていた。相手が私を知っているわけでは無さそうだけど。

魔理沙曰く、

「霊夢に似た様な奴」

だそうだが、全然似てないと思う。あつちは毎日ダラダラしていてまともに巫女とし

ての仕事をしてるのは数えられる程しか見たことがない。それに対してこっちは教師という役職についてしつかりと仕事をしている。里の子供達に聞いたが、彼の授業は分かりやすいそうだ。あとは、レミリアを倒したとか、妖夢と一騎打ちで勝ったとか戦いの面でも評価が高い。

ただ、はつきり言って本当に強いのが分からない。頭は切れるのだろうか純粋な力が本当に強いのかと疑問に思う。だから、これを機に確認したいわ。という訳で、一斉攻撃。

「……っ!？」

「ふふ……」

さて、どうするかしら？彼のお得意の糸はまだ使っていない。

「……はっー!」

彼が声を出すと同時に周りの人形が全て吹き飛んだ。ふーん……霊力を衝撃波にしたのね……

「撃ち抜かせて貰うぜー!」

あれが噂の銃……霊力を銃弾にしてるのよね。

と思ったら、乾いた音と同時に1つの人形の腹に小さな穴が空いた。あ、危なかったわ……相当速いわね。銃弾が飛んできた方の穴は小さいが貫通した後の方の穴は大き

くなってるってことは相当回転もしてるのね。殺傷能力も十分と……

もう、これくらいでいいかしらね。彼のことはある程度分かったし。霊夢よりは弱いと思うわね。やっぱり、頭でつかちかしら？

「……なあ、手加減してるだろ？」

「あら、どうしてそんなことを？」

「わざわざ間を持つて攻撃してくるとか普通しないだろ？それだけ自信あんのか？」

「どうかしらね……」

な、なかなか鋭いじゃない。ま、まあ、もう手加減はしてあげないけどね！

「……今本気出すのかよ」

人形による攻撃を止め処なく続ける。うまくさばいてる様に見えるけど、必死に作戦を考えてるのでしようね。攻撃に転ずる気配を見せない。

と1つの人形が彼の足を掬った。態勢を崩したわね。畳み掛けてしましましょう。

一斉に彼に攻撃する。が、その攻撃した時の音はとても人に攻撃したとは思えない固いもの同士をぶつけた高い音が鳴った。

ど、どういうことかしら？よく見ると、人形達が持っている武器全てが壊れてた。まるで固いものを殴って壊したかのように。対して勇人は態勢を崩しかけた姿勢のまままだ崩しかけた姿勢のまま？あんな態勢取れる訳ないでしょ？こける途中の姿勢を止められ

ない様に、態勢を崩す途中で止めることなんてできるわけがない。でも、彼は止まっている。宙にたからされたかのように。

はっ！こ、これが彼の……『能力』……！

で、でも、あの人形全てに火薬が入っている爆破すれば……ん？勇人は何をしているの？試験管なんか持って……なんなのあの赤い液体は……銃口に流し込んで……撃つてくる!?爆破させるしかないわね！

彼は天に向かって銃を撃つ。な、何がしたいの？とりあえず、爆破……を……？爆破でき……ない……？いや、爆発音はしたはず……でも、人形の様子は全く変わらない。あれ？

「あれ？と思っただろ？」

「ふえ？」

え？…いつの間にも!?額に銃を突きつけられる。

「チエツクメイトだ、そもそもお前も動けんがな」

「え？あ……」

動けない……！な、何をしたの？厳密に言うとなんか動かない。柔らかいはずなのに鋼鉄の様に硬くなってる？

「降参だろ？」

「……っ、分かったわ、降参よ。……何したのよ？」

「服をよく見ろ」

え？服をよく見ろ？あ……霧状のものを被ったかの様に赤い液体が付着して……人形達も同じ様だ。こ、これが噂の『不変にする程度の能力』なの？

「あちゃー……アリスも負けたか」

「ご、ごめんなさい」

「まあ、霊夢がいるしもう勝つだろう」

「そ、そうね」

もしかして、彼もまだ本気を出したことが無いんじゃないやあ……

第50話 決勝戦（博麗チーム）の日の青年（中編）

「……はあ、やつと2人か」

なかなか体力がきつくなってきた。2連戦でもこの疲労。あと半分持つのか？

「次は私ね」

——紅いリボン、紅白を基調とした衣装、その衣装はなぜか脇の部分は開いており、袖がどうくつついてるのか分からない。そして、手にはお祓い棒を持った巫女——博麗霊夢が次の相手だ。

「お手柔らかに頼みますよ？」

「女の子にそういう要求するの？」

普通の女の子ににならない。普通の女の子にはな。だが、目の前に立つ巫女さんはこのカオスな幻想郷でもパワーバランスを保つ存在、数々の異変を解決もしている。どこに“普通”という要素があるのやら……

「ふう……」

今は集中だ。周りの人達の歓声やざわめきが少しずつつ聞こえなくなる。今は目の前に立つ霊夢だけを見据える。

「なあ、今回やけに霊夢やる気あるんじゃない？」

「ああ、優勝したあかつきには大金が手に入ると言ってるからね」

「現金なやつだぜ」

「むしろ、やる気が無くては困るよ。私だって今回の戦いには興味があるんだから」

「むう……そうなのかぜ」

「さて、次の試合はどう思いますか？紫さん」

「さあ、私にも分からないわ。でも、面白くなることだけは確かだね」

うーん……この娘はよく分からない。臨戦態勢をとってるのは分かる。が、どこか違

和感を感じる。なんていうのか……この娘には闘志とか敵意とかいうのを全く感じない。いつも通りの自然体なのだ。どんな人でも戦う時は殺意やら敵意やらを持つのだが、霊夢からは一切感じない。むしろ、無気力にも見える。

「……めっ！」

んあ？なんか聞こえた……

「ぼーつとしてる場合？」

やべっ！考え過ぎた！

が、気づいた時にはもう遅かった様だ。霊夢が術を発動したことに反応が遅れた。

「神技『八方鬼縛陣』」

うっ……う、動けない……雁字絡めに拘束されて微動だにできない。ああ……やっちゃまった。集中したのが仇になるとは……やはり、その辺は流石に見逃さずに拘束、確実に倒しにきてるな。

「寶貝『陰陽鬼神玉』」

と宣言すると同時に詠唱を始める。霊夢の上に巨大な陰陽玉が生成され始めた。成る程、動けない間にため系の大技で確実にと……やるじゃない（震え声）

あの技は本来は隙の大きい技だろう。多分、弾速も速くないはず。とは言っても、今は身動き一つできやしない。まさに八方ふさがり、どうしようもないな。まさに将棋で

いう、王将のみの状態。完全に詰みだろう。

ま、普通の王将ならな。なら、その王将が全ての方向に無限に進めるなら？どこにでも自由に動けるなら？それなら、少しは勝機があるはずだよな？俺は普通の王将でいるつもりはない。

霊夢が詠唱を終えた様だ。見ればこれまで見た弾幕の中で比べようがない程の巨大な陰陽玉が投擲された。はたから見ればほぼ絶望的。だが、打開策が俺にはある。タイミングさえ合えば絶対に打開できる……！

目の前に陰陽玉が迫る。5メートル……4メートル……3メートル……2メートル……1メートル！

「カアッ！」

「!？」

迫る陰陽玉を勇人は凝視する。

ドゴーン！

「おお！これは勝ったのぜ！」

「あら、意外とあっさりね」

「……まだよ」

「は？何を言ってる……」

魔理沙は慌てた。なぜなら、目の前には全くもって無傷の勇人がいたからだ。

「お、おかしいぜ！あいつは拘束されて微動だにできないし、糸も仕掛けてない！能力だって、どこにも血をつけてないはずだぜ！」

「ねえ、必ず”血”をつけないとダメなのかしら？」

「え？あいつはそうだっていつてたし、実際に今まで能力を発動する時は必ず血をつけてたぜ」

「ど、どういうことなのでしょう？紫さん！」

「そうねえ……よく分からないけど彼も成長したってことじゃないかしら？」

「貴方の半径1メートルぐらいに何か発動させてるのかしら？」

「ご名答、ホント勘が鋭いですね」

「勘も何も、貴方の周りの地面だけなんでも無いならそう疑うでしょ？」

「まあ、そうだな」

「能力なのかしら？」

「そうだ」

”血”は必要無いのかしら？」

「俺も少しは成長したんでな……俺の半径1メートルぐらいまでなら空間ごと『不変化』できる。その空間では俺の許可したものが不変化され、それ以外は消滅、外部からの干渉は不可、物理的にも精神的にもだ（もつとも、せいぜい2秒ぐらいしかこの空間を生み出せないがな）」

「ふーん……でも、長続きがするわけでは無いのかしら？」

「……さあ」

「表情が変わらないわね」

先程の空間で拘束していた『八方鬼縛陣』は消滅している。つまり、動ける。そして、懐から二丁の自動拳銃を取り出し霊夢に向ける。

そして、銃に許容の限界まで霊力を込める。これにより、グレネードランチャーの如くの威力をもつ弾幕を高速で放てる。

だからと言って霊夢も突っ立てる程馬鹿じゃない。持ち前の勘で危機を感じ取ったのか結界を咄嗟に作り出す。

それに構わず、霊夢に狙いを定め……

ドンッ！ドンッ！

今までの乾いた軽い音では無く、野太い音が鳴る。それだけの威力を持っているのだ。無論、勇人にも反動があるわけ

「……………くうー！」

腕に相当きたのだろうか、震えている。

撃ち出された、弾幕は高速に飛んでいき、それでもって高速回転もしている。1発目が当たるといとも容易く、境界は破壊され、もう1発の弾幕が霊夢に目掛けて飛んでいき……………

ドゴーン！

強烈な轟音とともに霊夢に直撃した。

「おいおい……………あの弾幕相当強力じゃないか……………人に着実性が大事とか言つといて……………」

「あ、あいつ、そ、相当な霊力持つてるんじゃないの？」

「おーつと！これは決着がついたのでしようか!？」

「能力だけじゃないのね……………成長したのは」

「これは勇者さんの勝利でしょうか？どう思います、紫さん？」

「そうねえ……………確かに勇者は成長したけど……………」

「そう言うのと、視線をある所に向ける。そこには……………」

「あつ！」

「!？」

傷一つ付いていない霊夢がいた。その姿は半透明になっている。

「おお！そうだったぜ！霊夢には『夢想天生』があつたのぜ！」

「にしても、相変わらず勇人の顔は変わらないわね。焦ってもいない」

「ホントだぜ」

「……冗談だろ？」

当の本人は相当驚いている。が、いたって頭は冷静だ。

「ね？伊達に博麗の巫女をやつてないわよ、あの娘は」

「さ、流石ですッ！」

「どうかしら？貴方が私に能力を教えてくださいましたから、一応貴方にも話すわ」

「そうかい、ありがたい話だ……」

「今の私は現世の理から完全に『浮いて』いるわ、すなわち、どんなことも無視してすり抜けられるのよ」

「ハハ……ほぼ無敵じゃねえか……」

「こつちもお金をかけてるからね、本気でいくわよ」

「さあ……どうするかしら？霊夢は貴方と同じように理から外れる者。貴方の場合は

『絶対』ということ、霊夢の場合は『浮く』事で外れる。どう対抗するかしら？』

「（無敵かよ……これじゃあ策も通じないんじゃないのか？……どうする？）」

悩む勇人に対して霊夢は再び詠唱を始める。すると、霊夢の背丈程の陰陽玉が無数に生み出され、勇人に目掛けて放たれる。

「おいおい！ シャレになんねえよ！」

遂に地上だけでは限界と感じたのか、勇人は空へと逃げる。膨大な量の弾幕を掻い潜るながら避ける。が、多過ぎる、多過ぎるのだ！

シュツ……

「……つくー！」

脚を掠ったようだ。掠っただけなのに鋭く熱い痛みが！ ふざけんじやあねえぜ！ つ一つ狙いが正確でこの量！ しかし、今は目を閉じて悠長に構えてやがる……つ！ つまり、チャンスでもあるんだな！

あの弾幕、常に放たれているわけでは無い！ 『切れ目』があるツ！ そこをつくしか無い！ そして、それは……

「今だ！」

勇人は陰陽玉を掠りながらも霊夢へ突っ込む。

「喰らえッ！」

先程と同等の威力の弾幕を撃つ。

ガッ！

「……は？」

だが、それは爆発も貫通する事もなかった。無論、霊夢もなんとも無い。放たれた弾丸は霊夢の手で掴まれていた。

「はああああ!!」

う、受け止めたあ!!あの弾丸は高速スピもしてんだぞ?それを素手で受け取れるのか!!ありえねえ!ありえねえ!

「お、あいつ動揺してるぜ」

「流石に素手でキャッチされたらねえ……」

「こりゃあ、珍しいぜ」

「は?は?な、ナンデ?!」

お、落ち着け!ま、まだ、敗北が決まったわけじゃ無い!冷静に!クレバーにいくんだッ!とりあえず、接近だ!話はそれからだ!

「来るわね」

勇人は向かって来るようね。動揺はしていたがすぐに平静を保ったようね。真っ直ぐ向かって来るようだが、必ず策があるわ。とは言っても、何も意味ないけど。どうせなら、肉弾戦に持ち込もうかしら。

「!?」

れ、霊夢も向かって来やがった……近距離に自信があんのか？だが、とりあえず、先手は俺がもらう！

「オラア！」

青く光る霊力を右腕に纏いながら、霊夢に殴りかかる。

スツ

「やっぱりか……」

空振りしたな……予想通りか……反撃がくるから下に降りて……

「!?」

ガアアン！

「あ、危ねえ！」

お、音も無く拳が来たぞ!?そ、それに、地面がこんなに抉れる程のパンチって……どこにそんな力があるんだよ！

霊夢は空振りしたもののすぐに次への攻撃をする。それに対し、勇人は避ける一方である。

「紫さん、勇人さんは避けるだけですが、それでも避けるのさえ一苦勞な感じがしますが
どういう事でしょう？」

「そうねえ……勇人って、攻撃を『読む』でしょ？つまりは相手の考えを『読む』という
事。それに対して霊夢はただ『勘』で攻撃してるのだから、読めないんでしょうね。だ
から、その場の反射で避けるしかない」

「……………ッ！……………くう！」

少しずつ限界が……………

「隙あり！」

「しまっ……………」

ベキィー！

「グガア……………」

か、辛うじてガードできたが……………なんだ？この威力は……………！痛みで気を失いそうだ。

ガツンッ！

重い衝撃が勇人の脳天を貫く。霊夢の踵が勇人の後頭部を捉えていた。

「ガッ……」

景色が歪む。平衡感覚が失われ、真っ直ぐ立てない。の、脳震盪起こしたか？

「よしっ！勇人に攻撃が入った！」

「流石にあれはきついわね……」

「先生——」

「勇人さん！」

「あ……ガッ……アアア……」

「まだよ？」

ドギヤツ！

「グフッ……！」

は、腹に……ち、力入れてなかった……こ、このままだと、意識が……飛ぶ……

そのまま、勇人は膝をつき……

「勝負あり、ね？その辺の妖怪よりは骨があったわ」

「ナイスだぜ！霊夢！」

「GUGAAAAAAA!」

「なっ!まだ立てるの……よ!」

「な、何してるん……だぜ!」

「せ、先生……」

周りかどよめく。なぜなら、勇人は自分自身の右手をナイフで突き刺していた!そして、わざわざナイフを動かして痛みを増幅させている!

「はあー、はあー……こうしてないとい、意識が飛ぶんでね……」

「頭がおかしくなったのかしら?」

「オラア!」

ナイフをで刺した右手で霊夢に殴りかかる。それを霊夢はかわさず、『搦んだ』。

「いい加減やめたら?それとも頭が狂っちゃったかしら?」

「ハハ……俺の頭は平常だ。なんなら、証明してやろうか?」

「あんたが弾丸を素手で受け止めれたのは、外部からの『エネルギー』を受けないからだ。だから、相当な運動エネルギーを持つ弾丸も簡単に受け止めれる。また、そのパワーは反作用を受けないからだ。もの同士の衝突には必ず作用と反作用があるが、あんたの都合はそれが無いからな、見た目以上のパワーを出せるわけだ」

「……そう、だから?」

「はっ、ということはあるな。あなたはほぼ無敵だな。その状態のあなたには敵わないよ」
「なら降参？」

「ハハハハ！降参？面白い冗談だな」

「やっぱり頭がおかしくなったわね」

「……別にその状態のあなたには勝てないだけであって、その状態では無いなら、十分に勝機がある」

「今、あなたは俺に触れている。あなたの方から触れている」

「だから？」

「あなたの手を見てみろよ」

「はあ？何を言ってる……!!」

ま、まさか、狙いは！

「ようやく気付いたようだが……もう遅い！」

「ああっ！」

「れ、霊夢の身体の色が……」

半透明だった霊夢の色が元に戻る……それはすなわち『夢想天生』が解除されたことを示す。

『外部』からの干渉は不可能だ。だが、『あなた』の方から触ったからなら、『あなた』の

方から『血』に触れたからな！」

「それにツ！ここでいう『外部』とは理の事！俺の能力は理から外れている。つまり、あんなと同じ土俵ということ！だから、俺の能力はあんに干渉できるツ！」

「な、な！」

「そして！あんたが理から浮いている存在なのなら、無理矢理その逆である存在に引つ張ればいいーつまり、あんたが『理にある存在』であることを不変化すればいい。今、あんたは理から浮いた存在では無い」

「な、何を……！」

「次にあんたは『それでも今のおんに負ける気はしないわ！』と言うー！」

「それでも今のおんに負ける気はしないわ！……はっ！」

「分かんねーのか？既にあんたは俺の術中なんだぜツ！」

「う、動けない？服には血がついていないはずよ？」

「忘れたか？半径1メートルは血が無くても不変化できるつてもつとも時間がかかり伸びたがな」

「くっ……」

「それでも限界なんでな！これで終わらせる！」

掴まれた右手から大量の靈力を流し込む！

ビリビリッ！

「キャアア！」

霊夢はプスプスと煙を出しながら倒れる。

「流石にここまででは勘が回らなかつたようだな……策士っていうのはどんな時でも常に策を練ってるんだぜ……」

第51話 決勝戦（博麗チーム）の日の青年（後編）

「はあ……はあ……」

れ、霊夢をなんとか倒せた……が、はつきり言ってもう限界が近い。しかし、次の相手は伊吹萃香。ただでさえ、鬼という規格外の力を持つ相手である。その上、『山の四天王』とまで言われ恐れられた存在だ。もう、勝てる要素が無いんじゃないか？生徒に申し訳ないがもう無理だ。

「おっと……」

足元もふらふらだ。霊夢の攻撃が相当きている。特に踵落としがきいていて未だにグワングワンしていて気持ち悪い。吐きそう……

「いや、さっきの戦いは素晴らしかったよ」

「ど、どうも……」

「もう限界だろ？」

「そう……ですね」

「しかしなあ、私もねさっきの戦いでさ、あんたともっと戦いたくなっただよ」

「も、もう無理……」

「見たら分かるよ。立っているので精一杯だろ？流石に満身創痕の者を痛めつける趣味は持っていない」

「な、なら降参して……も……いい……だろ……？」

「残念ながら降参は受け入れれない」

「な、何言ってるんだ……？」

「そこでだ！この永琳特製の薬をやる。それを飲めばどんな傷でも1発で治り疲労もぶっ飛ぶってやつだ」

「い、いや、休みたい……」

「ほら飲め」

「ちよ……」

どうにか薬を飲むのを避けようとするが、相手は鬼。パワーでは勝てないわけで……

「ほら、水が無いな……酒でいいか」

「ゴボツ！……ゴクン……ゲホツゲホツ！」

「よし！これで治ったろ？」

「冗談じゃねえぞ！」

「うんうん、効果はバツチリのようだ」

確かに身体が軽くなって痛みも消えたがそういう問題じゃ無いんだ……肉体的な疲

勞じゃなくて、精神的にもうキツイんだよ！

「よし、それじゃあ早速始めようか……！」

「ああ！もう！ならやってやろうじゃないか!!」

お！やる気になったかな？ヤケクソに近いようだがむしろそっちの方が都合がいい。さあ、どんな風に乗しませてくれるかな？

と思ったが別にヤケクソでは無いようだ。演技か？あいつの足が一步下がる。鬼を騙すのはまだ百万年は早いッ！

「さあ、いくぞー！」

「弾痕『バレットトホウル』！」

こちらから向かうとすぐに弾幕を張った。避けるが、弾幕は向きを変えてこちらへ向かってくる。成る程、自動追尾か。

肝心の勇人は背を向けて距離を取ろうとしている。

面白いね……大技でも繰り出す気かい？でもね……

「こんな弱つちい弾幕、私には効かないよー！」

追跡してくる弾幕を私が霧へと変化することでかわす。弾幕同士ぶつかって爆ぜる。そして、私はあいつの真上で再び実体化。

「なっ……！」

「酔夢『施餓鬼縛りの術』！」

空中で驚く勇人に向けて一気に鎖を伸ばし、投げつける。

「!？」

すぐさまガード態勢をとる勇人だが、狙いは攻撃じゃ無いんだよ。

「うおっ!？」

鎖は勇人の右腕に絡みつき、ゴキリと鈍い音と共に右腕を縛り上げる。

「……………くっ!」

そのまま、勢いに任せて勇人ごと鎖を振り回そうとする。勇人も力を込めて対抗しようとするが、鬼が力勝負で人間に負けるわけがない。勇人を地面に叩きつける。

「グガア……………くっ!」

叩きつけられながらもまだ私の姿を捉えている。腕に力を込め始めたようだ。

「残念ながら『施餓鬼縛りの術』は霊力吸収の効果があつてね、お得意の霊力の流し込みはできないよ」

今の攻撃で右腕を潰した。さらに霊力もある程度奪われた。さてさてこっからどうくるのかい？

「鬼符『ミッシングパワー』！」

そう言うと同時に私の体は巨大化する。周りの被害も考えてそこまで巨大化できな

いが十分だ。

握った拳は勇人の背丈に匹敵しそうなくらいだ。

「さあ！どうする!?このまま潰れてしまいかーあ！」

その拳を振り上げ、振り下ろし、勇人の目の前まで迫る瞬間、俯いていた勇人の顔が上がり、目を見開いた瞬間

ガゴーン！

その拳は勇人にぶつかるとは無かった。拳は勇人の一メートル程目の前で止まっていた。まるで壁ができたかのように。

「ガアアア！」

反作用によつて右手が……！こ、このぐらいなら、すぐに直せる！

「こつちを見ろーッ！」

勇人がこちらに銃を向け、既に引き金が引かれていた。そのまま、弾丸は眉間にめり込み……

「目閉じないと知らないぜ」

ピカア！

目の前が光一色に……！

「ぐう……！」

何も見えないッ！くそッ！どうにか霧に変化して、飛んできているだろう弾幕をかわす。鬼が一方的にやれているとわねえ……でも、流石にメンツというのがあるからな！未だに霞む目を無理矢理見開いて、勇人の姿を捉える。その辺だな、そして、口に酒を含み……

ボワッ！

辺り一面が炎の海に包まれる。避けれる場所など無い。

姿を元に戻す。辺り一面、焦げてしまっている。

「いやあ、流石だね」

一箇所全く燃えた形跡が無い。そこには服が宙に浮いており、そこからどこも火傷した形跡無い勇人が現れる。

「人間がここまで楽しませてくれたのは霊夢以来か？」

問いかけてみるが全く反応しない。何か仕掛けてるのか？

と、その時、勇人はポケットから素早く銃を取り出し連続で撃つ。

「危なっ！」

間一髪で霧に変化し、弾丸を避ける。不意打ちとは、そういうのは好きじゃないね。

霧の状態のまま、弾幕を放つ。霧の状態では向こうからは全く攻撃ができない。

兎に角逃げ回る勇人。何か策でもあるのかい？

「また、『糸』を張っているな？残念ながら既に切らしてもらったよ」

腕と足元を確認する勇人、糸が切れることに気づいたらしい、驚いた顔をする。

「何度も同じ手は喰らわないさー！」

逃げ惑うだけか？もう終わりか？と、懐から何やら試験管みたいなものを取り出す。

また、同じ手でも使う気か？

「グビツ……」

「は、はああ!?!」

あ、あいつ、血を血を……飲みやがった!?!な、何を考えたんだ？すると、勇人は上空にいき、口に入れた血を私がいる霧に向けて吹き出した！な、何を考え……て……！

「喰らえ！」

ま、まさか！狙いは！

ボツ……バグオオオオオン！

「ふう……流石に今のは効いただろ。元々『血』って霊力を流しやすいからな。それを霧状にして、ばら撒いて霊力による爆発を行えば一気に粉塵爆発が起きるわけよ。さらにあんたは、霧状になっていて広範囲に存在しているが故に全ての爆発を受けてしまう。ひとたまりも無いよな」

鬼であつてもきついだらう。これで終わりか？と思つていたら、目の前に霧が集まり萃香が実体として出てきた。その姿はポロポロである。が、その間に宿る闘争心は全く衰えるどころかむしろ増したようだ。

「流石鬼つて言つたところ……」

頭に鋭い衝撃が駆け抜ける。

「ゴフツ……」

なんとか踏み止まる。額に痛みが走る。そして、生暖かい感触が……血がながれている。

萃香の方を見ると手には鎖が伸びていた。

普段なら反撃に転じただろう。だが、それができない。動くこともできない。策を弄することすらできない。

萃香は睨むのみ。

それなのに俺は何もできない。

膝が笑う。歯が噛み合わない。何もされていらないはずなのに貼り付けられたかのようには動けない。

ま、まさか、今、俺は『恐怖』してるのか？俺がか？

「ふ……今、あんた、『恐怖』しているな」

「何を言ってるやがる……」

「別に恥ずかじがることは無いさ。今の人間が忘れてしまった鬼に対する『恐怖』を思い出したただけだよ。弱き者が強き者を恐れる、当たり前のことだろう？」

「……俺は弱者と発言したいのか？」

「別にそうは言っていないさ、でも、そう思うのならそうなんじゃないの？」

今、勇人は精神的に追い詰められているな……やはり、男。自尊心が高くそして脆い。

「どうするまだ続けるか？」

「……ふっ」

笑った？なんで笑う？

「続けるに決まってるだろ？」

「男がおとなしく女に降参するわけねえーだろ！」

「はは！そうでなくちゃ面白くない！」

「今度は拳でいく！」

「ああ！来いッ！」

「オラア！」

いいねえ！その目！その勢い！その拳！今まで冷静だった勇人がここまで闘争心を剥き出しにするとは！

真っ直ぐ額を狙ってくる！

私は動かない。笑みを崩さず立つ。

ガンッ！

硬質的な音が響く。

私は首を少し捻っただけだ。それで角で勇人の拳を受け止める。

「今度はこつちがいくぞ！」

身体を少し捻り、右拳に力を込める。

「ハアアアア！」

ホゴオ！

右拳が勇人の腹部を捉える。痛みで身体を折る勇人の顔に右拳を入れる。
ベギイツ!

人間とは比べ物にならない衝撃が2発勇人を貫く。

そのまま、勇人の身体は宙を浮き、背中から落下する。

血飛沫を撒き散らし、動かなくなる。そこにあるのは沈黙。

「なかなか面白かったよ、勇人」

そう言い、勇人に背中を向けて立ち去ろうとする。

「……まだ立てるのか?」

これはたまげた。まだ立てるとは。

「もう限界だ……ろう?」

目の前に勇人の拳が迫る。まだ、こんなに動けたのか!?

「このぐらいなら避けれる!」

だが、拳はこちらまでこなかった。振り下ろされた拳は私の目の前で広げられていた。

何がしたい? そう聞こうと思った時違和感に気づいた。

付近の蝶が止まっている。空中で。空気の動きを感じない。

いや、私も動かない!? 私がいる一帯が動いていない!?

「!? いかん！今すぐ勇人を止めろ！」

「ど、どうしたんでしよう？」

周りがざわつき始める。何かが起こっているのか？

「!?」

お、おい！蝶がき、消え始めてる!?よく見たら、一帯が色が薄くなってる!?

ブシユツ!

勇人を見ると目や鼻から血が流れている。その目に光は無い。右腕から血が吹き出す。

あ、動ける！色も元どおりに！

バタツ

勇人が倒れたようだ。何が起こった？

「萃香！大丈夫か!？」

「あ、ああ、何があつたんだ？紫？」

「勇人の能力を知ってるわよね？」

「ああ、知ってるさ」

「その能力なんだけど……必ずしも『存在』させるわけでは無いのよ」
「は？」

「『滅びる』事も不変にできるのよ……」

「は、はああ!?わ、私はさつき……」

「あの一帯ごと滅びかかってたわ」

な、なんだと……!?な、なぜそんなことに？

「どうする?場合によつてはあの子……」

「……そうじゃな、今のを見るに気を失ってから発動しておる。無意識に発動したのじゃろう。それにあれを発動した時に身体が追いついて無くて身体がボロボロになった。まだ、安全だと思いが……」

「成長次第では脅威になるわよ」

「じゃが、使いこなせる場合もある」

「危険と判断した時は容赦なしよ？」

「分かってる……」

「萃香」

「ひゃい！」

「この事は他の人に伝えないでね？」

「あ、ああ」

「……………うう、いだつ」

「あ、先生起きた！」

「ああ……………俺、寝てたか？」

「ああ、もう日付が変わってしまったぞ」

「あちやー……………すみません、負けちゃいましたね」

「謝ることは無い、元々生徒たちの希望だ」

「大丈夫？」

「多分、大丈夫」
「大丈夫じゃないわ」
「ア、ハイ」

「紫の都合のいい結界が無かったら死んでたわよ」

「そんなにひどかったんですか？」

「萃香の殴打で内臓損傷と肋骨や頬骨を骨折、右腕に至っては内側からグチャグチャよ」

「……………oh」

「まあ、この薬飲んだらすぐ治るわ。死ぬ程の痛みを味わう事になるけど」

「ゆっくり治療します……」

「ああ、そうしてくれ」

「すみません……復帰したばかりなのにまた慧音さんに負担がかかって」

「気にすることは無い、それよりも後の娘達に無事を伝えてくれ」

「……? はい……」

「それじゃあ、お大事に」

「バイバイ、先生」

「じゃあ」

本当に慧音さんには申し訳ない……早く治さなければ。そのために、今は寝よう……

「「勇人さん!」」

物凄い勢いでドアが開いた。なんだ? びっくりしたじゃないか。永琳さんまでビクッとしたぞ。

「お怪我は大丈夫ですか!」

「永琳さんには何もされてませんか!」

「あ……大丈夫、安静にしとけば治る」

物凄い形相で迫ってくるあたり、少々恐怖を覚える。別に危篤では無かろうに。

「あまり動かさないでね、まあまあひどいから」

「私が看護をします！」

「いえ、私が！」

「今は寝かせてくれ……」

尚、優勝した博麗チームには大量のお酒が渡されたそうなの。

第6章 マッドな医者と事件と

第52話 生活改善の日の青年

1人の青年が立っている。

背は170は超えているだろう。ボロボロな着流しを着ているあたり、貧しい様子がある。うかがえる。

その青年の前には複数の妖怪。知能が低いのだろう。ただ唸り、睨み、獲物を捕らえんと今にも飛びかかりそうである。

青年は動かない。ただ、突っ立っている。それだけ。それは、恐怖によるものだろうか。何か理由があるのだろうか。危険な事には変わりはないが。

一匹の妖怪が青年に飛びつく。それを皮切りに他の妖怪も飛びかかる。涎を撒き散らし、ただ本能のまま飛びつく。

それでも、青年は動かない。

それを御構い無しに妖怪は飛びつき、青年に襲いかかる――

1人の青年が立っている。

周りにはたくさん妖怪が倒れている。青年は動いていない。少し時間が経つと、青年は笑う。

「今日も大量……次は……」

「頭痛い……」

「病気ですか？それなら、永遠亭に」

「そういう意味での頭痛じゃない……」

その日、俺は幻想郷生活を始めて以来もつとも悩ましい事を抱えていた。

生きていく上で健康は確かに大事である。どんなに頭が良く天才であろうが、どんなに運動神経が良からうが、病気にかかってしまつて、挙げ句の果てに死んでしまつては

全くもって意味を成さない。

さらに健康を維持していく上で生活は大切になってくる。まあ、俺は生活能力が高いとは言い難い。しかし、独り暮らしを始めていくうちに慣れ、家事もすっかりこなせるようになっていく。

ただ、『慣れ』とは恐ろしいものですぐに面倒となつてしまい、段々疎かになつてしまった。さらに、寺子屋に参加したいと言う人が増え、嬉しい事に仕事が大幅に増えた。寺子屋で捌きれなくなり、ついには家にまで仕事を持ち込んでやるようになってしまった。一度やり始めると最後までやりたいと言う性により、意地になつて仕事をするようになった。

その結果、生活リズムは当然ながら崩れた。まともに飯を食わず、睡眠時間を削ると言うもはや、最終手段まで取るようになり、部屋は荒れ、俺も荒れると言うダメ人間になつていった。

もちろん、そんな生活が長続きするはずも無く、1週間続けたところで倒れてしまつた。

あの時、早苗が来てくれなかつたら本当に危なかつた……結局、また永琳さんのお世話になり生活についてご指摘を貰い、とりあえず1日入院して、妖夢や慧音さんが見舞いに来たり、なんやかんやあつたりで退院した。

今回ばかりは完全に俺のせいであろう。これを反省し、きちんとして生活をしていこうと早苗や妖夢に家事のコツを聞こうとした。

それで、2人とも家に来てくれた。ここまではまだいい。俺が頼んだからなら、2人の指摘やアドバイスに反論する気はさらさら無い。

だかな……

「俺の家ですつと家事をしてもらう訳にはいかんだろ」

流石にこれはダメだと思う。

これからは私達が交代で勇人さんのところでの家事をします！

——俺に家事を覚えてくれるために来てくれた2人の最終的な考えである。

確かに今回の事は完全に俺が悪いし、教えて貰った後、長続きするかどうかは分からない。だから、2人が家事をする。確かに理に適っているだろう。

しかし、俺にもプライドはある。2人に家事を任せきってしまうダメ男にはなりたくない。

「別にそんな事をせずにコツだけを教えてくれればいいのだが……」

「いえ、コツを教えるだけではすぐに怠けて、同じ事が起こる未来が見えます」

「そ、そんな事は無い……と思うぞ？それに、お前達も忙しいだろ？」

「大丈夫です、その旨を伝えましたら、師匠が白玉楼の家事をしてくださると」

「私も神奈子様と諏訪子様に伝えたら大丈夫と」

「……………」

何が大丈夫なんだよ……俺はダメ男にはなりたく無い。2人とも家事のスキルが高
いから尚更ダメ男になりそうだ……。

「や、やっぱり、俺が頑張るからさ……教えるだけで？」

「ダメです」

「……………」

「お、お前達に利があるとはとても思えないのだが…………？」

「勇人さんと一緒にいられるだけで十分です」

「……………どうしてもか？」

「くどいですよ」

逃げ場なんて無かった、いいね？

「それでは明日からやらせてもらいます」

「私は明後日なのでよろしくお願いしますね」

こうして、ダメ男への階段を登る事になるのだった……

「おはようございます、起きてください」

「今日は寺子屋無いから、まだ寝る……」

「朝ですよ？起きてください」

「もう少し……」

「……………!!ん!!ん!!」

「あ、やっと起きましたね？」

「プハツ……ハアハア……鼻と口を塞がないでくれよ……」

「起きない方が悪いんです、朝ごはん出来てますよ」

「ああ、ありがと。とりあえず顔を洗ってくる」

「あれ？勇人さん、眼鏡なんですか？」

「いつもはコンタクトなんだが、休日基本的には眼鏡だ」

（き、貴重な眼鏡姿……！しゃ、写真撮りたいです）

「なあ、今変な事考えてないか？」

「い、いえー！」

「そうか、ところで朝ごはんは？」

「はい、味噌汁と焼き魚とご飯です」

「おお、美味しそうだ」

実際、食べると味噌汁は丁度いい濃さで、魚も塩加減が絶妙である。それにご飯は少し硬めで炊いていて俺好みだ。久々に早苗の料理を食べたがやはり上手だ。

「美味しい……」

「ありがとうございます」

「これだけ料理が上手いとお嫁にいつでも問題無いんだろうな」

「そうですね、いつでも勇人さんのお嫁さんになれますよ」

「……………」

「えつと……」

只今、勇人さんは買いたいものがあると行って、里に行つて留守の間に洗濯しよう思っているのですが……

「こ、これは……／＼／」

少々問題が……し、下着なんです……う、上は問題無いんです。勇人さんはいつもアンダーシャツを着てますし。ただ……ぱ、パンツは……

「さ、さっさと洗濯してしましましょう！」

邪な事を考えてはいけません！邪念退散邪念退散邪念退散……あ、アンダーシャツです。ゆ、勇人さんののに、匂いが……

「……………」

はっ！わ、私は何を？せ、洗濯してしましましょう！そういえば、幻想郷で洗濯機を見るとは思いませんでしたね。どうやって動いてるか聞いたら霊力だそうです。流石、河童の技術です！

さて、洗濯機に入れてしまいましたし、今度は部屋の掃除をしましょう。

「~~~~~~~~~~」

先程の洗濯機もそうですがこの掃除機もとても便利ですよね！こんな便利な道具を持つていながらどうして面倒になるのでしょうか？

そういうば、諏訪子様が

「ベッドの下を見るといいよ、ベッドの下にはね……勇人の秘密があるはずだから……」
 と言っていました。なんででしょうかね、秘密とは。しかし、勝手に秘密を覗くのは良く

無いですよね。

「……………」

き、気になってしまいましたね……ダメです！秘密を探るなんて……

「……………」

わ、私、気になります！す、少しだけ……

「……………あ、ありました」

何でしょうか、これは雑誌？

ガラガラ

「ただいま」

ジュー

「はっ！」

「ゆ、勇人さんこれは？」

「あ、ああ……それは……」

「自動車雑誌だよ、最近見ないなと思ったらそんなところにあつたのか」

「勇人さん、車が好きなんですか？」

「まあな」

「これが勇人さんの秘密……？」

「ん？なんか言ったか？」

「い、いえ！何でも無いです！」

「そうか、そういえば途中で野菜分けて貰ったんだが……」

「そうですか、それじゃあ夕飯に使いましょう」

「ああ、早苗が作る料理は美味しいから楽しみだ」

「ウフフ……それじゃあお腹空かせて待つてくださいいね」

「ああ」

「これは……側から見たら完全に新婚さんですよね……」

カー／＼／

「ゆ、勇人さんと結婚したらこんな感じなんですね、キャー／＼」

Next day

「ふあ〜……」

「おはようございます、勇人さん」

「おわっ！いい、いたのか」

「はい、起こそうとしたのですが……」

「今日は仕事があるからな」

「そうですか……（寝顔を見たかったのに……）」

「？」

「朝ごはんはおにぎりと豚汁か」

「やっぱり、美味しい……俺が作ってもこんなに美味しくならないのになあ。隠し味とかあるのか？」

「隠し味ですか……」

「あ、愛情……」 ボソツ

「ん？」

「ひ、秘密です！」

「おう……」

「よし、それじゃあ 行ってきます」

「はい、行ってらっしゃい」

「はあ……ついてないです」

早苗さんは勇人が休日の時だったのに私は仕事の時ですか……勇人さんといたかつたのに……

「ただいま……」

「おかえりなさい」

「勇人さん、すごく疲れているみたいです。何かできないでしょうか……」

「……………」

「……………」

「モグモグ……」

「食事も黙ったまま……何か話題を……」

「……………」

「……………」

「もう少し仕事があるから、帰っていいよ」

「……………はい」

「これで丸つけは終了……」

丸つけは終了。”丸つけ”は。次は宿題を作らなきゃならん。幻想郷にドリルや問題集が無ければ、コピー機も無い。全部手書きだ。担任は妖怪達のクラスだが、和算の授業には人間のクラスにも出る。さらに最近は寺子屋に参加する人が増えたので尚更量が増える。そのせいで満身創痍なんだが。

「喉が渴いたな……」

と周りを見渡すとベッドが目に入る。

「……………」

だめだ……ベッドが目に入った途端睡魔が。しかし、宿題を作らなければ。

ああ、暖かいベッド……

何を甘えてるんだ！俺にはやるべき事が！

「よし、やってやんぜー！」

自分で自分を奮い立たせる。

「の前にコーヒー淹れるか」

そして、このザマである。

「勇人さん、お茶を……」

「よ、妖夢!？」

あれ? 帰ってなかったのか?

「どうしてここに……」

「だから、お茶を持ってきました」

「大丈夫だよ、悪いけどコーヒーが飲みたくて」

「いえ! お茶には疲労回復効果があるのでそのコーヒーと言うものよりは最適です!」

「あ、ああ……」

とりあえず、お茶を啜る。程よい熱さが胸に染みる。

「ふう……ありがと」

「いえ、肩を揉みましようか?」

「いや、そこまでしなくても」

「遠慮なさずに」

「ね、眠いだろ?」

「眠そうに見えますか?」

「……………」

「決まりですね、前を向いてください」

「ああ……」

お茶を飲む俺の肩に妖夢の指が食い込む。

「かなりカチカチですよ？そこまで仕事してるのですね」

「そこまでか……運動しないとな……」

「そうですね、休息も大事ですけど」

「でもなあ、時間が無いんだよな」

「たまには休みを求めてもいいと思いますよ。こんなに頑張ってるんですから」

「勇人さん、気持ちいいですか？」

「ああ、だがもう少し強くてもいいかな」

「このくらいでしょうか？」

「あ、ああ……そのくらい……」

気持ち良すぎすぎて思わず気の抜けた声が漏れる。なんか、ダメ男の階段を一步登ったような……

「こんな感じでしょうか、どうですか？」

「完璧だよ、ものすごく肩が軽くなった」

「ふふつ、よかったです。耳掃除もしてあげましょうか？」

「そのくらいは自分でできるさ」

ジー……

正座して、手には耳搔きを持ち、こちらを凝視してくる。

「……分かった、頼むよ」

「任せてください！」

俺は横に倒れて妖夢の脚の上に頭をのせる。

柔らかいし、いい匂いがするしで、強烈に眠くなってきた。

「あまり無いようですが……奥が溜まっていますね」

「……そうか」

そして、耳掃除が始まる。丁寧にしてくれるお陰で気持ちいい……ただでさえ、ものすごく眠いのにならにこれで……は……

スウ……

「寝ちゃいましたか、朝寝顔を見れなかった分、堪能させてもらいます」

「おやすみなさい」

次の日、文々。新聞で『寺子屋の教師、結婚か!?!』という見出しが出たことはまたこの後の話。

その新聞にはもう一つ小さく『妖怪の怪奇死』というのもあった。

第53話 不穏な日の青年

「当麻くん……あのオ……当麻くん！」

「……？」

「ねえ、当麻くん一緒に寺子屋行こう？」

「寺子屋？なんで？そんな歳じゃ無いだろ？」

「いや、なんでも新しい先生の授業を受けるとすつごく頭良くなれるんだって」

「へえ……」

「その先生はね、”碓氷 勇人” って言うらしいんだけど見た目は私達と変わらないのに頭も良くて、そしてとても強くて、力を持つ”妖怪”とも仲がいいんだって」

「……妖怪？」

「うん、生徒としても来てるみたいよ？でき一緒に行ってみる？」

「ごめん……遠慮しておくよ、僕にはそんな暇が無いからね、じゃあ」

「……」

「やめとけ！やめとけ！あいつ、付き合い悪いんだぜ」

「『どこかに行こうぜ』って誘っても楽しいんだか楽しくないんだか……」

「しょうがないさ、家族みんな妖怪に殺されちゃって傷ついたらまんまなんだよ、そつとしてやるのがいいさ」

”当麻 琥太郎” 16歳 今は自分で働いて稼いでいてどんな事もそつなくこなすけど今ひとつ情熱に欠ける」

「まあ、背もまあまあ高くて、顔も悪くないから女の子からはモテるよな」

「ああ、でもどんな人でも対応は変わらずなんか冷たい感じがするよなあ……」
「やっぱりあの日以来かな……」

「(“碓氷 勇人”か……力を持つ”妖怪”と仲がいい……か。使えるかもな)」

「……………」

「何を読んでるのですか？」

「ん？新聞だが……気になる記事があつてね……」

「どんな事ですか？あ、コーヒーです」

「ん、ありがと……最近、妖怪の死体がよく見つかつてるらしい」「そうなんですか」「それもただの死に方じゃあ無い。外傷は全く無い、内部の損傷も無い、全く”無傷”の状態だそうだ。だいたいこの死因が餓死らしい」

「？餓死？全部ですか？」

「ああ、人間を食べないはずの妖怪も餓死だ、なんかおかしいよな」

「そうですね……もしかして、生徒達が心配なんですか？」

「まあな……とは言っても寺子屋にくる娘は力を持つている方だ。今は下級の妖怪の死体しか見つかってない。杞憂だと思うが」

まあ、大丈夫か。あまり心配しても意味が無いか。心配すべきなのは、今、当たり前のように早苗が家にいる事だ。あの日の後、交渉を重ね、朝だけにする事に成功した。流石にあのままだとダメ男になりかねん。こうして今も全て早苗に任せつきりでこつちが不安になるくらいだ。

「あら、朝からいい夫婦してるじゃない」

「グフツ!?……!ゲホツゲホツ!きゅ、急に出てこないでください!」

「そ、そんないい夫婦だなんて……!」

「顔を赤らめない、そんな事より何の用ですか?」

「最近、妖怪の怪奇死が多発してるのは知ってるかしら?」

「ええ、さつきその話をしてたところですよ」

「なら、話が早いわ、その事件、あなたが解決してちょうだい!」

「丁重にお断りします、そんな暇じゃないんで。そもそも、そういう仕事は霊夢がするのが普通だろ?」

「それがねえ……あの娘、自分には何の問題も無いからする意味が無いってー泣いちやうわもう!」

「これはひどい……」

「で、引き受けてくれる？」

「暇があつたらやりますが、期待はしない方がいいですよ」

「やっぱり引き受けてくれたわね、このツンデレめっ！」

「ぶっ飛ばしますよ？」

「じゃあねえ」

「………はあ」

思わず額に手を当てる。本当に喰えない奴だ……

「引き受けちゃっていいんですか？」

「もう遅いさ……」

鬱蒼と生い茂る竹林の中、隠れるようにひっそり佇む和風の屋敷。大昔からあるような建物のはずなのに真新しくも見える。

『永遠亭』そう呼ばれる屋敷に住む人たちは、

「ふふっ……これで新築完成ね、やっぱりあの血はいいわね」

「ほら！起きてください！」

「んん、あと一時間……」

「よいしょつと……これでまた落とし穴完成」

……なかなか濃い人達のようなのである。そんな人達も最近多発する怪奇死事件については少々耳にし、気になるのか話題に上がったようである。というか、見つかった死体のほとんどが迷いの竹林で見つかっている。

「ねえ、この事どう思う？ 鈴仙」

「どう思うと言われましても……」

「あんまり関係無いのでは？」

「分からないわよ？もしかしたら月の使者が私達を捜索がてらにやってるかもよ？」

「な、何ですって!？」

「んなわけないじゃない、冗談を間に受けないの」

「そ、そうですか……そうですね！」

「ま、私達が最初に疑われるかもしれないけど」

「問題無いですね」

「そうね、やってない事だからね」

その頃、勇人はまだその事件が迷いの竹林で多発してることを知らないので候補にすら挙がらないが。

「この里は本当に素晴らしいよな……飢饉に見舞われたこともなく、豊かに暮らして
いける。それにみんなは親切で両親を失った僕をいつも気遣ってくれる」

「ただ一つ問題があるよな。どうして、この素晴らしい里に『妖怪』がいるんだ？ おかし
いよな？ 『妖怪』は人間の敵だろ？ なんて仲良くしてる？」

「だよな、”先生”……」

「また、新しく寺子屋で習いたい人が増えたんですか？」

「ああ、すまないが……」

「い、いえいえ、だ、大丈夫ですよ」

「そうか……だが、無理はするなよ？前みたいに倒れたら困るからな？」
「は、はい……善処します……」

「えつと……今回君達が……」

「はい！山田です」

「田中です」

「佐藤です」

「……当麻です」

「そうか、てか俺と歳変わらないよな？嫌じゃないか？」

「いいえ！是非とも勇人先生の授業を受けたくって！」

「お、おう……それじゃよろしく頼むよ」

「「はい！」」

「……」

「ねえ、先生かつこいいよね？」

「うんうん！同い年とは思えないくらい大人びてるよね！」

「の割に身長高くないけどな」

「それでも全然ストライクゾーンだよ！」

「あ、でも彼女とかいるって噂を聞いたよ」

「えー……」

「(碓氷勇人……ぱつと見、ただの人間だな……もう少し観察するか……)」

「はい、今日の授業はここまで。宿題は必ず提出するように」

「すごい……こ、こんな考え方があるなんて……」

「思わずへえーって言っちゃった」

「本当に同じ年かよ……」

「(……授業中も特に変わったところは無しと。後をつけてみるか……)」

「……………」

「本当に何も無いな、ただ歩くだけ……噂はデマか？」

「……………」

「(どこまで歩くつもりだ？もう人里を出てしまおうぞ?)」

「……………よつと」

「(な、なに！空を飛びやがったど！?これじゃあもう後をつけれない!)」

「(は!?)」

ガルル…………

「(よ、妖怪……もう人里を出てたのか…………)」

「(数もそれなりにいそうだ……仕方ない、”あれ”をやるしか無い)」

「(さあ…………こい)」

バンバンバンバンバンバン!

「え!？」

「なあにしてんだ？もうここは人里じゃないんだぜ？」

「え、いや、え？(あれだけの量を一瞬で?)」

「本当に何したいんだ？ずっと俺の後を尾けてさ？」

「!?(尾行してたのがバレてる!?)」

「そ、その……先生がどこに住んでるのかを知りたくて……」

「はあ？物好きがいたもんだ。俺の家は人里にないから、妖怪に襲われるぞ？」
「すいません……」

「ほら、一緒に帰ってやるから、次はこんなことするなよ？」

「はい……」

「せ、先生」

「あー……歳そんなに変わんないからさ、先生って呼ばないでさ、呼び捨てでいいよ」

「流石にそれは……なら勇人さんで」

「まだ固いけどいいか、でなんだ？」

「勇人さんはどこの方なんですか？その服装はこの辺では見かけませんが……」

「あー……それ聞くんだけ。まあ、外人なんだ、俺」

「そうなんですか（外人か……道理で頭がいい）」

「後……なんでそんなに強いんですか？さつき妖怪をあつという間に倒してしまいましたけど……」

「んー……靈力を扱う修行したぐらい？」

「れ、靈力ですか（さつきも靈力で倒したのか）」

「それにしても……お前、背高いな」

「ハハ……取り柄はそれぐらいですよ（まあ、確かにこいつの背は低いな）」

「じゃあさ、俺も聞くがよ、なんで妖怪に囲まれた時、動かなかったんだ？」

「!？」

「あの時のお前、悲鳴もあげずただ突っ立てただけだよな？なんでだ？」

「い、いや……きよ、恐怖のあまり声も出せなかつたんですよ（チィ……鋭いな）」

「ふーん……そうか」

「そうですよ」

「最近だな、妖怪がな死んだんだけど知ってるか？」

「……何を言ってるんですか？いきなり（な、こ、こいつ……!）」

「すまん……変なこと聞いたな。ここまでくれば安心だろう、じゃあな」

「はい、ありがとうございました」

「（恐ろしく鋭い上に少ししか見れなかつたが十分だ。あいつは強い。そして、絶対にもっと格上の妖怪を知ってるはずだ……!）」

「（あいつは使えるぞ……少々リスクが高いかもしれんが僕の計画のためにはあいつを利用することが必要不可欠だ!）」

「（だが、早まつちやあダメだ。じっくり、時機を見分けるんだ……）」

「ハハ……絶対に成功させてやるッ！」

第54話 前兆の日の青年

「うーん……」

紫さんから妖怪の怪奇死を暴くように言われてから早一週間。何一つ掴めてはいない。それもしようがないだろう。まともな証拠も無ければ、目撃情報も無い。逆にどうやって見つければ？

「うーん……怪奇死の発見場所は主に迷いの竹林付近……その他の場所にもちらほらと……」

”迷いの竹林”ねー迷いの竹林と言えば永遠亭……か……まあ、真つ先に永琳さんが犯人候補に挙がるが……ただ、その線は考えにくい。

確かに永琳さんなら実験台に妖怪を使うとかは考えれるが、それだとなんでわざわざ何もせずにそのまま放置というのはおかしい。それに永琳さんなら証拠を残すようなアホなこととはしないだろう。

でも、何か情報があるかもな。訪ねてみるか。

「あー……折角の休日が……」

嘆いていてもしょうがないな……さっさと行くか。

「(ふむ……ここが霧の湖か。噂通り霧で覆われてよく見えないな……)」

「(ここにも妖怪が住んでると聞いたのだが……今のところは何も居ないようだ……が……)」

「あつ！」

「フランちゃん！」

「チルノと大ちゃんじゃん、どうしたの？」

「今から遊ぶんだよ、フランちゃんこそ何してるの？」

「先生のところに行こうかなーって、そうだ！チルノ達も来る？」

「先生とここに？行く行く！」

「でも、急に行つていいのかなあ？」

「大丈夫よ！さ、早く行きましょ！」

「（先生……？ああ、あの人か。妖怪にも教えているそうだが……その教えられているのはこいつらのようだな）」

「（ふむ……後をつけてみるか）」

カサ……

「……………」

「どうした？チルノ？」

「うーん……なんでも無いよ」

「変なの、ま、とりあえず寺子屋にあるかどうか確認しよう」

「そうね、サイキョーのあたについて行きなさい！」

「（あのチルノとやらは頭が弱いらしいな……）」

「ね、ねえ、あれ何？」

「ん？なにになに？遠くてよく見えないよ」

「ちよつと近くに行つてみようよ！」

「やめておこうよ……何か嫌な予感がする」

「ビビつてんの？大ちゃん？安心なさい！サイキョーのあたがいるんだから！」

「（ちよつと待て……どこに向かつてる？そ、その場所は！）」

「こ、これって……」

「し、『死体』？」

「もしかして……先生の言つてたのかな？」

「（チイ……道中でやった奴が……まあ、見られても問題無いか）」

「何か無いかな？」

「ち、チルノちゃん！何してるの？」

「ん？何か無いかなーって」

「それよりも先生に報告しようよ！」

「（それよりもあの教師が探つてるのか……今後、気をつけるべきか）」

「うん？何これ？」

「紙切れ?」

「(なんだと?はっ!無い!あの”紙”が無い!あの紙には今まで倒した妖怪のメモが……!)」

「何が書いてるのかな?」

「ちよつと待って!先生に見せるまで開けないでおこうよ」

「え……」

「(あいつら!紙を持って行きやがった!まずい……あの『紙』に書かれてることを見られたら……)」

「(あの教師なら書かれてる『字面』からこの俺まで辿つて来るのは時間の問題だ……あの教師は僕の字面を知っている……)」

「(この『当麻琥太郎』……今までは『手掛かり』ひとつ残したことがないが……どうやら慢心してたようだ……よりやってあの教師の教え子に持っていかれるとは……)」

「(どうするか!)」

「(しかし……あいつらと会話するのは避けたい……ひつたくるしかないか……それも気づかれずにくすね取るのがベストだが……)」

「よし、里の中に入った……ここなら、普通に歩いていても問題あるまい」

「(あと少し……)」

「チルノ！寺子屋はそっちじゃない！」

「お？」

「(く……ッ！)」

「もー、寺子屋の場所くらい覚えなさいよ、このバカ！」

「ば、バカって言ったわね！バカって言う方がバカなのよ！」

「はいはい、ほら早く行くよ」

「むー……わかったよー」

ドン！

「イタタ……もう！どこ見てるのよ！気をつけなさいよ！」

「す、すまない」

「(クソッ、さつきはチャンスだったな……)」

「(まずいな……寺子屋についてしまったぞ……間違はなく数分のうちに『紙』はあの教師のもとへいく……俺は今日、寺子屋に来る日では無い。他の生徒に怪しがられるだろう。まずいぞ……)」

「非常に……まずいぞ……」

「先生ー」

「おや、チルノ達じゃないか、どうした？」

「慧音先生、勇人先生はいる？」

「あー、今日は生憎居ないんだ。多分家に居るだろう」

「先生の家ってどこだっけ？」

「そうか、知らなかったな、教えるよ」

「お願いします」

「スッ……」

「チルノ！何見ようとしてるの！」

「し、してないわよ！」

「はあ……とりあえずそこに置いていて」

「わかったよ……」

「とりあえずあつちで教えよう」

「はい」

「危なかった……最悪見られたら『始末』することを考えてたよ……」

「さっさと回収するか」

タツタツ……

「流石に置きっ放しはダメね！」

「!?」

「あんた、誰？」

「あ、いや、ここの生徒だが？（クソツ、チルノとか言う奴が戻って来るとは!）」

「ふーん……あ、その紙、返してちょうだい」

「え、いや、その……」

「返しなさい！」

「あつ（しまった!）」

「ふんっ」

「（あと少し、あと少しだったのに!ここにあの教師がいなかったのが幸い。いつそ3人とも始末してしまおうか?）」

「勇人の家だが……」

「こんな所に住んでるんですね……普通の人なら住めない……」

「ま、勇人先生強いし大丈夫よ」

「え、どい？」

「今はあの教師の家を調べることに集中してるようだ……紙は……フフ……あそこならどうにか腕を伸ばして届きそうだ……」

「よし！あと少し……」

ヒュー

パサア

「（風だど!?紙が落ちてしまった!）」

「ん?」

「（し、しまった!気づいたぞ!しかも少しめくれて書いてあることがチラリと見えてるじゃあないか!）」

「……」

「チルノ!先生の話聞きなさいよ!」

「だって、紙が落ちたんだもん!」

「そんなの後でいいでしょ?」

「喧嘩は止めようよ……」

「むー……」

「先生の話を聞くよ」

「(今だ!)」

「(フツフツフツ!冷や汗をかいたが……ついに回収したぞっ!)」

「よし先生のお家も分かったところで、行きましょう!」

「ああつー!か、紙が!ど、どこにいった!?!」

「え?」

「もう、フランが後でって言うからよ!」

「うっ、そ、そんなことより探さないと!」

「(クツクツクツ……もめろもめろ)」

「とりあえず、あっちに行ってみるわよ!」

「(……………)」

「(バタバタしたが……無事このハードな状況を乗り越えてみせたぞッ!)」

「さっさと帰るか……」

「ちよつと待ちなさい！」

「さつきからあんた怪しいと思つてたけど、あんた今、何してるのかしら？」

「……………」

「この生徒つて言つてたけどもうすぐ授業が始まるつて言うのになんでその”紙”を持ってゴソゴソ動き回つてるのかしら？」

「……………」

「ひよつとして、僕に話しかけてるのかな？嬢ちゃん？」

「その紙を返しなさい！」

「何を言つてるのか分からないよ……これは僕がメモに使つた紙だよ？」

「違うわ！その紙はあんたのじゃないわ。あんたには分からないでしょうけどあたいは分かるのよ！」

「だ・か・ら、これは僕のなんだよ、分かる？」

「あー！もういいわ！こうなつたら力づくよ！」

ピシイ……………！

「な、なんだ!?! こ、これは……!?!」

「ほら!」

パシッ

「これで取り返したわね……ん?」

「こ、これって……先生の言つてた事件じゃない!」

「なんとということだ……見てしまったか……そして、これは……」

「足を凍らされると言つたところか……」

「や、やったわ! 犯人はあんたね!」

「はあ……君、1人だよな? さっきの友達も……どっかに行つたようだ……」

「彼女たちも人間じゃないんだろ?」

「あんたツ! 動くんじゃないわツ!」

「……………」

「少しでも動いたらカチコチに凍らすわよ!」

「……………」

「変な奴ね……」

「僕の名は『当麻琥太郎』 年齢16歳 自宅はこの里の西部にある。仕事はいくつかして、必ず8時には帰る。両親は居ない。死んだのだよ。”妖怪”によつてね。妹も

いたが同じく死んだ。今は一人で暮らしていて、全ての家事を自分でしている。周りの人がよくしてくれてるおかげで平凡で充実した日々を送ってるよ」

「何を話してるの？あんな？」

「だかな、僕は毎日熟睡することはできない。僕には『心の平穏』は無い」
「？」

「僕は妖怪が憎い。僕の家族を殺した妖怪が憎い。今、こうしてこの里に妖怪がいるだけでも震えるくらい腹が立つ」

「いつか、僕のことをよくしてくれた人達も妖怪に殺されてしまうとね夜も寝れないんだよ」

「全ての妖怪を駆逐しない限り、僕に『心の平穏』は永遠に訪れない」

「つまりチルノちゃん……君も憎しみの対象であり、僕の計画の邪魔でもあるんだ」

「はあ？ただの人間がサイキョーのあたいに勝てるっていうの？」

「ただの人間ねえ……まあいい、君を始末させてもらう」

「うっ……動くなってあたいは言ったわよ！」

「あたいを舐めないでよーッ！」

ビシビシ……

「ぐ……ッ、さらに凍っていく……」

「それ以上動くとは完全に凍らせるわよ！あたいはサイキョーなんだからねッ！」

「なるほど……妖怪つてのは不思議な能力を持つてるんだな……」

「いろんな人が持つてるのよ！ま、一番サイキョーなのはあたいだけどね！」

「んん『能力』ねえええ」

「ところで……僕もちよつとした特殊な能力を持っていてね……」

キラッ……

「な、何を持っているのよ！」

バシッ

「なーんだ、ただの小銭じゃない」

「いや……僕の『能力』を教えようかね……どーせ君は既に僕の『能力』で始末されてし

まってるからね」

「僕の『能力』……それは『触れたものから力を奪い取る』」

「たとえ小銭だろうと……なんであるかとね……」

「はっ！」

ドシユッ

「これで計画が一步進む……」

「うっ……うっ……」

「お？まだ『力』が残ってるのか？流石だな」

「な、何されたの？ち、力が……」

「僕の『能力』は触れたものから力を奪える……もちろんエネルギーもだ。霊力、妖力、魔力、生命エネルギーもね……ああ、養分もだな」

「もつとも君の場合は小銭を媒介にしたせいで奪いきれなかったけどね」

「これから全ての力を奪う前にちよつと確認しておく事を思い出した。『能力』ってのはあの2人も持つてるのか？どんな『能力』なんだ？」

「た、助けて……！」

「ダメだね、君には死んでもらわないと……まだ途中なんだよ。今バレたら困る」

「そうだな、あの『確氷勇人』とかいう教師も能力を教えて欲しいな」

「知ら……ない」

「知らないことは無いだろ？さもないとあの2人も始末するよ」

「なんだ……と！大ちゃん達……も!？」

「早くしてくれ、授業が終わる、ほら！」

「な、何言ってるの……？あ、あんたみたいな奴先生がぶつ倒してくれるもん！先生があんたを探してるもん！」

「氷符『アイシクルマシンガン』！」

「!?まだ動けるのか!？」

「イテテ……クソツ、いくつか刺さった……ムツ!？」

「どこへ行きやがった!？」

「はあ、はあ、みんなに伝えなくっちゃ……」

「大ちゃん達を守るもん!あたいが……!守る!」

「フランなら……あいつをたおせる……!なんでも破壊できる、フランなら……!」

「い、いた……!慧音先生もいる!」

「……………!!」

「あの教師も俺を探してるのか……」

「しかし、誰にも僕を追い詰めることができない。君が死んでしまったらね」

スツ

「僕は既に襖に触ってる」

「え!？」

ドシユツ!!

「大ちゃんーッん!!」

スーッ

「うむ……他の妖怪は死んでも消えなかったのにこいつは消えてしまったぞ。まあ、こつちの方が都合がいい」

「い、今誰かが私を呼んだ気が……」

「うん、誰か呼んでたわね」

「ん？これは？氷？」

「あれ？このリボンってチルノちゃんのじゃないの？」

「え？」

「うむ、そうだな。ん？この氷、何か入ってるぞ？なんだ？紙か？」

「!？」

「ちよ、ちよつとおかしくない？」

「チルノちゃんを探そう！」

「あ、ああ……何かがあったようだな。勇人にも連絡する」

「よし、紙も取り返した……し？」

「ち、千切れてる？何かの拍子に破れたのか？ま、いいか」

「どこにもいない……」

「ね、ねえ、妖精って死なないんでしょ？」

「う、うん、自然がある限り妖精は存在するから……」

「じゃ、じゃあ、どつかでやられたら復活するの？」

「そうだよ」

「死なないのよね？」

「うん」

「もしかして……チルノは犯人と会ったのかも……」

「!? 本当ツ!?」

「多分……とりあえずこの紙を先生に渡そう」

「うん」

「(絶対にそいつをぶっ壊してやる……!)(」

第55話 誤解の日の青年

「えつと……ここが『迷いの竹林』か？」

はい、ただいま迷いの竹林に来ております。永遠亭に行つて何か証言が無いかなあーつて思つて来たのだが……

「どこから……入ればいいんだ？」

見渡す限りの竹、竹、竹竹竹竹竹……ずーつと見てるとなんか気持ち悪くなつてきた

……

「と、とりあえず進むか」

そういえば、早苗とかはどうやつて永遠亭に行つたんだ？ああ、こうなるんだつたら道のりを聞いておくんだつた。

「あの人は誰？」

こんなところで生身の人間が来るなんて、妖怪にでも食べられるわ。それにしても珍しい。どんな馬鹿野郎なのかしら？

「……………むか」

ん？なんて言ったのかしら？

「さつさと……………つて、永琳さんに……………妖怪を殺した……………」

!?あ、あいつ今なんて？

「……………く見つけて……………を捕まえないと……………」

つ、捕まえる!?ま、まさか!あいつは師匠達を……!?

そ、そんなことはさせないわ。私はあの八意永琳の弟子、鈴仙・優曇華・イナバよ! 師匠の手を借りずともあの程度の奴を追い払ってみせる!

「さっさと永遠亭に行つて、永琳さんに聞かないとな、妖怪を殺した犯人について何か知ってるかを」

何か一つぐらい知ってるだろう。

それにしても、今どこだ?モタモタしてられないのに。

「早く見つけて、犯人を捕まえないと」

「待ちなさい」

「んあ?」

なんだなんだ?こんなところに人……が……いるなんて?ありや?人じゃない?

白いブラウスに赤いネクタイをつけ、その上に茶色のブレザー。それに膝下ぐらいまでのミニスカート。所謂バリバリの女子高生って感じた。スカート短過ぎないか?寒くないのかな?いや、そんなことよりも頭についているあれ。なんだよ、あれは。うさ耳なんぞつけよってコスプレか?

「かなり怪しいわ、ここに何しに来たのかしら?」

「一応、永遠亭に用があつてだな……(怪しいって、あんたも十分怪しい格好してるだろ)」

「何故?怪我をしてなければ病気で無いようだけど?」

「まあ、いたつて元気ですけど」

「尚更怪しいわ。そもそも、ただの人間のがここに来るなんて」

「え、あ……いや、その……」

「何よ、何か言うことでもあるのかしら？」

「え、永琳さんとは少し顔見知りだからさ……」

「はあ？そんなこと言われても信じるわけがないじゃない」

「じゃあ、どうしろと？」

「今すぐここから立ち去ることね」

「そういうわけにもいかないだよ……」

「やっぱりね……姫達を捕まえようとしても無理なことよ」

「……？は？」

「とぼけようとしても無駄よ」

「いや、ちよつと待て、話を聞け」

「話って、ここ最近で多発してる妖怪の怪奇死のこと？」

「おお！分かるのなら話が早い！」

「そうね、だって犯人はあなたでしょ？」

「……………は？」

「もう立ち去る必要も無いかしら」

「えっ、ちよ……」

「最近、戦える相手が居なかったのよね。ちょうどいいわ、見せてあげるわ、『月の狂気』

を！」

「……………え？ドユコト？」

な、なんなんだこのうさ耳の娘は？犯人が俺とか言つて、月の狂気とやらなんやらと……………

「ちよつと待て、君はとんでもない誤解をしてるよう……………だ……………が……………？」

な、なんだ……………視界が急にグニャツと歪んで見える……………平衡感覚が……………

「もう、月の兎の罫に嵌っているのに気づかないの？右、左も上、下も……………あなたはもう全て狂つて見えるわ。私の目を見てもつと狂うがいいわ！」

おえ……………なんか酔つてきた……………さつさと解除してもらわないと……………本気で吐きそう……………

「ウプツ……………と、とりあえず、実力行使でいくぞ……………」

銃を取り出す。今回は回転式拳銃で。

「やつと本性を現したわねーでも、無駄よ。あなたは私に当たることが出来ない」

よーく、定めて……………ありや？歪んで見えるせいでしょうかりと狙いがつけられないか、勘で……………

パァン！

「どこを狙ってるのかしら？それじゃあ私には当たらないわよ？」

見当違いなところに当たったようだ。どうしたらいいんだろ……うつ、またこみ上げてきた……

「……あれ？」

あのうさ耳はどこいった？まだ景色が歪んでるあたりいるんだらうけど……すると、足が宙に浮く感じがした。

「え？」

「ガラ空きよ」

足払いかよ！体勢が崩れ……る。前のめりに倒れかけたとき、視界に膝がすぐそばまで……

バギイ！

「グ……ッ！」

「流石に簡単にはやられないわね」

咄嗟にガードできたものの腕がビリビリする……なんだ？あの重さは？しかも、体勢はまだ崩れたまま、相手は回し蹴りをする。

咄嗟に頭を守るようにガードするが……

ドゴッ

「カハッ……!」

頭を守ろうとしたせいで腹がガラ空きだった……息が……

「ゴホッ、ゴホッ……」

おかしい、少女なのになんでこんなにも一撃が重いんだ？それにあの蹴りだと近接格闘の概念を持っている。

ん？そういうえば、月の兎とか言ってたな……

「……お前……人間じゃないのか……」

「何をいまさら」

「そうか……」

久々だけどあれをやろうか……じいちゃんに教えてもらったんだが……

「腕は顔にびったりつけてガードして……」

「何言ってるの?」

「足は肩幅に開き、腕は垂直に、重心はケツに……」

「……?ま、いいわ。とどめ刺してあげる」

相手の拳がくる!それを避けて……

「な!?!」

「前足をワンステップ前に拳に体重が乗るように肩から押し出す感じで……」

ついでに靈力で強化して……

シユツ!

「きやつ!」

スカッ

「あるえ?」

空振り……おう……渾身のストレートが盛大に外しちゃった。

「あ、あ……」

うーん……やつぱり歪んでるせいか……

「ふ、ふん、大したことないのね(な、なんなの?あれ、当たったら絶対無事じゃなかったわ!)」

「こっちもいくわよ(近接は危ないから、弾幕で片付けてしまおう……)」

「ウプツ……ああ……いいよ、こいよ……」

とにかく、この状態をどうにかしないと。もうそろそろ朝ごはんが出てくる。上から。さあ、どこからくる?」

と、思ったが急にあのうさ耳は指を銃の形にした。そして、人差し指から銃弾形の弾が打ち出された。

「!?!」

なんとか避けれたが頬を掠ったようだ。少し血が滲んでる。

それにしても……銃弾形とは……相手は銃を使っていないがなんか負けたくないな……少し俺と似てるからか？

「幻朧月睨（ルナティックレッドアイズ）」

ここにきてスペカ宣言!? わざわざそんなことする必要性とは……別に弾幕ごっこじゃないのに。

「よし、かかってこ……い……い……」

うっはー……ものすごい量の弾幕が放射状に配置されてる。

「さあ……もつと狂うがいいわ」

あのうさ耳……中々強いぞ……そして、うさ耳の眼は真紅に輝いている。その眼を見た瞬間、さらに景色が歪んで見え始めた。

「どうなってるんだ……?」

あの大量の弾幕もどこかに消え失せていた。それにうさ耳の姿も見えない。

「ど、どこに行きやがった?」

うさ耳を探してみると、周りにいつの間にか弾幕が高速で迫っていた。

「えっ」

よ、避けれない……! 視界が弾幕で埋め尽くされ……

「ふー……これでもう安心ね」

よくこの程度の実力で師匠達を捕らえようとしたわね。確かにあのパンチは中々の勢いだったけど結局終始狂わせられた状態で何にもできなかったようね。

「とりあえず、師匠に連絡しておこう」

「そうか、それなら俺も連れてつてくれよ」

「え!?!」

な、なんでまだ立ってるの?よく見たら傷1つない……

「おっと動くな」

「ぐ…………ツ」

背中を銃突き付けられる。

「さつきから気になったんだが……お前の能力はなんだ？ できるなら解除して欲しいの
だが。気分が悪くなつてしょうがない」

「…………分かつたわ」

「そうか、ありがたい。あと、俺は別にお前達に危害を加えにきたんじゃない」

「…………そう」

「ついでで申し訳ないんだが永遠亭の場所を教えてくれないか？」

「…………いいわよ」

「おお！ ありがとう！」

背中から銃が離れる。その隙に！

「もう一度狂いなさい！」

「ウエ!!」

ふっ、見たわね。完全に私の眼を見たわね。そのまま狂いなさい！

「何してんだ？」

「あ、あれ？ あれあれ？」

波長が変わらない？ いや、あいつの周りの波長も変わってない？

「やっぱりその眼なんだな？」

「は、は？」

「なんなのかはよく分からないがその眼を見たことで景色がおかしくなったのか」

「な、なぜ狂わないの？」

「そつちは何にも教えてくれないからこつちも教ええない」

「その眼を見なければいいんだな……」

そう言うときあいつは眼を閉じた。眼を閉じるなんて……それじゃあまともに戦えないでしょうに。

「さあ、こいよ。撃ち抜いてやるから」

眼を閉じてしまったから狂わせることは出来ない。が、だからと言って眼を閉じてる相手に負けるわけがない。

こつちが撃ち抜いてやる！人差し指をあいつの眉間に定めて……

パァン！

「きやつ！」

手に銃弾が掠った!?な、なんなのよ!?眼を閉じてても正確に狙ってきてる！

「外したか……まあいい」

「な、舐めたことを！」

パアン！パアン！パアン！

「く…………ツ！」

私の行動をある程度予測して撃っている！

「分かる…………分かるぜ…………どこにいるか…………」

なんなのよ？眼で見ない方が見えてんじやないの？

パアン！パアン！

カチャ…………

相手はリロードが必要…………これは付け入る隙があるわね…………6発ずつと…………次6発撃ったら畳み掛けてやるわ！

パアン！パアン！

「1…………2…………」

少しずつ避けるのが難しくなってるが…………あと4発よ。

パパアン！

シュツ

「…………ツ！」

連射…………少し掠ったわ…………でも、あと2発！

パアン！

あと一発！次避けたら撃ち込む！

パン！

ドシューッ

「ぐ……ッ」

一発もらったけど……どうでもいいわ！撃ちまくる！

「ぬあー！」

反応が一步遅い！よし！このまま……撃ちこむのみ！

カチャ

は？あの体勢でリロード!?か、構うものか！

パン！

この角度なら当たらない！

ピカッ

「!？」

視界が光で埋め尽くされる。眼が……眼がア！

ぼやける視界の中、あいつが近づいてくる！

弾幕を放つ。それはいくつかはあいつに当たるが構わず近づいてくる。血が出ても

なお近づいてくる。

「……………ッ！」

「悪いがしばらく寝ててくれ」

腹に貫かれるような衝撃が来たと同時に意識が刈り取られた。

「ふう……………」

姫を捕まえに来たのだろとか、色々訳わかめなことを言ってたが……………とりあえず、永遠亭の者で間違いないだろう。それにしてもあの眼は脅威的だな……………あのままだった

ら絶対吐いてた。未だに少し気持ち悪い。さっきから生あくびを連発してる。

「ん？おいそこで何してる！」

「うお!!？」

「あれ？勇人じゃないか。ここで何してんだ？」

「ああ、妹紅か……そのだな、永琳さんに用があつて永遠亭に行こうとしたのだが……このうさ耳に永遠亭の道のりを聞こうとしたのだが襲いかかつて来てね……ご覧の通り」

「そいつ、鈴仙じゃん」

「知り合いか？」

「ああ、そいつは永琳の弟子だ」

「やっぱり、永遠亭に関係してたか」

「鈴仙は真面目で誠実なんだが……いかんせんそれによつて勘違いしやすい行き過ぎた行動もするからな。それはそうと、お前の方がひどい状態に見えるが？」

「そ、そうですよね」

何発か喰らつて貫通してしまつたものまである。所々血が流れ出てる。

「よし、私が永遠亭の道案内してやる」

「本当か！ありがと！」

「いいってことだ。それにこれも私の仕事だからな。ほら、ついて来い」

「ちよつと待って、この鈴仙とか言う娘も連れてかないと」

「はあ……ま、いいや。どうやって運ぶ気だ？」

「抱っこしかないだろ？」

「……………私は知らないぞ」

「??」

何が言いたいのかは分からないがようやく永遠亭に行けそうだ。

第56話 入院の日の青年

「貴方がここに無傷で来る日は来るのかしら？」

「そうですね……今回は無傷で来る予定だったのですが……」

「なんやかんや言いながら治療をしてくれる永琳さん。まあ、当たり前のように採血されたけどね。もう、慣れよ、慣れ。」

右肩に1つ、左肩にも1つ、顔も少々掠っており血が滲んでる。あと、腹部にも打撲痕や弾幕による傷など、傷だらけである。――それらは全てあそこで寝ているうさ耳によつてである。

俺が永琳さんに話を聞こうと迷いの竹林に足を踏み入れたまだ数十分前のこと。うさ耳、もとい鈴仙・優曇華院・イナバに何やら勘違いされ戦鬪に。あの真紅に輝く眼によつて色々手こずった。気分が悪くなるわ、弾幕が急に消えるわ、鈴仙まで消えるわ、もう大変だった。それに近接格闘も相当手馴れてるらしく、一撃一撃の打撃が重かった。特に、腹部へのキツクあれは中々キツかった。しかし、向こうは俺の能力を把握してなかったようで、なんとか勝てた。ま、最終的に眼を瞑ると言う荒技に出たが。

眼を瞑ったままでは流石に弾幕を避けきれず今の傷となった。お陰で話を聞くだけ

のはずが、こうやって治療を受ける羽目に。だからと言って、事情が分かってない相手を無闇に傷を負わせるわけにもいかない。申し訳ないが腹パンで寝てもらった。あとでどの様に説明しようか……

「鈴仙さん？ でしたっけ？ その娘は大丈夫ですか？」

「安心なさい。貴方の技術で気絶だけで済んでるわ。右手に少々擦り傷があるけど、こうやってまだ意識のある貴方の方がよっぽどひどいわ」

「そうですか……」

「……勇人、別に貴方は悪くないわ。ただ、私に話を聞きに来ただけだから。何も聞かずに早とちりして攻撃を仕掛けたウドンゲの方が悪い。師匠である、私からも謝るわ。ごめんなさい。ちゃんと貴方のことを説明しておくわ」

「しかし、説明不足もあったわけー」

「やめて頂戴。私の謝罪が虚しくなっちゃうじゃない。今回は私達が完全に悪い、いいね？」

「は、はい」

なんだかな……永琳さんには敵わない気がする。流石月の頭脳。ここまで一方的に言いくるめられるとは。

「あ、でも治療に対してはきちんと礼を言わせてもらいます。ありがとうございます。永

琳さん」

「別にいいのよ。こうして、血を提供してもらえるのだから」

「ハハ……ソウデスネ……」

「それにしても、最初貴方が鈴仙をお姫様抱っこして来た時は驚いたわ」

「そ、それは……」

「逢い引きかと一瞬思ったわよ。まあ、鈴仙の相手が貴方なら任せられるし、それに……」

「常に貴方の血が採血できるからね」

「え……」

「冗談よ、冗談。そんなことしたら、あの2人が黙ってないわ」

「ハハ……」

「そういえば、鈴仙さんが言ってたんですが……貴女達を捕まえに来たとか言われたんですが、どういうことですか？」

鈴仙が勘違いしていたことだ。なんで捕まえに来たと勘違いしたのだろうか？

「そうね……」

「む、無理して言わなくても大丈夫です」

「いいえ、貴方には話すわ」

（説明中）

「……………」

永琳さんと輝夜さんが月の民であることは知っていたが……

輝夜さんは月では禁忌とされていた「蓬萊の薬」を飲むということで地上へ流刑とされ、その迎えに行つた永琳さんは地上にいたいと言ふ輝夜さんと共にする事にして一緒にいた月の使者を皆殺しにしてここに来たと言ふ経緯を持つ。そして、鈴仙は元々月の兵で戦争が始まると言ふことを聞いて逃げ出し永琳さん達の元に転がり込んだという経緯を持つてる。

この話を聞いて思ったことは……

「それ、俺に話していいんですか？」

「構わないわ、別に貴方はそういう人じゃないってぐらい知ってるわ」

「随分と信用してくれてるんですね……」

「まあ、それなりにね。ああ、そうそう貴方、2日ぐらい入院ね」

「はい………つて、エエエエ!?!」

「当たり前じゃない、どうせ生活に戻つたら無理に動いて傷が広がるに決まつてるわ」

「信用してくれてるんじゃないんですか……」

「それとこれとは話が別、まあ、ゆっくり話ができるからいいじゃない」

ああ……またか、もう何度入院したらいいのだろうか……

ーートントン

「ん……う？誰かな？」

こんな時間に来客か？まだ早苗や妖夢達には伝えてないはずだが……とりあえず、返事をする。

「入るわよー」

そう言い腰より長い艶やかな黒髪を持つ女性、蓬萊山輝夜さんが入って来た。

「随分と暇そうね」

「いんー……暇っちゃ暇ですね」

まあ、本来は永遠亭にはそんなに居るつもりは無かったのだが……2日居る羽目になつた。

「ごめんなさいねー、うちの鈴仙が」

「ああ、もういいですよ」

「そう言ってもらえるとありがたいわ」

「そうそうーつ注文があるのだけど」

「俺に難題はやめてくださいよ。今は捜査もしている身ですから」

「そうじゃないわ、その話し方よ。堅っ苦しくてしょうがないわ」

「い、いや、流石に姫様にタメ口は……」

「そんなに偉くないってほら、私達は似た者同士なんだからツ」

「え？似た者同士？」

どこがだ？俺は普通の教師で輝夜さんはお姫様。性格も似てるとはとても思えない。

「そうそう、だって貴方『物事を不変にする程度の能力』なんでしょ？」

「まあ、そうですが……」

「私はね『永遠と須臾を操る程度の能力』なのよ」

「へ、へえ……」

「で、『永遠』というのが鍵でね、それは『不変』と言うことなのよ」

「!?!」

あれ？俺、能力被った？

「貴方と私は最初全く同じだって思ったんだけど永琳が違うって言うのよ、だから、似た者同士よ」

「は、はあ……」

どんな感じで違うのかが物凄いい気になる……

「姫、どう違うかは説明しましたよ」

「あら、永琳いたのね」

「ええ、彼に痛み止めを」

「あ、ありがとうございます」

ああ、どんな風に違うかメツチャ聞きたい……

「姫と貴方の違い教えましょうか？」

「是非！」

「そうね、まず姫の方から説明するけど、永遠つまり不変ということなのだけれど未来永

劫全ての変化を拒否する——つまり、歴史を持たないの。その事によつて、寿命や変化が無くなる——食べ物には腐らないし、割れ物は割れないのよ。その能力がかかった世界では時が止まったに等しいのよ」

「ほー……」

「で、次に勇人ね。これは紫から聞いた事を私なりに解釈したのだけれど……貴方も同じく変化する事を拒む。それは姫と同じよ」

「そうですね」

「だけど、貴方の場合も食べ物は腐らないし、割れ物は割れない。けどね、極端な話、逆に食べ物は必ず腐るし、割れ物は必ず割れるという事も言えるのよ」

「ん?」

「貴方は『物事』を不変にするのでしょ?つまりは変化する事を不変にできるのよ。貴方の『不変』は『歴史』を持つのだよ。そして、貴方はその『歴史』がどうなるかは自由に決めれるし、未来の歴史も決めることができ、そして必ずその歴史は起きる。その歴史が起きる中でその歴史とは違うことは排除され、干渉することは出来ない」

「時が止まった事に等しいに対して、貴方は時の流れの中で自分が決めた流れを作り出せる。まあ、貴方はまだ完全に使いきれないようだけど。つと言った感じかしら?」

「……成る程」

「え？分かったの？私にはいつ聞いてもさっぱりよ」

「ええ、流石永琳さんですね」

「分かってくれたのね、姫が全く分からないって言うから自分の説明に自信が無くなる
ところだったわ」

「ま、でも似た者同士には違いはないんでしょ？」

「……それでいいです」

「ということで私には敬語禁止ね」

「どういことですか……」

「ほら！敬語禁止！」

「はい、分かりm……分かった」

「うんうん！それでいいのよ」

それにしても永琳さんはすごいなあ……自分よりも深く能力について考察できるな
んて……にしても、ここの人達も凄いんだな。

「あ、そういえば、鈴仙さんの能力も知りたいですね」

「そうね、ウドンゲは『狂気を操る程度の能力』もとい『波長を操る程度の能力』よ」

「それは……（以下割愛）」

「ふむふむ……どうりで景色が気持ち悪くなったり、弾幕が消えたりしたのか……」

「まあ、貴方には無効だけどね」

「ソウデスネ……」

「ま、あの娘とも仲良くしてあげて頂戴。ああ見えて寂しがり屋なのよ」

「俺でいいなら、仲良くさせてもらいますよ」

「よろしくね」

「私からもよろしく」

「ええ」

ふう……今日は中々有意義な時間だったな……自分の能力についてここまで根を掘り下げて考えるとは……でも、自分を突き詰める事も大事だな。

あ、肝心の怪奇死について聞きそびれた……ま、明日聞こう。

ーートン、トン

「ん？また、誰か来たのかな？」

永琳さんか、輝夜さんかなって思ってたけど、弱々しいノックの音で違うなと思った。じゃあ、誰だ？んー……遠慮してるのかな？とりあえず、大きな声で返事をした。すると、恐る恐るといった感じでドアが開いた。

「失礼します……」

「えっと……鈴仙……さんですよね？」

半開きのドアから覗く薄紫の髪。伏せがちの赤い瞳でこちらを見つめたまま動かない。

「あのー……何をしに……」

「ほ、包帯の交換をしに……やっぱり、私では嫌ですよね……師匠と変わってきました」

「そ、そういう意味じゃ無いですから！な、何の問題も有りませんら！」

「は、はい……」

完全に萎縮してしまってる……包帯の交換をする時もどこかよそよそしい感じが……ただ、静まり返り、痛々しい程の沈黙が降りるのみ。

こういう時に気の利いた言葉をかければいいのだが……生憎、俺の性格ではそういうハイスペックな事は出来ない。何か話題と、あれこれ思案する。

そんな中、鈴仙の指が傷口に触れ、

「痛っ……」

「あつ、すいません！すいませんすいませんすいませんすいません……」

「だ、大丈夫だよ！そんなに謝らなくてもいいから」

「はい……すいません……」

もうどうすれば……

そうして、また気まずい雰囲気……これが続くかなと思つたら意外にも、鈴仙により止められた。

「あの……あの時の事は本当にすいませんでした……」

消え入るような声、されども彼女の精一杯の謝罪……ほぼ無傷の鈴仙に対し、傷だらけの俺。その事も気にしてだろうか？

「私が勝手に勘違いした上に貴方を怪我させて……なのに私はこうした無傷だなんて……」

「いやだから、謝らなくても……」

「いいえ……臆病で自分勝手な事ばかりするから私は……」

なんというネガティブ思考……思わず額に手をやる。

「も、もしかして、お気に召したでしょうか」

「いや、そういうわけじゃ無い」

「あのね、俺は全然君を責めてなんかいない。もう謝罪もしなくてもいいって言った」

「……はい」

「確かに君は臆病者だ。今も責められるのを恐れてペコペコしてるし、君が月から逃亡して来たという事も永琳さんから聞いてる」

「そ、そうですよね……」

「だが、臆病者が悪いとは思わない。ただ、何事にも恐れず突っ走って、死んでしまうような奴の方がよっぽど悪い。それにそんな奴は自分が居なくなったら周りの奴が悲しむという事も知らない自分勝手な奴だ。だから、あんたは自分勝手じゃない」

「で、でも……」

「そもそも自分勝手な奴が永琳さん達を守ろうとはしないし、こんな風に丁寧に包帯を巻いてくれないよ。それに今回の事は誰も君を責めていない。そんなことぐらい分かるだろ？」

俺の問いに対し、鈴仙は俯く。あの永琳さんの弟子だ。そんなことは自分が一番分かっているはずだ。

永琳さん曰く、ずっと逃げて来た事を負い目に思つてたらしく、いつの日か吹っ切れたとか言つてたらしいが、やはり心の何処かで引つかかつてたのだろう。

「まあ、今こうして世話をしてもらつてる訳だからそれでまあいいかな？」

「それで……いいのですか？」

「ああ、勿論。それでも納得しないのなら……」

「えっ、え!？」

俺は驚く鈴仙の右腕を掴み上げる。その右手には包帯が巻かれてある。この傷は間違ひなく俺によるものだ。

「この綺麗な手に傷をつけてしまった事も含めておあいこだな？」

「ぎ、綺麗!？」

「それに君は永琳さんの手伝いをして、貢献してるのだから？」

「そ、それは師匠が素晴らしいので私はそんなに……」

「そんなに謙遜しなくてもいいさ。人の命を救うとは簡単な事じゃ無い。俺よりもよっぽど誇れるぞ」

これも永琳さんから聞いた。永琳さんは少々マッドの気があるが、なんやかんやで鈴仙に気をかけている。

「君を頼りにする人はたくさんいるさ。だから、胸を張つてやってくれないと。まあ、俺

もここのお世話になる事が多いからな、俺も頼りにしてるさ」

「くくくツ！」

「つて、あつっ！」

な、なんだ？急に鈴仙の手が熱くなったぞ？それに鈴仙の顔を見たら物凄く赤い。あれ？熱があるのでは？

「た、体調が悪いなら早く言え！後は自分でできるから、休め！」

「いえ！そういうわけではっ！」

「そ、そうか、でも無理はダメだぞ？」

「あ、あの、勇人さんっ！」

鈴仙はここに来て初めて俺の名前を大きな声で呼んだ。先程のような相手の顔色を伺うような眼ではなく何か決心をしたような眼になった。そう、ダイヤモンドのような——いや、いい。まあ、その眼には俺が映し出されている。

「ゆ、勇人さんがさつき言った事は……こんな憶病者の私でも必要としてくれるんですか？」

「まあ、そういう事になる。俺も怪我が多いからなあ……だから、頼むよ、鈴仙」

「は、はいっ！」

いつの間にか呼び捨てになつてゐるが、まあ見た目的にも同世代ぐらいだからな。それ

に鈴仙の表情も暗黒のオーラを纏って入って来た時よりも随分と明るく、大きな声になつたな。表情も微笑んでいる。うん、女性は笑顔が1番似合うな。

……しかし、俺は気付かなかつた。

「勇人さんは私が必要……私が必要……私も勇人さんが……つまり、そういうことよね
……ふふ、ふふふ、ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
……」

第57話　ゴースルーヘルの日の青年

「んー……ごめんけどその事は何も分からないわ」

「そうですよね……」

あー……永琳さんも知らないか……なんやかんやで忘れかけていた妖怪の怪奇死事件。結局尻尾も掴めてない。ここにある情報はやられた妖怪の死に方と場所のみ。それ以外何もない。

「んー……どうしようか」

「ごめんなさいね、力になれなくて」

「いえ、何か変わった事があれば言ってください」

本当にどうしようか……今は怪我で動けないし、何もできない。あー、こつそり出てもバレないかな？

「入院中に何処かへ行こうとか思っていないわよね？」

「え、エエ、ゼンゼンオモツテマセンヨ」

幻想郷の皆さんは勘が鋭いようです。

「あら、もうこんな時間ね、とりあえずもう一回包帯を取り替えましょうか。ウドンゲ」

！」

「本当だ、もう日が落ち始めている。とか、考えてるとあつという間に鈴仙がやってきた。」

「はいっ！なんででしょうか？」

「勇人の包帯の付け替え頼むわ」

「はいっ！喜んで！」

「あ、あの……もう、そのくらい自分で……」

「わ、私、必要無いんですか……？」

「いやいやいや！必要だよッ！めっちゃ必要！」

く……ッ！涙目で上目使いとは……此奴できるッ！クソウ……あんな可哀想なウサギのような顔をされちゃあな……

「そうですか！じゃあ、変えますね♪」

「あ、ああ……頼むよ……」

打って変わって上機嫌に……包帯を取り替えるだけなのだが、それが鈴仙には楽しいようで鼻歌まで歌ってる。仕事を楽しそうなのはいい事だ。

「はい、終わりました。それでは」

「1つ貴方に聞いていい？」

「はい、なんででしょうか？」

「ウドンゲと何かあったかしら？」

「ええ、これの前に包帯を取り替えてもらいましたが」

「それは知ってるわ。私が頼んだから。そうじゃなくて、ウドンゲがあんなに積極的に取り替えるなんて……本当に何も無かった？」

「ええ、特に……お話とかはしましたが」

本当に何も無かったと思うが……

「どんな話をしたの？」

「それは——」

〈青年説明中〉

「はあ……なんと言うか……無自覚でそれを言うあたりがタチ悪いわね」

「え、え？何か問題がツ!？」

「無いわ、無いのだけど……徳があり過ぎるのも問題よ?」

「??」

「どうして戦闘においては相当な切れ者なのに、そういうことは疎いのかなあ……」

「どういうことですか?」

「分からないのなら、分からないでいいわ。でも、覚悟はしなさいよ?」

「覚悟?はて?」

「まあ、ウドンゲとくつついてずっと勇人がここにいるのも悪く無いわね……」

「はあ……?」

よく分からんが……とりあえず仲良くしろよって事?

「すみません、勇人さんはいま……すか?」

「あら、貴方のお客さんよ?2名ね」

何故だろう。俺の本能が警告を鳴らしている。後ろを振り向くなど……

背中に強烈な暗黒のオーラを痛い程感じる。あ、あれえ?ここって地獄だっけ?

「勇人さん」

ギギギツと油がきれた機械のように頭を動かし後ろを見る。

「や、やあ。元気か？」

「そんな風に見えます？」

「こ、この俺が恐怖してるだど？ いや、誰でもこれは恐怖するつて。いや、笑つてはいるんだよ？ でも、眼が笑つてネエんですわ。寧ろ、人を射殺するような眼なんですわ。

狂気とかそんなチャチなもんじゃねえ、恐ろしい地獄の片鱗を味わったようだぜ……

「こ、これはだな、調査をだな……」

「へえ……お一人でですか？」

「ええ……」

早苗、怖い！早苗さん、本当すいませんでしたから……

「それではその傷は？」

「あ、ああ、これはだな？色々あつてだな？」

「色々じゃ分かりません」

うう……妖夢さんも怖い。

「いや、落ち着こう、な？」

「勇人さん、お薬で……あら、妖夢と早苗じゃない」

「れ、鈴仙さん？お、お薬もらうよ……」

「その前に話すことがあるでしょ？」

「あは、あははは……」

「これではダメですね……鈴仙さん！」

「何？妖夢？」

「勇人さんがなんで怪我したのか知ってます？」

「ええ、私のせいよ」

「「なっ!？」」

「本当に申し訳なかったわ……」

「ま、まあ、謝罪もしてくれたから、いいよ」

「やっぱり、勇人さんは優しいですね。それに私を 必要 としてくださってるのでしよう?。」

「ウエ?。」

な、何を？

「どういうことでしょうかね?。」

「……お、俺にもさっぱり……」

「何を言ってるのですか？あの時、私が必要と言ってくれたじゃないですか……ああ

……お互いに必要としているから結ばれるしかないですよね？」

「ふあッ!？」

そう言いながら自分で体を抱きしめくねらせる鈴仙。それに対し、暗黒のオーラがさらに強化されたもはや、近づくだけで死にそうなオーラを纏う、早苗と妖夢。

「……どういふことですか？ 私達はダメなのに……鈴仙さんはいいんですか？」

「そういうわけじゃ……」

「え？ 私が必要無いんですか？」

「お前の場合言い方に語弊が……」

「でも、必要なですよね？」

「アアアアアア！」

「みんな仲良くしてくれるのはいいのだけど、彼はけが人よ？」

「ここにきて、救世主登場。ああ、流石、永琳さん。」

「は、はい……」

「すいません、少し熱くなり過ぎました」

「す、すいません、師匠」

「まあ、お見舞いに来たのなら別に泊まっていつでも構わないわ」

「え！ チョッ！」

「もちろん、そうさせてもらいます」

「ええ、勇人さん成分が枯渇しかけたので……」

「いつからそんな成分できたんだよ……」

「因みに、無くなると発狂します♪」

「私입니다」

「oh……」

もうヤダ……お家帰る……あ、帰れないのか。いや、帰っても変わらんか……

「はい、お薬です」

「どうも……あれ？いつもより多くないか？」

「気のせいですよ」

「ふむ……そうか」

「それじゃあ、私はリンゴを剥きますね」

「そこまで重傷じゃあないからそんな事しなくても……」

「リンゴを剥きますね？」

「アツハイ……」

妖夢まで怖い……あの眼を直視できる気がしない。

「はい」

「ああ、ありがとう」

切られたリンゴに手を伸ばそうとすると妖夢がそれを手で制した。え？と小首を傾げると、妖夢はフォークにリンゴを刺してこちらに向けていた。

「大丈夫だ、自分で食べれる」

と言ったが妖夢も引くつもりが無いらしい。ただリンゴをこちらに向ける。顔を真っ赤にしながら。

「あーんしてください……」

はあ……恥ずかしいならやらなければいいのに……フォークがプルプル震えている。これで食べないのは流石に酷なので……

パクッ

シヤリシヤリと咀嚼をする。まあ、匂では無いのでそれほど甘みは無いがまあ、美味しい。

ただなあ、2人の視線が……そんな恨めしそうな眼で見ないで……

「ほ、ほら、もう時間だろ？お、俺は寝るよ……」

「それにしても早過ぎませんか？」

「さ、最近睡眠時間が足りませんから……」

「ふーん……分かりました。それじゃあ帰ります。さ、行きましょ？妖夢さん」

「え？あ、はい……」

あ、あれ？随分と簡単に引き下がるんだな……粘るか……
ま、まあ、こうして平和が訪れたのだ……と思っていた時代が俺にもありました。

その日の夜、いつもならもう寝付いてる時間なのに全く眠くならなかった。むしろ、眼がギンギンしててくるくらいだ。まあ、寝る事も出来ないので適当に本を読んでいたら「勇人さん、今お時間いいですか？」

思わぬ来客に少々驚く。やはり、夜遅くまで仕事してるのかな？人の命を救うというのも大変だな。

「今は暇だから構わない。どうした？ 鈴仙」

「少し用事が。そんなに時間は取りません」

まつすぐな眼差しでこちらを見る鈴仙。前は大分卑屈な感じがしたが、今ではいい眼差しに変わった。俺がきつかけで変わったのならそれはそれで嬉しい。だから、そんな真剣な表情を無下にするのはよく無いので

「ああ、俺にできるなら」

「あ、ありがとうございます！」

あまり深く考えずに答えた。鈴仙の役に立つならいいというぐらいしか。

「……………ふっふっ」

鈴仙が笑った。普通の人から見たら可愛らしい娘が微笑んでると思うだろう。しかし、俺はその微笑から深い闇を感じ取った。

危機を察知し、動こうと思った矢先体に異変を感じる。急な倦怠感を感じ、体がまるで鉛でできたかのように重い。

「お、お前何を……………？」

鈴仙が薬を盛ったのか……………？ はっ！ そういえばあの時少々薬が多かったような……………

「時間もびったり。効果は抜群ですね」

「お、お前……………！」

鈴仙の暴走は止まらない。動こうにも体が言うことを聞かない俺にじり寄ってくる。

「な、なんで……こんなことを……」

「理由なんて、いります?」

「??理由も無しにこんなことを?」

「そうですよ?」

何か問題が?とでも言ってるような様子で首を傾げる。そして、赤い瞳に深い闇を宿して……

「勇人さんには私が必要で、私には勇人さんが必要なんですから……」

まるで機械のような声音に背中に冷たいものを感じる。本能が俺に告げる。こいつはやばいと。だが、いくら警鐘を鳴らしても体はイマイチ反応してくれない。

そして、鈴仙はベッドの上上がり、俺の上に跨る。

「勇人さん……勇人さんは私が必要だと言ってくれましたよね……?」

「頼りにしてるとは言ったが……」

重い体を無理矢理動かし、後ろに下がる。しかし、鈴仙も合わせて寄ってくる。

「私にも勇人さんが必要なですよ……だから、2人が一緒にいるのは当然ですよね?」

「だ、だからか?」

鈴仙は返事の代わりにもつと寄ってくる。俺も下がるが、背中に壁が当たる。だが、鈴仙は止まらない。

もう少し近づけば唇が当たる距離にまで迫る。そこでまた体の異変に気付く。

「はあ、はあ、お前薬に何を？」

「筋肉弛緩剤と……媚薬です」

「はあ？」

どうりで体も熱い訳だ。息も荒くなってくる。

鈴仙の吐息を嫌でも感じてしまう。しかし俺は恍惚とした表情で俺を見つめる鈴仙から眼を逸らすことはできなかった。

「もつと、私を必要としてくださいね。……勇人さん、勇人さん、勇人さん、勇人さん、勇人さん、勇人さん、勇人さん、勇人さん、勇人さん……」

壊れた再生機のように俺の名前を繰り返す鈴仙。早く不変の空間を作らないと思いが、鈴仙の狂気と官能の匂いに加え媚薬のせいで思考が混濁していく。

気付けば、鈴仙の整った顔がもうすぐそこまでに迫って……

「こんな時間にすいません。やはり、勇人さんが気になっ……」

突然やってきた妖夢と鈴仙の眼が合う。しかし、それはすぐに終わり、白刃が煌めく。あれからも修行を重ねたのだろう。始めて戦った時とは比べ物にならない程の速さ

で鈴仙に迫る。

しかし、鈴仙も突っ立っているだけでは無い。鈴仙も格闘においてはかなりのものを持っている。

瞬く間に妖夢の手首を掴み、そのまま懐に入り込み軽々と妖夢を投げる。しかし妖夢は空中で体勢を整え俺の目の前に着地する。

「何があつたのですか？」

「お、俺にもサツパリだ……」

そう言い、妖夢は再び構える。幼さが見える顔ながら、そこには確かな信念がありそれによつて凜々しさを感ぜさせる……その、白髪も……はっ！お、俺は何を？さつきから理性が……！

ああ、幼さと大人らしさが混在した……

「違うツ！そうじゃあないツ！」

「ゆ、勇人さんっ!?!いきなり頭を壁に打ちつけたりして!？」

「HANASE!お、俺は媚薬なんぞに理性を失われてたまるかツ！」

「ゆ、勇人さん!正気が失われてしまいますッ！」

「妖夢さん……貴女……勇人さんに何をしてるのかしら？」

「それはこつちのセリフです」

「互いに必要としているから一緒に居るだけよ？だから、共にいるのは当たり前でしょ？」

「話が飛躍すぎです。貴女はただ、一方的に求めているだけです」

「理屈なんていらなわ！私には頼りにしてくれる人が必要なの！」

「勇人さんはどちら側に立つんですか？」

鈴仙の気持ちは分からなくてもない……月から逃げて来て臆病者のレッテルを貼られた屈辱。それを負い目に暮らす日々。精神に相当な負担があつただろう。

しかし、それはただの鈴仙の言い分に過ぎない。冷静に見れば妖夢が正しいということとは明々白々だ。

しかし……

「俺が……どちらかに立つと言うのは答えられん……」

「ふふ……優しいのですね」

「ただのヘタレだ……」

「それでは私は私の立場を貫き通させてもらいます」

再び妖夢と鈴仙が交差する。

妖夢の斬撃は圧巻の言葉に尽きる。しかしとて、鈴仙はそれを受け流す。その攻防戦は流石としか言いようがない。

しかし、戦いには必ず終わりがあり……

妖夢が脚を狙うが、鈴仙はそれを跳んでかわし、そのまま妖夢の側頭部にめがけて回し蹴りをする。すかさず、もう1つの刀でそれを受け止め、間合いを取る。

「ハアアアア！」

一気に間合いを詰める2人。これで終わらせる気なのだろう。

しかし、その終わりはどちらかが勝ったわけではない。

突如現れた弾幕によりそれは終わりを告げた。

「さ、早苗！」

「無事……では無いようですね……酷い格好をしていますよ」

「はは……」

「弾幕をすでに張っていますから動かない方がいいですよ」

普段はのほほんとした彼女だが、珍しく今回は明確な敵意を向けていた。

「ふう、助かった……どうして、ここに？」

「いや、勇人さんと2人きりになれるかなって」

「……………」

「ところでこれはどう言うことですか？鈴仙さん」

「……………ッ！」

流石に妖夢と早苗では分が悪過ぎる。

追い詰めるように歩を進める早苗。だが、俺はそんな彼女を引き止めた。

「勇人さん？」

「ここは俺に任せてくれないか？」

「……………いいですけど」

俺を見つめる赤い瞳は先ほどのような深い闇を宿していなかった。不安、動揺、執着……様々な感情が入り混じってるようだ。

「安心しろ、誰もお前がいらなんて思っていない。もちろん俺もだ」

「……………」

「前も言った通り、お前のことは頼りにしてる。これはまぎれもない本心だ」

「……………いいんですか？ 私みたいな臆病者で、弱虫で、そのくせ自分勝手な私なのがいいんですか？」

「そんなことを思ってるのはお前だけだ。みーんな、お前のことを頼りにしている。だから、そう卑屈になるな。それとも、俺のことが信用ならんか？」

「そんなことは……………」

「なら、もう決まりだな。今後こんなことをしないなら、今回のことは水に流そう、な？」

「は、はい……………」

「妖夢と早苗、ありがとな」

「当然のことをしただけです。私としても、勇人さんがたらしだということが分かったので」

「た、たらし?」

「そうですね、どうぞ鈴仙さんとご自由に」

あ、あれえ? 2人のご機嫌が相当斜めなんだが……

「ゆ、勇人さん……」

「ん?なんだ? 少し外を歩きたいのだが……」

体はある程度動くようになったのだが……未だに体が火照ってる。雑念が入る前にどうにかしたいのだが……そうでもしないと理性がな?

「私を抱きしめてください!」

「ぬあ?」

「「え?」」

これは試練だ! 耐えるのだ!

「わ、私も!」

「え! ちよつ!」

まあ、ここでの騒ぎはひと段落したことで……

「ヌアア……俺、頑張った……」

はは、やってみせたぞ……ただでさえ魅力的な女性を抱きしめて、理性がマツハで削れている上に媚薬の効果。何度頭を叩きつけた事やら。おかげで頭にはガーゼを当ててる。夜？寝れませんでしたよ。

「勇人!!」

「ん？」

「勇人！探したぞ！」

「慧音さんじゃないですか、どうしたんですか？」

「例の妖怪の怪奇死のことだが……犯人の尻尾を掴んだ」

「え!? 本当ですか!？」

「ああ……だが……な、チルノが……」

「チルノがどうしたんです?」

「チルノが犯人にやられた」

「え?」

「チルノは妖精だからすぐに復活する安心しろ……勇人?」

バチ、バチ、バチバチバチバチバチバチバチバチ!

「早く教えてください……!」

第58話 発見の日の青年

「早く教えてください……！」

「お、落ち着け！焦っても意味が無いぞ！」

「ん……！そ、そうですね、つい熱く……で、その犯人は？」

「まだ分かったわけでは無いが……証拠らしき物は見つかった。フランとチルノと大妖精が見つけたそうだ」

「それで……チルノが……」

「すまない……教師なのにこんなことに……」

「いえ……慧音さんは悪く無いです」

「そう言ってくれると助かる。フランと大妖精はチルノの迎えに行つてから来るそうだから、その娘達の迎えに行つてやつてくれ」

「はい、では、慧音さんは？」

「この紙から手がかりがないか調べる」

「了解です」

「あれ？慧音さんじゃあないですか」

「ん？早苗と妖夢か……ここになんではいるんだ？」

「勇人さんのお見舞いに……」

「？勇人はここに調べに来たのではないのか？」

「そうなんです……実は色々あつて怪我しちゃったんです」

「その色々は聞かんが……まあ、災難な奴だな」

単調な風景、非常に成長の早い竹、地面の僅かな傾斜で斜めに生えた竹による平衡感
覚の異常、などが原因で非常に迷いやすい『迷いの竹林』。その中を迷ってるような
様子もなく進む青年が1人。

「チルノがやられた、か……チルノはそんなに弱いはずが無い……普通の人間では無い
と見るのが妥当か……」

「……………」

「誰か後ろからついて来ている……それで、気配を消したつもりか？妖力がダダ漏れ
だ」

迷いの竹林の出口とは真反対のところに向かう青年。

「……………」

「（こいつ妖怪なのか？人間にしては妖力が大きいし……妖怪にしては殺意が全く感じ
ない。襲う気配も全く無いぞ）」

走り出す青年、それについて来るかのように追いかける影1つ。

「走ってもついて来るか……こいつ……例の犯人か?……確かめる価値はあるな」

走る青年。追いかける影。青年が竹林の中に消えていき、影も追いかけるが見てみれば青年はいない。

「……………」

「俺を探してんのか?」

「!!」

「うーん……この文字は……んー……」

「あら、だいぶ悩んでいるようね」

「永琳か……文字だけが手がかりだからな、だが、チルノが必死にもぎ取ったものだ。是が非でも犯人を見つけないと……!」

「まあ、程々に、頑張りなさいなって、紙が落ちてるわよ」

「ああ、すまない。生徒の宿題を落としたようだ……ちよつと待て……こいつの字……」

「どうしたのかしら？」

「この字……似ている！この字も！こいつか！分かったぞ！しかし、生徒が犯人だとは……つまり、勇人も危ない！早く伝えないと！」

「貴女も落ち着きなさいな……つて言つちやつたわね」

落とした宿題には『当麻琥太郎』と書かれていた。

「あのさあ……ずつとつけてるの分かってんだからな？何をした……いんだ……？」
ずつとつけて来た影を見てら青年は驚く。無理もない。その影は寺子屋で見た顔だからだ。

「お、お前は……寺子屋に最近来始めた……『当麻』じゃないか……?!?（人違いか?でも、妖力はこいつから感じている……!何故?今まではそんな様子は無かったぞ?）」

「……………フツ」

「今までの事件はあんたがやったのか?」

「だから?知ったところで……意味はない。……お前は死ぬんだからなッ!」

当麻の鋭い蹴りが勇人に迫る。その蹴りは素人の蹴りそのものだった。だが、速さが人間のそれではない。

「……………ッ!」

その蹴りは勇人の腹を掠めたがダメージにまでは至らなかつた。

「あんた……人間か?その速さ……パワー……人間じゃあ無いぞ?」

「ハハ……凄いやな?あの青い奴って凄いパワー持ってんだな」

「……………は?」

「いやー、あいつを倒すには苦労したよ。だって、凍らせてくるんだもん。まあ、俺の前では無意味だな」

「……………やっぱり、あんたか……生徒だから少し躊躇いがあつたけど……もういらないな」

「あつそう。だからッ!」

バツ

金槌のような、速く、重い拳が勇人の顔付近を通る。

「……クツ！（やつぱり、こいつ人間じゃねえ！この拳が当たったら吹き飛ばぞー！）」

バツ、バツ

「（チイ……戦い慣れしてやがる……全部見切ってるようだな……だかな……あの青い奴のおかげで相当な量のパワーを奪い手に入れた！もはや、ただの人間なんか相手にならないッ！）」

シュツ

「クツ!!」

当麻の拳が勇人の頬を掠める。

「（あ、あぶねえー！あと少し遅かったら……）」

「うーん、惜しかったなあ。やつぱり、噂通りの強さだな」

「あんたに聞くが何故こんなことを？」

「あ？お前に教える義理はねえよ」

「なら、吐いてもらうまでだな」

「ふんつ、お前もあの青い奴と同じようにしてやる。そうだ、お前を倒したら、金髪の子や緑髪の子も同じようにしてやるか」

「……なんだと？」

「もう一度言ってみやがれ」

「ああ、何度でも言うさ、あの2人もぶっ殺してや……バツ

勇人の拳が当麻のすぐ目の前までに迫っていた。

「さ、流石だな（な、なんだあの速さは？見えなかったぞ？）」

「不意打ちは男として情けないからな……」

「そう言い勇人は構えを取る。

「（腕は顔の横……重心は……）」

「そうか……（なんだ？あの構え？まあ、関係ない。今の俺はあいつより速く、殴れる。それに、リーチもこちらの方が長い。もし当たったとしても、今までの妖怪で奪って来たパワーにより強化されたこの身体なら……肉を差し出し骨を頂く……あいつの拳を耐え、そのまま俺の拳を叩き込むのみ！）」

タツ

「勇人が地を蹴る。そのまま当麻の元へ一直線に進み、近づいたところで拳を向ける。

「オラア！」

「勇人の拳が当麻に迫る。しかし、同時に当麻の拳も勇人に迫っていた。勇人の腕より長い当麻の腕は勇人の拳より先に迫る。

「もらった!!」

ズサッ

迷いの竹林に人影2つ。1つは立っており、1つは横たわっている。

「な、何故だ……！」

倒れているのは当麻。

「タイミングは完全に俺の方が速かった！」

「もらった!!」

当麻の拳が勇人の顔に迫る。だが、勇人は当たる直前に

クルッ

「なっ!?!」

顔を捻り、そのまま、後方に旋回し、そのまま肘打ちを当麻の顔へ

ゴオン!

「グゲエ……………」

まともに喰らった当麻は、糸が切れた人形のように崩れた。

「バックスピネルボー……………つて、言っても分かんないか」

「な、何故だ……………?この身体は……………」

あの膝打ちはただの肘打ちじゃない。なんと、肘に靈力を集中し、強化されていた。上級妖怪でも堪える攻撃だ。ましてや、少々強化したぐらいの人間では1発KOだ。

「ぐ、グゾオオ!」

さっきの攻撃により、頬の骨が折れたようだ。

「本当は俺がぶっ殺したいところだが……………紫さんには捕まえるって言われたからな、生け捕りだ」

勇人はそのまま当麻の首根つこを『触る』。

「ハハ！『触った』な!？」

「ん!？」

異変を感じ取り、離れようとする勇人。だが、遅い。勇人は知らなかった。当麻の能力を。『力を奪う程度の能力』をッ！

ドシユッ！

「うげっ！グッ!!」

「ハハ……ハハハハ！バカが！俺のことはよく知っておくんだつたな！」

「さあ……霊力をくれエ〜〜ツ、お前の霊力をくれエ〜〜！」

「ど……. どんどん『霊力』が抜けてく！」

「霊力だけじゃねえ、生命エネルギーもくれエ〜〜！」

「ゴフツ……!ふ、不変の結界を……!」

「張れないツ!？」

「ハハ！流石だな！今までの比ではないぐらいにパワーが上がったぞ！」

「先生ー！どこにいるのー！」

「ふ、フラン!?」

「あれー?確かに先生の声がして来たんだけどな……」

「(な、何故フランがッ?不幸か幸いか……)」

「この辺から……つて、いた!先生!」

当麻はフランからは見えないように勇人に触れたまま竹林に隠れた。

「なあ、先生……フランつて奴を呼べ」

「先生!何してるの?大丈夫?」

「『こつちに来てくれ』つて言えよ……お前があいつを呼べば生命エネルギーを少し残して命を助けてやる。代わりにあいつの力を全てもらう。なあ、協力しろよ」

「……………」

「命だけは助けてやるよ……早く呼べよ」

「先生、顔色悪いよ?何かあった?」

少しずつフランは勇人に近づく。

「早く言えよ!怪しんで近づいてこねえじゃないか!」

「ふ……フランを差し出せば……本当に命は助かるのか?」

ニタア

「ああ、約束するよ〜つ、奴の力との引き換えにだ。呼べ！」

「だが断る」

「はあ!？」

「俺は教師だ。教師である俺が生徒をわざわざ危険な目に合わせるわけがないだろ！」
「逃げろツ！フランドールツ！これ以上近づいたら危険だつ！」

「えっ?」

「お、お前！」

「そこに誰かいるんだねツ！私が壊してあげる！」

「く、来るな！触られたら、フランドールでも勝てんぞ！」

ピタッ

「やった！触ったぞ！こいつの力もいただき！」

ドシユツ！

「きやつ！ち、力が！」

「オラア！」

勇人の血がフランに、着く。すなわち、

「あ？奪えないぞ？」

「フランドール！お前を不変化した！今の内に逃げろ！」

「え？え？」

「落ち着いて聞くんのだ！こいつは触れない限り、力を奪えない！今は不利だ！この狭い中じゃ不利だ！早く広いところに行け！」

「うるさいんだよ！こいつ！」

ドギユウ！

「ガッ………！」

「先生！」

「い、今は逃げろ！俺は大………」

「うっ、分かったよ！ごめんなさい！」

「チィ……！逃げられたか……」

「まあ、いい……こいつは凄いで！このパワー！今までとは比べ物にならないぞ！」
倒れている勇人は目を開けない。

「ふー、手こずったが……一番の問題を解決だな……こいつの能力も気になったが……
もう用無しだ」

「もう、隠れる必要は無いな！」

迷いの竹林の中で不快な笑いが響く。

第59話 正義の日の青年

迷いの竹林の上空を飛ぶフラン。太陽の下で吸血鬼が活動しているのはおかしいと思われるが、魔法のおかげか普通に飛んでいる。

その顔を涙で濡らしながら。

「(また、私のせいだ……チルノと同じように先生も……!-)」

「(早く皆を呼ばないと、先生が死んじゃう……ッ、それだけは嫌だ!絶対に嫌だ!)」

そうしてうちに目的地——永遠亭が見える、永遠亭の入り口の前に降り、入ろうとした時

「やあ……嬢ちゃん」

「え!?なんであんたが!?!」

「あの教師から力を得てからというもの……空まで飛べたぞ!元々鼻がきくからな、ここに来ることは予想したさ」

「……だから?お前なんか……ブツコワシテアゲル!」

「おーっと、動くな！あの教師はまだ死んじやあいない、少し生命エネルギーを残してやってる。俺の能力は離れていても発動するからな……」

「……ッ！卑怯よ！」

「ハハ！関係ないね！これが俺の『正義』だ！」

「(どうしたら、いいの？知らせないと……でも、勇人先生が、殺される……ッ！どうしたらいいの！)」

「動くんじやあねえぞ……」

「……ッ」

当麻の手がフランに触れる。

「ハハ……残念だがお前もあいつらと同じようになる」

「ねえ……その能力って……1人にしか使えないのよね？」

「!？」

「そうよね、だって、私に触るためだけにわざわざ先生を人質に取るんだから……」

「な……ッ！」

フランは右手をパーにし当麻に向けて、

「ギュツとして……」

手を握り締めた。

ドガン！

「やった……」

先程の爆発により辺りが煙に覆われる。

「先生のとこに……」

ドシューッ

「きやつ!？」

「グッ……危ねえ……あと少して跡形も無く吹き飛んでた……」

「なんで!？」

「焦りすぎじゃねえのか？よく狙ってからやるんだな」

フランは永遠亭へと走る。

「おっと……まだ能力は解除して無いぞ？」

ドシューッ

「え、永遠亭までたかが数メートルよ！こんな距離！」

「タフだな、だが限界だろ？」

「うッ！あと少し……!？」

あと数メートルが届かない。フランは倒れる。

「ほらほら！もう無理だろ？」

「絶対……みんなに知らせるツ！絶対にみんなに知らせて……あんたをぶちのめして……」

ガクッ

「絶対に……永遠亭……に」

「はー……見上げた根性だぜ」

「大丈夫か……？最近は当たりが多いからな……あの青い奴の力をもらってからパワーがみなぎってたんだが……あの教師とお前でさらに強化されたよ」

「ハー……ゼエー……うぐっ……」

「お？まだ動くか？」

バタツ

「(やった……こいつも始末できれば、もう怖いものなんて無いぞ！)」

「お、お前……なんか……先生が……みんなが……倒すんだから……お前なんか……より全然強いんだから！」

「……うるせえ、早く死ねよ」

当麻の右足がフランの顔に迫る。

パァーン!

「!?」

「その足をどかしやがれ……」

「な……何だーッ!?!」

そこにいたのは始末したはずの人間——碓氷勇人がいた。

「バカなッ! な、何で立てるんだ!?! 干からびせたはずだぞッ! 何で立ち上がれんだよ!?!」

「理由か?」

「わしじゃ」

「!? だ、誰だ!?!」

「ホッホッ……こいつの祖父だよ」

「あー……本当に運が良かったぜ……」

「そうじゃの、わしが永琳の所へな睡眠薬をもらいに来たからの。この歳になるとな、寝付けないのじゃよ」

「あ!?! それだからって立てるわけが無いッ!」

「わしの事知らんかのう……『神力を宿らせる程度の能力』なのじゃが……」

「ああ、おかげで力は回復させてもらった！」

「だからなんだ！お前、フラフラじゃねえか！強化された俺に敵うわけが無い！」

「フツ！」

腰を使わず腕の瞬発力だけで繰り出す軽めの殴打……だが、これにより

「グツ!？」

隙が生じた。この隙を逃すわけもなく……

「オラア！」

今度は体重を乗せた拳が当麻の腹に

ドゴツ

「グフツ!？」

声も出すことができずにその場に膝をつく。

「アガッ……ゴボツ！」

息が詰まったようだ。空気を求めるかのように口をパクパクさせる。

「ゴホッ、ゴホッ！フフ……なら、お前をもう一度……」

「あ、あんたの能力を使おうたって無駄だ」

「……!？」

「忘れたのか？今の俺は誰からも干渉されないからな？」

「な!?!」

「ということまで……チルノの仇もあるからな……」

当麻の額に銃口を向ける。

「ぐ、グゴアアアアアア!」

パァン!

「ぐ………ツ!?!ど、どういうつもりだ!?!」

「本当はぶっ殺したいんだが……生け捕りにしろと言われてるし………何よりもあんたが何でこんなことをしたのかを俺は知りたい」

「はあ!?!」

「お前の過去は知っている。生徒から聞いたからな」

「そんなことはどうでもいい！早く仇を討てよ！」

「あんたの過去を知つといて殺すなんて出来やしない」

「ふ、ふざけるな！」

「それに……あんたは生徒だ。教師である俺が生徒を殺すなんて言語両断だろ？」

「そうだとしても……俺は妖怪を殺すのはやめない！」

その目には憎悪の感情がどす黒く渦巻いていた。

「俺が言うの何だが、お前の気持ちは分かる。なんせ、家族を殺されたのだからな。妖怪を恨むのも仕様がなない」

「なら、なぜ止めようとしない?」

「だがな、妖怪の中にもいい奴がいることを忘れないでほしい」

「はあ!? そんなわけが無い！里にいる妖怪だっていつか、里のみんなを襲うに決まってる！」

「なあ……それなら、人間は全員、『いい奴』なのか？」

「な……!?!」

「ここにはたくさんの方がいる。その中にはいい人はいる。だがな、同時に『悪い奴』だって存在する。全員が全員『いい奴』なんてありえないだろう?でも、俺らはその中

で生きている」

「ぐ……ッ」

「逆に人間が全員、『悪い奴』ならやっつけていけないだろ？それは妖怪にだって言える。全員『悪い奴』じゃない。優しい妖怪だって絶対に存在する」

「で、でも、もし！もし、悪い妖怪が俺らを襲ったらどうするんだよ？また、あの時と同じように黙って見てろと言うのか？」

「はあ……何で、慧音さんがいるだろう？俺だっている。幻想郷のパワーバランスの一角、舐めんな。全て、俺がぶっ倒す」

「俺は『悪い奴』なのか……？」

「悪い奴なら、里のためにとかなんて言わない。お前は打ち立てた『正義』がすこし違う向きに向いてしまっただけだ。空を正しい向きに向ければ絶対に里を守る」

「俺は……俺は……」

「無理に妖怪と仲良くしろとは言わない。でも、人間の味方の妖怪だっていることは忘れないでほしい」

「うぐっ……ヒグッ……」

迷いの竹林の中で事件の全貌が明らかとなった瞬間であった。

「フツ……流石勇人ね」

「じゃろ？」

「あら、随分と久しいわね。すっかり老けちゃって」

「はー……お主はわしよりもずっと歳上のはずなのじゃが……変わらんのか……それに、わしがここに来るように言ったのはお主じゃろ？」

「そうよ」

「はあ……相変わらず食えない奴じゃ……」

あの事件のことを伝えておく。あの一件以来、当たり前だが妖怪の怪奇死は無くなった。その犯人である、当麻はあれ以降表面は変わらないが、寺子屋に来て同世代の子達

と話すようになったようだ。妖怪に対してはやはり憎しみは残ってるようだが、前程でも無く、ある程度良くなったそうだ。1つ問題を挙げるなら、

「はあ!?!弟子にしろつて?」

「はい、お願いします!」

「いや、待て。俺とあんたは同世代だろ?」

「でも、あなたはこの世界のパワーバランスを担うと同時に人里を守ってくれてるのでしよう?それに教師までも。少しでも負担を減らせるように僕は強くなって、この人里を守るようにします!」

「その決意は素晴らしいが……俺は弟子とらんぞ?」

「そこをなんとか!」

と言う具合に真っ直ぐになってくれたが……真っ直ぐ過ぎる所だ。

後、色々お世話になった永遠亭では……鈴仙と一悶着あり、なんやかんやで一件落着いてたかに思われてたが……

「勇人……この宿題の採点を」

「あ、はい」

今日もとて、仕事の量は半端なく忙しく丸つけをする、いつもの時間だが……

しかし、若干の異変を慧音さんは感じ取ったようだ。

「ところでだな……勇者……」

「……はい」

「分かっているかもしれないが……」

「………」

「あそこから鈴仙がずっとお前を凝視しててのだが……」

「じ—————」

ええ、分かっています。あれ以来、寺子屋の外側にある木からずっと俺を凝視するようになった。何かをするわけでは無く、ただ俺を熱烈な眼差しで見続ける。

「………」

ホラー以外のなんでもない。

「慧音さん………」

「はー………徳を持つのはいいことだが……持ち過ぎも問題だな……」

「それ、永琳さんにも言われました……」

とりあえず、日常に戻ったと見て問題無いかনা?

第7章 変わらない者と変わる者（鬼の半妖さんとコ

ラボ企画!!?）

第60話 襲来の日の青年

俺は今、とても悩ましい事に直面している。

場所は永遠亭。周りには妖夢、早苗にじいちゃん。当たり前だが、永琳さんと鈴仙。「さて、今回来てもらったわけかね……」

悩ましい事の原因でもある紫さんが口を開く。ああ……どうしてこんな事に……俺の平和は何処へ……

そう思いながら、忌々しいあの空に浮かぶ城ーラピユタ……じゃないが見るのだった。

話をしよう。俺は事件解決以来平穏な日々を堪能していた。

仕事がある日は朝6時に起床し、顔を洗い、朝食を取る。そして、コーヒーを飲みな

がら、その日の授業の確認をする。まあ、この一連の流れには必ず、妖夢か早苗がいるのだが。

生徒が増えた今、クラスが増え、教師2人の中、馬車馬の如く働いている。俺は主に和算、慧音さんは歴史という具合に分配している。

あと、チルノやフランドールなどの『人間』ではない娘達の担当は俺がしており、楽しい日々を過ごさせて貰っている。チルノ、フランドール、大妖精、ミステイア、リグルそして、新参者のこいしと橙。こういった一癖二癖もある個性的な生徒達と過ごせて、中々いい仕事だと思う。あ、ロリコンでは無いから悪しからず。

ま、午前10時から午後3時までには授業をし、間の時間で宿題の丸つけをや採点、時にはテストの作成などをしている。この時、たまに外を見ると鈴仙がこちらを相変わらずの熱烈な眼差しで見られてるが気にしない。

そして、授業が終われば紅魔館の図書館で本を読む。その図書館は様々なものがあり、そこから体術や霊力の扱い方をより応用できるようにした。

そして、夕方には妖怪の山の麓にある家に帰り、ダラダラ過ごす。

そういつた、平凡でかつ変哲も無い、一見したら面白味のない生活に見えるような暮らしをしている。だが、俺からしたら、元の世界で何の目標も無く、ただぼんやりしたまま高校に行き、人との付き合いも深くせずー灰色のような生き方をしていたのと、

比べれば今は人里を守ることや、生徒に教えることや、妖夢や早苗達のように気兼ねなく話せるようなこの環境は幸せ以外の何者でも無いと感じる。まあ、平凡な物こそ得難いと言うこともあるけどね。

つと、回想はここまでにして、本題に。何故こんな事になったのか？ そうだな……あれは今から36万……いや1時間前だったか……

その日の俺は寺子屋が休みのため、休日を寝て暮らす事にしてた。死ぬ程働いた後（お陰で格好は昨日のカッターシャツに制服のズボン）のベッドは呪いの如く睡魔へ誘うのだが……それを邪魔する者が現れた。

「失礼するわ〜」

突如空間にスキマが生じ、不気味なところから上半身だけ出る女性——幻想郷で会いたくない相手No. 2の賢者 八雲紫。無論、No. 1は射命丸文だ。

「失礼と思うなら来ないでください」

「あら、冷たいわね」

ヒドイわと嘘泣きをする、スキマ妖怪をほつときながら、ベッドの呪いに身を任せようとした時、

「貴方にね少し頼みごとがあるの」

「そういうのは霊夢に頼んでください」

「いいじゃないのだから……」

「霊夢がめんどくさいって」

「あら、分かっているじゃない」

人を何だと思っているのか、このお方は。あの事件もこの妖怪に押し付けられ、さつきと同じ理由を並べやがった。

「俺は教師です。決して便利屋では無いんですよ？」

「ええ、ケチねえ。いいじゃないの少しぐらい」

「前回の事件では色々大変でしたからね、今回もまともなやつなわけがないです」

「そこを何とかね？ね？」

上目遣いしても何もならんぞ。美人なのかもしれないがはっきり言ってしまうと、年増の女性が若く装おうとしている風には見えない。

「貴方、失礼な事を考えてたでしょ」

「べ、ベツニ……」

幻想郷のお方は勘が鋭い——ここ大事よ。

「と、兎に角、俺は休みたいんです。だから、お引き取りください」

「もしかしたら、人里、いや幻想郷全体の問題にもなるかもしれないのよ？」

思わず反応してしまう。その反応を紫さんは見逃さなかった。

「それでいいのなら、突っぱねてもいいわ」

「わざと人里つて言いましたね……」

この人……あの言葉聞いてたのか……はあ……流石『賢者』、いや、食えないやつか。
「貴方も大概よ？」

「人の心を読まんといってください」

「それじゃあ、協力してくれるわね？」

「はあ……次からは霊夢に頼んでくださいよ」

「ウフフ……やっぱりツンデレね、この野郎！」

拳銃に手が伸びるが何とか思い留まる。

「で、その内容は？」

「そうね、場所が悪いから……それっ！」

「は？ハアオアアアアアアア！」

床が急になくなった感覚がした。

ズトンッ

「イテテ……」

派手にケツから落ちた。

「あ、勇人さん！」

「ん？早苗か……ここは……ああ、永遠亭か……」

すぐに分かってしまう当たり、どれだけ永遠亭にお世話になったか分かる。多分一番お世話になってるんじゃないか？

「だ、大丈夫ですか？」

「ああ……問題無いさ……」

妖夢の気遣いに心が洗われるのを感じながら立つと周りにはじいちゃんまでいた。

「え？何でじいちゃんも？」

「ハツハツ！わしも紫に呼ばれての！」

「そうよ、私が呼んだわ」

いつもの着流しを着た真つ白な白髪的好々爺のように見える老人。それが俺の祖父だ。名前は……

「勇人さん！私に会いに来てくれたのですね!？」

「……………」

「も、もしかして、結婚ですか!? きゃー! / /」

「……………」

「少々早い気がしますけど……私はいつでも構いませんよ / /」

「……………」 (白目)

「子供は2人は最低でも欲しいですね……」

「永琳さん……………」

「私はいつでも歓迎よ?」

「oh……………」

この妄想全開の兎さんは……純粋な好意は嬉しいのだが……少々重い。

「ゆ、勇人さんは渡しませんよッ!」

違う……俺は早苗の物ではありません。そして、服の裾を掴まないでください、妖夢さん。

「ハッハッ! わしの孫はモテモテのよお!」

このジジイ……………」

「はいはい、勇人の所有権については後にしなさいな」

「おい待て」

そして、今に戻り……

「さて、今回来てもらったわけわね……」

無視ですか……

「お気付きの人も多いでしょうけど空に浮かぶ城が現れたわ」

「ええ、知ってますよ」

「私もです」

「同じく」

「わしもじゃ」

「え、何それ知らない」

初耳なのだが……

「そこで！あの城を調べて欲しいのよ」

「いや、めんど……」

「そうですね、不気味ですし」

「何か異形の者が現れるかもしれないしね」

「それに少し面白そうよね」

「調べる価値はあるな」

「……………」

何でみんな乗り気なの？

「それじゃあ決まりね！」

「いや、めんど」「決まりねッ！」……………」

俺に拒否権なんてなかった、いいね!?

「ああ…………俺の休日…………」

はあ…………とつとと終わらせよう…………と言いたいがこう言っ
て早く終わった試しが
無
い。

「それじゃあ、早速行ってきて頂戴」

「「はい！」」

「うう…………」

「ほら、行くぞ！」

「はあ……」

「ため息ばかりですと幸せが逃げますよ?」

「残念だが……先程幸せをむしり取られたばかりだ」

本来ならフカフカのベッドでぐっすりのはずだったのに……

「フフ……勇人さんと一緒……」

「お前さん……いつの間に……」

「勘違いしないでくれじいちゃん……」

「ぬう……そこは聞かんでおこう……そうじゃ、最近の妖夢じゃが……不機嫌な時が多い。お前さんからも白玉楼に来てくれ」

「あー……分かった」

「ん?人影が見えますよ?」

「え?どこだ?」

「ほら、あそこに」

「むー……どれだ……あ、いたいた……咲夜も一緒?」

んー……背は……170はあるな……クソツタレ!で……年は同じくらいか?だが……右目が赤色、左目が紺色のオッドアイだ。

「怪しいですね……」

妖夢の言う通りだ。まず、目の色が普通の人では無いよな……それにただの人間が迷いの竹林に入るはずがない。ましてや、あの事件も相まって余計に不審に感じる。何よりも……あの羽根が普通では無いと教えてくれる。

「んー……あいつの波長は危ない気がするわ……」

「前回のこともありますし、ここは牽制でも入れるべきでは？」

確かに早苗の案は正しいかもしれないが……あいつを見るとどこか引つかかるものがある。んー……なんだろうか？

「いきなり攻撃も良くないと思うが……」

「大丈夫です、牽制だけですから」

そう言い、俺らはその人達の元へ降りる。やはり、俺よりは背が高い模様……チツ

そんなことに嫉妬したら、早苗と妖夢と鈴仙はもう弾幕を撃っていた。

ただ、そこには目を疑う景色があった。

羽根だけでも十分に変だと言うのに何と腕から刃物が出ていた！そして、

「ハアアアアアア!!」

「!!?」

全ての弾幕は斬り捨てられ、肝心の本体はこちらに向かっていた！さらには咲夜まで

!

こちらとて、戦いに慣れてないわけでは無い。すかさず戦闘態勢に皆はいる。俺も2
丁拳銃を取り出し構える。

ああ！なんでもう面倒ごとが起こるのだ！

第61話 平穩に暮らしたい日の青年

戦いの火蓋は俺たちが牽制を入れることで切られた。あいつ……只者じゃない……直感なのでは無い。裏づけがあつた上での確信だ。

牽制と言えども、幻想郷でも指折りの実力を持つ、早苗と妖夢と鈴仙の3人の弾幕をいとも容易く斬り捨てた。右手に刃物を出して。

これを見て、逆に普通だという奴はおかしい。しかし、俺はそれ以外にも引つかかるものがあつた。

あいつといる、咲夜である。レミリアの従者のはずだが……どういうわけかあいつと一緒にこちらと戦う気満々である。咲夜とは面識が無いはずがない。紅魔館にはちよくちよく訪れるし、その度に咲夜とは会っている。顔見知りのはずだ。

だが、今の彼女にはそういった様子もなくただこちらに向かつてくる。

「勇者さんッ！来ますッ！」

「ああ！分かつてる！」

今回は相手が得体の知れない者なので早苗達には申し訳ないが後衛に回らせてもらう。半径5メートルなら、不変化できる。もしもに備えておこう。

そう思った矢先――

「『ザ・ワールド《世界》』！」

「グフウツ!?!」

腹にまるで車が突っ込んだような衝撃が走る。身体は後ろへ吹っ飛ぶ。何をされた!?!例のあいつは俺とは離れている。

「ほほう……少しはタフなようだな……」

背筋が凍るような冷たく残酷な秘めた声。しかし、俺は恐怖の前に今起こったことの整理を優先した。

「……………!?!」

早苗と妖夢と鈴仙は俺と同じように吹き飛ばされていた。

「フツ、青ざめたな?」

何もかも見下すような冷酷な眼差し。まるで、俺の動揺、恐怖を見透かすように言葉を繋ぐ。

しかし、俺も今まで呆けて生きてきたわけでは無い。すぐに動揺を直し、相手の威圧に呑まれないように睨む。そして、右足を踏み出しあいつへ向かう。

「ほほう……向かってくるか……」

「向かわなきや、あんたをぶっ飛ばされないからなッ!」

「……勇氣と無謀は違うぞ?」

後7メートル……6、5、4……

『ザ・ワールド 《世界》』

先程と同じ言葉を繰り返す。思い出したぜ……その言葉……

「時を操れる者のみが認識でき、動ける時間……!?!」

「動揺したのはお前の方だったな……」

景色が灰色に変わっている中、俺と俺の周囲は色を保っている。『不変の世界』——俺が許可した事柄や物質のみが存在や行動を許される世界。この世界には外側からの干渉は不可能だ。時が流れるのは不変であり、止めることはできない。そのまま、敵へ突っ込む。

「無駄ア!」

リーチの長い脚が俺の顔面に向かう。

「……少し焦ってないか?」

相手が人間かは定かでは無いが、人は焦ると勝負を早く決めたくなる傾向にある。焦ってはいけな思えど体は勝負を決したがる。その結果、こいつは1発で仕留めよう。俺の頭を狙い蹴りを喰らわせようとしている。

つまりだな……こちらは非常に動きを読みやすい。

その蹴りを下へ躲し、懐に潜り込む。そして、そのまま右手に靈力を込め、拳を顎にめがけて振り上げる。

「オラァー！」

ガゴンツ！

相手の体はそのまま後ろへ飛ぶ。感覚は最高だ。靈力もいい感じに入った。軽い脳震盪は起こすんじゃないか？

「勇気と無謀は違う……か。確かにそうだな。無謀は何も考えず敵に立ち向かうアホ……しかしだな……俺には考えはあつたんだぜ。裏づけがあつたこそ、突っ込んだんだ」

地面に倒れてる者に言う。咲夜が何もしてこないのが少々気になるが、それは後回しで早苗と妖夢と鈴仙を運ばなければ……

「ハハ！流石のよう！孫よ！2人はわしが運ぶ。お前さんは妖夢を頼む」

見た目によらず元気に2人を担ぐ老人。はたから見ればさぞかし滑稽に見えるだろう。

「ペツ……」

先程のダメージで血が出てたようだ。

「よいしょつと……やっぱり、女って軽いな」

「ング……はっ！わ、私は!？」

「おお、目覚めたか、じつとしとけ、すぐに運ぶ」

「え、え？い、今私……お、お、お姫様抱っこを……!？」

「いやそうしない……「勇者!!避ける!」ん？」

何を言つて……

ドゴォー!

「ガハッ!」

背中に先程とは比べ物にならない衝撃が走る。意識が刈り取られそうになる。

「勇者さん!」

「グフウ……だ、大丈夫……」

なんとか、妖夢に被害が及ぶのは防げたようだ。だが、痛みはとてつもなく、痛みのせいで目眩がおき、立つのもやっとなる。

「トドメは刺しておくものだぞ?」

「て、テメエ……」

「しかし、これ程のダメージで尚立っているとはな、賞賛に値する。それに先程の拳……生身にしては相当な物だ。この俺が拳を受けるとはな」

「だが、流石にもう限界だろ? スタンド使いでは無いにしては健闘したぞ?」

「スタンド……使い……さっきの『ザ・ワールド《世界》』という言葉といい……なんでジョジョの単語が出てくるんだ？つと、問いたいが………信じたくねえが……スタンド使い……存在するの？」

「E x a c t l y (その通り)」

「そうか……だが……テメエみたいな奴は野放しにはできないな」

「それと、名推理をした君にもう一つ教えてやろう」

さつきから、威圧感を消さずに話しかけるあたり、精神的にも抑えようてか？だがな「テメエみたいな高圧的な奴は大っ嫌いだ。それに………俺の平穩を脅かす奴はもつと嫌いだ」

「……ハハ！そういう強気な態度は嫌いじゃないぞ！俺のスタンドは『変化者《チェンジャー》』。君がどれ程のスタンドを知ってるかは俺も知らんが少なくとも君が知っている数以上のスタンドの能力に変化させれる。変化は強い……意味が分かるか？」

「……………」

変化……今、こいつは確かに変化と言った。変わる者……皮肉なもんだな……俺は変わらない者なのに。不変と変化……

「フフ……」

「おや？ここにきて笑みを浮かべるとは……何か考えでもあるのか？」

「さあな、どう逃げるのかを考えてるんじゃないやねえの？」

「京谷、やるべきことは別にあるわ、さっさと終わらせましょう」

「ふむ……こいつはまだ泳がせたいのだから……そうも言ってられないか」

ハハ、言ってくれるぜ……俺が泳がせられるのか？

「……勇人さん、下ろしてください。私も戦います」

「無理しなくても……」

「それは自分を見てから言ってください」

「うっ……」

「ハハ！わしも忘れるんじゃないぞ？サポートは任せろ！」

「鈴仙と早苗はどうするんだ？」

「ん？とつくに目を覚ましておる」

「私達も戦います！」

「そうですねよ！この戦いが終わったら私達……けっく「それはダメだ」なんですか！」

「理由は2つ、まず俺の同意が無い、次にそれはフラグとなってしまいうから言うな。結婚するんだと言って生きて帰ってきた奴はいない」

「そうですね……」

「いつまでお喋りするつもりだッ！」

振り向けば拳が迫っていた。

「そうはさせません！」

と目にも止まらぬ速さで妖夢が現れ拳を剣で受け止めていた。

鍛錬の成果が最近見て取れるがここまでとは……俺も頑張らないとなあ……

妖夢が作ってくれた隙を逃さぬよう拳銃を構えて

「こつちを見ろ」

パァンと乾いた音を響かせ、靈力による弾丸は眉間へ進むが直前でピタツと止まる。

「こんな欠伸の出るようなスピードじゃあ避ける必要も無いな」

「妖夢！目を閉じろ！」

辺り一面に閃光が広がる。

「……ッ！」

「ここは距離を取らせてもらおう。さあ、ここからが本番だろ？」

「フフ……やはり貴様は面白いな」

「京谷、私も参戦するわ、いいね？」

「勇人さん、背中はお任せを」

「私達も……」

「待て、今は2人に任せるんじや」

「で、でも」

「勇人の性格を知ってるなら分かるじゃろ？ここはあの子たちに任せるんじや」

「……………はっ」

変わる者……………どうくるかは知らないが……………俺は俺らしく頭を使って戦わせてもらう。
スタンド使いだろうがなんだろうが撃ち抜いてやるッ！

第62話 才悩の日の青年

頭を使って戦うとは言ったものの、相手はあの『スタンド使い』。相手がどのような能力なのかは勿論、どこにいるのかすらも分からない。流石にunknownな相手に何か策が思いつくわけも無い。

何か相手の特徴を考えていると、いつの間にか相手の様子が大きく変わっていた。赤と紺のオツドアイだったのが金色に変わり額には星のマークが出現していた。――冗談が過ぎるぞ!!ただでさえ実態を掴めていないのにさらにややこしくしよって!

さらに、そのunknownな相手は翼に触れた。すると、どうだろうか。翼が消え失せた。あたかも『元から無かったように』。

その行為は俺たちを驚かすには十分なものだった。周りを見れば妖夢と早苗、鈴仙も目を見開いて驚いている。しかし、咲夜は驚かない。そもそも『知っている』ようだ。あの2人の関係はなんだ?

頭をフル回転させて事柄を整理しようとする。しかし、そこから導かれる答えはどれも『理解不能』である。

『チエンジャー・オーバーヘブン』

相手は呟くようにスタンドの名らしき言葉を言う。え？このスタンド知らない。オーバーヘブン？天国を超える？

頭ん中にはてなマークが大量発生している俺に対し、じいちゃんはある一点を見つめている。見えてるのか？じいちゃんは？

「お主……………その守護霊は何ぞ？」

見えてるようだ……………ここは是非、どこにいるのか教えてもらいたいものだ。

「……………見えて、いるのか……………関係無いがな。貴様らは、我が【真実】を破る事は絶対に有り得ないのだからな」

「ふむ……………【真実】とな？どういう訳か、教えてもらえると助かるのじゃが？」

「貴様らは俺に絶対勝てない。この俺の前ではなあ」

そう言うのと、こちらを見る。何かが来るようだ。しかし、俺らは見えない。ただ身構えるのみである。今更なのだが、学ランを着てこれば良かったと後悔する。あれがあれば絶対的なガードを作れるのだが……………

しかし、無いものをねだってもしようがないので、牽制がてらに銃弾を3発撃つ。

弾丸は標的には届かず、消滅した。効かないだろうと予想はしていたが、消えるとは

……

「無駄ア！」

「ガハッ!!」

妖夢の体が突然吹き飛ぶ。その華奢な体は竹林に衝突し、そのまま倒れる。

「妖夢ッ！」

起き上がる様子が無い。意識を失ったようだ。妖夢も鍛錬を相当重ねた者である。一撃で気を失うのは相当な威力だろう。

「声をかけても無駄な事よ。その娘は既に戦闘不能になった、今したかな」

「ッ!!? テメエ……!!?」

もう、頭に来た！絶対にこいつを仕留める！永琳さんに採血されてその時に一部を試験管に移し渡してもらったのがある。それを開け、銃口につける。不変とするのはこの弾丸が『進む』こと。

5発相手に撃つ。高速回転する弾丸が相手に迫る。しかし、相手は動こうとしない。よし、スタンドで弾くつもりだな？そのまま、貫けッ！

「何ッ!!」

しかし、俺の思惑とは裏腹に弾丸が貫通することなく弾かれる。相手も多少はよろけ

たようだが……不変とされた物が……

だ、だが、あと3発あるッ！それに、相手は体勢を崩している！あのままガードはできないッ！喰らわせろッ！

ただ、俺は完全に失念していたことがあった。そもそも、今の戦況はどうだ？1対1だったか？2対2だったろ？そう、咲夜の存在を完全に忘れていた。予想だにしないこの連続で完全に忘れていた。

残りの弾丸3発が弾かれる。体勢を崩したあのスタンド使いがそれをできるわけが無い。だが、咲夜なら可能。

ただ、何も無いところで弾かれたのを見ると、咲夜もスタンド使いなのか？もしかして、隠してた？

その咲夜は、服が少々破けている。ダメージが入らないわけでは無いようだ。良かった、あれでもダメージが入らないのなら完全に『詰み』だった。

あの2人は何か話しているようだ。『能力』と言うワードが出てると言う事は咲夜もスタンド使いと見て正しいようだ。ただ、『相殺』というワードが出たことで相手は『不変』に対抗できる『何か』の能力を持っているらしい。

「では、始めようか……」

話し合いが済んだようだ。

接近戦に持ち込む気のように2人はこちらに向かつて来る。

ただでさえ銃は近距離に弱い。俺にだって体術はできるが2人も捌けるほどの技術は持ち合わせていない。

すなわち、近づかれる前に『撃ち抜く』だ。装填された弾丸を全て撃ち込む。頼むッ！これで終わってくれ！

「無駄無駄無駄無駄ア!!!」

所謂、『ラツシユ』というにより弾丸は弾かれる。

それでさえ驚愕に値するのに咲夜が弾丸を『摘んだ』。素手でだ。

しかし、この光景はどこかで『見た』。咲夜以外に弾丸を受け止めた者はいた。そう、ありとあらゆるモノの影響を受けない『巫女』がいた。そいつだって『同じような事』をして見せた。

フフ……ようやく閃きがでたぜ……。一旦頭が冴えてしまえば他のことにもすぐに気づく。スタンドというのは所謂『精神エネルギー』だ。つまり、何らかの力を持つている。幽霊とかに近いのかな？まあ、つまりだな……見えなくても『感じ取る』事はできる。妖忌さんの修行のおかげで力に關してはかなり敏感に感じ取れる。ーだから、2人が『何かを纏っている』事ぐらいは感じ取る！つまり、あれが原因で影響を受けないのだ。

いつの間にか、眼の色が戻っている相手が迫つて来る。

「我が流法!!」【輝彩滑刀の流法】を特と味わうが良い!!」

あ、これは知っている。骨と皮膚を硬質化させた物に無数の細かいエッジがそれに沿つて高速で移動している、だっけ?

みるみる2人はこちらに迫る。この戦況において、空へ逃げるのは『愚策』だ。俺は空中戦に慣れてないし、そもそも空では格好の的である。

だか、俺はあえてそうする。『あえて』だ。

空へ逃げると、相手も向かつて来る……動きがおかしいが……そう、まるで無重力にいろかのようにはまるまで重力の影響を受けないかのように。

これで、確信した。あの纏った『何か』であらゆる影響を受けないようになってる。後は何をするか……霊夢と同じように『こちらから干渉できないのなら、向こうから干渉してもらえばいい』つまり、相手が血に触ればいい。そうすれば、『影響を受けない』という事は無理矢理消す事が可能。

ただ、どうやって血をつけるのだが……試験管投げつけて血を浴びせる余裕は無い。なら………

「ガブハア!!!」

斬られればいい。必然的に相手には血がつき、咲夜も手刀をしてきて血がつく。

「勇人さんッ!!!」

まあ、代償が少々でかいが。普通に痛い。俺は人間だからな。

そのまま地面に叩きつけられる。俺は思いつきり体勢が崩れている。なら、相手がする事は？

1人は踵に刃物を生やし踵落としをしを、1人は拳を——つまりは、追撃である。

相手は『影響を受けない』という事をまだ信じている。だから、確実に倒すために近接に持ち込む。こんな事は簡単に思い付く。後は自分の周りの位置を『不変化』する事で相手を巻き込み動きを封じる。その後にはトドメをさす！

刃が、拳が近づく。まだだ……まだ……まだ……

と、急にスキマが現れ、そこから紫さんがでてきた。

「ごつめくん、言い忘れてた〜♪この世界の幻想郷で協力してくれる人たちの名前言うのすっかり忘れて……」

は？は？協力してくれる人？は？何で彼らを見ている？あれ？

……これは……『早とちり』？……一方的に悪者扱いしてたという事か？

やっべ……めつちや恥ずかしい……俺は相手の顔を見れなかった。

とりあえず、後ろを向いて、

「……………ごめん」

謝罪をした。恥ずかし過ぎて穴があつたら入りたい……
じいちゃんも早苗も鈴仙もぼかんとしている。と、とりあえず、永遠亭に行こう……
なんせ、『無駄』な戦いにより『無駄』な傷を負ったから。

その後、永遠亭に行ったら永琳さんに「またか」という顔をされたのはまた後の話。

第63話 災悩の日の青年

迷いの竹林の中に数人の人が――1人はぼつが悪そうな顔をし、1人は気絶して倒れていて、1人はスキマから上半身のみを出し、2人は攻撃を途中で止めていて、3人はポカンとしている。

……………要約すると、すごく奇妙な凶になっている。

ぼつが悪そうな顔をしている者――すなわち、俺は何も言えない。

相手の事をよく見ず、早とちりして攻撃を仕掛けた。どう考えても落ち度はこちらにある。謝罪はしたが……それで許してくれるのやら……あ……どうしようか……

そんな微妙な雰囲気の中、そんな事を御構い無しにスキマから上半身のみを出している者――八雲紫はぬけぬけと

「あら、お取り込み中だったかしら？」

とか言っておる。誰のせいぞろいと言葉が出掛かったが飲み込む。こちらにも落ち度があるから。

「それで……この世界で協力してくれる人ってのはね、この2人、五十嵐京谷君と十六夜咲夜ちゃんよ。それと『この世界』って言ったけど、2人は違う世界の人達なのよ。つ

まりく、並行世界？」

ぶりっ子しても痛い感じしかないぞ。見た目をわきまえんか。

「そう………だから、咲夜はスタンド使いなんだな？」

「そゆこと」

なんて、ご都合な………まあ、そんな事は今に始まった事ではないが。

で、攻撃を途中で止めている2人——咲夜と………京谷だっけ？その2人を見る。

「えー………まあ、よろしく………碓氷勇人です………」

「ん、よろしく。ご紹介された通り、五十嵐京谷だ」

「こちらの世界の方の私なら知ってるかもしれないけど十六夜咲夜よ」

あー………何を話そう………言葉を選ぶのに必死になり沈黙が続く。

「よしーとりあえず、永遠亭に戻りましょう？そこでゆっくりと自己紹介をしましょう」

珍しく紫さんは気の利いたセリフを言ってくれた。日頃からそんな風にすればいい

のに。ただ、『永遠亭』というワードに2人が少し反応したのが気になるが。

「それに、その傷じゃねえ？」

「ああ、俺のせいだな。すまない」

胸の辺りにザックリと切り傷がある。

「え………いや………問題無い………こういうの………慣れてるから………」

言葉が切れ切れになって出てきておかしいのを自分でも感じる。アルエ？俺ってこんな人と接するの下手だった？

「えーつと、勇人だったよな？とりあえず、妖夢も運んで永遠亭に行こうぜ？」

「あ、ありがと」

ん？あの威圧感が無くなっている。それに彼の対応の仕方から見るととても悪い奴には見えない。むしろ、いい人だ。断定には少し早すぎるような気もするが。

「それじゃあ、永遠亭に直行ね」

と言い、紫さんはスキマを開いて中に入るように促す。ここに来てポカンとしている3人ー早苗と鈴仙、じいちゃんは事態を飲み込めたようだ。

俺は気絶している者ー妖夢を抱える。

「ありや、中々大胆な奴だな」

「??こつちの方が運びやすいだろ？」

「わ、私にしてくれてもいいのよ？京谷？」

な、なんだこの咲夜さん……完璧超人のメイドは向こうの世界では少々違うようだ。

「勇人さん、妖夢さんは私が運びます」

「そうですよ、勇人さんは怪我人なんですよ？」

「いや、大丈夫「運びます！」アツハイ」

や、やはり、この2人には「凄み」があるツ!!そのまま、押し切られてしまった。
「苦労してんだな……」

京谷がポンつと肩に手を置く。

「苦労……かな？」

「………こいつ、ダメじゃね？」

「ええ、まさか天然型女たらしなんて」

「ごめん、意味分かんない」

確かに俺に落ち度があつたが……その言い方はないだろ？なんだよ『天然型女たらし』って。

「はいはい、そんな事はみんな知ってるから行くわよ」

「え？俺はそんな奴じゃない……」

紫さんに言いくるめられてスキマへ。

「失礼するわよ〜」

「失礼と思うなら入らないで頂戴」

「貴女も酷いわね、全く同じ事を勇人が言ったわ」

「ただいま戻りました。師匠」

「あら？みんな戻って来ちやったの？早いわね」

「いや……そういうわけじゃないんです……」

城にも到達してないからね。しかも、迷いの竹林すら出ていないという。

「そんなの分かってるわよ。皮肉よ、皮肉」

しっかし、先程から京谷が随分と永琳さんを警戒しているような……咲夜に至ってはナイフを取り出して臨戦状態だ。

まあ、永琳さんが気付かないわけもなく

「ねえ、その2人は誰なのかしら？」

「違う世界からの助っ人よ。勇人1人じゃあ、きついかなくてね」

「ふーん……それにしても向けるべき敵意が違うんじゃないの？」

と、咲夜たちの方を見る。

「永琳さんの言う通りだな。なんで警戒してんだ？」

「永琳が飛び付いてくるかなーって……」

「そんな事したら絶対に許さないわ」

飛び付く？永琳さんがかあ？そんな様子を察したのか

「いやあ……こっちの永琳はだな……俺を見るなり抱き着いてくるんだ」

「え、永琳さんがか？向こうの方は色々違うんだな……まあ、こっちはそんな事はしな
と思うけど……」

「そうか、なら安心だ」

安心……なのか？

「で、本当に何しに来たの？」

「この2人とは初対面なので落ち着いて自己紹介ができるようにと……」

「その傷の治療ね。毎度毎度怪我してくるなんて物好きね」

「いや、好きでやってないです……」

「はいはい、えつと……これまた綺麗に斬られたわね。縫わないといけないかしら？」

「また……」

「入院ね」

また、入院かよ……………待てよ？入院という事は……

「それだと俺はあの城にはいけないよな！」

やった！休めるぞ……………！ついに休暇を！

「あら？その必要は無いんじゃない？あれ」があるでしょう？永琳？」

「確かにあるわよ」

あれ？なんだよあれ……………つて……………ま、まさか……………！

「あ、あれだけは勘弁ですよ！」

滝のように汗が出る。あれだけは勘弁だ！

「ん？あれってなんだ？」

「さあ……………」

先程から「あれ」ってしか言っていないので事情を知らない2人は置いてけぼりだ。

しかし、そんな事に構っている暇は無い。

「あれつてのはね、飲んだら1発で身体の傷が治療できる魔法のお薬よ」

「1発で？そりゃあスゲーな。それってどんな傷でもか？」

「ええ、私の最高傑作の内の1つになるわね」

「へえ……………だつたら飲めばいいだろ？なんでそこまで拒否るんだ？」

「飲んだ事が無いからそんな事が言えるんだ……………お、俺はゆっくりと治癒した方がいい

と思う」

「そんな訳にもいかないわ、だってねえ……あの城に行つてもらわないと」

「お、俺がいなくても問題無いだろ？」

「あら、まさか事もあるうにこの2人に投げやるつもり？」

「……………ッ！」

□では勝てない……………！

「ほら、薬を飲みなさい。はい、あーん」

「の、飲みたく無いッ！」

「あら、強情ね。その2人、抑えといて」

「お、おう……………」

「まるで子供ね……………」

2人して俺の身体を固定する。

「HANASE!嫌だッ！」

「はいッ！」

「ムグウ……………！」

無理矢理薬を飲まされる。するとだんだん傷の辺りがウズウズし始める。

「ク……………ッ！」

「おいおい、これって大丈夫なのか？」

「安心なさい。毒では無いわ。服用するとどんな傷でも瞬時治す」

「副作用は無いのか？」

「あるわよ。タダで治るわけじゃないじゃない。無理矢理治す訳だから激痛を伴うわ。タンスの角に足の小指をぶつけるよりは痛いわ」

「そ、そんなにか……」

「ギヤアア……！」

「フフ、相変わらずいい反応ね」

「こ、こっちの永琳もなかなかだな……」

「それじゃあ、自己紹介を始めましょうか」

「あのー……私、目覚めたばかりなのですが何がなんなのか……」

「そんな事は後から分かるわ。取り敢えずしつかりとした自己紹介をしましょう」

「まずは助っ人の方からよろしくね」

「一度言ったがもう一度言う。俺は五十嵐京谷だ。戦いの中で分かったかもしれないがスタンド使いだ。スタンドの名前は『変化者《チェンジヤー》』能力は主に『変化する能力』と『共鳴する能力』。まあ、能力の説明を簡潔に言うとしたスタンドの能力、大きさや性質をそのままそっくりに変化できる。また、スタンドによるものではない能力も得ることが出来る。条件はあるがな」

「私は京谷の彼女である十六夜咲夜よ。多分、大体はこの私とは変わらないわ。スタンド使いであると言う点では違うけど。私のスタンドは『J・T・R』能力は『殺す能力』よ。この能力は物理的にもただけど事象とかも殺すことができるわ。」

「へー……スタンド使いって実在するんですね……てつきり漫画の世界だけか……それに、あんなに堂々と彼女宣言できるなんて……あ、私は東風谷早苗です」

「ああ、知ってるよ。こちらの方でもお世話になってるからな」

「そうですか！では、向こうの私はどんな感じでしょうか？」

「……………スタンド使いだ」

「ほ、本当ですか！わ、私がスタンド使いだなんて……………！」

「まあ、こちらではスタンド使いになってる奴は多いがな」

「えつと……………鈴仙・優曇華院・イナバよ……………よろしく……………」

「なあ……………こいつつて人見知りか？」

「(そうね、まあ、勇人の事について尋ねればウドンゲは元気になるわよ)」

「(えつと……………それつて、付き合ってるのか?)」

「(まさか、全然よ)」

「(ええ……………)」

「れ、鈴仙は勇人とどんな関係なんだ？」

「「?!」」

「そ、そうですね……………私は将来の勇人さんのお嫁さんです！キャツ！」

「寝言は寝てから言いましよう。鈴仙さん？」

「そうですね……………いつそんな事が決まったんです？」

「お、落ち着こうぜ！ほら！次の自己紹介を！」

「はあ……………魂魄妖夢です。幽々子様の剣術指南役。また、白玉楼の庭師です」

「うん、こちらの方とあまり変わりはないようだな。しかし、スタンド使いでも無いのに

あの動きはすごいな」

「師匠の指南のお陰です。とは言ってもまだまだです。師匠のようにはいきませんか」

「ここまではこちらにもいたが……次からは全く知らないな」

「うむ、わしはあつちで白目剥いとる者の祖父じゃ。まあ、今はただのジジイじゃが元は神様じゃ」

「それまたなんで人間に？」

「人間に憧れた、それだけじゃ。能力は『神力を宿らせる程度の能力』。その名の通り神の力を与えるぞ。ま、わし自身の戦闘はさっぱりじゃが」

「で、最後なんだが……」

「肝心のあの子はぐっすりだけど？」

「そうね……叩き起こすって言う手もあるけど流石に酷かしらね。私が紹介するからそれで勘弁して頂戴。あの子、昨日までずっと仕事でお疲れちゃんなのよ」

「お、おう……」

「それじゃあ、あの子の名は碓氷勇人。教師をしてるわ。それとここの幻想郷のパワーバランスの一角を担ってもらってるわ。能力は『物事を不変にする程度の能力』」

「不変にする……」

「難しく考えなくていいわ。そのまんまの意味よ。変わらない、それだけ。落ちるという事が絶対に起こり、それ以外の事が起こり得ない。そんだけよ」

「それでか……」

「つとこのぐらいかしら？ それじゃあ、あの城については貴方の方が詳しいだろうし、案内してあげて頂戴」

「あいつ寝てるが？」

「大丈夫、誰かが運ぶから」

「あんた、鬼畜だな……」

この後、勇人が目覚めるのは永遠亭ではなく別のところになっており、休みを取れずに嘆くのであった。

第64話 前哨の日の青年

はあー……なんだろうか、この浮遊感。それに程よい風……いや、強いかな？

それにしても、心地いいな……もう少し睡魔に身を委ねようか……

んー……流石にいつまでも寝ちやあいけないか……はあ……

「……………んう？いつつ……………」

胸の傷が少し痛んだ……気がした。傷は永琳さんの魔法のお薬で綺麗さっぱり治っている。だが、何となく痛んだ気がした。

目を開けると、空を飛んでる事に気付く。なるほど、浮遊感の正体はこれか。てか、実際に浮遊している。しかし、何故飛んでる？

「起きたか？ 勇人」

「あ？ あ、ああ。ここは……………つてじいちゃん!? 何で!？」

お、俺はじいちゃんに抱えられていたのか？ そ、それにお、お姫様抱っこだと……？

「いやあ、あの娘たちが勇人の取り合いをしておつてな。それじゃと勇人もおちおち寝てられんじゃろ」

俺を取り合いつて……物じゃないんだから……まあ、寝させてくれる心遣いは嬉しい

が。何なら、そのまま休ませてくれてもいいのだが。

「それもそうだ」

「さてつと、その爺さんとあの娘たちには話したんだが勇人にも話しておかきやならない話があるんだが……聞いてくれるよな？」

話か……あの城のことだろう。確かに興味があるが……聞いて損はないと思うので聞こう。

流石に抱っこされたままにいるのも示しがつかないので降ろしてもらい宙に浮く。

「わっぷ!!………ん？ 話って？」

京谷の羽にぶつかり変な声が出る。つくづく縮まらないなあ……

「ん、おっけ。んじゃあ先ずは………」

京谷は空に浮かぶ天空の城ラpy……このボケはいい加減飽きたか。まあ、空に浮かぶ城を指差す。

「あれか？」

「そう、あれ。あの天空城の事」

ズバリ予想通り。ホント何なのだろうか？ 俺の休暇を奪いよってからに………

「それがどうかしたのか？ ヤバそうなのは分かるが」

ただでさえ、急に城が現れた事が一大事だったのに宙に浮く城ときたらねえ………尋

常な事じゃないよな。

「……………あの城の名前は『ヘブン・クラウド』って言って、本来は『別世界のD I O』と『その仲間』が居た城なんだ」

「!!? ⊗」

『別世界のD I O』? これまた面倒な……………もはや別世界という事に対しては何も言うまい。……………では何でもありだ。

「驚くのも無理は無いね。そもそも君たちから見ればD I Oは空想上の人物、存在しない人物だ」

そりやそーだ。漫画のお話だとずっと思ってたからね。その上に別世界だなんて。

「でも、私たちは戦った。あの恐ろしくも妖しい雰囲気放った……………あの怪物とね」

と云う咲夜はどこか怯えてるようで少しふるえていた。それを京谷が抱き寄せる。ふむ、人がおるのになんて大胆な。しっかし、何処と無く熱い視線を感じるがキニシナイキニシナイ。

「それでだ、俺だな。……………どうやら、俺を狙って来ていたそうだ」

「京谷を!?!……………でも、何で……………?」

「俺が……………D I Oの生まれ変わりだったからだ」

「んなつ?!?! D I O!?!」

「ああ……いや、正確には『DIO』と『ジョナサン・ジョースター』の生まれ変わりなのさ。そして、命を狙われた。でも、俺たちは勝てた……その筈だった」

「そして、あのヘブン・クラウドとやらがこの幻想郷に現れた……そういう事じゃ勇人」

という事は本来なら俺らは無関係と……しっかし、また何でここに……こちとらからしたら迷惑極まりない事なのだが。

「だからこそ、この件は早く終わらせたいんだ。もしかしたら……だけど、あの城からはオーラを感じられない。ダミーの可能性はあるんだけど」

早く終わらせたいという事には激しく同意である。サツサと終わらせて寝たい。また、明日も仕事なんだよ。

ただ、ダミーという言葉は聞き捨てならない。偽物の可能性もあるだと？これが偽物か？なら、本物はただけなんだよ。

そんな中、例の城『ヘブン・クラウド』に近づくと城から『レーザー』が発射された。

「ツッ!?!」

それほど速くなかったので反応が少し遅れたがかわせた。他も大丈夫のようだ。

ふむ、防衛機能があるか。

京谷と咲夜が散開しているが俺とじいちゃんやんは京谷の元へ行く。

「おい京谷!!何か撃ってきたぞ?!あれもヘブン・クラウドとやらの攻撃なのか!」

「いや、俺たちの時は攻撃してこなかった。恐らくあれは偽物。誰か………俺たちの世界の能力者が出した物だと推測出来る」

「偽物!?!あのデカイ城が!?!しかも、能力者!?!一体誰が!?!」

「そこは分からない。俺たちの知らない能力者なのか、はたまた俺たちの世界の事情を知っている別世界の能力者なのか。兎も角、迎撃しながら侵入するから攻撃の用意をして!!」

「わ、分かった」

全くもって謎ばかりである。空に浮かぶ城。神の御杖か、悪魔の仕業か。

京谷達は例の如く、「スタンド」で迎撃。俺は見る事が出来ず感じる事しかできないが。妖夢達も剣や弾幕で迎撃をする。

俺自身も銃で迎撃する。そうしながら徐々に接近していく。

「こつちに入り口がありました!!皆さん来てください!!」

おお!!ナイスだ!妖夢!

妖夢の指示に従い入り口に入る。

「皆無事か？」

「な、何とか平気だ………」

「うむ、丁度良い運動になったわい」

「私もそこまで」

「妖夢（さん）と同じく」

み、皆元気だな……

ただ、それにしても城の内部は……どうなってんだ？見渡すといくつもの道のりがある。つまりは迷路のような造りになっている。なんて、面倒な造りしてんだ……

兎に角、グダクダ言ってもしょうがないのでちやっちやと終わらせましょうか！

第65話 謎の日の青年

「計画は進んでいるのか？」

1人の男が玉座に座り、問う。凍りつく眼差し、黄金色の頭髮、透き通るような白い肌、男とは思えないような妖しい色気——まさに玉座に相応しい姿である。

「ええ、魔力も後もう少しです」

それに応える、痩せた初老の男。物腰が柔らかく優しいおじさん、の様な男性である。「しかし、この城に侵入者がいるようだ？」

赤毛寄り茶髪ポニテの眼光が鋭い女——眼見れば美しい女性として目を引きそうな姿である。

「フンツ、ただの人間だろ？それならあの実験台でどうにかなるだろ」

尊大な口調で話すフードを被った男が言う。

「貴様の失敗作ならただの人間くらいは倒せるか」

「あ!?!なんだと!?!」

「はいはい、落ち着きなさい。彼が魔物化させた人間をいきなりぶつけず、あの山賊どもに始末させればいいでしょ？」

「しかし、侵入者がいるフロアには誘拐した実験用の子供達がいるぞ？」

「そんなに心配なら貴様が行けばいいだろ？」

「チツ……」

「フツ……お前らには感謝しないとな……お前達のお陰でこんな力が手に入ったのだからな……ソネ、”シアン”、”ハキム”よ……」

「「はっ……”DIO様”……」」

—————

勇人達の居なくなった人里では騒ぎが起きていた。

「慧音さんツ！うちの息子が……息子がいないんです！」

「俺の娘もツ！」

「私の息子もツ！」

「わ、分かっている！原因は分かっている！」

人里では子供達がたった一晚で”いなくなつた”。それも10歳いくかいかないか

の幼い子達ばかりが、だ。

「なら、何処なんです!」

「ああ……あそこに空が浮かんでいるだろ?そこに向かう子供達を目撃したとの情報がある……」

「それなら、早く助けに!」

「早まるんじゃない!貴方達が行っても無駄死にをするだけだ!今、勇人を探しているから待ってくれ!」

「勇人、勇人先生なら助けてくれるんですか!」

「ああ!必ず彼は助けてくれる!だから、待っててくれ!」

「慧音さん……これはどういう事なのでしょう……」

「里長……私にもさっぱり……何故”子供達”なのか……それとあの城はなんなのか……」

「やはり……勇人さんとは連絡つきませんか……?」

「はい……家を訪ねたのですが、いませんでした……」

「兎に角、今日は村の者に一晚中警護させます。何が起こるのか分からないので」
「ええ、私も手伝います」

「それにしても……不気味な場所だな……」

「明かりという明かりも無く、かと言って真つ暗でも無い……何かいそうなのだが……
気配は感じない。」

「ああ……俺らの時とは大分違うな……」

「ええ……それにしても……嫌な感じね……」

「……………兎に角、進もう。ここにいてもしょうがないからな」
「そうですね……」

薄暗い迷路の中進もうとすると、服の裾を握られる。振り返ると、
「……………」

妖夢が涙目で掴んでいた。

「……………怖いのか？」

「い、いいえ……………」

「……ここで意地悪を言うのも場違いなのでそのままにしておく。」

「誰がこんな事をしたんだ？」

「俺にも分からない。初めはD I Oが原因かと考えたが……俺らの時とは全く違うからそうじゃないと思ってる」

「しかし、この城は使い勝手が悪そうですね。入り口は見る限りあそこしかありませんでしたし、こんな迷いそうな道だと」

確かに早苗の言う通りである。わざわざこんな複雑過ぎる造りするのだろうか？

「……………！待て！」

「あ？どうした、勇人？敵か？」

俺はその辺にある石ころを拾って”床”に投げた。

ガシャンッ！

「は!?これって……………」

”トラバサミ”だな。ここだけ魔力を感じた。魔力で隠してたんだろうな」

「これまた原始的だな……………」

「それに引つかかりかけたんだがな。死にはせんが……歩行不能にはなるだろうな」

それにしても、このトラバサミ古い気がする。そんなこと言ったらこの城自体、古い外観だ。中世ヨーロッパにありそうな城だ。

さらに歩を進めると

「おいおい……また、何かあるぞ?」

「またか? 嚴重だな」

「鈴仙、その辺の床の波長はどうだ?」

「そうね……少し周りと違うわね。少し波長を変えてみるわ」

すると、何でもない床から円板状の物があつた。

「なあ……これって……」

「地雷」だな。爆発させてしまう手もあるが……音で敵が来るかもしれない。避けて通ろう」

うーん……古典的な罠から一転、現代的な罠に……

「ところでさ、帰り道、分かる?」

「……」

あつ……

「さ、咲夜は?」

「え……あ……」

「大丈夫ですよ、印、つけてきましたから」

「ほ、本当か？早苗？」

「ええ！迷宮で帰り道の確保は常識です！」

常識………なのか？まあ、そこは置いといて、ナイスだ！

「ふう………最悪、城に穴を開けなきやならんところだった」

あ、別に出れないことは無かったのか。

「!?………静かにしてください！」

「ん？」

「向こうに4人程誰かいます」

む、確かにいるな………だが、普通の人間のようだ。

「どんな奴だ？」

「ただの人間だ。別に警戒しなくてもいいな。だが、他の奴らに喋られても困る………から」

と説明しようとしたら4人とも気絶していた。

「静かに気絶させろって？そんなの赤子の手を捻るより簡単だ」

「そうだったな………時を止めれるんだったな………」

「それにしても、やっと人が現れたわね。目標に近づいてるのかしら？」

「んー、そうだな。何かを守ろうとするときは必然的に近くに守らせたいからな」
まあ、京谷たちの言う通りだな。道のりは間違つては無いようだ。

俺たちはドンドン道を進んでいった。正直、この城の空間がおかしい気しかなかった。見た目の割に広いのだ、どう考えたつて。まあ、道中何人が警護なのか知らんがいたので目標には近づいてるのだろう。

そして、その目標らしき場所に着いたようである。近くから会話が聞こえる。

「なあ、兄貴、子供達が攫うつていう命令に従つて良かったのか？」

「あ？何言つてんだ？ハキムさんが言うんだ。絶対に決まってるだろ？」

「しかしヨオ、そのハキムさんから何人が貸してくれって言われてからさそいつら戻ってきてないぜ？」

「フンツ、きつとハキムさんのところで活躍してんだ！」

子供達を攫う……？こいつら何を？

「勇人、どうだ？」

「!!そ、そこを通るなッ！」

そ、そこにも何か隠されてる！しかし、言うのが遅く

カチッ

「え？」

「何か起こる……！」

リンリンリン!!

「ん？これは侵入者だ！」

「兄貴！すぐそこにいますぜ！」

バレたか……

「へー……あんたらここまで来れるとは……褒めてやるぜ」

ここのリーダー格だろうか？しっかし……小物臭がプンプンするな。

「フツ……俺の名は源地震太郎。この辺の山賊の親分だ」

「なあ、勇人、お前がいくか？」

「まあ、京谷が出る幕も無いだろう」

「私がいきましようか？」

「んー……鍛錬の足しにもならなさそうですね」

「いつそわしがいくか？」

この言いようである。実際、全員ただの人間では無いからな。

「こ、この野郎！舐めた口聞きやがって！野郎共！こいつらをぶちのめせ！」
と襲い掛かってくる……

が、悲しいかな、実力差は否めない。ほぼ瞬殺である。見せ場無し。残念だったな。

「こ、この俺が？負けた？ち、畜生！覚えとけ！」

「お、おいこら！待て！」

最後まで小物な男だな。

……………シクシク……………お父さん……………お母さん……………

「ん!?何か聞こえた!向こうの部屋からか?」

あの……………しんのすけだったけ?まあ、山賊達がいた部屋の隣から声が聞こえたので見
に行ってみると

「おーい、誰かいる……………か?」

「ヒイ……………」

子供達がいた。それも多勢。

「な……………なんで？」

よくみると里でも見た子供がいる。生徒の子だっている。

「ヒクツ……………だ、誰？」

「あ、安心しろ、助けに来た」

「ほ、本当に？」

「ああ」

「早苗、鈴仙」

「どうしまし……………こ、子供？」

「多分里の子達だ、2人でこの城から連れ出してくれないか？」

「わ、分かりましたが、勇人さんは？」

「あの山賊共に話を聞く」

「……………分かりました」

子供達を2人に託し、山賊共が逃げた先に行こうとする。

「おい待て」

「なんだ？京谷？」

「少し落ち着け。この先嫌な予感がする」

「安心しろ、簡単にやられるような柔じや無い」

「いいから落ち着け。怒りに身をまかせな」

「……………すまない。しかし、先には行く」

「俺もついて行く」

「私もよ」

「私もご一緒します」

「わしも行くぞ」

「そうか……………すまないが早苗と鈴仙は子供達を」

「ええ！任せてください！」

「き、気をつけてね？」

5人で先進む…………

意外にもさつきは奴はすぐそこにいた。ただ、隣にフードを被った男も一緒だった。「ふふ……………ここまで来たのが運の尽きだったな。なんせ、このハキムさんがお前達をぶちのめしてくれるからな！」

「……源地君、少しは役に立て。俺を頼ろうとするんじゃない」

「え？ハキムさ ドスッ」

「「「!?」」」」

フードを被った男があつた山賊を刺した？

「な、なんで……」

「お前！何をしてるんだ!？」

「あ？役立たずを少しは使えるようにしただけだ」

「ぐ、グギャアアアアア！」

山賊が徐々に異形の者へ変化していく。顔は醜く変わり、右手は大きなハサミに左手は触手のように、身体は先程とは程遠い体格へと変貌し、面影を全く残さない魔物へと変貌した。

「フンッ、俺は忙しいんだ。こいつと遊んどけ」

フードを被った男は影へと消える。

「ま、待て！」

「ギャアアアア！」

触手が行く手を塞ぐ。銃を取り出し、眉間を狙い、弾丸を放つ。

「ギギャアアア!？」

狙い通り眉間を貫通……したが何事もなかったように再生した。

『チエンジャー・オーバーヘブン』

京谷が前に出て、魔物を吹っ飛ばす。

「ギャアアア……」

魔物はだんだん元の人間に戻る。

「真実を上書きして『普通の人間』にした」

真実を上書き？それも聞きたいが他にも疑問はある。あのハキムとか言う奴は？何故子供達が？

「分からない……」

「分からないなら進むしか無いな？」

そう言いながら京谷は上にくく階段を指差していた。そうだな、分からないなら進むしか無いな。

この城……ほつといではいけない気がする。兎に角真相を！

第66話 2 F (不死者の波)の日の青年

「ん？ハキムさんじゃないですか、てつきり一階に行ってるものだと……………」

「ああ……………行ったださ」

「まさか、お前でもあろう者が人間如きに尻尾巻いて逃げて来たのでは無いのだろうか？」

「黙れ、シアン。あんなの俺が戦うまでも無い。適当な山賊を魔物化させて戦わせてあげる」

「フツ……………なら、どうして、子供達が城の外に出たのだ？それとその人間達は先程2階に上がったぞ？」

「は、はあ……………!?馬鹿な!?嘘を言うんじゃない！」

「嘘も何も、さつきから虫を数匹監視に行かせたが……………お前の言う魔物はいない上に子供達もいない。肝心の人間はピンピンとしたままだ。やはり、無能だな」

「だ、黙れッ！たまたまだ！」

「フンッ、どうやら……………」

「ああ!?なんだと!」

「これこれ……シアンさんとハキムさん、落ち着いて」

「チツ!ソネさんに免じてここはなかったことにしてやる……………」

「フンツ……………」

「とりあえず、二階には”あいつ”を送りましたから……………そう簡単には突破できないでしょう」

「あのサイコ野郎か……………」

「DIOに心酔してる阿呆か?」

「そんな事は言わず、兎に角にも今は私達のリーダーなんですから」

「フンツ……………」

—————

く2Fく

ハキムを追いかようと威勢良く進んだものの、その肝心のハキムは見つからず、延々

と階段を登っている。

それにしても長い。上を見ても見えるのは階段のみ。気が滅入りそうだ。階段の事ばかり考えてると心が折れそうなので今回の事柄を纏めるとする。

まず事の発端は今いる城ー『ヘブン・クラウド』の出現である。その調査の為にこの城に侵入したのだが……いざ入ると、城としては実用的では無い造り。そこに誘拐されてきた子供達。しかし、警備はそこまで頑丈では無かった。そして、ハキムとか言う怪しげな男の登場。その男は山賊を魔物に変化させた。その魔物と交戦。

そして、魔物を倒した後ハキムを追ってここまで来たと……………

これらから出てくる感情は『疑問』である。確かに子供達を攫う事に対して『怒り』も出てくるのだが……何故こういう事をするのが全くもって分からない。……こういう時は己の無能さに嘆いてしまう。もっと強く、賢くあればこんな事もすぐに解決し、そもそもこんな事も起こさずに済んだのかもしれない。

無いものをねだっても仕方が無い……………とか考えてると二階に到着したようだ。

一階とは違い、まず強烈な異臭が鼻をつく。生ゴミのような……何が腐った臭いがこのフロアに充満していた。

臭いの根源はすぐに分かった。肉が爛れ、骨まで見える箇所もある人影——”人”人間であろう者が居た。

これまで様々な妖怪を見て来たが……このゾンビ達はまだ見た事が無かった。見たいとも思わなかったが。

「ふう……………」

京谷はこいつらの事を見飽きたかのように息を吐く。うーむ、俺とは全然違う経験をしたんだな。

「あれは……………？ 一体……………」

妖夢は存在も知らなかったようだ。俺とて本物なんて見た事が無かったがな。

「ゾンビが1匹、ゾンビが2匹……………やめましょう数えるのは。頭がどうにかなりそう」
「だろろうな」

と言うなり、京谷と咲夜は前衛にでた。

「京谷？お前、何を？」

「あのネクロマンサーを3名で叩け。ゾンビ共は何とかする」

「!!しかし、あの数を相手にするのは危険なのでは!？」

「大声を出すな妖夢。ゾンビは音に反応するんだからよ」

「し、失礼しました……………」

「兎に角つと『アヌビス神』『サムライ・スピリット』」

と京谷は両手からそれぞれ異なる刀を出現させた。便利だなその能力。

「ほお……………これが……………しかし、どちらも刀なのだが？」

「勿論、銃のスタンドも存在するぜ。ただ、使い時つてあるだろ？じいさん」

「……………」

京谷がこちらを見る。確かに銃は使うが……………別に銃が俺のアイデンティティで無いから……………え？それ以外には何があるのだ？か、格闘術とかナイフも一応……………

「綺麗か？勇人。この『サムライ・スピリット』の刀身」

「率直に言えばな」

綺麗だと思つたが同時に羨望の感情も湧き出る。相手は『変わる者』。このように状況に応じて変化する事で柔軟な対応も取れる。対して俺は『変わらない者』どんな事が起こっても同じ様な対応しできない。

「そうかい……………作戦はさっき話した通り、良いな?」

という事で俺はネクロマンサーの額に狙いを定める。銃を扱うにおいて、体を隠さずに堂々と構えるなんてありえないのだが、こちらには京谷や咲夜、妖夢がいる。

そして、京谷と咲夜が宣言通り前衛に出てゾンビ達を薙ぎ倒す。

2人は息ぴったりでそれぞれの隙を互いにカバーしている。そんな様子に感心してると……………

「!?!」

キスをしおった。この戦場のど真ん中で。これに関しては羨望の感情は出てこない。寧ろ、馬鹿ツプルを見せつけなくていいという最早呆れの感情しか出てこない。

そんな様子に呆れてると時を止めたのか20体以上のゾンビがやられていた。

「勇人!!今がチャンスだ!!ネクロマンサーを狙え!!」

あらかじめ狙いを定めていたのでほぼ条件反射で引き金を引く。弾丸は吸い込まれる様にネクロマンサーの額に向かう。

ゾンビを使って防ごうとした様だが妖夢が楼観剣を投げ、倒す。大事な刀を投げているのか?

高速回転をする弾丸はそのままネクロマンサーの脳天を撃ち抜いた。同時に数多のゾンビは腐敗し消滅した。

俺達は京谷達の元へ駆け寄る。

「よお、お疲れ」

京谷に労いの言葉をかける。

「そつちこそ」

コツンと互いの拳をぶつける。自然とやったのだがこういうのは初めてだ。

「イチャイチャしておつて……若いとは良いもんじゃのお」

「貶したいのか羨ましがりたいのか、どちらかにしてくださいませんか？」

「ふふっ♪どちらでも構いませんわよ♪ねえ京谷♪」

「だな♪」

互いに見合った笑う2人。あー………ブラックコーヒー飲みたい。

「勇人もあのぐらい恥ずかしげなくイチャつけばよかろうに」

小声で俺に言うじいちゃん。

「やめてくれ。恋愛においては節度が大事だ」

「堅いのお、少しは積極的になれ」

「それは俺の柄じゃ無い」

「……………これは、また派手にやりましたねえ」

どこからともなく声がある。その聞こえた方を見ると、痩せた初老の、じいさんが立っていた。ぱつと見、好々爺のようだが何か裏を感じずにはいられなかった。

「成る程……………恐ろしく強いですなあ。特に、そこのお二人はねえ」

と俺達を指差す。こいつはハキムの仲間か？

「まあ待ちな。テメエ一体何モンだ？」

「こんな老体の名前を聞きたいのか？つくづく可笑しい奴じやなあ」

「答えなきや、お前を本にして見るだけだ」

「おお、何と物騒な。まあ良いでしょう。私の名はソネというものです。それ以外の何者でも御座いません」

「そうかい」

京谷が一気に間を詰める。

しかし、ソネというじいさんは落ち着いた様子で魔物を出現させた。ハキムの時と同じ様な魔物を出すっていう事は仲間か？

京谷は急に出て来た魔物に首を掴まれる。

「ガッ!!？」

「京谷!!」

「では、私はこれにて」

「!?待ちやがれ!!!」

急いで引き金を引くがソネには当たらず、そのままソネは消え失せた。

掴まった京谷は足から刃物を出し魔物の胴体を斬り裂いた。

「平気か!?京谷!!」

「何とかな、それより上に進むぞ。もうこの階層に用は無くなったしよ」

「そ、そうか………」

やはり、こいつは凄い。こいつは多分誰かを守る事なんて苦労しなかったのだろう。俺もその位の強さが欲しい。

誰かを守るのは難しい。それ故に力を求める。それ故にどんな手段でも力を手に入れようとする。どんなに犠牲を払ってでも。そんな負のスパイラルにハマリかけてる事に勇人は気付いていない。

第67話 3F（黒い津波）の日の青年

『人里』

人里の皆さん明るくて元気でも優しい人達です。でも、今はどの人も怯え、家からも出ようとせず活気に溢れていた人里はもうありません。

子供達の誘拐事件、墓場が荒らされる………そして、あの空に浮かぶ不気味な城『ヘブン・クラウド』により、人里は一気に恐怖の底に叩き落とされました。

私の子供達を連れて帰るために勇人さん達と別れ城を出た後、鈴仙さんと一緒に子供達を人里に返しました。

その時の親御さん達の喜ぶ姿はまさに感動的でした。しかし、その喜びも長続きしませんでした。新たに事件が発生した事もあります。根本的な問題として『ヘブン・クラウド』がやはり人々の不安の種となっているでしょう。それと、慧音さんから『ヘブン・クラウド』について何か教えて欲しいと頼まれたので慧音さんの家に行く事になっています。

その『ヘブン・クラウド』は勇人さん達が調査をしています。私も外から何か協力できればいいのですが………

「早苗、ブーツとしないで行くわよ」

「あ、すいません。鈴仙さん」

「さ、上がってくれ」

「失礼します」

そういえば慧音さんのお家上がるのは初めてですね……………やっぱり几帳面な性格なのかキツチリと整理整頓された部屋です。

「いきなりで悪いんだが……………教えてくれるか？あの城について」
「分かりました、少し分かりにくいかもしれませんが」

く少女説明中く

「……………とここまでが私達がわかる範囲です。後はもう勇人さん達にしかわからないと思います
います……………」

「……………そうか。『ヘブン・クラウド』か……………」

「何か分かりましたか？」

「西欧の歴史に今回と同じく『空に浮かぶ城』の話があつたな……………少し待つてくれ、少し本を探してくる」

「西欧ですか……………確かに山賊が化け物にされた時、使われた魔術はこの辺では見ない様なものでしたね。」

「あつたぞ。西欧の歴史書はあまり無いからなすぐに見つかった。えつと……………」

「どんな事が書かれているのでしょうか？」

「これだ。『古代帝国の末期、皇帝は国中で民衆を脅かしている魔物を討伐することで国をまとめ上げようとしていた。危機感を持った魔物たちは帝国に対抗すべく、互いに手を組もうとする。』

「そこで、バラバラだった自分たちをまとめるリーダーとして「魔王」を生み出そうと考え、その誕生のためマナラインから吸い上げた魔力を魔王となる者に供給する装置「魔王城」を建造しようとした。」

「しかし、誰を魔王に据えるかで揉めるうちに、古代帝国は魔物討伐に国力を割きすぎたせいで他国からの侵略行為に対処しきれず滅亡してしまふ。こうして、魔物たちの一時的な協力関係も終わりを迎え、その時代に魔王が誕生することはなかった』とあるな」

「え？それじゃあ『魔王城』は完成しなかったのですか？」

「いや、ここには完成までして後は魔力を溜めるだけだったらしい。でも、魔王城がどこにいったかは謎のままだ」

「そうなんですか……………」

これは確かめる価値はありますね……………『魔王城』ですか……………

「慧音さんッ!!大変です!!」

玄関の方から男性の怒鳴り声が聞こえました。若い男性の方の様です。

「どうした?今は警備をしていないのか?」

「いえ…………警備をしてたら…………外にとんでもないものが!」

何があったのでしょうか?

「と、兎に角、外に出てください!」

「わ、分かった」

私達3人は男性に言われた通りに外に出ました。

「な……………!?!」

「……なんなのよ？あれ？」

「……………!？」

外で見たものーそれは、黒い波

その波は空を覆いある一点に向かっていました。その一点は『ヘブン・クラウド』です。

「慧音さん……………この世界はどうなちまったのですか？」

「……………分からない」

「……………あれ……………虫”よ。いろんな虫が群れを成してあの城に向かって……………」

「兎に角、里に皆には屋内にいるように伝えてくれ」

「分かりました」

あれー一つ一つが虫……………

「虫と言ったら……………」

「リグルね、彼女に話を聞いてみましょう」

「それなら、私も同行する。いいか？」

「ええ」

あの城では一体何が起こってるのでしょうか？

「へブン・クラウド 3F」
今、再び階段を登っている。ハキムに続き、ソネとか言う奴が現れ、ますます実態が掴めない。

それにしても……………こここの城の空間はどうなってるんだ？と愚痴りたくなるぐらい階段が長い。感覚的にはもう最上階まで上がった気分なのだが。

「ほら、着いたぜ。これでもまだ3階だと言うのだから驚きだな」
全くもって同感である。もう日付感覚が分かんない。もう日を跨いだのか？

カサカサ……………

「……………ギヤアアアアア!!」

「どうした！妖夢……つて、ウワツ！」

妖夢の足元には黒い稲妻………もとい、かなり大物な“G”がいた。流石に俺でも触りたく無い。いや、触れない。

「ハハ！ゴキブリ如きでビビってんじゃねえぞ」

「……なら、京谷。こいつを掴んでその辺に投げてくださいよ」

「え、つ、掴む必要は無いだろ？」

お前もビビってんじゃねえか。

カサカサ………

やつぱり気持ち悪い動きをする………な………。つて………あ、あれは………？

カサカサ、カサカサカサカサ！

「な、なんだありや！ば、馬鹿みたいにでかいぞ！」

「ゆ、勇人！お前がやれ！」

「は、はあ？お前のスタンドでやれ！」

あ、あんな、人ぐらいのサイズのゴキブリだなんてゴメンだ！

と、ゴキブリの頭部にいくつものナイフが刺さった。

「これでいいかしら?」

「は、はい……」

男が揃いに揃ってビビるとは……情けない話である。でも、ゴキブリは無理だ。てか、少しピクピクしてゐるぞ、あれ。

「ふむ……これは魔術によるものじゃない」

「勘弁してくれよ……ただでさえキモいのが巨大化して……」

「そんなお主に悲報じゃ」

カサカサ、カサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサ……

「このフロア中にあるぞ」

「oh……shit……!」

「英語で言っても変わらんぞ」

なら、まだゾンビの方がマシだ。

「どうやら、ゴキブリだけじゃないみたいね。コオロギに蜘蛛……選り取り見取り

よ

「勇者……」

「分かってる……でも、進むしかないんだ……」

そう言っている間にも天井や壁からも迫ってくる。

『変化者 魔術師の赤（マジシャンズレッド）《チェンジャー 魔術師の赤（マジシャンズレッド）》』

「虫と言ったら火だな。とつとと燃えてしまえ！」

前方を埋め尽くす虫達に火がつく。また、燃えなかつた虫達も炎に怯えてるのか後退していく。

「やっぱり火を怯えるか………よし、この辺の木材の切れ端で……ほれ、松明の完成つと。ほら、これを持って」

「ああ」

成る程、火さえ持てば相手は近づかないな。

「こ、これでもう虫は寄り付かないんですね？」

「ああ、これで大丈夫だ」

実際に前に進むと虫達はそれに応じて後退していく。これで順調に進める。そのまま俺達は歩を進めるのだった。

「……………!」

「どうした? 勇人、急に止まって……………ってこれは……………」

「酷いわね……………」

そこには無残にも食い散らかされた人の姿があった。ほとんど食われ、右半身はほとんど消失。左半身も骨ばかりで所々に肉が付いているだけである。衣服から察するにあの山賊の一味だろうか?

「あのゴキブリが食ったとは思えないわね……………」

「そうだな……………ゴキブリなら残さずに食いそうだから……………」
「俺達もこうならないようにしないと……………」

ブンブン……………

「なんだあれ?」

「ちっさい虫の大群じゃねえか」

それにしても……………こちらに向かってきてるような……………

ブンブンブンブン!

「!?!」

「こ、こいつら火を恐れないぞー！」

ボワッ！

「た、松明に突っ込んできた!?!」

松明に突っ込んだ虫は焼死したが同時に火も消えた。

「こ、こいつら、自らを犠牲に火を消しやがった!」

「きよ、京谷! 走るぞッ!」

火がない今、虫達は恐れることなくこちらに向かってくる。今までどこに隠れてたのかと言うぐらい大量の巨大な虫が迫る。

しかし、虫にしてはかなり利口な動きだ。誰かが統治してるのか？

兎に角、今は逃げる事を先決だ。前から向かってくる虫は咲夜と京谷とじいちゃんが捌き、俺は後ろに向かつて発砲しながら牽制をする。

妖夢は……泣きながら逃げるので精一杯だ。

「キャッ!」

妖夢がつまづきこける。

「……………ッ!!」

「勇人!!」

「先に行け！俺は妖夢を運ぶ!!」

俺はUターンし妖夢の元に駆けつける。倒れた妖夢を抱きかかえ走ろうとした時

「勇人!!後ろツ!!」

「……………なツ!!」

もう直ぐそこまで虫達は迫っていた。

「はあ!!」

靈力の衝撃波で近くにいた虫達を吹き飛ばす。しかし、後ろにはまだ迫ってきている。

「ウオオオオオオ!!」

走るでは遅いので、飛ぶ。靈力を最大出力で出し飛ばす。止まったら確実に死ぬ。

「勇人!こつちだ!」

京谷達が部屋を見つけたようで既に中に入って待機している。

後、50メートル……………40……………30……………20……………後少し!!

「ほら!入れ!」

その時、部屋の入り口に柵が降りた。

「「「?」」」

「クソツ!なんで!」

「『変化者　スタープラチナ《チェンジャー　スタープラチナ》!!」

「『スタープラチナ　ザ・ワールド』!!」

「オラオラオラオラ!!壊れる!壊れるっつてんだよ!!」

しかし、京谷の努力も虚しく柵は壊れる気配が無い。

「勇者!!」

「ゆ、勇者さん、ごめんなさい……………私が……………」

迫り来る黒き津波。俺はこのまま死ぬのか?……………いや、まだ終わりじゃ無い!策はある!

「じいちゃん!俺に神力を!」

「わ、分かったぞ!!」

じいちゃんの右手が光り、俺にかざす。

「勇者、何を!?!」

「向こうを突破して別のルートを探す!」

「そんなの無茶よ!」

「それしか方法は無いっ!また、後で落ち合おう!」

神力により力がみなぎる。そして、自分と妖夢の出来るだけ最小の範囲の空間を不変化する。

く 勇人 & 妖夢 s i d e く

「ウオオオオオオ！」

勇人さんは私を抱えたまま黒い津波に突っ込んでいきます。

しかし、不変化の空間により相手は触れる事すら出来ないようです。

「よ、妖夢！他に道は!？」

「は、はい!.....あつちに道が!」

「よし!そつちに向かうぞ!」

わ、私が.....不甲斐ないばかりに.....

「キッシャー!」

ザクツ

「グ…………ツ!!」

「ゆ、勇人さん!」

勇人さんの肩に大型の蜘蛛の牙が掠ったようです。

もしかして、勇人さんに限界が!?

「はあ、はあ、はあ」

「勇人さん…………」

勇人さんの目から血が……………不変化のタイムリミットをオーバーし始めているようです……………不変化の範囲も狭まってきているようです。

「む、向こうに部屋が!」

「あ、ああ!」

こんな時に私は……………

「ウオオオオ!」

部屋に飛び入り、扉を閉めます。そして、勇人さんはすかさず血を付け不変化にします。

「はあ、はあ……………」

「ゆ、勇人さん、大丈夫ですか!？」

「はあ、はあ……………だ、大丈夫だ」

「すみません……………私のせいで……………」

「ハハ……………妖夢のせいじゃ無い。今こうして助かったんだ……………」

「助かった……………か」

別の人の声が!

「だ、誰です!!」

松明の炎を消した虫と同じ虫が大量に出てきて一箇所に集まります。そして、人型の者となり、赤毛寄り茶髪のポニテで眼光が鋭い女性となりました。

「言ったところでどうなる。貴様らは私の魔力の足しになってもらう」

すると、右半身を虫の大群に変えました。

「先程、山賊を食らったのだが腹の足しにもならなかったからな、貴様らなら山賊よりはマシだろう」

楼観剣を抜き、構えます。

「言っておくが私の体の虫は今は約270万匹で構成している」

「……………!?だとしても全て斬ります!」

「馬鹿だな……………ん?お前は……………」

ふと後ろを見ると勇人さんがボロボロながらも銃を構えて相手を睨んでいます。

「……………その目……………お前、何者だ?」

「ただの人間だ」

ボワツ!

「!?」

どこからか炎が放たれます。

「お、お前!よ、よくも俺達の仲間を!」

あの山賊と同じ格好をした人達が4人。

「ふつ、丁度いい。その男、よく見ておけ」

勇人さんを見ながら言います。何をやる気なのでしょう?

「こ、こいつは炎があれば何も出来ねえ!火を絶やすなよ!」

「わ、わかっているさ!その為に薪を集めたんだ!火矢も撃て!」

地面に焚き火を燃やし続けて虫を寄せ付けないようにしているようです。

「その目で見ておけ”人間”と”魔物”差を」

すると、虫の塊をいくつか作り、その1つを焚き火に特攻させました。そして、その火は消え、山賊達に襲いかかります。

「う、ウワアアアア！」

「く、来るなあああああ！」

バキバキバキバキ……ガリガリガリガリ……

「!?!」

瞬く間に山賊達は食られ先程見たのと同じ様になりました。

「どうだ?これが”魔物”だ」

「なっ!?!」

いつの間にか勇人さんの背後まで迫り、首回りを虫で覆います。

「こんな風に貴様だつて簡単に殺せる、が、お前は才能がありそうだ」

「……………ッ！」

あの状態では私も下手に動けません!

『変化者 ザ・ハンド《チェンジャー ザ・ハンド》』

ガゴンッ

「えっ!?!」

私と勇人さんの体が引き寄せられます。

「危なかったな、間一髪つてところか？」

「勇人、無事じゃったか……………」

京谷さん達によって助けられたようです。

「テメエ……………今まで何人食つてきた？」

「なら、貴様は今まで食べたパンの枚数でも覚えてるのかしら？」

「……………！テメエ……………！」

「名を教えてやろう。私はシアンだ」

「それはご丁寧に、なら私が殺してあげるわ」

「貴様のような人間には興味が無い。それではまた会おう、”勇人”」

シアンと名乗った怪物はまた虫の群れとなり消えて行きました。

「勇人、大丈夫か？」

「……………（俺は今、何て思った？あのおぞましい光景を……………素晴らしいと

思ったのか？あの虫達の統率力、圧倒的な力を羨ましく思ったのか？）」

「おい！勇人！」

「はっ!?あ、ああ、大丈夫だ。少し疲れただけだ……………」

「そうか……無事で何よりだ」

「お主が死んだらわしはもう……………」

「大丈夫だってじいちゃん」

勇人さんは本当に大丈夫なのでしょうか？

—————

「あの人間に興味を持つなんて、貴女にしては珍しいですね」

「……………ほっとけ」

「まあ、分からないでもありませんよ。あの人はみんな普通じゃありませんからね」

「別にあいつ以外には興味が無い」

「そうですか？ 私的にはあの守護霊の様なものを操る2人に関してはとても興味がありますかね」

「そんなのはどうでもいい。私は魔物達の平和があればいい」

「……………そうですね」

第68話

4F（天空城の決戦）の日の青年

く『人里』く

私達は今、リグルさんにお話を伺おうとリグルさんを探しています。

もうすでにあの”黒い津波”は無くなりましたがそれでも、何かあっている事だけは確かです。

「それにしてもあの城………：幻想郷とはかなり不釣り合いよね」

「ああ………：西欧風の城だからな」

「幻想郷に出現したのはもう忘れられた存在だから、と見ても問題ないでしょうか？」

「多分、そうだろう」

と話しているとリグルさんを見つけました。

「あ、先生じゃないですか」

「おお、リグル。いきなりで悪いのだが少し聞きたい事がある」

「そうですか。でも、その前に今問題があるんですよ」

「なんだ？」

「虫が全く私の言う事を聞かないんです。そもそも、皆んなどっかに行っちゃいました」

蟲を操る能力があるリグルさんが操らなくなっているだなんて……………

「それで聞きたい事は？」

「いや……………その虫の事を聞こうとしたのだが……………」

「す、すいません……………」

「いや、君は悪くない。何か異変があったらすぐに教えてくれ」

「分かりました」

「結局、有益な情報は得られなかったわね」

「うむ……………色んな所から聞き出すしか無いようだ」

「そうですね……………」

—————

くヘブン・クラウド 4Fく

迫り来る『黒い津波』から何とか逃れた俺らはさらに上へと向かおうとしていた。

そして、歩を進めようとした時

「勇人、妖夢……少しだけ待ってくれ」

京谷に呼び止められた。何かあったのか？

「?どうした?」

振り向くと、京谷は咲夜の助けを借りて壁にもたれ掛かり、座っていた。流石に疲労がきたのか？

「お前らに……話さなきゃいけない事があつてな」

真面目なトーンで言い、空気が変わる。

「……先ず、俺の正体からだな……俺の名は『五十嵐京谷』……だが、普通の人間じゃない……『DIO』と『ジョナサン・ジョースター』の『生まれ変わり』だ」

「!!?」

『普通の人間』では無いと言う事には驚きはしない。この幻想郷においてそんな事で一々驚いては話にならない。しかし、『DIO』と『ジョナサン・ジョースター』の生ま

れ変わりという事には驚かざるえない。

「驚いたろ?でも、まだ本題じゃねえ。俺が勇人の能力に対し使った能力の事についてだ。俺が話してえ事は」

と言いながらも、京谷の息づかいは荒い。ここまで息が荒くなると、疲労では無さそうだ。

「勇人よ。京谷と対峙した時の不思議な現象、覚えておるじやろ?」

「!?じいさん……」

そんな様子の京谷を察してか、じいちゃんが代弁する。

「あ、ああ。覚えてる」

「京谷から聞いた。あの時の能力は「真実を上書きする能力」、その状態の自分か、あの守護霊の手や拳に触れば、望む通りの真実に変える事ができるのじや」

「な、成る程……だからあの時、俺の能力が効かなかったのか……でも、それだと」

「うむ、勿論代償も大きい。何せ『本来使うには魂を使わなければならない』のじやから

な

!!!?
」

『魂を使う』だと……?確かに強力な能力ほど代償がでかいという事が多い。俺とて不変化の能力を使い過ぎると体が能力の使用の負担に耐え切れなくなり崩壊し始

める。しかし、それは命を削っているわけでは無い。少々崩壊してもケガというレベルで済ます事が出来る。

「そして、魂の磨り減った状態がこれじゃ。本来であれば動く事なんぞ出来わせん。わしが神力を与え、何とか持たせておるだけで精一杯なのじゃ。証拠に途中で倒れて血反吐を吐きおったからの」

「説明ご苦労さん……血反吐はねえと思つたがな」

「確かに……なツ!!つとと」

咲夜の助けを借りながら立つ京谷。最早限界のようだ。

「……………京谷」

「……………どうした? さつさと行「お前は下りてくれ」……………」

「勇人さん……………」

「多分、俺との戦いで……………使いすぎちまったんだろ? だったら、これは俺の責任だ。お前が行く必要は無い、これ以上魂を磨り減らすな」

そもそも、この問題はこの幻想郷に住む俺らの問題だ。全く以つて関係のない者が命をすり減らしてまで解決しようとする必要は無い。

「勇人……………お前……………」

「頼む……………下りてく「バカかお前」……………へっ?」

唐突な罵倒に驚く。

「このヘブン・クラウドは俺たちが1度経験した物。だったら、その関係者が行かねえのは色々と不味いだろおが」

そんな理由、こじつけでしか無い。何故ゆえここまで協力しようとするのか？自分の命を優先すべきだ。

「だ、だけどよ!!俺はお前に「それ以上はよしてくれ」ッ……!!」

言葉を遮られ、唇を噛む。

「これは俺が選んだ道だ。んで、これは俺の末路でもある。だったら、待ち構えてる因縁放ってゆつくりなんぞ暮らせるか」

「因縁……とは?」

「……ここに来て漸く疼いたのさ、俺たちの因縁がな」

そう言い、京谷は襟の後ろを引っ張り、首元にある「星の痣」を見せた。

「俺は行くぜ。あの別世界の彼奴を殺しに行く」

京谷は咲夜の助けを借りながら階段を上って行った。

「……………分からない」

「勇人さん?」

「どうして……………あそこまで……………命を削ってまで向かおうとするんだ？そもそも、関係のない事のはず……………」

「勇人」

何故だ？どうして、其処まで強いんだ？自分より心も力も強い……………」

「勇人!!」

「!?」

じいちゃんに一喝され我に戻る。

「……………お主、何で京谷があそこまでするのかはとづくに分かっているはずじゃ」

「……………全然」

「はあ……………お主は京谷が”強い”からあそこまで出来ると思ってるのじゃろ？」

「……………」

「そんな理由じゃったら誰だってあんな事出来るわい」

「確かに”強さ”は重要じゃ。しかし、命を削るのに強さだけでは成しえない。確かな信念を持つ事が出来るから出来るのじゃ」

「信念……………俺には……………」

「ありますッ！勇人さんには確かに『信念』があります！」

「妖夢……………」

「勇人さんには皆んなを守るといふ信念を持つてるんじゃないんですか!？」

「……………『信念』だけでは成しえないこともある」

「はあ……………お主は自分を過小評価しすぎじゃ。それともあれか?力が無いからという理由で守ろうともせずただ指を啜えて見てるだけか?」

「!？」

「もう、分かったじやろ。ほれ、行くぞ」

「あ、ああ……………」

でも、信念があつても守れなかつたらどうする?どうするんだ?

京谷達を追いかけ次の階に出ると、そこには二階と三階で見た、ゾンビや虫がゾロゾロ口いた。

しかし、それとは比べ物にならない存在感を放つ者が奥にいた。——あいつが京谷の因縁か……………

兎に角、俺はその道のりにいる魔物達を撃ち抜く。後ろからゾンビが飛び掛かってくるが見もせず撃ち抜く。妖夢も魔物達を斬っていく。

今は京谷の進む道を作るのみだ。

数え切れない量の魔物達を倒していくにつれて、霊力も底が見え始める。それに銃の調子も悪くなってきた。弾のブレが生じてきた。

やっとの思いで禍々しい存在感を放つ者のいる部屋の前までの通路を確保できた。そして、遅れて京谷が来る。

京谷達と共に通路を進み大きな部屋に出た。

「ほお……………ここまで来るか」

今回の元凶であろう者がいた。漫画では見る事なんて何ともなかったのだが……………今こうしてリアルで見ると……………直視できない。直視したら引き込まれるーそんな錯覚に陥る。

そんな禍々しい、かつ人を魅了するような存在感を放つ者ーD I Oがいた。

「……………そのメイドと、ジョースターの血縁の者には効かぬらしいなあ」

「ご生憎様、俺は……………!!!」

と京谷からもD I Oと同じようなオーラが変わる。

「貴様……………このD I Oと同じ気質を持つとは……………何者だ？」

「ただのスタンド使いだ」

「フツ……………ただのスタンド使いが、このD I Oと同じ気質を扱える時点で普通の意味を

すると、ポケットから常備している血液の入った試験管が出てきた。そして、そのまま京谷の元へ行く。――なるほど、そういう事だな。

「残念だが、テメエの敗北だ」

そう言い、京谷は試験管を投げる。しかし、それはあまりにも遅すぎるものでD I Oにあつさりと避けられる。

「はっ!!最後の悪あがきにしては、随分と幼稚なのだな」

「そうじゃねえんだよ」

「何………ッ!!グオッ!!」

避けたはずの試験管がD I Oに刺さっていた。

「なッ!ば、バカな!!何故投げられた試験管がッ!!」

「クレイジーダイヤモンドの能力で『直した』んだよ、試験管の本体は俺の持つてる蓋に引き寄せられる。俺の左手の直線上に居るテメエを撃ち抜いてよお!!」

そして、同時にD I Oに血がつく事となる。すなわち、それは

「ば、バカなッ!!動けんッ!!」

D I Oがその場所にいる事が不変化――逆を言えばそこにいる事以外の行動をする事ができない。

「その状態だと、もう時を止める事も出来ねえな。何せ、『止まった時の中を動けねえ』か

「らなあ!!」

「無駄ア!!!」

そして、拳が当たる直前に不変化を解除する。そして、拳はそのままD I Oの胸を突き破る。

さらに、京谷は懐から「矢」を取り出し、スタンドがあろう場所に突き刺す。すると、眩い光で包まれる。

その光から出てきた京谷は額に星のマークを、下瞼にはそれぞれ【D I O D I O】【J O J O】と続いており、目と髪は金に染まっていた。

「チェンジャー・オーバーヘブン・レクイエム。俺はすべてを越えた」

「!!!」

「失せろ!!」

胸を貫かれたD I Oがさらに吹き飛ばされる。もう再起は不可能だろう。

……………これで、終わりか？一連の事柄から最後はこれか？

呆気なさすぎる。この事件はこれで本当に終わりなのか？

第69話

5F（高貴なる吸血鬼）の日の青年

前編

「くそツ!!まさか……………このD I Oがツ!!こんな無様な姿を晒すなんぞツ!!」

「こんな所で何をされておられるのかな?」

「くつ!!……………ソネか……………貴様!!あのガキ共を始末しろ!!俺は体を休めて!!」「ザクツ」グボア!!」

「何を世迷い言を。ただの実験台の癖に、よくもまあ言えますね。負けたのに……………まあ、これで実験は終わりました。この【魔王の魂】は返してもらいますね」

「ガフツ!!ガアアア……………」

「……………こんな骨1つでも、良いデータが採れました。後は魔王復活を行うのみ……………」

「ソネ!……………何だ終わっていたのか」

「この男、人間どもと戦って随分と弱ってましたからね。『魔王の魂』は回収しました」「決して無能ではなかったが魔王候補となると魔物達に対しての力リスマに致命的に欠けていたからな。もつとも、人間に対しては絶大な力リスマがあるようだがな。で、こ

「いつ食ってもいいか?」

「貴女もゲテモノ好きですねえ……………」

「しかし、もうじき人間が来ますよ。さっさと上に行きましょう」

「ハキムはどうした?」

「彼ならもう先に行きましたよ……………ところで貴女はやはり決めてないんですか?」

「いや……………今さっき決めた」

「そうですか……………なら、上にて発表するのでしょうか?」

—————

「フンツ、ようやく来たか」

「すいませんね、少し遅くなつて」

「そのぐらい我慢しろ、ハキム」

「ああ!?!文句あるのか?」

「……………これだから、低知能は」

「聞こえてるぞー！」

「(どうして、人間であるこの源地震太郎がこの魔物達の輪に呼ばれてるんだ？は……！まさか、お、俺の強さに……！)」

「まあ、まあ、落ち着いて、早く本題に入らないと」

「あ、その聞きたい事がある……」

「なんだよ、人間が如きが」

「ヒイ……！(や、やっぱり怖い！)」

「いいじやありませんか、ハキムさん。何か質問でも？」

「あ、あのD I Oとか言う奴はあんたらのリーダーじゃなかったのか？」

「元々は人間から吸血鬼となった者です。まあ、守護霊の様な面白い能力も持っていた様です。この『魔王の魂』を入れる事でより強大な力を得ていたのです」

「へえ……」

「『魔王の魂』の働きを調べるための実験台だったんですが予想以上に強くなってしまうので、リーダーに祭り上げて従うふりをしていたのです」

「(ふむふむ………とこでなんだ？『魔王の魂』って？)」

「さて、『魔王の魂』は回収しました。次は誰に使うか、ですね」

「D I Oの一件により、魔王にはそれ相当のカリスマが必要だ。それに、D I Oは”元人

間”であり、純粋な魔族じゃ無い」

「ほう……それではハキムさんは魔王になるには純粋な魔族の出身者である者が相応しいか?」

「ああ。よって吸血鬼が相応しい」

「(え? 吸血鬼ってD I Oもじゃん)」

「ふむ、私はハキムと反対の意見だな。私はあえて”人間”を推薦する」

「はあ!? お前、前まで推薦する奴なんかいいねえとか言ってたじゃないか! しかも、よりによって人間だと!? 馬鹿言うんじゃないか!」

「(人間って……まさか俺?!)」

「私が推薦する者は真面目な奴と見ている。上に立つ者として規律を守る様な奴がいいだろう。それにそいつは誰よりも力を欲している。そんな”飢え”も必要だろう」

「俺は反対だ!」

「どうせ魔王になれば強大な力が身に備わるのだ。しかも、私の推薦する人間は只者じゃない。元が人間だとしても問題無い」

「だがな、強大な魔力を操った経験があると無いでは大違いだ」

「吸血鬼の上位者ともなれば権謀術数にも長けているはず」

「私は別の候補を考えてますね。他人を引つ張るには何よりも欲望がなくては」

「なら、私の推薦する人間がいいだろう」

「いえ、その人間はまだ己の欲求に忠実とまではいかないんでしょう？ 私の推薦する者は実はライカン（狼男）なんですが、なかなか面白い魔族でしてね」

「……ちよつと待てよ。なんで俺を呼んだんだ？」

「私達3人じゃ、いくら話し合つても結論が出ないんですよ。それで、ここは古代共和国の流儀にのつとり、投票で決めようかと」

「え……？ それじゃあ、俺の一票で決まっちゃうじゃねえか」

「あ、それも面白くありませんね。やっぱり、個人で差をつけましょう。私は1000年以上は生きてますので1000票と言う事で」

「それなら、私は1万回殺されても死なないから1万票だな」

「そんなの言つた者勝ちじゃあねえか！ 俺だつてスカベラなんだから足が6本にかけて6000票は貰うぞ！」

「む！ 私が1番少ないじゃないですか！ それにハキム、6000票では私と貴方の票をあわせてもシアンに負けてしまいますよ！ そこはハツタリで6万票と言わないと」

「あの………俺の票は？」

「「1票」」

「(古代共和国が滅んだのってこれじゃね?)」

「もう勝手にやれ! どうせなら3人とも魔王にしちまえばいいだろ!」

「!!」

「おお、それはいい意見ですね。まさしく、ナイスアイデア」

「(どこまでマジなんだ?)」

「そうと決まれば、さっさと魔王にしてみましよう。誰から行きます?」

「なら、吸血鬼の『ジオット』からで構わんだろう? もう、既にこの城に入ってもらっている。後は交渉のみだ」

「それではお願いします、ハキムさん」

↳ヘブン・クラウド 5F↳

「やあ、随分と待たせるんだね。詳しく話も聞かせないで……………」

と言う、彼は彫りの深い顔に、男にしては女性の様に艶やかな髪を少々長めに切り揃えている。しかし、目は赤く、肌は死人の様に白い。

「ああ、すまない……………」

「ところでこの服どう？」

と彼の着ている服は現代のスーツ一式である。

「これまた、奇妙な服を……………」

「スーツとネクタイとワイシャツと言うらしいね。少しこの城の外を回ってきたんだけど、その時に面白い人間がいてね、そいつから記憶を吸い取って、再構成してみたんだ」「城の外に？なるべく騒ぎは起こしたくないのだが……………」

「その点は安心していいよ。ここら辺に住む吸血鬼と会って、その帰り道に迷っていた人間を捕まえただけだからね。彼はどうやら異世界の人だったらしくなかなか面白い話をしてくれたよ」

「それでは今もいるのか？」

「いや、飽きたから殺したよ。それより、今日は話があるんだろ？」

「ああ。単刀直入に言う。魔王になつてくれ」

「……………」

「どうだ？」

「はあ……………、そういうの困るんだよなあ。吸血鬼といのはさ、何事も本気でやると馬鹿にされるわけ」

「わかる？世界征服だとか魔王だとか言いだしたらボクの個人的な評価がガタ落ちだよ」

「はあ……………」

「だいたいね。どうしてあんた達の誰かが魔王にならないわけ？最後まで責任とりなさいよ」

「いや、それがですね……………」

「5年前」

「これが『魔王の魂』か」

「伝承通り存在しましたね。次はこの城を浮かばせるだけです」

「それなら、誰が使うか決めねーと」

「それならソネだろう。1番年長だし、経験も豊富だ」

「やめてくださいよ。私は側近の立場が落ち着くんです。気楽に意見できますからね。」

それよりも貴女ならどうです？。そもそもこの魔王の計画には貴女が1番熱心じゃないですか」

「自分が英雄ではない事は、何より私が理解している。それに私のような特異的な魔物だと魔力が増しても、魔王としての威厳が備わらないかもしれない」

「確かに、下手をすると操る虫の種類が増えるだけとかおかしな事になるかもしれないね。じゃあ、ハキム、貴方は？」

「え？。あ、いや……俺は……俺も性格的にだな……」

「ふむ……せっかく『魔王の魂』を手に入れたのにこれでは困りますね。とりあえず適当な者に使ってみてこいつの働きを確かめますか」

く回想終了く

「要するに、2人を差し置いて自分が魔王になる事に気が引けたと？」

「まあ……そんな事になるな……」

「呆れた人達ですねえ……そんな計画に乗ったら、ますます私が馬鹿みたいじゃないですか」

「……………」

「というわけで、ボクは魔王になってあげても構いませんよ」

「え？」

「ボクは天邪鬼なんでね」

「そ、そうか……………あ、ありがとう。俺はあいつらに報告してくる」

「ジオット様。本当に魔王になられるおつもりで？」

「あの連中、どうやら全部をボクに言ってるわけじゃなさそう。面白いでしょ？このボクを騙すつもりなんだよ。このジオットをね」

「それに、色々と面白そうじゃない？ 厄介ごとは最高の遊びだよ……………」

—————

く 紅魔館 く

「……………」

「まだ、お考えですか。お嬢様」

「……いいえ、答えは決まってるわ」

「なのでしたら……」

「だからこそ、考えてるのよ。なんせ、相手が悪すぎるのよ」

『『ジオット』……ですか?』

く半日前く

「やあ、初めまして。ボクは最近この辺に来たジオットだ」

「紅魔館の主、レミリアよ」

レミリアは2人の客を迎えていた。1人は同族のジオットと名乗る者。もう1人は護衛なのかただ、ジオットの近くに立つだけである。

「それで、ここに何の用かしら?」

「挨拶をしに来ただけさ。ところでボクの事を知ってる?」

「ええ、若手ながらも『カウンシル』の上位に立っている。かなりの評判のようね」

「嬉しいね、名が知れていて。どうだい? 君も入ったら。君ならすぐに上位に入れると思うよ」

「光栄な事だけでも、生憎、そういうのには興味が無いわ」

「あら、残念。まあ、そつちはどうでもいいんだけどね。挨拶をしに来ただけとか言つたけど、本当は君を誘いに来たんだ」

「何にかしら?」

「今度ね、人間が来るのだけどそいつらを使って面白い事をしようと思つてるんだ。ボクの事を知っているなら『人間ドミノ』っていうの知つてよね?」

「!?」

「そう、2回目もやろうと思つてるんだ。どうだい?参加しないかい?」

「……………少し考えさせてもらえないかしら?」

「ああ。興味があるのなら是非あの空飛ぶ城に来てくれ。要件はそれだけ。じゃあね」

く回想終了く

「お嬢様、『ジオット』というのはどんな吸血鬼のです?それに『カウンシル』とは?」
「彼は私よりも年下なのにもかかわらず、天性のカリスマを持つてるわ。それはヴァンパイア達への影響をもたらす程よ。彼自身もかなりの有能で人を見極める力は相当なモノつて聞いてるわ。だから、彼の下には有能な者達ばかりと聞くわ。ただ、それと同時にさつき彼が私を誘つた『人間ドミノ』という、人間を一方的に惨殺する、残虐極まりない宴を開くなどと非情で残忍かつ狂気に満ちた奴よ」

「そんな奴が……」

「後は『カウンシル』ね。長過ぎる生に飽いた高位のヴァンパイアが貴族社会を模して暇潰し半分に立ち上げたものよ。ヴァンパイア達の階級別社会構造を表していると言える大規模な組織と言えるわね。普通なら年功序列で長く生きた者が上位に立つのだけど彼は例外的に上位に上がってるわ」

「何故幻想郷に……」

「私には分からないわ。紫にでも聞かないと」

「それにあの城の事も……」

夜の『ヘブン・クラウド』はより怪しく浮かんでいるのだった。

第70話

5 F (高貴なる吸血鬼)の日の青年

後編

「京谷！」

京谷はD I Oが吹き飛ばされたであろう場所まで歩いていった。もう元凶は潰えた。終わりだろう。

「……………」

しかし、京谷は返事をしない。

「京谷！京谷！オイッ！」

「……D I Oがない」

「え？」

「D I Oがない！この後に及んで逃げやがった！」

「だ、大丈夫だ！血を引きずった跡がある。そこを追いかければいずれD I Oの元に着く」

血を引きずった跡は上への階段へと続いていた。

「なら、さっさと行くぞ！」

「ま、待て。お前、体は大丈夫なのか？」

「そ、そうよ！さつきまで立つのもやつとだったじゃない！」

「あれ？そういえば……体が随分と軽いなあ。むしろ、エネルギーが溢れかえってる気分だ」

何があつたんだよ……さつきまで死にかけてたのにヨオ……まあ、どうともなくて良かったが。

「じいちゃん、なんかしたか？」

「いや……神力をやってるからって使われた魂を戻す事はできんぞ」

「と、兎に角、今はこうしてピンピンしてるわけだ！さつきと行こう！」

「い、いや……俺、結構疲れてんだけど……」

「ほら！行くぞ！敵は待つてくれないぞ？」

こっちは疲れてんのに向こうは元気になるなんて……少し腹がたつ。それに、こちら、2丁拳銃の調子もおかしくなってきたというのに。

「勇人！置いてくぞ！」

「はいはい……行くから行くから……」

全く……心配かけやがって……やっぱり、腹がたつ。

血を引きずった跡はそう長くは続いていなかった。意外にもすぐに跡は途切れていった。……………本体はいないが。

「チツ……………逃げ切りやがったか」

「いや、違う……………D I Oはここまでしか来ていない」

「これまた、よく断定できるな」

「ああ、よく観察すればすぐに分かる。そうだ、当てたらなんか奢ってやる」

「へえ……………言ったな？絶対何か奢れよ？」

「ああ」

実際、すぐに分かるだろう。

「……………」

く5分後く

「……………分からん」

「へえ……………さつきまで自信たっぷりだったのに」

「いや、ただ血があるだけだろ？何が分かるんだよ？な、咲夜？」

「分かったわよ」

「そうだよな、分かるはずが……は？」

「簡単よ？」

「え………？よ、妖夢も？」

「はい。何があつたまで推測できると思います」

「じ、じいさんは……」

「分かつておる」

「なん………だと……？」

「これは、全く分かつてないな。答えを教えてやるか。

「なあ、こちら辺一带どうなってる？」

「どうなってるって………血があるだけだろ？」

「ああ、血だらけだな。まるで飛び散ったかのように血の跡が付いているな」

「………は！ま、まさか！」

「そうだな、多分ここでD I Oは殺られた」

「いや………分かりにくいだろ？」

「もつとも、ここにD I Oの衣服がある時点でそうだと言えらると思うけどな。本体は消

滅したのか？」

「……………」

あ、ちよつと、不機嫌になった。少しからかいすぎたか？

「ま、まあ……本当の黒幕はD I Oではないという事が分かっただろ？多分、道中にあつた3人が怪しいがな」

「……………」

と、俺らはまた階段を登るのだった。

—————

「ジオツト様、人間がこのフロアに入ったようです」

「へえ……人間が？」

「厳密に言いますと2人程違います、後の3人は人間です」

「そうか、せつかくのお客だから盛大に”おもてなし”をしてあげて」

「しかし、相手は相当な手練れと聞いています」

「ハハ……さては戦いたいんだろ？マゼンダ……」

「さしがましい事ですが……是非とも戦いです」

「いいよ。せつかくだからね」

「ありがとうございます」

「久々に面白い人間に会えるようだね……」

「ふああ……」

「欠伸するなんて余裕だな、勇人」

「しょうがないだろ、もう1日以上経ってるだろうはずなのに一睡もしてないんだぜ？
逆になんで眠くならないんだ？」

俺としては早く夢の世界に行きたいのだが。もう、頭がぼんやりしつつもある。

「確かにぶっ続けていくのもキツイな……………次のフロアを通り抜けたら一旦休みを取ろう」

「そうと決めればさっさと行こう」

と、先程から見えていた5階に乗り出すのだった。

「……………京谷、この道、通ったよな？」

「え？そんなのか？」

「というか、さっきから同じところをグルグル回ってる気がするわ」

「わ、私は分かりません……………」

はい、完全に迷っています。景色が単調なため、どこを歩いているのかが見当もつかない。ああ……………休憩は少しお預けのようだ。

「うーん……………どこを行けばいいのやら……………」

「はあ……………道中にゾンビがいたけどもう見なくなってきたし……………やっぱ、同じ道を通ってるんだろう」

「途中途中の部屋も全部そこで行き止まりだったし、誰かの術のせいじゃないのかしら？」

「はあ……………もうここで休めばいいんじゃないか？」

「そういう訳にもいかな……………」

「どうした？京谷」

と京谷の向く方向を見ると、ゾンビが壁から出てきていた。そういうタイプかよ……………

出てきたゾンビはすぐに始末して、ゾンビが出てきた壁を確認する。

「おおく、すり抜けられるぞ」

と京谷は壁に腕を出し入れする。

そして、その壁の向こうに入ってみると少し広めの部屋に出た。

「これまた……………空間どうなってるんだ？」

「さあな……………あいつに聞いたらいんじゃないか？」

と京谷は指差しながら言う。その指す先を見るとフードを深く着込んだ者がいた。顔も見えないため男か女かも分からない。

「なあ、あんたがこんな事を？」

「……………」

京谷が問いかけるが相手は反応しない。俺は回転式拳銃に手を伸ばす。相手の腰には剣が携えてある。

「少しは反応してからもいいだろう？」

京谷が近づく。しかし、相手は動かない。もう、京谷が腕を伸ばせば届く距離まで来た瞬間

カキイ！

「……………」

気づいた時には既に相手は剣を抜いていた。

「あ、あぶねえ……………」

京谷は辛うじてガードしたようだ。

「やるって言うのなら、手加減はしないぜ！」

しかし、相手は剣をしまった。そして、指をさした。

「え？わ、私?！」

指をさされたのは妖夢だ。

自分を指差す妖夢に対して相手は頷く。

「だだよ、どうする?！」

「お、同じ剣士としては是非お手合わせしたいとは思いますが……………」

「なら、いいんじゃないか？一騎打ちしてこいよ」

「京谷、今の内に奥に行け」

「え？」

「多分、こいつは誰かの配下だ。お前はその頭を討ってきてくれ」

「ああ、任せとけ」

と京谷はパツと消える。時でも止めたのだろう。後は妖夢に任せるか……………

妖夢は剣を抜き一歩前に出る。それに応じて相手も刀を抜き、鞘を捨てる。

「それでは私がお相手をさせていただきます」

「……………」

フードから覗く爛々と光る眼は俺達ではなく、完全に妖夢の方を捉えていた。その右手には長い諸刃の剣。

その刹那、奴の姿は既に妖夢のすぐ近くまで迫っていた。そして、手にした獲物を下段から振り上げた。

「……………ッ！」

妖夢も楼観剣を抜き、上段から振り下ろしこれを防ぐ。

刃同士が激突し火花を散らす。同時に妖夢はもう片方の手で白楼剣を抜き、相手の側頭部を狙うが、相手は反射的にこれを体を逸らして避ける。しかし、避ける事で剣への力が弱まり、妖夢は距離を取る事を選択する。

再び、妖夢は奴と真つ向から対峙する。

「何者です」

「……………マゼンダ」

ここに来てようやく声を聞いたが……声からして、多分女だろう。しかし、マゼンダと名乗る彼女はそれだけ言い、妖夢の喉元への打突を繰り返した。それを妖夢は半身になって避け、カウンターとして胴への斬撃を繰り返す。——完璧なカウンターだ。この斬撃は避けられない。

しかし、相手は楼観剣の刀身の横っ腹を柄頭で叩きつける。

「クツ……………」

その衝撃は刀身を伝わり妖夢の手へと伝わる。それによって、握力を奪われ楼観剣を落とす。

「妖夢ッ！」

「来ないでくださいー！」

いつもとは違う強い口調により、構えた拳銃を降ろす。妖夢は足元に転がっていた相手の鞘を蹴り上げ、動きを一瞬封じる。その間に楼観剣を回収し再び間合いを取る。

「じ、じいちゃん……相手はなかなかやるんじゃないのか？」

「ああ……あのカウンターを躲すどころか返してしまおうたわい」

「ふう………」

妖夢は大きく息を吐く。そして、背中に携えていた鞘に刀をしまい腰まで持つていく。所謂、居合の構えである。

「フツ………」

口元に微笑を浮かべる相手は両手をだらりと垂らし、剣先は地面についている。

そして、相手は地面を蹴り妖夢に迫る。

居合は長刀が近距離にも対応できるようになるものであるが、それ故攻撃範囲は限られる。範囲内に入る瞬間をどう見極められるか………

カッ！

「なっ………!?!」

相手は地面に落ちていた己の鞘を妖夢に蹴っていた。

妖夢はそれを躲すが既に相手はすぐそこまで迫っていた。
相手の横薙ぎが妖夢の胴までに迫る。

カキイ！

「クツ……………！」

辛うじて妖夢は受け止めるが、体勢は大きく崩された。

そこから相手の猛攻が始まる。上段、中段、下段——多彩な攻撃が多角的な軌道を描いて妖夢に襲いかかる。突きが急に斬撃へ代わり、肩口を狙う刃が突如小手を取りに行く。次の手はもちろん、直後の軌道すら読めない。これは……………

「無形……………？」

「ああ……………構えが無い、型無いんじゃない」

徐々に妖夢は追い詰められていく。

「こんなものか……………」

相手はあれ程猛攻しているにもかかわらず、まだ喋る余裕すらある。

「……………お前の力はそれだけなのか？まだ先はあるだろう？」

妖夢も反撃に出ようとしているが相手がそれを防いでいる。

「お前が剣を振るう理由はなんだ？ただ強くなるだけなのか？」

「……………！」

すると、妖夢が相手の一撃を弾く。同時に押されていた気配が変わる。

「私は……………私は！守るために！勇人さんや幽々子様やみんなを守るためにこの刃を振ります！」

「勇人さんより弱いかもしれないけど！それでも勇人さんを守ってみせます！この人の前なら私は絶対に負けません！」

そして、妖夢の防戦一方だったのが共に激しい攻防を繰り広げるようになった。

「……………！」

「強いのお……………妖夢は」

「ああ……………俺なんかよりずっと強い……………」

しかし、2人の戦いは意外な形で終わる。

「……………!?!」

「ん?」

相手の手が止まる。しまいには膝をついた。

「はあ、はあ……………」

「な、何が!?!」

「フフ……どうやら、ジオット様がやられたようだな……」

京谷達はうまくやったらしい。

「で、でも、どうして!?!」

「私は強大な力を手に入れる代わりにジオットに魂を売った。それにより、ジオット様がいる限り私は復活し続けた……だが、ジオット様がやられた今、共に滅ぶしか無い」

「な、なんでそんな事を……」

「お前と一緒に。大切な物を守りたかった。それだけだ……でも、お前はできるようだな……」

「簡単に手に入る力なんぞは自分の身を滅ぼしかねんという事ぐらいわかってたんじゃろ?」

「あ、ああ……でもな、人間っていうのはわかっててもすぐに傾いちゃうもんだ……」

「マゼンダさん……」

「でも、最期に君と剣を交えてよかったと思うよ。忘れかけてたものを思い出した……君はまだまだ強くなれる」

「はい!」

マゼンダの体はだんだん薄くなっていく……

「君の名前は妖夢って言ったね……………」

「はい、そうです」

「できるなら、あの男を支えてやってくれ。あいつの心は今ぐらついている」

「え？ 勇人さんは……………大丈夫なはずです」

「ああいう奴ほど自分で抱え込んで私のようになる……………もう私から言えるのはそれだけだ」

「はい……………」

マゼンダの体は完全に消失した。

「勇人さん、私はいつでもそばにいますからね」

「ああ、ありがとな。妖夢は大丈夫か？」

「ええ、問題無しです！ 京谷さん達の元へ行きましょう！」

何を話したかは分からんがどうやらまた一つ成長したらしい。

そして、小さな逞しい背中を追いかけるのだった。

第71話 6F（弱肉強食）の日の青年

「チツ……………！ジオットがやられるとは……………！」

「んー……………魔王の魂とは相性が合わなかったようですね……………あ、ちゃんと回収しましたか？」

「ああ、回収はしたが……………あそこまで戦闘の才能が無いとは……………」

「確かに頭の回転が速い人でしたが、戦闘においてはD I O以下でしたね」

「所詮、ハキムの推薦する奴だ。大した奴ではない事は分かりきってた事だろう」

「だ、黙れ！」

「実際そうだろう？」

「ぐ……………」

「それでは次は私の推薦する人ですね。彼なら何かの成果は出ると思いますよ」

「まあ、ハキムよりはマシな結果になるだろうな」

「言わせておけば……………！」

「喧嘩はよしてくださいよ？私はグントラムさんに会ってきますから」

くへブン・クラウド 6Fく

「お頭、会いたいと言う奴が来ましたぜ」

「通せ」

「相変わらず凄まじい肉体ですねえ……………」

「おお、ソネか。例の件についてか？」

「ええ、これが”魔王の魂”。これがあれば今までに無い力を得ることが出来ますよ」

「ハハ！ライカンになってからというもの、これ程のパワーを得て、そして、人間の頃よりも忠実な部下を持った。昔の俺ならこんな充実した人生は予測しなかっただろうな！それに加えて、王になれるというとはな！」

「貴方に聞きますが、もし魔王になったらどうするおつもりで？」

「なあに、世界を支配すると決めている！」

「流石！お頭！」

「ハハ！そうだろう！」

「それはそうと、人間がこちらに向かって来てます」

「人間が？」

「あまり舐めない方がいいですよ。この城の5階まで突破してますから相当な手練れでしょう」

「いいや、寧ろそつちの方がいい。敵は強くなきやあ面白くない」

「ふむ、流石元軍人なだけありますね」

「このぐらいの向上心があるなら、問題無さそうですね……………」

—————

くへブン・クラウド 5Fく

「京谷!!……………!!?」

「京谷さん!!咲夜さん!!無事でした……………か……………!!?」

妖夢とマゼンダの一騎討ちは主人の死によって終わりを告げ、京谷達のいるところに向かったのだが……………

「……………勇人、妖夢、じいさん。終わったのか」

「京谷、咲夜……………これは……………何だ？」

「この部屋に居た吸血鬼の元配下よ。さっきまで死にながら生きてたけど」

「……………急に湿っぽくなつたな。悪い」

「そうか……………まだ階段が続いてる。少し休んで行くか」

京谷が死体を焼却処理している間、マゼンダの言った言葉を噛み締める。大切な物を守りたかつた……何かは分からないが、命を売ってまで守りたかつた物だつたんだろう。力と言うのはどんなものだろうか？ 純粋な腕力などのパワー？ 剣術や体術などの技術？ 何事にも揺れない強い心？

少々考え過ぎか……………京谷の方を見ると腕から刃物を出して、それを見て呆けていた。

「京谷く、おおい」

「……………ん、ああ。わり」

「大丈夫？ 京谷」

「……………んまあ平気だ。心配すんな」

「本当かしら?……それじゃあねえ」

と咲夜は京谷の顔に近づく。……………はあ、仲がよろしいようで。

「うおっ!」

おっと、不意打ちで首にキスをしたぞ!

「何時もの仕返しよ♪」

「仕返しって……それやると俺だって」

おっと、京谷が仕返しにキスをしたぞ!

しかも、デープだぞ!

それに俺らがいるのにも関わらずにだぞ!

君たちには羞恥心は無いのかな?放っておくといつまでもしてそうなので軽く咳払いをする。

「うおっほんツ!!!」

「!!!」

「……イチャイチャするのは良いけどよ、時と場合を考慮ろよ。見てる俺たちが恥ずかしいわ」

「……ごめん」

妖夢はもはや気絶寸前である。彼女が彼らに感化されない事を願うばかりである。

はあ、疲労がどつと来た……………仮眠とろ……………

く30分後く

んー……………なんなのだろうか、この感触……………久々に感じるな……………あー

……………快適だ……………

ん？枕？異変に気づき、瞼を開ける。すると、妖夢の顔が映った。

成る程、膝枕か……………

フフ、俺はもう驚かないぞ。寝ていたらーとかと言うシユチュエーションはもう慣れっこなのさ！

兎にも角にも、体を起こし、体を伸ばす。少し寝ただけでも大分違うな。

京谷達も俺が目覚めたのに合わせて、準備運動を始める。

それらが終わった後、次の階へ歩を進めるのだった。

—————

くへブン・クラウド 6Fく

辿り着いた先には下の階よりも広い部屋となっていた。

まあ、たくさんの『狼男』がゾロゾロといるせいで全く広く感じないが。

その中に一際体の大きい個体がこちらを睨んでいた。

「やあくん、京谷くこわくいい!!」

「嘘こけ」

「はいはい、分かったから。今敵の前だから」

この2人の茶番にはもう慣れてしまった。おかげでスルースキルが向上したよ。

「はっ!! 貴様ら、ここまで辿り着けたとはな……褒めてやるぞ、人間ども」

一際体の大きい個体が話しかける。こいつがリーダーと見て問題無さそうだな。

「頭!! その人間と、そのメイドからは何の恐怖すらも感じられません!! 寧ろ状況に感化されていません!!」

「黙れ童」

不意に喋った仲間の首を簡単にへし折った。こいつのパワーはなかなかにあるな………鬼と張り合えるのではないのでは?

「……悪いな、俺はどうにも短気なものでな。コイツらを見てくると無性に腹がたつ」
「か、頭!? 何故その様な事を!？」

「……はんッ。それよりも奴等を倒すことを命ずる。お前達は人間を殺して食っておけ」

『へ、ヘイツ!!』

数で来るか………俺はすかさず銃を構える。この銃は調子がおかしいがリボルバーを使う程の暇は無い。

しかし、京谷は俺達よりも先に動いていた。京谷は狼男の群れに飛び込み

「俺とツ!! スタンドで道切り開くからツ!!! お前らはそこのデカブツをツ!! 頼んだぜ!!」
「……ああ!! 分かった!!」

京谷の言う通りにリーダーと思わしき者と対峙する。

「貴様らが相手をするのか……だが、それも良からうて!!」

その一回り大きな狼男は腰を低く落とし、右腕と右脚を前に出し、左腕と左脚を下げる構えを取る。

「我が名はグントラム!! このライカン共を統べる王なり!! この戦いの中に一切の言葉は無用!! 全ては血風の中で語り合おうぞ!!」

その言葉を皮切りに戦闘が始まった。

京谷達が手下を処理している間にこいつを始末しないとな。

「さあ、かかってこいよ。デカブツ」

「フンツ！なら、お望み通りにしてやろうッ!!」

このグントラムとか言う奴は馬鹿正直にこちらに真つ直ぐ突つ込んで来た。

それなら、こっちは銃で撃ち抜くだけだ。

素早く引き金を引き、グントラムに弾丸を浴びせる。が、弾丸は狙った所とずれ、掠るだけとなった。

「馬鹿者が！どこを狙っている!？」

「しまっー」

軽自動車ぐらいはあるような巨体が俺の体へ近づく。そして、全身に強烈な衝撃が走り

「ウグッ!？」

「勇人さん！」

軽々吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる。その拍子に銃を手放してしまった。

「弱い、弱過ぎるぞ！その程度か？」

「く……………ッ！」

肋が何本か折れたか？口には鉄の味がする。

「ほらー！さらにいくぞー！」

再び巨体がこちらに迫る。俺はそれを辛うじて避ける。

そして、構えを取る。

「ほう……………人間風情が素手で俺に向かおうとするとはな……………」

「……………ほら、早くこいよ？」

「なら、後悔しないようになッ！」

巨体に見合わない速さで俺に掴みかかるが、腕を掻い潜り、顎に強烈なアツパーを食らわせる。

しかし、相手は仰け反ることなく受け止め、

「ガハハ！良い拳だ！」

「な!？」

「が、ちとパワーが足りん」

両手で体を掴まれる。そのパワーにより骨がミシミシと悲鳴をあげる。

「グアアアア！」

「勇人さんを離せ！」

すかさず妖夢が飛びかかるが、足によって薙ぎ払われる。

「このまま、お前を握り潰すのもいいが……………この状況においてのその目……………敵を滅さんという目……………それにあの拳……………気に入ったぞ！お前を俺の配下としてやろう！」

「ふつ……………そんなのは……………死んでも……………ごめんだぜ……………」

「そんなのは関係ない。俺が咬めばもう俺の配下だ」

グントラムの牙が首に近づく瞬間、弾幕がグントラムを襲った。

「勝手にわしの孫を配下にしようとするんじゃないぞ」

「チツ……………だが、こいつは圧倒的なパワーに憧れているのだろうか？」

「ふつ、魔族はいい。昔、俺は軍人だった。軍人になった理由は何かを守りたかったのではない。ただ、純粋に強くなりたかった。誰よりも強く、頂点に立ちたかった。そう思いつながら必死に鍛え、地位を上げ、優秀な軍人とまで言われるようになった。だから、それでも頂点には立てなかった。俺よりも強い奴はうじゃうじゃいた。いくら鍛えても鍛えても追いつく事は出来なかった。そんな時だ。俺がライカン（狼男）に咬まれたの

は。最初は怖かった。仲間にも殺されかけた。しかしだな、ライカンになると、圧倒的なパワーを手に入れ、今まで全く敵わなかった相手に簡単に勝てた。今まで強いと思ってた奴があつさり打ち破る事が出来た。その上、たくさんの部下を手に入れ今はこうしてライカンの王として君臨している。終いには魔王になろうとしている」

「だから？単純な力だけでは頂点に立てない」

「いや、立てる。力がある者が全てだ。力が無ければ何も守れない」

「……………!!」

「力だけでは何も守れないという奴は力が無い者の言い訳に過ぎん。所詮、力が無ければ何も守れん」

「そ、そんな訳がない!」

「フンツ!ならそれを証明してやる!」

再びグントラムはこちらに迫る。

「じいちゃん!妖夢!」

「な!?!」

脇から妖夢もじいちゃんがグントラムを抑えつける。その隙に銃を拾い上げる。

「は、離しやがれ!」

暴れるグントラムに狙いを定め、

「『ようこそ、男の世界へ』」

2丁拳銃に靈力を最大まで込め、トリガーを引く。

その最大靈力により放たれた銃弾はバイソンと呼ばれる動物の様に荒々しく、男が持つ決闘美を象徴するかの様に速く、グントラムの眉間を貫いた。

「……………やっぱり、そうだろ？力があがる者が全てだ……………これも所詮力の差……………お前は……………弱肉強食の原理こそがこの世の真実である事を……………証明した事に過ぎん……………」

そう言い残し、グントラムは倒れた……………力こそが全て……………そうかもしれんな。

第72話

7F (黒き煙の侵食) の日の青年

く人里く

謎の城『ヘブン・クラウド』が現れてから早数日。人里では大きな事件も無く元の平穏な日々が戻りかけようとしていた。

「慧音さん、もうある程度は外出を許可しても良からう?」

「そうだな……………虫の大群以来、大きな事件も無い。とりあえず、夜間以外の外出を許可してもいいでしょうね」

「ふう……………これで、里の者も仕事を始められる」

里長と慧音さんの話し合いにより、警戒がある程度解除された。肝心の城は未だに浮いたままだが。

里長との話し合いの後、慧音はもう一度西欧の歴史書を読み返していた。

「ここに置いての魔王城は魔力を、供給する装置か……………ん?供給?それだと、何処に魔力を溜めてるのだ?ここには魔王城に魔力を溜めていたとは書いていない……………しかし、そもそも作り話の可能性もあるな……………」

魔王城の謎を考えている慧音の元に訪問者が。

「お邪魔します。慧音さんはいますか？」

「ああ、こつちだ。何か分かったのか？」

「いいえ、さっぱりです。神奈子様や諏訪子様に聞いてみてもそんなのは知らないと。慧音さんは？」

「確信では無いが……可能性としてこれもありうると言う事なんだがな、この歴史書に置いては魔王城はただの魔力を供給する装置で溜めておく物では無いだろう、という事がわかるのだが……この歴史書に書かれてある事自体、作り話の可能性もある」

「でも、確かめてみる価値はあるんじゃないでしょうか？」

「そうなんだが……仮に魔力を溜めている装置を見つけて破壊するとする。だが、あの城はどうやって浮いている？可能性としては魔力を使って浮いていると考えた方がいい。魔力を失った場合、城は墜落する」

「あ！城の中には勇人さん達が！」

「そうだ。急に落ちたりでもしたらただじゃ済まない」

「それでは……どうしたらいいのでしょうか？」

「早苗の言う通り、確かめる価値はあると思うぞ。それに完全に破壊するのでは無く、城

が浮く程度の魔力を残すようにすればいい。まあ、あの城の意味はまだ分からないがな」

「それは勇人さん達が解明してくれますよ!!」

「フフ……そうだな」

くへブン・クラウド 6Fく

「はあくく、疲れた……………」

情けない声と共にその場にへたり込む。今のショットで2丁拳銃は完全にイかれた。もう、霊力を撃ち出す事でさえできまい。

「イタタ……………急に動くのは良くなかったようじゃの……………歳はとりたく無い者じゃ」

「その割にはとても機敏でしたよ」

2人はまだまだ大丈夫なようだ。まあ、そもそも人間では無いからな。俺よりは頑丈だと思うぞ。もう、俺はついに肋骨が折れて、内臓も傷ついてほぼ満身創痍だ。

「終わったようだな……………」

「ああ、京谷か。周りの奴らは？」

「生き残りはあんなつまつたよ」

と京谷が指差す先には

「お頭！目エを開けてくださせエ！」

「いつもの様に強き者が絶対だと教えてくださせえ！」

『お頭！』

「人望も厚かったようだな」

「誰よりも野心家で、豪快な奴だったからな。慕う理由も分からんでもない」

ライカンにさえならなければきつと素晴らしいリーダーとなれたのかもしれない。

しかし、当の本人はライカンになった事を後悔していないらしい。いつの時代にも力は魅力的な者なんだろうな。

「イテテ……………」

立とうとすると、怪我した場所に痛みが走る。

「お前、怪我してんのか？ 見せろ」

「別に大した怪我じゃないさ」

「大した怪我じゃよ。肋折れて内臓も傷ついて何を言っておる」

「少し動くなよ」

と京谷は俺の怪我した場所に触れる。

「あれ？ 痛みが……………」

「もう怪我なら治してやったぜ」

「それもスタンドか……………」

全くもって便利だな。

怪我也治った所で次に行こうとした矢先

「待ちやがれ！」

1人のライカンが声を荒げた。

「お頭の…………お頭の！ カタを取ってやる！」

『そうだ！』

1人に呼応し、残ったライカンがこちらに向かおうとする。

それに合わせ、俺らは構える。が、

「待て！お前らはお頭の信念を知って、カタを取ろうとしてるのか!？」

「……………!？」

1人のライカンが周りのライカンを制した。

「お頭は常に言ってただろう！強者こそが絶対と！お頭に勝ったこいつらは強者だ。俺らがカタを取る理由なんて無い……………」

「ぐ……………ッ!？」

「とつと行きやがれ！俺らの気が変わらねえ内に!？」

「……………そうさせてもらう」

歯を食いしばり、拳をワナワナと震わせるライカン達を後に次の階へ進むのだった。

「今回の敵は誰よりもカツコよかったのかもな……………」

「そうだな。お？もしかして憧れちゃったり?？」

「……………さあな」

確かに京谷は強い。咲夜も強い。妖夢だってそうだ。でも、果たして、俺は彼らの言う強者なのだろうか？

「お頭あ……」

「泣くな！お頭の前で……泣くな！」

「お前だって……泣いてんじやねえか……」

「泣いて……なんか……いない！」

「……俺らは、どうしたらいいんだ？」

「受け継ぐしか無い。お頭が目指した帝国を俺らで作るんだ！」

「お頭がいねんじや、何も出来ねえよ……」

「居なくてもやるしか無い！強者が絶対だと俺らが示すしか無いんだよ！」

「……そうだ！やるしか無い！」

「……………終わってたか」

「誰だ！また戻って………シアンさん!？」

「ん？誰だ？シアンって」

「ソネさんの仲間だよ」

「ああ………そういえば、お頭と知り合いだったな」

「グントラムは死んだのか？」

「ええ……お頭は……」

「そうか、ソネが残念がるな。お前らも相当悲しいだろ？」

「そうです……でも、俺らはお頭の意味を受け継ぐと決めました!」

「どうするつもりだ？」

「兎に角、この城を出て外で一からやり直します!」

「………それは出来ないな」

「え？」

「お前らは全員ここで死ぬからな」

ザーツ

「な、なんだ？部屋がだんだん黒く………」

「あれは………色が変わってるんじゃない！虫の大群だ!」

「ウアアアアア!!」

「虫!?人を食う虫だと?!」

「こいつ!これでもくえ!」

ザクツ

「ひっ!?な、なんだ?お前の体は!?!」

バリゴキグシヤグシヤバリバリガツガツ……………

「逃げろ!退却だ!退却!」

「何処に行くつもりだ?」

「お、お前は!は、ハキ　ガブツ!

ベキバキボキボキ……………

「……………」

「おい、ソネは食わないのか?こいつら、普通の人間よりも歯応えあつてうまいぞ、まあ、毛が多いが」

「ははは、いや、私は結構。死体はある程度残してください。何かに使えるかもしれませ
ん」

「いや……………それは……………無理かもな」

「シアン、がつつきすぎですよ」

「……………勇人はどこに行った？」

「上ですよ、魔王の魂ならここに」

ザーツ

「相変わらず食欲旺盛ですね……………」

—————

くへブン・クラウド 7Fく

「何もねえ!!」

「確かにそうだが……………そのテンション、どうにかならんのか？」

「だって、何故か力がみなぎってんだよ！それなのに何もねえ！」

「はあ……………」

「げ、元気なのはいいと思いますよ?」

「限度があるだろうに……………」

それに、咲夜と腕を組んで歩いている。イチヤイチャつぷりを見せつけられても困るのだが……………

「お前さんもすれば良かろうに」

「はあ?」

「わ、私は構いませんよ……………／＼」

「お? ついに勇人もイチヤつくのか?」

「そうよ、むしろ奥手すぎてこっちが砂糖吐きそうだわ」

まさかの味方無しだ?! 無言で迫る妖夢、囁し立てる周り。

……………!!」

「え? もしかして、怒っ　　パァン!　　う、撃つなよ!」

「ふむ? 躊躇いのない、いい狙撃だ。私の体が5匹は死んだな」

「え!?!」

「お、お前はシァン!」

「京谷！火だ！虫には火だ！」

しかし、すぐに群れと化し距離を取られる。

「やれやれ。これでは落ち着いて話もできん」

「お前らの目的は何だ？どうして、俺らを襲う？」

「貴様は家族はいるのか？」

「質問を質問で返すなよ」

「ああ………そうだったな。貴様を魔王にする」

「「「はあ!」」」

「勇人が魔王？冗談にしてはキツイぜ」

「勇人さんがそんな事する訳ないです！」

「守るべき人々、友人………大事にしていたものが、目の前で壊されるのは辛いぞ。そ

れに対して、何も出来ない無力さにお前は、耐えられるかな？」

「はあ………そんなやり方で俺を脅しても、もし俺が魔王になれば最初にその力でお前を

殺すぞ」

「むしろ、そうであってほしいね。そして、その力を一度手に入れればもう捨てる事は出

来ない」

「自ら命を絶つかもしれないし、どこか山奥に閉じこもるかもしれないぞ？」

「それは無理だな。お前は私と同じで責任感がある。自分に何か出来ると知れば、世界に対して何かをやらずにはいられない」

「お前と同じにしないでくれ、バケモノ」

「とつと燃えやがれ！」

強烈な熱気がシアンを襲う。しかし、虫の大群となり回避される。

「ところで、ネズミ算というのを知ってるか？」

「??」

「私が魔族になってそれなりの年月は経っている。最初は数千匹だった体も、今では随分と増えた」

「だから？全て殺してしまえばいいだろ？」

「ほら、後ろを見たまえ」

ザーツザーツ

俺の後ろに黒い煙がたつ。いや、黒い煙に見えているのは全て”虫”だ。

「だいたい270万匹と言ったところか？」

「勇人！そこから逃げろ！」

京谷が叫んだ時には遅く、俺は虫の大群に囲まれてしまった。

「勇人さん！」

「くそッ！数が多すぎる！処理しきれねえぞ！」

回転式拳銃で応戦するが、焼け石に水。全くもって数を減らす事が出来ない。
「こうなったら！」

自分の周りに不変の空間を作る。そして、群れの中からどうにか脱出する。

「ほら！ここだ！早く来い！」

京谷が炎のバリケードを張っている所に向かう。そして、何とか辿り着く。

「よし！大丈夫か？ 勇人……………？」

「ゴフツ……………」

「勇人さん！」

俺の胸にはぼっかりと穴が開いていた。虫で食い破られて。どうやら、俺は着く寸前に油断して能力を解除してしまったらしい。

しかし、京谷はすぐに穴を直した。

「だ、大丈夫か？ 勇人？」

「も、問題無い……………!？」

傷は治った。でも、体がおかしい。何故か胸が苦しい。頭が割れるように痛い。

「安心しろ、貴様には魔王の魂を入れてやった」

「何だ?!?なら、今すぐ取り出せば……………」

「やめといた方がいい。心臓の一部を食い破ってそこに取り付けたからな。魔王の魂はもはや、心臓の一部だ」

「ウウ……お、俺は大丈夫だ……」

「まだ、意識はあるか……それは記憶を侵食出来る。もう時期、私達が作り上げた記憶に擦り変わる」

「!?」

「勇人！自分を保つんじや！」

「……………ス」

「ど、どうしたんじや？勇人」

「クロス、クロスクロスクロス！」

「勇人さん！」

「……!!お、俺は？」

「そうだ！真実を上書きすれば！」

ザーツ

「な？虫!?火があるはずだぞ？」

「こ、これは！ボール状に固まって突入してきとる！外側の虫だけしか死んでおらん！」

「ひとまず引くぞ！」

「勇者さん！」

「どうした、勇者………!?」

「意外にもここまで精神的にもタフとはな………」

「勇者を離しやがれ！」

「こいつは魔族の平和に必要なだ」

「ま、待ちやがれ！」

ザーツザーツ

「勇者！くそツ！邪魔だ！」

「………京谷………妖夢………じいちゃん………！」

「まだ意識があるとはな。まあ、お前には才能があるからじきに馴染む」

薄れていく意識の中、ただ妖夢達を見ることしかできなかつた。

第73話

8F（魔王の黎明）の日の青年

（勇人 side）

「……………うう」

勇人は目を覚ます。体をゆっくりと起こし、辺りを見回す。飾り気のない無骨な部屋。

「そうだ……………早く妖夢達の元に……………」

鉛のように重くなった体を引きずるように歩く。

————ジョースター家

波紋

石仮面

「!？」

刹那、頭の中に経験のした事がないビジョンが浮かぶ。

「な、なんだ!?!さっきのは……………」

————スタンド

『世界』

征服

経験した事がないーはずなのにまるで自分が経験したかのような錯覚に陥る。そして、その記憶には今まで自分が抱いた事のないような感情までそれが自分が抱いできたかのようにすら感じ始める。

「う……………ッ」

強烈な偏頭痛に襲われる。まるで勇人の頭を蝕むかのように。

あまりにの痛みにその場に座り込む。

「あぐッ!?ぐ、グアアアアア！」

その痛みは激痛へと変わり、勇人は悶える。

————急に止まる心臓、撃ち抜かれる脳天————人間ドミノ、ライカンの王

……………

様々な情報が無理矢理頭の中に流れ込む。

「はあ……………はあ……………これは……………知ってる……………この『記憶』は知ってる……………ッ！」

それもそのはず、この『記憶』は勇人達が闘ったジオットやグントラム、そしてD I Oの記憶なのだから……………

「で、でも、この記憶は……………俺が経験したものでは無い……………」

「目覚めていたか」

「!？」

勇人の目の前に黒い煙が突然現れる。その煙は少しずつ人の形に成していき、1人の女へとなった。

勇人は瞬時に銃を取り出そうとするが見つからない。

「探し物はこれか？」

1人の女―もとい、勇人をここに連れてきた張本人のシアンは勇人の回転式拳銃をその手に持っていた。

「……………ッ！」

「残念ながら今は渡せないな」

それならばと掴みかかろうとする。

が、周りを見れば黒い煙——虫達によつて囲まれていた。あの虫達の脅威は十二分に知っている。

まさに絶対絶命のピンチ。

そこで問題だ！こんな状況をどのように切り抜けるか？

3択——1つだけ選びなさい

答え①策士の勇人は突如反撃のアイデアが閃く。

答え②京谷達が助けに来てくれる。

答え③虫に食われる。現実是非情である。

「(ここでのベストは答え②だが……………多分、京谷達は俺がどこにいるのかは把握していない。そんな都合よく助けに来てくれない……………」

「(なら！答えは①だ……………ッ！)」

勇人は不変の空間を自分の周りに作り出し、逃げるのではなくシアンの元へ駆ける。

「(数百万匹の虫で構成されているようだが……………あれだけ統率された動きをするのなら、司令塔がどこかにいるはず……………ッ！その可能性があるのはあのシアンだ！)」

「ふむ……………その能力はよく分からないが……………こちらからは触れないようだ……………」

……………しかし……………」

あと少し、あと数歩でシアンに届こうとした時

「自分の体力はしつかり把握しておくべきだぞ？」

「……………なッ!？」

不変の空間は既に保たれてなかった。

「(時間が短くなってる!こ、これは……………!)」

…………… 答え③

…………… 答え③

「……………答えは③か。もう、これ以上の策もねえ」

視界が黒く染まり、死を覚悟する。

「……………ん?」

しかし、勇人の体が蝕まれる事は無かった。

「どうやら、馴染んで来たようだな」

人は自分自身を鏡など無しで見える事は出来ない。よって、勇人も自分自身を見れない。つまり、外見の異常に気付く事が出来ない。

今の彼は微小でありながら異変が起こっていた。目が瞳が青く光っていた——普段は黒く、死んだ魚の目みたいだとまで揶揄される目が。

「体はもう侵食したようだな……………後は……………心だけか？」

「はあ……………？」

「聡明な君の事だ。もう何が起こったかは把握済みだろ？」

そう、勇人は既に分かっている。今彼の心中には

「俺のものにしたい……………この世界を……………人間共を葬り去りたい……………この手で……………戮り殺して……………」

汗が頬を伝う。両手に力が入る。普段はそんなに開かない瞼も大きく見開く。

「なんの……………ことか……………さっぱりだ」

「フフ……………無理なんかしなくていい。もう、分かっている」

シアンは既に勇人のすぐ近くまで来て頬を撫でている。

しかし、勇人は動かない。腹の底の化け物を抑えるのが精一杯で。

「人を戮り殺すのが……………自分の本能だ……………前々から人を戮りたかったはずだ……………ッ！」

「ハッハア!!!これで漸く魔王の復活です!!これで支配も思いのまま!!」

「……………ツ!?残念だがソネ、どうやら復活は延期だ」

「この場合だと、先に地上に戻った2人がどうにかしてくれたな。計算外の事が起こったなあ!!テメエら!!」

この時、外では……………

「これでいいでしょうか?慧音さん?」

「ああ、全部は破壊してないだろうな?」

「ええ、いくつかは残しておいたわよ」

早苗、鈴仙、慧音の3人の頭上には『ヘブン・クラウド』そして、足元には魔法陣が。

その魔法陣のいくつかは消され効力を失っている。

「本当にあるとわね……………やっぱり、これはあの『歴史書』に書かれてたのと同じじゃないかしら？」

「……………そうなる、この城の中では魔王の誕生が画策されていたということになるな」

「そう考えると……………私達がやった事はとても重要ですね……………」

「ああ、下手をすればこの城から魔王が出て来て幻想郷が大混乱に陥るからな」

「後は勇人さんに任せればいいのね。……………そして、私と結婚するのよ……………」

「そ、それはダメですッ！」

しかし、その勇人が危機に瀕している事を気づく事は出来なかった。

そして、場所は戻り『ヘブン・クラウド』の中へ。

「はあ……………物事とはやはりうまくいかないものですねえ……………」

「仕方がないだろ、ソネ」

「……………フフ」

「シアン……………何が可笑しい？今は笑うとこじやないだろ？」

張り詰めた空気の中対峙する6人。それぞれが臨戦態勢の中、シアンのみがただ突っ立っているのみである。

「まあ、そんな事もある。しかし、それは予想の範囲内だろ？ソネ」

「確かにそうですが……………」

「なんだなんだ？まさか、『こんな事もあるか？と秘密兵器を用意してのだ！』とかじゃないだろうな？」

「ええ、そうですよ。まあ、私は何なのかはシアンに聞かないと分かりませんがね」

まさか、その通りだとは思わなかったのか京谷は少々驚く。

「へ、へえ……………じゃあ、見せてみるよその『秘密兵器』とか言う奴を！」

「そんな無駄口いつまで言えるのやら……………まあ、強かに足掻くといい」

「で、シアンその秘密兵器とやらは？」

と周りを見るソネ。しかし、何処にも”秘密兵器”は居ない。

「……………既に居る。ハキム、お前の後ろにな」

「ぬあ!?!い、いつの間に!?!」

ハキムの後ろに居るのは京谷よりやや背が低めの人。影になっているためしつかりとは見えない。

「ま、まさか!?!そ、そやつは……………」

影から現れた人物——それは勇人だった。

「ゆ、勇人さん!?!」

「まだ、魔王とまでは言えないがある程度の魔力の供給は終えてる。実験がてら貴様らと戦わせてやる」

「ゆ、許しませんッ!」

怒りに冷静さを欠いた妖夢は地を蹴り、シアンの元へ一直線に向かう。

「ま、待てッ、妖夢!早まるな!」

京谷の忠告も妖夢の耳には届かない。そのまま、シアンを斬りつけにかかる。しかし、シアンはいつもの如く虫の群れには変わらず突っ立てるのみ。

「ゆ、勇人さん……………!?!」

シアンと妖夢の間に勇人が現れる。しかし、妖夢が気づいた時には勇人の脚が妖夢の腹を捉えていた。

骨の軋む音が聞こえ、妖夢の体は壁へとぶち込まれる。

「お、おい！何をしてるんだッ！」

「だ、大丈夫!?!妖夢！」

「は、はい……………大丈夫です」

実際の所、妖夢は腹に受けたダメージより勇人に明確な殺意を持つて攻撃された事の方がショックであった。

「合格点だな。人間より遥かに強大なパワーを得ている」

「勇人！目を覚ませッ！」

「無駄よ。こいつの記憶は魔王の魂によつて上書きさせた。それに今は私の虫を寄生さ

せて、私の命令にしか言うことを聞かない」

「そして、こいつに命令にしたのは……………貴様らを全員始末しろ、だ」

それと同時に勇人は京谷へと迫る。それに迎撃する形で京谷はスタンドで殴りかかる。

「無駄ア！」

京谷の渾身の拳は勇人の片手で受け止められる。

「な……………ッ!？」

そして、京谷の手の甲は裂け、血が噴き出していた。

「ぐ……………ッ！」

物体には衝突する際、反作用が発生する。即ち、硬いものを殴れば痛い。当たり前の事だ。

勇人は自分の手の平の部分に不変の空間を生み出していた。不変の空間——それは絶対に干渉する事の出来ない世界。言い換えれば絶対に壊れない壁。それを京谷は全力で殴った事により拳へのダメージが入る。しかし、京谷を驚かせたのはそこでは無い。

「お前……………スタンドが見えてるのか……………?？」

「……………」

あの受け止め方はどう見てもスタンドが見えてるとしか言いようがない。

再び勇人は地を蹴り、弾丸の如く京谷へと突っ込む。

「……………ッ！」

勇人の右ストレートを京谷の右拳が受け止める。

「無駄ア！」

ギギギギ……………

人間の域ではない重い一撃により、京谷の肩に痛みが走るが、なんとか振り切り手刀を繰り出す。

しかし、勇人は射程範囲外に流れ、手刀は空を切る。

「!？」

勇人の体は急に京谷の元に移動する。所謂「瞬間移動」と言うのだろうか？

「射程距離に入った！」

スタンドの左ストレートが勇人の腹部へと決まる。

「……………ッ！」

勇人の表情が少し歪む。だが、次の瞬間勇人は京谷の頭を掴んでいた。

「なッ!？」

そして、そのまま京谷の顔に膝蹴りを叩き込む。

ガギイーン！

ギリギリの所を京谷はスタンドでガードしていた。そして、そのまま勇人の右脚を右拳が強打する。

バギイイ！

勇人の右脚が奇妙な形に変形し、血が噴き出す。

「……………ッ！」

ここまでダメージを受けて尚、声一つ出さない勇人は一旦距離を取る。しかし、右脚が使えずその場に倒れる。

「その脚は後で治してやるから……………今は寝といてくれよな！」

京谷が追撃をしようとした瞬間、勇人は地面を拳で砕き、その破片を京谷に投げつけた。

「ぐ……………ッ！」

ただの破片なら京谷は傷一つつかないだろう。しかし、勇人が投げた破片は不変化され、『勇人が投げた方向に進む』と言う事が絶対に遂行されるようになった。簡単に言う
と……………

「うぐ……………ッ！」

破片は京谷の体を貫通していた。腹部にはいくつもの穴が空き血が噴き出す。

勇人にとっては破片のように細かい物は凶器にへと変えられる。

右脚を庇いながら勇人は立ち、京谷と対峙する。

勇人の目はいつものような黒い目ではなかった。青色に変わり、京谷を冷たく射抜くような視線へと変わっていた。

「勇人!!いつものようなお主はどうした?お前のような優しい奴がどうして簡単に魔王の魂の記憶の侵食を許したんじゃ?」

勇人の祖父は訴えるかのように叫ぶ。

「そうです!!?早くいつものような勇人さんに戻ってください!!?」

それについて妖夢も叫ぶ。

「……………ツ!」

勇人の顔が歪む。いや、勇人の中に潜んでいた化け物の顔が歪む。

「フフ……………ハハハハハ!」

張り詰めた空気の中、場違いな笑いが響く。

「テメエ……………何が可笑しい!」

「フフ、すまない。しかし、彼の事は老いぼれ……………貴様が1番分かってるだろう?」

「……………さて?」

「優しい？魔王の魂を通してこいつの記憶を少し覗いたのだが……………」
「それ以上言うんじゃないッ！」

今まで聞いた事のない大きな声をじいさんは発していた。しかし、シアンはそれを無視する。

「こいつはだな、とてつもない程の暴力衝動を持っている」

「……………は？」

「なかなか面白かったぞ？昔、夜な夜な出かけては人をボコボコにし、昼間は平気な顔して生活する」

「本当なのか……………？」

「……………」

京谷の問いにじいさんは黙り込む。

「まあ、今じゃすつかり抑え込んでコントロールしてたようだが……………私はそれをちよつといじっただけだ。そうしたら、あつという間に衝動に歯止めが効かなくなつたよ。私がこうやってコントロールしてなかったら誰振り構わず殺してただろうよ」

「じいさん……………もう一度聞く、本当なのか？」

「……………ああ、そうじゃ。勇人はすつとその衝動をどのように抑えるかですつと悩んできた。じゃが！それはもう昔の話のはず！今はそんな衝動なんてもう無くなつたはず

「じゃー！」

「無くなつた？誰かを守ると言う事に集中して誤魔化してただけじゃ無いのか？その守ると言う事が心を揺らぐ物の原因になつた」

「……………だから？」

京谷はその一言だけで片付ける。

「確かにちよつとは引いたが……………俺は勇人が悪い奴とは思わないぜ？」

「そうね、根つからの悪人ならそんな事で悩むはずが無いもの」

「ゆ、勇人さんはいつも人の為に動いて……………自分が傷つくのを御構い無しに……………そんな勇人が優しくないわけが無いです！」

「なら、勇人が魔王の魂を受け入れた理由はなんだ？」

「勇人は受け入れてなんかいないぜ」

勇人ーいや、化け物の顔が酷く歪んでいた。まるで化け物に勇人が対抗しているかの如く。

「なッ!?完全に記憶は……………ッ！」

「後は俺たちが手を差し伸べるだけだな！」

京谷は勇人を取り返す為に化け物へと迫った――

第74話

8F (陰々滅々な心)の日の青年

――

――

――

――……ヒイ！く、来るな！

……な、なんなんだ!?こいつ！ば、化け物か………!?

……や、野郎！

――ベキイと鈍い音とともに男が倒れる。

目の前には血だらけになった男達がいる。

ある者は折れた鼻を押さえて呻き、ある者は腹を抱えて蹲っている。

――うおお！この化け物がああああ！

――獲物が……もう1人………

ボソツと眩き、その細い体から大の男の腹に拳を入れる。

痛みに蹲る男の頭を掴み、再び拳を叩き込む。

その時の勇人の顔は笑顔でも憤怒の表情でも無くただ
——無表情で殴り続けていた。

——

——

——

……兄さん……

……今日もやったの……？

……いつまでやるの……？……しょうがないだろ？それはおかしいよ……

……やっぱり、悪い事だろ……？

——手についた血を洗い流しながら弟の言葉を聞く。

分かってる。

分かってはいるんだ。

——

——

――――

……もう、どっかに行つてよ！化け物！

――喧嘩した日に言われたこの言葉。

……あつ……

――化け物……やっぱり、俺は異常者なのか？弟の言う通り、化け物なのか？

――そうに決まつてる……自分でも分かっている。これはおかしいと言う事なんて自分が一番分かっている。

――でも、抑えられない。人を見ると急に殴りたくなる……

――幻想郷に来てからはどうだ？

そんな衝動……数えるほどしか起きていない。

――俺はまともになつてきてるのか？

――違う……俺は……人を守ると言う事を理由にこの衝動を誤魔化してただけじゃないのか？……一人前に助けると言っておきながら本当は誰かに暴力を振るう事で誤魔化してたのではないのか？

———やっぱり、俺は化け物なのか？———

—————

京谷達の声が聞こえる。

——俺は化け物じゃないのか？

そんな想いが出て来る。でも、すぐにそれを自分で否定する。なぜなら………

今、物凄く京谷達に暴力を振るいたいと思ってしまうているから。

不意に京谷が突っ込んで来る。

今では何故かはつきりと見えるスタンダー黒い筋肉質な体に逆立った髪の毛。そして、青く光る目。

そのスタンドの拳を避け、後ろに逃れる。今、気づいたのだが右脚は既に治っている。これもあの魔王の魂のおかげか……………

距離をとった京谷からとてつもないオーラが発せられる。

ビリビリとした感触を肌を感じる。

それはまさに”恐怖”の象徴であり、常人なら簡単に気絶するだろう。しかし、自分が恐怖しているとは全く感じない。表情筋も、固定されたかの様に動かない。

『殺せ』

自分の中の化け物がそう言う。さらに化け物は俺の気配をドス黒く塗り固めていく。

「そう言えば、この銃を預かったままだったな。返してやろう。その代わり……………」

「全員始末しろ」

シアンから銃を受け取り、返事もせずに構える。

無機質な部屋の中で、2対4という形で対峙し殺気が充満する。

「もう我慢の限界よ！ 貴方はまだ、そうやってうじうじしている訳？ 妖夢はとつくに決意を決めてるわよ！」

「……………」

静寂の中、咲夜の叫び声が響く。でも、もう俺には響かない。

決意？ そんなの出来たら今の状況なんか起きない。

「まだ無言を貫くのかしら？」

返事をするかわりに殺気を増加させる。

「……………そう、もういいわ……………この『臆病者』」

咲夜の手には既にいくつかのナイフが握られていた。

そして、次の瞬間にはそのナイフは手から無くなっていた。

「!!」

そのナイフは既に俺の背中に突き刺さっていた。だが、全く痛みを感じない。ドクドクと血は流れ出ているのに全く痛みを感じない。

刺さったナイフを無視して俺は銃を撃つ。

パン!

乾いた音が咲夜の眉間に向かう。

「無駄ア!」

京谷がスタンドで弾丸を弾こうとする。その瞬間

ピカアアアア……………!!

「なッ!?!」

2人の動きが止まる。その間に京谷に蹴りを入れ吹き飛ばす。

「グッ……………!!」

すかさず咲夜が時を止めて反撃に転じようとするがその寸前に不変化の空間を生み

出し、時の流れを守る。

「ーッ!?」

右手を咲夜の目の前にかざし能力を発動させようとする。徐々に咲夜の体の動きが固まっていく。

「無駄ア!」

バギイ!

京谷のスタンドが俺の右腕をへし折る。

余った左腕で銃の引き金を引き京谷に打ち込む。

パァン!パァン!

「無駄無駄ア!」

今、思う。俺の能力は強化された。何故なら”血”なんかつけずに”不変化”できるのだから。

銃弾はいとも容易く京谷の腕を貫く。

「……………チッ!」

そして、化け物は言う、トドメだと。それに従うかの様に京谷の眉間に銃口を定め引き金に指を掛ける。

そこに白刃が一閃する。間一髪避け後ろに後退する。

「何かが勇人さんを迷わせているなら、それを私が斬ります！」

「す、すまねえ……妖夢。助かった」

「いえ、それよりも今は勇人さんを」

妖夢の言葉を聞くなり京谷はこちらに突っ込んでくる。

もう一度標準を京谷に合わせ、引き金を引こうとする。もちろん、狙うは眉間――

ドスツ　ドスツ

「!？」

左腕にナイフが刺さった。飛んできた方向を見ると咲夜がいた。

「無駄ア！」

ドゴオオ!

スタンドの拳が頬にめり込む。ミシミシと嫌な音をたて、体が揺れる。

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄アア!」

ラツシュを叩き込まれ、あちらこちらの骨が折れる音が聞こえる。

流石にダメージを食らい過ぎたのか、意識が朦朧とする。

しかし、体は立ち上がる。もう体はボロボロのはず……………

そんな中、京谷の声が聞こえる。

「勇人、もうこんな事、終わりにしようぜ……………お前が悩むのは一人でどうかしようとしてるからだろ?」

「……一人で………解決しようとしたから？」

「まあ、確かにそんな衝動は人に打ち明け難いかもしれないが………だからといって、妖夢達に言えないぐらいなのか？ お前は妖夢達を信じれないのか？」

「……そんな訳が………ない………」

「咲夜の言う通りお前は『臆病者』だ。本当は自分の衝動が大事な人に向かうのが怖いんじゃないかって、それを知られた時に相手が自分を恐れる事が怖かったんじゃないのか？」

「……俺は………俺は………」

「俺は分かっている。お前は悪い奴じゃないと。お前が撃つたびに間がある。それは大事な奴は撃つてはいけないという事が衝動の中にも働いているからじゃないのか？」

「俺らはお前を受け止める準備はできてる。あとはお前だけだ」

「……俺は結局逃げたのか……化け物という事にして逃げたのか。あー
……しっかりと向き合ってたと思ってたのにな……そうじゃなかったのか
……別に頼つてもいいのか……
なら、後は俺が信じるだけか……」

「そんなの、ただの戯言だ」

「……え？俺はなんて言った？」

「人を殴った時に『衝動で殴った』と言ったらどう思う？異常者だと思うに決まってる」

「……なんで、俺は話している!?俺は何を言っている？」

「殺す側にとって殺される者に大事だとかは関係ない。それはお前らも同じだ」

「……違う!違うんだ！」

「ゆ、勇人さん……………」

「……………違うんだ……………妖夢……………」

俺の中の化け物は既に口から出てきていて、俺として存在していた。
意思に反し再び銃を構える。
しかし、京谷は立ったまま。

「……………」

「……………な、何をしてるんだ！お、俺はもう……………」

引き金にかかる指の力が強くなっていく。

「……………やめろ……………やめろ……………やめろオオオオオ！」

「パン！」

第75話

8F(Ray of hope)の日の青年

乾いた音が鳴り響く。高速回転しながら飛び出した弾丸は京谷の目へと命中した。しかし、弾丸は京谷の頭を貫かなかった。

カランカランと何かが落ちる音がする。その何かは先程、京谷に命中した弾丸と命中された眼球であった。

普通なら発狂してしまいそうな悍ましい光景だが、状況が状況でよかったと安心する。と言つても未だに体は言う事を聞かない。

「……………フツ」

京谷が笑う。相手を見下すような笑い方。

「フフフフ……………ククク……………ハア……………」

「アーハッハッハッハッハッハッ!!」

今度は高笑いを始める。少しながら不謹慎だ。

今、思ったのだが、俺は魔王の魂の記憶によって新たな人格が作成されていて、二つの人格が混在している状態にあるようだ。何故、分かるのかっていうと……意識を共有してるからだ。もう一人の人格が何をしようかなどこちらには筒抜けである。だからと言って動く事は出来ないが。

『このD I O以外に能力は使えない時間』を決めた」

「ハッ!! 抜かせ雑魚が」

「ッ!! お、お前……誰だ? 誰なんだ!」

「先程も言った。この『D I O』に同じ言葉を2度も繰り返そうとするな。ハキムよ」
「んなっ!」

急いでもう一つの人格は不変化を発動しようとする。

「この人間の能力が発動する前に能力を使えば良い。謂わば先着順というヤツだな」

そんなセリフと共に頭を掴まれる。ーなるほど、確かに発動しなければ俺はただの人間だ。無論、今の状態で人間とはとても言えないが。

俺の体は容易く宙に投げられ、腹部に蹴りを入れられる。体は天井を突き破り、上の階の部屋に投げ出される。

「がはっ……………！」

くそっ……………痛いな……………内臓が傷ついたか？

……………痛い？痛い!?

「えっ!?!しゃ、喋れるッ！」

俺の体の使用権は俺に移ったようだ。そうとなれば、京谷達の元に……………

『……………人間よ』

「なっ!?だ、誰だ!？」

『(我はお前の中にいる……………!』

「い、こいつ……………直接脳内に……………!」

『(必要な能力は全て持っている。我は生まれながらの王ゆえ当然の事。いや、足りぬな……………体がな)』

「便利だな、必要な能力全て持つてるなんて。まあ、1番大事な体が無いのは致命的だな……………俺の体はもう使わせねえぞ」

『(万物の王たる我がどんな姿をしてようとなんの不都合もない)』

『(この城に有り余る魔力を胸に我は城下へと飛び立つだろう。我が下では数多くの人間は魔族となり、我に従うだろう)』

「……………人間を魔物に変える魔法か、だが、そんな事はさせないぞ。お前の思惑は俺に筒抜けだ。今すぐにでもお前の人格を消し去ってやる」

『(ふむ……………我を倒すという訳か。では、一つお前に問おう)』

『(我を消し去るという事はそれ相応の理由があるのだろう。だが、肉体を持たずとも生まれたばかりである我になんの罪がある?)』

「……………お前の力は強すぎる。強いていうなら、お前みたいな魔王が存在している事……………そ罪だ」

『(ククク……………そう言う答えこそ聞きたかったぞ)』

『?!』

『(深く考えずともよい。我には私の正義があるようにお前にも正義がある。たったそれだけの事だ)』

『(私の人格は存在が不安定だ。あの京谷という奴との戦いでまともに存在しておれん。直に我が人格は消え失せるだろう)』

『(我が命、かくも早く終わろうとは予想だにしなかった……………ぞ)』
「……………すまない」

『(謝る必要は無い、人間よ……………いや勇者よ。お前も私も期待された役目を果たすために努力したに過ぎん)』

過去よりも未来を

謝罪よりも約束を

「約束？」

『(我に約束せよ、勇人。より良き世界を作る……………と。私の生みの親である3人が目指した世界も同じ。しかし、その3人もいずれ死ぬだろう。だからこそ約束せよ。そのために我が力をお前に残す)』

「……………ああ、約束する。魔王に頼らずといい世界が必ず来る。」

『(そうであるとよいな……………生みの親よりも先に眠りにつく事になるとは……………だが、安心したぞ……………勇人……………)』

自分の中に何かが消えていくのを感じる。正義とは難しいな……………

正義の反対は悪なんかじゃないんだ……………別の正義だからより難しい。

だが、約束はしてしまったから……………

”謝罪よりも約束を”か……………

第76話

儂い蟲達の夢の日の青年

魔王は消滅した。即ち、今回の目標は粗方達成という事である。いや、そもそもただの調査のはずだった様な気がするが……………まあ、いいつか。

早く京谷と達の元へ行って俺は大丈夫だと教えないとな。それに、消滅した魔王様との約束もある訳だし。

俺が突き破って来た床の所へと向かう。ふと思ったのだが俺の体は大丈夫だよな？——お腹がまだ痛い様な気がするがそこは我慢我慢。

「よっ……………」

下の階へとジャンプし、着地する。

しかし、それと同時に拳がすぐそこまで迫る。

「ぬあ!?!」

「チツ、まだ寝てなかったか……………今度こそ寝てろ」

「ちよ、ちよつと待て！ 勇人だ！ 俺は勇人だ！」

「あ？ もう少しはまともな嘘をつきやがれ！」

う、うーむ……………単純には信じてくれなさそうだ。それもそうか……………とか考えてたら、スタンドの攻撃が迫る。

信じてもらうには……………

ベキイ！

「ツ!？」

「グウ……………いい、痛い……………これで信じるか？」

手荒だが何もせず攻撃の意思が無いことを示すしかあるまい。

「本当に勇人だな？」

「あ、ああ……………嘘じゃない。勇人、嘘つかない」

「その様だな……………手間のかかる奴だ」

「ハハ……………すまない。もう大丈夫だ」

よし、大丈夫と言えたぞ……………後は妖夢にも……………

「勇人さん！」

「お、妖夢。色々迷惑かけたな……………」

「勇人さんなんですよね？本物の勇人さんですよね？」

「ああ、正真正銘俺は勇人だ」

すると、妖夢は俺に抱き付く。

「よかった……………本当に……………」

「……………すまない」

「謝らないでください。気づけなかった私も悪いんです……………」

「いや、勝手に抱え込んでた俺の方が……………」

「はい、そこまでじゃ。どっちかが悪いとか言っておいたら日が暮れるわい」

「そ、そうだな……………とここであの3人は？」

「それなら、もう京谷が始末してしまったわよ」

「ああ、無限の回転エネルギーを撃ち込んでやった」

「容赦無いな……………」

よりによつて絶対殺すマンとは……………

「うう……………こ、こんなところでええ！」

「まだ、死なないとは……………しぶとい奴だ」

ハキムは内部が切り裂かれながらもこちらに向かおうとしていた。

「まだ、まだ、やられるわけには……………！」

すると、ハキムの姿が変わり、巨大な昆虫へと変化した。

「スカベラか……………だが、無限回転エネルギーからは逃げられない」

「……………そうですねえ、この回転という奴はどう足掻いても私達を殺す様ですね。

まあ、これを止める方法とすれば逆の同じ回転をまた撃ち込んでもらうしか無さそうですね……………」

「へえ……………そこまで分かるのか」

「伊達に長生きしてませんよ……………」

「それが分かったところで取引でもするつもりか？」

「そうですねえ……………これだけ長生きしたのですから生き延びるコツは知っているつ

もりですよ」

「何事にも本気を出さず責任を取る立場にならない事。気軽に意見を言える側近の立場でいざとなったら逃げるか裏切る。それが生き延びるコツです……………今回の事も面白半分に参加したのですがね……………」

「こんな大層な事をしておいて面白半分だと?」

「はつきり言ってしまうと、魔王が現れたからって世界が必ずしも大きく変わるとは思っていないですよ」

「なら、なんでこんな事を? さっさと逃げ出せば良かったものを」

「でもねえ、なんと言うか……………グフツ」

ソネの口から血が出る。飄々としているが実際は瀕死なのだろう。

「ただ生き延びてるだけでは生きてるとは言えないと思ひまして……………まあ、たまには私もカツコつけたくなつたんですよ。ハキムやシアンのように……………」

「不器用な奴らだな」

「ハハ……………まったくです。だから、ただでは死にませんよ!」

ソネの体は巨大なサソリとなりその巨大な尻尾にある毒針を撃ち出す。

俺は素早くそれを躲し、銃弾を数発撃ち込む。

全ての弾は命中し、ソネは力尽きる。

「ハハハ……やはり、真面目にやるとロクな結末になりませんねえ。でも、こういうのが生きているという感覚なんでしょうね……」

そして、ソネは穴に引きずり込まれる。

「お前らアアア！」

ハキムは内部が切り裂かれながらも攻撃をしようとするが、

「無駄ア！」

京谷の一撃でハキムも穴に引きずり込まれる。

2人の引きずり込まれた穴から怨念の様な魂が出てくる。

「おい、京谷もう1人のあれは偽物じゃないか？」

「は？………あれは………ゾンビか？」

そもそも、シアンの体は虫の群れである。その場合は回転エネルギーは群れ全体に効果があるのだろうか？ともかく、仕上げをしないと………

「ゴホッ、ゴホッ………」

暗闇の向こうから既にボロボロの状態のシアンが出てくる。

「シアン、後はお前だけだぜ」

「ソネとハキムがやられたか………魔王誕生計画は大失敗だな………」

「どうする？降参するか？」

「ハハハハ！降参？ふざけないでくれ。私は魔族の未来の為に最期まで計画は続ける
！」

「また、虫の大群でくるか？ そうだとしても全て燃やし尽くしてやる」

「舐めないでくれ、魔族は進化するのだ。貴様ら蟲毒の儀式と知ってるか？」

「コドク？」

「東洋の呪術だよ。大量の虫を狭い部屋に閉じ込めて共食いさせる。最後に残った一匹には死んだ全ての虫の怨念と魔力が結集する」

「何を言ってるんだ？」

ま、まさか？

「私の体を構成する数百万の虫で蟲毒の儀式をとりおこなった。さらにはハキムとソネの分まである」

「今の私は虫の群れではない！……………最強最後の一匹のみ、だ」

シアンは巨大な蝶となる。赤を基調とした蝶は大きさも相まってか、美しいと言うより恐ろしい姿となっている。

「グツ……………凄い風圧だな……………」

「あいつの相手は俺がする」

「そうか、じゃあ任せたぞ勇人」

俺は一步前に踏み出し、シアンと対峙する。

「よし……………魔王の力、早速使わせて貰うぜ」

「魔族の力を思い知れ！」

羽から紫色の鱗粉がばら撒かれる。恐らくは毒素を含んでいるのだろう。しかし、鱗粉が俺より後ろに回ることは無い。

俺は魔王の魂の力を借り、意識をシアンの方へ集中する。

「これから起こるのは“絶対”であり、それ以外は起こりえない……………」
「ハアアアア！」

鱗粉を突風に乗せて嵐の様に放つ。しかし、それも無意味だ。

「お前の羽は5秒後に両方とももげる」

「は？何をいつてる？」

「後3秒……………2秒……………1秒……………」

すると、メリメリと羽がいきなりもげて落ちる。

「グアアア!?!は、羽が!?!」

飛ぶ手段を失ったシアンは地へと叩きつけられる。

「な、何が起こった?」

「急に羽が取れたわ!」

「ゆ、勇人さんは動いてませんよ?」

フフ……………どうだ、凄いだろ?この仕組みは後で教えるとしよう。

「羽がないと何もできないな」

「ウグ……………やはり、私ではどうしようもないか……………」

「ああ、そうだな」

「フツ……………すっかり忘れてたつもりだったが……………お前はあいつにそっくりだ……………」

「あいつ?」

「私は元は人間だった。普通に暮らしていた。普通に恋愛をした。普通だとしても私はその相手をとっても大事だと思っていた。そして、結婚へと至った。あの時は嬉しかったよ。だがな、村が傭兵どもに襲われた。結婚式の日だ。傭兵が襲った理由が国家が金を払わなかったからだ。目の前で家族が村の人たちが私の大切な人達が殺されたよ。もちろん、夫となる人も……………私はその日には死ななかった。数日間生きながら虫に食われ続けた。そして、気づいたら私は魔族になっていた」

「……………そうか」

「同情はいらぬ。魔族になつて私はハキムやソネの様な者に出会えたのだからな」

「お前は……………いや、何も言うまい」

「そうしてくれ……………さあ、その手で終わらせてくれ。私は少し疲れた……………」

俺は再びシアンに意識を集中させる。

「後、5秒後にお前の体は消滅する……………」

「……………」

シアンの体は次第に半透明になり、やがて消えた。

「はあ……………終わったアアア！」

本当、長かった……………」

「ようやく、ね」

「いや、まだ真のラスボスがいるかもしれないぜ？」

「それはもう勘弁な」

「ハハ、冗談だ。ほら、とつと戻ろうぜ？」

「ああ、早く布団に戻りたいぜ」

俺らは帰路へと歩を進めた。

第77話 宴樂の日の青年

くあれから一週間後く

光陰矢の如し——『ヘブン・クラウド』の件からもう一週間も経ったと言うのだからこの言葉を実感させられる。

ヘブン・クラウドを出てからは兎に角、死んだ様に眠った。日付感覚が狂いそうなくらいヘブン・クラウドの中にいたのだからしょうがないと思う。

しかし、いつまでも眠っているわけにはいかないだろうと後処理を手伝おうとしたのだが慧音さんに引き止められてしまった。

「気分転換でもしてきたらどうだ？」

と言われ、その言葉通りに眠っていようと思ったのだが……………

「そんじやあ皆さん!! 乾ばーい!!!」
『乾ばーい!!!』

この有様である。

別にみんなでガヤガヤするのが嫌いなのではない。事前に言ってくればちゃんと楽しむ。しかしだな、急にスキマ送りはよろしくない。とても心臓に悪いのですよ。とか文句を垂れてもしょうがないのでここは素直に楽しもう。

あ、因みにじいちゃんやんと妖夢、早苗、鈴仙はきちんと招待されて紅魔館に来たらしい。俺もそうしてくれ……………

グラスとグラスがぶつかり、響く音。俺は何故か赤ワインを注がれていた。京谷は日本酒の様だ。未成年飲酒は……………と突っ込むのは幻想郷においては無意味なのでしない。

京谷の方の幻想郷では思った程の違いは無いらしい。みんな、賑やかで明るい幻想郷らしい雰囲気だ。

俺も俺らしくゆつくりと楽しむか……………

と出来たら本当に良かった。やはり、同じだと言う事では無いらしい。

先ずはあのシャーベットとか言う美味しそうな名前の奴は京谷から話を聞いた途端暴れ始め、ブロウとか言う喋る鳥は妖夢や早苗、鈴仙を罵倒するわと中々濃い面子であつた。

そうそう、京谷が父だと紹介してきた人物がああ『エンリコ・プッチ』でかなり驚いた。

しかし、これも超える衝撃だったのはこちらでは凄腕マッド薬師の永琳さんが物凄い勢いで京谷に飛びつき、簡単に躲され地面に衝突していた事だったな、うん。もうあれは衝撃的過ぎて一瞬ポカンとしてしまった。

さらにお酒が入ればみんなのボルテージはうなぎ登り上がっていくわけでした。

……う、頭が……

もう、みんな酔ってたんだ。だから、しょうがない、ね？俺を揉みくちやにしようが殴りかかろうがお酒のせい、ね？

そんな最中、急に浮遊感を覚えたかと思えば

「イテツ!!」

「うひゃあ!!」

「ぐえっ!!」

例の如く、スキマにより屋上まで運ばれた様だ。妖夢が俺の上に落ちてきたので少々涙目になってしまったのはご愛嬌。

「おーい、御二人さん平気か？」

「な、何とか……ってあれ？これは……」

「痛たあ……あれ？この感じは……」

そうです。俺の上に落ちてますよ。

それに気づいた妖夢はギギつと音が鳴りそうな感じで首を動かす。

目と目が合うーあー、こう言うシチュエーションってあるよな。恋愛ものだとだいたいこれか恋愛に発展するよな（錯乱

いつまでも妖夢は俺の上にいるわけでもなくすぐに飛び退く。

「全くよお……紫さん、一言言ってくれりやあ良いのに」

「やっぱか……でも、何で俺たちだけ？」

「色々活躍した者たち代表だったりして♪」

「それだとお祖父さんエ……んまあ、紫さんが設けてくれた場所でのんびり話しますか」

「それも……そうですね」

「あら妖夢、まだ顔赤いわよ？まだ勇人の温もりが忘れられないのかしら？♪」

「んなっ!!」

こ、この御仁は何を仰っているのか？

京谷は少し溜息をついた後、

「なあお前ら」

「?どうしたよ京谷」

「何でしょうか?」

「どーしたのつかないか?♪」

「……こんな事言うのも不謹慎だけどさ、楽しかったな」

「ああ……あの時のか。……確かに、何か楽しいって感情しか沸き上がってこないや」

「楽しい……ですか。あの出来事があったのに楽しいって思えてるんですね、2人とも」

「それは私も同意よ。でもやっぱり京谷と一緒にの方がどんな事よりも楽しい♪」

「それは俺も同じ気持ちさ。咲夜」

「きよーや……」

「咲夜……」

あー、はいはい、ごちそうさんごちそうさん。これ程接吻を交わすのを間近で見せられるのはそう多くあるまい。

「あー……御二人さん? 楽しむのは良いけどよ、流石に人の目が入る場所ではしないでくれるか?」

「おっと、ここでヘタレ属性が出てきたぞお」

「誰がヘタレだ!?!」

「勇人、アンタはヘタレよ。あんなに女の子に囲まれているのに1人に絞れないなんてヘタレ以外の何者でも無いわ」

し、しかし、教師である以上子供達の教育に良くない事はしてはいけなのでして
.....

「どーせなら妖夢にキスしてみれば？それで吹っ切れる筈だからさ」

「京谷!?お、オオオおまつ!!何を言ってる!?!」

「わ……私なら……その……構いませんよ?」

「What !?!」

「それキース!!キース!!キース!!キース!!」

「お前らなあ!!!」

ま、全くもってけしからん!そ、そんな簡単にキスなんかして言い訳がないじゃろが
!

しかし、何故かな京谷達が笑うのを見ると自然とこちらも笑ってしまう。こう言うのも悪くないな………

「ハハハハツ!!!はあ……さて、お前ら」

「「??」」

「少しあれだがよ」

と京谷は立ち上がり、日本酒の入った杯を月に向けて腕を伸ばす。

「この一杯に誓おう。俺たちはもう仲間だ。俺たちは互いに支えあって生きていこう。辛く苦しい時も、楽しい日々も全部体験して。そして願おう、お互いの幸せを」

京谷は杯に入っていた日本酒をイツキ飲みし、夜空に向かって叫んだ。

「俺たちに幸あれ!! HAIL TO US!!」

こうして、終宴を迎えた。

今回の出来事は人知れず去っていった者たちがいる。

しかし、俺らは真っ直ぐにまだ見ぬ世界へと歩を進めるしかない。

過去よりも未来を

第8章 青年、童心に戻る（物理

第78話 勘違いの日の閻魔

私、四季映姫は閻魔です。日々、死者を裁き、罪人達へ刑罰を下す――それが私の仕事。

その職柄上、畏怖の対象とされがちですが私とて鬼ではありません。

刑罰を少しでも軽くするために私は暇があれば幻想郷へ赴き、善行を積むようにと教え回ります。

時折、嫌な顔をされたりもしますがこれは相手の為であり、やめようとは思いません。さて、今日も幻想郷の方へと向かいます。

「ねえ、何しにここに来たのかしら？」

最初、向かったのは博麗神社。もちろん、お目当はこの巫女である博麗霊夢です。

「先程も言ったでしょう。貴女がしっかりと善行を積んでいるか見に来ました」

「そんなもの見に来なくていいわよ。ちゃんと積んでるから」

「その割には毎日怠惰な生活を送っているようですが？妖怪退治もろくに行なっていないようですし」

この博麗霊夢は善行を積む気があるのでしょうか？こちらは浄瑠璃の鏡で全てお見通しだと言うのに平気で嘘をつく。少しは反省でもしてもらいたいものです。

「私、もうそろそろお暇したいのですが……………」

そう言うのは守谷神社の巫女である東風谷早苗です。この巫女コンビは揃いに揃って肩を大きく露出した装い。全くもって寒々しいです。

「兎に角！貴女はその怠惰な生活を直しなさい！それが貴女の積める善行です！」

「はいはい分かったわよ」

「本当に分かつてるのですか？全く……………碓氷勇人を見習って欲しいものです……………」

「え？映姫さんは勇人さんを知ってるのですか？」

「ええ、もちろん。教師として毎日仕事を勤勉にこなし、時には異変解決も行う。もちろん、あの城の事件の活躍も知っています」

「彼のお陰では異変解決しなくて楽なのよね」

「貴女は自発的に行動しなさい」

「はいはい……………」

「あつ」

「どうしたのよ？」

「そういえば最近勇人さんを見かけませんね……………私が家に尋ねる機会もなかった訳ですが……………寺子屋でも見ませんでしたね……………」

「ふむ……………」

「また、例の如く働き過ぎて倒れてるのじゃない？」

「!!それなら早く行かないと！」

「待ちなさい」

「え？」

「その役目私が引き受けましょう」

「い、いえ私が入りますから……………」

「貴女はこれから人里に用があるのでしょう？」

「そ、そうですが……………」

「大丈夫です。最初から彼の元に訪問する予定でしたから」

「し、しかし」

「大丈夫と言ってるでしょう。彼の家は把握済みです。貴女は自分の仕事をしっかりとこなしなさい。それが貴女の積める善行です」

「は、はい……………」

洩々ですが了解してくれたようです。早苗の彼に対する好意も把握済みですが今回は1対1で話したいと思っているので、彼女には悪いですが私だけで訪問させてもらいます。

さて、碓氷勇人の家ですが妖怪の山の麓にポツンと家を建ててるようです。どこかの怠惰な巫女とは違い、この幻想郷では指折りの若さながらも自立した生活をし、また教師として子供達に教え、はたまた人里を守るために奮闘する。まさに善行のオンパレードです。

しかしながら、彼にも悪い所はあります。少々一人で抱え込みがちな所です。先程の霊夢の発言にもあつたように仕事をやり過ぎて倒れたりと人を頼らず、自分だけで苦しんでしまいます。

そこで私が彼に教えてあげようと彼の元に向かっている訳です。さあ、彼の家が見えて来ました。

はい、私四季映姫は非常に困っています。

常日頃から不測の事態や未曾有の危機などを想定し最悪に備えている私ですが……これは流石に想定外です。

「うーん……………」

「……………」

私を見つめる目がそこに。いえ、睨み尽きてるのでしょいか？

私よりも低い位置にある瞳。相手は男性です。私もそこまで大きくないと思います
が……………」

流石にこのサイズは小さ過ぎます。

なんせ、私が見下ろしてしまうぐらいに。

「……………えっと、ここは碓氷勇人の家でしょうか？」

と、とりあえず、確認をとりましょう。もしかしたら、間違えたのかもしれない。

「ええ、そうですよ（まあ、なんて言ったって”俺”の家だし）」

あつてるようです……………という事は、この子は……………
は！

「（はあ……………永琳さんの訳の分からん薬のせいでこの体になってしまつて2日目か……………）」

ま、まさかとは思いますが……………しかし、それ以外は考えられません。

「混乱を避けるためにこの事を知られないように人との接触を避けたいんだがなあ………」

碓氷勇人の顔は一応確認しています。その顔の特徴としては目が挙げられるでしょう。基本的に瞼が落ち気味であるせいで瞳に光入らない——所謂、死んだ目が特徴的です。

そして、この子は………その特徴をそのまま持っています。というか、ほとんど瓜二つです。

「早苗とかが来たら困るし早く帰ってくれないかなあ………」

そこから得られる答えは………ズバリ、勇人の子であるという事です！

そうとなれば、母親は誰でしょうか？あまりにも彼に似過ぎて誰が母親なのか全く推測できません。

まあ、兎も角本命は彼の子供ではなく、彼自身であるので不在かどうか聞いてみましょう。

「えっと、今ご両親は？」

「ああ……………（幻想郷に）いないよ」

「そうですか……………（留守で）いないのですね……………」

「確かにお父さんは忙しそうですからね」

「え？」

「え？」

「は、はあ……………確かに忙しそうでしたからね……………（な、何故このお方は俺の親父の事情を!）」

「あ、申し遅れましたね。私は四季映姫、閻魔です。今日は幻想郷に善行を積んでいるの
か見に戻っています」

「そうですか……………と、とりあえずどうしますか？家に上がるか、お帰りになるか
……………」

ふむ……………ここはあえて息子の視点からの勇人の姿を聞いてみるのもいいかもし

れません。お邪魔になるとしましょう。

「上からさせていただきます。それにしても貴方はまだ幼いのにしつかりとしているのですね」

「あ、ありがとうございます……………（あ、俺、今は小学低学年並の容姿だったな……………）」

流石、彼の息子と言ったところででしょうか？お茶とお茶受け用の菓子類を取り出し、キッチンと接待をしています。勇人という人は礼儀をしつかりとするタイプでしょう。忙しく準備する甚平姿の子はとても愛くるしいものです。

「それで、善行についてのお話をするのでしょうか？」

「いいえ、今回は貴方のお父さんのお話を聞きたいのです」

「お、俺の……………？」

「ええ、貴方から見てお父さんはどんな人ですか？」

「親父か……いつも仕事ばかりで平日だなんてほとんど顔を合わせた事がなかったなあ……でも、休日は休みたいはずなのに家族と過ごす事を優先してくれてたなあ……」

「そうですね……それはいい事です」

息子から尊敬される父とは素晴らしいものです。もう、彼には説教は必要ないかもしれません。

「……母は誰なんでしょう？」

「え？」

「あ、独り言です。貴方の父は素晴らしい人です。これからも貴方の父を尊敬しなさい。これが貴方の積める善行です」

「……そうですね」

「それでは、私は貴方の父に会って来ます」

「え？」

「え？」

「ちよつと待つてください。俺の父に会うのですか？」

「ええ、彼の功績を労うのと同時に説教を……………」

「いや、俺の父は幻想郷にいませんよ？」

「えっ!？」

「え?」

「もしかして、まだ宴会から帰って来ていない？」

「え?」

「え?」

「すいません、少し整理しましょう」

何かがおかしいです。話が噛み合っていないような……………

「貴方の父は幻想郷にはいないと？」

「ええ、そうですよ」

「そもそも、幻想郷に住んでは……………?」

「住んでませんよ」

「ええつ!?!」

「え？」

「それでは寺子屋で教師をし、幻想郷の異変を解決して来たというのに幻想郷に住んでないと?」

「ちよつと待ってください」

「ふえ？」

「貴方が言う、俺の父の名前は？」

「碓氷勇人ですが？」

「あ……………その碓氷勇人って言うのは……………俺ですよ」

「え？」

「え？」

「貴方が碓氷勇人なのですか……………？」

「はい」

「ええええ!!？」

第79話 悪戯の日の姫と兎

く前回のあらすじく

口うるさい閻魔様の事、四季映姫は今日も説教せんと幻想郷を回り、そのついでにと
勇者の功績を勞うを彼の元へ向かう。しかし、そこにいたのは………小さくなってい
た勇者だった。

どうしてこうなったって?………幻想郷ではよくある事だ。
というわけで、諸行有常記―第79話―のはじまりはじまりく

――

「……………一応、聞き直しますが、貴方が碓氷勇人ですね？」

「ええ、正真正銘碓氷勇人ですが」

「息子さんでは……………」

「無いです。そもそも、歳を考えたからおかしいと思いますが……………それに俺は幻想郷に来てまだ日が浅いんですからね？」

「ですよね……………少し思考が安直過ぎましたね」

「で、用件は？」

「ああ、そうでした」

とポンと手を打つ。まあ、こんな姿なら間違われてもしょうがないと言えばそうなるな。

それにしても……………閻魔様が俺に何の用なのか。いきなり、「貴方は地獄行きです」とか言われたらビビるぞ。

「碓氷勇人、貴方は日々仕事に熱心に勤め、身を削ってまで人里はたまた幻想郷の平和への貢献しています。まさに貴方は善行を積んでいると言えるでしょう」

「は、はあ……………」

「この幻想郷では貴方のような人程熱心に善行を積み重ねている人はいません……………」
「これからも善行を積み重ねてください」

「あ、ありがとうございます」

げ、幻想郷の人達はみんな自由だからな……………閻魔様の説教なんて聞いてまい。

「しかし、貴方は少々一人で物事を背負いがちです。もっと、人を頼りなさい。そうすれば貴方はより善行を行えます」

「肝に銘じておきます……………」

うーん……………これでも人を頼っているつもりなのだがな……………それでも背負いこんでいるように見えるのか。

「説教はこれで。さて、次は貴方の番です」

「え、俺の番？」

え、閻魔様に説教をしろと？ いやいや、相手の素性すら分かってないのにどうしろと？

「その体についてですよ。どうして小さくなったのか、それが聞きたいのです」
「あ、ああ……………この体の事ですか……………」

まあ、別に言っても減るもんじゃないし言ってもいいか。

「そうですね、これは2日前の話なのですが……………」

—————

〈2日前―永遠亭―〉

「うー……………気持ち悪い……………」

俺は今、人生初の二日酔いになっている。

『ヘブン・クラウド』の件はその後、『浮遊城』の出現による怪奇事件としてまとめられ
終わりを告げた。

そして、京谷たちの世界にお呼ばれされ宴会が開かれどんちゃん騒ぎをしてきたのだ
が……………戻ってきたら戻ってきたでこちらでも宴会が開かれた。

異変解決の功労者としてもなされたわけなのだが……………二夜連続の宴会である。
向こうでも嫌という程酒を飲み、こちらでもみんなから酒を勧められ断れなかった。

多分、俺は酒が強い方なのだと思うのだが……………それでも限度と言うのはある。結
果、今のような状態に陥ったわけだ。せめての救いは飲んだ記憶がある事か。

「あ……………」

頭がスプーンでグチャグチャに混ぜられているようだ……………そういえば、脳には痛
覚がないらしい。まあ、実際にやって「痛いですか？」と聞いて返事でもしたのなら

そいつは人間じゃない。

兎に角、頭が痛い。吐き気がする。何も胃に入れる気がしない。されど、喉は渴く。
……………これはヒドイ。

流石に今の状態ではいけないと、永遠亭に何か薬を貰いに覚束ない足で来たわけである。

「ウプツ……………つて、もう出るもん無いかアアアア!？」

足元が陥没した!?!と思った頃には尻餅をついていた。

「…………ツ、もうなんだよ」

「あ!ようやく、落とし穴に引っかけたマヌケが来たようね」

二日酔いのせいかこんな原始的な罠にまで引っかけたてしまうとは……………よくここまで生きて来れたな。

さつさと出r……………案外深いじゃねえか……………霊力は今使いたくないのだが……………ここにくたばる方がよっぽど嫌なので浮いて脱出する。

「あー……………頭が割れそう……………」

「おマヌケさんは誰かなー……………って、勇人!？」

「んあ? やつぱり、あんたか……………てあ」

幸運の畜生兎こと、因幡てあ。見ての通り人を欺く事を好む兎だ。永遠亭に行く度に罾を仕掛けられたのだが……………いかんせん、原始的な方法ばかりなので看破するのは簡単だった。しかし、今は二日酔いの状態である。そんな意識している暇などない。

「まさか……………あなたが引つかかるなんて……………」

「今は二日酔いなんだ。ほっといてくれ……………」

「へえ……………二日酔い、ね」

「ああ、そうだ。今も頭ん中が蜘蛛の巣だからのような感じだから」

「あ、そう。それじゃあ」

脱兎のごとく竹林に消えていった。追いかける気力も体力もないので構わず永遠亭に向かう。

「二日酔い、ね。なら、あの薬ね」

「ありがとうございます………」

「これは相当飲まされたようね。ウドンゲも潰れて帰って来たし、酔いの勢いで大人の階段の一つや二つ上ったのかしら？むしろ、すっ飛ばしたかしら？」

「このお方は何を言っている？まだ、そんな階段上ってません。」

「安心してください。悪酔いはしてないので。記憶もすっかりありますし」

「あら、面白くないわね。ま、薬を取ってくるから少し待ちなさいな」

「はい」

と言い、永琳さんは席を外した。彼女入れ替わる形で輝夜が診察室に入って来た。

「気分は？」

「最悪だ……吐き気がするし、頭が痛いし、てゐの罨にも引つかかるし」

「あら、災難ね」

「そもそもあんたは……って、輝夜か」

「これは重症ね。いつも、騙す前に見破つてしまুকせに今回は落とし穴にすら引つかかるなんて」

「だから、最悪なのだよ……あー、吐きそう」

「女の子の前で吐かないでよね」

「分かっている……」

「(本当に今日の勇人は隙だらけね。私の後ろにいてゐるにも気づかないだなんて)」

「(そう言ったでしょ？ 姫様)」

「(で、この試験管を投げればいいの?)」

「(そうです。その薬は鈴仙の部屋から出て来た媚薬です)」

「(鈴仙は何やってんのやら……ま、いつも騙されない勇人には悪戯を、ね?)」

「(姫様も悪ですわね)」

「(あんたもね)」

「勇人〜」

「んあ？なんd「おーつと手が！」

パシッ！

「な!?!キヤツチした!?!」

「なんだ？これは……………」

「おーつと、足が滑った！」

ドスッ！

「ゴフウ！と、飛び蹴り!?!」

い、いや、なんで輝夜は試験管を投げ、てゐは飛び蹴りを!?!

ただでさえフラフラなのに飛び蹴りを腹に食らった俺は試験管なんか注意を払うわけもなく……………

スルッ

手から滑り落ち、位置エネルギーによって地面へと叩きつけられる。

パリーン!!

「ゴホツゴホツ!? け、煙!？」

「あ、あれ? 媚薬じゃないの?」

「わ、分からない……………」

「ゴホツゴホツ……………何をした?」

「い、いやあ……………うっかり手が滑って、ね?」

「わ、わたしも足が、ね?」

「言ってる事とやってる事が一致してねえぞ」

全く……………煙はいつまで出るんだ?

あ、ようやく引き始めた……………

「勇人、二日酔いの薬……………よ?」

「あ、ありがとうござ……………あれえ?」

永琳さんってこんなに背が高かったか? こんな見上げるぐらいに……………あれ? 俺

よりも小さいはずの輝夜よりも小さいぞ？いや、てると同じ目線にあるのか？

「な、なんじゃこりゃああ!!」

ダボダボのカッターシャツに、ずり落ちたズボン。そして、目線が低くなっている。
すなわち

「小さくなってんじゃねえかあああ!」

「あらまあ……………」

「テヘツ」

「テヘツ」じゃねえよ、輝夜

「悪い、悪い」

「お前ら……………」

久々にここまで腹がたつたぞ。

「次から次へと……………俺には平穏な日が来ないのか!？」

「それで、永琳、いつになったら戻るの?」

「分かりませんよ。これは私が作ったものではですから。成分の分析をしてから解毒剤を作るから……………しばらくはかかるわね」

「つというわけではばらくはその体ね」

「Oh, Jesus!!」

「ま、その体だから見えるものがあるかもしれないわよ」

「それは永琳さんのいう通りかもしれないね……………」

「そうよ! 私達のお陰よ?」

「感謝してくれてもいいのよ?」

「おう、2人ともくたばれや」

何が感謝してくれてもいいのよ、だ。少しは反省しやがれ。

「あー、服はどうするか……………」

「それなら、鈴仙の部屋から子供用の服があったわよ、ほら」

「え?」

「そういえば、この薬は？」

「鈴仙の部屋からよ」

「「「……………」」」

「さ、さつさと着替えて家に戻りなさい」

「お、おう。そうするぜ……………」

—————

「……………というわけです」

「これまた……………災難でしたね。ところで鈴仙はなに」「それ以上は言わないでください」「そ、そうですね」

はあ……………思い出ただけで腹がたつてきた。だいたい何をもってしてあの薬を投じたのやら……………

と玄関から戸を叩く音がする。

「はいはい、ちよつと待っていてくれ……………」

ちよつとした距離も少々長く感じてしまう。この体のせいで眠くなる時間も早いし、運動能力も低いし……………

「どちら様で……………す……………か」

「……………え？」

扉を開けた先には早苗がいた。

第80話 混乱の日の少女

く玄関にてく

「……………」

ぐっ……………視線が痛い……………てか、なんで早苗は無言で俺を見ているのだ？ 確かに小さくなってしまったのだが……………何か反応を示して欲しい。このままではこの空気に耐えきれない。

「……………」

な、何か言ってくれよ！ え、映姫さんのようにさ、「ゆ、勇人さんの子供!？」的な感じ
で。

もう、この空気には耐えきれないのでこちらから声をかけよう。

「お、俺は勇人の息子じゃなくて本人だぞ？」

「……………」

スタスタ……………

む、無言で近づかないでくれ！こ、こえーよ！

俺の目の前まで近づくと顔を近づけてきて……………

ヒョイ

「What!？」

「……………」ジー

あ、あのー……………どうして俺は抱えられて見つめられているのだ？

「あ、あのな早苗、これには田沢湖よりも深いわけがあつてだな……………」

「……………」ギュー

「フゴオツ!？」

いきなり俺を抱きしめ始める早苗。

お陰で視界は早苗の白い巫女服で埋め尽くされ、なんと言いますか……………こう……………ね？2つの……………ね？柔らかいので呼吸が困難なんだ。

「ギ、ギブ！ギブだから！」

「あー、ごめんなさい……………」

軽く酸欠状態になったところで早苗は離してくれた。ちよいと残念とか思っていないから！

「ふー……………助かった。で、早苗何の用だ？」

「……………は！そうでした、最近勇人さんが姿を見せなくて心配で……………」

成る程、ズバリの中だな。どっかの蓬莱ニートとウ詐欺さんらがやってくれたからな。許すまじ。

「でも、杞憂だったようですね！むしろ、こんなに可愛らしくなって……フフ」
「か、可愛いだと？おいおい、冗談はやめてくれよ嬢ちゃん」
「いえいえ！とつても愛くるしいですよ！」

勇人は精神ダメージを999食らった！

「お、俺が愛くるしい……だど？」

「はい！」

Over kill!

「ハハ……オレッテカワイイノカ……」

あれ？雨が降ってる？おかしいなあ……屋内のはずなのに……

「あら？早苗ではありませんか。結局、家に来たんですね」

「映姫さん！」

「トニカク、アガツテクレ……………」

—————

く居間く

俺のメンタルがきつちりOver killされた後、早苗に俺がこうなってしまう過程を話した。まあ、終始俺は早苗の膝の上に乗せられていたのだが……………

「それにしても……………5、6歳ぐらいに戻るとは思わなかった……………たまに童心に帰りたいと思うが……………ここまでは求めないぞ」

「いいじゃないですか、勇人さんがその姿の間は私がしっかりサポートしますから。気を落とさないでください！」

ありがとう……………早苗……………それしか言う言葉が見つからない……………でもな、
気を落としたのは君が俺のメンタルを完膚なきまでに粉砕したからなのだよ。

「ふむ……………それにしても、貴方は体格が小さいですね。キチンとご飯を食べてたの
ですか？」

「小さいと言わんといってください。泣いちゃいますよ」グスツ
「と言いながら泣かない」

だ、だって、小さいて……………今まで気にしてた事なのに……………5、6歳の時はだ
な、周りのことも比べてもとても小さくて、背の順に並ぶとか屈辱以外の何者でもない。

「ゆ、勇人さん大丈夫ですか？」

「あ、ああ」ウルツ

「……………ツ!!」ギュー

「イデデデデ！」

「あーごめんなさい！可愛くてつい」

「可愛いて言わないで………そうだ、もう永琳さんなら元に戻る薬を作ったかもしれないな。行ってみるか」

「え、まだこのままでもいいのに………」

せめて、本心は心の中にしまつて欲しかったな。もうチビという屈辱は受けたくないのだよ。

あ？大きくなっても変わらんだろ？あんたはだーつとれい！

「でも、1人で行くのは危ないのでは？」

と映姫さんが冷静な意見を言う。

「大丈夫ですよ、俺には愛用のこの銃が」

と常に携帯している銃を取り出すと早苗に取り上げられた。

「そんな、危ない物を持つてはいけません！今の勇人さんはか弱いのですから、銃を使つ

て怪我でもしたらいいけません！」

「そ、そんな……………」

「永遠亭までは私が連れて行ってあげますから、ね？」

「ふむ、それなら安心でしょう。用も済んだことですし私はこれで」

「じゃあ、私達は永遠亭へ」

俺は言われるがままにするしかできなかつた。子供って無力だなあ……………

—————

「……………もうヤダ」

「だ、大丈夫ですよ！一週間だけですから！」

永琳さん曰く「あと一週間はかかるわ」だそうです。

もう、何にも言えねえ……………不幸中の幸いと言うのなら鈴仙がいなかったことか。この根本的な原因は鈴仙が薬を作ったからだ。出くわして何をされるのかは想像もしたくない。

しかし、輝夜とてゐの煽りには怒つてもいいと思う。わざわざ赤ちゃん言葉で話しかけてくるあたり俺をストレスで殺しにかかっていると思う。本当にあいつらは人をイラつかせるのが上手い。

元に戻った時があいつらの命日だな。

—————

く 勇人宅く

我が家に戻ってきた。行きも帰りも早苗が手を繋いでいたのは少々気がかりだがこの際どうでもいい。今の問題はそんな事ではない。

「あー……………どうすつかなあ……………仕事。最近はずっと休んでばつかだしなあ」

皆さんご存知のように人里で慧音さんが開いている寺子屋で教師として働いている。明日からには流石に行かないとなと思う反面、こんな姿で教師が務まるのか疑問である。

「教師なら知識さえあればどうにかなるのではないのでしょうか？多分、勇人さんのような人なら姿が変わっても授業を聞いてくれると思いますよ」

「それもそうだな……………あと、もう膝から降りてもいいかな？」

家に帰ってくるなら俺を抱き抱えて膝の上に乗せてきた。その速さといったら、「お、俺は部屋に入ったと思っていたらいつの間にか早苗の膝の上に座っていた！な、何をいつてるか（ry）」状態になってしまいうレベルである。

「もう少しだけ……………」

「……………分かった」

早苗曰く「ちようどいいサイズです！」だそうだ。冷蔵庫に牛乳あつたかなあ……………

「よし！明日からキッチンと仕事に行くか！姿が変わろうともサボりは良くないからな！」

「あ、でも今の勇人さんは運動能力が低く、靈力もかなり少ないので妖怪格好の的ですよ」

「……………仕方がない、ここは封印していた自転車を……………」

「あの大きさだと勇人さん乗れませんよね？」

「……………空を飛んで」

「だから、霊力は少ないと。むしろ空を飛ぶと目立ってかえって危険です」
「……………どうしよう」

「安心してください！私が護衛しますから！」

「そ、そうか……………しかし、早苗も忙しいだろ？」

「そこは諏訪子様になんとかしてもらいますから大丈夫です！さあ！肩車で送ってあげ
ましようー！」

「いいから！そこまでしなくてもいいから！」

「遠慮せず、さあ！」

「……………／／」

「フフ……………幸せです☑」

……………
いい歳して（見た目は幼いのでそれ相応に見える）肩車とか……………恥ずかしい

「どうですか？こう言うのも幼いからこそ出来るのですよ？」

「これ、人里の人達に見られたらめっちゃ恥ずかしいって……………」

「大丈夫です！はたから見れば、姉弟にしか見えませんか！いえ、母と息子ですね！」

「やめてくれ……………元に戻った時に問題が発生するから……………」

「私はいつでも構いませんよ？」

「俺が構うの！はあ……………もうそろそろ降ろして」

「お邪魔します！勇人さん！」

ガラッ

「えっ!?さ、早苗さん……………そ、その子は……………?」

「よ、妖夢さん!」

「ああ……………どうしてこのタイミングで……………」

「え?え?いつの間に早苗さんは勇人さんとの子を……………?」

と妖夢は背中にある刀に手をかけている。

「せ、折角あちらの咲夜さんにアドバイスを貰って良いところまで来たのに………も
う、子供ができてしまつてはチャンスが………幽々子様も師匠も応援してくださつた
のに………わ、私はどどどどうすれば？」

大量の冷や汗とともにガクガクと震える妖夢。様々な感情が入り混じり身動き取れ
ずにいるのだろう。しかし、こつちからしたら手にかけた刀が脅威である。

「お、落ち着け！俺は碓氷勇人だ！こんな姿だが勇人だ！だから落ち着け！」

「そ、そうですよ！妖夢さん！落ち着きましょう！」

「あ、ああ、私は………私はどうしたらいいの？そ、そうだ、私も勇人さんとの子供を
………！」

「ヤバイヤバイ！目をグルグルに回しながらついにばぶっ飛んだことまで言い始めた
ぞ！」

「だくかくら！俺は碓氷勇人だ！早苗の息子ではない！少しは話を聞け！」

「はっ！そ、そうなのですか？」

「そうですよ、妖夢さん。そもそも、仮に息子だとしても勇人さんは幻想郷に来てまだ一年近くぐらいいしかいませんからありえませんかよ」

「そ、そうですね、はあー……………」

ど、どうやら落ち着いてくれたようだ……………しっかし、この体になつてからはまともな事が起こらねえ……………やっぱり、輝夜とてゐは許さん。

ともかく、妖夢は事情を話してから、今後の事について考えるか。

第81話 自尊心崩壊の日の少年

「勇人宅ー夕方ー」

妖夢が俺の姿を見て発狂寸前となり、刀のサビとなりかけたがどうか説得し事なきを得た。

いや、マジで斬りかかりそうならいのオーラを妖夢は出していたと思う。

「……………す、すいません。早とちりしてしまって」

「いや、いいんだ。悪いのはあのニートと詐欺師だからな」

「そうですよ。私もとても慌てましたし」

早苗の場合は無言で抱きついて来たのだがな。小さくなった俺としては軽くトラウマになりそうだ。

「しかし、なんと言うか……………勇人さんは昔からその……………目が……………」

「死んでるってか？多分、本来ならまだ無垢な目だろうが、生憎中身は変わってないからな。昔っからの目を細めて物を見ようとする癖が出るんだらう」

7、8ぐらいの時に目が悪くなり始めて……………放置してたら癖がついてしまった。そのせいか通常時でも瞼はそんなに開いていない。今ではあんまり気にしてないが。

「それでも、小さい頃の勇人さんは可愛かったのですね」

「……………まあ、皆んな小さい頃は可愛いもんだろ」

ふっ……………流石に耐性はつく。可愛いと言われようが最早俺のメンタルは傷つかん！

「でも、どうして勇人さんは早苗さんの膝の上にいるのです？」

「俺も分からん」

「いやあ……………なんと言いますか……………丁度いいんですよ。それに頭を撫でられますしね」サスサス

「んっ……………急に撫でないでくれ……………」

あんまり頭を撫でられた事が無いもんだから、慣れていない。そのせいか、なんだか力が抜けて自然とダランとなってしまう。気持ちよく無いと言ったら嘘になる………すいません、普通に気持ちいいです。

「なら、やめますね」

と撫でる手を止める早苗。それに思わず

「あつ……………」

「あれ？もしかして、またして欲しいんですか？」

しまった……………完全に失言だ。

「気持ちよかったですね？まだしてあげてもいいですよ？」

からかうような口調で言う早苗。しかし、実際に気持ちよかったしもう一度やって欲しいと言う思いもある。まあ、それはプライドという物によって口に出せないのだが

な。

「……………別に」

「遠慮しなくてもいいんですよ？」

「……………頼む」

所詮、プライドとは貧弱なものである……………

「うーん、でも人に物を頼む時はそれ相応の対価がひつようですよね……………?」

「な……………!?!」

「どうしましょうかねえ……………」

よ、余計な事を言わなければ良かった……………お金はある程度溜まつてるからどうにかなるか……………

「ここは『早苗お姉ちゃん、頭撫でて』と言ってください!」

「なななにを言わせる気だ!?!」

そんな事、俺のプライドが許さんッ！言わないからな！

「でも、言わないと頭を撫でませんよ？」

「クツ……………！」

「さ……………さ……………」

「……………！！」

「早苗お姉ちゃん、頭撫でて〜／＼」

「……………ッ／＼!?」

「はいッ!!姉ちゃん撫でちゃいますよオオ!!」ワシヤワシヤ

「むう……………／＼」

ヤバい、恥ずかしくて死ぬ。クツ、頭を撫でてもらうためにこの屈辱を受けようとは……………しかし、頭を撫でてもらうとこれでいいのでは無いか?と勝手にしまう。

「さ、早苗さんだけズルいです！ 勇人さん！ 私にも『妖夢お姉ちゃん』と呼んでください！」

「これを言う度に俺はプライドを破壊しなければならぬのだぞ？」

「しかし、早苗さんだけでは不公平です！」

「何が!？」

「一度！一度だけでもいいですから！」

土下座せんとばかりに食らいつく妖夢。……………仕様がなぬい。

「よ、妖夢お姉ちゃん……………?」

「……………ツ／／!!!」

「これで気がすん ガバツ

「ぬお!？」

気がつけば俺は早苗の膝の上から妖夢の腕の中にいた。お前ら速すぎんよ！

「はっ！ 勇人さんは？」

「可愛いですッ！」 ギュウ……

「むう………少し苦しいぞ」

「すいません………でも、もう少し………」

「ちよ、ちよつと妖夢さんッ!？」

「いいじゃないですか！ 早苗さんだって昼間は満喫してたのでしょ？」

「あー、交代制にしたらどうだ？」

「なら、後30分はこのままで」

「な、長すぎますよッ！」

「早苗さんはもつと長かったじゃないですか！」

「ぐっ………」

「どう言うわけで後30分ですな☒」

うむ、俺の意見は無しか。知ってた。

〈30分後〉

「スウー……………スウー……………」

「寝ちゃいましたね……………」

「そうですね、寝顔も可愛いです……………」

「布団で寝かせましょうか」

「なら、私が用意するので妖夢さんはしばらく待っていてください」

—————

「翌日」

「朝ですよ、起きて下さ〜い」

「……………ん、まだ寝る」

「今日は寺子屋に行くんですよ」

「……………そうだった」

うーん、体が小さいとすぐに眠たくなってしまうな……………待て、なんでこの家にまだ早苗がいる？

「早苗、昨日は守谷神社に帰ったか？」

「いいえ、泊まらせていただきました。寝顔、可愛かったですよ。写真に撮りたいぐらいです」

「それはやめてくれ、しかし何処で寝たんだ？」

俺の家には布団は一式しかないわけだから床で寝てたのか？

「それは……………勇人さんと一緒に……………」

「……………何もしてないよな？」

「もちろんですよ！」

今回は早苗の言葉を信じよう。それよりも寺子屋に行く準備をしないとな。

「朝食はもう作ってありますよ」

「そうか、ありがとな」

とりあえず、顔を洗ってから朝食を取った。顔を洗う時なのだが……………台が無いと届かず少々苦勞した。

朝食の時はほっぺにご飯粒を付けたりと完全に子供の様な行動を取ってしまったている。

ともあれ、準備が完了し寺子屋へ向かおうというわけなのだが……………

「やっぱり早苗も一緒にか？」

「もちろんです。勇人さんに万が一があつたらいけませんから」

「……………銃さえあれば大丈夫なのだが」

「その体で銃は危険です！あ、ナイフも没収しときましたからね」

「……………了解」

もう、ここは俺が折れるしか無いな。確かに反動で腕が折れてしまう可能性もあるわけだし……………

「それじゃあ行きましょう！」ギユ

「ちよ……………なんで俺を抱える必要が？」

「なんでって……………空を飛ぶからですよ？」

「それもそうか」

てつきり歩くのかと……………それにしても遠すぎるか。

少年&少女移動中

「さ、人里に着きましたよ」

「あの事件の影響は……もう無さそうだな」

と人里を見渡す。あの事件前と同じように活気溢れる里に戻った様だ。うんうん。平和が1番だよ。

「……………肩車の必要あるか？」

「必要です！」

即答ですかいそうですかい。周りの視線が痛いかと思っただがそうでも無い。それ相応に見えてるのだろう。

「おつ、早苗ちゃんその子は？」

と早速里人のおつちゃんに声をかけられる。すると周りの人達もこちらに注目する。

「見ない顔の子だねえ……………もしかして、ついに先生との子供が？」

とおばさんが。

「ちちち違いますよッ！まだ私達はそこまで……………」

おい、墓穴を掘るな。そんな事を言ったら……………」

「あら、”まだ”つてよ」

「そう、お熱い事ね〜」

「あ……………」

「……………早苗お姉ちゃん、早く行こ？」

「……………!!そそそうね！」

「うん？なんだい、親戚か？」

「はい、勇人さんの親戚の子です！」

その理由はキツい気が……………

「そうかい、どうりで先生に似てるわけだ」

うむ、案外通る物なのか。

「それでは私は用事があるので……………」

「おう、早苗ちゃんも頑張つてな！」

「はい！」

「ふう……………近所のおばさん程怖いものは無いな」

ああいう人程恋沙汰などに敏感で鋭いものなのだ。

「……………『早苗お姉ちゃん』って、可愛かったですよ。もう一度言ってくれませんか？」

「拒否する。あれは俺のプライドを削って言っているんだ。言い過ぎるとプライドが無くなって死んでしまう」

「む……………そんなにプライドは大事ですか？」

「ああ、男は無駄にプライドが高いものなんだ」

そうそうベ〇ータとかさ高いよな。ん？ベ〇ータって背が低かった気が……………

「はい、寺子屋に着きましたよ！」

「おお、よし降ろしてくれ」

「はい、よいしよつと」

やつと地面に足が着いたよ。よし、慧音さんを呼ぼう。

「慧音さん！」

「はいはい、誰……………だ？」

俺の姿を確認するなり固まる慧音さん。そりやあそうなるか。いつも働いている俺が急に小さくなればな。

「……………早苗、もしかして勇人と？」

「あー……………違いますね。この子は勇人さん本人です」

「え？勇人なのか？こんな小さいのがか？」

「ええ、実は永遠亭で……………」

「……………というわけなんです」

「成る程……………勇人も苦労してるのだな」

「いえ……………もうなんか……………慣れました」

「ハハ……………それでそんな姿でどうして寺子屋に？」

「最近はまともにも寺子屋に来てないので……………」

「別に無理しなくてもいいのだが……………」

「やっぱり、この体じゃあ教師は務まらんよな……………小学生に勉強を教えてもらうなんて俺だったら嫌だもん。」

「しかし、ここまで来てくれたのだから……………」

「そうだ！いつもは教師として寺子屋に来ているのだからこの機会に生徒として寺子屋

に参加したらどうだ？それに私の授業を君に受けてもらいたかったしな！」
「それはいい案ですね！」

視点が変わるとはこういう事か。確かに慧音さんの授業には興味があるし、ちょうどいい。

「そうとなれば今日の授業は気合を入れてやらないとな！」
「ええ、楽しみにしています」

こうして、生徒として寺子屋に参加する事が決まったのであった。

第82話 授業の日の教師

人に教えるという事はとても難しい。それは教師をやっていく中で痛感せざるおえなかつた。

幻想郷に来る以前は寧ろ教えられる側であり、教える機会があるとすれば弟に教える事ぐらいだった。弟はまだ物覚えのいい方だったので教えるのに苦労はしなかつたが、いざ幻想郷に来て、教師としてたくさんの人達に教えるという事になると上手くないものである。

基本的に算術いわゆる算数を主に教えているのだが、基本的には楽しく授業を受けてくれてるらしい。

だからと言って全員が完全に理解していると言うわけでもない。また、少々難しい所になれば授業中に寝てしまう子達までいる。テストをしてみれば理解していない事が浮き彫りになる。

そういう時は自分の授業に自信が持てなくなる。また、寝ている子を見ると少々傷つくものである。

それは慧音さんも同じのよう

「どうやら私の授業は難しくて面白くないらしい……………」

と嘆いていた事も何回か聞いた。

歴史の編纂を使命とする慧音さんは歴史はとても大切な物であり、それ故歴史を知る大切さは誰よりも知っている。

俺こそ数学や算数に命をかける程の熱意はあるわけでもなく、得意だからという理由で教えてるのが、それでも生徒達がつまらなさそうに受けていると傷つく。それから、慧音さんはより落胆してしまうのだろう。

当たり前だが幻想郷には教育免許状を取る必要は無い。という事は先生となる為に勉強する機関が無いのだ。この寺子屋がある以前ではそもそも教育機関が無かったのだ。この寺子屋もできてまだそれほどの年月が経っていないらしい。そんな中でやってきたのだからしょうがないと言えましょうがない。

”教うるは学ぶのなかば”という言葉があるように教える事の半分は自分にとって勉強になっているわけだ。こちらも勉強しながら、生徒と教師の双方が向上すればよい。

とここまで教える側の事について考えてたわけなのだが……………今回は”教えられ

る側」として寺子屋にいる。というわけでしっかりと慧音さんの授業を受けてどのようになっているか学ぼうじゃないか。

「で、俺はどの授業に出ればいいんですか？」

「ああ、この後の授業は………しまった、後はチルノ達の所の授業しかない。そこではないか？」

「ええ、問題ないです」

「よし、それなら教科書は貸そう。後は書くものか………」

「それならいつものノートと筆記用具があるので大丈夫です」

「そうか、なら後5分後には始めるから準備してくるといい」

「はい」

慧音さんから教科書を借り、教室へと向かう。今回ばかりはこの体に感謝するか。もう、教えられる側には立てないだろうと思っていたからこの機会は貴重だ。しかし、あの2人には感謝しない。

「……………早苗もついてくるのか？」

「え？もちろんです！」

「……………そうか」

授業参観か何かか？もう俺の保護者みたいじゃないか……………

扉を開け、教室に入るとそこにはいつものメンバーがいた。

授業に近いせいかみんな着席しており、隣同士でペチャクチャ話している。

そして、俺の姿を確認すると一同は急に静かになり

「あれ？新しい子かな？」

「でも、人間だよ？」

「話しかけたら？」

とコソコソと話し始めた。すると、その中から代表してチルノがこちらに歩み寄り

「あんた、新しい子ね！あたいはチルノ！サイキョーだからしつかり覚えてなさい！あんたの名前は？」

「お、おう……………俺はゆ u……………」

あれ？これって俺が碓氷勇人である事を言ってもいいのか？別にいいか。もう、慧音さんには話してあるし……………

とその慧音さんが教室に入ってきた。すると、チルノはすぐに自分の席に戻ってしまつた。

アルエ？俺の授業の時は注意するまで騒いでいるのに……………てか、みんなちゃんと着席している事が俺の授業ではあまり無かつたぞ。

「よし、全員いるな。よし、授業を始めると言いたい所だがまずはみんなが気になってい
るだろう新しい子の紹介をしよう。君、前に来なさい」

「は、はい」

と呼ばれたので前に出る。すると慧音さんは俺に

「今回は君が勇人である事を伏せといってくれ。彼女らが君が勇人だと分かつたら授業に
集中できないかもしれないからな」

と耳打ちをした。確かに授業に支障をきたすのはよくない。

「彼の名前は………ハヤトだ。みんな仲良くしてやってくれ」

成る程、ゆうと 勇人だから、はやと 勇人か。

「よろしくお願いします」

「ハヤトって人間なの？」

といきなりフランが質問する。そうそう、今までフランドールと呼んでいたのだがお気に召さなかったようでフランと呼んでくれと頼まれた。

「そうだが？」

「じゃあ、たゞ「ダメだ」

とルーミアが出しかけた言葉を遮るように慧音さんは却下した。ルーミアは人間だったら食べてもいいと思ってるのか？

フランの質問を皮切りにみんな段々と騒がしくなっていく。

「静かに。もう十分だろ？今から授業を始める」

そう一喝しただけで教室はしんと静まりかえる。俺の時とは全然違う。うーむ

……………流石慧音さん。

「じゃあ、今日はこの時代について話すぞ」

こうして、慧音さんによる歴史の授業が始まった。

「今日はここまで。きちんと復習をしとくのだぞ？」
『はい』

ふう……………もう終わりか……………慧音さんの授業は退屈ではなく、寧ろとても興味深いものだった。

まあ、授業を受けているのと同時にチルノ達の様子を見させてもらったのだが……………こちらは退屈だったらしい。チルノとルーミアは爆睡。フランも時折ウトウトし、他の子達も皆眠そうに授業を受けていた。

「んー……………~~X~~年に起こったのがこれだっけ？」

「違うよそれは~~????~~年だよ」

「ち、チルノちゃん、今日は何を習ったか覚えてる？」

「え？なんだっけ？」

子供達は先程の授業の復習をしているようだが……………様子から見るに難しかったらしい。皆んなうーんと唸りながら復習をしている。

「どうだったか？やはり、私の授業は難解だったか？」

と慧音さんが聞いてくる。多分、チルノ達の会話を聞いたのだろう。教師としてあまり、理解させてやれなかったのが悔しいのだろうか。

「いえ、難しくなったですよ。寧ろ丁寧に説明していて分かりやすかったです」

元いた学校の歴史の先生よりずっと分かりやすかったと思う。年順も整理しやすくてとてもいい授業だったと思う。

「そうか、少し君の学習帳を見せてくれないか？」

「そんなに綺麗にまとめれてないですよ？」

と慧音さんにノートを渡す。

「いや、とても綺麗にまとめているじゃないか。それにしても……………たくさんの色を使っているが……………」

「まあ、それぞれ人物とか出来事を種類分けをするために使っているんですけどね」

「見返しても分かりやすいな……………しかし、どうして子供達は頭を抱えてしまうのだろうか……………」

「うーん……………少し事細やかに説明し過ぎな気がしますね……………」

確かに慧音さんは丁寧で分かりやすいのだが……………細か過ぎる。子供達には与える情報量が多過ぎるのかな。俺ぐらいの歳なら楽しく受けれるのだが……………

「相手は子供達ですし、もう少しその辺を考慮すれば……………」

「成る程、ありがとう。次回から少し情報量を減らしてみよう」

はつきり言つて俺よりも全然授業をするのが上手い。俺も見習うべき所が多々あった。

「へえ……………勇人さんつてとても字が綺麗なんですね……………」

「ん？まあ、汚い字のノートを読み返す気はしないからな。あ、そうそう、早苗は慧音さんの授業を聞いてどうだった？」

「とても分かりやすかったですよ。流石慧音さんって感じてましたね」
「そうか……………」

うん、やっぱり俺の思った事は間違いないらしい。現に早苗は分かりやすいと言った。ただ、子供向けではなかっただけ。

「ねえねえ、君“ハヤト”って言うんだよね？」

「ん？あ、ああ。そうだよ」

急に声をかけられた。振り返るとかけた主はフランだった。

「私はフラン。よろしくね！」

「よ、よろしく……………」

う、うむ。なんだか新鮮だな。フランと同じ目線にあるだけでこんなに景色が違うものなのか。

あ、俺の方が小さい……………いやいや、そこはいいとして、俺もここは子供らしく振

る舞わないと。

「ねえ、これからチルノ達とお花畑に行くんだけど……………一緒に行く?」

お花畑……………うん、女の子らしくていいが……………俺は男だぞ?しかし、普段フラン達がどのような事をしてるか知るいい機会だし……………早苗に聞いてみるか。

「早苗……………ゲフンゲフン、早苗姉ちゃん。フランちゃん達と一緒にお花畑言ってもいい?」

「ひゃい!?え、ええ、もちろんいいですよ。でも、気を付けてね」

「はーい」

もう、俺に羞恥心なんてものは無い!

「じゃあ、決まりだね!ついてきて!」

フランに手を引かれ花畑へと行くこととなった。

後に慧音さんの授業は子供達にも分かりやすくなり好評となった。その事によって、より一層寺子屋の人気が上がるのだった。

第83話 戦闘の日の花師

フラン達には花畑に行かないかと誘われて承諾したのはいいものの……………

「ゼエ…………ゼエ…………ま、待ってくれ…………」

「む……………ハヤト君おっそーい！」

この有様である。いや、だって空飛べなくなってたんだもん！

霊力は出るんですよ？でもね、その量が雀の涙程でして、俺の体を浮かせるには全くもって足らないのです。

つまり、空飛ぶみんなを走って追いかけているわけなんですけど、この体での体力は高が知れているわけでした、この有様になってるんです。

「い、急がなくても、私がついてますよ？」

「あ、ありがとう……………」

大妖精の優しさが心に染みる……………皆んなもこのぐらい気遣いができてもいいだろうに。

「それなら……………」ガシッ

「ふあっ!?!」

フランが後ろから迫ってきたかと思えば肩を掴み、

「それ!」

「お、おお?」

そのまま宙に浮いてしまった。た、確かにフランは吸血鬼なので俺ぐらいの大きさをもち上げるのは造作にもない事だろう。

「ん……………君軽いね!」

「そ、そうか……………」

そうさ……………彼女は吸血鬼なんだ……………だから、軽いつて言うんだよ。俺が軽いんじゃない……………

「そういえばさー、あんたつて勇人せんせーにそっくりだよ。それにそのリストバンド勇人せんせーのとそっくり」

し、しまった……………護身用の銃やナイフ全て早苗に没収されたからせめてこの仕込みリストバンドだけでもっと思っただが……………

「ふえっ？し、知らないなー勇人つて人は……………」

「別にあんたが勇人せんせーを知ってるか知らないかは聞いてないわ」

「おう……………」

や、やけに今日のチルノは鋭いな……………周りからは頭が弱い子扱いされているが時折こうやって核心をついた事を言う。

「ん？もしかして……………」

き、気づいたか？俺が勇人だと言う事を……………

「兄弟ね！きつと、勇人せんせーの弟なんだわ！あたいつたらサイキョーね！」

気づいてないようだ。鋭くても詰めが甘かったか。

「そんなわけないじゃん。勇人先生は外来人なのよ？」

「え？そうだっけ？」

「ねえ、お花畑ってどんなのかな？」

「んー……………えつとね……………一面黄色のお花畑よ！」

「え？向日葵畑はまだ咲いてないよ……………それに……………幽香さんもいるだろうし……………」

向日葵って……………季節は夏だろ。今はまだ咲かないだろ……………

「え？でも、昨日見に行った時は咲いてたよ？」

「み、見に行つたの!? よ、よく無事だつたね……………」

「フフ……………なんたつてあたりはサイキョーだからね!」

「何がサイキョーよ、半殺しにされて私がいなかったらやばかつたじゃない」

「そ、それでまた行くつもりなのか?」

半殺しにされといて懲りずに行くつもりなのか?

「今回こそあたいがやつつけるから大丈夫よ!」

「フツ、本当は勇人先生を頼ろうとしたくせに」

「い、いなくても大丈夫だもん!」

「む、無理はしないでね?」

幽香……………ああ、風見幽香か。噂で聞いた事がある。

なんでも、純粋な身体能力と妖力はトップクラスでその圧倒的な力を使い問答無用で滅ぼしにかかるとか人間ではまず倒す事は出来ないからどんなに腕の覚えのある者でも戦つてはいけなとか花が大好きとか……………最後のは可愛い噂だが……………総じて幻想郷でも最強クラスに分類されるようだ。

いや、ちよつと待て

「お、俺つてついて行つて大丈夫なのか？」

「まあ、フランちゃんがいるし大丈夫かな？」

「え？私任せ？チルノがやりなさいよ！」

「あたいはリベンジしないとイケないの！」

「じゃあ……………大妖精？」

「ええ!?わ、私!？」

いざとなつたらこの仕込みリストバンドでどうにか……………ならんか。せいぜい糸と針を発射するだけの物だからな。緊急脱出用ぐらいにしか使えないか……………
そもそも、俺をそんな地獄に連れて行こうとしないで欲しかった……………

「お？向日葵畑が見えたきたわ！」

「お、おお……………本当に一面黄色だ……………」

とお目当の向日葵畑が見えてきた刹那、どこからともなく花の弾幕が高速で通過し

た。ヒュンと風切り音がする。

いやいや、なんで!?

「ほら、チルノ！あんたのお目当が来たわよ！私はハヤト君を下すから先に戦っておきなさい！」

「ま、任せなさい！」

と、漸く地に足がつきフランは大妖精に俺の護衛を頼むとチルノと共に弾幕の放たれた方へ向いた。

「はあ……………また貴女達？懲りないわねえ……………」

声をする方を見れば、弾幕を放った主が現れた。

白のカッターシャツにチェック柄のベストにロングスカートを身に纏い、首には黄色いリボンをつけ、日傘をさした緑髪の少女。

幻想郷の女性は美人が多いのだがこの人もとても美人だ。

が、その顔は笑顔なのだが……………目が笑ってねえ……………笑顔が多い人は怖いと言

うのは本当のようだな……………

「フフ、今回はフランちゃんもいるんだからね！絶対にあんたに負けないわ！」

「1人でやるんじゃないかったの……………」

「ふーん……………あの吸血鬼の妹……………ね。貴女の言ってた『先生』と言う人は来てないのかしら？」

『先生』と言うワードが出てきて一瞬ドキツとする。チルノ何を話しているんだ！

「今はいいわよ」

「あら、噂じゃあ相当な手練れだつて聞いてたから楽しみにしてたのに……………残念ね」

いやあ……………本当、この体でよかった……………今回ばかりはあの2人に感謝しといてやるか。

「先生じゃなくて、私がコワシテアゲルヨ」

「あらあら、怖い怖い」

口ではそう言うものの、怖がるそぶりを見せない。フランも相当強いはずなんだろうけどな……………

「じゃあ、いくよー!」

と開幕早々、チルノとフランは弾幕を展開する。フランが物凄い量の弾幕を放てるのは知っていたが……………チルノも負けず大量の弾幕を展開する。

それにしても、弾幕ごっこだなんて久し振りに見るな。いやあ……………それにしても美しいもんだねえ……………他人事だから言えるのだけど。

「それだけ?」

と幽香が言い、全ての弾幕が幽香の弾幕により相殺され消える。

こりゃあ、噂通りの強さだなあ……………元の体でも勝てる気がしないぞ。

「んー、こつちからいくわよ?」

と先程とは比べ物にならない量の弾幕が展開される。

「!?」

一気に2人は劣勢となり防戦一方の弾幕ごっことなる。

それに対し幽香は……………笑顔で容赦無く弾幕を放つ。

その笑顔だけを見れば、男なら惚れてしまいそうなくらいだ。しかしだな、今の2人を攻める姿を見てこの笑顔を見ればサドっ気溢れる表情でしかない。

それにしてもフランまで劣勢を強いられるとは……………やはり、フラワーマスターの名は伊達じゃないか。名前だけ聞けば可愛いものにな。

「さっきの勢いはどこにいったかしら?逃げ回ってるだけじゃ勝てないわよ?」

「ぐっ……………」

「むう……………!」

しばらく経つても2人は近づく事すら叶わず、ギリ貧の戦闘となる。次第に二人の息

も合わなくなり、チグハグな動きが目立つ。

そして、糸が切れたかのように連携がもつれ、

ドンツ！

「きゃッ!？」

「ちよっ!？」

二人はぶつかってしまい、動きが止まる。そして、そのまま地面に落ちる。

「これで終わりね」

傘を閉じ、先を二人に向ける。

俺は直感的にヤバイと感じとり、仕込みリストバンドから針を発射し向こう側の木に刺す。

そして、糸を巻き取る事によって高速でチルノとフランの二人に迫り

「きゃっ!?!」

二人の体を掴み倒れこむように着地する。

ドゴオン!

その後すぐに極太のレーザーが通過し、地面に大きなクレーターを作る。

「あ、危ねえ……………大丈夫か?」

「え、え? だ、大丈夫だけど……………え?」

「う、うーん……………」

「チルノは気絶したか……………大妖精! チルノを頼む! フランは牽制しながら退避しろ!
! 俺もなんとかする!」

「うえ!?! わ、分かったわ!」

「あら? 貴方……………」

俺の姿を見るなり動きを止める幽香。なんだなんだ? 顔に何か付いているのか?

「これでもくらいなさい！」

弾幕が止んだのを機に一気に弾幕を放ちつつ近づくフラン。

しかし、それは幽香の傘によって簡単に薙ぎ払われる。

そして、その傘でフランの脇腹を殴る。

「なかなかやるようだけど………まだまだ青いわね。ま、もう少し痛ぶられてちょうだいな」

「うぐぐ………」

や、やばい！あのままじゃあ消し炭にされる！何か策は………何か………

「こつちを見ろ！」

そこらへんにあった石ころを拾い投げつける。が、幽香は首を少し動かすだけで避ける。

今の俺の姿は遠吠えする負け犬のように滑稽に見えるだろうな。

さりとして、俺には銃もねえナイフもねえ、あるのは仕込みリストバンドのみ。

「んー……………見間違いのようね……………人間の子供には興味が無いの。とつとと消えなさい」

「あー……………そうするさ……………フランを助けたらなッー！」

仕込みリストバンドの糸を巻き取る。すると、先ほど投げた石が戻ってきて……………

バゴツ！

「……………ッー！」

投げた石には糸を巻きつけといていたのさ。あとは微量ながらも霊力を込めてある。軽く目眩なら起こってるはずだ。

後はフランを抱えてつと。

「よし、逃げる……………ッ!？」

ドゴオン!

「また、外したわ。その子供……………ただの子じや無いわね……………」

「危ねえ……………フラン、大丈夫か？」

「え、ええ……………」

「さ、逃げるぞー！」

と逃げようと思った瞬間、再び弾幕が飛んでくる。辛うじて避けるが元の体よりも反応が遅い。こりゃあ、厳しいな……………

「ねえ、貴方って『碓氷勇人』でしょ？」

「は、はあ!？」

「何言ってるのよ、この子が先生な訳ないじゃない！」

それが碓氷勇人なんすよ……………ここでは言わないが。

「でも、噂だと死んだ魚のような目で、切れ者って聞いてるわ。まさに貴方じゃない」

「H A H A H A H A！俺はまだまだガキだぜ？」

「それにしてもこの状況に対して怖がらないじゃない。普通の子供なら今頃泣いているのに。こんな状況に慣れてるんじゃない？」

「そういえば……………先生と同じようなりストバンドしているし……………糸が出てきたところも一緒……………」

「で、でも、子供じゃないよな？勇人って」

「永遠亭とかの薬でも使って小さくなったんじゃないのかしら？」

「ギクツ……………そ、ソナナワケナイヨ……………」

「そうなの？」

「、これは……………もうダメですね★

「ああ……………永遠亭の薬でこうなったんだよ。正真正銘碓氷勇人だ」

「あら、本当だったの？テキトーに言ったのに」

「え!?!これが子供の先生？」

「なら、お手合わせ……………」 「待て」何かしら？」

「今の俺は銃もナイフもない丸腰の状態だ。それに体も小さいから実力なんてほとんど出せない」

「それで？」

「そんな状態の俺と戦っても楽しくないだろ？だから、元に戻ったら存分に戦ってやる。だから、待ってくれないか？」

「そうね……………」子供のを虐める趣味もないし……………いいわ、待ってあげる。その代わりに戻ったらすぐにここに来るのよ？」

「ああ、約束する」

こうして、フラワーマスターこと風見幽香との戦いを約束によって危機を乗り越えた。

やはり、この体は不便だ。先ほどはあの二人に感謝すると言ったな……………あれは嘘だ。絶対に許すまじ。

後に戻った時にはそんな事を忘れていたのだが、いち早く幽香が駆けつけて戦いになったのは別の話。

第84話 会話の日の人形

目が覚める。軽い吐き気と頭痛がする。周りを見てみれば一面紫色の花弁によって埋め尽くされていた。

ぬう……………何があつたんだ？

えーつと……………

く回想く

「大丈夫か？ フラン、立てるか？」

倒れているフランに声をかけ、手を差し伸べた。もうこの時にはチルノ達は居なかつたけな……………

「う、うん……………」

若干戸惑いながらもその手をつかむ……………そうそう、掴み上げた後フランよりも目

線が低くて軽くシヨックを受けたな。

「ほ、本当に勇人先生なの？」

「ああ、さつき言った通り、薬のせいでのこの有様だ」

「本当に小さいねえ……………」

自分よりも小さい俺が新鮮なのか、頭を撫でるフラン。そんなに頭を撫でるのが楽しいか？

「えへへ、弟ができたみたい」

「ハハ、やっぱり俺って小さいか」

「うん！」

満面の笑みでそう言われてるとなあ……………

「それじゃあ、帰ろう？先生」

「ああ、帰ろうか」

とフランは俺の手を握る。あまりにも自然な動きだったのでそのまま帰るところだった。

「……………なあ、手を繋がないとダメか？」

「え？ いいじゃない！」

「お、おう……………」

結局は繋ぐことになったんだけどな。で、そのまましばらく歩いたら……………

「なあ、こんな所通ったけ？」

そう、一面黄色だった場所から一転、一面紫色の草原と変わっていた。

「う、うーん、迷子かも……………」

「マジか？ そもそも、歩かずとも空を飛んだ方が速かろうに……………」

さっきの幽香との戦いのせいかわたしく眠い。小さい体はすぐ眠くなるからなあ

.....

「ちよつと疲れたかな.....何だかとても.....眠.....いい.....」

バタツ

「先生？先生！.....せい！」

そこで記憶は途切れている。何で倒れたんだ？

「あ、本当に目覚めた。人間の子なのにスーさんの真ん中で目覚めるなんてタフね」

目の先にはフランと同じ金髪のウェーブのかかったショートボブの女の子が。頭に

は赤い蝶リボン、服は赤と黒を基調としている。
んー……………どうなったんだ？

「あー……………ここはどこかな？」

兎に角場所を聞くことにした。はつきり言っただけで今どこであるのか皆目見当もつかない。
い。

「スーさんの咲いているお花畑よ」

「スーさん？」

まさか、俺は釣りバカの世界にでも迷い込んだのか？釣りの仕方知らないぞ？
そんな、アホな事を考えてるのがバレたのか

「スーさんってのは鈴蘭の事よ」

「あぁ……………成る程ね」

何とも子供らしい事だな。

とりあえず、立って周りを確認する。今気づいたのだが彼女はとても小さいようだ。今の状態の俺よりも背が低いからな。

周りを見れば、一面鈴蘭………：そういえば鈴蘭には毒があつたな。確かコンバロトキシンだつたかな？

先程の発言が気になるがこの毒は摂取さえしなければ問題ないはずだ。

「ところで貴方はなんて言うの？」

「確氷勇人だ。貴女は？」

「私はメデイスン・メラニコリー！貴方は何処から来たの？」

「ん？それは向日葵ば………」

今思い出した、フランは!?どこに？

「ふ、フランはどこだ!？」

「あの娘の事？」

と指差す先にはフランが倒れていた。

「ふ、フラン！」

「しっ！今は寝てるのよ？」

「お、おう……………悪い」

それなら良かった。

「で、貴方はこれからどうするの？」

「ああ……………」

今の場所が分からないこの状態では……………元の体なら空を飛んでどうにかなるだろうが……………防衛の手段が無い今、フランを抱えて歩くのは無謀だ。

「うーん、どうしたものか……………ところで君はどこに住んでるんだ？」

質問を質問で返す。テストなら0点の回答だな。

「ここに住んでるわ」

「ここに……?」

いや、ちよつと待て。こんな所に住んでいる、それに格好が里の人達とは違ふし……それに俺の事を「人間の子」と呼んだ。と言うことは……

「君は人間か？」

「人間と一緒にしないでくれる? 私は妖怪よ?」

「はあ………。俺を喰う気は?」

「? 何で貴方を食べないといけないの?」

「何でも無い。さっきの言葉は忘れてくれ」

「変なの。でも、いいわ。どうせなら私とお話しましょ?」

うーん、できればお話の前に人里に戻る方法を教えて欲しいのだが………然りとて、今の俺では彼女に勝てない。ここは素直に言う事を聞くとしよう。

「ああ、いいぞ」

「やったー！スーさん以外とお話するのは久し振りね」

と言うことはずっとここに一人なのか……………

「……………でね、人形の地位向上をしようとしたんだけど閻魔様に『人形が解放されたら、誰が人形を創る？貴方以外の人形が、貴方の小さな心に付いてくると思っています？そう、貴方は少し視野が狭すぎる』って言われちゃって。それだと典型的な人間と同じだって。だから、たまにここから離れて視野を広げようとしてるんだけどよく分からないわ。貴方なら分かる？」

メデイスンの経歴や俺が来る前に起こった異変の事云々……………

メデイスンは元々は捨てられた人形だったらしい。

それにしても閻魔様はこの娘に中々小難しい事を言うんだな……………

あ、ちなみに彼女が積める善行は『人間に対する憎しみの念を消す』らしい。

「俺もよく分からないが……………まあ、よく知らず勝手に人を判断すべきでは無いと言
う事なんだよな？」

「そうなの？」

「君の話を聞くと確かに人間を恨む気持ちも分かる、が、君が人間を判断する材料はその
捨てた人間のみなんだろ？人間が全員その捨てた人間のようなわけが無い。もつと人
間の事を知ってから判断すべきなんじゃ無いかなあ、と思うけど」

「へえ……………貴方、意外と頭いいの？」

「さあな。それにしても人間を恨んでるとか言ってる割には俺を襲わないんだな？」

「だって、知らない人を急に攻撃するのも……………」

「なんだ、分かっているじゃないか」

「そう、なの？」

「ああ」

「そうなんだ……………エへへ」

「こうやって喜ぶ姿は妖怪と言えども普通の子供と同じだな。」

「それじゃあ、私の事は話したんだから今度は貴方の番ね」

「俺か？別段面白い話は無いぞ？」

「……………で、こうなっちゃったと言うわけだ」

「へえ……………先生だったんだ。だから、なんか難しい言葉を使うのね」

「ありや、難しかったか？」

「うーん……………でも面白かったわ」

なら、話した甲斐があつたと言うもんだ。

すると、先程まで寝ていたフランが目を覚ました。

「ふああ……………先生は……………？」

目を擦りながら俺を探すフラン。ここだと言うと目はすぐに開かれ

「先生！起きたんだね！良かった〜……………」

「ハハ……………迷惑かけたな」

「本当だよ！急に倒れるからビックリしたんだから！」

と俺の左腕を掴み胸へと引き寄せる。

「帰りましょ？先生」

すると右腕も引き寄せられる。その方を向けばメデイスンが引っ張っていた。

「ねえ、もうちよつとお話しましょ？勇人”先生”？」

今の構図的には人形を取り合う子供の様なのだが……………2人とも人外である。つまり、2人がその気になれば俺の体は引き裂かれる事は必須である。つ

「先生は私とこれから帰らなきやいけないの！」

「まだ先生と話し足りないのよ！」

「ぐぬぬ！」

や、やめてくれ！このままでは本当に引き裂かれてしまう！

「あら、小さくなってもモテモテね。 勇人」

「え、永琳さん！」

！
な、なんと申す事でしょう。火に油を注ぐ事には定評のある永琳さんじゃないですか

「あ、永琳。また、毒を？」

「ええ、そうよ。まあ、彼の為に必要なのよ」

「そうなの？ならいいわよ」

解毒剤かな？ならありがたいな。永琳さんのお陰か2人の拘束も解けているし。

「もう貴方がここにいるならここで完成させちやいませうかね」

「じゃあ、元に戻るのですか？」

「ええ、それよりも貴方がこの場所に平気でいられる事に疑問があるけど……………これも私の実験の成果かしら？」

「良かった……………これで元の体に……………は？」

今、実験の成果とか言わなかったか？

「はい、この毒でいいのかしら？」

「ええ、これで完成するわ。ちよつと待ってなさい」

「それじゃあ、もう少しお話できるね！」

「うう……………」

なんとまあ正反対の反応をするなこの2人は。

「それにしても永琳さんと知り合いとはな」

「永琳には毒をあげてるの」

「ふーん……………ふあっ!?毒をあげる?!?!」

「うん、私はね『毒を操る程度の能力』を持つてるの。後ねここはスーさんの毒が蔓延してて普通の人間なら死んじやうはずだけど、勇人先生なら大丈夫ね」

「いやいや、勇人先生は大丈夫じゃないです。毒!?じゃあ倒れた原因は明々白々じゃねえか!毒にやられてんじやん!」

「そうよ、彼は私のじつk……………自信作の薬によつて色んな耐性がついているから」

「言い直しても滲み出るマツドな医者臭は消せてない。人の体に何してくれとんじや。」

「それなら、鈴仙の薬の耐性がついてたら良かったんですけどね」

「そうなんだけど、ウドンゲ意外と成長してるのよ。よし、できたわ。ほら、これを飲ん

だら元の体に元どおりよ」

「やっと思れるのだな……………」

永琳さんから試験管を受け取り一気に飲み干す。

「うえ……………マズッ……………」

”良薬は口に苦し”よ。文句なんか言わないの」

と体から煙が……………出て……………

PON!

「よし、これで戻った……………はず……………だが?」

「あれ?先生小さいままだよ?」

「あら、効かなかった?」

え?え?ええ!?元に戻ってない!?ありやりや、ナンデ!?

「……………鈴仙の薬は相当強力だったのね。いつの間にもここまで上達して……………師匠としては鼻が高いわね」

「そんな事で弟子に感心しないでください……………」

ああ、折角元に戻れると思ったのに……………

「私の毒役に立たなかった？」

「そんな事は無いわ。今回の事でさっきの毒じゃダメだって分かったんですもの。大きな進歩よ。また、別の毒を頂戴ね？」

「はいー！」

「そうなればいつまでもここにいられないな……………妖怪に襲われたりでもしたら……………どうすることもできない」

「なら、早く帰りましょう？」

「おう」

帰ろうとしたが振り返るとメデイスンが寂しそうに俺の事を見つめていた。

俺はメデイスンの元に駆け寄り、頭を撫でた。

「体が元に戻ったら、ここにまた訪れてもいいか？」

「え？う、うん！また、お話しよう！」

「ああ、次会う時は元の体に驚くなよ？」

「うん！楽しみにしてるね！」

こうして、鈴蘭の咲き誇る丘を後にした。

帰ったら帰ったで、早苗が泣きながら抱きついて来て

「何時まで遊んでたんですか！心配したんですよ!？」

と言われた。完全に子供扱いである。ご飯も用意され、さらにはお風呂まで一緒に入ろうとして来たが流石にこれは拒否した。

「もう、これでいつ子供ができて大丈夫ですね……」

とか言ってた気がするが多分空耳だろう。

第85話 過労の日の少年

なんという事だ………俺は軽く絶望した。

釈明する事は出来ない失態である。

そもそも、俺が悪いのではなく環境が悪いんだ。環境が。だいたい俺のような真面目な子が初っ端からやかすような事に追い込められたんだから、その環境の酷さがわかる。あ？お前が真面目じゃないだろ？細かい事はいいんだよ。

まあ、真面目だろうがじゃないだろうが緊急事態である。

その緊急事態に気づいたのは、つい先刻の事だ。

今夜は宿題の丸つけと作成の日である。

机の上にはチルノ達などの人外用の宿題や里人用の宿題が山をなし、半分も終わっていない。宿題の問題は粗方考えたが人数分の作成を終えていない。

時刻はすでに夜11時。いや、朝までまだ10時間もあるじゃないか。俺は漸く半分

終えたところで横になり溜息をついて天井を眺めた。
すると、意識は徐々に薄くなり……………

「……………はっ！」

いかんいかん、寝てる場合じゃなかった！

時計に目をやり、時間を確認した瞬間戦慄した。

しまった！

時計は無慈悲にも5時を示していた。

慌ててさらに2度確認するが時間が戻るわけもなく、刻々と時は過ぎていく。今日の授業は8時からなので単純計算で残り3時間。

「マジかよ……………寝過ぐしちまった……………」

まさに血を吐くような思いで言葉が漏れる。

昨日の朝からずっとやってたんだ。この小さい体でも鞭打って、早苗にも時々手伝ってもらいながら。しかし、2日サボったツケを1日で取り返すのは大変である。時間感覚が狂い、食事したかどうかまであやふやになるような状態で必死に丸つけや作成をしているうちに夜の11時……。挙げ句の果てには寝過ぎ朝の5時。

時計を一瞥した後、ギリギリまで粘ろう、いや生徒達に謝って明日にしようかと迷いながら右往左往していると朝日が窓から漏れる。

なんと気持ちのいい朝……。なんて思うわけもなく、眼前の宿題の山を睨みつけて、零した。

「しょうがねえ……………」

絶望した時にはいつそ笑みが漏れると言うがまさにその通りの状態となり

「やってやろうじゃねえカアア！」

言うまでもない事だが、間に合う事はなかった。

補足をしよう。

俺は体が小さくなってから既に一週間過ぎてている。そう、一週間過ぎてている。大事な事なので二回言った。

本来なら俺の体は既に元に戻っているはずである。実際に一週間経ったら永遠亭に行き永琳さんから薬を貰ったのだ。しかし、その薬は効かなかった。

「あら、本当に強力ね、この薬……………これはその薬を解析しないと解毒剤は作れないわ」

その声を聞いた途端俺は気絶したと言う。その間にも鈴仙に会う事が無かったのが幸いか……………

まあ、永琳さんの言葉を要約すれば鈴仙からどのように薬を作ったのか聞けという話である。

体は元に戻らない。しかし、仕事は待つてくれないのである。戻らないのならその状態で仕事をするしかないと思つた矢先軽く熱が出て2日ほど寝たきりだったのだ。

早苗が看病してくれたので良かったもので良かったもの……………ご覧のように仕事が溜まったわ

けである。

さて、再び宿題の丸つけに取りかかれれば、いつもながら回答は色々である。答えは1つしか無いのに。

単純な計算ミスや、公式をしつかり覚えていない、そもそも解く気がない、あたいつたらサイキョーね!……などなど。

いくら大きな里だと言えども現代の日本などに比べれば過疎に近い地域のはずなのに、どこにこれだけの子供がいるのか疑いたくなる。妖怪も混じってはいるが………それでもどこから出てくるのだ?と変な妄想をしてしまう始末である。

それくらいに丸つけの量が多いのだ。

その多い生徒を俺と慧音さんの2人だけで対処している。

無茶だと思うだろ?

無茶なんだよ。

その無茶をどうにかして切り回しているのが今の寺子屋の現状である。

別に寺子屋が人気になっている事を恨んではない。寧ろ、喜ばしい事である。俺が先生として入ってきたばかりの時よりも生徒は増え素直に誇らしい。

しかし、今の体では厳しのだ。それでもやらなくてもならない。

まあ、それが世の中だと言われればそうなのだろう。
そう考えながら丸つけをする。

マルマルマルマルマルマルマル……いや、ここはバツ。マルマルマルマルマルマル……

マルマルマルマルマルマル……

「勇人さん、何をブツブツ言ってるのですか。もう時間ですよ」

不意に台所から早苗の声が出た。いつの間に……つてもう7時か。それにしても自然に俺の家に入る辺りもう当たり前のようになっていた。実際に朝ごはんを作ってくれるし、寺子屋に連れて行ってくれてありがたい話だが……

「ああ、いつもありがとな」

と言い、リビングに行けば朝ごはんが準備されていた。

「お仕事も大切ですけど体も大切にしてくださいね。体が小さい上に病み上がりなんですから」

「んー……………しかしだな、やらないと生徒達が困るし何よりも中途半端にしたく無いからな……………」

こればかりは自分の性分が許さないのだ。何事もやり切る。たとえ不恰好でもやり切りたいのが自分の性分なのだ。

「そういうところは勇人さんの美点ですが……………体が壊れてしまつては本末転倒ですよ？」

「ハハ……………そうだな、気をつけるよ」

「そうしてくださいね。あ、ほっぺにご飯粒が」

と俺の頬からご飯粒をとり食べる早苗。はたから見れば親と子もしくは年の離れた姉弟か。

朝ごはんを食べ終え、支度し早苗と共に寺子屋へ向かう。丸つけを終える事は出来なかつた。

疲れた……………

職員室の机の上で突っ伏して時計を見れば3時過ぎ。あと一コマの授業がひかえて
いる。

今日は生徒への謝罪から始まる授業だった。しかし、見た目というのは大事なもので
ある。この状態になって授業をするとそれを痛感せざるおえない。

この姿だと中々生徒は言う事を聞かないのだ。それ故に労力の量は増え、比例するか
のように疲労も溜まる。

労力 ($\parallel x$) と疲労 ($\parallel y$) の関係を式にするなら $y \parallel x$ か? いや、今回は通常の二
倍ぐらい疲れがたまっているから $y \parallel 2x$ か。いや、そもそも今日は朝から疲労が溜
まっていたから、朝の分 ($\parallel b$) を考慮すると…………… $y \parallel 2x + b$ か。あ、労力がマ

イナスになる事は無いから x の範囲は $x > 0$ か。だと…………… $y \parallel 2x + b$ ($x > 0$) だな。

「さつきから君は何をブツブツと呟いているんだ？」

ふいに声がかげられる。首だけ動かして見ると慧音さんがいた。

「自分の疲労の公式を立てたところですよ……………俺の疲労は $y \parallel 2x + b$ ($x > 0$)で溜まっていくんですよ……………」

「そ、そうか……………すまないな。いつも無理をさせて……………」

「いえ、元凶は蓬莱ニートですので」

「無遠慮に人を貶す辺り相当疲れているようだな」

と慧音さんのは俺の机の上に湯呑みを置く。

ありがたくそれを頂戴し、一口飲む。

緑茶の香りが疲労した脳をリラックスさせる。早苗や妖夢はお茶を淹れるのが上手だが、慧音さんもとても上手い。自分ではどうにも美味しくならない。

「まあ、君の授業はとても楽しいと評判だからな。それに何か新しい授業を始めたそうじゃないか」

「ええ、理科という授業を……………」

とりあえず、電気についてから始めた。外の世界から流れ着いたガラクタから手回し発電機と銅線、豆電球を引っ張り出し実際に実験して見せた。

ここは電気を使う文化は無いのでみんな興味津々にみていた。

「今日も後1つだ。頑張ってくれ」

「……………はい」

残りの緑茶を一息に飲み干して、俺は授業へと向かった。

教材を両手で抱え教室へと向かう。

「こんにちはは勇人先生」

と礼儀正しく大妖精が。

「今日は何をするのー？」

と両手を広げているルーミア。何故あのポーズをとるのかは謎である。

「まだ小さいままなんですわね……………」

と憐れみの目で見ると見るミスティア。

「私達じゃどうしようもないしね……………」

と残念そうに語るリグル。彼女はどうか解決案を考えてくれてたようだ。ありがたい話である。

「紫しやまもお気の毒ねと言ってましたよ」

とやや舌足らずの橙。多分、紫さんに関しては気の毒という思いよりも面白がっていると言った方が正しいだろう。

「別にこのままでもいいんじゃない？面白そうだし」

とみんなが気遣ってくれる中空気の読めない発言をするチルノ。

「ダメツ！絶ツツ対にダメ！戻ってもらわないと！」

と全力でチルノの発言を否定してくれるフラン。

「えー、可愛いからこのままでもいいと思うよ」

と無意識に俺のプライドを破壊するこいし。

……………と彼女らの教師を勤めているわけだ。

とは言っても彼女らは皆俺よりも圧倒的に年上だから驚きだ。そもそも彼女らは人間じゃないが。

このような癖の強い彼女らに授業を始めるのだった。ここだけ疲労の公式を $y \parallel 3$
 $x + b$ ($x > 0$) にしておくか。

—————

夕日が空に映える。

景色が示すようにもう夕方だ。先程の2つの疲労の公式通りに俺の疲労は相当な量と化した。

今は妖怪の山の八合目辺り。視界には赤い夕日と緑の森が広がっている。そう、今は守谷神社にいる。

八坂神奈子様と洩矢諏訪子様を祭神とする神社で早苗が風祝をしている。山にある神社ではあるが境内は広く本殿も大きい。俺もかつてお世話になった。

何故そこにいるのかと言うと家と寺子屋の移動は早苗が俺を抱えて行うため早苗の存在が今は必要不可欠であるが、その途中で早苗に少々用事があると言うことでここに寄った次第である。

「久しぶりだね、見ない間にすっかり変わっちゃって」

と振り返ればその祭神である諏訪子様がいた。

「お久しぶりです。が、この体は薬によって……………」

「はいはい、分かっているさ。早苗から聞いたよ」

「さいですか」

「しつかし、小さくなっても相変わらず忙しいみたいだね」

「ええ、お陰で寺子屋は大人気。ほぼ毎日授業ですよ」

「ま、それが君らしいといえれば君らしいね」

「諏訪子様も相変わらずのようですが」

「まあまあだね。人間とは違って人生が長いからねえ。気楽にやつてるよ。と言うわけで早苗とは結婚しないのか？」

「まだ、そんな歳じゃないですよ」

「ありや？えらく冷静に返すねえ。だとしても今の早苗はもう通い妻状態じゃないか。いつそ事実婚にするか？」

「ふあ……………そんな事を簡単に言わないで……………くださいよ」

「君も罪な男だねえ……………ま、兎に角頑張りたまえ」

「ふあい……………」

諏訪子様の言葉も徐々に頭に入らなくなっていくほど眠くなってきた。早苗まだかなあ……………

「お待たせしました！ 勇人さ……ん？」

「おお、早苗。やつと戻ってきたか。彼なら寝ちやったよ」

「すみません………おんぶしてもらって………」

「いや、いいさ。こういうのも新鮮だしね」

「幸せそうに寝てますねえ………」

「そうだね。早苗に子供ができればこんな事も出来るんだろうな」

「……ツ／＼!? こ、子供!?! ゆ、勇人さんとの子供!?!」

「やっぱり勇人一択なんだね………」

「ありがとな………早苗………」

次回

元凶現る

第86話 解決の日の月兔

忙しい日々の中で急に休日が来ると何をすればいいのか分からない、何もしなくてもいいのか、と所謂ワーカホリック日本語で言えば仕事中毒という言葉がある。その名の通り仕事に熱中し過ぎるあまりに自分の生活に顧みらない状態である。

日本の社会問題の1つだとかよく言われるものであるが………どうやら俺も軽くその状態らしい。

確かにここ最近の寺子屋での仕事は忙しい。前は寝ない日もぎらにあつたが流石に今の体でオールナイトは厳しい。しかし、それでも俺の疲労は解消されず蓄積しているようで慧音さんからは

「大丈夫か？ 顔色がだいぶ悪いぞ？」

と言われ即休日を言い渡されたばかりである。

そういう事なので休日だから何をしようかと考えたのだが………どうにも思いつかないのだ。睡眠なら昨日早寝し、遅起きしたので十分にとつた。問題はこれからの過

ごし方であるが……………読書、ランニング……………

持参した本は全て読んでしまっており、既に何回か読み直している。紅魔館の図書館に借りに行くという手があるが今の状態では紅魔館にまで行けやしない。よって、読書は却下。

ランニングは……………これは論外だな。この体で妖怪の山を走る事なんて自殺行為同然だ。よって、これも却下。

なら、部屋の掃除は……………早苗がしてくれてるのでこちらがする余地もない。

無論、休日は今日のみである。しかし、余裕のある日がいっ次が来るかは分からない。こういう日を慌てて過ごすなどは愚の骨頂である。自分の部屋で、コーヒーを味わう時間があってもいいだろう。……………今はココアだが。味覚も子供になってるらしい。

早苗は何やら博麗の方で用事があるらしいので来ていない。妖夢は妖忌さんの修行で来れない。つまりは1人だ。

ひと気のない部屋で椅子に腰を下ろし、のんびりと一息ついたところで、いきなり玄関から戸を叩く音が響いた。ため息交じりに立ち上がり、カップを置き玄関へと向かう。

だいたいこの時間に誰だ？可能性としては文の可能性が高い。

玄関に着き、戸に手をかけ開ける。

「すまんが、新聞は必要無いぞ」

「おはようございます、勇人さん」

バタン

俺は相当疲れているらしい。俺の家を知らないはずの鈴仙が見えたんだからな。やはり、休暇は大事なようだ。

だと、あの幻覚は誰だ？確認の為にもう一度戸を開ける。

「おはようございます、勇人さん」

「お、おはよう、鈴仙」

バタン

熟睡しているところを叩き起こされた衝撃である。リアルで鈴仙だった……………

しかし、いくら衝撃を受けようが幻想郷の洗礼を受けた俺が慌てる事は無い。このくらしい事で動揺はせん。

だからと言って、これっぽっちもこの状況を変える事は無いが。

俺は向きを180度変え、飲み残したココアを取りに行こうとした。

「おはようございます、勇人さん」

「ああ、おはよう、鈴仙」

「朝ごはんは食べましたか？」

「一応、ココアをだな……………」

「それだと体に悪いです！私が作りましょう！」

「そうか、ありがと……………な……………鈴仙!？」

え?え?確かに外にいて戸は閉めたはず……………どうやって中に入った!?

体の幼児退行。

現実ではとても考えにくい事だ。しかし、ここは幻想郷。不可能では無い。そう、気が付けば鈴仙が部屋に入るのも幻想郷ならあり得る話だ。

鈴仙は台所で朝食を作ってくれている。

しかし、それが少々問題だ。彼女の事だから何やらかの薬が入っている可能性が無いとは言い切れない。されとて、確認する手立てがあるわけでも無い。

そんな事を考えればブレザー姿が目に入る。

「はい、どうぞ」

「あ、ありがとう……………」

机の上にはご飯と味噌汁と焼き魚。見た目からして問題もない。食材も全て俺の家にあつたものだ。だが、見た目で薬が入っているかどうかは分からない。

とりあえず、一番薬が入っている可能性のある味噌汁から俺は手をつけた。

「……………美味しい」

「フフ、そうですか？」

どうにも俺の周りの女性陣は家事が上手だ。俺とて最低限の事は出来るがここまで美味しくは出来ない。

味からして薬の入っている感じはしない。俺とて体は色々な耐性がついている（永琳さん談）らしいので少量なら効かないだろう。

だから、鈴仙の作った朝食をありがたくいただく………と思うのだが………
目の前には両手で頬杖をし、こちらをじつと見る紅い眼。その目はどこか恍惚の感情が含まれている。

「……………なあ、俺の顔に何か付いているか？」

「いえ、付いてませんよ」

「そ、そうか……………」

何というか……………じつと見られると落ち着かない。それに鈴仙には聞かないといけない事がある。

言うまでもないが幼児退化化させる薬の件についてだ。いい加減に元の体に戻らな

いと迷惑がかかってしまう（現在もだが）。

「れ、鈴仙、とりあえず朝食ありがとな。感謝するよ」

「礼には及びませんよ。好きでやっていますから……………それに毎日作って欲しいなら私は全然構いませんよ……………／＼」

「お、おう……………考えておくよ……………ところで、話が変わるのだが……………」
「何です？」

「そ、その……………だな、この体にさせたあの薬の事なのだが……………」

「あ！そうでした！解毒剤ですね？」

「え？」

「勇人さんが小さくなってしまったというお話を聞いて解毒剤を必死に作ってました！」

「おお！そうか！なら早速……………」

「でも、この解毒剤作るの大変だったんですね……………」

「ん？」

「最近はずっと寝られない日も多かったです……………」

「そ、そうか……………それは大変だったな……………」

「なのに師匠は相変わらず人使いが荒いです……………」

「……………」

「そんな中でこの薬を完成させたんですよ……………」

「……………何をして欲しいんだ？」

「今日1日私に甘えてください！」

「は？」

何ともマヌケな声が出たと思う。しかし、この兎さんは何を申すのか？

「ですから、私に甘えてください！」

「しかし……………」

「聞きました。早苗がずっと勇人さんの世話をしていた事を……………肩車とか抱っことか挙げ句の果てには膝の上に座らせたりとか……………羨ましい！」

「だがな……………」

「そして、今日は勇人さん1日暇なのでしょう？いいじゃないですか！」

しかし、人に甘えるというのは……………気が引けるといふか、何というか……………慣

れてない？

「たまには人に甘える事を覚えた方がいいですよ？」

「だか……………」

「大丈夫です！いつも頑張ってるのですから甘えたってバチは当たりません。さあ、永遠亭へ行きましょう！」

「そうだな、言葉に甘え……………永遠亭？」

気づいた時には既に鈴仙に抱きかかえられていた。

—————

ついに……………ついに、無傷の状態で永遠亭に来た……………

永遠亭に来て早々そんな事を考えてしまう。しかし、過去永遠亭を訪れてまともな状態で来た事が無いのだ。

様々な怪我を負いこの永遠亭に来、永琳さんに採血または訳のわからない薬を投与されたりと散々だ。

とつまらない事を考えていたら永琳亭の中に入っていた。無論、まだ鈴仙の肩の上だ
が。

「あら、また怪我でもしたのかしら？」

「いえ、今回は……………今回こそは怪我以外のみの用件です」

永琳さんの第一声がアレなのだからいかに俺が怪我してたのかが分かる。もう少し自分の体を労わるようにしましょう。

「あれ？鈴仙から解毒剤を貰ってないのかしら？」

「その為にここに来たんです」

「ふーん……………ああ、成る程。結婚するのね？」

いきなりぶつ飛んだ事をこの医者は言いやがった。
どの過程を踏んだらそうなるのだ。

「そういう事では無いです」

「あら、てつきりウドングに解毒剤を渡して欲しいのなら条件として結婚を提示されたかと……………」

「だいたい当たってます」

「ま、そんな事はいいわ」

そんな事という言葉で片付けられたよ、チクシヨー。

とりあえず、俺は鈴仙に降ろしてもらった。

「あ、勇人じゃん、元気か？」

「この体を見てそう思えるのか君は？」

何処からともなく全ての原因の輝夜が現れた。もう、こいつのせいでどれだけ苦労し

てる事か……………！」

「フツ、元に戻った時は覚えとけよ！」

「はいはい、怖い怖い」

「そう言いながら頭を撫でるんじゃねえ！」

「いいじゃんいいじゃん、減るもんじゃないし」

「本当に覚えとけよ……………ツ！」

「で、鈴仙は勇人を連れて来てどうするつもりなの？まさか、食べる気？」

食べるの意味は深くは聞かない。ていうか聞きたくない。

「そ、そんな訳無いじゃないですか！……………確かに食べちやいたいくらいには可愛いんですけど……………す、少し勇人さんに構ってもらっただけです！」

「……………そ、そう。それじゃあ勇人頑張ってね〜」

頑張っつてねって何をだよ。

「と、とりあえず私の部屋に行きましょう！」

「え、ちよつ……………」

—————

「はああ……………可愛いですね〜」

今、ただ鈴仙の膝の上に乗せられひたすら頭を撫でられている。気持ちよくなんないから……………別に気持ちよくなんか……………

「こんな見た目なんですから本当の昔の勇人さんは性格も可愛かったんでしょうね」

「まさか、ただのクソガキだったと思うぞ」

「ええ、そんな訳無いですよ」

小学校の時から可愛げが無いとか何を考えてるのか分からないとか色々と言われた事があるが可愛いとか言われた事がない。

小学校以前は………んー………何かあつたけ？

怪訝な顔をする俺に

「どうしたんですか？」

「いやー、昔の事を思い出そうとしたんだけど………中々思い出せなくて」

「そう時もありますよ。でも、そんな顔したら可愛い顔が台無しですよ！」

「うん、その言葉は男に送る言葉じゃない」

可愛い可愛いとか言つてたら、もう泣くぞ!?

「ふあく、もう眠い………」

「眠いんですか？なら、私の膝を枕に」

「それは………悪………いよ」

「今日は私に甘えると言う約束ですから、存分に甘えちゃってください」

「……………そうする」

あつという間に意識は深い闇へと落ちた。

—————

く後日談く

鈴仙はちゃんと約束を果たし、解毒剤を渡してくれて元に戻った。その時に何人か残念がったとか無かったとか。

後、寺子屋は週に2日は休みが取れるように調整したらと提言した結果、週2日の休みを手にする事ができた。

第9章 教師、出張也

第87話 災害の日の青年

妖怪の山の遙か上空に、古くから『天界』と呼ばれる世界がある。

そこは修行を積み欲を捨てた天人という者たちが住む所らしい。危険もなくただ歌って、踊って、遊んだだけの世界。理想的な世界のようにも見える。しかし、俺は理想を目指しその過程で様々な苦労などを経験してこそ生き甲斐を感じるのであつて大袈裟に言えば理想は叶わなくても良いのである。そのような世界に住みたいとは思わない。無論、叶う方がいいと思うが。

まあ、そんな世界に住む人たちはきつと俺には想像すらできないような苦労をしてきた人たちのだろう。

天界の事を考え、空を見上げててもその世界は見えず、ただ曇り空が広がるのみ。雨が降りそうだな………洗濯物を取り込まないとな。

たまにこうやって空を見上げて色々考える時、ふと思ひ出す名文がある。

”運命は神が考えるものだ。人間は人間らしく働けばそれで結構だ”

そう記したのは皆ぞ知る、文豪、夏目漱石である。

この言葉を教えてくれたのは熱心な文学青年であった。彼は典型的な文学オタクだったが特に夏目漱石を心酔し、周りからは少々変人扱いを受けていた。

もつとも、俺こと碓氷勇人も人の事を言えず、人を寄せ付けないオーラから変人扱いを受けていた。しかし、中身は立派な現代人であるし、『孤高の存在』とか言つて強がつてみても人と付き合うのが苦手——所謂コミュ障気味の青年に過ぎない。まあ、そのコミュ障は解消されたと思つているが。

当たり前だが、夏目漱石とはなんの縁もなく、日々教師として仕事に勤しむ1人の青年である。

ふと、後ろに着地をした音がする。

「おはようございませす、先生。例の件の答えを聞きに来ました」

「はあ……………空はこんなにも青いのに」

「いえ、今日は曇りです。午後からは雨が降ります」

「……………洗濯物を取り込んで正解、か。天気予報どうも」

「どういたしまして。では、答えを……………」

「それは最初言った時と変わりません」

「そうですか……………流れ的にいけると思ったのですが……………」

「どういう流れなのかは聞かないのでお引き取りを……………」

「残念です。貴方は義理堅いお方で受けた恩を仇で返さないような人と思ってたのですが」

「うっ……………」

普段ならとつくに寺子屋に行き授業をしているはずの俺が今こうして空を見てくだらない事を考える事が出来るぐらいに暇を手に入れたのは後ろにいるであろう女性に出会ったせい、だと俺は思っている。

「確かにその事に関しては感謝しているが……………」

「感謝しているのなら行動で示して欲しいものです」

言い返す言葉が浮かばないのでとりあえず振り向きその女性と対する。

全体的な特徴としてはその圧倒的なフリル。中でも彼女の特徴となるのはその帽子

と羽衣。それはどっかの深海魚を彷彿とさせる。

また、非常に背が高く日本男児である俺と変わらない、もしくは少々彼女の方が高い。そんなでもって鈴仙曰く『何かパツツンパツツン』と言うようにスタイルもよろしと。

そんな彼女は竜神からの重要な言葉を人間に伝える役目を持つ。そう、彼女の名は………名は………

「永江衣玖です。まだ、私の名前を覚えてくださってないのですね」

「そんなわけないさ、パツと出なかっただけ」

「では今ので覚えましたね。それでは貴方は恩を仇で返すような悪童なんでしょうか？」

「だから………別の方法なら考えるのだが、それだけは許可できん」

「たかが”総領娘様の教師役”をしてもらっただけですよ」

俺は彼女の事が苦手なのかもしれない。

事の発端はあの日からだった。

俺が週2の休日を提案し取り入れられての初の休暇を迎えた。生徒達には課題を出さず丸2日休める状態であつた。

慧音さんもやりたい事があるらしく、この制度は早速役に立ったというわけだ。現代世界では当たり前のことなのだが。

無論、俺の休日の過ごし方は決まっている。足りない睡眠時間を補充するのだ。早起きしなくて良いという至福の2日間を満喫するとしよう。

しかし、そのような日に限って朝早くに来訪者が来るのである。玄関から戸を叩く恨めしい音が響く。

戸を叩く場合は早苗と妖夢の線は無い。2人とも勝手にというかなぜかうちの鍵を持つているのだ。つまり、戸を叩かず勝手に家に入つて来る。別に盗みをするとは思っていないので咎めやしないが。

後の可能性としたら鈴仙、もしくは射命丸文である。前者はあまり無いので無いと考え、後者は………かなり頻繁にある。

新聞をとらないかとか、取材とか………俺には新聞を読む習慣が無ければ、誇張に表現される新聞に載ろうとも思わない。だから、いつもお引き取りを願っている（とうか無視している）。

しかし、その日は非常に疲れていたののでボケていたのだろう。わざわざ起き上がり、全くもって機能しない思考回路を引っさげて玄關に向かったのだ。

—————

久し振りの下界。

少し時が経ったからと言っても下界が大きく変わっていません。それは天界にも言

えますが。

私は、相変わらず竜宮の使いとして人々に龍神様からの言葉を伝えつつ、総領娘様のお目付役も勝手ながらにやらせてもらっています。

しかし、総領娘様のわがままには最近目に余るものがあります。私では手に負えないくらいにわがままの度は高まっています。その尻拭いをしているのは誰が総領娘様には考えて欲しいものです。

誰か総領娘様の教育者となるような人がいませんでしょうか……

「……………という訳で地震が起きます」

「あやや、これまた急にですね。いつでしょうか？規模は？」

「それは分かりません。ので備えは早めに」

「え、あ、ちよつと！」

と呼び止められますが構っている暇はありません。なんせ、幻想郷中に伝えなくてはいけませんから。一人一人に詳しく説明していたらあつという間に地震が起きてしまいます。

やはり、下界ではあまり変わっていませんね。こっちは地震の事を伝えようとしているのに何故か戦闘に発展させようとするものですから苦勞が絶えません。

総領娘様に

「説明が端的すぎるのよ。もうちよつと説明したらいいのに」

とか言われましたが十分な説明だと思っっているのですが……………

とか考えてますと妖怪の山に一軒の家が見えます。あんな所に家なんてあったでしょうか？もしかしたら妖怪が建てたかもしれない。念のためにこの家の方にも伝えるとしましょう。

ら
改めて家に近づくとごく普通の家です。玄関の戸を軽く叩くと、暫くの間があつてか

「……………どちら様ですか」

といかにも寝起きですというような人間が出てきました……………人間!?ここは妖怪の山のはず……………人が住むような場所じゃないです。

とは言ってもどこに住むのかは私があーだこーだ言う資格は無いので地震の事を伝えてしましましょう。

「私は竜宮の使いの永江衣玖です。近々地震が起きますのでお知らせを」

と彼に目をやると目を瞑って寝てしまっているようです。他人事ですが大丈夫なのでしょいか?

「……………はっ、すまない。少し意識が飛んでいた。なんて言った?」

「だから、近々地震が起きますので備えといってください」

「地震?幻想郷でもあるんだ……………」

「そりゃあ、ありますよ。ところで貴方は人間なのでしょうか?」

「ああ、つまり人間だよ」

彼の渾身のボケでしようが流れからしてつつこんでも得るものは無いのでスルーさせて貰います。

「なら、何故この妖怪の山に？失礼ですが貴方みたいな腑抜けた人間がここには自殺行為同然だと……………」

これは素直な疑問です。いくらマヌケだとしても妖怪の山に住もうなどとは思いません。ただの人間がこの山で生きていけるはずが無いのです。

「自分でつまらんと言ったが腑抜けたと言われるとはなあ……………」

と頭を搔く姿はやはり普通の青年です。

「……………」

ふと彼は黙りこちらを凝視し始めました。その目つきはお世辞にもいいとは言えず、周りからは良い印象を与えないでしょう。

顔に何か付いているなら口で伝えて欲しいものです。

「……………はっ、すまんすまん、余りにも綺麗だからつい見とれてたよ」
「き、きれっ!？」

な、何を言い出すのでしょいか!? 空気を読めるので相手の下心も丸分かりなのですが彼にはそういった下心が全く無かった。だから、つい慌ててしまった。

「冗談だ、軽く意識が飛んでただけだ。最近はずいぶん忙しかったからな。まさか本気にしてないだろう?」

「あ、当たり前です! 伝えることは伝えましたからねっ!」

空気を読む私がまるで見透かされているかのように彼は薄く笑っています。この人は一体々……………

顔が熱くなるのを感じながら逃げないようにその場から飛び立ちました。

「ふあ……………眠っ……………」

あれからというもの、彼にしてやれたままでは何か癩なのでもう一度会う事にしてみました。

地震自体そこまで規模は大きくもなく、事前に伝えた事もあつてか被害もそこまで無いようでした。

そして、妖怪の山にある一軒家に訪れると、戸の鍵は開いており叩いても反応しない

ので勝手に上がらせて貰いました。

「ごめんください……………つて、これは……………」

中は地震の影響か本やらタンスやらが散乱していました。私の話を聞いてたのでしょうか……………」

この考えは的中してたようで散らかった部屋の中に埋もれて白目剥いて倒れている彼を見つけたのでした。

「何をしているのですか!?!私は伝えましたよね!?!そのままだといつ妖怪に襲われてもおかしく無かつたんですよ!?!」

「……………そ、そうか。確かに助かったが、しかし、勝手にうちに入ってくるのもどうかと……………」

「それは関係ありません!」

「お、おお……………だが、俺の記憶には君の事も、君が伝えにきたという事も無いぞ?そ

「そもそも君は誰だ？」

「な……………私は確かに貴方に伝えましたよ!!」

「そ、そうなのか……………俺、朝はどーにも弱くて……………」

私は珍しく怒っていたと思います。そして、同時に彼は総領娘様と同じく誰かがいないとダメなタイプです。とその時はそう思っていました。

「ま、落ち着いて。兎に角自己紹介をしよう、な？」

「わ、分かりました……………私も少し熱くなりすぎました」

「俺は碓氷勇人だ。教師をやっている」

「2度目自己紹介ですが竜宮の使いの永江衣玖です」

「リュウグウノツカイ？」

「いえ、竜宮の使いです。竜神様の言葉を聞き人々に伝える役目のことです」

「よく俺が違うイメージしているのが分かったね」

「貴方のイントネーションが明らかに違ったので」

しかし、こうしてすっかり目が覚めた状態でも彼は目つきは悪いです。しかし、あの

時とは違い見透かされている感じはせずいたって普通の青年という印象です。では、あの時の敗北感は？

しかし、そんな疑問もこの後の彼の本当の姿を見る事で解決するのです。

第88話 迷惑な日の天人

今日も天気は曇り空、雨は降ってはいけません。
ジメジメした空気がより一層気分を下げます。

「失礼だと思うが、竜宮の使いさんはいつまでここに居るつもりで?」

頭に大きなコブを作って平然と言うその姿は些か滑稽なものです。

時折、そのコブに触っては「痛っ」と呟き涙目になります。私としてはそのコブをよりも散らかった部屋に気をかけた方がいいと思うのですが。

「そうですね、貴方に幾つか質問をしてから帰らせて貰います」

「んー……………俺の事を知っても何の役にも立ちやせんと思うが、いいぞ」

「では、まずなんでここに住んでるのですか?」

なんでそんな事を聞くのか？とでも言いたげな目をする彼から出た言葉は

「んー……………特に理由は無いな……………そもそも、どこかに住むのに規定とかあるのか？」

質問の答えとしては質問で返しているのでもいいとは言えませんが言っていることは確かにそうです。しかし、紅白の巫女や白黒の魔法使いならまだここに住むのは分かりませんがただの青年がここに住むのは……………

「別に防衛手段はあるんだから問題無いと思うが」

と彼は懐から何やら見慣れない黒い何かを取り出します。飛び道具でしょうか？

「で、他に質問は？無いなら帰ってくれ。片付けをしなきゃならないからな」
「なら手伝いましょう」

この言葉に彼は驚いた様だが一番驚いたのは私自身である。

基本的に私は他の人の行動にあまり興味を持たない。しかし、彼の態度、竜宮の使いである私と面して物怖じするどころかいたって普通の態度、この妖怪の巢窟の山に住んでいるというのに余裕な態度。彼の死んだ目の奥には何が宿っているのか。珍しくも私はそんな事に興味をひかれてしまったのです。

「いや、悪いし手伝わなk「手伝いましょう」……………言葉に甘えさせて貰います……………」

なぜここの女性は強引なのか。物好きもいるもんだなあ。とぼやく彼。きっと、彼が好きになった人は苦勞するでしょう。

しかし、この後私は彼にとっても予想だにできなかった事態に遭遇します。

まあ、私にとっては転機の一事であります。

片付けが一通り終わり一息ついている時でした。

碓氷さんにお茶と菓子類を出して貰いありがたく頂戴している時に玄関から大声が聞こえたのです。

「勇人ー」と叫ぶ声が聞こえ、続いて戸をバンバンと叩く音が響きます。

「ちよつと、そんなに叩くと……………」

と、言い終わらぬうちにバターンと戸が派手に外れて1人の影が入り込みます。

「ああ……………」

額に手をやる彼、駆け寄るのは人里に住む半妖です。

「ど、どうしたんですか慧音さん。そんなに慌てて」

「勇人、大変だ。すぐに来てくれ！」

常日頃、冷静沈着な半妖が珍しくも慌てふためきながら叫びました。

「寺子屋が……………」

彼の死んだ目がこの時は見開かれ、絶句しました。

—————

「寺子屋」に移動するとそこには崩壊した瓦礫と化してました。

半妖——上白沢慧音の話では再び地震が起き寺子屋が崩壊したと聞きましたが

……これは……

そして、その地面を見た時私は思わず手を額にやりました。寺子屋は人里でも端の方に位置し周りには建物がほとんど無い為か寺子屋のみが被害を受けた状態でした。

こんな、局所的に地震が起きたとは考えにくいはずなのですが……心当たりがあり、言うべきか迷います。

「寺子屋には誰もいませんでしたか？」

「私だけだ。しかし、これでは……」

「それにしても妙ですね……ここだけ被害を受けるなんて……」

ここにきて冷静な判断をするあたり緊急事態には慣れてる様です。しかし、どうしましよう……

「どうしますか……萃香さんにも頼んで建て直して貰いますか？」

「しかし、その萃香を探し出すのは大変だぞ？人里の人達に頼むしかあるまい」

「そうなる……しばらくお休みですね」

「ああ、連絡はすでにしてある」

「となると誰がしたか探さないとすね」

「誰がしたか？人為的な原因なのか？」

「そうですね。最初寺子屋に来る前に人里の真ん中の方を通つたのですが何の被害も無かつたんですが……ここだけ被害が出るのはおかしいです」

するとそのタイミングで、何処からともなく声を掛けられます。

誰だ？と彼はその声がある方へと向きます。

「天にして大地を制し、地にして要を除き、人の緋色の心を映し出せ」

そう言い立つのは青いロングヘアに真紅の瞳を持つ少女です。少女と一口に言えば、目には自信を通り過ぎて過信に満ち溢れ、どこか人を小馬鹿にする様な顔を彼に向け

「最近有名な教師ね？漸く見つけたわ」

いきなり、桃の実と葉のついた帽子を被った少女に話しかけられたものですから、彼は些か面食らって黙っている内に、天人くずれは御構い無しに付け加えます。

「私は天界に住む比那名居天子。毎日、歌、歌、酒、踊り、歌の繰り返し。天界の生活はほんと、のんびりしているわ」

何と言えがいいのでしょうか………タイミングははつきり言つて最悪です。なんせ、この様なことを起こせるのは彼女。つまり、人為的な原因のなら犯人は十中八九比那名居天子こと総領娘様です。

そんな彼女に碓氷勇人はギロリと睨みながら

「何だ？忙しい俺に当てつけか？」

「何言つてるのよ。退屈だつて言つてるの！だから、貴方が地上で色々な妖怪相手に遊んでいるのを見てきたわ。それに霊夢とも」

「遊んでいる？何言つてんだ？」

「それを見て、ちよつと貴方に興味が出たの。まあ、衣玖が珍しく人に気をかけているからちよつかい出そうと………つて、衣玖もいたのね」

「ええ。しかし、また勝手に地震を起こされると困るのですが………」

「別にいいじゃない。被害はここだけなんだし」

「そういう問題じゃあ……………」

「あー！もう、うるさいわね！今は暇つぶしにこいつと遊ぶんだから！」

「……………じゃあ、あんたがこれをやったんだな？」

先程よりトーンが低くなり、彼の方を見れば、感情というものが剥がれ落ちた様な無表情な顔がそこにありました。

「ふ、ふふ。そうよ？」

一瞬、総領娘様は怯みますがすぐに立て直し、自分への自信と相手を見下した、いつもよ総領娘様の姿に戻ります。

「(寺子屋を壊し、あいつを怒らせて戦いに持ち込む作戦成功かしら?)」

「はあ……………仕方がない……………」

と彼は言う。と総領娘様に近づき、鞆から何かを取り出そうとします。

「ん？もしかして、噂の貴方の自慢の銃かしら？」

総領娘様の予測は外れて、取り出したの一枚の紙でした。

「へ？」

「ほら、この原稿用紙一枚分に反省文を書け。それで今回の事は許してやろう」

「じよ、冗談はよしてよ！勇人先生！」

「文句を言わずに書け。これでも相当頭にきてるんだぞ？これで許してもらえただけありがたいと思え」

「へえ、まるで自分が私より上みたいな言い方ね？勇人先生？」

「天人というのは、こんなに腹が立つ様なやつなのか？」

「いいえ、総領娘様ぐらいしかいませんよ」

やはり、甘やかされ過ぎです。寺子屋を破壊して尚ここまで態度をとるのはもはや、総領娘様にしか出来ない芸当でしょう。

「一体、どんな教育を受けたらこんなになるんだ………」

「そういう貴方は自分がまともだと思えるのかしら？先生？」

「少なくともあんたよりは人格者だと思うよ。それに先生と呼ぶのを止めろ。そもそも生徒じゃないんだから呼ぶ必要は無い」

「別にいいじゃない。嫌なのかしら？先生？」

「お前の場合は先生、先生と言われるたびに阿呆、阿呆と聞こえてくるから不愉快だ」

「は、はあ？」

「それに、俺を戦わせようとしているかもしれないがあんたがの煽りには簡単に乗っかるほど俺は阿呆じゃないんでな。その紙を持ってとつと書いてこい」

と彼は総領娘様に背中を向けて立ち去ろうとしました。血の気の多い幻想郷では幾らかばかりか冷静な人の様です。

「ムキー！何よ！こうなったら！」

「総領娘様!!」

緋想の剣をどこから取り出して、彼の背後から斬りかかろうとした瞬間、パァン！と乾いた音が鳴り響きました。

その時には総領娘様の手には緋想の剣は彼方へと飛ばされ、ただ、え？と言うのみ。何が起こったのでしょうか……………

「次、眉間だからな」

「ひいつ!？」

し、信じられません……………私の目には総領娘様が、怯えている様に見えます。あの、唯我独尊の総領娘様が、怖いもの知らずの総領娘様が、怖がっているのです！

総領娘様の身体はとも頑丈で人間では傷すらつける事は叶いません。つまり、眉間を撃とうが総領娘様なら大丈夫なはずなのですが……………彼の目には本気で撃ち抜くー明確な殺意が満ちています。

ー本当に撃ち抜かれる、明確な根拠が無いのにそう思わずにはいられないのです。今まで死さえも恐れない（恐る必要が無い）総領娘様が初めて恐怖というのを彼に抱いたのです。

「分つたなら、さつきと書いてこい」

「わ、分かりました！」

「総領嬢様!？」

「い、衣玖！私、先に帰るから！」

脱兎の如く総領嬢様は空へと飛びました。

「済んだか？ 勇人」

「本来ならフルボッコにしたいぐらいに頭にきてますが……………教師に悪評たつたら生徒も来なくなりますし……………」

「そうか。しかし、あの天人にも困ったものだ……………」

「す、すいません。本当にすいません。後で総領嬢様にはきつく言っておきますので……………」

「ん……………あいつの場合だと、きつく言っても効果が無いような……………」

うつ、まさにその通りなのです。誰が注意しても総領嬢様は素行を改めようとはしません。

「一回恐怖を覚えさせた方がいいんじゃないか？」

「え？」

「まあ、あいつの事よりも寺子屋の再建を萃香さんに頼まないと……………」

恐怖、それなら！私は今にも鬼を探しに行こうとする彼に向かって

「碓氷さん！」

「はい？」

「私から頼みたい事があります」

「頼みたい事？」

「どうか、総領娘様の教師となつていただけませんか!？」

「はあ!?!流石に無理だ!あんな奴の教師はごめんだ!」

やはり、断られますか……………しかし、ここで引き下がれば、再び総領娘様は我儘なまま。……はどんな手でも!

「そうですか………しかし、貴方、私に恩がありますよね？」

「へ？」

「ま・さ・か、教師でもあろう方が恩を返さないなんて事、しませんよね？」

「はあ？ちよつと………」

「それではいい答えを待っています」

「お、おい！待て！」

人の良心を利用するのは気が引けますがそんな事言つてられません！きつと、彼なら総領娘様を更生させてくれるでしょう！

「今、思い出すと君、強引だよね？」

「そうでしょか？人は誰でも見返りを求めるものでしょう」

「……………」

俺はただ黙って時間が解決する事を祈るのだった。

第89話 策略の日の竜宮の使い

最近やたら雨が降るかと思えば、今度はその分蒸発させんといわんばかりの快晴の日が続く。ただいるだけで汗だくになるような気候の中、インドア派の俺とは違いアウトドア派の里の人々は今日も里を賑やかせている。

巨大な木材を運ぶ大工さん、元気に声を出し商品をお勧めする八百屋や魚屋など、中には妖怪までいる。流石、妖怪にも寛容で有名な里なだけある。

俺はと言うと、どこぞの天人様が寺子屋を見事に破壊してくれたお陰で、今は甘味処にて団子を片手にお茶を啜りながらその様子を眺めている。

パツツンパツツンの竜宮の使いからは今でも熱烈な教師の依頼を受けている。しかし、今からどんどん暑くなっていくこの時期に仕事を増やすのは御免である。ただでさえ、運動不足気味で体力が落ちている中、仕事を無理に増やしてまたぶっ倒れるのはもうしたくない。

という理由で断っているのだが、それでも深海魚さんは諦めず交渉を持ちかけてくる。流石に玄関ですつと待機していたのは驚いた。

とか考えていたら団子はあつという間に無くなり、お茶も飲み干してしまった。

次の団子を頼むか………もう、家に帰ってしまおうか………

とか悩んでいるが、簡単に言えば何もする事が無くて暇である。

それなら、天人くずれの世話役を受ければいいじゃないかとか言われるかもしれないが………折角、こんなにも暇な時間を得ているのだ。しっかりとその暇な時間を堪能したいと言うのが俺の本音である。

一応、俺の元いた世界から持ってきたものを引つ張り出して整理したりした。本とか服とか………ああ、アルバムも何故かあったから見てみたが………それには小学生からの写真しかなかったなあ。じいちゃんが持っていたりするかな。ああ、する事がねえ………

ふと何故かは分からないが守谷神社を思い浮かべたので守谷神社に向かうとしよう。

「おばちゃん、ご馳走様。お金はここに置いておくよ」

「あいよ。また、来ておくれ」

甘味処を後にして守谷神社へと足を進めた。

人々で賑わう人里とは対照的に、守谷神社のある妖怪の山は静まり返っている。境内も同様で、清浄な空気が満ちている。

「あつ、勇人さん！」

お、石畳の参道で箒を片手に掃除している早苗を発見。

早苗はこちらを確認するなり、鳥居の下にいる俺のそばまで駆け寄る。

「珍しいですね、勇人さんの方からここに来るなんて」

「少し暇だったんでな。少し寄ろうと思ったのだが………邪魔なら帰るが………」

「いえいえ！寧ろ嬉しいです！」

「そ、そうか。最近、やけに暑い日が続くが体調は大丈夫か？熱中症には気をつけないと

な」

「そうですね……………諏訪子様も暑過ぎて元気が無いぐらいですからね。そう言う勇人さんも気をつけてくださいいよ?」

「ああ、気をつけるよ」

「本当に暑いな……………そのせいかな、宴会の話も全く無くなったな」

「流石に厳しいんじゃないでしょうか? 萃香さんなら兎も角……………他の人たちは外にも出たがらないですしね」

「まあ、頻繁に行われても困るだけだしな。どんちゃん騒ぎも悪くは無いが、静かに景色を眺めている方が俺は好きだな」

「それなら、この山は紅葉したらとても素晴らしい景色になるんですよ」

ニツコリとそう告げる。

「へえ、緑の妖怪の山しか知らないから秋が楽しみだな」

「それなら、いつか一緒に見ませんか?」

「そうだな、是が非でも見に来ないとな」

「はい」

早苗は明るい笑顔で答える。

「そう言えば、今日は寺子屋でのお仕事は大丈夫なんですか？」

「ハハ………なあ、早苗。比那名居天子っていう娘知ってるか？」

「ええ。物凄く我儘で有名な天人さんですよ？会ったんですか？」

「会ったは会ったのだが………まあ、そいつのせいで今は暇なんだ」

「なんとなく想像できます」

やはり、相当我儘なんだな。誰かが喝を入れてやらないとダメなパターンだな。

ふと、何かの気配を察知して振り返ると真っ白になった髪をした爺さんとパツツンの衣装を着こなした女性が見えた。何とも珍しい組み合わせである。

まあ、俺の祖父と童宮の使いの永江衣玖のようだ。よし、名前はしっかりと覚えてた。

「じいちゃん」

俺の声に、じいちゃんは笑みを浮かべる。

「おや、久し振りに会うのう」

「そうだなあ………最近顔見せてなかったな」

そうじゃな、と頷くじいちゃんに、早苗は頭を下げた。

「お久しぶりです。おじいさん」

「うむ。元氣そうで何よりじゃ。相変わらず仲がよろしいようじゃのう。こりゃあ、妖夢も嫉妬するわけじゃ」

穏やかな声に、早苗は顔を赤くしてもう一回頭を下げた。

「あら、早苗さんが彼の噂の彼女さんでしたか」

と極めて自然に会話に入って着たのは、竜宮の使いである。

「初めまして、では無いですよね？早苗さん」

「そうですね、えつと永江衣玖さんですよね？」

「ええ、そうです。彼とは違って覚えてもらって嬉しいです」

「な、何のことやら……………」

それにしても、じいちゃんと来るなんて……………意味のわからない組み合わせである。接点はほぼゼロに等しいのだが……………

「そうそう、お前さん地震のときこの永江さんにお世話になったそうじゃないか。しっかりとお礼はしたのか？」

成る程、そう言うことか……………こりゃあ、外堀を埋めてきやがったな。

「え？お世話って……………」

「安心しろ、早苗。片付けを手伝ってもらっただけだ」

「ええ、そうですよ。ただ、人の忠告もまともに聞かず、地震の対策を取らないでいた結果、倒れてきた家具で押し潰された挙句、頭もぶつけて気絶した所に私が来て助けてあげただけですから」

「ええ！だ、大丈夫だったんですか!？」

「特に問題は無いさ。その後に起きた事の方がよっぽど問題ある」

「そうですね。未だに恩を返してもらってませんし……人々からは良い人だと聞いてたんですが……ただの演技だったのでしょうか？」

「そんな事ありません！勇人さんは誰よりも優しく、義理堅い性格なんですから！そうですね!?!勇人さん!」

「どうやら相手はこちらの城を完全に落とす気でいるらしい。あつという間に外堀が埋まった。」

「そうじゃそうじゃ。わしに似て恩を仇で返すような輩じゃないわい」

「なんてこつたい。内堀まで埋まってしまった。我が城は落城寸前ぞ。」

「そうなんですか？なら、何故私の依頼を受けてくれないのでしょうか？やっぱり、日頃の素行は演技……」

「演技じゃねえ!」

我が城、落城なり。

「分かった。天子のお目付役の件、引き受けるよ。これで満足か？」
「そうですか。ありがとうございます」

澄ました顔でそう言われると余計に頭にくる。

「それでは行きましょうか」

「は？」

「受けてくださるのでしょう？だから、今から……………」

「いやいや、俺にも準備とかあるから……………」

「大丈夫です。噂通りの貴方なら問題無いでしょう」

「誰の噂だ！」

「この新聞に……………」

「あいつ、懲りずに……………」

ふと、心配そうな早苗の眼とぶつかる。

「が、頑張ってくださいね、勇人さん」

そう笑顔で言われちゃうとなあ……………

「ああ、任せとけ」

唯々諾々として従うしかあるまい。見上げれば空はことごとく徒らに快晴である。

—————

「驚きましたよ、勇人さん、飛べたんですね」

言葉とは裏腹に、落ち着いた声で告げる竜宮の使いの前で、俺はおもむろに最近使い始めた頭痛薬を取り出して、二錠まとめて飲み込んだ。もちろん、薬は安心安全の永遠亭製である。

「ただの人間が人里に住まずに妖怪の山に住んでるものでしたから心配してましたが、それでもなさそうですね」

「はあ……………早苗から教えてもらった」

「早苗さん？ああ、成る程……………」と何やら意味深長な顔をするが、放っておこう。

「しかし、いつの間に俺のじいちゃん知り合ってたんだよ」

「たまたま会ってお話ししてただけです。私はそれよりもすんなりと依頼を受けてくれたのが驚きです」

さほど驚いているようには見えない。依頼を受けざる得ない状況に追い込んでおきながらぬけぬけと……………

クスクスと笑みを浮かべて、俺の方が一方的にからかわれているような気分だ。

「あの天子とか言うお嬢ちゃんはかなり我儘そうだな……………俺の手では負えんかもしれないぞ?」

「いえ、傍若無人な総領娘様には慇懃無礼な貴方が適任かと」

「人を馬鹿にした事は無いが……………」

「的確な評価だと思いますけど……………」とか言う永江衣玖を制して

「だいたい厳しい修行をして、欲を無くしたはずの天人が、何故あんなにも我儘なんだ? もっと、お淑やかであるはずだろうに」

「総領娘様は修行して天人になったのでは無いので……………」

と微笑を苦笑にかえて、軽く肩をすくめた。

わけあり、というわけだな。なんやかんやでこの人も苦労してんだな。

「はあ……………まあ、教師をするからにはきちんとやらせてもらおうが……………うまくい

くかどうかは分からんぞ？」

「いえ、そもそもその様な役を引き受けてくださる人がいなかったの………やっ
くださるだけでもありがたいですよ？なんなら、天人になる修行でもしたらどうですか
？」

「天人？おいおいバカはよしてくれ。苦勞のない人生なんて何の張り合いもないから楽
しくないさ。それに俺はただの人間でさえあればいいんだ」

俺の言動に、衣玖さんは軽く目を見開いてから、微笑した。

「フフ、面白い人ですね」

「そうか？つまんない男だと周りからは酷評されていたが………」

「少なくともこの幻想郷ではつまんない男だとは思われてませんよ。寧ろ、外界から来
た人にしては馴染み過ぎな気がします」

フツと思わず小さく笑ってしまう。

「まあ、そのぐらいが丁度いいさ。無理に意地を通そうとすれば窮屈になるからな」

曖昧な記憶にあつた誰かの言葉を思い出しながら呟く。
すると、目的の有頂天が見えてくる、

「教師の到来を心から歓迎しますよ、勇人さん」

「ようこそ、天界へ」

第90話　　ファイバーの日の青年

最近運動不足だからと言って、相手が手加減してくれる様になるわけではない。

運動不足の恐るべき所は、自分が思った以上に動けない事である。チルノやフラン達が一緒に遊ぼう！」などと度々期待の眼差しで俺を弾幕ごっこに誘われたりするが、あーだこーだとテキトーな理由をつけて断っている。そんな中で彼女らの弾幕ごっこを眺めたりするのだが、やっぱり人間じゃないんだなあと痛感せざるおえない。

『弾幕ごっこ』などと兎に角『ごっこ』をつければ可愛らしくなると思っているらしい。まあ、これは一部の人間と妖怪が対等な条件の元で行われる”遊び”である。一口に遊びとは言っても普通に死んでしまう事だつてあるし、ただの人間がやれば即死間違いなしだ。

随分乱暴な遊びだが、幻想郷における異変の多くは、この『弾幕ごっこ』という常軌を逸したもので解決される。今の所、この遊びが廃止され本気の殺し合いになるとかいう話は聞いた事はないし、一般的な人々なら全くもって関係のない事柄なのだから多分ずっと続くだろう。

俺とてこんな狂気の沙汰ではないこの遊びをしたいとはあまり思わない。が、何故か

俺をこの遊びに誘う輩が多すぎる。特に最近では色々な成果を上げたせいとか、徹夜で疲労困憊の上に慢性的な運動不足の俺に弾幕ごっこを申し込んでくるものだから大変である。幻想郷中の妖怪達がこぞって俺を血祭りにあげようと、虎視眈々様子を伺っている様な気分にする。俺は俺で、仕事忙しいとかで理由をつけたり、最悪逃げたりと自分の身を守ることに汲々としているのが現状である。

どうして、ここの人達はこんなにも血の気が盛んなのだろうか………などと心の中でぼやいた直後に

「何ぼーつとしてるのよー！」

ハッと顔を上げると目の前にはその血の気が盛んな人の筆頭格が仁王立ちしている。

ああ、俺は教育者として比那名居天子会いに来たはずなのに当の本人は戦う気満々である。何でも、俺が彼女の教師として相応しいか彼女自身が直々に見定めるらしい。戦いで。

「随分顔色が悪いですよ。『勇人先生』」

いきなり肩越しに、声が聞こえ、思わず「うおっ!」と言ってしまった。振り返ると、いつの間にか衣玖さんが立っていた。

「そんなに驚かなくてもいいでしょう……………」

「なら気配を消して側に立たなでくれ」

「空気を讀んだ結果なのですが……………」

「どんな空気だ……………それ」

「それよりも、魂が抜けた様な顔をしてますよ」

誰のせいで、という言葉が喉までくるが何とか飲み込む。

「まあ、私もこうなるとは思いませんでしたが……………貴方なら大丈夫でしょう」

「何を根拠に？」

「そうそう、1つ教えておきましょう」

「無視ですか……………」

「この天界の桃って食べると体が勝手に鍛えられるんですよ」

「は？」

「どのぐらい鍛えられるかと言われますと……ナイフが刺さらなくなるぐらいには鍛えられますよ」

「ナイフが刺さらなくなる!？」

「あと、総領嬢様自身もそれなりの実力は持ち合わせてますので、お気をつけて」

「え、ちよつ!？」

—————

自称『空気を読む程度の能力』の衣玖さんが空気の読めない発言をし、そのままどこかへ飛び立ってしまった。

「貴方………勇人とかいったわね? ひどい顔をしてるわ」

ひどい顔、ねえ……………確かに困惑や呆れや様々な感情が渦巻いた結果の顔だろう。そりゃあ、ひどい顔にもなるさ。

「ひどいのは今の状況だ。どうしても戦わないとダメなのか？」
「当たり前よ。私の先生がひ弱だなんて絶対に嫌よ」

何ともまあ我儘な発言で。先生には強さも必要ですかそうですか。

「そうか……………なら、さっさと始めようぜ」

「ええ、そうさせてもらうわ！」

威勢良く言ったのはいいものの、まさか戦闘になるとは思ってたので持つてきているのはいつもの二丁拳銃だけだ。

兎に角、狙いを脚に定め2つの引き金を引く。

パァン、パァン！

「あら、随分と貧弱な弾丸ね」

「あれれ!？」

靈力の弾丸は天子の脚を貫かず、弾かれる様に消滅した。心なしか威力が低い気がする。あと、1発しか当たってないので、勘も鈍っている様だ。あれ?やばくね?

あつという間に接近を許し、ビームソードみたいな剣が振り下ろされる。

「ウオツ!？」

「え!？」

咄嗟に不変の結界を生み出しガードしたが……………範囲が狭い。剣と俺の顔の間は数センチしか空いてない。前はもつと広く展開できたはずなんだが……………

「な、何なのよ!貴方、能力持ってるの!？」

「そうだが?」

「何の能力か教えなさい!」

「おいおい、人に物を聞くときは礼儀つてもんが……………」
「いいから言いなさい！」

こりやあ、筋金入りの我儘だな……………」

「断る。そもそも戦闘において不利になる情報をわざわざ教えるわけがないだろ、このマヌケ」

「マヌツ……………！いいわ！後で泣いて許しを乞うことね！」

今度は横薙ぎに剣を振る。妖夢とは違い洗練された動きなんかじゃなくて、ただ力任せに振ってるだけだ。

ガキンツ！

「ツク……………！」

「受け止めた!?!」

右腕に電流が流れるような痛みがくる。靈力で肉体強化したが………相当靈力が落ちてるな………

だが、間はできた。左手に靈力を込めて………

「オラア!!」

ドゴオ

「ツ………中々やるじゃない」

「効いてない!？」

まるで鋼鉄の壁を殴ったような感触………頑丈っていうレベルじゃねえぞ!？」

「これなら!」

パアンパアンパアンパアン!

「!？」

「次はどうかかな？」

パアン

「だ・か・ら！それはもう効かな……………」

ピカツ

「!？何よ！みえないじゃ……………ハツ!？」

「やあ」

「!？」

目眩しの後のスニーキングキル。常套手段だよな？

バリバリバリバリバリイイ！

「アババババ……！！」

「ふう………やっぱり、運動はしとくもんだな」

「アヒヤアヒヤ………」

プスプスと煙をたててるが………死にやせんだろう。問題ない問題ない。

「流石ですね。まさか、靈力を扱うとは」

と、また気配を消して後ろから衣玖さんが声をかける。

「妖怪の山に住んでいるくらいですからね。これくらいできないと」

「総領娘様の教師役、合格ですね」

「不合格でもいいのだが………」

「いえ、合格よ」

「おい、もう起きたのか」

さつき煙を出して寝てただろ。全く……………どうして復活が早いんだ。

「貴方の事気に入ったわ。私の教師役をさせてあげるわ。光榮に思うことね」

「敗者がよくぬけぬけとそんな事が言えるな（はいはい、分かりましたよ）」

「勇人先生、本音と建前が逆になってますよ」

「おっと、失敬失敬」

「で、何を私に教えてくれるのかしら？」

「そうだなあ……………和算とか……………あとは常識を教えてやる」

「ええ……………つまんなさそうね」

勝手に人を教師にしといてよくもまあ……………込み上がる怒りを飲み込むしかあるまい。

「なら、何になら興味を示す？」

「貴方の昔話となら興味あるわ」

「そうですね。私も聞いてみたいです」

さらっと会話に入り込む衣玖さん。

「俺の昔話つて……………くだらん話しか無いぞ？聞くに値しないと思うが……………」

「そんな事は関係ありません。貴方の話は幻想郷に入ってからしかありませんから。貴方は基本的に自分の事話したがるなさそうですね」

「当たり前だ。つまらん自分の過去を徒らに宣伝するくらいなら和算を教える方がよっぽど建設的だ」

「はいはい、でも私は和算よりはよっぽど魅力的ね」

「さいですか。だが、まずはその我儘な性格をどうにかしないと」

「我儘？それって私のこと？」

「お前以外に誰がいるんだ」

「衣玖、私つて我儘言ったことあるかしら？」

「今までの言動を思い返してください。多分、ほぼ全部該当しますから」

「……………衣玖がひどい」

「自業自得だ」

「それで、具体的にはどのようなご指導をするのでしょうか？」

「んー……………明日までには考えておこう」

「そう、ならもう帰るのかしら？なんなら、この桃食べていいわよ」

「心遣い感謝するが、生憎俺は桃は好きじゃない」

「あら、残念。美味しいのに」

まあ、食べるだけで肉体が強化されるドーピングみたいな桃を食べたいとは普通思わないと思うが、いいか。本当に桃好きじゃないし。

「もう帰ってもいいだろ？」

「あ、ちよつと待つてください」

と衣玖さんに引き止められてしまった。

「何だ？」

「全身に靈力を漲らせてバチバチと漏れ出してたときがあつたじゃないですか」

「ああ」

「そのときにビビつときたんですけど……………」

だから、あのとき少し反応してたのか。

”決めポーズ”のイメージが湧いたんです！

「……………はあ？」

「何でしょうか……………本当にビビつときたんですよ。だから、そのポーティングをしてもらえませんか？」

「何それ意味がわかんないんだが……………」

「とりあえず、私の言う通りにしてください」

「お、おう……………」

「まず、脚を少し広めに開いてください」

「このぐらいか？」

「いえ、もう少し」

「このぐらい？」

「はい。で、左腕を腰に」

「こうか？」

あれ？何でこんなことしてるんだ？

「右手は人差し指と親指だけたてて腕を上には伸ばしてください」

「ほうほう、何の意味があるんだ？」

「腕をもう少し伸ばしてください」

「アツハイ」

「少しそのままですべてください」

流れでやったのはいいものの……………なんだこれ。なーんかこんなポージング見たことがある気が……………

「もう少し腰をこんな感じに」

と実際にポージングをとってみせる。？キヤーイクサーン／とかが聞こえたのは幻聴だろうか。

「こ、こうか？」

「はい、そうです。いい感じにファイバーできてますよ」

「ファイバー!?!」

「では、体勢を元に戻して、私が合図したらそのポージングをとってください」

「は、はい」

「キヤージュウサーン」

「!?!」

な、なんだその合図は!?!反射でポージングをとってみたが……………

「うーん、腰つきがなってませんよ。もう一度」

「アツハイ」

ご不満のようです。

「では……………キヤーユウサーン」

「……………」

「完璧です！理想的なフィーバーができてます！そこにあの霊力の放出があればもう大フィーバーです！」

「お、おう……………」

「今度はキヤーユウサーンと言われたら条件反射でできるまでしましょう！」
「え？ちよつ！ええ!?!」

この後、メチャクチャフィーバーした。

第91話 一局の日の青年

宿題を見るとときに答えを写したかどうかは案外分かるものである。特に複雑な計算問題なら尚更顕著に出てくる。複雑になればなるほど、解く過程というのは大事になり、自然と問題の隅っこなどに計算の跡が残る。

しかし、今見ている宿題は最初から最後まで答えのみしか書かれておらず、尚且つ全て正解である。もし、その生徒が和算において優秀な成績を修めていたなら納得しただろう。だが、この宿題の持ち主の生徒は成績は芳しくない。

生徒は俺よりもずっと歳上な天人の少女で1週間ほど前に諸事情があつて寺子屋に参加し始めたばかりであつた。

ここで寺子屋について補足すると、萃香さんが案外早く見つかかり宴会を必ず催すという条件であつという間に建ててくれた。尚、宴会については早苗に頼んで守谷神社で行う予定である。

「写してなんかないわよ」

教室に入るなり、天子の無い胸を意味もなくそらして答えた。まあ、宿題を出すようになったのは成長と見てもいいが………（最初は堂々とやらずに慧音さんの頭突きを何回か頂戴した模様）

「だが、答えだけなのはおかしくないか？」

「はっ、それでも私は写してないわよ。貴方の言う通りに、出された宿題を出しただけよ」

ちよつと不機嫌そうだ。このクラスの生徒は基本的に小さくて天子が大きく見えるがそれでも幼さが目立つ。不機嫌な顔も何処と無く愛嬌があるような無いような。無論、可愛いという理由で許すわけがないが。

天子は最初こそは慧音さんの頭突きなどもあり順調に進んでいたが、ここ最近はまだ我儘が出てきた。もう日にちが経ったのを考えれば、寺子屋にも飽きがきて宿題も面倒臭くなったと考えざるを得ない。だが、これを証明するのはなかなか難しい。理系なのに。

「本当に写してないのか？」

「写してないわ」

そつぽを向いてはつきり答える。

「そうそう、俺も能力を持つてるのは知ってるよな？」

とりあえず外の景色なんぞを眺めつつ、

「俺の能力を使えばこの宿題からお前がどのように解いたのか丸分かりなんだ」

何気ない俺の言葉に、天子は僅かに頬をひきつらせた。

「これを媒介にして、お前の思考も分かるっていうわけだ。まあ、何も考えてないのならすぐに写したと分かるぞ」

ちらりと横目で見ると、完全に動揺した天子が映る。そんなに慧音さんの頭突きがトラウマか。

「……………ほ、本当なの？」

「冗談だ」

真顔で答えた。

天子が、くつと言葉につまり、何か言い返そうとしているようだが、言葉が出ない。

「……………慧音には秘密に」

「その前に言うべき事は？」

「むっ……………悪かったわ……………」

「はあ……………違うだろ。前にも言ったよな？失敗したらまずは謝罪からだ」と

「うっ……………ごめん」

「お前がやりたいと言ったから寺子屋に参加させたんだ。やるからには最後まできちつとしろ」

それっぽいセリフを言ってから教室を後にした。これでも天子はずいぶん成長したのである。そもそも、謝罪ができなかったのがこちらから要求したとは言え、謝罪した

のだ。大きな一歩だろう。

まあ、俺自体少々甘いのもあるが。慧音さんなら宿題を忘れあの様な態度をとろうもんなら頭突きをし、星を見せるに違いない。

廊下に出ると永江衣玖さんがいることに気がついた。
軽く会釈をし、通り過ぎようとすると、

「キヤーユウサーン」ボソツ

「何を言ってるんですか……………」

「いえ、そのポージング、決まっていますよ」

「えっ? ああ、これは……………!」

なんと言うことだ……………衣玖さんの日々の洗脳によって、無意識にあのポージングを取るようになってしまった。

とりあえず、体勢を戻して、

「コホン、それで、何の用です?」

「いえ、総領娘様の様子を見にきたんですが……………貴方に教師役を頼んで大正解でし

たね」

外の景色を眺めながら、天子の成長具合でも報告するでしょう。

「まあ、なかなか我儘ですが、聞き分けがないというわけでもなさそうですし、大丈夫だと思いますよ。でも、一番怖いのは慣れてきた時ですかね」

と衣玖さんの方に視線を戻すと、

「「キヤーイクサーン！」」

フランやチルノ達の前で見事なまでにポーズを決めていた。いや、自分のポーズなら俺にさせないでくれ。

「衣玖さん？」

「あつ、すいません。空気を読んだ結果なのですが……………」

だから、どんな空気なんだよっ。

「まあ、今から休憩なので」

「あ、ちよつと待っててください」

「ん？」

「まだ、昼前ですよ」

衣玖さんの意味ありげな一言に、足が止まる。

すると、どこから取り出したのか何やら板状のものを取り出し

「お話のついでに、一局どうですか？」

あまりにも急なことだったので思わず目を見開いてしまった。

「そんなに驚かなくてもいいじゃないですか。樫さんから聞いたんですよ。将棋、お強
いんですよ？」

「いや……………もう大分、ご無沙汰ですよ？」

「将棋がメインじゃないので大丈夫です」

「あ、私に勝てないと思えばなら、諦めますよ？」

「そこまで言われたなら断れませんか。1時間もあれば終わるでしょう」

「ついでに総領嬢様のお話も聞かせてください」

「ああ、30分後が楽しみです」

30分後である。

「何が楽しみなんでしょうか？」

衣玖さんの涼しげなそんでもって小馬鹿にしたような声が響く。

時折、フランやチルノ達が興味を示し、覗きに來たが飽きてしまったのか誰もいない。将棋盤を見れば、整然たる陣形を保った衣玖さんの軍勢と、総崩れで王がただ逃げ回るだけの無残たる我が軍勢が向かい合っている。

「これまた久々に完膚なきまでに………少しぐらい、労りの気持ちを含めて手加減してくれてもいいのですが………」

「世の中そんなに甘くないんですよ？」

「能力を使つてくるくせに」ボソツ

「何か？」

ちつと舌打ちをして天井を仰ぐ。

せめて、一矢報いようとしたが、まるで一手一手が読まれてるかのごとく、惨憺たる有様となった。

今まで逃亡に徹した王將に寝返つた角將が首を取ろうと虎視眈々と控えている。

「参った」

「意外とあつけないですね。粘ってくれもいいんですけど……」

『『空気を読む程度の能力』を使われちゃあ、どんな策も意味ないですよ』

と時間を見れば1時間も経っていない、もう一度軽く舌打ちをしてから再び衣玖さんと向き合い、言葉を続けた。

「で、何が聞きたいんです？」

「……………どういう意味でしょう？」

衣玖さんが駒を片付けようと伸ばした腕を止める。衣玖さんの目を見ると、伺うような光がある。

「わざわざ、天子の事を聞きに来るためだけに将棋に誘ったわけじゃないんですよ？俺は何か別の事を聞かれるのかと思って将棋の誘いに乗ったんですが」

「空気を読む側が空気を読まれてしまうとは……………」

再び駒を片付けながら続けた。

「そうですよ。貴方にどうしても聞きたい事があるんです」

—————

将棋のようなボードゲームというのは不思議なもので、ゲームの内容は覚えてなくても、その最中の状況というのは鮮明に覚えている。

今でも覚えているのは小学2年の頃に、じいちゃんが将棋に興味を示した俺に将棋を教えてくれた時であった。

確か、8月の中旬、もちろん小学生は夏休み真っ只中。

夏休みとは言えども一緒に海とかに遊びに行くような友はおらず、普段はじいちゃんの家遊びに行くのが夏休みの日課だったと記憶している。

毎朝9時には家を出て、田んぼだらけの道を通り、じいちゃんの家遊びに行き、手に書齋に入っては本を取り出し意味もわからず読むのが俺の夏の風物詩だった。

そんな中、じいちゃんが知り合いと将棋を指しているのを見てじつと見ていたら

「おお！ 勇人かどうした？」

「それ、なに？」

「これか？ 『将棋』と言うんだよ。この『駒』と呼ばれるものを使ってだな王様を取った方が勝ち、っていうゲームだよ」

「じゃあ、どっちが勝ってるの？」

「はっはっ！ これを見てどう思う？」

「おじちゃんが勝ってる」

当時、よくルールが分かっていないのにどちらが優勢が分かるのだから相当ひどかったのだろう。

「勇人くん、馬鹿にしちゃダメだよ。これはね、隙だらけに見せる事で相手を困惑させるこの爺さんの得意技なんだよ」

「そうだ。お前がよく読む三国志の諸葛亮も使ったんだぞ？」
「おお！すごいんだね!!」

子供特有の無邪気な声が響いた後、

「参った」

「おや、もういいのか？手はまだあるだろ？」

「はっはっ！158敗目に1敗加わっただけだ。それよりも、可愛い孫の相手をしてやらんといかんだろ？」

「そうだな」

「どうだ？勇人もやるか？」

「うん！」

「お前より私が教えた方がいいだろ？」

「なあに言ってるんだ？わしの孫に教えるのはわしに決まっておろう！」

「お前の空城の計は勇人くんには難しいんじゃないか？」

「フフ、わしの孫にかかればあつという間に習得してしまうから問題ない！」

明るく野太い声が、広々とした部屋に響き渡った。友がいない俺でも夏休みはこうして楽しく過ごす事ができた。

久々の対局を負けて飾った俺は衣玖さんの言葉が頭から離れなかった。

「貴方は本当に人間なのですか？」

言わずとも俺は人間だ。確かにじいちゃんは神様だが、それは「元」である。両親だつて普通の人間だ。現代世界で普通に産まれて、普通に成長し、普通に生きてきた。疑う余地なんてない。

「では、何故、そんなにも強いんです？ どうして、それほどの霊力を持ち合わせているのです？」

修行の成果、としか言いようが無い。魔王の魂たるものがあるかもしれないが、はつきり言っただけは、何処ぞの奇妙な世界の石仮面のような代物ではない。人間をやめてなにかいない。

「なんでそんな事を聞くんですか？」

「いえ、人間が能力をお持ちなので」

「そんな事を言ったら、霊夢や魔理沙、早苗とか咲夜とかどうなるんですか？」

「霊夢さんや早苗さんは巫女という人間の中でも特殊な分類故に能力は持ち得ます。それに魔理沙さんはあくまで魔法が使える人間です」

「じゃあ、咲夜さんは？」

「彼女はあらゆる事が謎、ですからね。なんとも言い難いです」

「なら、俺だっけ？ じいちゃんや元とは言えども神様です。能力を持ってもおかしくはないでしょ？」

「……………貴方の空気が他の人とは違うんです」

「……………は？」

「詳しく表現できないのですが、でも貴方は他の人とは違うんです」

「そう言われても、確かに普通の人として産まれて生きてますし……………どこもおかしいとは言われたこともないし……………」

「それ、証明できますか？」

「え……………戸籍もあつたし、何より親がいるのに違うと言われても……………」

「これまでの記憶を振り返って、それを証明できますか？」

この言葉が頭から離れない。俺が人間である事は揺るぎない事実のはずである。でも、一方で衣玖さんの言う通りに証明ができない。

思い出せないのだ。昔の記憶が。まあ、アルバムとかを見れば一発なのだが、その思い出せない感じが少しおかしいのだ。

なんというか、こうスパッと記憶が無い。小学校の入学式は記憶にあるのだが、卒園式の記憶が無い。そもそも、保育園だったのか幼稚園だったのかすら分からない。ま

た、家族の口からその時期の話聞いた事が無い。

そこがどうにも引つかかるのだが………まあ、アルバムを見ればすぐに解決するか。最悪、じいちゃんにでも話を聞けばいい。

そう高を括って、家への帰路についた。

第9 2話 疑問の日の青年

衣玖さんと別れ、彼女の「本当に人間なのか？」という問いに対し、絶対的な答えを持つていないはずなのにモヤモヤしたまま、家までついてしまった。

「はあ……………」

玄関の戸に手をかけ、思わずため息が出てしまう。はつきり言えるはずだろう。「俺は人間だ」と。はつきりと言えるはずなのに疑っている自分がいるような気がする。

「はあ……………」

もう一度ため息をついてから戸を開いたところで、俺は思わず目を見張った。

見慣れたはずの部屋なのに、着物姿の女性が佇んでいたからだ。

紅の着物を見に包んだ人影は、殺風景な部屋に紅葉が訪れたような、それで幻想的な姿であった。一瞬、家を間違えたのかと思いい外に出て確認したが紛れもなく我が家だっ

た。振り返ったのは、早苗だった。

「お、おかえりなさい」

肩越しに振り向く姿も美しい早苗が、驚いて唾然としている俺を見るとすぐに頬も真っ赤に染めた。

「ど、どうした？」

「ご、ごめんなさい！」

「いやいや、謝る事はないよ。よく似合ってるし………綺麗だよ」

「き、綺麗?!」

思わず口から出た言葉に、さらに早苗は紅くなる。

照れを隠すように足元の小物や小箱を片付けながら、早苗は答えた。

「ゆ、勇人さんのおじいさんに何回か会ってお話をしてもらったりしてたんです」

早苗が話すには、俺が天子の教師役を引き受けた日から度々、じいちゃんに会い思い出話をしていたと言う。無論、俺のことも話してたそうだ。

「ふむ……………俺は最近じいちゃんと過ごす時間がなかったからなあ。俺の代わりに仲良くしてくれてありがとな」

「いえいえ、おじいさんが勇人さんのいろんな話をしてくれるものですから、つつい楽しくなっちゃったんです。その中でこの着物のお話もしてくださいさっただんですが……………」

早苗は言いながら帯を解こうとする。

「せっかかく着たんだから、慌てて片付けなくてもいいよ。それにしてもいい着物だな」

「これ、勇人さんのおばあさんのものなんですよ？なんでも向こうでは忘れられたものになったらしく、ここに流れ着いておじいさんが仕舞ってたそうです」

「……………そうか」

「あ、ごめんなさい……………」

「いや、いいんだ。それに着物は着るからこそ長持ちするんだ」

「そう、ですか……でも、無理しなくてもいいんですよ？」

確かにおばあちゃんに成長した姿を見せることなく、ここに来てそのまま見せる事が永遠に叶わなくなってしまうた。悲しくないわけがない。

だからこそ、見えないところでも頑張っていかなきゃダメなんだ。

「元の世界に帰りたくなっただんですか？ 勇人さん」

そんな心情が伝わってしまったのか気遣うように俺に聞く。俺は笑顔を作って、

「俺に帰る場所はここだ。ここ以外に居場所なんてないさ」

「会う、だけでもいいんじゃないんですか？」

「もう戻らない、って決めたんだ。今更変える気はない」

「相変わらず自分には厳しいですね」

「それでもないさ」

「でも、1人で抱え込むのはなしですからね？」

「ああ、善処する」

すると、玄関の方から声が聞こえる。

「勇人さん、いますか？」

言うまでもなく、妖夢だ（勝手に入ってくるから）。

「お邪魔します」と一声言ってから、部屋の戸が開き、妖夢が顔を出した。すぐに目の前の早苗を見、目を丸くする。

「さ、早苗さん、その格好は？」

「勇人さんのおじいさんにもらいました」

「とてもお似合いですよ！私も欲しかったな……………」

「で、要件は？」

「あ！最近、またお忙しいそうなので夕餉を作りに」

「わざわざ来てくれたのか……………」

にこりと笑う妖夢に若干申し訳ない気持ち……………

その後ろにはうさ耳が特徴な鈴仙が立っていた。

「途中で会って、一緒に行くことになりました……………」

「来てくれるのは嬉しいが、そんなにおもてなしはできないぞ？」

「いえ！ 勇人さんに会いたいだけでしたので」

「お、おお……………」

はつきりと言う鈴仙は早苗さんの姿を凝視する。

「この着物が気になるのか？」

「い、いえ、別に……………」

「羨ましいんですよ。私だって着てみたいんですから」

なるほど、女性というのは着物に憧れるものなのか。

「まあ、2人とも可愛いんだから着物はきつと似合うんだろうな」

「かわっ!？」

「えへへ……………可愛いつて……………」

「はいはい、私は食事の支度をしますね」

「いや、俺がするよ。いつも悪いからな」

「なら、2人で……………」

「わ、私も手伝います！」

「わ、私も！」

「……………」

結局、3人に任せることとなった。

「あ、そうそう。妖夢」

「なんででしょうか？」

「明日、白玉楼に行こうと思うんだが」

「！ ええ、是非！」

「そこでなんだが、じいちゃんに聞きたい事があるから白玉楼にいてくれた伝えてくれ」

「聞きたい事ですか？どんな事ですか？」

「それは男の秘密だ」

「どうしてもですか？」

「ああ」

「分かりました。伝えておきますね」

次の日。

俺は白玉楼の縁側にてじいちゃんと将棋を指していた。俺はじいちゃんに今まで一度も勝ったことがない。とは言っても小学生の頃しか対局したことがないのだが。

「珍しい日もあるんじゃない。お前さんからわしのところに来るなんてな」

パチつと音を立て、駒を進める。

「理由は妖夢に聞いてるだろ？」

奪った歩兵たちを手の中で弄びながら言う。

「そうじゃの。それにしても、お前さんもここまで強いとはな。わしの連勝街道に土をつけられそうだわい」

俺は顔を上げずに盤上を見つめる。そして、そのままの姿勢で呟くように言った。

「……………俺って普通の人間なのか？」

「どういふことじゃ？」

やっと顔を上げじいちゃんを見つめる。いつものような飄々とした面持ちだが、その目の奥には奇妙な陰りが見えた。

嫌な予感がする中、続けた。

「衣玖さんに言われたんだ」

「俺が他の人とは違う空気だって」

その時、微かにじいちゃんの眉が動いた。

「俺は普通の人間だって言ったんだ。そうしたら、記憶で証明できるか？ ってさ。で、調べただけど俺の持つてるアルバム、小学生からしかないんだ。記憶も小学生からしかない。そこでじいちゃんに聞こうと思って」

「……………何を言ってるんじや？ お前さんは正真正銘、普通の人間じやろ」

「なら、なんでこんなにも霊力があるんだ？ なんで能力があるんだ？ 普通の人間がこんなことあるのか？」

「……………幻想郷では普通の人間からでもありえない話ではない」

「俺は幻想郷の人間じゃない」

「……………」

「だから……………」

「じいちゃんが証明して欲しいんだ。写真くらいあるだろ？なんなら思い出話も……………」

じいちゃんの手が静かに駒を進める。

「安心しろ。お前さんが人間ということはわしが保証する」

「無いの？」

その一言にじいちゃんは黙り込んだ。

「なら、お前さんを人間以外になんという？わしは……………」

「王手」

俺の手が駒を進めた。今までの中で最高の一手だった。わずかに動揺したじいちゃんはずぐさま、王を逃す。

「わしはお前さんが人間以外のものとはとても考えられない」

「王手」

考えられない、それが本心なのか偽りの言葉なのかすら分からない。

「勇人、お前さんは人間じゃ」

きつぱりとそう言った。

「すまんが、写真とかはこの幻想郷には持ってきてなくての。だが、お前さんは確かにお母さんから生まれ、育った」

「だけど、俺には記憶がない」と、言おうとしたが、口からは出なかつた。飛車を握る指が微かに震えた。

「安心したよ」

「勇人……………」

じいちゃんの肩が緩む。

「俺もまだ捨てたもんじゃないね」

飛車をじいちゃんの王の前に置いた。

「俺だってじいちゃんに勝てるらしい」

王手、と言い、2度目の渾身の一手を放つ。じいちゃんと指した中で、本当に最高の一手、勝負を決める一手だった。

「本当に安心したよ」

「前より不手際な将棋を指すじいちゃんじゃあ、心もとないが……………」

「勇人……………」

「だけど、本当に安心したよ……………」

証明できるものはこの幻想郷には何も無い。だから、じいちゃんの言うことを信じるしかない。

今まで背中を追いかけてきた人だ。きっと、まだ追いかけても問題あるまい。

俺はその場を去り、家に帰ろうとした。だが、一步を踏み出そうとした瞬間

「ぬお!？」

地面が消失した。

屋敷の一室で、幽々子さんと紫さんが将棋盤を囲んでいる。

俺は紫さんのスキマによってここに召喚されてしまった。

古びた将棋盤を挟み、妖怪の賢者と亡霊が向かい合っている様はなかなか奇妙なものである。

「勇人くん、いつもお疲れさん」

クスクスと扇子で口元を隠しながら幽々子さんが言う。

ちらりと将棋盤を覗き込んで、また当惑した。

「挟み将棋？」

「ええ」

盤上には18枚の歩が入り乱れている。

「最近、将棋が流行ってるじゃない？だから、私たちも、ね？」

「そうよね、幽々子。かれこれ五千戦くらいかしら？」

「何を言ってるのよ。今回が初めてじゃない」

苦手な人トップ3のうちの2人を真面目に関わると疲れるので話題を変える。

「で、なんでここに？」

「もうそろそろ、故郷が恋しくなってくる時期でしょうから、少し気を利かせてあげようかね？」

細い指で歩を進めながら、

「少しくらいその気持ちはどうにかしてあげようと思ってるのよ」

「嬉しい限りですが、もう戻る気はありませんよ？」

「違うわよ。貴方をもう幻想郷から出す気は無いわよ」

「は、はい……………」

「昔のことを思い出せるように、写真を取り寄せたのよ。ありがたく思いなさいな」

とアルバムを渡される。開いて見てみると、そこには赤ん坊の写真や幼児の写真があった。これ、全て俺か!?

「あ、ありがとうございます！」

「別にそのくらいは造作にも無いわ」

「本当にありがとうございます！」

アルバムと紫さんの姿を交互に見ながら言う。

「それじゃあ、用はこれでおしまい。じゃあね〜」

再び地面が消失する。

ズドンと、尻から落ち痛みに涙が滲むがそんなことよりこのアルバムだ。

「……………やっぱり、人間じゃないか！ちゃんとお母さんから産まれて育ってる！」

なんだか、今まで悩んでいたことがバカらしくなってきた。だが、もうこれで安心だな

！

「幽々子、これでいいのかしら？」

「ええ、あの人はそれでいいって言ったから」

「はあ、あの人は何を考えてるのやら………わざわざこんなやつて勇人に渡せつて」
「私にも分からないわ。勇人が何者なのか、もね」

第93話 萌芽の日の青年

縁側で1人の老人がポツンと座っている。膝元には勝敗が決した後の将棋盤がある。老人は将棋盤を片付けようともせず、ただ将棋盤上の駒を眺めるのみ。

かつて王がいたところの周りには、飛車や成金たちが並び王の周りを囲っていた。

角行、銀将、桂馬……………。多くの自軍の駒が敵に渡ったものだな、としわがれた声で呟く。

「まったたく……………勇人も成長したのよう……………」

孫の成長を喜ぶ姿はまさに普通の老人。だが、同時に老人の表情はどこか懐かしみを含んでいた。

1人の女性が縁側に足を踏み入れ、その老人と向かい合うように座る。

「おお、幽々子か。見てくれ、孫と一局やったのじゃが……………完敗じゃったわい」

「ふふ……………楽しそうだなによりね」

「無論じゃ。孫と過ごす時間が楽しく無いわけがないわい」

「……………孫、ね」

そう意味深長に幽々子は呟く。その呟きを聞き、老人は目の色を変える。

「……………なんじゃ?」

「いいえ、わざわざ作ったアルバムを孫に渡すことを不可解に思っでないわ」

「はて?作った、とは?」

「だって、貴方、ここに来た時はアルバムどころか何一つ持たずに幻想郷に来たじゃない。それに外界に出たのも一度もないわよね?」

そう言い、微笑を隠すかのように扇子を広げる。しかし、眼は何かを探るかのような眼をしている。

「……………はは!なあに、昔を思い出せん孫にわしの記憶を使っと思い出させようとしただけじゃ」

「あら、そう。なら良かったわ」

と再び微笑する。しかし、すぐにその微笑はなくなり、

「でも、隠し事は長く隠し通せないものよ？必ずボロが出るわ」

「何が言いたい？」

そこにいる老人は先程の孫思いの老人の面影はなくなり、かつての神であった時の威厳が滲み出ていた。

「最近、紫と話したのよ。勇人について」

「……………」

「妙なのよね。彼の雰囲気。本人は至って普通のつもりでしょうけど」

「誰かと雰囲気似てるのよ……………そうそう！諏訪子とか神奈子とか……………昔の貴方とかね？」

「ほうほう、つまりはこう言いたいんじゃない？勇人も『神様』じゃないのか、と？」

「違うわ、確かに貴方達と似てるとは言ったけど……………何かが違うのよ。決定的な何

かが」

「よく分からんわ。なんせ、わしがすでに人間となつた後に出来た孫だからな」

「まあ、いいわ。今はこちらにも証拠となる切り札が無いのよね。何か企んでるなら、紫がただじゃおかないわよ？例え、貴方でもね？」

「……………そうかいそうかい。じゃが、身に覚えが無いから心配は必要なさそうじゃな」
「……………そう」

と言い、幽々子は立ち去つた。それでも老人はその場からは動こうとはしなかつた。

—————

「フツ、フヒツ、ヒヒヒヒ……………」

なーんだ？この変な笑い方は？……………俺なんだがな。

今、飛びながらアルバムを見ているのだが……………あまりにも面白くてつい、笑ってしまう。

いやあ……………変な笑い方だとは自覚はしている。癖なのか笑う時には口を閉じて笑ってしまうためこのような笑い方になってしまうのだ。

一度みんなの前でこの笑い方をしてしまい思いつきり引かれた。普段でさえ、無口で根暗そうな子なのにそんな笑い方をしたらねえ……………それ以来、笑う時は意識して口を開けるようにしている。

だが、1人の時は気にしなくてもいいのでこんな笑い方になる。誰かに見られたら恥ずかしいな。

「気持ち悪い笑い方ですね」

ここ最近聞き慣れた声が降ってきて、俺は上を向く。衣玖さんである。

「……………いつからいたんですか」

「アルバムを開いたところからですかね？」

「……………この笑い方は内緒に」

「ええ。一つの貸しとしましょう」

本当に空気を読んではいるのか？と言いたくなるが空気を読み、分かった上でやってるんだからタチが悪い。

「あ、このアルバムで俺にはちゃんど人間だったということが証明されましたね」
「そういうことにしておきましょう」

しておくって……………まあ、負け惜しみだな。

「まあ、これからも総領娘様のことお願いしますね」

「それなりに頑張るよ」

そう言うと、衣玖さんは方向を変え、彼方へと消えた。

また、宿題の答えを写しているかもしれない。

その疑いをかけているのはもちろん天子である。

最近、真面目にやっているのはもちろん天子である。と感心していた矢先だった。とりあえず、俺は天子に問い詰めるために天界へと向かった。

だが、天界では天子の姿は確認できず、しばらく探し回ると衣玖さんに出会い、

「総領娘様はまだ帰ってきてませんよ」

と言われたので、寺子屋に戻った。寺子屋の中では話し声が飛び交うがその中に天子の声が聞こえたので、その声のする教室で天子を見つけて、俺は軽く目を見開いた。

いつも我儘な天子が、チルノと大妖精と差し向かい、宿題をしていたのだ。天子とチ

ルノの宿題は同じなのだ、天子は自分のをやらず、チルノと何やら話している。

疑問の目を向ける俺に、慧音さんがそっと囁くように言った。

「最近、天子も馴染んでチルノ達と仲良くなったんだ……………」

「これまた、面白い組み合わせだな……………」

「どういうきつかけなんです？」

「チルノと大妖精はいつもここに残って宿題をしているんだが、それをたまたま天子が見てだな、そこから一緒に宿題をするようになったんだ」

「どうりでチルノの宿題の答えがちゃんとし始めたのか……………」

「そうだな、私の授業もしっかり理解し始めたようだしな。天子は意外と教え上手らしい。大妖精も言ってたよ」

理解し始めてるとは言ってもまだ、見た感じ、チルノの宿題はまだ半分も終わっていない。ついには筆を置いてしまった。

天子の声が聞こえる。

「ほらもう少し頑張りなさい。先生の話进行出して」

「うう……………」

再び考え始め唸るチルノを見て、天子はおもむろに何やらメモが書かれた紙を取り出し、チルノに渡した。

「今日の授業のポイントよ」

ここはこうだと説明し始める姿に、チルノは真面目に聞く。それから、置いた筆を再びとって問題を解き始めた。

「どう？解けそう？」

「うん」

しかし、数問解いて、すぐに筆が止まる。すると、今度は、何か書き始めた。

「ここはこんな風に解くのよ。簡単でしょ？」

いつものような人を馬鹿にした顔ではなく、教える側としての真面目な顔である。

「おお！ てんしつて頭いいんだな！」

そう言いさらにチルノは筆を進めた。

そんなチルノの姿を、天子は微笑みながら見つめていた。

—————

「意外だな」

教室から出てきた天子は、俺の声に大ききなほどビクツと肩を震わせ驚いた。

「教えながら解いたのなら、そりゃあ、計算の跡も無いわけだ」

俺の声に、天子は決まりが悪そうな顔をする。

「な、何よ」

チルノに教えてたような顔ではなくなったが前のような雰囲気もなくなった。

「別に。少し驚いただけだ。小さい子とか好きなのか？」

「か、可愛いとは思わ。そ、それだけよ！」

「の、割には随分と丁寧に教えるんだな。というか俺の授業をしつかり聞いてたのが驚きだ」

「……………貴方の授業が面白いのよ」

「ありがとさん」

「な！べ、別に、貴方の授業なんか面白く無いわよ！」

「はいはい」

一度口を閉じた、天子が思い切ったように言った。

「ほつとけないのよ」

「これまた意外な言葉が出てきた。」

「これまでの傍若無人な態度からは考えられない。が、よくよく考えてみれば天界で暮らし、頼られる事のない彼女にとってこういう事は新鮮だったのかもしれない。」

「私って天界に住んでるから、苦勞する事なんて無いのよ」

「……………羨ましい事だな」

「私からしたら貴方が羨ましいわ」

「俺が？ただ忙しいだけだぞ？」

「そうね。この呑気な人里で貴方は一人アホみたいに仕事して、疲勞でひどい顔になって……………でも、色んな人に信賴されて、忙しそうなくせにどこか楽しそうなのよ」

俺はすぐには返答できなかつた。

「誰かに頼られるのも悪く無いわね」

「そうだな。こりゃあ、俺がお前の先生をしなくても良さそうだな」

そんな事を言うと、天子は、にわかにしよんぼりと肩を落とした。

「ま、ここに来るかどうかはお前の自由だがな」

「……………!!」

「でも、寺子屋を壊すのは無しだからな」

と言い、教室を出た。

「ありがとう」

そんな声が聞こえた気がした。

慧音さんの淹れてくれたお茶を飲み込み、ふうと息を吐いた。

寺子屋の日誌を書きながらも、天子の意外な側面を見れて嬉しかったりする。根まで悪童ではなかった。寧ろ、良い子の可能性すらある。

これを機にチルノの点数が伸びる事を祈りつつ、ふと慧音さんの日誌が視界に入り、何気なくその日誌を開いた。寺子屋が始まった時からの記録が、慧音さんらしい生真面目さで、詳細にわたって書かれていた。

寺子屋が始まったばかりは上手いかなかったようで、その時の悩みが書き連ねられている。一時期は生徒すらいないと言う状態に陥っていたようだが、少しずつ生徒が増えていったらしい。

しばらく日が経つと、自分の授業がつまらないらしい、とか、寝ている生徒が多いなどの悩みが増えて来ていたが、ある日を境に生徒が増えた、とか楽しいと言ってくれるようになったとか明るい情報が増え始めていた。その日が、俺が教師として来た時期だったので思わず苦笑が漏れた。

「人のを勝手に読むのは感心しないぞ」

不意に肩越しに、慧音さんから声をかけられた。

「読まれるのも恥ずかしいんだぞ？」

「いえ、やっぱり慧音さんは生徒さん達をしつかり見ているんだなあって思ったところ
です」

俺の減らず口にも、穏やかな笑顔で隣に腰を下ろした。

「お前だってよく見れているじゃないか。お前の日誌には一人一人の生徒の得意不得意な所の情報、性格とかが事細やかに書いていた。大したもんだよ」

「慧音さんこそ勝手に呼んでるじゃないですか」

「フフ、そうだな。これでおあいこだ」

と言いながら、慧音さんは自分の日誌にまた今日の事を書き込んでいた。

俺はその横顔を見ながら、呟くように言った。

「でも、生徒の知らない所もたくさんあります」

「そうだな、生徒の事をよく知る事は大事だが、全て知る必要は無いさ」

「人には他人が知らない自分、自分すら知らない自分がいる。それを全部知るのとは不可能だ。でも、生徒が大切なのには変わりはない」

と芯の強い声が答える。俺は返す言葉がなく、ただ敬服するのみだ。

「生徒さんが大事なのは俺も同じです。でも、自分自身も大切にできませんとね」

「はは、それもそうだな」

「ということ、自分を労わるためにも今日は帰ります。お疲れ様です、慧音さん」

「ああ、お疲れ様」

立ち上がり、扉へと向かおうとした矢先、視界が右へと傾いた。まるでスローモーションかのように、視界がゆつくりと傾いていく。

「勇人……………?」

声が聞こえた、気がした。

「……………!」

倒れたと気づく頃には視界が黒くなり始めていた。

第94話 予兆の日の青年

俺が倒れた。

誰もが予想だにしなかった。俺も予想してなかった。

夕方の寺子屋で突然倒れたものだから、大騒ぎである。

慧音さん曰く、ひどい熱で、意識は朦朧としていた状態であったそうだ。いつの間にそんな熱が出ていたのか、自分自身一向に気づかなかった。

兎に角、俺は永遠亭に運ばれ、永琳さんに薬を処方してもらって、何とか落ち着きを取り戻したのが夜遅く。鈴仙が泣きそうな顔で看病してくれたのが記憶に残っている。

—————

（翌日）

永遠亭で一晩過ごした後の朝、俺は何もする事もなく、ただ天井を眺めていた。すると、ドアのノックする音が聞こえ、入っていいかしら、という声が聞こえた。

「いいですよ」

「失礼するわ」

「ただの過労ですか？」

「そうね。体力が落ちた時に、風邪をこじらせたという感じね。とりあえず、1日2日は入院しなさい」

「んー、最近はそんなに無理してないと思うんですがね……………」

週2日の休みが入ってからは割と負担が少なかったと思うんだが。

「気づかないうちに疲労は溜まっているものなのよ。それに鏡見てから無理してないと言いなさい」

と鏡を渡される。そこには死人の様に真つ青な顔の自分が映っていた。

「うわっ……………幽霊みたいな顔に……………」

「分かったかしら？ 貴方は相当疲労が溜まっているのよ」

「うーん……………」

風邪をひいたにしては、それ程倦怠感を感じていないし、頭痛や鼻水などの風邪らしい症状がない。せめて、熱ぐらいか。ていうか、今も普段とあまり変わらない様ながら、体調の悪さを感じない。

「取り敢えず、解熱剤を処方しておくわね」

「分かりました。でも、変な薬は飲ませないでくださいよ？」

「病人にそんな事は流石にしないわ。元気な時にしかないわよ」

医者、もとい薬剤師とは思えないような暴言を微笑を交えながら、

「ま、本当に無理はしないでね。鈴仙が心配するわ」

と俺の頭をぼんぼんと叩き、去って行った。

それと入れ替わる形で入ってきたのは、まさかのじいちゃんだった。

どこからか連絡を受けて駆けつけたらしい。いつも、ニコニコしている顔は今回ばかりはいくらか血の気がない。

「大丈夫か？」

「ああ。過労、だってよ。そんなに疲れてないはずなんだけどなあ……………」

「じゃが、ゆっくりするのだぞ？」

「分かってる、分かってる。下手に動いたら永琳さんに何をされるか分からないし」

これは冗談抜きで何をされるか分からない。入院期間が延びるのは確実だが。

「……………」

しかし、今回のじいちゃんはどこかおかしい。基本的に楽天安じいちゃんなのだが、今日ばかりはその面影はなく、どこか思いつめたような、影のある顔だ。

「じいちゃん」

「……………」

「じいちゃん！」

「ぬお!?! おお……………すまん、すまん。ついブーツとしておったわい」

「何かあったのか? 今日(jin)のじいちゃん、変(ま)だぞ?」

「何かあったも何も、孫(まご)が倒(た)れて平氣(へいけい)なジジイ(ぢぢい)がおるか」

「わしはずつと心配(しんぱい)してたんだぞ」

じいちゃんの手(て)が伸び(の)びて、俺(おれ)の頭(かぶ)を撫(な)でる。

「事情(じじょう)があつたとはいえ、人(ひと)との交流(こうりゅう)が苦手(くるで)なお前(まへ)さん(さん)を残(のこ)して逝(い)つてしま(し)まう事(こと)を。別(わか)にお前(まへ)さんの両親(りやうしん)を信用(しんよう)してないわけ(わけ)じゃないぞ。でも、わしはお前(まへ)さんが成長(せいちょう)する過程(ていけい)を見ておきたかつた」

「もともと、たくさんの人(ひと)とワイワイ過(か)ごすより少人数(せうにんすう)で静(しず)かに過(か)ごしたい性(せい)分(ぶん)だ。別(わか)

に人と交流が得意じゃなくても問題ないよ。それに友達が壊滅的にいないわけでもなかったし」

我ながら苦しい言い訳にじいちゃんは少しながら微笑んだ。

「そうだ、今度守矢神社で宴会をやる予定なんだ。せっかくだからじいちゃんも参加してよ」

「本当の事を言うと、お前さんがここに来てくれて嬉しい」

「お前さんが外の世界で死んだ者として、ここにいる事を決めた事が嬉しい。本来なら祖父ならばそう思っただけじゃないのじゃろうが。なんせ、孫が死んで嬉しいと言っているようなものじゃからな」

すっかり白くなった髪を掻きながら、告げた。

「お前さんとは何年も会えずここにいた。じゃが、今じゃこんな風にゆつくりとお前さ

んと過(い)せる」

「皮肉なものじゃな……………こんな幸せな時間がお前さんの死によって得るなんて……………」

その声はどこか、寂寥が漂っていた。

—————

「まだ、起きてるの？」

ベッドの上で身を起こしボーツとしていた俺に、永琳さんが声をかけた。

「いやあ、じいちゃんの言葉が少々……………」

俺は何て気楽でいたのだろう。

まだ、外の世界にいた時のじいちゃんは見上げていたのが、ここに来ると、同じぐらいの目線になっている。

俺の事をずっと考えてくれてたじいちゃんに対して俺はどうだ？ここにしていると決めた時、あまりにも短絡的に考えていたのではないか？残された人の事を考えてたか？

今の俺は幸せなのかもしれない。でも、それは不幸によって生まれた皮肉な幸福だ。その不幸自体、自業自得に近いものがある。しかし、自分自身の不幸だけではない、周りの不幸も踏まえて今、幸せなのだ。それって、幸せなのか？

「俺って幸せでいいんですかね……………」

「？」

「幻想郷に来てからは外の世界の時よりも、人と話せますし、やりがいのある仕事もある。ちよつと、幸せ過ぎませんかね……………外で親が家族が友人がどんな思いをしたのかも知らずに」

「そうね、私も月の都から逃げて、こんな所にいるもの。弟子を残してね」

「えっ」

「正直、申し訳ないとは思ってるわ」

「……………やっぱり、そうですよね」

「でも、それは自分が幸せになってはいけないという理由にはならないわ」

「!!」

「言いたいのはそれだけ。早く寝なさいな」

そう言い残し、永琳さんは病室から出た。

俺は外の景色を眺めた。夜空には月と静寂があつた。

そんな中、俺は永琳さんの言葉が脳裏に焼き付いて離れなかつた。

「あれ？景色が霞んで見えるなあ……………」

泣いているのかな？目を拭うが涙は出ていなかった。やっぱり、疲れてるみたいだ。
少し、眠ろう……………

「……………ん」

「スウー……………スウー……………」

目が覚めると、俺のベッドで妖夢がうつ伏せとなって寝ていた。

周りを見れば、早苗や鈴仙も椅子に座ったまま寝ていた。みんなわざわざ……………するど、ドアが開き、永琳さんが顔を出した。

「あ、おはようござい」やつと起きたわね……………」え？」

やつと起きた？ドウイウコツチャ？

「体調は？どこかおかしなところは？」

「別に……………いつも通りですが」

「……………本当に？」

「はい」

「なら、良かったわ。てつきり、死んじやうかと」

……………んん？

「それじゃあ、私は」

「え、あ！ちよつと！」。パタン

言い終わらぬうちに出て行ってしまった。そんな俺の声で目覚めたのか、妖夢が可愛らしい欠伸とともに目を覚ました。

「ふああ……………」

「おはよう、妖夢」

「おはようございます……………勇人さ……………ん!？」

一瞬、妖夢は驚いたような顔をしたかと思えば、いきなり

「勇者さん!!」

と思いつきり抱きついてきた。

「うお!?ど、どうした?妖夢」

「だ、大丈夫なんですか?」

もはや、半泣きの状態で妖夢は聞いた。

「大丈夫もなんも……この通り、元気だが……」

「本当に大丈夫なんですかね!?死んじゃわないですかね!」

「おお、お、落ち着け!まだ、死ぬには若いから!」

「ほ、本当ですか?」

「本当だ、本当。ただの過労だって」

「だ、だって、勇人さん3日間、目を覚まさなかつたんですよ？」
「え？」

永琳さん曰く、突然、高熱に襲われ危険な状態に陥つたと言う。あまりにも突然で鈴仙が夜俺を訪れなければ最悪死んだ可能性もあると言われた。しかしながら、当の本人である俺は今ピンピンしてるし、高熱が出たとは思えないくらいに元気だ。いや、寧ろ力が湧いてくる気が……………

「ああ……………本当に良かった……………」

「う、うむ……………心配かけたな」

「あ！勇人さん！」

「え？ああ！目が覚めたのね!？」

早苗と鈴仙も目を覚まし、俺に飛びついてくる。

「大丈夫だったんですね！」

「フガッ!？」

早苗が頭を掴み抱きしめる。そのせいで……………その、あの、こう豊満な……………

「ムグツ!？」

「こ、これは幸せなのか……………だが、命の危機が……………」

「さ、早苗さん！ 勇人さんが窒息しかけてます！」

「ああ！ ごめんなさい！」

幻想郷はやはり朝から賑やかだ。でも、そういうのが幸せ、なんだろうなあ……………

—————

「……………」

「あらあ、月の賢者さんもあるう方が悩んでるのかしら？」

「……………紫ね。何の用かしら？」

「勇人君が危険な状態だつて聞いたからお見舞いに来ただけよ」

「なら、部屋を間違えてるわ。ここには彼はいないわよ」

「知ってるわ。今、彼お取り込み中だもの。そんな時に難しいかおしてる貴女を見つけて、ね？」

「なんで、悩んでるのかは知ってるのでしょ？」

「ええ……………勇人の事でしょう？」

「言わずとも、ね。本当に彼、人間なの？」

「さあ……………私には判断しかねるわ」

「そもそもがおかしいのよ。ただの人があれだけの霊力を持ち、姫様に匹敵、それ以上の能力を持つなんて」

「それに、あれだけの熱を3日間も出しときながら、突然ケロッとしてるなんて、化け物か何かかしら？普通の人間であれ程の熱を出した者はみんな死んだわよ」

「そうね。みんな、忘れてたかもしれないけど人間って基本的に弱いよね」

「強い人間——霊夢は博麗の巫女という例外的な人間。魔理沙は魔法を使えるけどそれ以外は普通。早苗は諏訪子子孫だったりするし、咲夜はそもそも謎、ね」

「でも、勇人はどこを取っても本来ならば普通の人間って言いたいのかしら?」

「ええ、でも、稀に見る霊力を備え、規格外の能力も持つ。おかしな話よね」

「でも、あの爺さんが何かしたのならありえる、とでも言いたいのかしら?」

「話が早くて助かるわ、後はもう何も言わなくてもいいわね?」

「ええ、貴女が何を企んでるかは大体分かったわ」

第95話 復歸の日の青年

寺子屋から賑やかな声が聞こえる。

今は昼頃だろう。

人里自体賑やかなのだが、ここの寺子屋も負けずと賑やかである。

寺子屋の外観は、まさに江戸時代などにありそうな木造建築で、知らぬ人は時代劇のセツトと勘違いしそうである。

廊下から授業を行う部屋に行けば、机を囲む形で、フランと天子とチルノの姿が見えた。

「あ！先生だ！」

真つ先に明るい声を発したのは、フランである。その後が続く様にチルノと天子がこちらに目をやった。

机の方に目をやると、将棋盤が目に入った。驚いた事に天子とフランが指しているようだ。

「ふっ。随分とやられている様だが、天子」

そんな俺の声に、天子は盤上を睨みつけた。

「わ、私は大人だから子供には手加減してあげてるのよ！でも、意外だわ。フランが将棋が指せるなんて」

「いや、お前も指せるのは意外だぞ」

「ふふ、私は先生に教えてもらったからね！」

確かにフランに少し教えたが……ここまで強いとは……子供は吸収が早いと聞くが、フランは中でも別格だろう。

「でも、天子は最初っから、手なんて抜いてなさそうだったけど？」

とチルノが悪気のない顔で、フォローのしようのないセリフを吐いた。天子はバツの悪そうな顔になり、盤上をさらに睨みつけた。

まあ、チルノが将棋のルールを理解しているのかは怪しいがみんな、仲良く過ごさせている様で何よりだ。……………なんだか、自分がおっさん臭く見えてきた。まだ、未成年なのに。

不意に、フランは立ち上がり

「慧音先生に勇人先生が戻ってきたって伝えてくる！」

「あら？敵前逃亡かしら？これだと、私の勝ちよ？」

「なら、天子が勝ちでいいよ。勇人先生が戻ってきたことを伝える方が大事だもん」

と満面の笑みとともにそんな事を言って、パタパタと駆け出していった。一方の天子は戸惑いがちに盤上を見つめて、やがて、フランのいた場所を指差した。

「しようがないわ。貴方が代わりに相手なさい。フランに教えた貴方に勝てばフランに勝ったのも同然よ！」

いささか、強引な介錯だが、俺は言われるままに腰を下ろした途端、

「身体は大丈夫なのかしら？」

不意の言葉が降ってきた。思わず、顔を向ければ、天子は相変わらず盤上に目をやっ
たままである。驚きで何も言えない俺に

「人間は脆いんだから、気をつけなさいよね」

「そ、そうだな。それにしても、お前が人の心配をするとは……………明日は地震か？」

気がつけば、チルノは横でスヤスヤと眠っていた。天子もそのチルノを見、

「私は心配はしてないわ。チルノ達が心配しているのよ」

「は……………先生失格、だな」

おれが苦笑まじりに言うと、天子は歩を進めながら言った。

「珍しいのよ？妖怪が人間にここまで信頼しているのは」

駒を進めようとした手が、思わず止まる。

「自分達のせいで、貴方が倒れてしまったなんて思ってるのよ？このままだといつか死んじゃうんじゃないかって」

「……………」

「言っておくと、貴方はこの中では最年少よ？妖怪と人間じゃあ、色々わけが違うのよ」

「……………」

「時間切れよ」

と言い、天子は勝手に俺の飛車を前に進めた。

呆気にとられてた俺の前で、その前に出した飛車を角行で奪い取った。それからようやく顔を上げ、ニヤリと笑った。

「そんなんじや、いつまでも心配させたままよ？」

「……………随分と言う様になつたな」

「今までのお返しよ」

肩の荷が下りた様な気がした。

天子はさらにニヤニヤと笑っている。

「折角、休んでもいいと言われているのに、いつまでも全力疾走してるのが今の貴方よ。時折、他人の言う事を聞いて手を抜かないと長く持たないわ」

「お前に正論を言われるとはな……………まあ、いつも手を抜いてるお前は逆に全力疾走を覚えないな」

俺が皮肉を込めて言えば、再びニヤリを笑う。今回ばかりは天子のペースに飲まれて
いるらしい。

「大丈夫よ。貴方から教わったから」

「へえ……………俺から、ねえ……………」

「そんな事を言ってる場合かしら？見なさい、王手よ」

天子が強引に桂馬を進めた。無論、桂馬の単独突撃は意味を成さず、俺はその桂馬を

粉碎した。

今思えば、休日2日と言えども、寺子屋は全部バカ真面目に授業をしていた気がする。休日の日も頭の中にあるのは、授業の事であつて、さらに天子の加入によつてさらに考え込む様になった。今日も今日で頭の中を占めているのは、休んだ分の授業をどうするかという事なのだから、笑えない話である。

「天子、ありがとうな」

「ん？何か言つた？」

「さあ……………」

王手、と歩を進めた。

「感謝してくてる割には、容赦ない一手ね」

「聞こえてたのか」

「よく聞こえなかつたのよ。もう一度言つて」

「くだらない事を言わないで、早く王を逃がしてやれ」

アホな問答をしていたら、いつの間にか衣玖さんがおりこちらを眺めていた。

「ふふ、すっかり、勇人先生の色に染まりましたね。総領嬢様」

相変わらず、空気を読んでものか読んでないのか分からないタイミングで出てくる。

「どんな色、とは聞きませんが、何をしに？」

「様子見ですよ」

「それは結構な事で。でも、一方的な試合展開の将棋しかやってませんよ？」

と王を避難させた天子の飛車を取る。あつ、と天子は若干悔しそうな声を出す。すかさず、俺から奪い取った飛車を置き、こちらの玉将を狙う。

「それでも見る価値があるんですよ。前の総領嬢様なら、将棋で負けそうな時はすぐに放り出してどこかに行ってたんですから」

「何よ、私が負けるとでも言いたいの？」

角行を取られている天子がそんな事を言つてもイマイチ説得力がない。

「それにしても、容赦ないですね」

「天子曰く、俺は常に全力疾走なので」

「まあ、手を抜く事も大事だと言われちゃったんでね。明日は授業を無しにしようかと」

再び桂馬を強引に前に進める天子だが、今度はそれを無視して奪い取った角行で

「王手」

「ふーん、じゃあ明日は何をするの?」

「チルノ達がしたい事をやらせるさ」

「弾幕ごっこかもよ?」

「構わん。兎に角、俺が授業の事を頭から無くせばいいんだから。それに身体が鈍つてから久しぶりに弾幕ごっこをするのも、悪くない」

「なら、総領娘様のリベンジマッチでもしたらどうでしょう?」

「成る程、いい案ね」

と王を逃がしたが、俺は飛車を置き

「王手。まあ、2つのリベンジになるな」

「え？………ああ！もう！」

「その様ですね」

「いいわ！明日、貴方を打ち負かせてあげるわ！覚悟なさい！」

と言い、部屋から出て行った。苦笑する俺に衣玖さんは一礼した後、天子に続く様に出て行った。

取り残された俺は夕焼けの空をただ眺めていた。

—————

「……………ん」

次の日の朝、俺は珍しく自力で目覚めた。時計に目をやれば、まだ7時。

普段、朝は滅法弱く、目覚めても身体がだるい日が多い。頭の回転も悪く、ひどい時は何をしていたかさえ忘れてしまうぐらいに。だが、今日はやけにスッキリとした目覚めである。

身体は軽く、頭もスッキリとして、今からでも数学の問題を解きまくれそうな気がする。

ベッドからでて、洗面所に向かい顔を洗う。そして、普段は時間に余裕がないせいで無頓着な寝癖をしつかりと直す。

簡単に朝食を作り、一息ついたところであることに気づく。

「あれ？俺、もしかして一人で全部やった？」

何をバカな事を、と思うかもしれない。だが、普段の朝は早苗や妖夢におんぶに抱っこの俺が自力で目覚め、自分で朝食を作ったのである。自分のやった事に自分が一番驚いている。

「お邪魔します」

すると、玄関の方から早苗の声が聞こえる。いつもの様に俺を起こしてきた様だ。よく考えたら年頃の女の子が男の子の家に勝手に入れる事なんてそうはないだろう。

「おはよう、早苗」

「おはようございます、勇人さ……………ん!？」

流れる様に挨拶するかと思えば、驚いた様な声を出す。

「どうした? そんなに驚いて」

「い、いえ……………いつもはまだ寝ているはずなのでつい……………」

「うむ……………やはり、早起きをしっかりと習慣にする様にするか」

「えっ、それだと寝顔を見るチャンスが……………」

「ん?」

「い、いえいえ!何でもありませんよ!早起きは大事ですからね!」

「お、おう……………」

今日は早苗の様子が少し変だ。しかし、早起きが珍しがられるのも良くないな。

「それにしても、今日は身体が軽いな……………」

所謂、絶好調と言うのだろうか。調子が良くない事は多々あったのだが、ここまで調子が良いのは初めてだ。病明けだと言うのに。

「そうですね。思いの外、雰囲気も普段より明るいですし」

「明るい……………」

「ええ。いつもは明るいと言うよりは寧ろ、暗い雰囲気……………目の隈も合わせてさら……………」

「うっ……………やはり、そう言う印象を与えてしまったか……………」

「で、でも、勇人さんを知ってる人なら大丈夫ですよ!!」

「あ、ありがとう………それにしても、本当に絶好調だ。身体が軽いと気分もいいな。今なら弾幕ごっこだってしてもいいぐらいだ!」

「程々にしてくださいよ?」

「問題ない。その辺はちゃんと見極めるさ。よし、時間も時間だし、早速寺子屋に行くか!」

「行つてらっしゃい、勇人さん」

「おう! いつてくる!」

と戸を勢いよく開け、寺子屋へと向かった。

「おはようございます！ 勇人さん！」

空を気持ちよく飛んでいると上から声が聞こえた。声の主からして射命丸文だろうか。

「おはよう。何の用だ？」

「いえ、少し取材を……………」

「いいぞ」

「そうですか。今回もダメですか……………えっ？」

勝手に落ち込んだかと思えば間の抜けた顔をこちらに向けた。

「え、いいんですか？」

「ああ」

「本当ですか？」

「くだい。取材を受けないぞ？」

「い、いや、普段は拒否するので………どんな心変わりで？」

「今日は機嫌がいいんだ。その機嫌が変わらないうちにしなないと、知らないぞ」

「あやややや、これは珍しい。最近、良い事が？」

「それは取材か？」

「ええ、で何かあったんですか？もしかして………早苗さんともう、大人に………」

ふざけた事を抜かす文に軽く頭を叩いた。あいたつ、といった後

「それは、まだ、と言う事ですね」

「そもそも、お前は何を書いてんだ？」

「そうですね………最近は勇人さんの性事情を、と思つてたんですが………何もないんですよ」

「………」

「ヒイ！ごめんなさい！ごめんなさい！謝りますからその銃をしまってください！や

「はあ………何を書いてくれようとしてんだ」

「あれは嘘ですから。本当は勇人さんの好みを」

「ほう………」

「えーっと、最初はロリがお好み「ちよっと待て」なんですか？」

「俺はロリコンではない」

「はい、だから」最初は」と。貴方がフランやチルノを見る姿はロリコンというよりは父性的ですからね。その線は消しておきました。で、妖夢さんからの取材で、貧乳がお好みと」

「オイ！」

「あれ？違いますか？」

「い、いや、その………確かにスレンダーな方が好みとはいつたが………」

「じゃあ、貧乳が好きなんですね」

「まず、その話題をやめろ！」

「うーん、でも、早苗さんからは大きい方が好きなんじゃないかと聞きましたし

………」

「早苗まで何を………」

「大丈夫ですよ！勇人さんだって男の子ですから！」

「いい加減に………」

「で、どっちが好みで？」

「は？」

「貧乳か巨乳か」

「は？」

「だから、きよ「分かってる！」……………なら答えてくださいよ」

「も、黙秘権を……………」 「取材を受けると言ってくれましたよね？」 ……………お、俺は

……………」

「やっぱり、ダメだ！」

と、俺は全速力で寺子屋へと向かった。

「あ！逃げるのは無しですよ！」

ガシツ！

「ぬお!?!」

「速さで私に敵おうだなんて、人間では一生無理ですよ？」

「むう……………」

「さ、答えを！」

「ぐっ……………俺は……………」

次の日の文々。新聞は様々な人が注目したとかしなかったとか。白髪の剣士が大いに喜び、緑髪の巫女が衝撃を受けたとか受けなかったとか。

第96話 リベンジの日の天人崩れ

自分の行動を振り返って、あまりにの恥ずかしさに後悔する。

そういう経験は誰でもあるだろう。まだ、物を知らない時に悪意なく言ってしまった言葉とか酔っ払った勢いで行動とか。

そういうのは大分経ってから突然フラッシュバックし、あまりにの恥ずかしさに悶絶するものである。

もちろん、俺にだってその様な経験はいくらでもある。大勢の目の前で転けたとか、ノリでふざけた事とか……………文のインタビューで失言した事とか……………

もう、不安しかねえ。いくら機嫌がいいとはいえ、文の質問に馬鹿正直に答えるんじゃないかった……………

しかし、俺とて男だからそういうのに興味がないわけでは……………ああ、なんて言い訳をしてるんだ、俺は。

今日という日は、いい目覚めで始まり順調に進む物だと思っていたが……………そんな事はないらしい。ああ、明日の新聞が不安で仕方ない。

そんな事に絶賛後悔しながら、俺は寺子屋に到着していた。
戸を開け、部屋の中を見ればいつもは賑やかな教室がだれもいなかった。

「おや？なんでここに勇人がいるんだ？」

「うお!？」

後ろから急に慧音さんから声をかけられ上ずった声が出てしまった。とりあえず、落ち着いて俺は慧音さんと向かい合った。

「なんでって、今日は授業があるからですが……………」

「??天子からは外で授業があると聞いたぞ？」

「そんな事は……………」

ああ、成る程。昨日は授業をしないと発言してたな。弾幕ごつこもやっていいんじゃないかという節の事を言ってたので、もしかしたら弾幕ごっこをしているかもしれない。

「天子が、勝手なチルノ達を連れてどこかに行ったのでしょうか」

慧音さんは、俺を見たが何も言わなかった。

「まあ、今回は好きな事をやらせようと思つてましたし……どこかに行つたか知つてますか？」

苦笑交じりに俺がそう言つと、

「霧の湖だそうだ。早く行つてやつてくれ」

と言ひ、詮索もせず、苦笑交じりに言つた。それに俺は会釈する事で感謝を示し、すぐさま霧の湖へと向かつた。

霧の湖に着くと、すぐにチルノ達がいるところが分かった。いくら、霧に包まれてると言えども、盛況に弾幕ごっこをしていれば嫌でも目に入る。

近づいて様子を見ると、どうやらチルノとフランがまた戦っているらしい。なんやかんやで仲がいいんだな。

と物思いに耽っていると、天子がこちらの姿確認し手招きしていた。

「遅いじゃない。とつくに始めさせてもらってるわよ」

「はあ、確かに昨日は授業を休もうかと言ってはいたが勝手にしてもらっちゃ困る」

「細かい事はいいの。貴方だって久々なんだからうずうずしてるんじゃないの?」

「まさか。そんな戦闘狂じゃない」

と口では否定しつつ、ちゃっかり昨晩はしっかりと銃の手入れをしていたりする。

「ほんと、久しぶりねえ。私の緋想の剣が泣いてるわ。前はしてやられたけど、今回はそうはいかないわよ?」

「ハハ、負けても泣くなよ？」

「言っておきなさい。今までの私とは違うのよ！」

はいはい、と聞き流しつつ俺はもう一度銃の点検をした。

「先生」

チルノとフランがボロボロな状態で駆けつけてきた。

「私たちは終わったよ！」

「そうか。どっちが勝ったんだ？」

「私よ！」

とフランが誇らしげに言った。

「ちえ……………今回は勝てると思ったのに……………」

「でも、惜しかったわよ？」

悔しがるチルノを天子は慰めた。すっかり、お姉さんポジを確立している。だが、天子の言うことも一理あり、フランにもダメージが及んでいるあたり、確実に強くなっていると言えるだろう。

フランの能力が脅威なのは言うまでもないが、チルノの能力だって脅威である。絶対零度まで下げられるもんなら、たまったもんじやない。

「2人が終わったから次は私たちの番ね？」

「ああ、腕がなる」

と二丁の銃を持ち、天子と対峙する。

二丁拳銃のメリツトは言うまでもなく一丁の拳銃よりも単純に2倍の速射となる事。つまりは下手な鉄砲も数撃ちや当たる理論だ。

まあ、実際問題としては装填時に一度片方を仕舞わないといけないとか、片手では狙いをつけにくいとか……………etc。

だがしかし！俺の自動拳銃は何も本物の弾丸を使つてはいない！俺の霊力を使つているのだ！だから、リロードはグリップに霊力を込めればいいのでいちいちしする必要

はなし。反動も軽減されるので狙いもブレにくい！（とは言っても左の命中率は悪い）つまりはデメリットは控えめなのだ！だから、俺は二丁拳銃なのだ。まあ、本当の理由はかっこいいからだけだ。

「その飛び道具で私に勝てるかしら？」

「前回の敗北した奴が言うか、天子」

「ふふ、その余裕はいつまでもつかしら？チルノ！合図をして頂戴！」

「え？よ、よーい……………ドン！」

チルノの気が抜ける合図と共に天子は地を蹴り、こちらに近づいていた。

咄嗟に銃を構え、1発ずつ発砲する。序盤は基本様子見だろう。そう考え、控えめに撃った。

「ふんっ！」

2発の弾は真つ直ぐに天子へと高速で迫るが、天子が2発を軽くなぎ払った。

「なっ!？」

俺は思わず驚きの声を出す。弾丸が弾かれた事ではない。牽制の発砲があつたのに、構わずこちらに直進してきたのだ。

すぐさま、銃を乱射するが天子は全て剣で弾いた。

「ッ!？」

今度は弾丸が弾かれた事に驚く。距離が近くなっているはずなのに超高速で進む弾丸を簡単に弾き飛ばした。

「前は私が油断したけど………今回は貴方が油断したわね？」

俺は来るであろう攻撃に備え、腕を十字に組みガード態勢をとった。

「天符『天道是非の剣』!!」

天子は剣を上方からではなく下方から突き出し、

「うぐっ!?!」

腹へと突き立て、そのまま上空へと突き上げた。

俺は上空へ飛ばされ、軽く意識が飛びかける。

「まだまだだよ！地符『不讓土壤の剣』！」

と天子は声高くスペルカードを宣言する。そして、剣を地に突き刺す。

ドゴオ！

重力に従い、落ちる俺の目の前にはその落下地点が突如隆起していた。

隆起した地面にど突かれ、もう一度飛ばされる。しかし、隆起は一カ所ではなく、数カ所起こり、連続して攻撃を食らう。

「あーはっはっはーその程度かしら？」

高らかに笑う天子の声が響く。

「あー……………いつてえ……………」

「ん？まだ、立てるのね？勝負はまだまだよ？」

最初の攻撃が腹に決まって、相当痛い。一瞬息がでしなかつたぞ。それ以降は靈力で肉体を強化してどうにかダメージを和らげた。

しっかし……………慢心しすぎたなあ。気をしっかり引き締めていかないと。

「よし、こちらからも行くぞ！弾痕『バレットホウル』！」

装填された弾を全て撃つ。その弾は普通の弾丸よりも遅い。

「その飛び道具の性能はもう分かってるのよ！」

と、横に避ける。しかし、弾丸はその動きについて行くように方向を変えた。

「え!?!」

1つの銃につき15発、それが二丁なので計30発の弾丸全てが自動追尾弾だ。いくら、遅いと言えど比較的なので、避けるのは難しいだろう。

「きやあ!!」

真っ直ぐにしか進まないと思っていたのか、天子はまともにガードも出来ず、弾丸を喰らう。

が、天界の桃のお陰がそれ程ダメージになっていないらしい。本当にあのドーピング桃はどんだけすごいんだよ。

「ちよつと驚いたわ。でも、やっぱり大して痛くないわね」

「そうかい、ならもう一度喰らうか?」

「嫌よ。そんな攻撃くらって喜ぶタチでもないし」

「なら、せいぜい避けるんだな」

霊力を込め、装填したところで再び引き金を引く。

「天気『緋想天促』」

すると、天子の両手から赤い弾幕が展開された。

「お前、弾幕撃てたのか？」

「あつたりまえじゃない！」

ずっと、近距離で攻撃して来るもんだから出来ないかと……………

兎に角、俺は天子の弾幕を不変の空間で防御した。空間に衝突すると同時に弾幕は霧散した。

「ねえ、貴方のその能力は何なのかしら？」

「ん？知りたいか？」

「ええ」

「教えてやってもいいけど……………勝負が終わつたらな」

と全力で霊力を込め、弾丸を放つ。

それを天子は剣で弾く。う、うーん……………結構、力込めたつもりなんだが……………

「全然力が足りんな……………」

「人間が力勝負挑むのはアホだと思うけど？」

「いや……………まあ、そうなんだけど……………」

と、ポツポツと雨が降ってきた。次第に雨脚が強くなつたかと思えば、ザーツと大雨となつた。

「あ！洗濯物とりこんでねえ！」

「そんな事どうでもいいじゃない。ほら、さつさと来なさいよ！」

「どうでもいいわけないだろ！カッターシャツは2枚しかないんだぞ!!」

「ああ！もう、うるさいわね！」

ともう一度、弾幕を放つ。それをガードする。その時、弾幕によって視界が塞がれるのだが……………視界が晴れた時には天子の姿はなかった。

どこに消えやがった……………

「……………!?!」

「要石『天地開闢プレス』よッ!!」

「はああああ!!」

なんと天子は空からどこから持って来たのか巨大な要石を抱えて落ちて来ていた。

「殺す気力アア!!」

「ぶつつぶれなさい!!」

ドゴオオオオン!

「や、やったわ……………わ、私が!」

ピシッ

「ん？」

ガゴオン！

「え!?! 要石が砕けた!?!」

「全く……………流石にこれは死ぬかと思っただぞ」

「え!?! な、なんで!?! 死んだはずじゃ……………」

「残念だったな。と、ゲフンゲフン、能力を使ったのさ。ていうか、殺す気だったのか？」

本当に恐ろしい……………要石が迫った時は走馬灯のようなものが見えた。

「へへ……………やるじゃない。そこなくっちゃ!」

と、攻撃を再開しようとする天子だが、自分の異変に気付いた。

「あ、あれ？動かない？体が動かない？これも貴方の能力？」

「イエス。俺の新しいスペルカードにしようかなと思っている技。名前はそうだなあ………不変『千古不易の才悩』なんてどうだ？」

不変『千古不易の才悩』——簡単に言えば近くの物体をその場所にあるという事象を不変化させる。そのことによつて、”そこにある”という事以外の事象をさせなくなる。つまりは動けなくなる。

「まあ、後、10秒持つのがいいところだな。あとは分かるよな？どちらが先に仕留めるか。勝負だ」

「ふ、ふ、ふ………いいわ………この天気的气质ならあれを出せるわ」

氣質？まあ、そんな事はいい。兎に角、精一杯の弾丸を放つだけだ。

「3………2………1………今だ！」

効果が切れたと同時にありつただけの霊力を銃に送り、止め処なく銃を乱射する。一方の天子は何も出来ずただ喰らうのみ。

この勝負もらった！

「はあ……………はあ、流石に効いただろ」

「くう……………やるじゃない。流石に痛いわ」

「は!?!」

嘘だろ？あれだけの弾丸を……………そもそも、1つも貫通していない。

「気符『天啓氣象の剣』」

剣に何かが集まり、赤く光る。

「さあ、これで終わりよ！」

すると、その剣をそのまま投げた。人外の力で投げられた剣はまるで一筋の光の如く、俺を貫いた。

「……………ブフツ」

ま、マジかよ……………天子、俺、人間だつて……………人間は……………脆いつて……………
言ったのはお前だろ……………

「……………あ」

腹部から止め処なく血が流れ、口からも血が漏れる。

も、もう、ダメだ……………おばあちゃん、今、行きますよ……………

バタツ

「ゆ、勇人ツ!?ご、ごめんなさい!」

「ち、チルノ！え、永遠亭はどこ！」

「え、あ、えっと……………」

「私知ってるよ！」

「ふ、フラン！なら、教えて！」

「わ、分かったわ。先生はどうしたの？倒れたけど……………」

「いいから、早く！」

「あ、ああ！どうしよう……………人間なのに……………私、ほ、本気でやるなんて……………」

「し、死んじゃ嫌よ!？」

「……………え？お、お腹の傷、塞がってる？」

第97話 炉辺談話の日の青年

「……………え？お、お腹の傷、塞がってる？」

「え？そもそも、傷なんて無いじゃない……………」

「どういう事なのよ！」

「説明しよう！」

「フアツ!？」

「ハハハハ、なんだ？その死んだはずなのに蘇った奴を見るような顔は？」

俺がそう問うがまだ金魚みたいに口をパクパクさせている。

「え？ちよっ……………ええ!？」

未だに混乱している天子のためにも説明してあげた方がいいかもしれない。

「なんで……………勇人は確かにここに倒れてる……………はず……………？」

と指を差すが、俺がここにいるのだから当然の如く指差す先には誰もいない。

「あ、あれ？た、確かにいたのに……………」

「幻覚でも見たんじゃないか？」

「そ、そんな訳ないじゃない！確かに、この手で貴方を触ったわ！」

と手を見ながら言う天子。

「これも能力の1つ、と言えば分かるかな？」

「能力？実体のある幻覚を見せる能力とでも言うの？」

「うーん、あながち間違つてはいないな」

「何よ、もったいぶらないでさっさと教えなさい」

「はいはい、俺の能力は『物事を不変にする程度の能力』だ」

「ふーん……………不変、と言うのは文字通り変わらないと捉えればいいのね？」

「ああ、お前を動けなくしたのは能力で”その場所にいる”という事を不変にしたからな」

「へえ、じゃあ、さっきの幻覚はなんなのよ?」

「うーん……………なんて言ったらいいかな。……………天子、攻撃する時にどのように攻撃するかイメージするか?」

「ええ、逆に考えずに攻撃なんかするの?」

「まあ、そうなんだが……………さっきの幻覚は”そのイメージを不変化した”ものなんだ」

「はあ?それなら、貴方は攻撃を受けたはずじゃない」

「ああ、言葉が足りなかった。”お前の中にだけ”、イメージを不変化した。つまりは、お前の中ではイメージした通りに攻撃が行われ、イメージ通りにダメージを与えた事になっっている」

「んー、それって、結局幻覚を見せられたという事?」

「ああ、だからあながち間違っただけでいいと言ったんだ」

「ふーん……………結構な応用力ね」

「基礎的な力は圧倒的に劣るんでね。まあ、お前が何もない所で勝手に焦って、チルノに助けを求める姿は中々に滑稽だったぞ?」

「く……………ッ！まだ、続けるのね？」

「いや、もう降参だ。はつきり言つてさつき技ができたのはまぐれだし、体も限界に近いんでね」

「という事は……………私が勝ちなのね?!」

「ああ、靈力も尽きたし、お前の勝ちだな」

「勝った気はしないけど……………でも、私の勝ちね！ふふふ！」

「はいはい、おめでとう。俺はとりあえず帰るから、お前たちはこの後は好きにしていぞ」

「そう、何かあるのかしら？」

「葎香との約束を果たすための準備をしに。とは言つても、守矢神社で宴会を開くだけなんだが、お前も来るか？」

「もちろん！参加させてもらうわ！」

「そうか、なら宴会は明日の夜だ。衣玖さんも誘つてくれ」

「ええ、楽しみにしてるわ」

「ああ」

そう言い、俺は天子達を後にした。

守谷神社に向かう途中、俺は色々な考え事に耽っていた。

宴会での懸念もあるが、考えの中で最も占めている事は天子の変わりようである。

もちろん、いい意味での変化であるが、あそこまで変わるところからもかなり驚く。普通、問題児をどうにかする事は容易なものではない。

まあ、教師はかなり大変なものだろう。もともと、自分自身がそんな仕事をするとは思ひもしなかったが。

と、今までの寺子屋の教師としての生活を振り返って、思わず苦笑した。

「気味が悪い男だねえ、何を一人でニヤニヤしてるんだい？」

不意に声をかけられ、辺りを見渡すがそれらしい人は見当たらない。

「大の男がニヤニヤしながら飛んでいるのは気持ち悪いわ。何を考えてんのかなあ？」

目の前、霧が集まったかと思えば、小さい女の子の形となり俺の前に姿を現した。

酒の入った瓢箪を手に、すでに酔っ払っている伊吹萃香はこちらもニヤニヤしながら俺の方に視線を向けていた。

「酔っ払っいなながら、飛んでる方も些か奇妙なものだと思うが？」

軽く悪態をつくも、萃香は意に介した様子もなく水の如く酒を煽っている。

どう見ても子供にしか見えないこの酔っ払いは、人間よりも遥かに力を持つ鬼で、幻想郷でもトップクラスの力の持ち主だ。変人の多い幻想郷の中でも、一際変人だが、俺には彼女に借りがある。

「それはいいが、約束はちゃんと覚えてるんだろうね？」

「もちろんだ。明日の夜に守谷神社でちゃんと宴会を催す」

「なら、いいよ。鬼は嘘が嫌いだからね」

「だが、鬼は気楽そうだな。仕事が無い者の余裕か？」

「そうやつかまないで。鬼にだって苦労はあるんだ」

と再び瓢箪に口をつけ、傾ける。

「まあ、鬼はお前達人間と色々と出来が違うんだ。ほんと、人間にも鬼くらい酒が強ければ飲み甲斐があるってもんなんだけどなあ」

「そんながぶ飲みしたら、うまい酒も味わいを楽しめないじゃないか。ゆっくりと飲むのがいいんじゃないか」

「別に人間の飲み方にケチをつけるつもりはないよ。あんた達のようなおかしな人間達と一緒にいるだけでも楽しいさ」

「ちよつと待て。なぜ、俺も『おかしな人間』でひとくくりにされるんだ？ 霊夢や魔理沙とは兎も角」

「ん？ 照れてるのか？ 私とやり合えただけでも十分『おかしな人間』よ。それに、私と酒を飲んだ仲じゃないか」

「アハハ、と陽気に笑う萃香の横で俺は額に手を当てた。そもそも、一緒に酒を一緒に飲んだ記憶がない。」

「お気楽と言うけど、あんたはむしろ堅すぎるんだよ。秀才ぶってないでもっと、パーーツといったらいいじゃない」

実際、この幻想郷においては頭でっかちな天才君よりも、脳筋な運動神経抜群の元氣な子の方がいい。現代世界と幻想郷では話が違うのだ。

「実力もあり、背は他の人間の男より少し小さいが容姿も悪くわない。おまけに可愛い娘達にも好かれてる。後はもっと積極的になればいいのに」

「色々と反論したいが、今は早く守谷神社に行かないといけないんでな」

「あやや！そんな事を考えてるんですか？」

どっから湧いて出てきたのか文が現れた。

「早苗さんは可愛いですからね。里の人達にも大人気ですし。彼女の笑顔は男性にとっては犯罪ものでしょう」

「犯罪はお前の存在そのものだ、文」

「あやや、そう言っても早苗さんと一緒にいる時の勇人さんの顔は楽しそうでしたよ？」

文の言葉に、いつ見ていたと思い、

「お前は人の私生活を無断に監視してるのか？ いい加減にしないと弾丸をぶち込むぞ？」

「へえ、あんたもやっぱり男だねえ……………」

意味深な顔をしながらニヤニヤとこちらを見る萃香。

「まあ、甲斐性なしって事は確かですね。美少女に囲まれたるのに手を出さないだなんて……………据え膳食わぬは男の恥、ですよ？」

容赦ない文の言葉に思わず絶句してしまった。少し間が空いた後、

「文、お前こそ人のプライベートばかり覗いてないで、まともな記事を書いたらどうだ？
最近売り上げがイマイチとか聞いてるぞ」

「いつの話をしてるんですか？確かに少し前は伸び悩みましたけど今は順調ですよ」

俺の渾身の反撃を、あっさりと弾かれて、再び絶句してしまった。

「やっぱり面白いねえ……………」

とぼそりと呟いたのは、少し黙っていた萃香だった。

「やっぱり、あんたは面白いよ。あんたの周りは面白い事ばかりだ」

「ですが、あまり妖怪の山には入らないでいただけると助かるんですが……………」

と遠慮がちに文は言った。

「俺からしたら迷惑千万な話だ」

「いいじゃないですか。男女の話題はいつだって、最大のネタですから」

ふふふと文は意味深な顔を向ける。

「あんた、今まで女の1人や2人いなかったのか？」

「そんな風に見えるか？ 萃香」

「だって、あんたくらい男ならいそうだと思うけど？」

「残念、幻想郷と違って外は俺みたいな奴はそういう目では見られにくいんだよ」

またまたく、と文がニヤニヤしながらつつき、意味ありげな萃香の忍笑いによって、軽く頭痛がしてきた。

宴会ではこういう輩が沢山来ると思うと、げんなりとしてしまふ。

すると、目的地である守谷神社が見え、鳥居の下で早苗が手を振っているのが見えた。

「お邪魔虫は退散するよ、2人でのお楽しみがあるだろうからね」

振り返れば、既に文の姿はなく、萃香も霧と化していた。

「明日の宴、楽しみにしてるからね」

「ああ、任せとけ」

頷いた後、俺は守谷神社へと降り立った。

—————

明日の宴会のために早苗はやはり忙しそうだった。依頼したのは自分なので、ここまですてくれると申し訳ない気持ちになる。

しかし、明日の料理の下準備のために包丁を握る早苗はどことなく嬉しそうだった。

無論、俺も傍観してるわけではなく料理を手伝っている。久々に包丁を持つので手が

少し震えているが。

よくよく考えれば互いにこの夏は多忙を極めていた。輝夜により、小さくなったり、天子の加入があつたり。早苗も早苗で神社の仕事が忙しそうだった。

「早苗、神社の方は忙しいか？」

俺の声に、早苗は包丁を動かしながら応じた。

「はい。夏でも参拝客は多いです。でも、勇人さんよりは楽だと思えます」

「まあ、寺子屋はいつもお祭り騒ぎだからな。なにせメンバーがな」

「そこに天子さんも加わってさらに、ですね」

「ああ、個性派ぞろいで、俺まで変人扱いされて大変だよ」

「勇人さんだつて、なかなか個性的だと思えますよ？」

「うむ、俺も幻想郷にかなり影響されてしまったかな？」

そう言う俺に、早苗はクスクスと笑った。

まあ、口では言わないが、早苗の事は結構尊敬している。

普通の人間でありながら現人神信仰を受け、さらには神奈子様や諏訪子様の為に、外の世界を捨てて幻想郷に移住しており、それでも弱い所を見せる事なく、明るい笑顔で接してくれる。参拝客が多いのも納得だ。

すごい人達と交友があるんだ、と時折実感させられる。

「……………はあ」

「どうかしましたか？」

「い、いや、なんでもない」

「本当ですか？」

「少し考えてただけ。やつぱり、幻想郷の人達はすごいなあ、つて。あの我儘な天子だつて、ねえ。早苗も風祝だし」

「勇人さんだって、とてもすごい人ですよ！」

「すごい、人かあ……………自分で言うのもなんだけど、そんな立派な人じゃないと思うんだけどなあ……………」

「ふふ」

「ん？何か面白かったか？」

「いえ、前、勇人さんのおじいさんに『勇人は頭がいい割には阿呆だ』と言われまして、

今納得した所です」

「ハハ………早苗も言うようになったなあ」

早苗に阿呆と、言われる日がこうとは。

「まあ、兎に角、明日は宴を楽しみましょう！」

「程々にな」

「いえ、明日は沢山飲みますよ！」

おいおいと笑いながら言いつつ、俺と早苗は明日の宴会の準備を進めた。

第98話 酒宴の日の青年

鬱蒼と生い茂る木々の中を通り過ぎる者が一人。

その姿は真っ白な神御衣に長い黒髪を揺らしている。

”あやつ、どこへ行きよった……………”

そう呟きながら、人では考えられないようなスピードで駆け抜けていく。

そして、その男はひらけた場所に出、探していた者を見つける。その者は、大きな岩の上でスヤスヤと寝ていた。

「はあ……………また、ここで寝ておったか……………」

神御衣の人物は寝ている者の前で、ため息まじりに呟く。

「いい加減、起きんか！お主はそれでも神か？」

白い神御衣の者とは対照的にボロボロな直垂にボサボサの髪をした男は頭を掻きながら目を開けた。その目は青く、潤んでいる。

「お主はまたどつかに消えたかと思えば、また人間の里に行つておつたのか!」

「別にいいじゃないか……………」

「良いわけがないに決まつておろう!我々神は信仰される者として威厳がなくてはならん!それなのにお主ときたら……………そんな格好で人里を歩く……………!」

そう言われても尚、直垂の男は「ふあああ……………」と大きな欠伸をし、鬱陶しそうな顔をする。

「信仰、信仰言うけど、俺はお前と違つて信仰されなくても生きていけるからいいじゃないか。それに退屈な神様の仕事よりも、人間の世界の方が面白い」

「神はお主だけではないということをお主のせいでお主のせいで他の神達の信仰が無くなつたらどうしてくれる!」

「分かつてる、分かつてる。だから、ちゃんと変装もしてバレないようにやつてるじゃないか。何の問題もない」

また、何か言いかけようとする神御衣の男を遮るように、男はある物を取り出した。

「ん？それは何だ？」

「さあ……………人間達が武器として使つてる物らしい。中々かつこいいだろ？気に入つたから、1つ貰つて少し改造したんだ」

その武器は日本刀なのだが、刃が一般的な物よりもかなり長くなっていた。所謂、太刀と呼ばれる刀だろうか。

その刀を片手に男はヒョイと立ち、神御衣の男と向かい合つた。そこから分かるのだが、直垂の男の背は神御衣の男よりも頭一つぐらい小さく、とても長い刀とは不釣り合いいに見える。

「兎も角、お主は人里に近付くな」

「ん……………そうするかなあ。しばらくはこの武器をもうちよつと改造したいし」

「そもそも、お主は本来の仕事……………つて、お主、今何と!？」

「だから、しばらくは自重する。流石に今の時期は迷惑をかけられないしね」

「……………お主も知っておったか」

神御衣の男は少し俯く。直垂の男はため息まじりに言った。

「伊達に人里をうろついていないさ。信仰心が薄れてるんだろ？あいつが元気がないのは見れば分かる」

「……………薄れてる、だけなら良いのだが」

「例の集まり、か。まあ、最悪俺が始末でもするさ」

「それは本当に最悪の場合のみだ。神が直々に人間を殺めるなどあつてはならぬのだぞ？」

「まあ、兎に角あいつの状態を見る限り、まだ信仰してくれる人は多い」

「……………そうだな」

「……………後はあの野郎の悩みか？」

直垂の男の突然の問いに神御衣の男は少し驚いた顔をする。

「やはり、お主は鋭いな」

「どれくらい一緒にいると思ってんだ？おかしな所はすぐに気づく」

「ああ、またあの野郎が彼女に婚礼を迫っておる。こんな大変な時に……………」

「大変な時、だからだろ」

「はあ……………本当に大切に思っておるのなら、もう少し待たせよう……………それに彼女には心に決めた奴がおる」

「驚いたな」

直垂の男の言葉に、神御衣の男は眉をひそめた。

「珍しくお前が怒ってる」

「はあ？いつも、お主に怒っておろう」

「ふつ……………それとは違う。本気で怒ってる」

「まあ、俺ら3人がいれば大丈夫さ。これまでそうだったろ？」

「……………ふつ、お主って奴は……………」

この男はやはり我が友だ、と神御衣の男は胸の内で静かに頭を下げた。

「だが、人里にはもう行くなよ？」

そう言われ、直垂の男はああ、とだけ言い刀に視線を下ろした。

—————

今日の俺の目覚めは酷いものだった。

昨夜まで早苗と宴会の準備に勤しみ、寢床に着いたのが1時過ぎ。そんな中の朝のこ
とだった。

天子との戦いと準備の疲れで爆睡していた俺を、萃香のボディブローによって強制的

に起こされた。

無防備な腹を、強烈な一撃によって失神寸前まで追いやった。

「おい、宴会はまだかい？」

悶絶している俺を他所に萃香はヌケヌケとそんな事を言う。

「くう……………宴会は夜にやると言っただろ……………」

「あら、そうだったんだ。なら、すまないねえ」

こうして、酷い目覚めがあったわけなんだが……………

「何で、まだいる」

「いいじゃないか。そんな事を言いながらも朝ごはんを準備してくれるあたり、優しい奴じゃないか」

「はあ……………朝から酒臭い奴に出くわすなんて」

萃香は瓢箪に口をつけながら、

「宴会の準備はどうだい？」

「早苗の手伝いもあつて、順調だ。後は酒を用意するだけ」

「そう。それが聞けて安心したよ」

「はあ……………鬼にも肝機能障害が起こればいいのに……………」

俺の言葉に萃香は意に介した様子もなく、

「いやあ、楽しみだねえ……………久々の宴だ」

「永琳さんから肝臓を強化してくれる薬貰えないかなあ……………」

あ、飲まなきゃいいんだ、と萃香に聞こえないように呟く。不健康生活を送る俺にお酒が入れば体がポロポロになってしまう。

「勇人はそんなに弱つちいのか？」

「普通の人間なら、そんなもんだ」

アル中で永遠亭に入院など勘弁してほしい。そもそも、俺の出費が食料の次に永遠亭の入院費に消えてるのが可笑しい。

「まあ、今回の宴会は存分に楽しむといいさ」

「はいはい……………飲む、食うだけで済めばいいが」

「それじゃあ、私は消えるとするよ。朝食ごちそうさん」

そう言い、萃香は例の如く霧となって消えた。

俺は宴会の準備のために守谷神社へと向かうのだった。

守谷神社は昼下がりにあつて、参拝客が多かつた。

早苗は参拝客の対応の為、宴会の準備ができない為俺一人で準備を進めた。

そんな参拝客も日が暮れていくうちにいなくなり、宴会に誘つた人達が集まり始めた。

「あら、勇人じゃない」

「ん、ああ、霊夢か。宴会はまだだよ」

「そう、夕夕で酒が飲めるならいいわ」

「ハハ………今回は全部俺負担だ。存分に飲んだり食つたりすればいいさ」

「ええ、言われなくてもそうするつもりよ」

ブレない霊夢に思わず苦笑が漏れる。

「そう言えば、あんたの爺さん最近怪しい動きがあると聞いたけど？」

思いもよらぬ言葉に俺はかなり驚いた。

「初耳だ。だが、じいちゃんが何か企んでるとは考えにくい」

「そう、何か起こせば退治するだけだしどうでもいいけどね」

後、たまにはお賽銭を入れに来て頂戴、と言い残し霊夢は宴会のある方へと向かった。

「で、覗き見なんてして、どうしたんですか？ 諏訪子様」

「いいや。珍しい組み合わせもあるんだと思って、ね」

「まあ、彼女とは中々顔を合わせませんし」

「まあ、本当はそんな事どうでもいいんだけどね。私的にはあんたのじいさんが気がかりだ」

「はあ……………最近はそんなにじいちゃんが怪しいんですかね？」

「さあ……………ただ、妙なのは確かだ。ま、今さらあいつが神と繋がってるとは考えにくいけどね」

「どちらにしても、ほんの覗き見の一場面で、判断するのは良くないですよ」

「あら、人間にお説教を食らうとは」

「そんなつもりは……………」

「分かってるよ。ああ、暇があればじいさんに何故、最近無縁塚によく行くのか聞いてくれ」

「はあ……………」

無縁塚に行っている？何か探しものでもしてるのかな？

「後、式は私達がとり持つから安心してくれ」

「はい……………はい？」

ニシシ、と笑いながらとんでもない言葉を残して、諏訪子様は去って行った。

向こうの方からどんちゃん騒ぎが聞こえてくるあたり、誰かがフライングしているのかもしれない。早く行って、始めるか。

「えー、今k「ヒヤッハー！酒を持ってこい！」……………今回はお集まりくださつて、
らー！私の分も残しなさいよ！」……………今回はお集まりくださつてありがとうg「おい、
勇人も飲めよ！」ああ！始まりの挨拶ぐらいさせろ！」
「そんなもん、いらなげ！さつさと始めようぜ！」

さつさと始めようとか言いながら既に始まつてるんですが。やっぱり、手当たり次第
に誘うんじやなかつた。

「もう、いい！ほら、今日は俺の奢りだ！存分に楽しめ！」
「言われなくても、そうするわ！」

既にどんちゃん騒ぎの宴会はさらに熱を浴びた。

「すいません、食材とお酒を全部負担してもらって……………」

「場所も設けてもらったし、手伝いしてもらったからからくらいいしなとな。それに、あまりお金使わないからね」

「おうおう？ 宴会の輪に入っていないかと思えば、2人してイチャイチャしてるのぜ？」

と、既に出来上がってしまったっている魔理沙が絡んで来た。

「久し振り会って早々で悪いんだが、あまり近づかないでくれるか？ 酒臭くてかなわん」

俺の悪態が聞こえてないのか、グビグビと酒を飲む魔理沙。本当に俺と歳が近いのだろうか？

「最近のお前は仕事ばかりで、ダメなんだぜ。たまには、弾幕ごっこでもするのぜ」

「後半の事は同意しかねるが、確かに仕事ばかりだな。たまには幻想郷中を回るのもいいかもしれないな」

「それはいいとして……………飲むのぜ！」

と言うなり、魔理沙は酒の入った瓶を俺に突き出して来た。思わず、俺は反射的に躲した。俺の後ろには早苗がいるのだが……………

「あっ」

物の見事に、瓶は早苗の口に命中し、

「ゴクゴクゴクゴク……………」

みるみる、瓶の中の酒は無くなっていき、早苗の顔色も変わってきた。これは良くない。ここはさっさと立ち去るとしよう。

「……………勇者ひゃん」

服の裾を掴まれた。振り返ると、頬を赤く染め、上目遣いにこちらを見る早苗が

……………

「お、俺、今から料理を……………ほ、ほら、幽々子さんがもう食べ尽くしてる頃合いだし……………」

「……………ヒック、私だって……………ヒック、我慢ひてるんでしゅよ?」

「わたしは! 勇人ひやんに! 甘えたいんでしゅ!」

と、これまた瓶を掴み一気に飲み干した。

「ちよつと、落ち着け……………もう、酔っ払っちゃってるじゃんか……………」

「わたひが、ヒック……………酔ってる、ヒック……………様に見えますか? ヒック」

「おい! 魔理沙……………」

元凶を探せば、霊夢達の所で「ほら! もつと飲むんだぜ!」と騒いでいる。

「魔理沙ひやんに構わないで、わたしに構ってくださいひやい!」

「分かった! 分かったから、料理を運んできたなら、な? 料理を運んできたなら早苗に構うか

ら、な?」

「本当でしゆか?」

「ああ、約束するから」

「なら、信じてあげましゆ!」

意外にもあつさりと引いた早苗は、再び酒を煽った。肝臓に異変が起きなければいいのだが。

兎に角、俺は台所へ向かい、料理を作るか。

「あら、貴方は飲まなくてもいいの?」

調理をしてる最中に後ろから声をかけられた。声の主はどうやら、幽々子さんのようだ。

「今回は主催者なので、自分はもてなす方に回らないと」

「と言いつつ、逃げてきただけなんですよ?」

「幽々子さんが食べすぎるのでその分を俺が作ってるだけです」

「あら。なら、私が食べなかったら妖夢達と飲むのかしら？」

「なっ……………」

「フフ、冗談よ、冗談。でも、作り終わったら妖夢に構ってあげて」

「早苗が先客なのでその後でも？」

「あら、先客いたの。ま、構わないわ」

その後は会話は続かず、料理を黙々と作るのみだった。

「貴方のおじいさんどう思う？」

不意に、そう言われ調理する手が止まった。

「どう思う、とは？」

「聞いてないわけじゃないでしょ？」

「……………そうですが、今は何も言えません」

「そう……………なら、あのじいさんの昔話とか興味、ない？」

「人には知られたくもない過去もありますから、興味があるない云々なしに聞こうと思いません」

「あら、真面目。これだから………妖夢が悶々とするわけね」

「はい、料理ができましたから、運ぶの手伝ってください」

「はいはい。美味しそうねえ」

と幽々子さんにも手伝ってもらい料理を運んだ。

「ま、これからも頑張るなさいな。はい、お酒」

運び終わった後、幽々子さんが酌をしてくれ、ありがたくこれを頂戴した。

「準備お疲れ様」

と、この日は珍しく幽々子さんが優しいのでこれに甘え、盃を掲げて

「乾杯」

どんちゃん騒ぎの中、静かに俺は酒を口に運んだ。

第99話 月夜の日の青年

今宵の宴は、外の世界とは違いかなり、盛大なものであつた。

これでもかというほどに盛られた料理は、川魚や山菜などの山の幸が並ぶ。幻想郷に海がない為、仕方がないことだが、それに加え紅魔館の方からも料理まである。

かかるご馳走を取り囲むのは幻想郷の少女達だ。顔見知りのはずの面々だが、普段見ない組み合わせのせいも、いささか目新しいものがある。

幻想郷の宴会は、堅苦しいものとは、縁がない。それは俺の形すら叶わなかつた挨拶で証明されている。

酒は萃香が選んだ、上々なものばかり。自分が作つておいて言うのもなんだが、料理も悪くないだろう。おまけに、守谷神社で行なつているお陰で、見上げれば満天の星空が広がり、絶景である。互いに注がれる酒を飲めば、たちまち賑やかに盛り上がった。

途中、萃香が呼んだのか、星熊勇儀が宴に加わり、場は一層盛り上がった。いや、盛り上がりすぎて、もはや、暴走に近い。

「久々の宴というのも、悪くないですね」

頬を赤く染めた衣玖さんが盃を傾けながら、言った。

天子は？と問う間も無く、

「総領娘様は、あそこで飲んでいます。すごく楽しみにしていましたよ？」

衣玖さんの指す方向を見れば、天子は霊夢や魔理沙達と絡み、馬鹿騒ぎをしていた。

苦笑しつつもコップを傾ける。中身は酒ではなく、レミリアが持ってきたブドウジュースだ。今回は主催者であり、主役ではないので自重した。

「早苗さんはどうしたんですか？」

そう問われ、衣玖さんは小さく笑い、向こうで妖夢と飲む早苗に目を向けた。2人して、ベロンベロンに酔い、泣きながら話している。

再び、衣玖さんに視線を戻せば何やらニヤニヤしている。

「どうした？意味ありげに……………」

「勇人さんは、女性なんて興味のない、仕事好きの人間かと思っていました」

「そんな、強い精神力の持ち主じゃない。並の男くらいにそういうことには興味がある」
「その割には、貴方はそういう感情をあまり外に出しませんね」

衣玖さんは再び盃を傾け、口を開く。

「貴方の周りは絶世の美女達ばかりなのですから、1人や2人抱いていてもおかしくな
いと思うんですが……………」

突然の衣玖さんの暴論に思わず、俺はジュースを吹き出してしまった。

はい、と衣玖さんから手ぬぐいを渡され、口元を拭く。

「大丈夫でしょうか？」

「だ、大丈夫だが……………さっきの発言は控えてほしい」

「そういうことには並の男くらいに興味がある、と言ったのは貴方でしょう」

反論しようとするが、衣玖さんは続けて、

「それに、行動までとは言いませんが男ならそれくらいの度量を見せてほしいものです」

なんとも難解な事を言う。

とりあえず、口直しにブドウジュースを飲み干す。カッターシャツに染み付いたジュースを見て、額に手をやった。

「はあ……………ちよつと着替えるから……………つて、衣玖さん?」

シミのついたシャツを見つめたまま、問うが返答はない。

顔をあげれば、いつの間にやら妖夢と早苗がこちらまで来ており、さつきまで騒いでいた少女達は、ことごとく静まり返り、ニヤニヤとした顔をこちらに向けていた。

たじろいで、どうした、と声を発するより先に、早苗がすくつと立ち上がり、一歩近づいた。

訝しげな顔をするが、急に俺の顔を両手で掴んだ。

唇に温もりを感じたのと同時に、周りが再び騒ぎ始めた。

「さ、早苗……………にやにを!」

されたのは口付けだと言うことを理解するのはかなり遅れた後だった。
口付けと酒の匂いのせいか、脳内がこんがらがって、一步下がろうとした。

「あら、手が滑ったわ」

と、わざとらしく幽々子さんが俺の背中をどん、と押す。しつかり、踏ん張っていない
かった俺はバランスを崩し、妖夢を巻き込んで倒れてしまった。

妖夢に覆い被さるような形となってしまう、必然的に顔が近くなってしまう。

「す、すまない、ようm……………！」

もう一度、唇に温もりを感じ、目を見開くがそこには顔を紅潮させた妖夢の顔が映る。
「す、す、すまない、妖夢！」

急いで後ろに後退する。全くもって、驚く暇もない。

ショート寸前の俺に、今度は2人してにじり寄って来た。

これは良くない流れだ。

かなり良くない流れだ。

ただ、酔っ払うのなら多少は問題ない。しかし、それが暴走するのなら……………

俺は近くにあつた徳利を手に取り、そのまま口に流し込んだ。今日は本当に酒をあま
り飲まないようにと思つていた。しかし、今はやむを得ない。こんな状況下の中、素面
で過ごせる程、俺の精神は強くない。

とんと徳利を戻すが、たちまち萃香が次の一杯を注いだ。かと思えば、早苗がもう一
度、瓶を飲み干していた。

あとは騒乱の宴の再開である。

「勇人さん！私は勇人さんが好きだと言う事を伝えていきます！でも、勇人さんからのお
返事はいただいてません！」

「い、いやあ……………好きだと言われるのは嬉しいが……………」

「そうですよお！わたひも……………ヒック、好きなんれすよ！」

「お、おい……………飲みすぎだ」

うむ……………男としてここは、はつきりと言うべきなのだろうか……………

「ハハハ！なんだ？男のくせに情けない奴だねえ。ここはもう、抱くしかないだろう？」

「は、はあ!?そ、そんな、不純な事は俺には早い！」

「早いも何も、もう立派な男だろ？据え膳食わぬは男の恥、ならあれか？男が好きなのか？」

「そんな訳がないだろう！」

幼き姿とは裏腹に不純な言葉を繰り返す。すると、早苗は俺の腕に絡みつぎ、

「勇人ひゃん……………私、スタイルには自信があるんですよ？」

急に呂律が回ったかと思えば……………しかし、悲しいかな。男はそういう事には拒絶しようにも、誘惑の方向へと傾く。酒の匂いと官能的な言葉に惑わされ、意識が……………

「勇人さん、私はいいんですよ？」

「そ、そういうのは、ちゃんと経済的にも将来的にもちゃんと決めてから……………」

「勇人さんはぼーつとしていればいいんです。あとは全部済みますから……………」

「お、おう……………」

「勇人さん!!」

「はっ!?お、俺は何を!？」

「早苗さん、いい加減にしてください!」

「チツ、あともう少しだったのに……………」

「す、すまん、妖夢。危うく過ちを犯すところだった」

ほ、本当に危うかった……………」

「勇人さんもはつきりと言ってください!」

「お、おう……………」

「勇人さんは早苗さんみたいなスタイルよりも私のような少し控えめな身体の方が好きなんです!」

「うんうん、そうだな……………」

は?何を言ってる?」

「だから、勇人さんは早苗さんよりも私の方を襲いたくなるはずですよ！」
「いやいや、ないからな？」

ダメだ……………どちらともかなり酔ってる。

「な、何を根拠に言ってるんですか？」

「早苗さんも見たでしょう？あの新聞を」

「うっ……………」

「そうですね？勇人さん」

「そうなんですか？勇人さん」

「お、おう……………その件についてはノーコメントで……………」

この時、俺は2度と萃香に依頼などはしまいと心に決めたのだった。

結局、事が鎮圧するのは2人が酔潰れるまでであった。宴の果てに、片付けを始めたのが何時であるか、判然しなかった。

ただ、皆が眠る中、俺1人が片付けをしている最中に、不意に紫さんがどこからともなく出てきて、俺に声をかけた。

「私と一杯付き合ってくれないかしら？」

断る理由もあるはずもない。

周りの気を配って、移動するがどの人も熟睡しており起きる気配はない。俺はただ黙って紫さんが開いたスキマへと入った。

紫さんが俺を招き入れたのは、かつて俺が幻想入りを果たした最初の場所である、紫さんの屋敷だった。

今日の夜は月がとても美しい。

一昔前の様な外観に、月明かりがそれを照らす。

こんな屋敷だったんだ、と疲れ切った頭で嘆息した。

半ば夢心地の状態で、紫さんに縁側へと手招きされた。

紫に勧められるがままに縁側で腰を下ろし、ぼーっとしていたら、藍さんが酒器と酒杯を控えていた。

「久し振り、ですね。いつも、橙がお世話になっていきます」

「そうだったわね、橙は元気にやってるのかしら？」

「まあ、ありがたい話ですが楽しそうですよ」

その言葉に紫さんは笑う。いつもの何か裏のある笑いではない。

「まあ、飲みなさいな」

差し出された酒杯をありがたく受け取り、すぐに紫さんの細い腕が酒を注ぐ。俺も紫さんに注ぎ返しつつ、

「こんな時にお酒に付き合えだなんて、なにかあるんですか？」

「あら、いつも私が悪巧みしている様な言い方ね」

こんな夜でも、食えない性格は変わらない。場をかき乱す、その胡散臭さは幻想郷の賢者の姿である。

「乾杯」といつもの様な調子で静かな酒宴は始まった。

当然、俺は酒の良し悪しは分らない。

「萃香にオススメされたの。なかなかいいでしょ？」

その言葉に俺は首を縦に振り賛同する。酒の良さが分らない俺でも、この酒はいいものだと分かった。

「久々に飲むのもいいわね」

そんな、年寄りめいたことを言いながら、杯を傾ける。

一方で気になるのは俺をここに招いた真意である。

そんな思いを知ってるのか知らないのか、紫さんのペースは異常に速い。それに加え、絶妙なタイミングで藍さんがつぎの一本を持つてくる。

杯を重ねるにつれ、時はあつという間に過ぎていく。

「それで、何か話でもあるんでしょうか？」

「あら、一杯付き合つて、と言つたのに話しが必要なのかしら？」

「そう言う時は普通、何か相談事とかがあるんですよ」

「ま、鋭いこと。でも、まだ時間はあるわ」

「妖怪と人間とでは時間の流れの感じ方に違いがありますから気をつけて下さいよ？」

紫さんは扇子を開き、フフと笑つた。すると、不意に

「貴方こそ悩みは無いのかしら？」

口元の笑みを扇子で隠しながら言った。

「まあ、どうせ女の子悩み、なんでしょ？ 問題ないわよ。少し優柔不断なだけでは貴方を嫌わないわ」

「……………俺は外の世界で育ちました」

急に語る俺に対し、紫さんは何も言わずにじつと俺を見つめた。

「そして、縁あってこの幻想郷に来ました。幻想郷の人はみんな優しく、厳しく、そして残酷です」

「外の世界は、平等です。幻想郷とは違って、弱き者も救われる。いや、救われなければならぬと言う世界です。その平等さを求めるのは異常なくらいです。でも、ここは平等、と言うわけにはいかない。必ず上があり下がある」

「なら、貴方はここの人達は不平等な中、生きてると言いたいなの？」

「まさか、食物連鎖の如く、力の上下関係はなければならぬと思いますよ。だからと

言つて、差別とかを肯定するわけでもないです」

「……………何を言いたいのかしら？」

「平等に執着しすぎなんですよ。例えば、目の前で困窮している者がいればどうします？ 多分、幻想郷の人達ならその者に手を差し伸べる。でも、外の世界はそういうわけにはいかないですよ。助けるのなら、目の前の人、1人だけじゃない。全体に平等に助けようとして準備する。でも、それっておかしいですよね」

「なんでそう思うの？」

「質問を質問で返すことになりませんが、助けようと思った理由なんです？」

「……………目の前の人を哀れに思ったから、ね」

「そうです。目の前の人を哀れに思ったから助けようとする。なのに、外の世界は1人だけだと不平等だからと周りの人たちも助けようとする。そもそも、1人の事を考えれないのに、何百万、何千万の人を救おうとするなんておかしい話です」

「そう言いながらも、自分も結局そう言う考えなんですよ。片方だけ、と言うのは不平等だと思ふから、こうやってはぐらし続ける。向こうは俺の事をこんなにも想つてくれるのに」

はあ、とため息をつき、酒杯を傾ける。

「ひとつだけ、貴方に言っておくわ」

紫さんはすぐには口にせず、俺の酒杯に酒を注いだ。

「幻想郷はなんでも受け入れるわ」

「貴方がいくら外の世界の思想を持ってようが、ヘタレだろうが、幻想郷ではどうでもいいの。そんな事ひっくるめて、幻想郷は受け入れるの」

「それにあの人の孫である貴方よ？私はなんの心配もしてないわ」

「嬉しい言葉です。しかし……………まるで俺のじいちゃんの事を知ってるみたいですね」

紫さんは俺の問いにすぐには答えず、酒杯を傾けた。

「貴方のおじいさんのお話はまた今度の機会に、ね？」

そう言う姿は紛れも無い、幻想郷をこよなく愛する妖怪の賢者そのものだった。

「幻想郷は全てを受け入れるのよ。それはそれは残酷な話ですわ」

第10章 NEW ORDER : NO. ?? 寺子屋教師

碓氷勇人の抹殺依頼

第100話 前触の日の青年

〈宴会から4日後〉

宴も終われば、次に来るのは再び日常である。と、言いたいのだが……………そう言う訳にもいかないようだ。

最近は大きな異変もなく、せいぜい天子が寺子屋を破壊したぐらいしかない。もつとも、その天子は今でも寺子屋を訪れては俺の授業を聞きに来る。

そう考えれば、非日常的な事が日常レベルで起こる幻想郷としては、かなり平和だ。

「平和なもの、貴方のお陰よ?」

と紫さんに言われたが、実体としてはやはり、霊夢のおかげだろう。そもそも、俺の

本職は教師であつて、異変解決ではないのを忘れないでもらいたい。

まあ、話が逸れたが、簡単な話、問題が発生したわけだ。

この幻想郷には俺のように時折、外の世界の者が迷い込む事があるそうだ。基本的には博麗神社で保護され、元の世界に戻されるらしい。最悪な場合、妖怪に食われるそう
だ。そう考えると、俺も運がよかつたな。

こんな話をするのだから、発生した問題は外の世界の者の事だ。問題となつてい
は、その者は偶然、幻想郷入りを果たしたのではなく、どうやってか、紫さんと霊夢と
で張られた2つの結界を破つて侵入してきた事だ。さらには、堂々と紫さんの元に現れ
たのだと言う。

俺は紫さんの事だからすぐにとつ捕まえたと思つたのだが……………

「ごめんねー、私、怖くて……………逃げられちゃった」

紫さんに怖い者は無かろうに……………それに、ぶりっ子で言われても……………年相
応つてものがあるんじゃないのか？

要するに、何者かが幻想郷に侵入。その者はそれなりの実力者であろうから、気をつけるべし、と言ったところか。

まあ、霊夢が搜索するって事だから、俺はいつも通りに生活するだけだ。日頃より少し用心するだけ。

明日から、また授業をしないなあ……………

—————

く宴会から2日後く

森の路地の中に老人が通る。その老人は車椅子姿であり、メイド服姿の女性がその車椅子を押している。

黒い山高帽にカラーのついた黒の上下という古風な服装をした白髪の老人はメイドに手で合図をし、車椅子から手を離させる。

「お気をつけくださいませ、御主人様^{マスター}」

と、メイドはお辞儀し、老人は車椅子を動かす。老人の背後でメイドは粒子となり、消えた。

「随分と勝手な事をしてくれたわね」

虚空から突如、スキマが現れ老人の行く手を阻んだ。

「この幻想郷に不法に入る者は消えてもらう事になってるの。だから、さっさと消え失せてくれないかしら？」

「不法？ここに法なんてあるのかね？嬢ちゃん」

「嬢ちゃん、だなんて。確かに貴方は人間からしたら腐れきつた老人かもしれないけど、私からしたららくそ子供よ？」

「そうかい、なら右も左も分からんこの子供に教えてくれないか？」

「いいわ。幻想郷の創造者の私が教えてあげる。ここの法はこの幻想郷よ。幻想郷に従わない者、勝手に入る者はみな排除よ？」

そう言い、紫は扇子を老人の首元に突きつける。

「猶予をあげるからさっさと消え失せてなさい。さもないと………殺すわよ」
「ハハハハハ！」

紫の人外な威圧があるのにも構わず、老人は高笑いをする。

「何がおかしいのかしら？」

「冗談が過ぎるな。私を殺るつもりか？」

「ええ、貴方みたいな老人なんて、一握りでお終いよ」

「私を殺^トった、ところで無駄だ。いくら殺^トつても、私の任務は遂行される」

「何故か、分かるか？」

「さあ、でも、遊びは終わりよ？」

「まだ遊べるさ。夜は長い」

「子供^{ガキ}は寝る時間よ」

紫はクスリと笑い、その老人の首を握り潰そうとする。すると、その腕を1つの弾丸が貫いた。

「……………あら、邪魔者が入ったわね」

腕を貫かれて、尚平然としているのは妖怪故か。

「チツ……………化け物か」

黒い瞳に、短い黒髪。もみあげが長く、上下黒いスーツをワイルドに着崩したフアツ

シヨンの男は舌打ちと共に吐き捨てた。

「噂には聞いていたが、妖怪っているもんなんだな」

と、銃を構える。その銃は、レボルバー拳銃なのだが、2つ銃身があるダブルバレル方式という、特異な代物である。

「暴君ダン、今回殺るのはそいつじゃない。別の奴だ」

「老人ロートルに命令されなくとも分かっている」

ダン、と呼ばれる男は上司らしい老人に対しても無礼な言葉を並べる。老人は慣れているのか別段、咎めもしない。

「あら？ 貴方達は無事にいられると思ってるのかしら？」

「ふんっ、こいつを殺トつてもいいか？」

「……………好きにしろ。私は先に消える。だが、目的だけは忘れるな」

「はいはい。老人ロートルの言う事は聞くべき、だな」

そして、老人はメイドと同じく、粒子となって消えた。

「待ちなさい！」

「おっと、相手は俺だ」

「……………どのみち、全員始末するし……………いいわ、貴方から消してあげるわ」

「血の気が盛んな女だ。サシで俺を殺れるか？」

「人間がほぎかないで」

「けっ……………貴様は4発で十分だ……………」

と、ダンは短く笑い、引き金を引く。しかし、弾丸は紫によって開かれたスキマへと消えた。

「ん？変わった、能力を持つてるんだな」

「ふふ……………なら、もっと見せてあげる」

ダンの横にスキマが開き、そこから先程ダンが放った弾丸が飛んできた。間一髪のと

ここでダンには躲す。しかし、その隙に紫はスキマを使い後ろに回り込み、弾幕を放つ。

「チイツ！」

ダンは躲して、銃を2発撃つが紫はかわしざまに足蹴りで銃を弾き飛ばす。弾き飛ばされた銃は地面に落ちる。

「終わり、よ」

紫はビーム状の弾幕を放つ。それをダンは再び躲す。

「なかなかやるじゃない。まあ、いずれ死ぬでしょうけど」

「殺れるのならの話だ」

弾幕をかわしざま、地面の銃を取るダン。雨あられと放たれる弾幕をかわして懐に入り込み、紫の顎に銃を突き付ける。

「This is too easy (余裕だ)」

パアン、という音と共に紫の頭が撃ち抜かれる。

「妖怪の賢者といえども、この程度、か……………」

そう言い、ダンは倒れた紫から去った。

しかし、ダンが去ったあと、頭を撃ち抜かれたはずの紫はむくりと立ち上がった。

「イタタ……………油断したわ……………久々に人間に一杯食らわせられたわ」

「とりあえず、彼らの始末は霊夢か勇人に任せるとしようかしらね」

—————

〈宴会から5日後〉

最近、よく不審者の情報を寄せられる。俺に情報を寄せても別に問題があるわけではないのだが………異変解決は俺の仕事ではない事を理解してもらいたい。

まあ、話を聞くに紫さんの言っていた侵入者の可能性もあるから、霊夢にでも報告するでしょう。

と、言っていたら、誰か俺の家に来たようだ。戸を叩く音が聞こえる。

「はいはい、今行きますよっと」

戸を開けば珍しい客であった。それと同時に丁度いい客でもある。

「おお、霊夢か。俺の家に来るなんて、明日は雪か？」

「別にいいじゃない。貴方も知ってるんでしょ？」

「ああ。ご苦労な事だ。それで？用件は？」

「最近、変な奴がうろついているっていう話を聞かされるの。それを貴方に報告しにね」

「奇遇だな。俺もその話を聞いたんだ。……………だが、今回の件はお前が解決するのだろ？」

「協力してくれてもいいじゃない。人探しは面倒なのよ」

「分かった。で、その話は？」

「魔理沙からの話なんだけど、魔法の森で袖なしの下着と裾の短いズボンを履いた子供がいたらしいの。何やら、ぼんだなとへつどぶおん？っていうのをつけてたらしいわ。魔理沙は追いかけてようとしたらしいけど、足がとて速くて逃げられたって」

「え？俺は違う話を聞いたぞ。というか、俺も見た」

「ほんと？聞かせて」

「派手な柄の開襟シャツに、ジーンズ姿だったな」

そんな格好だと、幻想郷では嫌でも目立つ。俺だって、当初は変な格好だと言われたものだ。

「ジーンズ？まあ、いいわ。それで？」

「まあ、声をかけようとしたら、ジャンプで建物の上に逃げてってしまったよ」

あの時はかなり驚いた。あんなジャンプ力は人間外だ。妖怪なのかもしれない。

「という事は……………侵入者は4人ね」

「4人？」

「紫が2人会ってるのよ。だから、合わせて4人」

複数人かあ……………そりゃあ、面倒だな。

「勇人さん！勇人さん！」

どこからともなく、文が上空から現れた。どうやら、あわててる様子だ。

「どうした、文。取材はお断りだ」

「違います！妖怪の森に変な奴が現れたんです！」

「!?!」

「白いスーツにマントをつけて、覆面をした大男です！」

文の言葉に俺と霊夢は頭を抱えた。

「あ、あれ、どうしたんですか？」

「これで、5人だな……………」

「ええ……………」

スーツにマントって……………どんな奴なんだよ……………

「勇人さん！」

「また？」

「おお、鈴仙か……………どうした？」

今度は鈴仙がやって来た。

「いえ、最近また、異変解決をしてると聞いて情報提供を……………」
「……………」

俺と霊夢は互いに見、ため息をついた。

「えーつと、どんな奴だ……………」

「白いワンピースドレスを着た女性です！あ、あと、服に血飛沫が付いてて、裸足でした。もしかしたら、幽霊かもしれません……………」

「これで6人、ね？」

「ああ……………」

今回の侵入者はグループで動いているのかな。しかし、どいつもこいつも、個性的な格好しやがって……………共通点が見当たらない……………

「先生！」

今度はチルノと大妖精が現れた。

「どうした？宿題がわからないのか？」

「ううん。霧の湖に変な奴がいたの」

「……………はあ、どんな奴だった？」

「うーん……………変態だった！」

「変態？何かされたのか？」

「いいえ、違うんです……………銀髪の男性だったんですけど……………上半身裸で物凄く

猫背だったんです」

「おいおい……………マジモンの変態じゃないか」

「これで7人……………こうなるとまだまだいそうね」

「ああ」

相次ぐ、目撃の情報に俺と霊夢は得体の知れないグループの存在に頭を悩ませる事になるのだった。

第101話 邂逅の日の青年

（宴会から7日後）

俺は、地面に寝転がった状態で、目が覚めた。上を見上げるが穴が続くのみ。空の景色をろくに見れやしない。

今日の天気はどうだったけ……………

そんなのんびりとした考えは、全身に伝わる痛みで吹き飛ばされた。

ぼんやりとしていた視界もようやく輪郭をはっきりと捉えるようになった。しかし、それと同時に圧倒的な現実を突きつけられた。

傷だらけの左手が突き出した岩を掴んでいる。周りは、一ヶ所を除いてほぼ垂直に立ち上る絶壁が広がる。地面には2つの拳銃と授業用のノート類が散らばっている。

少しずつ状況を理解していくうちに、頬にぬるりと暖かいものが流れ込んだ。

それを手で拭い、血液だと気付いた瞬間、ようやく俺は全てを理解した。

「落ちた、のか……………」

そう呟くと同時に全ての記憶が蘇った。

—————

く宴会から6日後く

「ふう……………」

今日の授業を終え、チルノたちに別れを告げた後、俺は1人寺子屋で宿題のチェックをしていた。

今回の内容は分数なのだが……………分数は普段算数が苦手ではない子でもここでつまづいて、苦手となってしまう子が多い。今回の宿題は比較的簡単に作ったとは言え、間違いが目立つ。

ここの内容となると俺は……………4、5年前になるのかな。まあ、苦戦した記憶はないな……………

「お疲れ様です。勇人さん」

丸付けを終え、ぼーっとしている俺に誰かが声をかけた。

「おお……………早苗か。どうした？」

「今日は人里に用事があったのでそのついでに……………」

「そうか、ちょうどいい。一緒に帰るか？」

「はい！」

幻想郷に侵入してきた者の噂はあまり広がっていないのか、人里ではいつもと変わら

なく活気付いている。

時折、”先生”と挨拶され、これを返す。先生と呼ばれる事にも慣れてしまったな。少し前まで、先生と呼ぶ側だったのに。

「勇人さん、侵入者の件、どうですか？」

「今の所、進展なしだな。ちらほら、見かけたと言う話があるんだが……………」

「そうですか……………でも、無理は禁物ですよ？」

「大丈夫。今回は霊夢が解決してくれるから。俺はちよこつと手伝うだけさ」

「なら、いいです」

「あ、そうそう。かなり遅れたが、宴会の件、ありがとう。礼と言ってはなんだが……………」

と、ノート類の入ったカバンから一番場所を圧迫している大きな箱を取り出した。

早苗はその姿を確認した途端、息を呑むような調子が伝わった。そして、僅かな間を置き、パツと顔を俺に向けた。

「え、ええ!? ゆ、勇人さん！」

大きな声に少し驚いたが、してやったりと、ほくそ笑んだ。

早苗の方は、そんな俺など忘れたかのように、慌てた声を上げている。

「こ、これ、どうしたんですか？」

「どうしたもないさ。俺が買った」

早苗は箱を胸元に抱え込み、俺を凝視している。

「気に入らなかつた？」

「そんな事ないですよ！だって、このプラモデルは外の世界でも中々レアなんですよ！」

早苗の上ずった声が、空に響く。

早苗の見開かれた目が、俺と箱を行き来している。その慌てように流石に俺は苦笑する。

「女の子にプラモデルはどうか、と思つたが………喜んでくれてなによりだ」

「どうやって見つけたんですか？」

「侵入者の調査の為に魔法の森に行つた時なんだが、魔理沙に香霖堂という場所を教えてもらつてね。そこで見つけた」

あそこの店主は奇妙な人だったな。ずっと本を読んで、こちらには興味を示そうともしない。店内も店内でガラクタばかりだったな。

「ありがとうございます！」

プラモデルを買う時に、店主からぼつたくりとも言える値段で売られたが………早苗のこんな笑顔が見れるならいいか。

早苗はプラモデルの箱をしばらく見つめた後、いきなり俺の横に移動してきて、腕にしがみついた。

「今日、私が勇人さんに最高のご飯をぐ馳走します！」

未だ興奮の冷めない早苗に思わず微笑が漏れた。

愉快的気分のまま、俺は守谷神社へと連れていかれた。

神社に着くと、早苗は。パタ。パタと部屋に入り、プラモデルを置き台所に行った。

「おやあ、今日は早苗、やけにご機嫌だねえ……………」

部屋で座るとささも当然の如く、後ろから諏訪子様が絡んできた。

「さあ……………いいことでもあったんでしよう」

「普段は飄々としてゐる癖に、プレゼントをやるなんて、君もなかなかやるじゃないか」
「お礼ですよ、お礼」

この色男め、と絡まれるがふと何かの気配を察したのか、人をからかうような顔が急変し、真面目な顔となった。

「……………誰か、いるね」

「例の侵入者ですか？」

「……………いつもの奴とは違うねえ」

「俺が見てきますよ」

「気をつけておきな。ちよつと、厄介な奴かもしれない」

「了解です」

俺は銃の入ったバッグごと持ち、守谷神社から出た。

少し妖怪の山を搜索すると、目的の人物はすぐに見つかった。

少し開けた場所にその男は大口徑の銃を肩に担ぐようにして持ち、立っていた。

上下黒スーツ姿、黒の瞳に黒の短い髪、全身黒づくめの男はこちらを睨みつけたまま立っていた。

「貴様が碓氷勇人だな？」

「そうだが？何か用か？授業を受けたいのなら寺子屋に言ってくれ」

「用か……………用ならある。貴様を殺りにきた」

「とる……………？」

なんだ？何か俺から奪うのか？

「ふんっ、ただの餓鬼相手に弾は1発で十分だ」

銃口がこちらを向き、安全装置の外れる音が鳴る。それと同時に俺は咄嗟に不変の境界を作り出した。

パァン！

「……………ん？」

「ただの餓鬼に……………なんだって？」

俺はすぐに男の獲物を確認する。銃口が2つのダブルバレル方式か……………は？レボルバー拳銃でダブルバレル？それを片手で……………？

「チツ……………テメエも何か能力を持ってやがんのか」

相手の拳銃にいつまでも驚いていられないので、すぐさまバッグから拳銃を取り出す。

「あ？そんなおもちゃみたいなの銃で俺を殺れると思ってるのか？」

「やってみるか？」

「格下が鳴くな」

そう言い、2人の間に沈黙が訪れる。先に動いたのは俺の方だった。

素早く銃を構え引き金を引く。

パン！

「……………やっぱり、餓鬼じゃねえか。外しやがって」

「……………ブフツ」

「こんな簡単に殺れるとはな。骨のねえ奴だ」

パアン！

「……………ツ!？」

「とる、とるって、あれか？命をとるって意味か？」

「チツ！幻覚か？」

「さあ……………」

今まで、色んな妖怪とかと戦ってきたが……………こいつは中々やばいかもしれない。

最初からまともに早撃ちをする気なんてなかったから良かったものの、本気でやったら、多分やられてた。狙いも完全に心臓にドンピシャだったし。

それに、さっきの弾丸も不意打ちながらも躲しやがった。

パアン、パアン！

「チツ！」

連射するが、男は木の陰に隠れた。だが、相手も銃を持っている。それも実弾。当

たつたら、弾幕とは違い大怪我となつてしまう。

俺も同じく木に隠れる事にした。

あとはただ牽制し合う状態となつた。下手に出れば撃ち抜かれる。今までの戦いで一番死を近くに感じ、手汗がにじむ。

「キリがねえ……………」

そんな声が聞こえた瞬間、

「collateral shot!! (コイツはオマケだ!!)」

ドオン!

重々しい銃声が聞こえた瞬間、全身に強い衝撃が走つた。

それが相手によるものだど気付いた時は遠くに吹き飛ばされ、大きな穴にまで飛ばされた。こんなのあつたか? などと考えている暇は無い。

「ケツ！まだ、生きてるか？しぶとい奴だ」

「……………」

俺は咄嗟に銃を構えようとした。

パン！

「なっ!?!」

しかし、銃は男の狙撃によって弾かれ穴の中へと落ちていった。
レベルが違う。

今更ながらそれを痛感した。今までの敵は妖怪がほとんどだ。技術なんてあったものでは無い。しかし、今回の相手は違う。プロと素人のレベルで差がある。

「そうだ、冥土の土産に教えてやろう」

「……………」

「今回、お前を殺すように依頼したのは……………」

男の口が動く。その言葉を聞いた瞬間、俺はあらゆる思考を止めた。足元が崩れ去る感覚。俺は何も考えれなくなった。

しかし、すぐに意識を戻し、すぐさまもう一つの銃を取り出し、発砲した。

「……………ッ!？」

弾丸は狙いとはずれ、頬を掠めたただけだった。相手も咄嗟に銃を発砲し、

「パン！」

「え……………?？」

右肩に凄まじい衝撃が走り、体は後方に吹き飛ばされた。

吹き飛ばされた後、俺が地面に着くことはなかった。ああ、後ろは穴だったか

……………

それに気づく時には脳天を突き抜ける痛みと、何かが頭にぶつかる衝撃で、あつとい

う間に意識は刈り取られた。

「勇人さん………楽しみにしてるかな………」

|||||

〈宴会から7日後〉

俺はひと通り思い出し、息を吐いた。しばし気持ちを落ち着かせようとするが、右肩がとても熱く、激痛が伴う。それを我慢しつつ、俺は目だけで周りを見渡す。

四肢の無事を確認するために右腕から確認しようとするが、やはり痛く、動かせない。左手は幸いな事に動く。その左手で頭の傷を確認する。後は、足か右脚………左脚………そこで唐突な激痛に俺は思わず声をあげた。首だけ起こすと、左の脛あたりから歪んで見えた。

「折れたのか………」

俺は空を仰ぎ、呆然とした。

「ちくしょう………」

口ではそう言うが、頭は恐ろしく落ち着いていた。とりあえず、足と肩の痛みに耐えつつ、上半身を起こすと、上への穴とは別に道が見えた。

時計もないため今までどれくらい意識を失っていたか分からない。

どうするか、と懸命に思考を巡らせる。

普通なら連絡なのだが、生憎、幻想郷に電話を使う文化はない。なら、誰かが来るまで待ち続けるしかない。

妖怪の森の奥深くの穴に落ちている俺を見つけるまで。

食料もない、傷の手当てもできない。そんな中で誰かが来るのを待たなければならぬ。

それに知り合いが来るとは限らない。妖怪が来るとも考えられる。そうなれば、為すすべなどない。

普通に考えて、幻想郷で平気で生きられた方がおかしかったのかもな、と苦笑したが、心は急速に冷えていった。

「……………ちくしょう」

ゆつくりと背を地面に倒し、空を見上げる。瞼が段々重くなり、ついには閉じる。

「おお？人間がここにいるなんて珍しいね」

「こんなところで寝ているなんて……………気長な奴で妬ましいわ……………」

妖怪か………と気配で感じ取ったのを最後に俺は意識を手放した。

第102話 落日の日の青年

〔宴会から7日後〕

勇人が穴に落ちていったのを確認したダンは、あたりを見渡した。

そして、勇人によって傷のついた頬を撫でる。少し油断したとは言え、傷をつけられるのは殺し屋として屈辱的だ。しかし、ダンとしてもっと屈辱的だった事は――勇人が撃つ瞬間の殺気に少しながら、怯んだ事だ。

……………もう、ここには用はない。

ダンは勇人の落ちた穴に背を向け、銃を肩に担ぐように持ち妖怪の山から出ようとした。

「……………獲物はどいじや」

広島弁の男がダンに声をかけた。スーツを着たダンとは対照的にアロハシャツとジーンズというラフな格好であり、腕には刺青をのぞかせる。

「はっ、今更何を聞いている？ 貴様がチンタラしてる間に殺^トちまったよ」

殺^トる。この者の間にとって、『殺す』とは言わず『殺^トる』というのが当たり前のようだ。

「ー死体は確認したんか？」

「知るか、穴に落ちていったのを一々確認する必要もねえよ。あの深さなら死ぬか大怪我。後者なら野垂れ死ぬを待つだけだ」

男はダンの頬を傷をみつけ、

「ガキに傷を負わされたんか？」

その言葉がダンの癩に触ったようで

「あ？攻撃すらできなかつた間抜けよりマシだろ」

「ガキに傷を負わされる殺し屋にゆわれとおない」

「もう一度、殺^トつてやろうか？盗人^{コヨーテ}」

ダンとはダブルバレルの大口徑リボルバー銃を、コヨーテは改造の施されたりボルバー銃を互いに向けた。

「銃を下ろせ！」

子供特有の甲高い声を張り上げたのはルーズなランニングシャツとハーフパンツを着た、小柄で痩せた体軀の少年である。目深に巻いたバンドナとヘッドホンで目と耳を覆ったスタイルが特徴的だ。

その少年も二丁のフルオートマッチクの銃をダンに向けている。

「チツ」

少年の半端な介入によりますます空気は険悪なものとなった。少年に対しても「殺^トら

てえのか？」と容赦なく殺気をぶつける。

「ダン、コヨーテやめないか」

今度は白いスーツを隙無く着こなす長身の黒人男性が姿を現した。自由に衣服を着る3人の中で唯一、髪と髭整えており、きちつとしている。

「チツ、ガルシアン業者に免じて許してやる」

「ケツ」

銃を下ろしたものの、睨み合う2人に構わず、ガルシアンは続けた。

「で、ダン。殺つたのか？」

「ああ、さつきな」

「……………そうか」

そう言う、ガルシアンはどことなく悲しそうな顔をした。それを見て、ダンは

「優しすぎんだよ。ガキとは言え17だ。一々同情してたら殺し屋なんてやってらんねえぞ」

「17か………まだまだ子供じゃないか」

「はあ………お前といると調子狂うぜ………」

「他に用件はないんか？」

「それだが、どうやら私たちは閉じ込められてしまったようだ」

「どういうことだ？」

「この幻想郷から出られなくなった、ということだ」

「はあ？ 結界でも貼られとるんじゃないやったら、あんなあに任せりやあええのに」

「そうにもいかんのだ。結界の主を倒さんと外に出られない」

「結界の主………あの女か………」

「当分、私たちはその主を殺^トることが今後の行動だ」

といい、ガルシアンらは粒子となって消え去った。そう、大将^{ハーマン}の元へ。

～宴会から8日後～

「勇人は確かにここに来たのよね？」

昨日、勇人が戦った場所に紫と諏訪子が佇んでいた。

「……………ああ。様子を見にいったさ」

諏訪子は紫を見た。

「この木……………」

紫が、折れた木を見つけた。その木は折れた部分が黒く焦げている。

「血と……………火薬の匂いがするねえ……………」

諏訪子も血痕を見つける。

その場所は大きな穴の目の前にあり、誰かがいた事、戦闘になった事を示していた。

「……………これは勇人の血だねえ」

その声は普段と変わらないように聞こえるが、その顔はどこか険しい。

「こりやあ、やられちまったかもしれないよ」

「いえ……………まだ、生きてるわ」

「おや、断言できるのかい？」

「ええ、あの人の孫なら簡単にはくたばらないわ。この穴……………確か、旧都に続いている

のかしら?」

「ああ。何か考えでもあるのかい?」

「勇人は少し、身体が弱いから………ちよつと稽古でもつけてもらいましょ。萃香から頼んでもらうように話をつけておくわ」

「待て待て。勇人に稽古をつけてどうするつもりだい?」

「もちろん、侵入者を倒してもらいに決まってるじゃない」

「侵入者がいつまでもここに居座るわけがないだろ!」

「いいえ。居座らざるおえないわ」

「………どうするかは紫の自由だが、そこまで勇人に執着するのは何か理由でもあるのかい?」

「さあ? やられっぱなしじゃあ、勇人も悔しいかな、つてね」

「………はあ。早苗達にはなんて言うつもり?」

「適当に理由をつけておくわ。あ、あと、侵入者はじつとはしてないわ。いつ攻撃されてもおかしくはない」

「気をつけておくさ。神様を舐めないで欲しいもんだね」

「強者な事は確かよ」

「分かってる、心配するなら勇人を心配しな」

「そうさせてもらうわ」

ゝ宴会から10日後ゝ

「はあ……………はあ……………」

風が頬を撫でた。

洞窟内ゆえ、視界は悪く、足場も悪い。

早く逃げないと、そんな思いで満身創痕の体を突き動かした。しかし、肉体的な苦痛

は治らず、意識はやや朦朧としていた。意識を手放さないよう、必死に思考を働かせる。片足が使えないのは本当に不便だ。一度捻挫で松葉杖をついてた時期もあったので、不便さはよく分かる。

おまけに道は整備されておらず、ボコボコの岩道で余計に進むのを困難にする。

「こつちに来てる……………」

掠れる声で眩きながら、自分の左足を見た。

脛あたりで歪んでいた左足は、添え木と何かの布で固定されていた。しかし、痛みは発しており、俺の思考を阻害する。撃ち抜かれた右肩も同じように治療が施されており、止血されている。

ただ、右腕を下手に動かそうとすれば激痛が走る。そのため、左手にしか銃を掴めない。

この状態で動くべきではないという、当たり前の事は分かっているのだが、状態が状態。そんな事に甘えている場合ではないのだ。

目が覚めた時は随分と驚かされたものだった。

まさか、妖怪が俺の手当てをしてくれるとは思わなかったのだ。

「うぐっ……………」

「おや？目が覚めたようだね！」

「妖怪かつ……………」

「落ち着いて、何もとって食おうだなんて思っていないからさあ」

金髪のポニーテールに茶色の大きなリボンの女の子が俺を落ち着かせるように言った。

服装は、黒いふっくらした上着の上に、こげ茶色のジャンパースカートを着ている。スカートの上から黄色いベルトのようなものをクロスさせて何重にも巻き、裾を絞った不思議な衣装をしている

やはり、幻想郷の人々は個性的な服装が好みみたいだ。

「……………本当か？」

「もちろん！私は黒谷ヤマメ！貴方の名前は？」

すぐには名前を言わなかった。すぐに自分の正体を明かすのに何か気が引けたからだ。ただ、目の前の少女は真つ直ぐとこちらを見ているので問題ないかなと

「碓氷勇人だ。君が治療を？」

「うん！」

「そうか……………ありがとう」

「いいってことよ！」

気さくで明るい、そんな印象を受ける女の子だ。彼女は人付き合いが上手そうだ。

「そうだ、俺の荷物は知らないか？」

「こつちで預かってるよ」

「そうか、ならすぐにここを出よう。いつまでも世話になつては悪い」

立ち上がろうとした瞬間、右肩に激痛が走った。思わず、うつ、と声を漏らしてしまっ

た。男ながら情けない……………

「ちよ、大怪我してるんだから動かないの！安静にしとかないと！」

「いや、しかし……………」

「大丈夫！人間の男！人くらい苦にならないって！」

「そ、そうか……………すまない」

「いいから、君は寝てなさい。人間は弱いんだから」

「!!」

弱い……………その言葉を聞いた瞬間、あの男との戦いが頭をよぎる。圧倒的な技術の差。短い戦闘の中にそれを痛い程突きつけられた。

そんな動揺が顔に出ていたのだろうか。ヤマメという少女が茶色の瞳でこちらの顔をじーっと見つめていた。

「ど、どうかしたのか？」

「いや、人間なのに随分と落ち着いているな―ってね。普通、目の前に妖怪がいたら慌てるのに」

そりゃあ、妖怪に慣れてるからと言いつうになつたがそれを堪えた。

「そ、そうかな？内心はすごくビクビクしてるかもよ？」

「ふーん。まあ、今はゆつくりしてなよ」

この後、飯まで準備してくれ、こちらが申し訳なくなるほどだった。

しかし、全ての妖怪が人間に対して、友好的であると思つていたのが間違いであつたと同時に、そんな事すら分からなかつた自分が滑稽であつた。

その日の晩、俺は飯を食べた後は中々寝付けないでいた。今までぐつすりであつたのと、今更右肩が痛むのである。

寝れないのならしょうがない。適当に考え事でもするかと思つた矢先、外からの話し声が聞こえて来たのだった。

「やあ、ヤマメ。元気してるー?」

「もつちろん! そうそう! 久し振りにこの洞窟にお客さんが来たんだよー!」

「本当? どんな妖怪?」

「妖怪じゃないんだー、人間がいたのよ。いや、落ちていた?」

所々聞こえないが、察するに俺の事を話そうとしているのかな?

「パルスイと歩いていたらね、地上に繋がる場所にポロポロな状態で落ちてたのよ」

「誰かに襲われたのかな?」

「うーん、右肩に何かで貫かれた傷があったし、そうかも。あと、少し落ち込んだし」

「ふーん、で、どうするの?」

「どうする、て?」

「食べないの?」

食べる? 今、食べるって言わなかったか? もう少し会話を……

「確かに、地上の人間と言えども勝手にこっちに来たわけだし……」

やっぱり！俺を食う気だな！

そして、自分の身に危険を感じた瞬間、まだ話し込んでいる妖怪を尻目に妖怪の住処を出たのである。

「でも、食べないよ」

「知ってる。軽い冗談だよ。人間を食べるタイプじゃないって知ってるよ。でも、気に入ったんでしょ？」

「え!？」

「女の子はそういうのには敏感なのさ……………ってね」

「えへへ……………顔見た瞬間、ビビッと来たんだよ!」

「一目惚れ？」

「そうなるかな。でも、目覚めた後、少し弱気になった顔もまた……………それに、性格も良さそうだし」

「ヤマメって、少し変な趣味持ち合わせてるよね？」

「そう？ちよつと落ち込んだ男が好きなだけだつて！」
「だから、それが変なのよ」

「ちよつと、お二人さん」

「ん？」

「ここに勇人つて子、来なかつた？」

「あ！萃香さん！」

「それに勇儀！」

「久しぶりだねえ。で、見なかつたかい？」

「勇人つて、碓氷という苗字の？」

「そうそう！なら、見たのかい？」

「見たもなにも、今、うちで休んでますよ。大怪我してたから。今から呼びに行つてくる
！」

「だつてよ、萃香」

「やられたつていう話は本当のようだねえ……………」

「案外、弱つちいのかもなあ、萃香？」

「それはない。私が保証するさ」

「萃香さん……………」

「おや？呼びに行つたんじゃないのかい？ヤマメ」

「いなくなっちゃった！」

……………少し平和ボケしたのかなあ

俺は暗い洞窟の中を歩きながら、無理矢理笑顔を作った。しかし、それも最早引きつったものでしかない。

思えば、今まで戦ってきた相手も、力は持てども、技術がない者ばかりだった。それに加え、今までの勝利はほぼ初見殺しだ。2度目で勝てる気などとても思えない。頭を使うと行つても小手先の小技ばかり。とても、技術で賄ったとは言い難い。

結局、誰よりも自分を過大評価していたのは自分だと気付いた時、俺は小さく笑った。
「そんなに、おかしいか？」

突然、降ってきた言葉に、少し遅れて反応した。

後ろを振り向くと、背の高い人が立っていた。疲労からなのか痛みなのかで焦点が合わずぼんやりとしか見えない。

「えーつと……………貴方は？」

「強くなりたいか？」

その人は女性であった。しかし、どこか聞き覚えが……………つていうか、何だ？強くなりたいか？つて。

「お前はここのままでいいのか？」

うーん……………頭がおかしくなったのかな？

すると、相手の殺気が一気に放出され、皮膚をビリビリとさせた。

くそつ、妖怪か……………

次の瞬間、目の前に拳が迫っていた。しかし、その拳はただの人間や妖怪が繰り出すような生温いものではない。1発で相手の命を刈り取る、そんな威力を感じ取った。

そして、俺は恐怖を感じ取った。

「……………ッ!?!」

しかし、拳は俺にぶつかる事はなく、目の前で止まっていた。だが、俺は恐怖を未だに感じていた。身体中から汗が吹き出し、奥歯が噛み合わず、カチカチと音を鳴らす。

唯一、左腕だけは銃をしっかりと持ち、相手の腹に標準を定めていた。
恐怖で動けない俺に

「合格だ」

その言葉は俺には理解できず、ただ混乱させただけだった。だが、我知らず、俺はその女性について行っていた。

第103話 移住の日の青年

暗闇の中にポツンと建つ小屋のような家は、風で軋み続けていた。

「あ、勇儀……………連れて戻って来たんだね？」

呟いたヤマメの声に、勇儀は黙って頷いた。

彼女の肩には、真っ白な顔色の勇人がぐったりと寝ていた。

勇儀は勇人の体をヤマメに預けた。ヤマメはゆっくりと敷布団の上に勇人の体を横にした。

「こんな体で動くななんてな。やっぱり、萃香が一目置いているだけはある」

と、少し驚いたように勇儀はいった。そして、塞がりかけていた肩の傷穴から再び出血している勇人の姿を見て、嘆息した。

ヤマメはつい1時間ほど前の彼の様子を思い浮かべた。

起き上がることにすらままたまならなかった人間が、少し目を離れた隙に小屋を飛び出してしまった。何故、そんなことをしたのかヤマメには全く理解できなかった。

勇人に対して、ヤマメは驚きとともにやや呆れた感情を向けていると、勇人は静かに目を開けた。そして、ヤマメたちの姿を目に捉えると

「……………俺をどうするつもりだ？」

血の気のない真つ白な顔で勇人はそれだけを告げた。

「どうするも何も、危害は加えないよ。君は少し勘違いをしてるんじゃない？」

ヤマメがそう言うが、勇人は警戒を解く様子を一向に見せず、焦点の合わぬ目で睨みつけている。

「そうだ。私が保証する」

「勇儀さん!？」

勇儀を見ると勇人は驚いた声をあげるのと同時に上体を起こした。その時に傷が痛んだのかすぐに顔をしかめた。

「無理をしないの。ほら、水だけでも飲みな」

勇人は何も言わず、少しだけ水を飲み再び横になった。そして、大きなため息をつき、首だけを動かして勇儀に視線を戻した。

「まだ、飲むかい？」

ヤマメの声に、小さく首を左右に振った。

「なら、包帯を変えるね」

そう言い、血のべつとり着いた包帯を剥がした。そして、何やら薬を塗りつけ再び新しい包帯を巻いた。

「不思議なもんだ」

ふいに勇儀は小さく呟いた。その声に勇人は首をかしげた。

「二度、あんたと手合わせをしたかったんだけどね。久しぶりに会えたと思ったらこれだ」

呟き声が途切れたところで、勇人は掠れた声で淡々と言った。

「俺としたら戦いは懲り懲りですけどね……………でも、ここではそんな泣き言も言ってもらえませんかね……………」

一呼吸置いて、勇人は言った。

「兎に角、ありがとうございます……………」

「私に言うな。こうやって、治療までしたのはヤマメだ」

「そうだな……………本当にありがとう」

「いいよ。それよりも、怪我の方は大丈夫なの？」

「大丈夫………と聞いたけれど、これじゃあな………」

深く溜息をつきつつ、天井を眺めた。

「でも、ここでゆつくりと休んでいる場合でもない………あ、そうだ！」

「どうしたの？」

「悪いが、俺を永遠亭まで運んでくれないか？それだけしてくれれば、後は手間をかけない」

「え、ええ………そ、それは………」

「できないな」

「え？」

勇儀のはつきりとした言葉に勇人は絶句した。

「あんたに言い忘れていたが、ここは旧都と呼ばれる場所だ。ま、厳密に言えばここは旧都までの洞窟だな」

「旧都？」

「そうだ。地上で忌み嫌われた妖怪たちが集まる場所だ。そこまで言えば、あんたを運んでいくことができない理由くらい分かるだろう？」

勇儀の言ったことに勇人は察してらしくバツの悪そうな顔をした。

「それに、紫からあんたを特訓するよう依頼されたんだ。しばらくはこの旧都で生活してもらおうことになる」

「そうか……………は？」

唐突な勇儀の発言に勇人は一歩遅れて驚きの声をあげた。

「俺がここで生活する……………？」

「そうだ」

勇人は軽く眉をしかめた。

「と、特訓って……………そんな暇はないぞ！」

「だが、今のお前が再び戦って勝てる相手なのか？」

「……………ツ！」

「言っておくが、お前が負けた相手はそれなりの手練れだろう。紫も一度痛い目にあつてようだしな」

「そうなのか!？」

「油断はしてみたいだが、あいつぐらいの妖怪がやられるぐらいだ。お前が勝てるわけがねえな。ま、私も戦ってみたいものだが……………その前にお前の特訓が先だ。紫はお前に戦ってもらいたようだからな」

「だが……………」

反論しようと口を開いた勇人だが、その口を閉じることになったのは、勇儀の目に鋭い光があつたからだ。

「なら、勝てない相手にもう一度戦って、死ぬか？」

唐突な声が薄暗い小屋の中で重く響いた。

「あんたの勇氣は見上げたもんだ。だが、勇氣と無謀は別もんぐらい分かるだろう？」

は
口調は淡々としているが、声には勇人を嗜める思いが込められていた。しかし、勇人は

「勝算は0じゃない。実力に差があつたとしても策を弄すれば、勝算はまだ上がる。俺が弱いから負けたと言われれば、そうだが……………」

「無理だ」

投げ捨てるようなセリフに、勇人はぎよつとした。頭ごなしに否定されれば、流石に勇人は黙っていられない。

「人間よりも遥かに力を持つ鬼にそう切り捨てられたら返す言葉の無いけど、こつちにだって事情はある。弱い者は弱い者なりに戦わないといけないんだ。強い勇儀さんには分らない……………」

「ああ、そうだな。分らないな」

あつさりと答えられ、会話は途絶えた。話の糸口を掴もうにも掴めず、勇人は天井を見つめるしかなかった。

「でもな、強くなるために一度努力してから再び戦う方が勝算はあるんじゃないか？」
「それでも、届かないなら色んな策を弄すればいいさ。何も今の状態で戦う必要もない。ここは地上の奴に任せておいて、この旧都で鍛えてみるのもありじゃないか？」

その言葉は勇人を決断させるには十分だった。勇人は返す言葉を持たずただ、じつと勇儀を見つめた。

「その目……………どうやら、決めたようだね。よし！そうとなれば、旧都の輩に挨拶しに行くぞ！」

いきなり!?!と眉を動かす勇人に、勇儀は冗談だ、と豪快に笑い飛ばした。

「さて、特訓しようにもその身体じゃあ無理だな」

「そうですよ。この身体じゃあ……………半年くらいはかかりますよ、治るのに」

「そこでだ。紫にこの薬を渡されたんだ。これを飲めばどんな怪我でも一発で治るらしいぞ」

と、取り出した錠剤に勇人はただでさえ青白い顔をより一層青くさせた。

「どうした？あんた、薬が苦手なのか？」

「そ、そうじゃないが……………それだけは……………」

「ああ？あんた、男だろう？黙って飲め！」

「あがつ!？」

拒否する勇人に勇儀は無理矢理口を開けさせ、そのまま放り込んだ。

「……………」

「あ、これ飲み込んでないよ」

「む……………ヤママ水を持ってこい」

ヤママはすぐに水を持ってきた。

「ほら、これで飲むんだ」

「むぐ……………ッ！」

「なかなか頑固ですねえ……………あ！そうだ、こうして……………」

とヤマメは勇人の鼻を抑えた。

「プス……………」

「口の端が開いた！」

すかさず、勇儀は少し開いた口の隙間に水を流し込んだ。

「……………ごくん」

「よし、飲んだな」

「……………ッ！」

予期せぬ勇人の反応にヤマメと勇儀は不安になって顔を見合わせた。

「アガアアアアアアアア!!」

暗い小屋の中で、勇人の叫び声が響いた。

|||||

「どうだい、勇人は？」

萃香の声が聞こえ、勇儀は振り返った。

「どうだい、と言われてもな……………今は寝てるよ」

「それにしても意外だね」

勇儀は首を傾げる。

「何が意外なんだ？」

「あまり地上の奴と交流したからないあんたが、すんなりとかの願いを聞いてくれることだよ」

「駄目か？」

「いいや、驚いただけさ」

萃香は伊吹瓢を口につけた。

「あいつは多分苦労するだろうな」

「もう、苦労してるさ」

勇儀は、酔っ払う萃香の姿を見て、微かに笑った。

「私にもその酒くれないか」

「へっ、どうせ、星熊盃で飲むんだろ？」

「当たり前よ」

萃香は勇儀の盃に酒を注いだ。その酒を勇儀は一息で飲み干す。

「勇人って奴は、腕がもげようが足がもげようが、戦うタイプだろ」

「……………腕がなくなったら、口で相手の喉仏を噛みちぎりに来るだろうね」

「正義感が強いっていうのか……………頼ると言うことを知らないと言うか……………」

「もしかしたら、本能的に戦闘狂かもしれないね。一度戦った時、最後の最後で異常な力を見せてきたからね」

「へえ……………あんな顔して、そんな所があるのか」

「まあ、それを除けば、ただのいい奴さ。約束もしつかり守ってくれるし」

「お？嘘をつかないタチか？」

「さあ、あいつ変な所で頭デッカチになるからなあ……………」
時には嘘も必要です」と
か言いそくだもん」

「……………あんたや紫があいつの事を気に入つた理由がなんとなくわかつた気がするよ」

空になつた盃に萃香は再び酒を注いだ。勇儀はすぐさま飲み干す。

「まあ、妖怪に好かれるのも難儀なもんだ」

「確かに何人かは勇人にゾッコンなようだけど」

ん？と勇儀は眉を動かした。

「どんなに疲れている時でも彼の顔を見れば疲れがぶつ飛ぶつて話だよ」

「はえ……………勇人の奴、以外と女たらしなのか」

「はは、無自覚なら余計タチが悪いってね」

2人で笑い合いながら、萃香の脳裏には、嬉しそうに話す早苗の姿が思い出される。どんなに疲れていても相手を気遣つてくれる人だそうだ。

散々、早苗の惚気話を聞いていたが、そのくらいしか覚えていない。まともに聞くと

日が暮れてしまうからだ。

「ま、常に酔っ払ってるちんちくりんな奴よりはいい人なんだろうな」
「あ?」

勇儀の煽りに萃香は顔をしかめたが、すぐに苦笑へと変わった。

「ある人曰く、兔に角素敵な人だつてさ。いっつも、難しい顔で考え事をしていたり、紙に沢山の数字を書き並べたり、徹夜して次の日に倒れたり、よく怪我したり、よく子供たちに振り回されたりしてるが一生懸命な所がカッコいい、とさ」

へえ、と首をひねった勇儀は、遠慮がちに口を開いた。

「……………それって、本当にかっこいい奴なのか?」
「同じ(イ)と思ったよ」

2人の鬼は顔を見合わせて、豪快に笑い合った。

第104話 騷乱の日の青年

某所にて、薄暗い部屋の中に”スミス同盟”は集まっていた。

小さなアナログテレビしかない部屋に、リーダー格の男と7人の幹部は1人の女を前に臨戦態勢を取っている。

「何故、私らを閉じ込めた？」

鉄製の車椅子に座り、カラーのついた黒の上下という古風な服を着た老人「ハーマ・ン・スミスが口火を切ると、スキマから現れた紫に全員の視線が集めた。

「よくも、まあ……………勝手に侵入した挙句、好き勝手暴れた分際で言うわね」

紫は立ったまま、怒りを抑えた声で言った。

「暴れた？私はせいぜい、たった1人の男を殺_トただけだが？」

しわがれた声でハーマンはぬけぬけと言った。

「そう……………勇人がたつた一人の男ねえ。なら、何故彼なのかしら？ わざわざ、彼を尾ける真似までして。それが、かの有名な暗殺集団が十数歳の青年にすることかしら？ それに、こんな空間まで生み出して……………」

紫は吐き捨てるように言った。

「言葉を慎め」

白いスーツを着た男——ガルシアン・スミスは紫の無礼を許さず、紫を睨みつけた。

「私たちはオーダーされた任務を全うする……………それだけ……………」

スミス同盟唯一の女性だ。ショートカットの紅一点——墨洲 楓は屈強な男の多い、暗殺集団の中では不似合いだ。

「ヒヒツ、それにその勇人つて奴がいなくなればこの世界は平和になるんだろ？ だったら、むしろ褒めて欲しいな！」

コン・スミスの生意気な言葉により一層、紫は苛立ちを募らせる。紫は憤りと侮蔑を込めた視線を一同に向けた。

「勇人は立派な幻想郷の住民、すなわち幻想郷の一部よ。だから、貴方達はこの幻想郷に傷をつけたことになるわ」

「幻想郷の一部？」

ダン・スミスの言葉が聞こえた。

「ええ、幻想郷は彼を拒まず受け入れた。そして、彼もそれを受け入れた。幻想郷の一部と語るには十分ではなくて？」

「だから、なんだ？ 問題はあいつの生い立ちにあるんだろが。それを聞く限り、生かすなんて事は馬鹿でもしねえぜ。妖怪の賢者さんよお」

ダンが淡々と告げた。

「生い立ち？」

紫が怪訝そうに眉を動かしたのを見て、ダンはフツと苦笑した。

「もしかして、本気でお前は勇人はあいつの孫だと思つてたのか？」

「……………違うのかしら？」

ダン以外の者は口を噤んでいる。

「勇人は人間の進化系じゃねえつてことさ」

「どういう意味よ」

「さあ……………あとはこの腐れ老人ロートルから聞けや」

ハーマンはゆっくりと車椅子を動かし、前に出た。

「お前が勇人の祖父だと思う、碓氷清栄（せいえい）は、かつて人の榮を司った神だった」
「それぐらい知ってるわ」

「彼がいるだけでその国は永遠の繁栄が約束されると言われた。そうとなると、勇人はその繁栄の力を継ぐ者の末裔になるわけだが……………」

「その力を受け継いでいるはずと言いたいのかしら？でも、ありえないわ。彼はほぼ人間になってから子を授かっている。もし、力が受け継がれているのなら、勇人の母だってその力を持つはずよ？」

紫の発言にハーマンはまるでおかしな話を聞いたかのように大笑いした。

「それなら、かの青年も普通の人間なのが理だろう」

「人間として、イレギュラーな存在は現れるわ」

紫はフンと鼻で笑った。それに対して、ハーマンは目にギラギラと光を湛え、車椅子の後ろに付属していた対戦車ライフルを取り出し構えた。

「勇人は人間などではない！清栄によって生み出された新しい器だ！」

怒鳴るように叫ぶや、ライフルの引き金を引いた。

八意永琳の自信作（本人談）の薬によって、怪我とともに意識も吹き飛ばされた勇人は、敷布団の上に横たわって規則正しく息をしていた。この光景、何度見たことか

.....

「まだ目覚めないの?」

キスメは暇を持て余したのか、勇人の顔を突きながら、破れたカッターシャツを縫うヤマメに言った。

「ゆっくり休ませてあげなよ。あんだけの怪我をしたんだし、相当お疲れなんだから」

「ふーん………この人なかなか強いんですよ? 一度、戦うところでも見てみたいなあ」

「そんなことよりさ、お腹空いた? ご飯できてるけど食べる?」

「食べる食べる!」

「う……」

勇人が息苦しそうに掛け布団をはねのけた。

「お、目覚めた」

「大丈夫?」

ヤマメとキスメが脇に来ると、勇人は気だるげに瞼を開けた。

「……………ああ。問題ない。あの薬のおかげで怪我也治ったし……………」

「本当にすごいねあの薬」

「あまりお勧めはしないぞ。猛烈な痛みを受ける代わりに怪我を治すんだからな。一種の拷問に近いと思うぞ」

咳き込みながら、勇人は言った。

「とりあえず、勇儀さんは？」

今すぐに、特訓を始めないと。起き上がろうとしたが、その瞬間に大きな腹の音が響いた。そんな勇人を見て、ヤマメは

「ちようどいいいや、ご飯にしよう！」

「その前に、君ちよつと能力でも見せてくれない？噂は聞いてるんだ」

「ちよ、ちよつと！病み上がりの人に……………」

「いいぞ」

「ええっ」

流石にヤマメにとって予想外の返答だったらしい。

「……………ちよつと離れてくれ」

勇人は腕に巻かれた包帯を解くと、敷布団から這い出るようにして立ち上がった。

「おお?」

キスメの声には、期待が混じっていた。

「使うぞ、能力」

勇人がその言葉を放ち、例の如く不変の結界を生み出そうと集中した瞬間、右腕に青いプラズマが走った。

〈その能力を使うのか？〉

〈お前はそつちの生物ではない〉

〈お前は私の器だ〉

意識の中に、ささやくような声が響いた。

「だ、誰だ!？」

聞きなれぬ声に勇人は怒鳴りかえした。反射的に振り返るが誰もいない

「どうした？誰に怒鳴ってるの？」

慌ててキョロキョロする勇人にヤマメとキスメは驚く。

「い、いや、何でもない。まだ、疲れが残っていたみたいだ。幻聴が聞こえた」

「それなら、無理してしなくても……………」

「平気平気、ちよつと使うだけだから」

勇人は言い、謎の声に自分で幻聴と決め込んで再び集中した。

「これは……………物凄い量の霊力だねえ」

「勇儀さんの言う通り只者じゃなかったんだね」

勇人は大きく息を吐いた。あとは結界を張るのみ……………

「——その能力はお前のためではない。」

今度こそはつきりと聞こえた。そして、それは意識の中に話しかけているというこ
とも分かった。

「——誰だ？」

謎の声にそう問うた。

——お前だよ。いや……………後々のお前だ。

後々の俺？そう聞き返した後にはもう声はしなくなっていた。少し間が空き過ぎたのか、2人は心配そうな眼差しを向けている。

——やっぱり、疲れてるんだな。ちよつと、弱気になっているだけ。

そう自分に言い聞かせた。そして、自分の周りに意識を向けた。

バリバリと青いプラズマに右手が覆われていると知らず。無論、勇人の能力を知らない2人はそのプラズマを能力の一部だと思っている。

「はっ！」

掛け声とともに、右腕のプラズマが右半身に広がり、強い衝撃波が発生した。それと同時に、右腕がボコボコと膨れていた。

衝撃波に吹き飛ばされ部屋の隅に追いやられたヤマメとキスメは、突然のことに啞然とし動けずにいた。

ひどく膨張した勇人の右腕はついに破裂し、勢いよく血が噴き出した。

——ふむ、まだ力に耐えきれない、か。

「さつきから何なんだよオオオオオ！この野郎オオオオオ！」

「ちよ、ちよつと！気をしっかり!!」

後ろで勇人の有様に驚くヤマメの声がする。

青いプラズマは徐々に無くなっていき、勇人は地面にへたり込んだ。しかし、時折バチバチとプラズマが発生している。

キスメは恐れをなしたのかヤマメの後ろに回り込んでいた。

——まだ、まだだな……………

ドゴオ！と轟音を立てて、玄関方から勇儀が飛び出した。

「おい、大丈夫か！つて、これは……………!?」

衝撃波によってめちやくちやにされ、破裂した右腕によって血塗れとなった部屋に勇儀は一瞬戸惑った。しかし、すぐに冷静さを取り戻し

「勇人!!」

呼びかけに対し、勇人は顔を向けることしかできなかった。

「な、何があった!?!」

「お、俺にもさっぱり……………ちよつと、能力使おうとしたら……………」

ヤマメの空いた口が塞がらない。さっきのは何だったのかー。
勇人の右腕から、プラズマを纏った血が滴り落ちていた。

どこからかな大きな気配に、一同は動きを止めていた。何かの得体の知れない者――その存在を誰しもが感じ取っていた。

「ふむ……………ダン、どうやら殺^トつてはいなかったらしいな」

予想外のことに、慌てる様子も見せないのは仕事柄故か。それに対して、紫は少し動揺めいた様子を見せていた。

一同のいる部屋にはいくつもの銃痕が残っていた。ここで戦闘をしていたらしい。

「どうだ？妖怪の賢者よ。これが勇人の真の力だとしたら？」

「……………真の力？あれくらい力なら私は何回も見たわ」

「……………それは勇人の力じゃない。あいつの力だ」

楽しいのか、笑みを含みながらハーマンは言った。

「まあ、いいわ。……………後は任せたわ」

紫の背後にスキマが開き、メイド服姿の銀髪少女――十六夜咲夜が現れた。そして、パチンと指を鳴らした。

そして、時間と世界は静止した。

部屋の中にいる人はすべて動きを止める。

「お嬢様に命じられて来たのはいいもの……………」

嫌々連れてこられたようだ。ため息を吐き、ナイフを取り出す。そして、そのナイフをスミス同盟の一同の首元に投げた。

「1、2、3、4、5、6、7人ね……………」

再び、指を鳴らす。静止していた世界は再び動き出す。それと同時にナイフはそれぞれの首に刺さるーしかし、ハーマンとガルシアンのみはナイフを掴んでいた。

「……………あら、老いぼれかと思っただけどなかなかやるわね」

次の瞬間、首元から鮮血を噴き出す5人は粒子となつてハーマンへと吸い込まれた。

「え?」

ハーマンの謎の能力に咲夜は驚きを隠せなかった。

「咲夜!」

紫が叫ぶと同時に咲夜の背後に銀髪の男が現れた。その手にはナイフが握られている。

「いつのまに……………ッ!？」

ナイフが首を切り裂く前に咲夜は時を止めて間をとった。しかし、男はすぐさまローイングナイフを取り出し、咲夜に目掛けて投げた。

咲夜も同じくナイフを投げて相殺させる。

「ナイフ使い同士ね……………って、気持ち悪っ」

異常なほどの白い肌。そして、上半身裸で極端な猫背。そんな人でもってサングラス。こんな人が街にいればほぼ変質者だと思っだろう。

咲夜の発言にも眼鏡ケグインは表情一つ変えずに次のナイフを取り出した。

—————

草木の生い茂る山の中で、碓氷清栄は瞑想していた。

「後もう少しか……………」

白い神御衣が夕日の色を浴びて朱に染まる。シワの入った顔からは心持ちは量り知れない。

そこへ、一羽の伝書鳩が手紙を運んできた。内容を読むとその紙を引き裂いた。

「勘付かれたか……………しかし、もう遅い」

風が引き裂からた手紙を運んでいく。

「お主か……………」

「ええ」

鳩は女性らしき声を発した。

「こちらの準備は進んでいる……………お主はどうじゃ？」

沈む夕日を見ながら、清栄は言った。

「私はいつでも構わないわ。後は器の完成を待つのみ……………」

今頃、勇人は不可思議な力に驚いていることだろう。

夕日を見ながら、清栄は満足げな笑みを見せた。

第105話 微動の日の青年

旧都は昔地獄の一部であった。

これは勇儀さんが話してくれたことである。”地獄”という言葉の響きの割には賑やかな繁華街だ。能力故に忌み嫌われた者が集まつてきたと聞いたが、皆明るく快活な様子である。

地下にある街のため、空は常に真つ暗だが、ここの住民のあまりにも明るい様子のせいか、不思議と暗い気分にならない。

そんな様子を背景に、一軒の古びた一枚板の看板の飲み屋に俺はいた。古びた外観ではあるが、繁盛しているようだ。

人通りは終始、種族を問わず妖怪たちで溢れかえっている。その通りにはたくさんの商店が並び、よく分からない店もある。俺としては、静かな喫茶店とかあつて欲しいのだが……………

ふと視線を巡らせると、どこもかしこも大男が酒を煽り、どんちゃん騒ぎだ。真昼間から、酒を浴びるように飲み他愛のない話に大笑いする。この街を象徴するかのような風景だ。

「どうだ？いいところだろ」

隣に座る勇儀さんが、酒を飲みながら言った。すでに瓶を一つ開けているが、顔は別段変わっていない。

「地上の世界とはまた違った、盛り上がり方だろ？私にとって、ここは楽園だ」

「朝から酒を飲むのは感心しませんが……」

「硬いこと言うなって。郷に入れば郷に従えって言うだろ？ほら」

差し出された酒を俺は丁重にお断りしておいた。目覚めてすぐ連れてかれたのもあるが、この酒のペースについていたら確実に潰れる。そもそも一杯の量が異常だ。

「ここが勇儀さんオススメの店なんですね？」

「ああ、馬鹿騒ぎしてもいいし、喧嘩だつたいい。こんな自由な店は地上にないだろ？」
「喧嘩はできるだけしたくないものですが……」

水を一杯飲んだところで、向こうの席で飲んでいた鬼たちがいつのまにかこちらに集まっていた。

「姉御！俺らと飲みましょうぜ！」

豪快な声でそう言った鬼はグループのリーダー格らしい。いかにも豪放磊落な様子の鬼は酒臭い息を吐きながら勇儀さんを誘う。そんな中、一番小さな体つきの俺を見つけると

「ん？お前、人間か？」

「は、はい……………」

完全に萎縮しきった俺を横に、勇儀さんは

「こいつは碓氷勇人ってんだ。しばらく、ここに住むからよろしくやってくれ」

「ほお！勇人か！よろしく頼むぜ、あんちゃん！」

すぐさま、人懐っこい顔となり、挨拶した。

「よろしくお願いします」

「かったいなあ……………ここでは堅苦しくいる必要はないぞ？」

明朗な声で勇儀さんは言った。しかしだなあ……………ここにいる者は基本的に身長190はゆうに越している。ガチガチにならない方がおかし。

考え事が過ぎたのか、リーダー格の鬼は怪訝そうな顔をしていた。

「か、顔に何かついてます？」

「怖がらないのか？」

「へ？」

急な質問に変な声が出ってしまった。

「いや、まあ……………妖怪とかはたくさん会ってますし、知り合いもそれなりにいますから……………」

「こいつ、萃香と互角に戦ったんだ」

「ちよつと……………」

「本当か!? カーツ! こいつあ、とんでもねえ奴が来たもんだ!」

ガハハ! と豪快に笑う鬼たちとは裏腹に俺の心は穏やかではなかった。

「そう言えば、こいしが随分と勇人のことを気に入ってたよなあ」

「はは……………きつと、人を見る目があるんですよ」

ちよつとした冗談で返すが、やはり心は穏やかではない。いや、たしかにこいしやフ
ランとかは俺よりも桁違いに歳上なのだが……………外面上、ロリコン疑惑がかかる可
能性がある。俺は決してそう言うのではない。あくまでもノーマルだ。

「なんだ?! こいしちゃんのお気に入りなのか!!」

いきなり食いついてきやがったなこいつ。後ろの鬼たちもザワザワし始めている。
穏やかではない理由はこれか……………

「最近、こいしちゃんを見ないと思ったら……………お前に会ってたのか!？」

「ま、まあ……………寺子屋には基本的に来てくれますが……………」

「な、なんだと!?!お前……………俺ですら、声をかけてくれるのは稀なのに……………」

「どのくらいの頻度で来るんだ!?!」

「おいおい!どんだけ食いつくんだ?他の鬼たちも血涙を流しながら、俺に迫って来る。」

「妖怪の授業は週に3日ですので、その日はほぼ確実に来ますし……………授業外にも友達と来ますが……………」

「週に3回……………!?!他の日にも来る……………?」

「どんな話をしてるんだ!」

「いや、授業ですので……………和算ですかね?たまにいつしよに遊んだりもしますけど」

教師だからと言って、授業だけすればいいもんじゃない。と、どつかで聞いた気がするので、誘われたらなるべく一緒に遊ぶようにしている。

「遊ぶ!?この野郎……………!なんて、うらやmけしからんことを!!」

「す、すいませんが、貴方達はいいしのなんなのでしようか……………?」

「そうか……………知りたいか?」

「い、いや、無理を強いて言わなくても……………」

「なら、しょうがない……………それだけ、こいしちゃんとのエピソードがあるなら、知る権利がある」

「それほど知りたいわけでも……………」

「おい、お前、教えてやれ」

人の話を聞け。

「我らは!この旧地獄の天使、こいしちゃんを護るために発足した”こいしちゃん親衛隊”である!」

1人が前に出て、声高らかに紹介してくれた。まあ……………こんな親衛隊ならたしかに守れそうだが……………

「こいしちゃん可愛い！」

「天使！」

「我らの女神！」

「あー………分かりました、分かりました。それでなんでしょうか？」

やや暴走気味の彼らをなだめるが熱が冷める様子もなく仕切りにこいしへの賛辞の言葉を叫ぶ。

「お前はしばらくここに住むそうなんだな？」

「はい」

「なら、我ら親衛隊に入れてやろう！」

「い、いえ………そんな滅相な………」

「もちろんただで入れるとは言っていないぞ？」

誰が入るって言った。もう少し頭を冷やしてくれ………

「こいしちゃんを護るのに貧弱な奴が務まらんからなあ……………」

「入りたいわけでは……………」

「よし！俺と立ち会え！」

「え、ええ……………」

「いいじゃないか！その話乗った！勇人、そいつと戦え！」

困惑する俺に勇儀さんは無理な命令を強いる。

「いや、入るつもりは……………」

「よし！一週間後に岩鉄（がんでつ）と勇人の一騎打ちだ！」

「よっしゃああ！って、一週間後!?」

「すまんが、私にもこいつに、ちと用事があるんだ」

「勇儀さんがそう言うのなら……………」

「いや、俺は別に……………」

「決まりだな！私はこれでお邪魔するよ。ほら、勇人、行くぞ！」

「え、え、ちよつと……………待ってくれ！」

俺を置いてけぼりにしたまま、一週間後に試合が組まれてしまった……別に親衛隊に入りたいわけじゃないって……

未だに熱の冷めない親衛隊の皆様を通り過ぎて、俺は外へ向かう勇儀さんを追いかけた。

—————

”ちよつと飲みに行かないか?”

勇儀さんがそう言ってあの空間に連れて言ったのは、今から約3時間ほど前のことだった。

” あんたにここの世界を見せたくなってな ”

その気遣いに感動し、ついて来た俺だったのだが………気づけば望んでもいない親衛隊に勧誘され、果てにはそれに入るために試合が設けられることとなった。

「本当に何を考えてるんですか!？」

と問う俺に、

「岩鉄って奴がいただろ?」

と何食わぬ顔でそう聞かれた。

「……………始めに俺に声をかけた人ですか?」

「おや? 怒ってるかい?」

「別に!……………コホン、とにかく、その岩鉄って言う人が何です?」

「岩鉄はだなあ……………ああ見えて喧嘩がそこそこ強い。旧都じゃあ、殴り合いであいつに勝てる奴はそうはいない」

ああ見えてつて……………そうにしか見えない。むしろ、ロリコンだと言うことが驚きだ。

「もちろん、私や萃香には勝てない。……………あんたにもね」

「買いかぶりすぎです」

「そんなことはないさ。まあ……………苦戦はするだろうな。あいつはタフだからな。だが、ちとこころが足りない」

と勇儀さんは頭を指す。まあ、パワー自慢で頭がいいって言う奴はなかなかいないな。

「そこでだな。あんたは岩鉄に素手で勝ってほしい。能力も使わず」

「それで s……………は？」

「ああ、別に霊力を使うなどは言っていない。肉体強化ぐらいは許す」

「いやいやいやいや！無理ですって！」

身長およそ170cm（自称）のヒョロイ男と、190cm以上ありそうな大男と戦うなんてありえねえ！ヘビー級対フライ級で戦うような体格差だぞ！

「無理じゃねえ！何のために一週間後に設定したと思ってるんだ？」

「だとしても、流石にあの体格差は………それに人間と鬼という壁もあるんですよ！」

「そこはあんたの自慢の頭脳でどうにかしろ！」

「ええ………」

「それに心配しなくてます自然と岩鉄を越すくらい力になる。そもそも、岩鉄に苦戦するようじゃあ、あいつらには勝てないぞ？」

「うっ………」

「あと、言っておくが、ただ勝利すればいいわけじゃあない。圧倒的な勝利、それが目標だ。いいな？」

「は、はい………」

「というわけで、お前の銃は私が保管しておく」

といつのまに、取っていたのか勇儀さんは俺の銃を取り出した。

「え、ちよつと！」

「これからは敵に遭遇したら素手で戦え。銃を返すのは岩鉄を倒してからだ」

「……………はい」

相棒まで人質に取られてしまい、岩鉄と戦わざるおえなくなってしまった。

「これから、ビシバシ鍛えてやる。覚悟しておけよ」

「お手柔らかに、お願いしますね」

勇儀さんの特訓は想像を絶するものであったのはまだ知る由もなかった……………

—————

十六夜咲夜は驚いていた。彼女はナイフの扱いに長けており、自分自身それを自負している。しかし、目の前の男はどうだ？ 同じナイフ使いとして、自分と互角、又はそれ以上。

「……………ッ！」

ナイフが頬を掠める。ケヴィンの投げたナイフだ。正確無比なスローイングは度々咲夜を掠める。

「これならどう!?!」

時を止めることで、ナイフを一斉に投げる。しかし、ケヴィンはバク転でそれを躲す。近接に持ち込みみたい咲夜だが、相手はスローイングナイフだけでなく、ナイフも持ち

合わせており、バク転で距離を取る戦法も相まってより困難にさせる。

咲夜はやろうと思えば、時を止めているうちに相手を仕留めることもできる。しかし、それはプライドが許さなかった。同じナイフ使いとして、勝利しなかった。

「銀符『シルバーバウンド』」

時間停止を利用し、大量のナイフを一度に発射させた。ケヴィンの視界の前には一面にナイフが広がっているだろう。致命傷にならないとしても無傷はありえない。そう思った矢先だった。

「……………」

「な……………ッ!？」

ケヴィンの体は透けていったかと思えば消えてしまった。大量のナイフは虚しくも空を切り、壁や床を刺す。

「……………うなったら!」

再び時を止める。そして、咲夜は辺りを見回した。しかし、ケヴィンの姿はどこにもいなかった。隠れた？ いや、違う。この部屋には隠れるようなスペースなどない。なら、どこへ？

「どこなの!?!」

必死に探すが全く見当たらない。まるで、忽然と姿を消してしまったかのように。

「チツ、時間切れ……………!」

「……………」

時が再び流れ出した時、昨夜の背後にはすでにケヴィンがナイフを咲夜の喉にスライドさせていた。